福　岡　市

有田・小田部

第6集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第113集

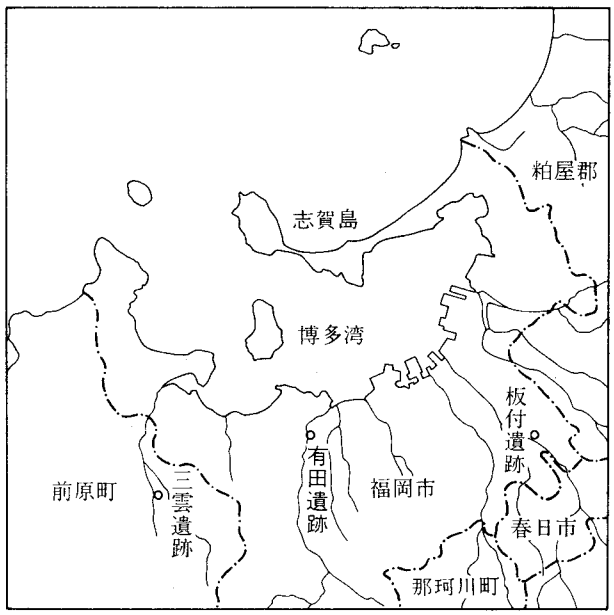
1985

福岡市教育委員会

有田・小田部

〈福岡市早良区有田・小田部における遺跡群の発掘調査報告〉

第6集



昭和60年3月

福岡市教育委員会

序　　文

福岡の歴史は、朝鮮半島や中国大陸に近い事から海外交渉史であるとも言われています。ここ数年、早良平野の埋蔵文化財の発掘調査は、公共事業や民間事業の急速に進められる開発によって質量ともに増加の一途を辿っております。その成果も、市民の目を見張らせる大陸文物が一部に含まれますが、古代史の謎を一つ一つ解明する手がかりとなっています。そこに埋蔵文化財行政の目的はあると信ずるものであります。

さて、有田・小田部地区は昭和41年の九州大学考古学研究室の御尽力により始められましたが、今年度で99次を数えます。一つ一つの調査の成果が徐々に、有田・小田部の歴史を明らかにしていると信じます。ひとえに調査に御理解と御協力を頂いた、地元・土地所有者のみなさんのおかげです。記して感謝申し上げます。今回の報告書の内容は、有田・小田部の通史ともなるような資料を中心としています。旧石器時代から江戸時代までの歴史的変遷です。

本報告が、学会・学校教育・社会教育に御活用して頂くと共に、埋蔵文化財行政の御理解に役立てて頂ければ幸いです。

昭和60年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　西津茂美

例　　言

(1) 本書は福岡市早良区有田・小田部・南庄地域内における住宅開発等に伴ない，福岡市教育委員会が昭和59年度の国庫補助を得て実施した緊急発掘調査報告書である。

(2) 本書には昭和51年度の第５次調査，昭和56年度事業の第51，53，56，57次調査，昭和57年度の第66次調査，昭和58年度の第86次調査，及び分布調査について収録する。

(3) 本書では有田・小田部台地上の遺跡を一連のものと見做し，広義の有田遺跡と呼称する。

(4) 本書に収録した発掘調査は，第５次調査を山崎純男，山口譲二，沢皇臣，横山那継が担当し，第51，53，56，57次調査は井澤洋一，山崎龍雄が，第66，86次調査は井澤，松村道博が担当した。

(5) 本書に掲載した遺構実測，写真撮影の内，第５次調査は山崎純男，山口譲二，沢皇臣が行ない，第39,51,53,56,57次調査の遺構実測は井澤，山崎龍雄，児玉健一郎，松尾正直，渡辺武子，清原ユリ子が，写真撮影は，井澤，山崎龍雄が行なった。第66，76，86次調査については遺構実測を井澤，松村，辻哲也，清原ユリ子が担当し，写真撮影は井澤，松村が行なった。

(6) 本書に掲載した遺物の実測，写真撮影，及び遺構，遺物の整図は，第５次調査については山崎純男，山口が担当した。第66次調査の遺物実測，写真撮影は松村が，第86次調査の遺物の実測は谷沢仁が担当し，その他の調査地点の遺物実測，写真撮影は井澤が担当した。第39～第86次調査迄の整図は池田洋子，深掘博子，元田明子，井澤，山崎龍雄が行なった。第86次調査の拓本は米倉秀紀による。

(7) 本書の執筆は以下の通りである。

第１・２章　　井澤　洋一

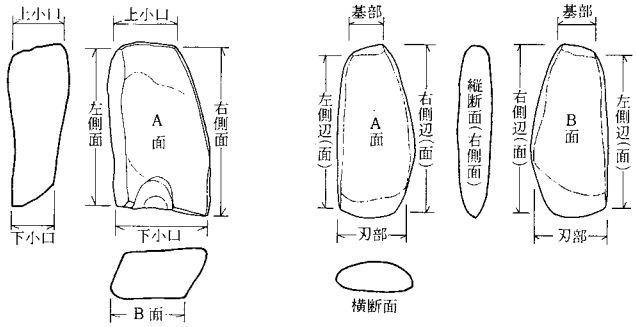
第３章　1.　　山崎　純男，山口　譲二

　　2.10　山崎　龍雄

　　3～7,9　井澤　洋一

　　8.　　松村　道博

(8) 本書の編集は山崎純男の助言を得て井澤が行なった。編集に際しては山崎龍雄，米倉秀紀の協力を得た。



本 文 目 次

本文頁

第１章　はじめに……1

１．昭和58・59年度の調査に至る経過……1

２．第76次～第89次発掘調査の組織……2

３．第５次発掘調査の組織……3

第２章　遺跡の立地と調査概要……4

１．立　　地……4

２．調査の概要……5

第３章　調査経過……7

１．第５次調査……7

１）調査地区の地形と概要……7

２）遺構の分布……9

３）検出遺構……10

４）出土遺物……42

５）小　　結……55

２．第39次調査……59

１）調査地区の地形と概要……59

２）検出遺構……61

３）出土遺物……74

４）小　　結……78

３．第51次調査……80

１）調査地区の地形と概要……80

２）検出遺構……81

３）出土遺物……88

４）小　　結……94

４．第53次調査……95

１）調査地区の地形と概要……95

２）検出遺構……95

３）出土遺物……100

４）小　　結……104

５．第56次調査……105

１）調査地区の地形と概要……105

2）検出遺構……106
3）出土遺物……108
4）小　　結……119
6．第57次調査……121
1）調査地区の地形と概要……121
2）検出遺構……123
3）出土遺物……124
4）小　　結……127
7．第66次調査……128
1）調査地区の地形と概要……128
2）検出遺構……128
3）出土遺物……146
4）小　　結……156
8．第76次調査……157
1）調査地区の地形と概要……157
2）検出遺構……157
3）出土遺物……161
4）小　　結……161
9．第86次調査……162
1）調査地区の地形と概要……162
2）検出遺構……162
3）出土遺物……171
4）小　　結……181
10．有田・小田部地域内の分布調査資料……182
1）土　　墨……182
2）古 井 戸……185
3）石塔類散布地……186
4）寄贈遺物……187

挿 図 目 次

Fig. 1　有田・小田部周辺の遺跡……（1/25,000）……X
Fig. 2　有田・小田部台地と発掘調査地点…（1/5,000）……折込

Fig. 3　有田・小田部の旧地形図……（1/5,000）……折込
Fig. 4　調査区の地形……7
Fig. 5　遺構分布図……8
Fig. 6　第1・2・4・5号貯蔵穴実測図……11
Fig. 7　第6・7・8・9・12号貯蔵穴実測図……13
Fig. 8　第14・15・16・19号貯蔵穴実測図……15
Fig. 9　第20・21・22・23・24号貯蔵穴実測図……17
Fig. 10　第25・26・27・29号貯蔵穴実測図……19
Fig. 11　第30・31・33a，b・34・36号貯蔵穴実測図……21
Fig. 12　第32号貯蔵穴実測図1……23
Fig. 13　第32号貯蔵穴実測図2……25
Fig. 14　第35号貯蔵穴実測図……27
Fig. 15　第37・38・39号貯蔵穴実測図……28
Fig. 16　第40・41号貯蔵穴実測図……30
Fig. 17　第42・43号貯蔵穴実測図……32
Fig. 18　第44・45・46・47号貯蔵穴実測図……34
Fig. 19　第48・49・50号貯蔵穴実測図……36
Fig. 20　第51・52・53・54号貯蔵穴実測図……38
Fig. 21　第55・57・58・59・60号貯蔵穴実測図……40
Fig. 22　その他の土坑……41
Fig. 23　出土土器実測図Ⅰ……43
Fig. 24　出土土器実測図Ⅱ……44
Fig. 25　出土土器実測図Ⅲ……45
Fig. 26　出土石器実測図Ⅰ……48
Fig. 27　出土石器実測図Ⅱ……49
Fig. 28　出土石器実測図Ⅲ……50
Fig. 29　出土石器実測図Ⅳ……51
Fig. 30　出土石器実測図Ⅴ……52
Fig. 31－1　出土石器実測図Ⅵ……53
Fig. 31－2　出土石器実測図Ⅶ……54
Fig. 32　遺構の分布とその検討……56
Fig. 33　第39次調査遺構配置図……（1/200）……59
Fig. 34　第39次周辺調査地点配置図……（1/400）……60

Fig. 35　1号～4号土坑……(1/30)……62
Fig. 36　5号～8号土坑……(1/30)……63
Fig. 37　掘立柱建物配置図……(1/200)……65
Fig. 38　1号～4号・6号・7号掘立柱建物 (1/100)……66
Fig. 39　5号・8号・9号～11号掘立柱建物 (1/100)……67
Fig. 40　12号・15号～19号掘立柱建物……(1/100)……69
Fig. 41　21号～23号・25号・26号・28号掘立柱建物 (1/100)……70
Fig. 42　29号～34号掘立柱建物……(1/100)……72
Fig. 43　包含層，Pit 出土遺物……(1/1，1/4)……75
Fig. 44　出土遺物……(1/3，1/4)……76
Fig. 45　4号土坑出土遺物……(1/3)……77
Fig. 46　4号土坑出土遺物……(1/4)……78
Fig. 47　第51次調査遺構配置図……(1/200)……80
Fig. 48　1号住居跡……(1/60)……82
Fig. 49　2号・3号住居跡……(1/60)……83
Fig. 50　4号住居跡，1号・2号土坑……(1/60，1/30)……85
Fig. 51　1号掘立柱建物……(1/100)……86
Fig. 52　2号・3号掘立柱建物……(1/100)……87
Fig. 53　1号住居跡出土遺物……(1/3)……89
Fig. 54　1号住居跡出土遺物……(1/3)……90
Fig. 55　掘立柱建物出土遺物……(1/3)……91
Fig. 56　2号土坑，Pit 出土遺物……(1/3)……92
Fig. 57　第30・53・75次調査遺構配置図……(1/300)……96
Fig. 58　1号住居跡……(1/60)……97
Fig. 59　1号土坑……(1/30)……98
Fig. 60　2号～5号溝断面土層図……(1/30)……99
Fig. 61　2号溝出土遺物……(1/3)……101
Fig. 62　2号溝出土遺物……(1/3)……103
Fig. 63　第18・29・55・56次調査遺構配置図 (1/300)……105
Fig. 64　1号土坑……(1/30)……106
Fig. 65　1号溝断面土層図……(1/30)……107
Fig. 66　1号・2号掘立柱建物……(1/100)……108
Fig. 67　出土遺物……(1/3)……109

Fig. 68　2号溝出土遺物……(1/3)……111
Fig. 69　2号溝出土遺物……(1/3)……112
Fig. 70　2号溝出土遺物……(1/3)……114
Fig. 71　出土遺物……(1/3)……116
Fig. 72　表土，包含層出土遺物……(1/3)……117
Fig. 73　掘立柱建物配置図……(1/500)……120
Fig. 74　第12・57次調査遺構配置図……(1/300)……121
Fig. 75　住居跡……(1/60)……122
Fig. 76　溝状遺構……(1/60)……123
Fig. 77　溝断面土層図……(1/60)……124
Fig. 78　住居跡出土遺物……(1/3)……125
Fig. 79　住居跡，Pit 出土遺物……(1/3)……126
Fig. 80　第66次調査遺構配置図……(1/200)……129
Fig. 81　1号・2号貯蔵穴……(1/60)……130
Fig. 82　1号・2号住居跡及び土層図……(1/60)……132
Fig. 83　1号・2号土坑及び井戸……(1/30，1/40)……134
Fig. 84　1号～3号溝断面土層図……(1/40)……136
Fig. 85　掘立柱建物配置図……(1/300)……137
Fig. 86　1号・2号掘立柱建物……(1/100)……138
Fig. 87　3号～6号掘立柱建物……(1/100)……139
Fig. 88　7号～10号掘立柱建物……(1/100)……140
Fig. 89　11号～15号掘立柱建物……(1/100)……141
Fig. 90　1号・2号柵列……(1/100)……145
Fig. 91　1号・2号住居跡出土遺物……(1/3)……147
Fig. 92　1号溝出土遺物……(1/3)……148
Fig. 93　2号溝出土遺物……(1/3)……150
Fig. 94　2号・3号溝出土遺物……(1/2，1/3，1/4)……151
Fig. 95　1号・2号土坑出土遺物……(1/3，1/4)……152
Fig. 96　井戸出土遺物……(1/3)……154
Fig. 97　Pit 出土遺物……(1/2，1/3)……155
Fig. 98　第76次調査遺構配置図……(1/200)……157
Fig. 99　1号住居跡，1号～3号掘立柱建物 (1/60，1/100)……158
Fig. 100　4号・5号掘立柱建物……(1/100)……159

Fig. 101　出土遺物……(1/3)……160
Fig. 102　第36・46・86次調査遺構配置図……(1/200)……163
Fig. 103　3号・4号土坑……(1/30)……164
Fig. 104　5号・6号土坑……(1/30)……165
Fig. 105　1号～4号甕棺墓……(1/30)……167
Fig. 106　2号・3号溝断面土層図……(1/30)……169
Fig. 107　1号～3号掘立柱建物……(1/100)……170
Fig. 108　甕棺墓出土遺物……(1/10)……172
Fig. 109　甕棺墓出土遺物……(1/3, 1/6, 1/10)……173
Fig. 110　出土遺物……(1/3)……175
Fig. 111　4号溝出土遺物……(1/3)……176
Fig. 112　4号・5号溝出土遺物……(1/3)……178
Fig. 113　出土遺物……(1/2, 1/3)……180
Fig. 114　土塁及び散布地の分布図……(1/100)……182
Fig. 115　1号土塁測量図……(1/200)……183
Fig. 116　2号土塁測量図……(1/100)……184
Fig. 117　2号土塁出土石塔……(1/3)……186
Fig. 118　姪浜表採遺物実測図……(1/3)……188

図版目次

図版扉写真　作業風景（昭和57年6月，第66次調査）
PL. 1　有田・小田部周辺航空写真（昭和50年撮影）
PL. 2　有田・小田部周辺航空写真（昭和21年米軍撮影）
PL. 3　(1)第5次調査区（南より）　(2)第5次調査区（北より）
PL. 4　(1)貯蔵穴群（北より）　(2)貯蔵穴群（南より）
PL. 5　(1)第7号貯蔵穴　(2)第29号貯蔵穴
PL. 6　(1)第8号貯蔵穴　(2)第41号貯蔵穴
PL. 7　(1)第15号貯蔵穴　(2)第23号貯蔵穴
PL. 8　(1)第26号貯蔵穴　(2)第27号貯蔵穴
PL. 9　(1)第38号貯蔵穴　(2)第32号貯蔵穴
PL. 10　(1)第33号貯蔵穴　(2)第34号貯蔵穴
PL. 11　(1)第46号貯蔵穴　(2)第37号貯蔵穴

PL. 12 (1)第49号貯蔵穴 (2)第39号貯蔵穴
PL. 13 (1)第52号貯蔵穴 (2)第45号貯蔵穴
PL. 14 (1)第45号貯蔵穴 (2)第 4 号貯蔵穴
PL. 15 (1)第40号貯蔵穴 (2)第30号貯蔵穴
PL. 16 (1)第31号貯蔵穴 (2)第 1 号貯蔵穴
PL. 17 (1)第55号貯蔵穴の集石状況 (2)第55号貯蔵穴
PL. 18 (1)第60号貯蔵穴 (2)第60号貯蔵穴の集石状況
PL. 19 (1)貯蔵穴遺物出土状況 (2)貯蔵穴遺物出土状況
PL. 20 (1)貯蔵穴遺物出土状況 (2)貯蔵穴遺物出土状況
PL. 21 (1)貯蔵穴遺物出土状況 (2)貯蔵穴遺物出土状況
PL. 22 (1)貯蔵穴遺物出土状況 (2)貯蔵穴遺物出土状況
PL. 23 (1)第39次調査全景（西から） (2)第39次調査全景（北から）
PL. 24 (1)1 号掘立柱建物（北から） (2)1 号土坑（東から）
(3)2 号土坑（南から） (4)3 号土坑（北から）
PL. 25 (1)4 号土坑（南から） (2)4 号土坑出土遺物（東から）
(3)5 号土坑（北から） (4)5 号土坑出土遺物（東から）
PL. 26 (1)6 号土坑（北から） (2)7 号土坑（東から）
(3)8 号土坑（西から） (4)P 72内土器出土状態
PL. 27 出土遺物
PL. 28 出土遺物
PL. 29 (1)第51次調査全景（北から） (2)調査区南側全景（北から）
PL. 30 (1)1 号住居跡完掘状態（北から） (2)鉄製刀子出土状態
(3)床面の土器出土状態
PL. 31 (1)4 号住居跡（北から） (2)3 号住居跡（北から）
(3)1 号土坑（西から） (4)2 号土坑
PL. 32 (1)1 号掘立柱建物（北から） (2)2 号掘立柱建物（西から）
PL. 33 出土遺物
PL. 34 (1)第53次調査南側全景（東から） (2)第53次調査北側全景（東から）
PL. 35 (1)1 号住居跡（南から） (2)1 号掘立柱建物及び 2 号溝（南から）
PL. 36 (1)1 号溝（北から） (2)1 号溝中央部土層状態
(3)3 号溝（北東から） (4)3 号溝土層状態
PL. 37 (1)4 号・5 号溝（南から） (2)1 号土坑（南から） (3)出土遺物
PL. 38 出土遺物

PL. 39 (1)第56次調査第1遺溝面全景（北から）(2)第56次調査第2遺構面全景（北から）
PL. 40 (1)1号溝（西から）(2)1号溝北側土層状態（西から）
(3)1号土坑（北から）(4)1号土坑遺物出土状態（北から）
PL. 41 (1)1号掘立柱建物（東から）(2)2号掘立柱建物（東から）
(3)1号掘立柱建物柱穴断面の状態 (4)拡張区の状態（東から）
PL. 42 出土遺物
PL. 43 出土遺物
PL. 44 出土遺物
PL. 45 (1)第57次調査全景（東から）(2)1号住居跡（東から）
PL. 46 (1)1号住居跡遺物出土状態 (2)1号住居跡遺物出土状態
(3)1号溝の状態（東から）(4)1号溝の土層状態（南から）
PL. 47 出土遺物
PL. 48 (1)第66次調査南側全景（北から）(2)第66次調査北側全景（北から）
PL. 49 (1)1号・2号住居跡（北から）(2)1号住居跡内土坑（北から）
(3)1号住居跡床面の遺物出土状態
PL. 50 (1)1号貯蔵穴（西から）(2)2号貯蔵穴（南から）
(3)井戸跡（北から）(4)2号土坑（北から）
PL. 51 (1)1号土坑（東から）(2)甕と椀の出土状態（北から）
(3)甕底部の状態（北から）
PL. 52 (1)1号溝（東から）(2)2号溝（東から）
(3)3号溝（南から）
PL. 53 (1)2号溝遺物出土状態 (2)2号溝遺物出土状態
(3)1号溝土層状態（東から）(4)2号溝土層状態（西から）
PL. 54 (1)1号・2号掘立柱建物（東から）(2)3号掘立柱建物（西から）
PL. 55 (1)5号掘立柱建物（東から）(2)6号掘立柱建物（西から）
(3)7号掘立柱建物（東から）(4)8号掘立柱建物（北から）
PL. 56 (1)9号掘立柱建物（東から）(2)11号掘立柱建物（南から）
(3)12号掘立柱建物（東から）(4)14号掘立柱建物（東から）
PL. 57 (1)1号・2号柵列（東から）(2)1号掘立柱建物柱穴断面の状態
(3)1号柵列柱穴の状態
PL. 58 出土遺物
PL. 59 出土遺物
PL. 60 出土遺物

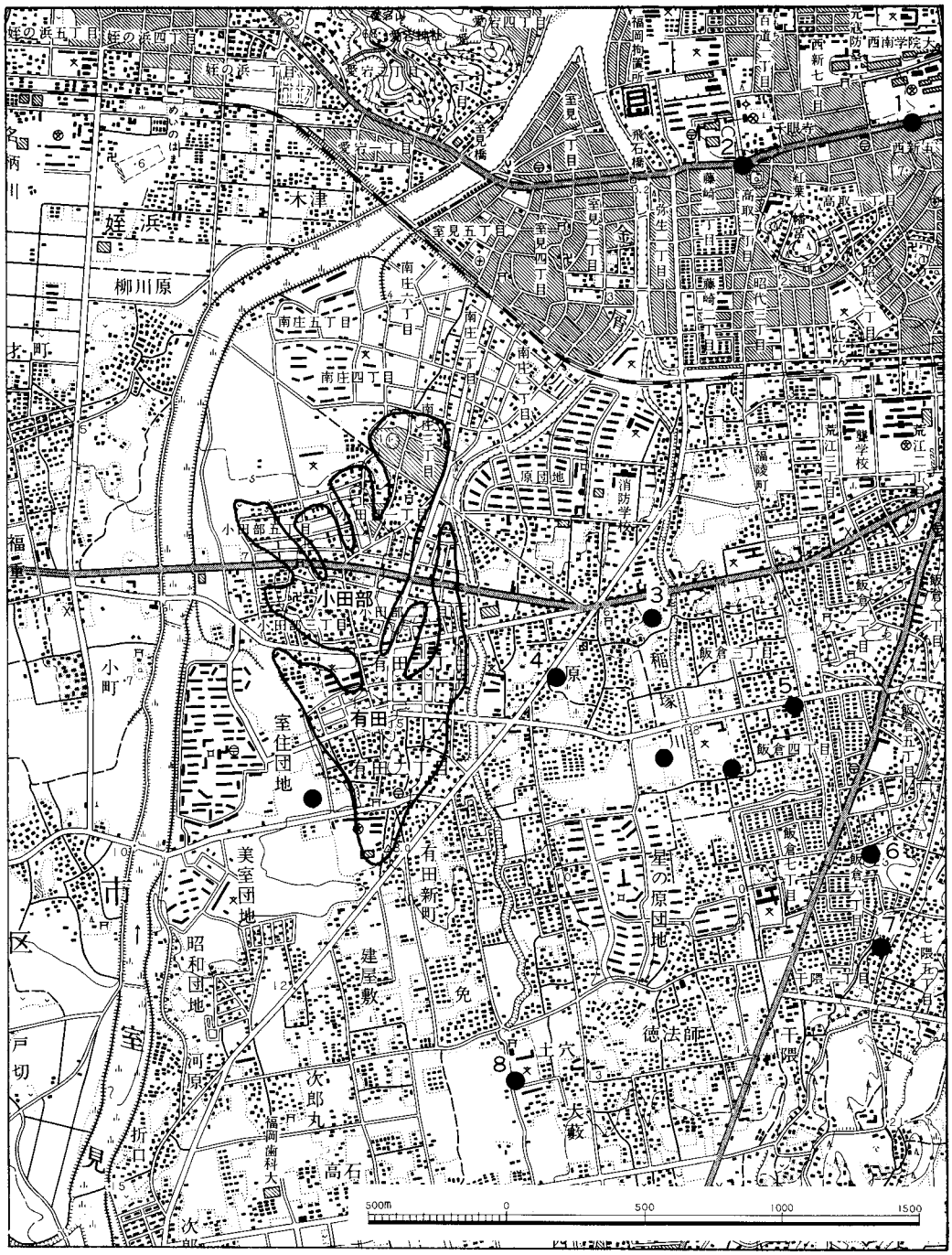
PL. 61 (1)第76次調査南半部（西から） (2)第76次調査北半部（北から）
PL. 62 (1)1号住居跡（北から） (2)2号住居跡（北から）
(3)1号掘立柱建物（北から） (4)3号掘立柱建物（北から）
PL. 63 (1)1号構（西から） (2)2号掘立柱建物（北から）
(3)5号掘立柱建物（北から） (4)6号掘立柱建物（東から）
PL. 64 (1)第86次調査全景（北から） (2)甕棺墓出土状態（北から）
PL. 65 (1)1号甕棺墓（北から） (2)2号甕棺墓（西から）
(3)3号甕棺墓（西から） (4)4号甕棺墓（西から）
PL. 66 (1)1号土坑（南から） (2)2号土坑（北から）
(3)3号土坑（北から） (4)4号土坑（南から）
PL. 67 (1)1号溝（東から） (2)5号溝（北から）
(3)2号掘立柱建物（北から） (4)柵列（東から）
PL. 68 出土遺物
PL. 69 出土遺物
PL. 70 出土遺物
PL. 71 (1)1号土墨（東から） (2)2号土墨（西から）
(3)2号土墨出土石塔
PL. 72 (1)1号井戸 (2)2号井戸
(3)石塔類散布地① (4)石塔類散布地②

表　目　次

Tab. 1 有田・小田部発掘調査一覧表……6
Tab. 2 第39次調査掘立柱建物計測表……73
Tab. 3 第51次調査掘立柱建物計測表……88
Tab. 4 第56次調査掘立柱建物計測表……108
Tab. 5 第66次調査掘立柱建物計測表……144
Tab. 6 第76次調査掘立柱建物計測表……159
Tab. 7 第86次調査掘立柱建物計測表……170

付　　図

Ⅰ. 有田・小田部地区各調査地点配置図No.Ⅳ (1/1000) ……付録
Ⅱ. 第3次・第51次調査遺構配置図…… (1/200)……付録



1．西新町遺跡　2．藤崎遺跡　3．原遺跡　4．原談儀遺跡
5．飯倉遺跡　6．飯倉原遺跡　7．千隈遺跡　8．鶴町遺跡
9．原深町遺跡　10．有田七田前遺跡

Fig. 1　有田・小田部周辺の遺跡（1/25000）

第１章　はじめに

１．昭和58・59年度の調査に至る経過

福岡市近郊の農村地帯であった有田・小田部の台地上には有田地区・小田部地区・南庄地区の３つの集落で構成されている。近年,202号線バイパスの西への延長と昭和57年の地下鉄の開通等の影響を受け，専用住宅地域から高層住宅地域へと変貌しつつあり，農村の面影は少ない。有田遺跡の発掘調査は昭和50年度から国庫補助事業として出発したが，昭和52年度からは1000㎡以下の小規模開発に対処している。昭和59年度迄の調査件数は99件である。昭和50年度～昭和56年度の開発傾向は専用住宅建設が圧倒的に多く，農村地帯から住宅地域への変遷をみる思いであった。昭和57年度から昭和59年度の開発計画には専用住宅が減少し，高層の共同住宅，賃貸倉庫，駐車場，店舗，分譲住宅など大規模化の傾向を示している。

昭和58年度の発掘調査対象件数は前年度の繰り越し分を含めて計25件である。この内，緊急を要する13件について発掘調査を実施した。発掘調査総面積は6499㎡である。発掘調査は昭和58年４月５日～昭和59年１月28日迄実施した。対象地の開発用途には専用住宅以外に第77次調査等の大型共同住宅，第80次調査の貸店舗，第89次調査の分譲住宅建設等の例がある。これらの開発目的については調査費の負担を原因者に協力要請している。農村地帯から住宅地へ，そして商業地域への変貌は今後こうした多目的な開発を増加させることは必須である。遺跡保存の方法や調査体制について充分な配慮が必要である。報告書については昭和54年度の第39次，昭和56年度の第51・53・56・57次，昭和57年度の第66次，昭和58年度の第76・86次の計８カ所について報告する。

(昭和54年度発掘調査地)

7	第39次	福岡市早良区有田１丁目37－７	面積 527㎡	申請者　松井　辰雄

(昭和56年度発掘調査地)

10	第51次	福岡市早良区有田１丁目23－６	面積 314㎡	申請者　毛利　俊武
12	第53次	福岡市早良区有田２丁目28－３，４	面積 417㎡	申請者　坂口　義助
15	第56次	福岡市早良区有田１丁目32－９	面積 513㎡	申請者　尾崎　圭一
16	第57次	福岡市早良区有田１丁目241－２	面積 275㎡	申請者　添田　トヨ

(昭和57年度発掘調査地)

4	第66次	福岡市早良区有田１丁目20－１	面積 503㎡	申請者　古賀　龍雄

(昭和58年度発掘調査地)

1	第76次	福岡市早良区南庄３丁目114－３	面積 355㎡	申請者　原井　友紀
2	第77次	福岡市早良区有田１丁目30－１～３	面積1703㎡	申請者　毛利伊佐雄

3	第78次	福岡市早良区有田２丁目20－２	面積 411㎡	申請者	坂口　正敏
4	第79次	福岡市早良区小田部１丁目225－１，２	面積 143㎡	申請者	国友　　泉
5	第80次	福岡市早良区小田部１丁目168	面積 885㎡	申請者	毛利　義祐
6	第81次	福岡市早良区有田地区市営住宅改築事業	(公共事業)		
7	第82次	福岡市早良区有田１丁目29－13，14	面積 411㎡	申請者	蒲池　俊喜
8	第83次	福岡市早良区有田１丁目127－３	面積 378㎡	申請者	椛島　重義
9	第84次	福岡市早良区有田２丁目７－66	面積 304㎡	申請者	緒方　春一
10	第85次	福岡市早良区南庄３丁目261－１	面積 577㎡	申請者	信連建設㈱
11	第86次	福岡市早良区小田部５丁目143－３	面積 247㎡	申請者	井本　眞一
12	第87次	福岡市早良区有田２丁目12－６	面積 248㎡	申請者	倉光ミサヲ
13	第88次	福岡市早良区有田１丁目８－７	面積 260㎡	申請者	満生　泰三
14	第89次	福岡市早良区南庄３丁目261－１	面積 577㎡	申請者	信連建設㈱
15	第90次	福岡市早良区小田部５丁目149－１	面積 286㎡	申請者	金子　重義

２．第76次～第89次発掘調査の組織

〈第39次調査〉－「有田・小田部第１集」参照－
〈第51次・第53次・第56次・第57次調査〉－「有田・小田部第４集」参照－
〈第66次調査〉－「有田・小田部第５集」参照－

昭和58年度発掘調査〈第76次～第89次調査〉

調査主体　福岡市教育委員会
調査担当　福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第２係
調査責任　文化部文化課課長　生田　征生
　　埋蔵文化財第２係長　折尾　　学
庶務担当　岡嶋　洋一
調査担当　井澤　洋一，松村　道博
調査補助員　谷沢仁(奈良大学)，辻哲也(別府大学)
調査協力者　松尾和雄，真子康次郎，高浜謙一，結城茂巳，座親秀文，西原達也，海田龍正武田秀司，合屋龍介，松尾正明，下野敏夫，伊庭秀子，緒方マサヨ，金子由理子，清原ユリ子，坂口フミ子，佐藤テル子，柴田勝子，紫田幸子，柴田春代，柴田タツ子，庄野崎ヒデ子，土斐崎初枝，砥綿千江子，西尾たつよ，平井和子，堀川ヒロ子，松井フユ子，松井邦子，松尾玲子，有富いつ子，米嶋チズコ，日

野良子，末松信子，中村千里，後藤ミサヲ，吉岡田鶴子，宮原邦江，砥上志華子，木村伸子，吉田祝子，原花千代，江口洋子，合屋文子，坂田まさ子
西南大学歴史探究会

資料整理　児玉健一郎，池田孝弘，原秋代，池田洋子，深堀博子，元田明子，内尾トミ子，仲前智江子，永井和子，友田妙子，小江英美子，大田けい子，久門みちよ

3．第5次発掘調査の組織

調査主体　福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財係

調査責任　文化課課長，清水義彦

事務担当　三宅安吉（係長）国武勝利，古藤国雄

調査担当　山崎純男，沢　皇臣，山口譲治，横山邦継

調査指導　岡崎　敬（九州大学教授）森貞次郎（九州産業大学教授）三島　格（福岡市文化財専門員）西谷　正（九州大学教授）下條信行（九州大学助手）後藤　直（福岡市歴史資料館）渡辺　誠（平安博物館）粉川昭平（大阪市立大学教授）賀川光夫（別府大学教授）春成秀爾（岡山大学）

調査補助員　前田義人，原俊一，奈良崎和典，森瀬圭子，小島純一，木下尚子，杉山富雄，市橋重喜，松永幸男，久保知康，盛本勲，河田智子，宮内己，奥村俊久，小島純一，上野修一，岩永省三，藤井尚典，南　博，

特別参加　沈奉謹（韓国東亜大学助教授）

第２章　遺跡の立地と調査概要

１．立　　地

福岡市早良区有田・小田部・南庄の位置する台地は，室見川の開析によって形成された早良平野のほぼ中央に位置し，標高15m前後を測る独立中位段丘である。台地の形成は洪積世に位置づけられ，八女粘土，鳥栖，新期ロームの層序をなしている。台地は主軸を南北方向に向け，南北の長さ約１km，最大幅約0.7kmを測り，北へ緩やかに傾斜している。旧地形では有田１～２丁目を最高所にして標高15mを測り，周辺水田面との比高差は約10mを測っていたが，現在では沖積化のため５～７mの比高差である。台地の西側に室見川が，東側に金屑川が北流しているため台地の縁辺は浸蝕を受け，小断崖を形成している。また，台地内に深く切り込んだ比較的浅く，緩やかな谷も幾つか存在するため台地は北方向に八ツ手状に分岐している。この台地上には有田・小田部・南庄の３つの集落が形成されているが，近世の住宅化はその界線を失くしつつある。有田・小田部両地区は昭和40年代の初めに区画整理事業が行なわれ，著しい現状変更が行なわれている。

有田遺跡は台地上に広く分布する旧石器時代から近世までの複合遺跡である。旧石器のナイフ，ポイントは第６次調査などで検出されている。縄文時代には有田地区の西側に偏して中期～晩期の貯蔵穴群を検出している。弥生時代初頭のＶ字溝は第２次調査で検出されたが，この溝は谷をとり巻くように巡り，長径300m，短径200mの環濠になる可能性をもっている。西端の七田前遺跡では縄文晩期の土器に大陸系の石器や無文土器[註1]を伴なっている。前期後半の集落は台地中央上に検出され，この時期の溝は有田地区では台地縁辺[註2]をとり巻くように巡る。この時期の甕棺墓から細形銅戈が発見されている。又，小田部地区から細形銅矛の出土も伝えられる。中期は前代を踏襲し，大型の円形住居跡群が出現し，青銅利器の熔范片の出土や広形銅戈[註3]の出土も伝えられることから拠点的な集落の存在が考えられる。古墳時代の住居跡は台地上に広く検出しており，長期間[註2]に亘った集落が各所に存在している。この時期には小田部地区に古墳が形成され，筑紫殿塚，松浦殿塚などの大円墳が存在する。弥生時代からつづいた在地勢力の集約化が認められる。弥生時代から古墳時代の原遺跡[註2]は金屑川を挟んだ東側に位置しており，共に共同体的な機能を果していたものと思われる。律令時代にはこの地区が早良郡田部郷に比定されるが，大型の柱穴をもつ建物群は有田地区に集中し，第56・57・77・78・82次調査では倉庫や居宅的な建物を検出した。又，これらの建物群は，古代官道の額田駅が西方約２kmに位置することを考慮すれば官衙規模の建物群と考えて良いだろう。中世には西に下山門荘，南に野芥荘が存在し，当該地域には名主屋敷が形成される。後半には大内氏早良郡代大村興景の地行地や，大友氏の被官であった小田部氏の里城ー小田辺城などが存在する。有田地区で検出した幅５mの空濠は

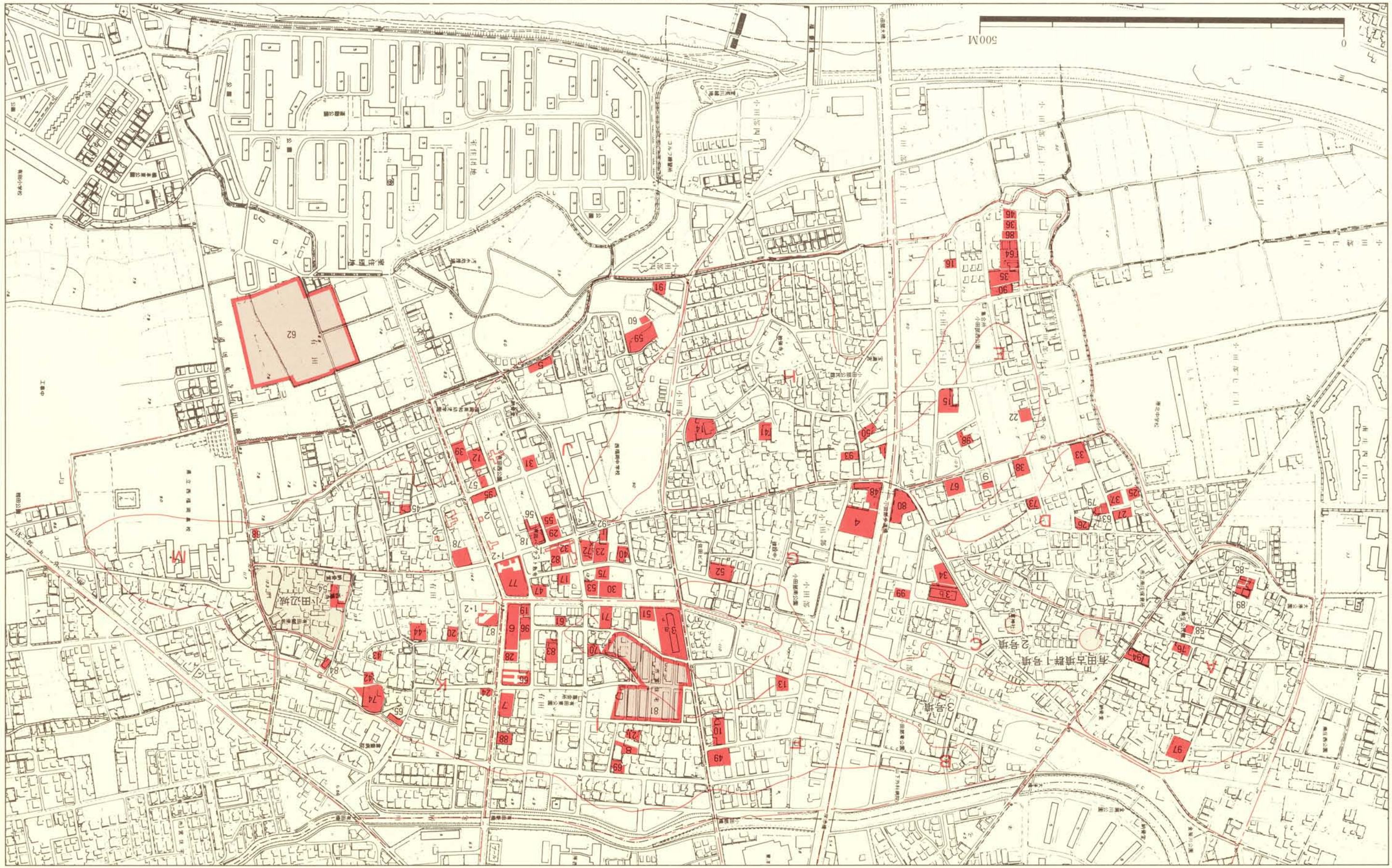


Fig.2　有田・小田部台地と発掘調査地点（1/5000）　※赤優9は調査地点を，数字は調査区数を表わす。

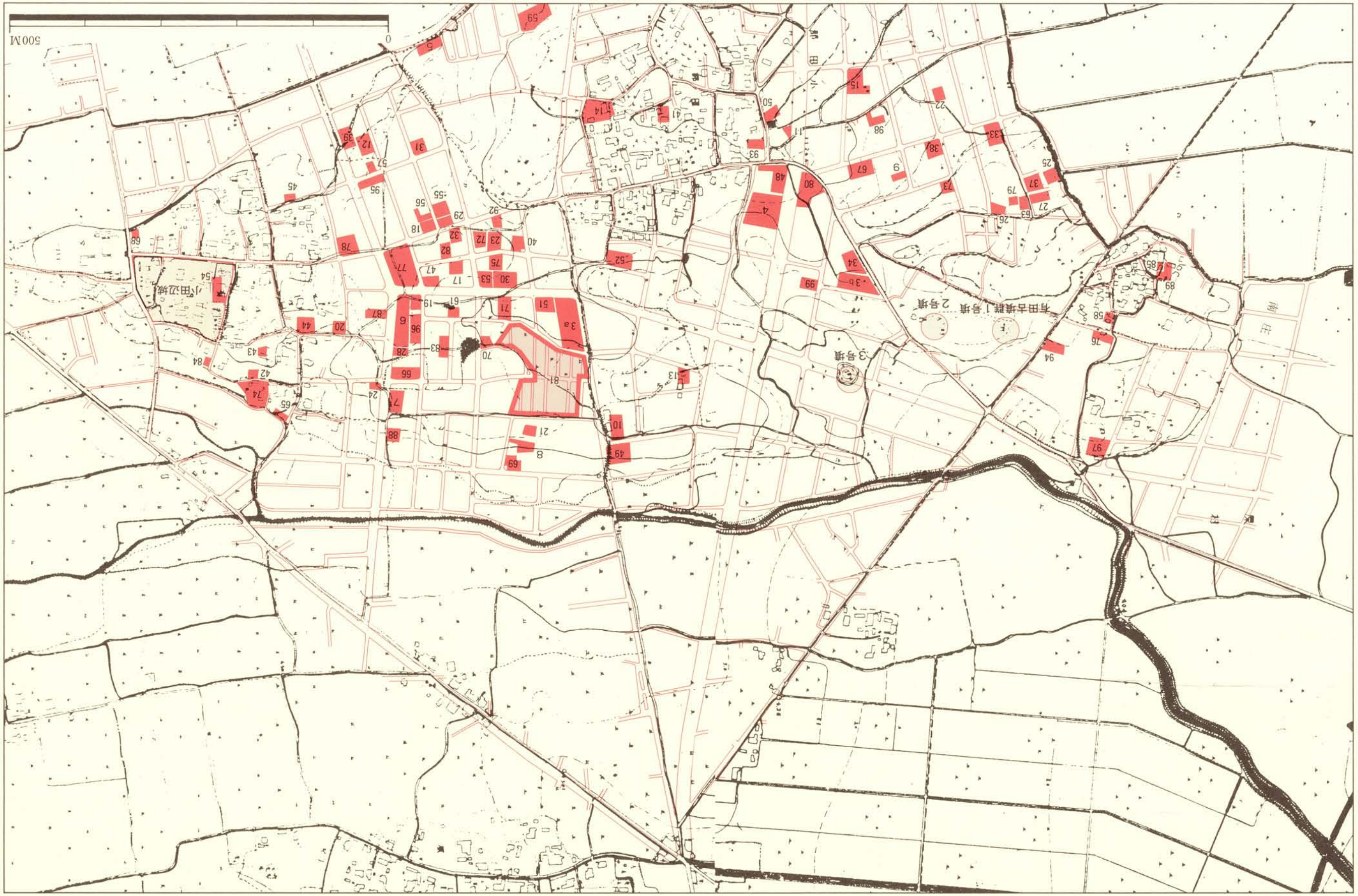


Fig.3　有田・小田部古地の田地形図（1/5000）　※赤塗りは調査地点を，数字は調査次数を表わす。

“L字形”又,は“コの字形”の郭を形成しており,範囲は約200m四方に及ぶ。大内氏関係の遺物や明代の陶磁器が出土しており，16世紀前～中頃の築城を考えることができる。中世の遺物では博多が貿易港として栄えたことや大内氏の朝鮮貿易とも関わっており，中国陶磁器や朝鮮陶磁器の出土がある。

2．調 査 の 概 要

有田遺跡の調査は昭和41～43年に施行された有田地区の区画整理事業に伴なって九州大学考古学研究室が発掘調査を行ない，弥生時代前期から中世に至る豊富な資料を得ている。昭和58年度事業で検出した遺構は弥生時代前期から江戸初期に亘っている。

第76次調査は南庄集落内にあって，古墳時代の住居跡及び古墳時代～奈良時代の掘立柱建物を検出した。この調査区の西には第58次調査があって,弥生時代中期の住居跡を検出している。**第77次調査**では弥生時代～中世末に及ぶ遺構を検出した。弥生時代初頭のV字溝は第２次調査で検出されたが，第18次，56次調査に接続し，谷を囲む形状を呈している。奈良時代の掘立柱建物は４棟で，３間×６間，２間以上×５間以上の建物を検出した。これらの建物は方100m四方の中に配置されている。古墳時代の住居跡は７軒検出した。又，中世末のV字溝は幅５m，深さ２mを測る。その他，土坑墓４，木棺墓１，井戸１，溝状遺構５条，柵列１条を検出した。**第78次調査**は第77次調査地の西南部に位置し，弥生時代前期の貯蔵穴６，住居跡２軒，古墳時代住居跡１軒，奈良時代の溝１条，中世の土坑墓２，中世末の濠１条，時代不詳の建物１棟を検出した。これらの貯蔵穴群は第２次調査検出の前期V字溝内に存在する。**第79次調査**は第63次調査の南に接しており，１棟の建物を検出した。**第80次調査**は小田部集落の北側鞍部にあるが,周辺では前期甕棺墓が出土している。遺構は弥生時代前期の貯蔵穴群,及び中期の住居跡２軒である。貯蔵穴はいずれも長方形を呈し，前半の古い要素をもつ土器が出土している。その他土坑墓１，火葬墓１が検出された。第82次調査では古墳時代の住居跡１軒，奈良時代の建物２棟，中世の土坑及び,溝２条を検出した。奈良時代の建物は３間×９間の側柱だけの建物と，３間×４間の総柱建物２棟である。いずれも方100mを測る区画溝内に位置している。**第83次査査**では中世末の井戸,及び両側に側溝をもった石敷の道路を検出した。**第84次調査**では弥生時代後期の井戸及び中世の濠を検出した。中世末の濠からは竹籠や漆器椀を検出した。**第85，89次調査**は南庄集落内にあって隣接しており,古墳時代の住居跡,及び円墳の周溝跡,奈良時代の火葬墓１を検出した。**第86次調査**では縄文時代の土坑１，弥生時代甕棺墓４，土坑２，中世の土坑１，溝３条，近世溝２条，時期不詳の掘立柱建物３棟，柵列１条を検出した。柵列及び溝は東側の第64次調査や西側の第36次調査に接続するものである。**第87次調査**は第77次調査の東南にある。遺構は弥生時代前期初頭のV字溝，古墳時代の住居跡１軒，奈良時代の掘立柱建物１棟,中世の土坑墓，及び石敷の溝１条である。弥生時代のV字溝は九州大学による第２調査にて完

掘されていた。奈良時代の建物は２間×５間以上の規模をもつが，第77次調査で検出した大規模な建物[註3]のように方100ｍ四方内に配置されるものではなく，区画溝の外側に位置する。**第88次調査**は第87次調査より約50m東にあって，緩傾斜地に位置する。暗茶褐色土の整地層が存在し，奈良時代の住居跡１軒，掘立柱建物５棟，中世末の溝１条を検出した。奈良時代の建物は２間×４間が３棟あるが，内２棟には庇が付設している。中世末の溝から李朝の椀が出土した。**第90次調査**は小田部の西北端にある。西側に第34次調査地が隣接し，東側は谷になる。遺構は古墳時代住居跡２軒，井戸１，中世の溝２条の他，掘立柱建物がある。井戸は5世紀代で，周辺から祭祀土器が出土した。又，東側の谷部は中世整地層が形成され，上面には，夥しい土器細片が填圧されていた。この中には縄文中期～後期の土器，陶質土器，青磁，白磁等が含まれている。以上概括したが，詳細については報告書にて述べたい。

注１　昭和59年度の第95次調査では第２次調査（19街区）に対して約200ｍ幅を隔てており，東西方向のＶ字溝を検出した。
２　福岡市教育委員会「有田七田前遺跡」1983
３　福岡市教育委員会「有田遺跡第２次調査報告」1968
４　福岡市教育委員会「有田・小田部第５集」所収　1984

Tab.1　昭和58・59年度　有田・小田部発掘調査一覧表

調査次数	地点名	調査地域（地番）	調査面積	調査期間	備考
第76次	A	早良区南庄３丁目114－３	355㎡	58年４月５日～４月22日	
〃77〃	J	〃　有田１丁目30－１～３	1,707㎡	４月８日～６月20日	
〃78〃	K	〃　〃　２丁目20－２	412㎡	５月23日～７月21日	
〃79〃	D	〃　小田部１丁目225－1 225－2	143㎡	６月９日～６月15日	
〃80〃	C	〃　〃　〃　168	885㎡	６月22日～７月26日	
〃81〃	I	〃　有田　〃			
〃82〃	J	〃　有田１丁目29－13 29－14	208㎡ 205㎡	７月14日～９月６日	
〃83〃	I	〃　〃　〃　127－３	378㎡	８月24日～11月11日	
〃84〃	K	〃　〃　２丁目７－66	304㎡	９月13日～10月18日	
〃85〃	A	〃　南庄３丁目261－１	577㎡	９月27日～10月５日	
〃86〃		〃　小田部５丁目143－３	247㎡	10月11日～11月７日	
〃87〃	K	〃　有田２丁目12－６	248㎡	10月14日～12月１日	
〃88〃	I	〃　〃　１丁目８－７	260㎡	11月２日～12月24日	
〃89〃	A	〃　南庄３丁目261－１	577㎡	12月１日～12月20日	
〃90〃	E	〃　小田部５丁目149－２～４	286㎡	12月９日～59年１月28日	
〃91〃	J	〃　〃　３－153	282㎡	59年４月25日～５月11日	
〃92〃	J	〃　有田１丁目26－６	150㎡	４月26日～５月12日	
〃93〃	H	〃　小田部３丁目401	318㎡	５月11日～５月22日	
〃94〃	A	〃　南庄３丁目172	453㎡	６月８日～７月５日	
〃95〃	J	〃　有田１丁目31－４	657㎡	７月25日～８月29日	
〃96〃	I	〃　〃　〃　20－７	446㎡	８月16日～９月28日	
〃97〃	A	〃　南庄３丁目90・91・93	1,082㎡	８月20日～９月５日	
〃98〃	E	〃　小田部５丁目44	286㎡	12月19日～12月28日	
〃99〃	C	〃　小田部１丁目32－４	547㎡	60年１月24日～１月31日	

第3章　調　査　経　過

1．第5次調査

1）調査地区の地形と概要

第5次調査は福岡市西区小田部二丁目704,(小字高畠）の900㎡を対象として調査を実施した。調査期間は1977年6月20日～11月23日の157日間にわたる。

調査地区は有田の最高地（標高15m）を中心とする中央台地より西北に向って最初に分枝する台地の中央部西端に位置し，標高12m，台地下の水田面との比高は約6mをはかる。台地はゆるやかに水田面に移行するのではなく急崖をもって移行する。崖下に水路があり，水田地形からみれば室見川の蛇行によって台地が削られ急崖となったものと考えられる。当時は台地下の水田は室見川の氾濫原となっていたことは想像に難くない。

本遺跡の発見は，台地下を通る道路の拡張工事による護岸工事中で，台地端部に貯蔵穴3基

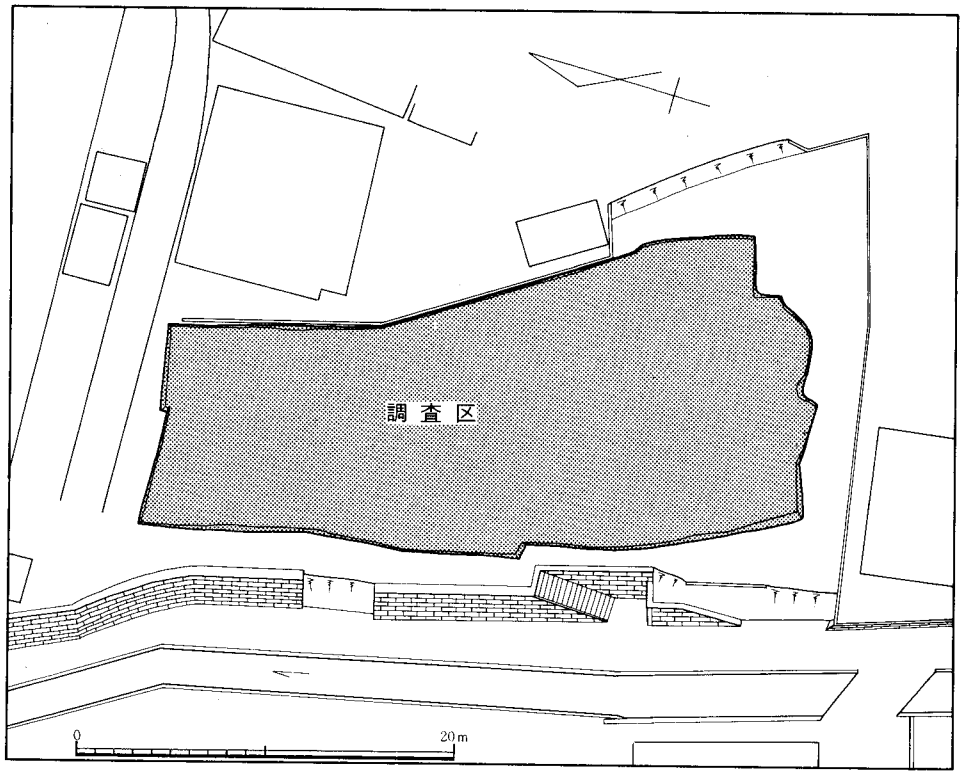


Fig. 4　調査区の地形

Fig. 5　遺構分布図

が発見され，市文化課では３基を立会調査して記録に留めた。その後，本地区が宅地造成されることになり，市文化課では遺跡のひろがりを考えて発掘調査を実施した。

調査実施時期においてはすでに道路工事は終了していて，崖面の護岸工事も終了していた。立会調査した１～３号の貯蔵穴の位置関係を明確にできない状態であったが，対象地区全域に遺構の拡大があるものと考えて，表土層等の排土処理の関係上２区に分けて調査した。

１区は対象地の北側，２区は南側である。調査にあたっては先の立会調査で時期的に縄文時代の貯蔵穴であることが判明していたので，ドングリ等の自然遺物の検出を考慮し，また，遺物の出土状況をよりよく観察するために５分の１で遺物出土状況を記録した。ただし，本報告では時間の関係で充分に分析していない。以後，その欠を補いたいと思っている。また，貯蔵穴№は立会調査分を第１号～第３号貯蔵穴として，検出順に４号以下の番号を付した。

表土層は耕作土20cm，その下は攪乱層が20～30cmあり，遺物包含層はない。出土遺物の中に旧石器時代のナイフ形石器もあるが，包含層もなく，この地区はかなりの削平を受けていることがわかる。攪乱層の下は鳥栖ローム，八女粘土層となっている。遺構は鳥栖ローム層に切り込まれていて，その判別は容易である。遺構は大部分が貯蔵穴で，他に数基貯蔵穴でないものがふくまれる。貯蔵穴は計60基である。

2）遺構の分布

遺構の全体的な分布状況は，遺構が発掘区外にさらに広がるので把握できないが，概略の傾向は判明する。

すなわち，発掘の北端での遺構の分布は第９号貯蔵穴を西限として，それ以西には貯蔵穴の分布はない。東側では第６号貯蔵穴が壁にかかっているので，さらにのびる可能性もあるが，ほぼ東限にあたると考えられ，幅約８ｍに遺構が集中する。発掘区中央部では，発掘調査前に調査した第１，２号貯蔵穴が西限で，東側は第６号，54号貯蔵穴が東限で遺構は幅６～９ｍの範囲に集中している。発掘区南では，第58～60号貯蔵穴が南限で，それより以南には貯蔵穴の分布はなく，発掘内での貯蔵穴の分布は幅４～９ｍの幅で帯状にゆるく弧をえがいていることがわかる。北端部の状態からみれば貯蔵穴はさらに延長すると考えられる。

この状況から全体像を想定すれば30～50ｍの円形にめぐる分布が考えられるが，地形的な制約もあるので，今後の周辺部の調査に期待することにしたい。

なお，この全体的な分布は，直線的に２～４個の貯蔵庫のグループの集合からなっていることが指摘できるが，このことについては後章で考察を加えたいと思う。

3) 検 出 遺 構

第１号貯蔵穴 （Fig. 6－3）

護岸工事中に発見されたもので，立会によって遺物のみを取り上げている。南北91cm，東西86cmの円形プランをなし，深さ51cm，底は東西71cm，南北75cmのほぼ円形をなすが，一部掘り残す部分がある。縄文式土器，石器の出土がある。

第２号貯蔵穴 （Fig. 4－2）

護岸工事中に発見されたもので約½弱を残す。南北径80cm，東西径30＋αcmで，ほぼ径80cmの円形プランをなすと推測される。深さ53cm，底面は南北径40cm，東西径20＋αcmで，径40cm前後の円形となるが平坦ではなく，中心にむかってゆるやかに凹む。壁は垂直よりやや傾斜をもって掘り込まれる。出土遺物には縄文式土器，石器，剝片がある。

第３号貯蔵穴

この遺構も工事中の発見によるものである。一応，一連のNoを付しているが，この遺構は他と年代を異にし，中より弥生式土器が出土した。遺構は約半分を残すのみであったが，底面は凹凸が激しく，八女粘土層にいたって袋状に横へ掘り進んでおり，貯蔵穴としての機能ではなく，粘土採掘壙とみることができる。

第４号貯蔵穴 （Fig. 6－1）

東西径80cm，南北径80cmの円形プランで深さ91cm，底は東西径47cm，南北径44cmの円形である。

貯蔵穴内の層位は自然の堆積とみるには不自然である。上層より第１層：暗褐色粘質土層，第２層：黄褐色土層で第３層と比較的近いがより砂質である。ブロックとして第３層中にはいる。第３層は暗茶褐色粘質土層，レベルがさがるにつれて黄色が強まる。粘質が強くきめが細かい。第４層：暗褐色土層で炭化物を多く含み，粘質が弱く，砂質が強い。第５層：暗黄褐色土層（地山と近く崩壊土か？），第６層：暗黄褐色粘質土層，３層と近かいが，固くしまっていない。レンズ状に第５層の土が堆積する。第７層：褐色粘質土，第８層：暗黄褐色土層，第９層：暗褐色粘質土層，粘質が強い，となっている。壙底の第９層は自然堆積と考えうるが，他は不自然で，特に第４，６，７層はこの貯蔵穴にさらに穴をほった状態を示している。以下，同様例が多くあるので，小結において考察を加える。

出土遺物は縄文式土器片47点，石鏃２点，磨石２点，スクレイパー１点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ18点である。

第５号貯蔵穴 （Fig. 6－4）

東西径85cm，南北径79cmの円形プラン，深さ50cm，底面は東西径82cm，南北径77cmの円形をなすが，部分的に掘り残し部や，一部深くなる部分がある。壁は垂直に近い。埋土の状態は自

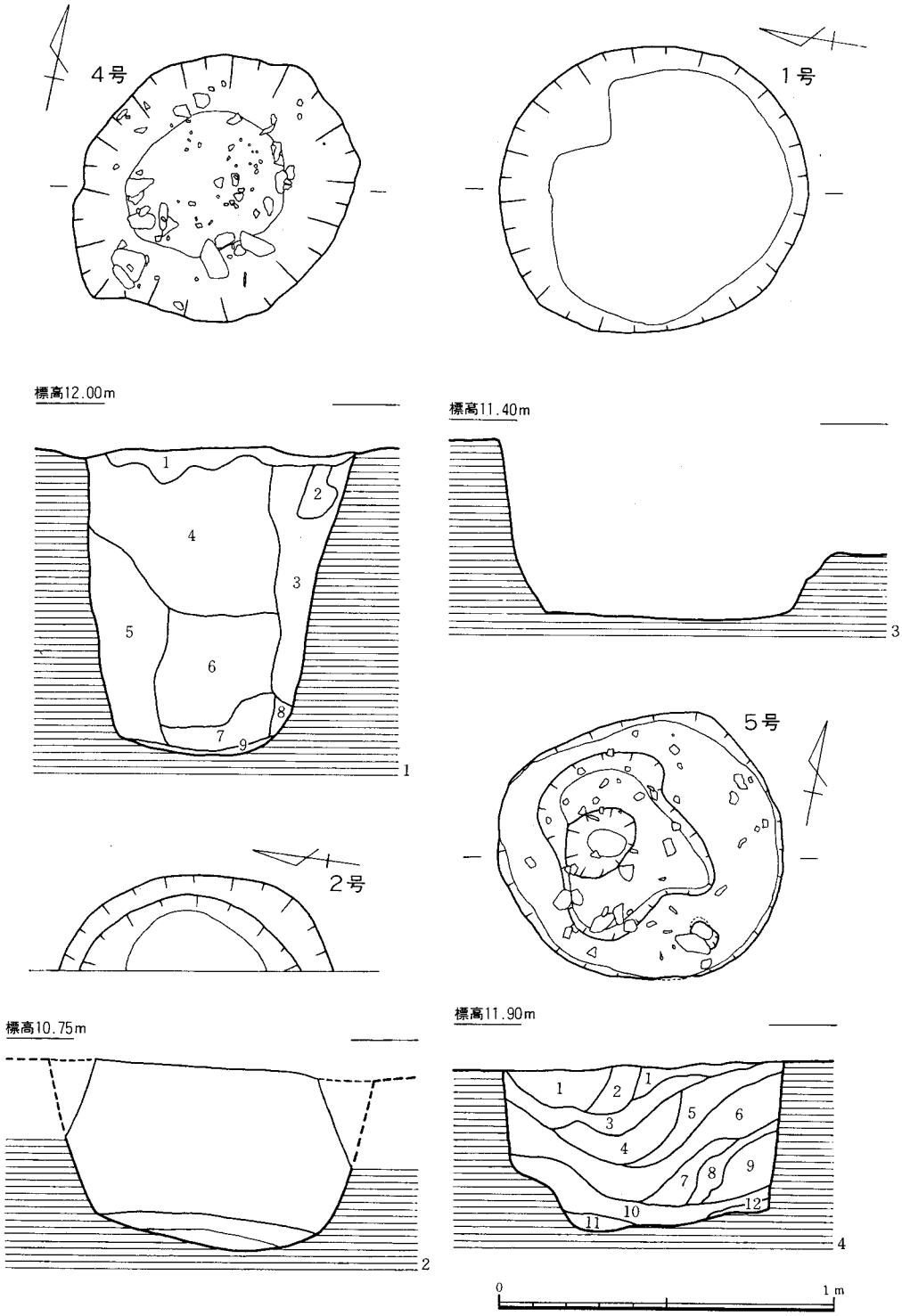


Fig.6　第1・2・4・5号貯蔵穴実測図

然の流込みによる堆積状態である。上より，第１層：暗褐色粘土層，第２層：褐色土層，第３層：暗褐色粘質土層，第４層：褐色砂質土層，第５層：黄褐色粘質土層，第６層：黄褐色土層，第７層：黄褐色砂質土層，第８層：黒色砂質土層，第９層：黄褐色砂質土層，第10層：黒色土層，第11層：黄褐色砂質土層となっている。この堆積は台地の高所，東側よりの流土堆積を良く示している。

出土遺物は縄文式土器片35点，磨石１点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ16点である。

第６号貯蔵穴　(Fig. 7－1)

東西径85cm，南北径70cmの楕円形プランで，深さ28cm，底面は平坦で，東西径62cm，南北径60cmの円形，壁はゆるやかにたちあがる。

土層の堆積は上層より，第１層：黒褐色粘質土層，第２層：黄褐色粘質土層，第３層：黒褐色粘質土層，第４層：黄褐色粘質土層，第５層：灰褐色粘質土層，第６層：黄色粘質土層，第７層：地山層のブロック，第８層：黒褐色粘質土層，第９層：褐色粘質土混入の黄色土層，第10層：黒褐色粘質土層，第11層：地山のブロック，第12層：褐色粘質土で地山が混じる，となっている。

出土遺物は縄文式土器片６点のみである。

第７号貯蔵穴　(Fig.　7－4)

東西径83cm，南北径 103 cmの楕円形プランで，深さ30cm，底面は東西径71cm，南北径90cmの楕円形で平坦であるが，さらに長径56cm×短径35cm，深さ５cmの掘り込みがある。

埋土は上層より，第１層：暗黄茶褐色土層，第２層：黒褐色有機質土層，第３層：暗黄褐色土層，第４層：黒褐色有機質土層，第５層：暗黄褐色土層，第６層：黄褐色土層となっている。

出土遺物は縄文式土器片９点，黒曜石フレイク１点である。

第８号貯蔵穴　(Fig.　7－5)

２基の貯蔵穴が重複している。切り合い関係は明確に把握できなかったが，深い掘り込みが新しいと考えられる(８a)。他を８bとする。８aは長径 110 cm，短径83cmの楕円形プランで，深さ29cm。底面は平坦で長径80cm，短径61cmの楕円形をなす。８ｂは約半分が切られて存在しないが，長径87cm，短径70cm前後の隅丸長方形プランをなすと考えられる。深さ10cm。

埋土は８aが上層より，第１層：暗褐色粘質土層(黄色粘質土を少量混入)，第２層：第１層と同様(黄色粘質土，炭をやや多く含む)，第３層：第１層と同様で黄色砂質土，粘質土を含む。第４層：第１層と同じで炭化物をやや多く含む。８ｂは１層で暗褐色土層となっている。

出土遺物は８aが縄文式土器片30点，黒曜石のフレイク，チップ２点，８bが石鏃１点，黒曜石チップ１点である。

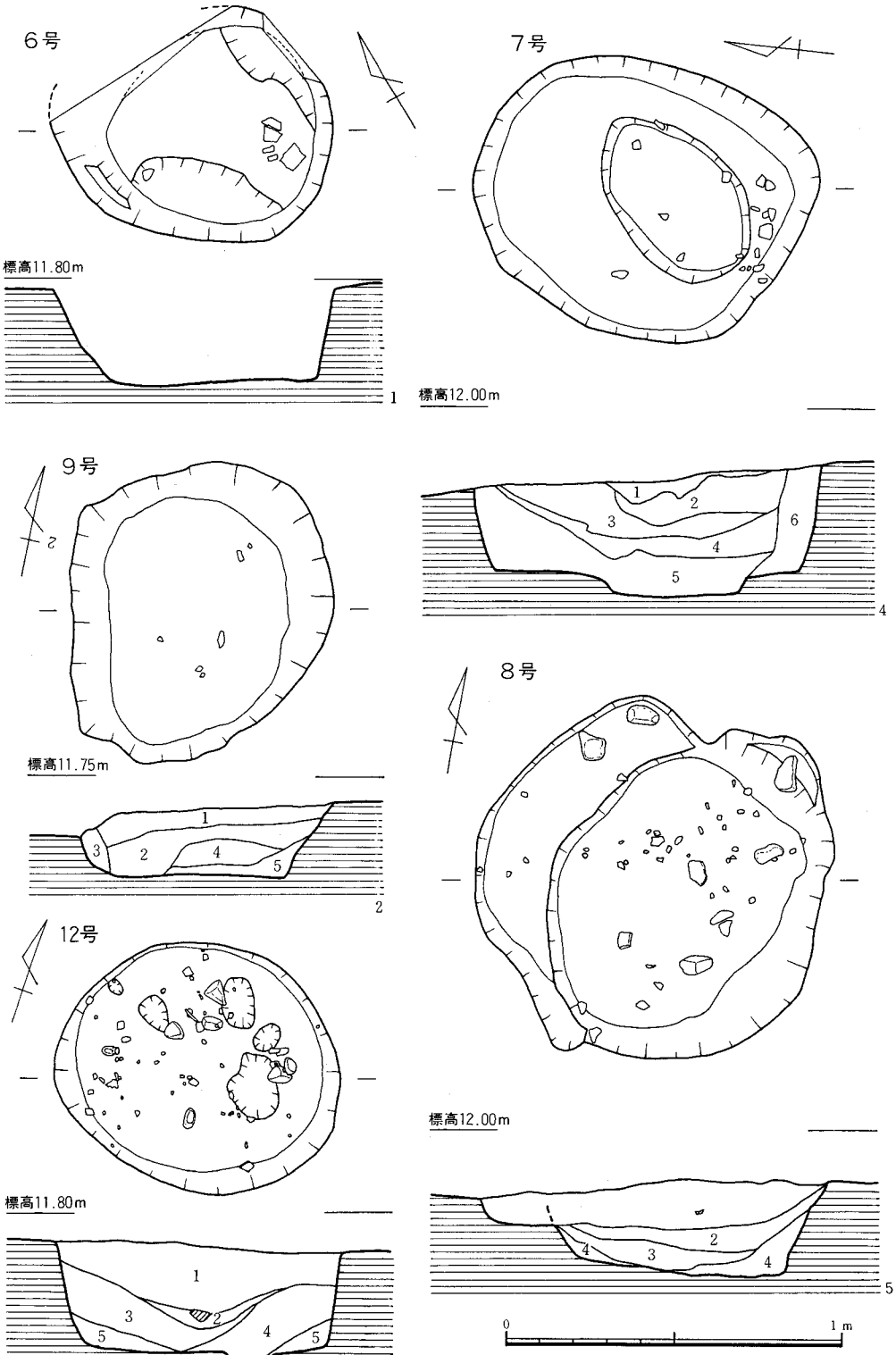


Fig. 7　第6・7・8・9・12号貯蔵穴実測図

第９号貯蔵穴　(Fig. 7－2)

長径95cm，短径80cmの不整楕円形プランで，深さ22cm。底面は平坦で長径73cm，短径54cmの楕円形をなす。埋土は自然の流れ込みで，上層より，第１層：黄褐色粘質土層，第２層：褐色土層，第３層：黄褐色土層，第４層：第３層に近いが粘質土である。第５層：暗褐色土層となる。

出土遺物は土師器片４点，黒曜石フレイク１点である。他の貯蔵穴とは時期的に新しい。また，第10，11，13号貯蔵穴として調査した遺構も，性格，時期については明らかにできなかった。

第12号貯蔵穴　(Fig. 7－3)

長径84cm，短径73cmの楕円形プランで，深さ32cm，底面は長径73cm，短径66cmの楕円形をなし平坦である。北側に片寄り径15cm，深さ５cmのピットがある。また埋土中にも北壁に接して径30cm，深さ10cmのピットが検出できた。埋土の堆積は上より，第１層：暗褐色粘質土層，第２層：暗黄褐色粘質土層，第３層：黒黄褐色粘質土層，第４層：黄褐色粘質土層，第５層：暗褐色粘質土層（炭化物を含む）となっている。

出土遺物は縄文式土器片57点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ13点である。

第14号貯蔵穴　(Fig.　8－4)

長径 105 cm，短径99cmの円形プラン，深さ32cm，底面は平坦で長径83cm，短径75cmの楕円形，中央部に47cm×25cmの長楕円形の浅い凹みがある。また，埋土中には径40cmの柱穴状の落ち込みがある。埋土層第５層がこれにあたる。埋土の堆積は上より，第１層：暗褐色粘質土層，第２層：黄褐色粘質土層，第３層：暗黄褐色砂質土層，第４層：黒褐色土層，第５層：暗黄褐色粘質土層，第６層：黒褐色土層，第７層：暗褐色粘質土層，第８層：黒褐色粘質土層，第９層：炭化物の多い黒褐色粘質土層，第10層：黄褐色粘質土層，第11層：壁面に形成される層で地山の崩落に伴う層で黄褐色土層となっている。

出土遺物は縄文式土器片23点，石鏃３点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ15点，ナイフ形石器１点がある。

第15号貯蔵穴　(Fig. 8－3)

東西径 115 cm，南北径 114 cmの円形プラン，深さ 103 cm，底面は長径98cm，短径90cmの円形で平坦である。埋土中に径40cm，深さ74cmの柱穴状のピットがある。埋土の堆積は上層より，第１層：茶褐色粘質土層，第２層：黄褐色砂質土層，第３層：黒褐色砂質土層，第４層：黄褐色粘質土層，第５層：茶褐色粘質土層，第６層：黒褐色土層，炭化物を多く含む。第７層：茶褐色粘質土層，第８層：壁の崩落土層，第９層：暗黒褐色粘質土層，第10層：黄褐色砂質土層，第11層：黄褐色砂質土層，第12層：黄色土層，第13層：黄褐色砂質土層，第14層：黄色砂質土層，第15層：黄褐色砂質土層，第16層：黄褐色粘質土層，第17層：黒褐色土層，第18層：黄色粘質土層，第19層：暗黒褐色粘質土層となっている。

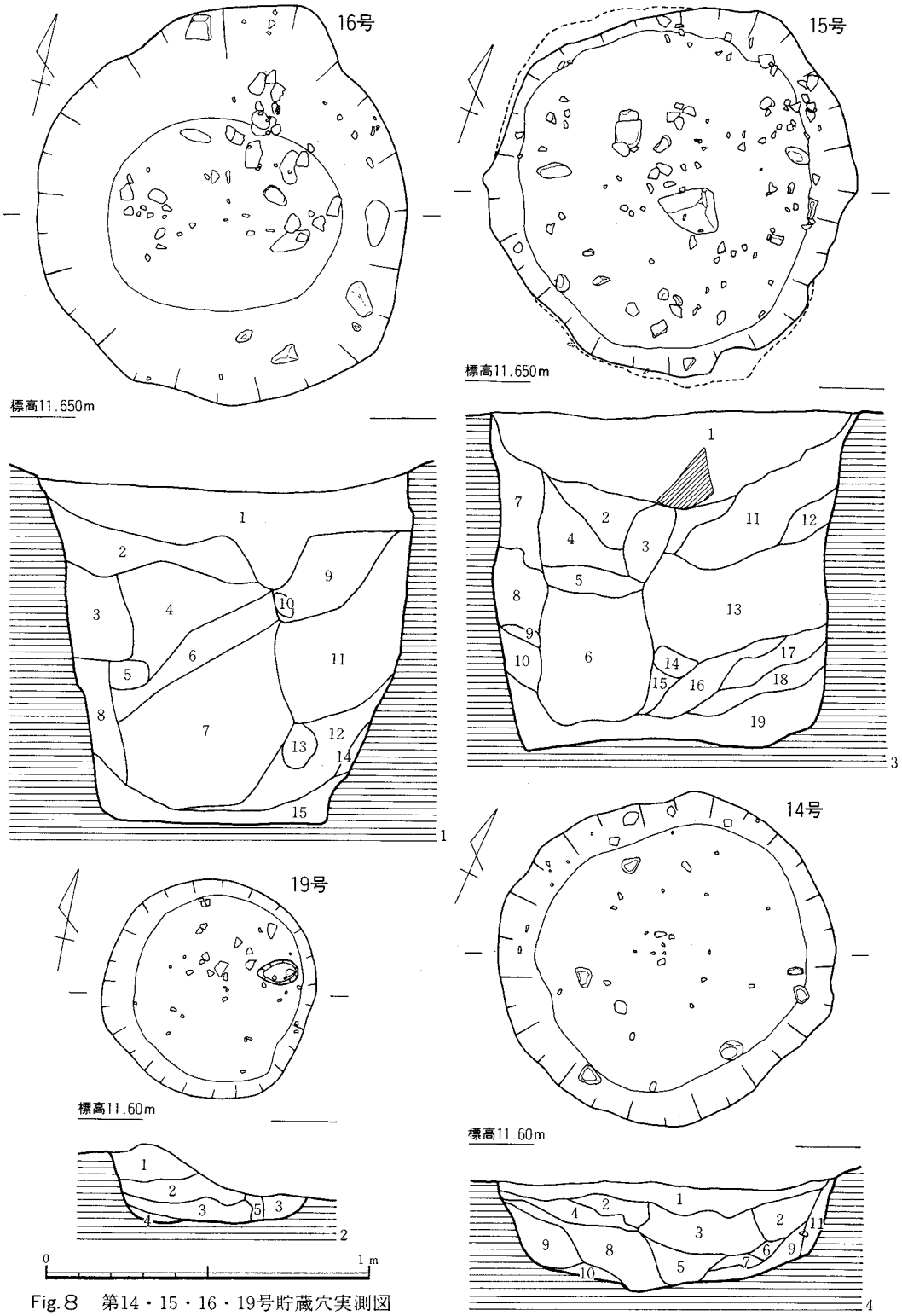


Fig.8　第14・15・16・19号貯蔵穴実測図

出土遺物は縄文式土器片79点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ26点がある。

第16号貯蔵穴　(Fig. 8－1)

長径 123 cm，短径 115 cmの円形プラン，深さ 108 cm，底面は平坦で長径72cm，短径60cmの楕円形をなす。埋土の堆積は上層より，第1層：黒褐色粘質土層，第2層：茶褐色土と黄色土の混在粘質土層，第3層：壁の崩落土層，第4層：明灰褐色土層，第5層：黄褐色土層で壁の崩落土か，第6層：暗灰褐色土層，第7層：黒灰褐色土層，第8層：黄色砂質土，壁の崩落土か，第9層：茶褐色と黄色の混在粘質土層，第10層：黄色粘質土層，第11層：黄褐色砂質土層，第12層：暗茶褐色粘質土層，第13層：黄色砂質土層，第14層：黄色砂質土層，第15層：暗黒褐色粘質土層，炭化物を多く含む，となっている。この中で第4～7層は土のしまりが悪くピット状の落ち込みであるが，平面的に把握していない。

出土遺物は縄文式土器片55点，石錘1点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ9点，石鏃1点がある。

第17・18号貯蔵穴

貯蔵穴№を付したが，調査した結果，貯蔵穴ではなく不明のピットあるいはしみであったものである。

第19号貯蔵穴　(Fig. 8－2)

長径68cmの円形プラン，深さ21cm，底面は平坦で58cm×52cmの円形。埋土の堆積は上より，第1層：暗褐色粘質土層，第2層：黄褐色砂質土層，第3層：暗褐色粘質土層，第4層：褐色粘質土層，第5層は昆虫による攪乱，となっている。

出土遺物は縄文式土器片22点，石鏃1点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ4点である。

第20号貯蔵穴　(Fig. 9－3)

径98cm×97cmの円形プラン，深さ98cm，底面はほぼ平坦で径83cm×86cmの円形をなす。壁は垂直に近い。埋土の堆積は上から，第1層：暗褐色粘質土層，第2層：暗褐色粘質土層で炭化物を多く含む。第3層：やゝ粘質の強い暗褐色粘質土層，第4層：暗茶褐色土層，炭化物が多く軟い。第5層：暗褐色粘質土層，第6層：暗褐色土層，第7層：暗茶褐色土層で多量の炭化物を含む。第8層：黄褐色土層，第9層：黄茶褐色土層，第10層：茶褐色粘質土層，第11層：灰褐色粘質土層，第12層：黄褐色土層，壁の崩落土，第13層：灰褐色粘質土層となっている。第3，4層は柱穴状の掘り込みで径38cm，深さ62cmをはかる。

出土遺物は縄文式土器片 105 点，石鏃1点，磨石1点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイクチップ14点である。

第21号貯蔵穴　(Fig. 9－1)

長径96cm，短径90cmの円形プラン。深さ93cm，底面は平坦で径70cmの円形。埋土の堆積は上

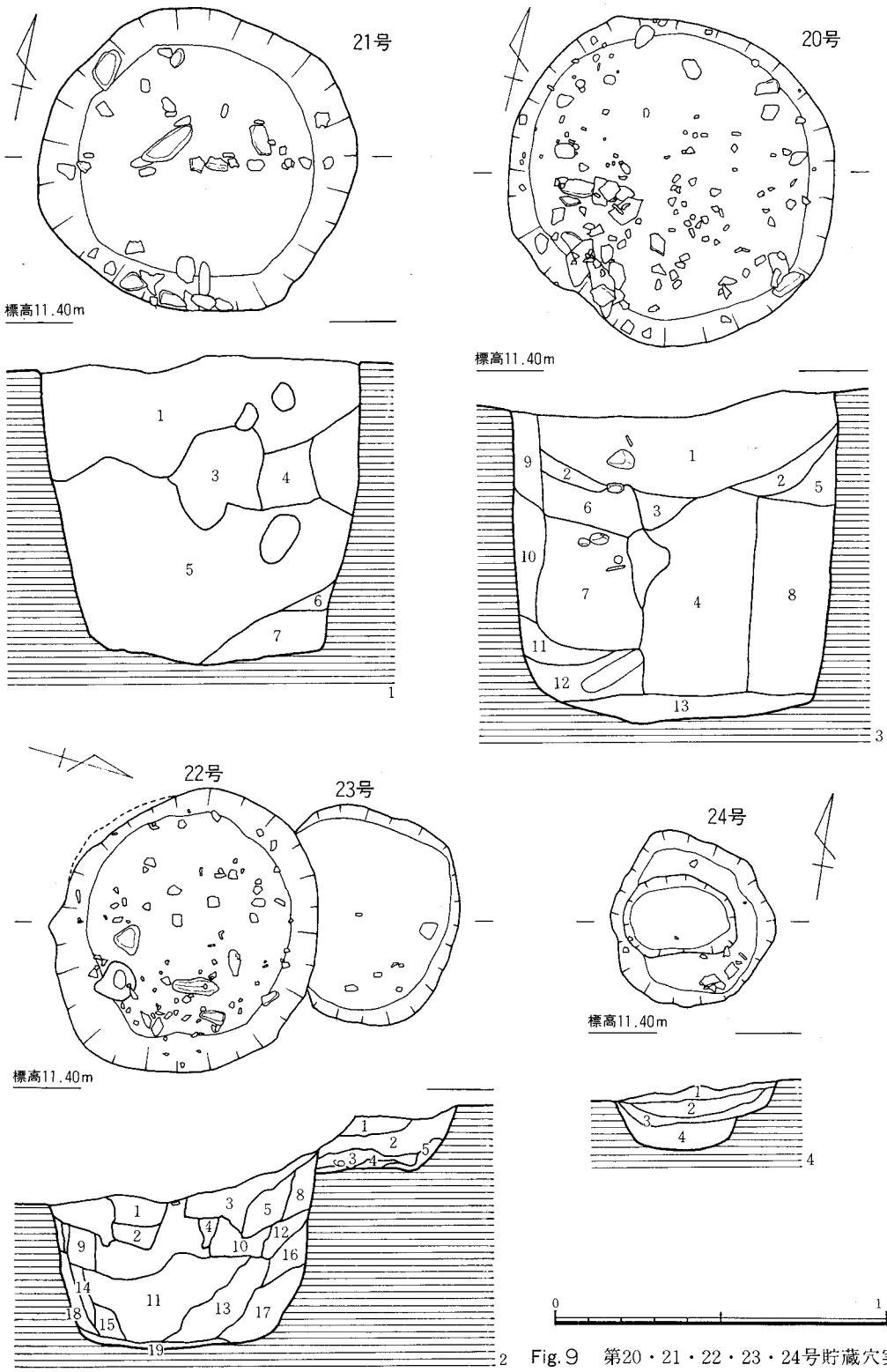


Fig.9　第20・21・22・23・24号貯蔵穴実測図

より，第１層：暗褐色粘質土層，第２層：地山の崩落土を含む暗褐色粘質土層，第３層：黄色土がブロック状に混在する暗褐色粘質土層，第４層：暗褐色土のブロック，第５層：暗褐色土層で炭化物を含む，第６層：壁の崩落土層，第７層：黒褐色粘質土層となっている。

出土遺物は縄文式土器片18点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ５点である。

第22号貯蔵穴　(Fig. 9－2)

第23号貯蔵穴と重複関係にあり，一部切られている。径65cm前後の円形プランになると考えられる。深さ18cm，底面は平坦で57cm×40cm＋α。埋土の堆積は上より，第１層：暗褐色土層，第２層：暗黄褐色土層，第３層：暗黄褐色粘質土層，第４層：暗褐色粘質土層，第５層：暗黄褐色土層，第６層：黄褐色砂質土層となっている。

出土遺物は縄文式土器片４点のみである。

第23号貯蔵穴　(Fig. 9－2)

第22号貯蔵穴より新しく，22号貯蔵穴を切っている。長径90cm，短径80cmの円形プラン。深さ57cm，底面は平坦で70cm×60cmの円形。埋土の堆積は上より，第１層：茶褐色粘質土層，第２層：黒色粘質土層，第３層：黄褐色土層，第４層：黄褐色粘質土層，第５層：黄褐色砂質土層，第６層：黒褐色粘質土層，第７層：暗黄褐色粘質土層，第８層：暗褐色土層，第９層：黄褐色砂質土層，壁の崩落土，第10層：暗褐色粘質土層，第11層：暗褐色粘質土層。この層の下面に斜に40cm×20cmの範囲で炭化した樹皮と考えられるものを検出した。第12層：暗黄褐色粘質土層，第13層：暗黄褐色粘質土層，炭を含む。第14層：暗黄褐色粘質土層，第15層：暗黄褐色粘質土層，第16層：暗黄褐色粘質土層，第17層：暗褐色粘質土層，炭，砂を含む。第18層：暗褐色土層，第19層：黒褐色粘質土層となっている。

出土遺物は縄文式土器片74点，石鏃，スクレイパー，砥石各１点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ19点である。

第24号貯蔵穴　(Fig. 9－4)

52cm×50cmの円形プランで深さ20cm，二段掘りになっていて，二段目の掘り込みは35cm×24cmの楕円形をなす。埋土の堆積は上より，第１層：暗褐色土層，第２層：褐色土層，第３層：黄褐色土層，第４層：黄褐色砂質土層となっている。

出土遺物は縄文式土器片７点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ４点である。

第25号貯蔵穴　(Fig.10－4)

径62cmの円形プラン。深さ85cm，底面はやゝ凹凸がある。47cm×42cmの円形をなす。貯蔵穴内には遺構確認時から柱穴状の掘り込みを認めた。柱穴状のピットは上面で径22cm，下にいくに従い径をまし，下径で径36cm，深さ80cmである。埋土の第１～４層がこれにあたる。埋土の堆積は上より，第１層：茶褐色粘質土層，第２層：黒褐色土層，第３層：茶褐色粘質土層，第４層：黒褐色土層で以上の層はしまりがなく軟かい。第５層：暗褐色粘質土層，第６層：黄褐

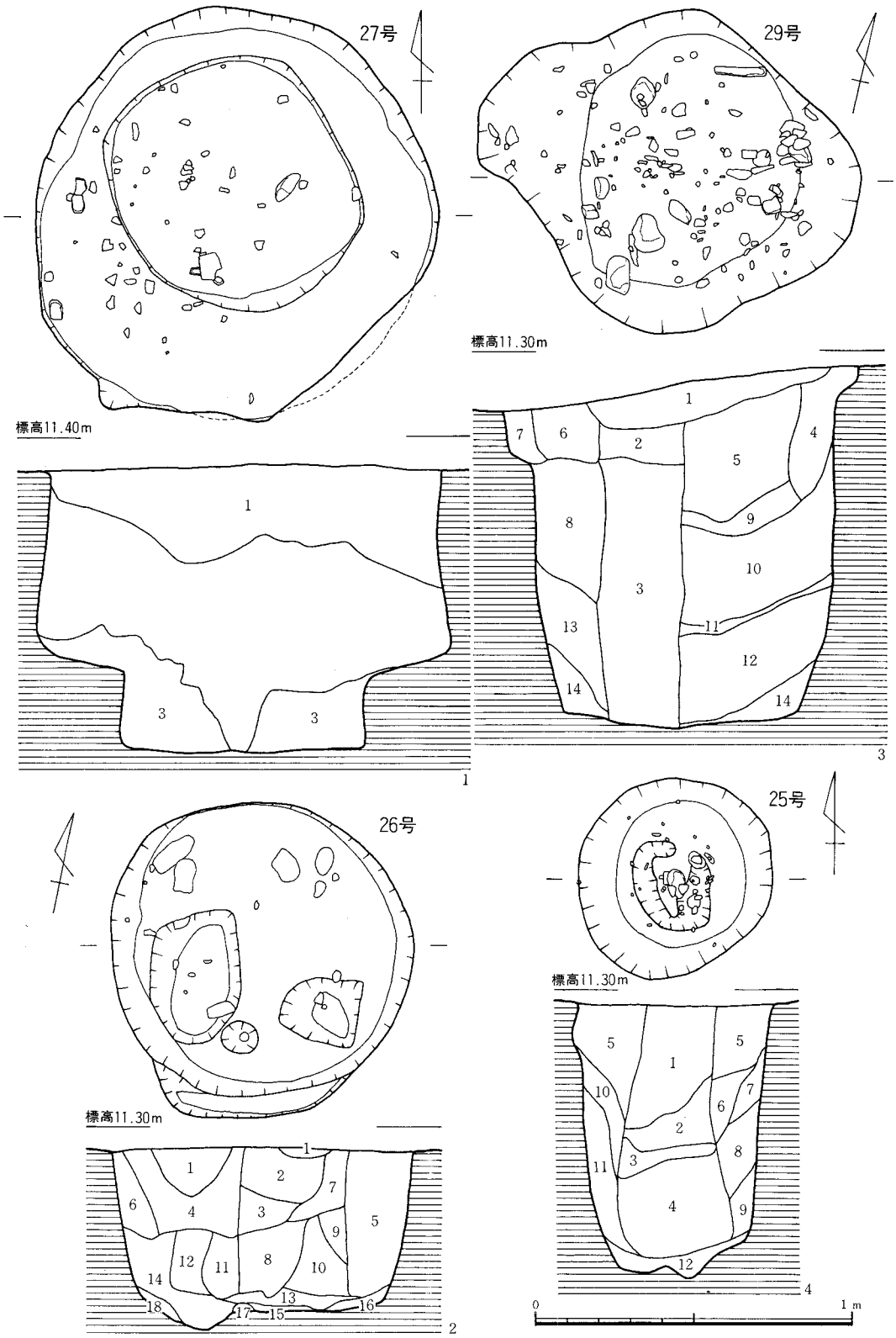


Fig.10　第25・26・27・29号貯蔵穴実測図

色粘質土層，第７層：黄茶褐色粘質土層，第８層：暗黄褐色粘質土層，第９層：茶褐色粘質土層，第10層：黒茶褐色粘質土層，第11層：黄褐色粘質土層，第12層：灰褐色粘質土層で地山直上に炭化物が２～３cmの厚さで層をなしている。

出土遺物は縄文式土器片37点，黒曜石のフレイク，チップ４点である。

第26号貯蔵穴　(Fig.10－２)

96cm×92cmの円形プラン，深さ58cm，底面は87cm×82cmの円形で，３個のピットが掘り込まれる。ピットは底面南側に集中している。大きさはそれぞれ41cm×29cm，25cm×20cmの楕円形と径11cmの円形で深さ５cm程度で周囲に炭化物が集中している。埋土の堆積は複雑である。上層より，第１層：暗茶褐色粘質土層，第２層，明茶褐色粘質土層，第３層：暗灰褐色土と明黄褐色土の混在層，第４層：暗灰黒褐色土と黄褐色土の混在した粘質土層，第５層：明黄褐色粘質土層，第６層：明灰褐色粘質土層，第７層は第４層と同一層，第８層：暗黄褐色粘質土層，第９層：黄灰色砂質土層，第10層：明灰褐色粘質土層，第11層：黒灰褐色粘質土層，第12層：炭化物の混入する暗灰黒褐色土層，第13層：明灰褐色粘質土層，第14層：暗灰褐色粘質土層，第15層：明灰褐色粘質土層，第16層：黄灰褐色粘質土層，第17層：黄色砂質土ブロック，第18層：明灰褐色粘質土層となっている。

出土遺物は縄文式土器片11点，黒曜石，古銅輝石安山岩のチップ５点である。

第27号貯蔵穴　(Fig.10－１)

130cm×128cmの円形プランをなす。二段掘りの構造で，一段目底面は125cmの円形で一部袋状になる部分がある。深さ60cm～65cm。二段目は80cm×73cmの円形で深さ22cmをはかる。埋土の堆積は単純で，上より第１層：暗褐色粘質土層，第２層：黄褐色粘質土層，第３層：黒褐色粘質土層となっている。

出土遺物は縄文式土器片45点，石器，フレイク，チップ等23点である。

第28号貯蔵穴

調査の結果，貯蔵穴ではなく不明の掘り込みであった。

第29号貯蔵穴　(Fig.10－３)

長径122cm，短径104cmの楕円形プランをなす。一部張り出し部があるので重複も考えられるが，その痕跡は認めがたい。深さ110cm。底面は平坦で長径82cm，短径69cmの楕円形をなす。埋土中に柱穴状の掘り込みがあり，径27cm，深さ97cmで，第２，３層がそれにあたる。埋土の堆積は上より，第１層：黒褐色粘土層，第２層：茶褐色粘質土層，第３層：茶褐色土層，炭化物を含む。第４層：黒褐色粘質土層，第５層：黄灰色砂質土層，第６層：淡黄色砂質土層，第７層：黒褐色粘質土層，第８層：淡黄色砂質土層，第９層：淡茶褐色砂層，炭を多量に含む。第10層：黄褐色粘土層，第11層：茶褐色粘質土層，第12層：黄褐色粘土層，第13層：黄色粘土層，第14層：炭化物を含む茶褐色粘土層となっている。

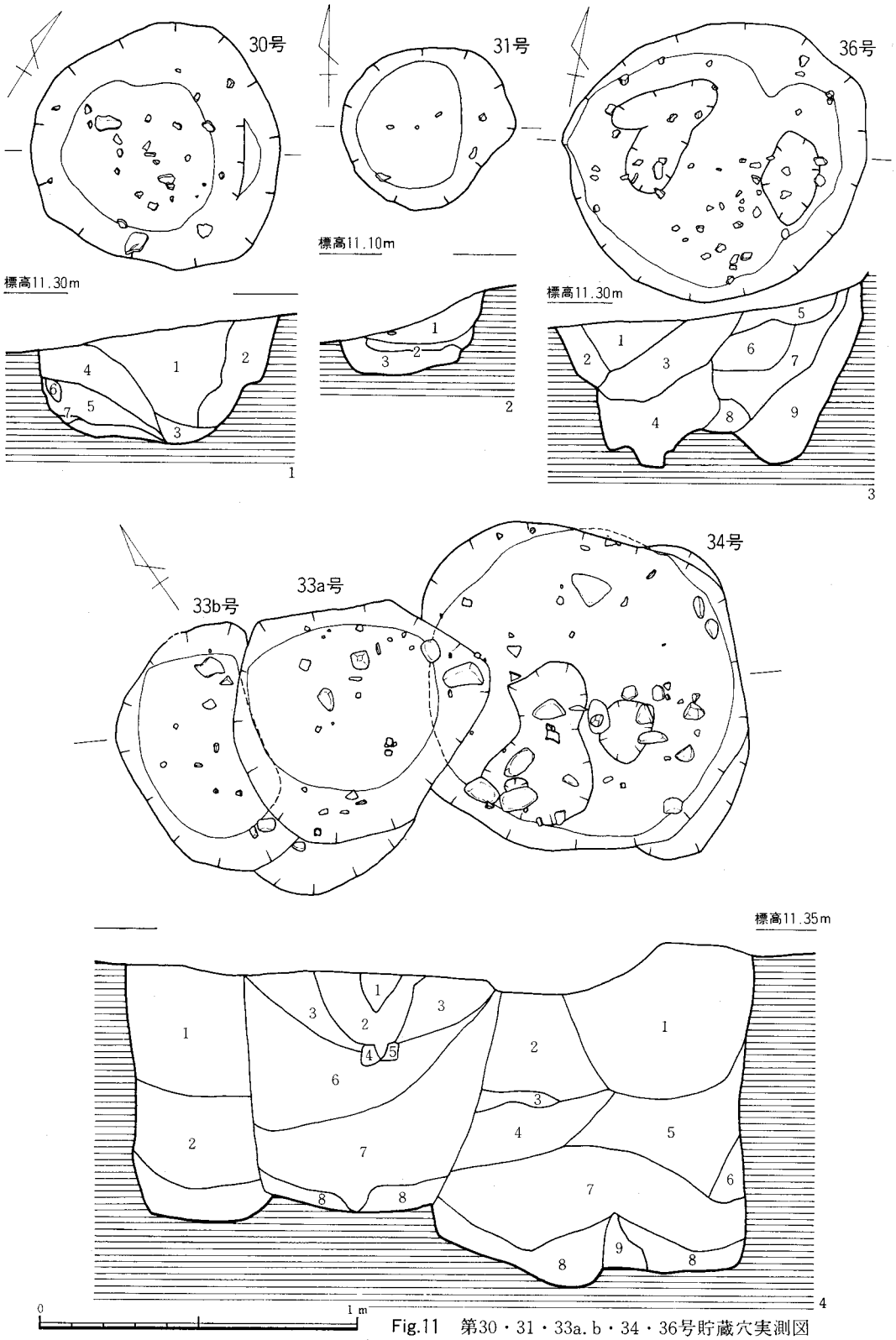


Fig.11　第30・31・33a.b・34・36号貯蔵穴実測図

出土遺物は縄文式土器片67点，磨石２点，スクレイパー１点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ21点である。

第30号貯蔵穴　(Fig.11－１)

79cm×77cmの円形プラン。深さ40cm，底面は平坦で49cm×45cmの円形。埋土の堆積は上から第１層：茶褐色粘質土層，第２層：黄褐色粘質土層，第３層：黒褐色粘質土層，第４層：茶褐色粘質土層，第５層：茶褐色粘質土層で介在物が多い。第６層：黄褐色粘質土のブロック，第７層：黄褐色粘質土層，第８層：黒褐色粘質土層となっている。

出土遺物は縄文式土器片17点，石鏃２点，黒曜石のフレイク，チップ３点である。

第31号貯蔵穴　(Fig.11－２)

55cm×51cmの円形プラン。深さ28cm，底面は平坦で40cm×33cmの楕円形をなす。埋土の堆積は上から，第１層：暗褐色粘質土層，第２層：黄褐色粘質土層，第３層：黒褐色粘質土層となっている。

出土遺物は，縄文式土器片15点，黒曜石のフレイク，チップ３点である。

第32号貯蔵穴　(Fig.12，13)

数基の貯蔵穴が重複し，その関係を明らかにすることは極めて困難であったが，少くとも４～５基の貯蔵穴の重複である。

32ａ貯蔵穴はもっとも新しく，32ａ′号貯蔵穴の埋土中に掘り込まれたものである。95cm×90cmの不整円形プランをなし，深さ76cm。壁は垂直に近く，一部袋状をなす部分がある。底面は平坦で径79cmの円形をなす。埋土の堆積は上より，第１層：茶褐色土層，第２層：暗茶褐色土層，第３層：淡茶褐色土層となっている。

出土遺物は縄文式土器片75点，石鏃４点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ37点である。

32ａ′号貯蔵穴は径150 cmの円形プランで，深さ170 cm。底面は径120 cmの円形をなすが，平坦でなく中心部にむかってゆるやかに深くなる。埋土中に径30cmの柱穴状の掘り込みが認められる。埋土の堆積は上から，第１層：暗褐色土層で軟い。柱穴状の掘り込みを埋める。第２層：暗茶褐色土層，第３層：暗茶褐色土層，黄白色の粘土ブロックを含む。第４層：暗褐色土層，第５層：黒褐色土層，第６層：暗黄褐色土層，第７層：暗黄褐色土層，黄白色粘土を含む。第８層：黒褐色土層，第９層：暗黄褐色土層，第10層：暗茶褐色土層，第11層：茶褐色土層，第12層：暗茶褐色土層，第13層：茶褐色土層，第14層：黒褐色土層，第15層：暗褐色土層，第16層：黄白色粘土層，第17層：黒褐色土層，第18層：黄褐色粘土層，第19層：黒褐色土層となっている。

出土遺物は縄文式土器片61点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ16点である。

32ｂ号貯蔵穴は径300 cmの円形プランで，深さ110 cmで底面は平坦である。数基の貯蔵穴の切

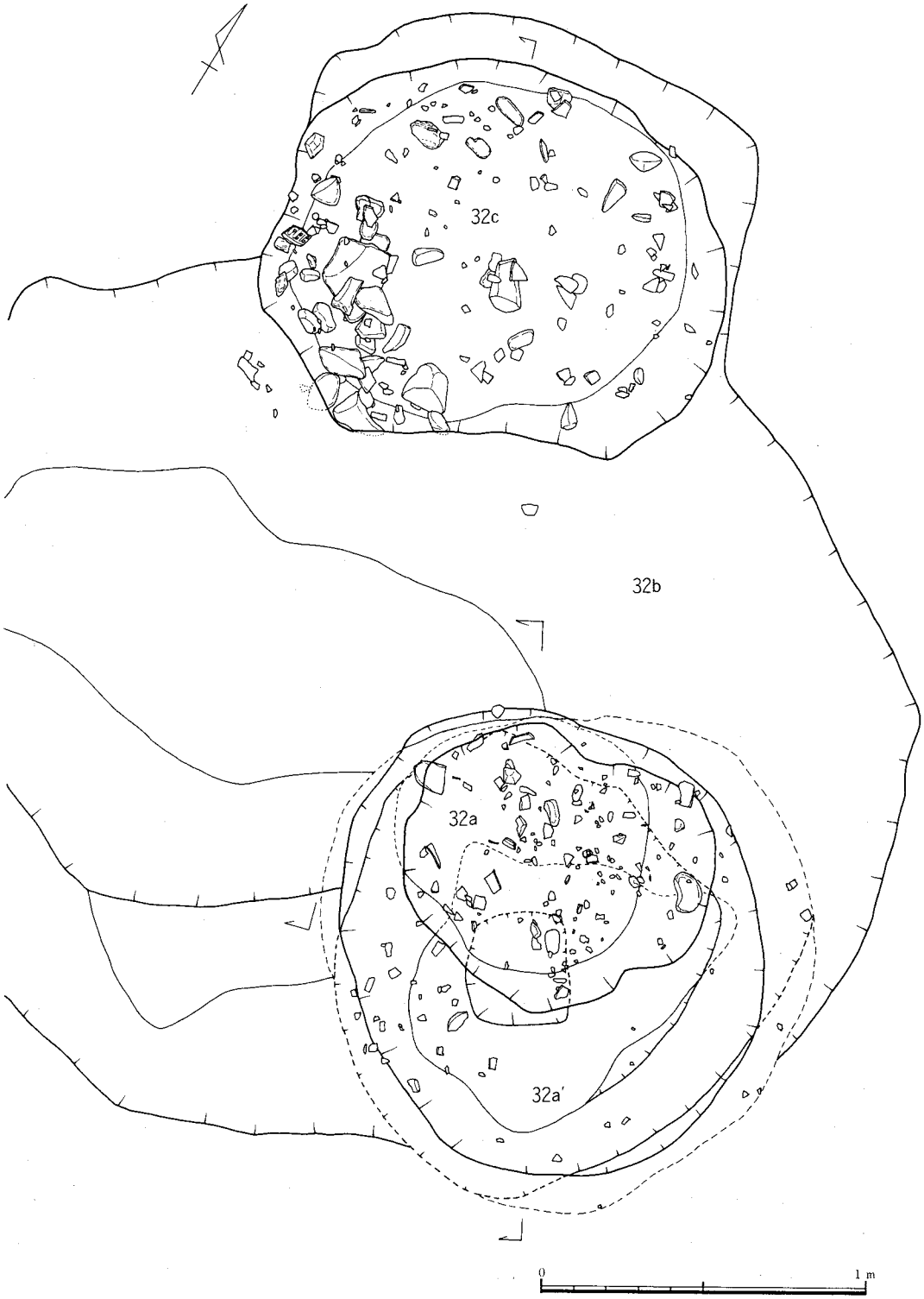


Fig.12　第32号貯蔵穴実測図 1

り合いと考えるが明確にできなかった。埋土の堆積は上から，第1層：黒褐色粘質土層，第2層：黄褐色粘質土層，第3層：暗褐色粘質土層，第4層：暗茶褐色粘質土層，第5層：黒褐色粘質土層，第6層：黄褐色粘質土層，第7層：灰褐色粘質土層となっている。部分的には人為的に埋められたところもある。

出土遺物は少なく若干の縄文式土器とフレイク，チップがあるのみである。

32c号貯蔵穴は長径140cm，短径115cmの楕円形プランで壁は垂直ないし袋状になる。底面は132cm×108cmの楕円形で平坦である。埋土の堆積は上から，第1層：茶褐色粘質土層，第2層：暗茶褐色粘質土層，第3層：暗褐色粘質土層，第4層：暗黄褐色粘質土層，第5層：黒褐色粘質土層，第6層：八女粘土層ブロック，第7層：茶褐色粘質土層，第8層：茶褐色砂質土層，第9層：暗茶褐色粘質土層，第10層：暗茶褐色粘質土層，第11層：黒褐色粘質土層，第12層：暗黄褐色砂質土層，第13層：黒褐色粘質土層，第14層：黄褐色粘質土層，第15層：暗黄褐色泥土層，第16層：暗黄褐色砂質土層，第17層：暗褐色砂質土層，第18層：褐色粘土層，第19層：黒褐色粘質土層となっている。

出土遺物は縄文式土器片107点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ19点である。

第33a号貯蔵穴　(Fig.11－4)

33b，34号貯蔵穴と重複関係にあり，両者を切っていて最も新しい。長軸83cm，短軸73cmの不整形プランである。底面は平坦で長径60cm，短径52cmの楕円形。埋土の堆積は上より，第1層：黒褐色粘質土層，第2層：暗褐色粘質土層，第3層：褐色粘質土層，第4層：黒色粘質土層ブロック，第5層：黄褐色砂質土ブロック，第6層：暗黄褐色粘質土層，第7層：暗褐色粘質土層，第8層：黄褐色粘質土層となっている。

出土遺物は，縄文式土器片18点，黒曜石チップ3点である。

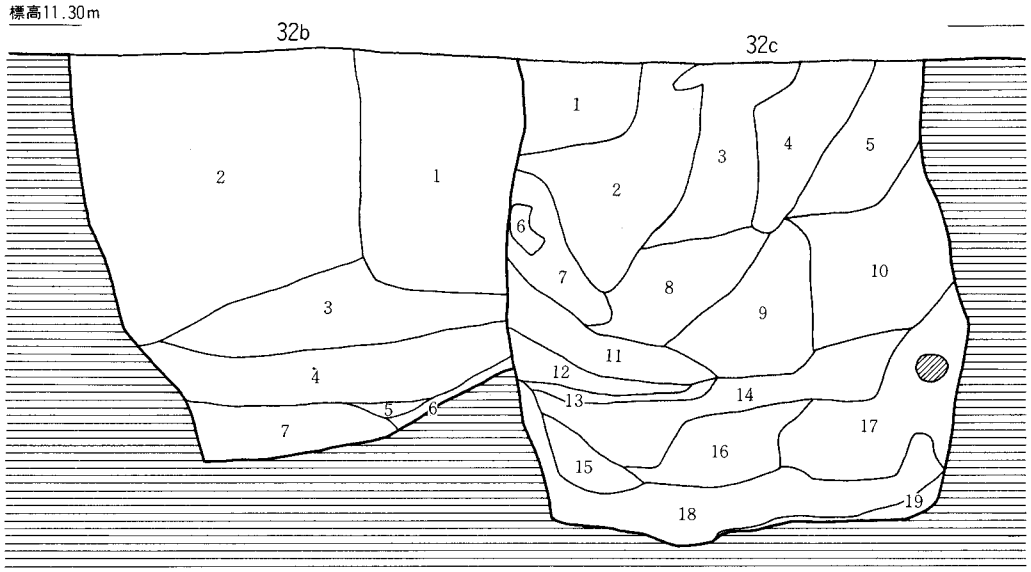
第33b号貯蔵穴　(Fig.11－4)

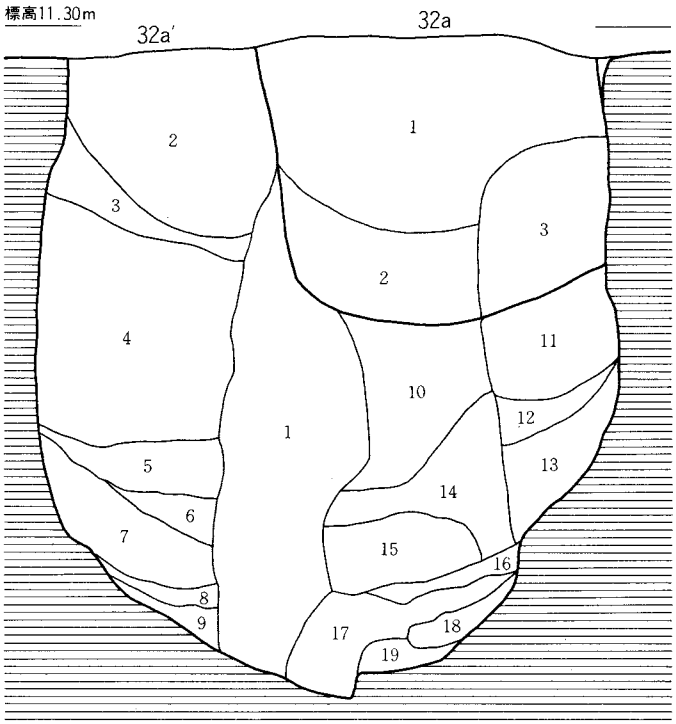
33a号貯蔵穴と重複関係があり，33a号貯蔵穴より古い。長径79cm，短径60cmの楕円形プラン。深さ78cm，底面は長径58cm，短径37cmの楕円形で平坦である。埋土の堆積は上より，第1層：暗褐色粘質土層，第2層：暗褐色土層，第3層：黒色粘質土層となっている。

出土遺物は，縄文式土器片4点，黒曜石チップ1点がある。

第34号貯蔵穴　(Fig.11－4)

33a号貯蔵穴と重複関係があり，33a号貯蔵穴より古い。径102cmの円形プランで，深さ104cm，底面は98cm×95cmの円形で平坦であるが，南に片寄ってピット2個がある。ピットは52cm×35cmのひさご形と径20cmの円形で，深さ5cm前後，埋土中には北に片寄って径30cmの柱穴状の掘り込みがある。埋土の堆積は上より，第1層：暗褐色粘質土層，第2層：黒褐色粘質土層，第3層：黄褐色砂質土ブロック，第4層：暗黄褐色粘質土層，第5層：暗褐色粘質土層，第6層：黄褐色砂質土層，第7層：暗褐色粘質土層，第8層：黒色粘質土層，第9層：黄褐色砂質土





0 1 m

Fig.13　第32号貯蔵穴実測図 2

ブロックとなっている。

出土遺物は縄文式土器片19点，石鏃２点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ13点，石皿１点がある。

第35号貯蔵穴　(Fig.14)

長径 140 cm，短径 110 cmの楕円形プランであるが，北側に20cm×50cmの張り出し部があり，２基の貯蔵穴の重複が考えられるが確認できなかった。深さ 129 cm，底面は平坦であるが，やや北に片寄って径50cmの皿状の浅いピットがある。埋土の堆積は上から，第１層：暗褐色粘質土層，第２層：暗褐色粘土層，第３層：茶褐色粘質土層，第４層：黄褐色粘質土層，第５層：暗黄褐色粘質土層，第６層：暗褐色粘質土層，第７層：黄褐色粘質土層，第８層：黄褐色粘質土層で炭を含む。第９層：暗褐色粘質土層，第10層：黄褐色砂質土層となっている。

出土遺物は縄文式土器片66点，石鏃２点，石錐１点，石槍？１点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ20点がある。

第36号貯蔵穴　(Fig.11－３)

95cm×83cmの楕円形プランをなす。深さ45～50cmで，底面に２カ所の凹みがある。平面形，土層堆積，底面の状態から２基の重複した貯蔵穴とみることができる。埋土の堆積は上から，第１層：黒褐色粘質土層，第２層：暗褐色粘質土層（黄褐色土層が混在），第３層：暗褐色粘質土層，第４層：褐色粘質土層，第５層：黒褐色粘質土層，第６層：黄褐色粘質土層，第７層：暗黄褐色粘質土層，第８層：黄褐色粘質土のブロック，第９層：暗黄褐色粘質土層となっている。

出土遺物は縄文式土器片26点，石鏃，石錐各１点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ19点である。

第37号貯蔵穴　(Fig.15－３)

２基の貯蔵穴が重複している。新しい方を37a，古い方を37bとする。37a号貯蔵穴は37b貯蔵穴が完全に埋った後に掘り込まれたものである。径 108 cmの円形プランをなすが，一部確認できなかった。深さ65cm，底面は平坦で径95cmの円形である。東端の埋土中径30cmの柱穴状の掘り込みがある。埋土の堆積は上から，第１層：黒褐色土層，第２層：暗黄褐色土層，第３層：暗茶褐色土層，第４層：壁の崩落土層となっている。

37ｂ号貯蔵穴は 140 cm× 130 cmの円形プランで深さ 165 cm。底面はほぼ平坦で径 105 cmの不整円形をなす。埋土の堆積は上から，第５層：暗黄褐色土層，第６層：茶褐色土層，第７層：褐色土層，第８層：淡茶褐色土層，第９層：暗褐色土層，第10層：茶褐色土層，第11層：暗茶褐色土層，第12層：黒褐色土層，第13層：黒褐色土層となっている。第７～９層は柱穴状の掘り込みになるかもしれない。

出土遺物は37a，37b号貯蔵穴の識別は発掘途中において確認したため一括している。

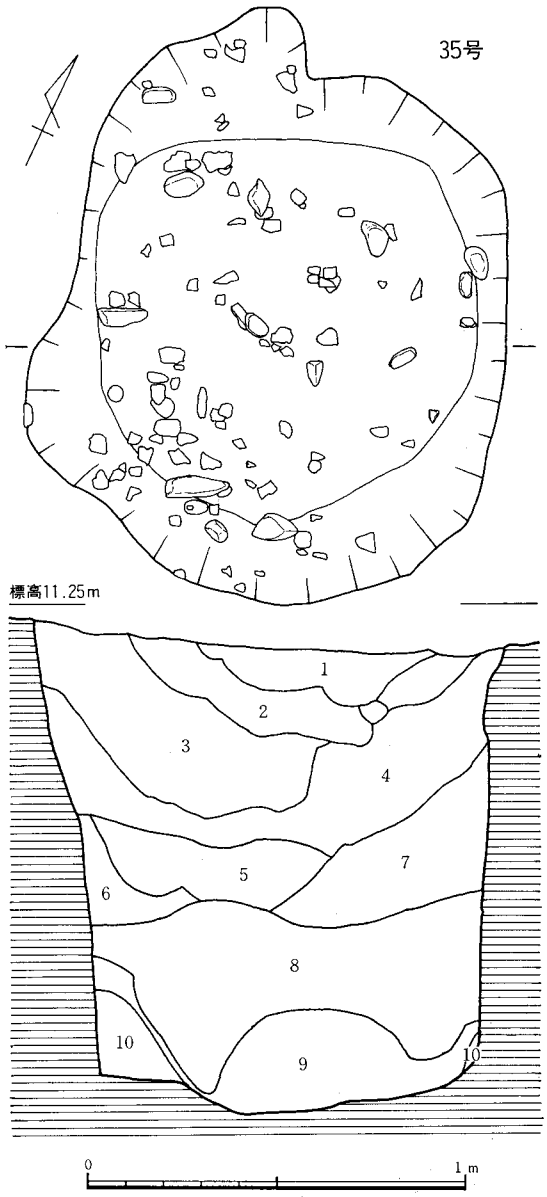


Fig.14　第35号貯蔵穴実測図

縄文式土器片115点，石鏃6点，削器2点，石匙1点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ19点である。

第38号貯蔵穴　(Fig.15－1)

長径72cm，短径58cmの楕円形プランをなす。深さ71cm。底面は平坦でなく凹凸がある。埋土に径20cm前後と径15cmの2個の柱穴状の掘り込みがある。埋土の堆積は上から，第1層：明茶褐色粘質土層，第2層：黒褐色粘質土層，第3層：灰褐色粘質土層，第4層：暗茶褐色粘質土層，第5層：黄色砂質土層，第6層：灰褐色土層，第7層：灰褐色土が混入する黄色砂質土層，第8層：黒褐色粘質土層，第9層：茶褐色粘質土層，第10層：暗茶褐色粘質土層，第11層：灰褐色土層，第12層：炭化物のはいった黒褐色粘質土層，第13層：黄色粘質土層となっている。第1～4層が柱穴状掘り込みの埋土である。

出土遺物は縄文式土器片24点，石鏃1点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイクチップ11点である。

第39号貯蔵穴　(Fig.15－2)

長径105cm，短径98cmの楕円形プランをなす。北に片寄って二段に掘り込まれる。深さ98cm。底面はほぼ平坦であるが中央部に径33cmの浅い皿状のピットがある。埋土中にも径20cm前後の柱穴状の掘り込みがあり，底面のピットと一致する。埋土の堆積は上から，第1層：暗褐色土層，第2層：黄褐色混土砂層，第3層：黒褐色土層，第4層：黄褐色砂質土層，第5層：黒褐色土層，第6層：黄褐色土層となっている。

出土遺物は，縄文式土器片85点，石鏃2点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ58点である。

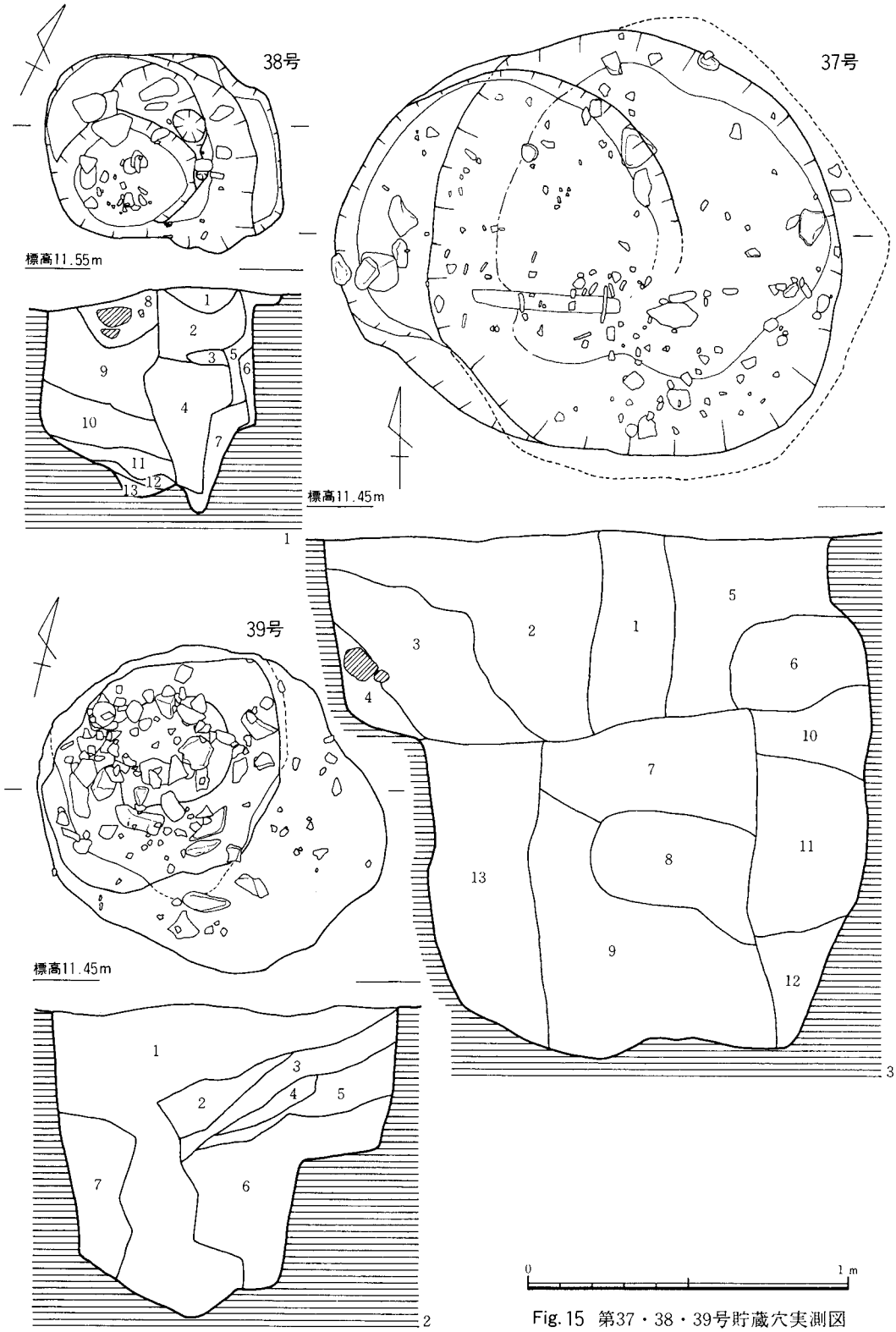


Fig. 15 第37・38・39号貯蔵穴実測図

第40号貯蔵穴　(Fig.16－1)

径138 cmの円形プランで，深さ102 cm。底面は平坦で100 cm×107 cmの円形である。埋土の堆積は上から，第1層：黄茶褐色土層，第2層：灰黄褐色土層，第3層：茶褐色粘質土層，第4層：暗茶褐色粘質土層，第5層：暗茶褐色粘質土層(炭化物を含む)，第6層：地山のブロック，第7層：茶褐色粘質土層，第8層：灰のブロック層，第9層：茶褐色土層，第10層：暗褐色土層，第11層：暗褐色粘質土層，第12層：黄褐色土層，第13層：黒褐色粘質土層，第14層：明黄褐色土層，第15層：黒褐色土層となっている。

出土遺物は縄文式土器片144点，石鏃1点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ27点である。

第41号貯蔵穴　(Fig.16－2)

115cm×111cmの円形プラン，深さ41cm。底面は平坦で92cm×86cmの円形である。埋土の堆積は上から，第1層：黒色粘土層，第2層：茶褐色粘質土層，第3層：暗黄褐色粘質土層，第4層：茶褐色粘質土層，第5層：黒褐色土層，第6層：茶褐色粘質土層，第7層：淡茶褐色粘質土層，第8層：淡黄色砂質土層，第9層：黄褐色砂質土層，第10層：黄色砂質土層となっている。

出土遺物は，縄文式土器片13点，磨製石斧1点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ9点である。

第42号貯蔵穴　(Fig.17)

第43号貯蔵穴と重複関係にあり，第43号貯蔵穴より古い。長径83＋α cm，短径75cmの楕円形プランをなす。壁は垂直に近く，一部袋状になる部分もある。底面は76cm＋α ×78cmの楕円形で平坦である。埋土の堆積は上から，第1層：黒褐色土層，第2層：黄褐色粘質土層，第3層：茶褐色粘質土層，第4層：淡褐色土層，第5層：暗褐色粘質土層，第6層：茶褐色粘質土層，第7層：淡黄褐色砂質土層，第8層：黄褐色砂質土層，第9層：黄褐色砂質土層，第10層：茶褐色粘質土層，第11層：淡茶褐色粘質土層，第12層：黄褐色砂質土層，第13層：暗褐色土層(炭化物を含む)，第14層：暗褐色土層，第15層：黄褐色砂質土層，第16層：茶褐色砂質土層，第17層：茶褐色粘質土層，第18層：黄褐色砂質土層，第19層：黒褐色土層(有機質を含む)，第20層：黄褐色粘質土層，第21層：暗黒褐色土層(炭化物を多量に含む)，第22層：暗茶褐色粘質土層，第23層：暗茶褐色土層となっている。

出土遺物は縄文式土器片43点，石鏃4点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ10点がある。

第43号貯蔵穴　(Fig.17)

第42号，第44号貯蔵穴と重複関係にあり，両者を切っていて3基の貯蔵穴の中では最も新しい。径105 cmの円形プランで，深さ140 cm。壁は垂直で，部分的に袋状になっている。底面は

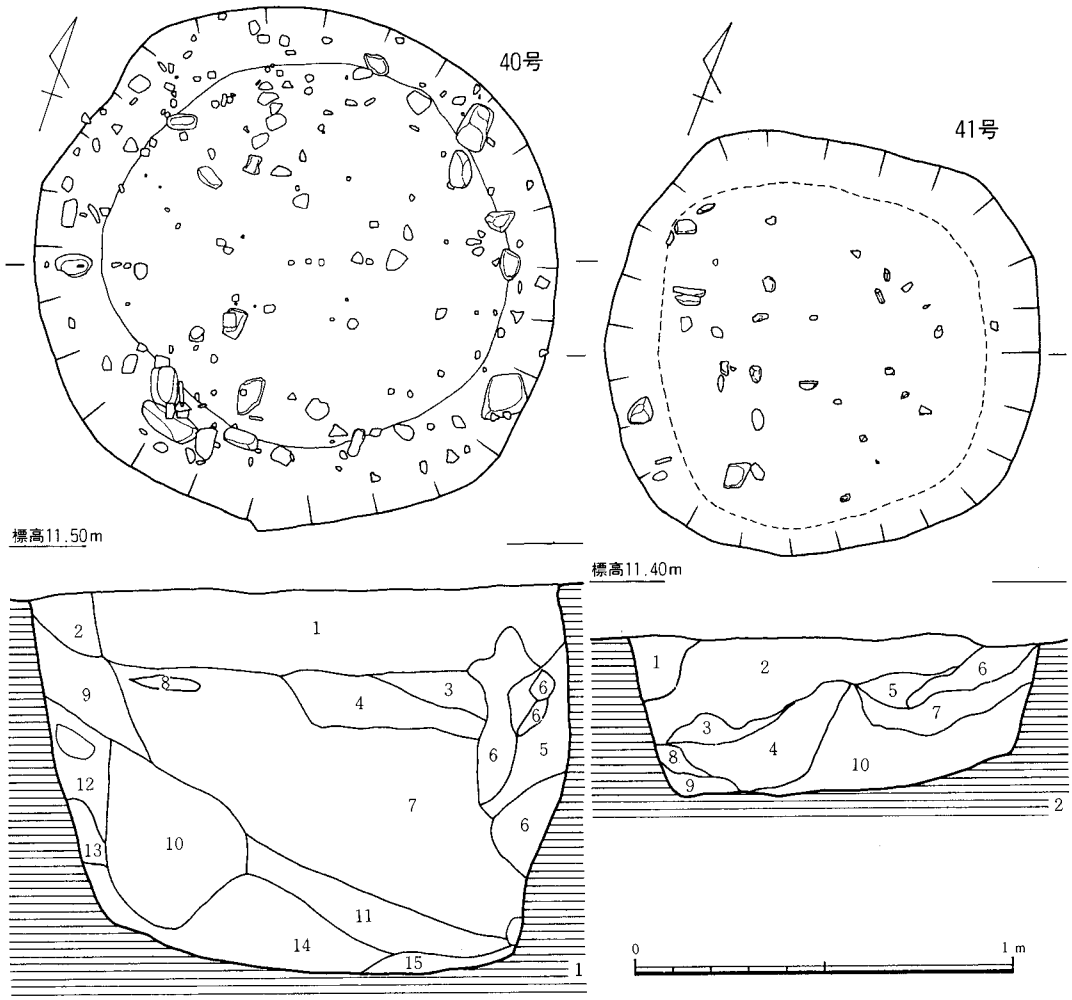


Fig.16　第40・41号貯蔵穴実測図

径95cmの円形で平坦である。底面の中央部と北壁に接しピットがある。中央部のピットは46cm×49cmの円形で深さ15cm。底は傾斜をもっている。中には炭化材がつまっていた。北側のピットは径28cmの円形で深さ15cmをはかる。また，床面に接して石皿２点が出土した。埋土の堆積は上から，第１層：黒褐色粘質土層，第２層：黄褐色粘質土層，第３層：第２層と同じであるが，より粘質が強い土層，第４層：茶褐色粘質土層(炭化物を含む)，第５層：黄褐砂質土ブロック，第６層：茶褐色粘質土層，第７層：黄褐色砂質土ブロック，第８層：暗茶褐色粘質土層(炭化物を含む)，第９層：黄褐色砂質土ブロック，第10層：暗褐色粘質土層(炭化物を含む)，

第11層：茶褐色粘質土層，第12層：暗茶褐色粘質土層，第13層：炭化物の層，第14層：暗茶色粘質土層，第15層：暗茶褐色粘質土層となっている。

出土遺物は，縄文式土器片168点，石皿2点，石鏃3点，石錐3点，掻器2点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ46点である。

第44号貯蔵穴　(Fig.18－1)

第43号貯蔵穴と重複関係にあり，第43号貯蔵穴によって切られている。径95cmの円形プランで深さ51cm前後。底面は平坦で80cm×65cmの楕円形をなす。埋土は自然の流れ込みによって埋った状態を示している。埋土の堆積は上から，第1層：黄褐色砂質土層，第2層：茶褐色砂質土層(炭化物を含む)，第3層：茶褐色粘質土層，第4層：淡茶褐色粘質土層，第5層：黒褐色粘質土層，第6層：黒褐色粘質土層，第7層：暗褐色砂質土層，第8層：暗褐色粘質土層，第9層：黄褐色粘質土層となっている。

出土遺物は，縄文式土器片55点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ29点である。

第45号貯蔵穴　(Fig.18－4)

長径100cm，短径86cmの楕円形プラン。深さ56cm。底面は80cm×75cmの不整円形で平坦である。底面のほぼ中央に径30cm，深さ10cmの浅い皿状のピットがある。また埋土中にも径30cm，深さ55cmの柱穴状の掘り込みがあり，位置的に底面のピットとほぼ一致している。埋土の堆積は上から，第1層：黒褐色粘質土層，第2層：明灰黄色粘質土層，第3層：暗灰黄褐色粘質土層，第4層：灰黒色粘質土層，第5層：黄褐色粘質土層と黄色砂質土の混合層，第6層：灰褐色粘質土層，第7層：白色粘質土まじりの黄色砂質土層，第8層：壁の崩落土層，第9層：灰褐色粘質土層，第10層：灰色土混じりの黄色砂質土層，第11層：壁の崩落土ブロック，第12層：黄褐色粘質土層，第13層：黄褐色粘質土層(炭化物を含む)，第14層：黄色砂質土層，第15層：明灰黄色砂質土層，第16層：明灰黄色粘質土層，第17層：灰黄色粘質土層となっている。

出土遺物は，縄文式土器片26点，石鏃1点，黒曜石のフレイク，チップ4点である。

第46号貯蔵穴　(Fig.18－2)

長径124cm，短径105cmの楕円形プラン，深さ110cmであるが東側で一段の段がつく。段の深さ50cm。底面は平坦で85cm×80cmの不整円形である。埋土の堆積は上から，第1層：灰白色土層で炭化物を混入する。第2層：黄褐色粘質土層，第3層：茶褐色粘質土層，第4層：茶褐色粘質土層(炭化物を含む)，第5層：黒褐色粘質土層，第6層：黄褐色粘質土層，第7層：茶褐色粘質土層，第8層：黄褐色粘質土層，第9層：黒褐色粘質土層，第10層：黄褐色粘質土層，第11層：茶褐色粘質土層となっている。埋土中には多くの円礫を含む。

出土遺物は，縄文式土器片45点，石錐(?)1点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ29点がある。

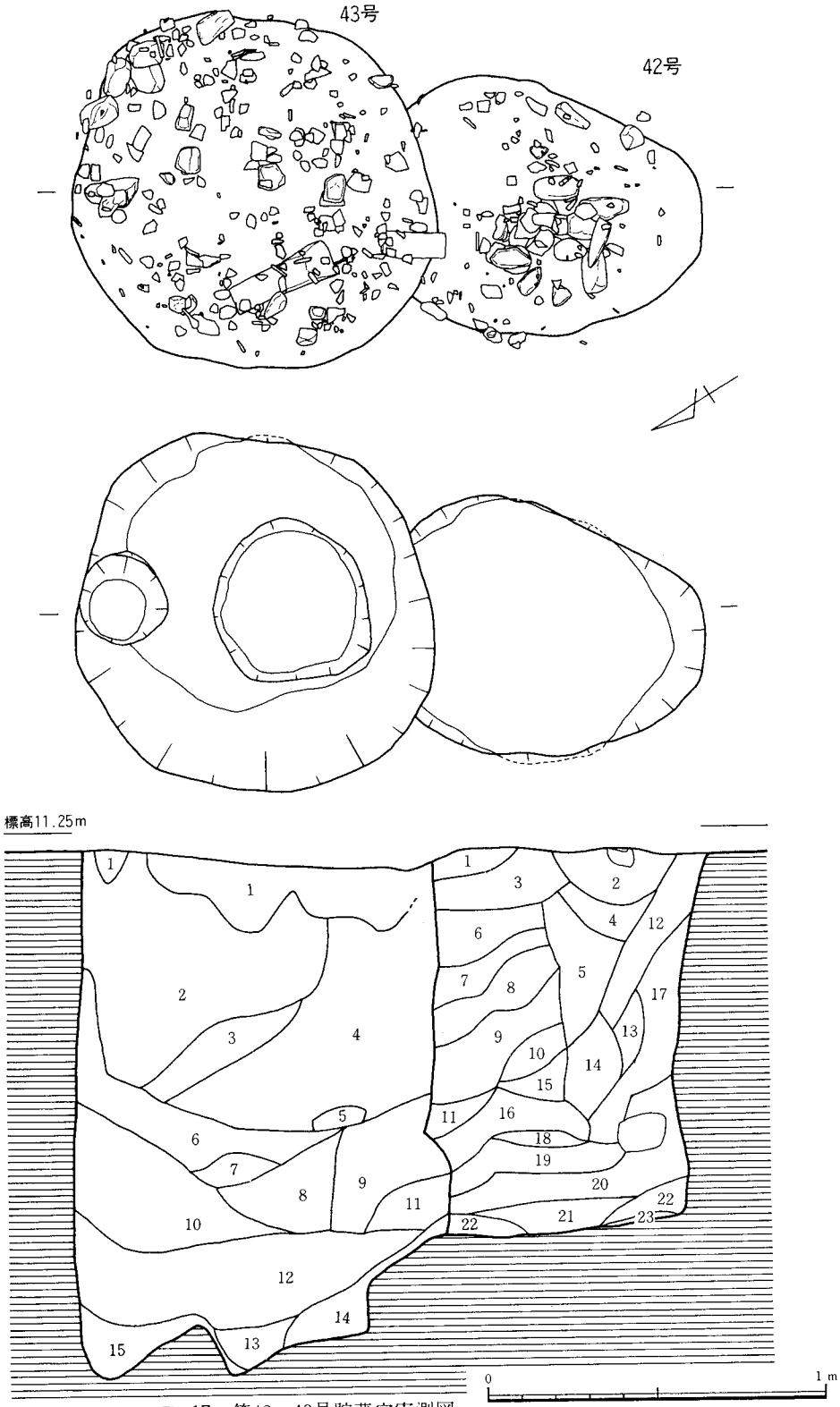


Fig.17　第42・43号貯蔵穴実測図

第47号貯蔵穴　(Fig.18―3)

長径143 cm，短径96cmの楕円形プランであるが西側にくびれがあり，2基の貯蔵穴の重複があるものと考えられるが，確認することはできなかった。深さ120 cm。底面は平坦で長径100 cm，短径90cmの楕円形である。

埋土の堆積はかなり複雑である。中央部に径20cm，深さ105 cmの柱穴状の掘り込みがあるが残存状態は良くない。第4～6層がそれにあたる。層位は上から，第1層：暗茶褐色土層，第2層：暗褐色土層，第3層：暗茶褐色土層，第4層：暗灰褐色土層，第5層：暗褐色土層，第6層：暗茶褐色土層，第7層：茶褐色粘質土層，第8層：明褐色土層，第9層：淡褐色粘質土層，第10層：淡褐色粘質土層，第11層：黒褐色粘質土層，第12層：褐色粘質土層，第13層：黒褐色粘質土層，第14層：明褐色土層，第15層：暗褐色粘質土層，第16層：褐色砂質土層，第17層：暗褐色粘質土層，第18層：暗褐色粘質土層，第19層：暗褐色粘質土層，第20層：暗茶褐色粘質土層，第21層：暗褐色粘質土層，第22層：暗茶色粘質土層，第23層：褐色粘質土層，第24層：暗茶褐色粘質土層，第25層：黒褐色粘質土層，第26層：暗褐色粘質土層，第27層：黒褐色粘質土層，第28層：暗茶色粘質土層，第29層：暗茶褐色粘質土層となっている。

出土遺物は，他の貯蔵穴と比較し量的に多い。縄文式土器片229点，石鏃6点，削器1点，掻器1点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ84点である。

第48号貯蔵穴　(Fig.19―1)

肩部が崩壊し，部分的にひろがっているところがあるが，もともとは径130～136cmの円形プラン，深さ143 cmの大型の貯蔵穴である。底面は平坦で径120～128cmの円形，壁は垂直に近く一部袋状になる部分がある。底面に2カ所ピットがある。壁に接するものは径35cm，深さ約10 cm，中央部のピットは30cm×15cmの楕円形で深さ5 cmの皿状のピットである。また，埋土中にも径50cm，深さ90cmの柱穴状の掘り込みが認められる。

埋土の堆積は上から，第1層：暗褐色土層，第2層：黄褐色砂質土層，固くしまっていない。第3層：褐色粘質土層，第4層：黄褐色土層，第5層：暗褐色粘質土層，第6層：黄褐色土層，第7層：暗黄褐色土層，第8層：暗褐色粘質土層(炭化物を含む)，第9層：黄褐色土のブロック，第10層：淡黒褐色粘質土層，第11層：黄白色ロームブロック，第12層：黒褐色粘質土層，第13層：淡黒褐色粘質土層，第14層：黒褐色粘質土ブロック，第15層：黄白色ロームブロックとなっている。

出土遺物は，縄文式土器片157点，磨製石斧1点，石鏃6点，削器2点，剥片石器1点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ29点である。

第49号貯蔵穴　(Fig.19―3)

長軸105 cm，短軸77cmの隅丸長方形プランをなす。深さ26cm，底面は平坦で80cm×65cmの不整形をなす。底面中央部に29cm×22cmのピットがある。ピットの深さ40cm。

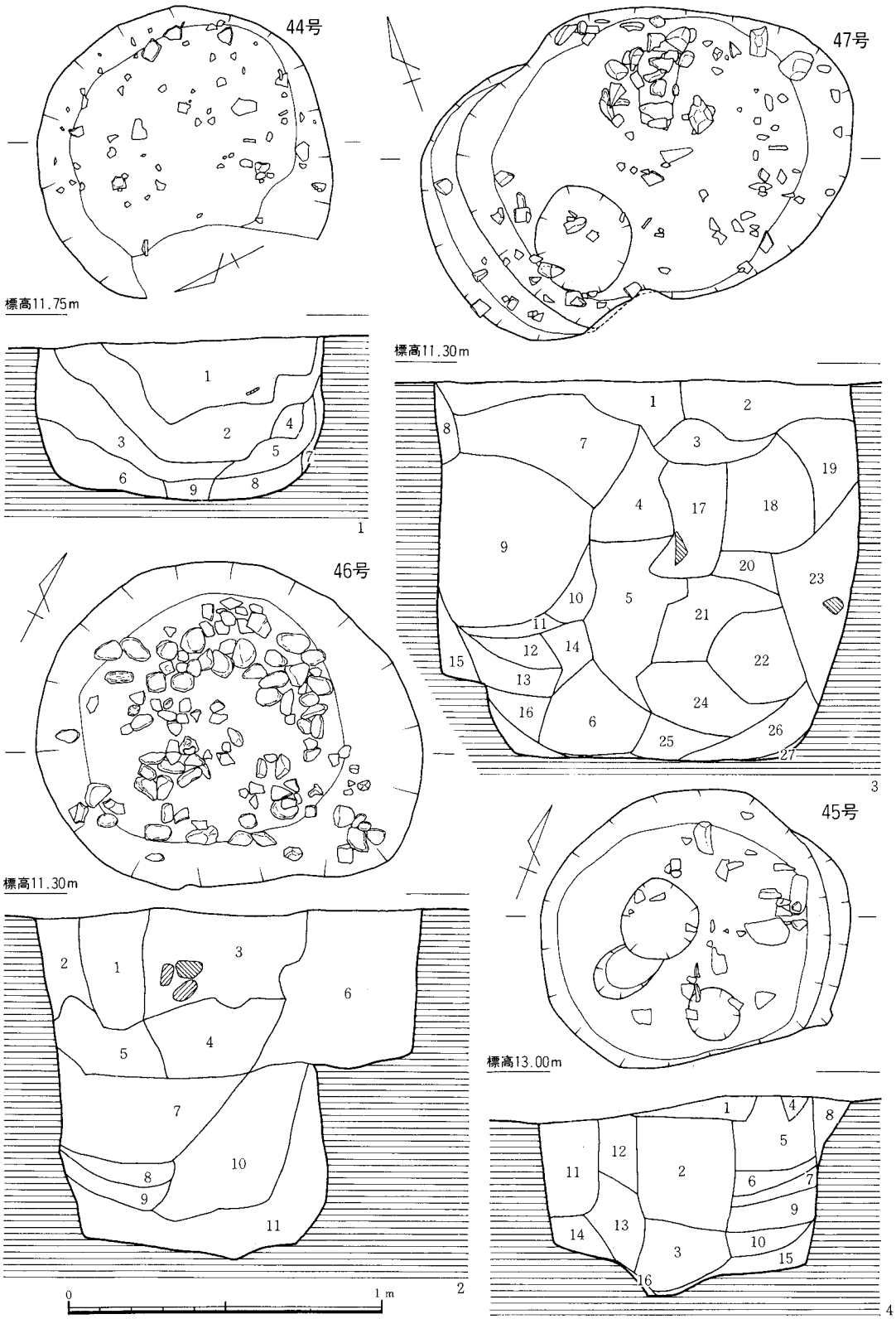


Fig.18　第44・45・46・47号貯蔵穴実測図

埋土の堆積は上から，第１層：黒褐色粘質土層，第２層：暗茶褐色土層，第３層：茶褐色土層となっている。

出土遺物は黒曜石のフレイク１点のみである。

ここでは一応貯蔵穴としておくが，他とは構造的に異なり，違う用途が考えられる。

第50号貯蔵穴　(Fig.19－２)

80cm×83cmの円形プラン，深さ28cm。壁は西側がゆるやかで，東側は垂直に近い。底面は平坦で65cm×63cmの円形である。

埋土の堆積は上から，第１層：暗褐色粘質土層，第２層：暗褐色粘質土層で第１層より砂質性が強い。第３層：黒褐色粘質土層，第４層：壁の崩落土層となっている。

出土遺物は，縄文式土器片49点，石鏃１点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク２点がある。

第51号貯蔵穴　(Fig.20－１)

二段掘りの貯蔵穴である。径100cmの円形プランで，一段目の深さ50cm。底面はゆるやかに傾斜するが，ほぼ平坦で80cm×63cmの楕円形をなす。壁は垂直で部分的に袋状になるところもある。二段目の掘り方は底面の中央部にあり，47cm×40cmの隅丸長方形プランで，深さ23cmである。埋土中には径18cm前後の柱穴状の掘り込みがある。

埋土の堆積は上から，第１層：暗褐色粘質土層，木炭を含み固くしまっていない。この層が柱穴状の掘り込みにあたる。第２層：黒褐色粘質土層(炭化物を含む)，第３層：暗褐色粘質土層，第４層：黄褐色土層，第５層：黄褐色土層，第６層：暗褐色粘質土層，第７層：黄褐色土層，第８層：黄褐色砂質土層となっている。

出土遺物は，縄文式土器片115点，石鏃１点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ27点がある。

第52号貯蔵穴　(Fig.20－２)

長径94cm，短径87cmの円形プランで，深さ58cm。柱穴２個と重複関係にある。底辺は丸くなるが，ほぼ平坦に近く，70cm×65cmの円形をなす。埋土中には径30cm～45cm，深さ58cmの柱穴状の掘り込みが認められる。

埋土の堆積は上から，第１層：茶褐色粘質土層(炭化物を含む)，第２層：黄褐色砂質土層，第３層：黒色有機質を含む暗褐色粘質土層，第４層：暗褐色粘質土層，第５層：暗黄褐色粘質土層，第６層：黒褐色有機質土層，第７層：暗茶褐色粘質土層，第８層：黄褐色砂質土層，第９層：黒褐色粘質土ブロック，第10層：暗褐色粘質土層，第11層：黒褐色有機質土層となっている。

出土遺物は，縄文式土器片72点，石鏃１点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ25点である。

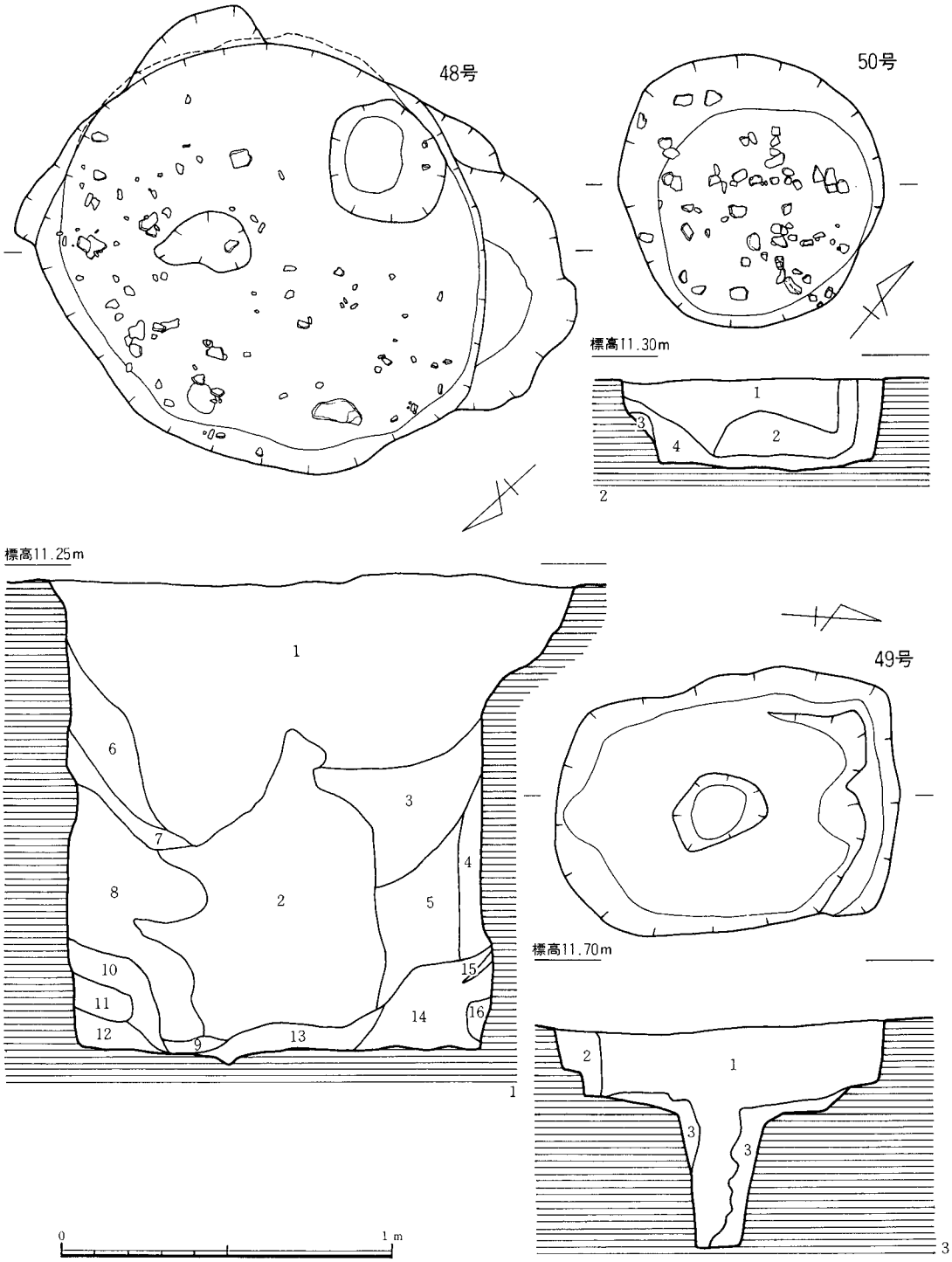


Fig.19　第48・49・50号貯蔵穴実測図

第53号貯蔵穴　(Fig.20－3)

長径73cm，短径53cmの不整楕円形プランをなす。深さ48cm。底面は平坦で長径62cm，短径42cmの不整形となす。壁は垂直に近く，一部袋状になるところがある。

埋土の堆積は上から，第1層：黄褐色粘質土層，第2層：黒色粘質土層，第3層：黄色砂質土ブロック，第4層：黒色粘質土層，第5層：黄褐色砂質土混入の褐色粘質土層，第6層：暗褐色粘質土層，第7層：黒色粘質土層となっている。

出土遺物は，縄文式土器片4点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ4点である。

第54号貯蔵穴　(Fig.20－4)

長径103cm，短径83cmの楕円形プラン，深さ98cmをはかる。底面は平坦で長径97cm，短径77cm，壁は垂直に近いが東側壁では大きく(30cm)はいり込み袋状をなす。埋土中には径20cm，深さは穴底に達する柱穴状の掘り込みがある。

埋土の堆積は上から，第1層：褐色土層，第2層：黄褐色砂質土混入の褐色土層，第3層：暗褐色粘質土ブロック，第4層：暗褐色粘質土層で固ってなく軟い。第5層：褐色砂質土層，第6層：褐色粘質土ブロック，第7層：黄褐色粘質土層，第8層：褐色土層(炭化物を含む)，第9層：黄褐色砂質土層，第10層：黄褐色砂質土層，第11層：暗褐色土層(炭化物を含む)，第12層：淡褐色土層，第13層：暗黄褐色砂質土層，第14層：濃暗褐色粘土層，第15層：暗黄褐色土層，第16層：暗褐色土層，第17層：黒褐色粘質土層，第18層：淡黒褐色粘質土層となっている。

出土遺物は，縄文式土器片20点，縦長剝片1点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ6点がある。

第55号貯蔵穴　(Fig.21－3)

2基の貯蔵穴が重複する。新しい方を55a号，古い方を55b号とする。

55a号は長径65cm，短径45cmの楕円形プラン，深さ50cmをはかる。底面は平坦で35cm×25cmの楕円形である。

埋土の堆積は上から，第1層：黄褐色粘質土層，第2層：暗褐色粘質土層，第3層：黄色砂質土層，第4層：暗褐色粘質土層，第5層：黒色粘質土層，第6層：暗黄褐色粘質土層となっている。

出土遺物は，縄文式土器片13点，石鏃2点，黒曜石フレイク2点がある。

55b号は径80cmの円形プランで深さ13cmの浅い皿状の土坑である。中に拳大の石がつめられている。用途，目的は明らかにできない。

出土遺物は，縄文式土器片2点，石鏃1点，黒曜石フレイク1点がある。

第56号貯蔵穴

調査の結果，貯蔵穴ではないことが判明した。

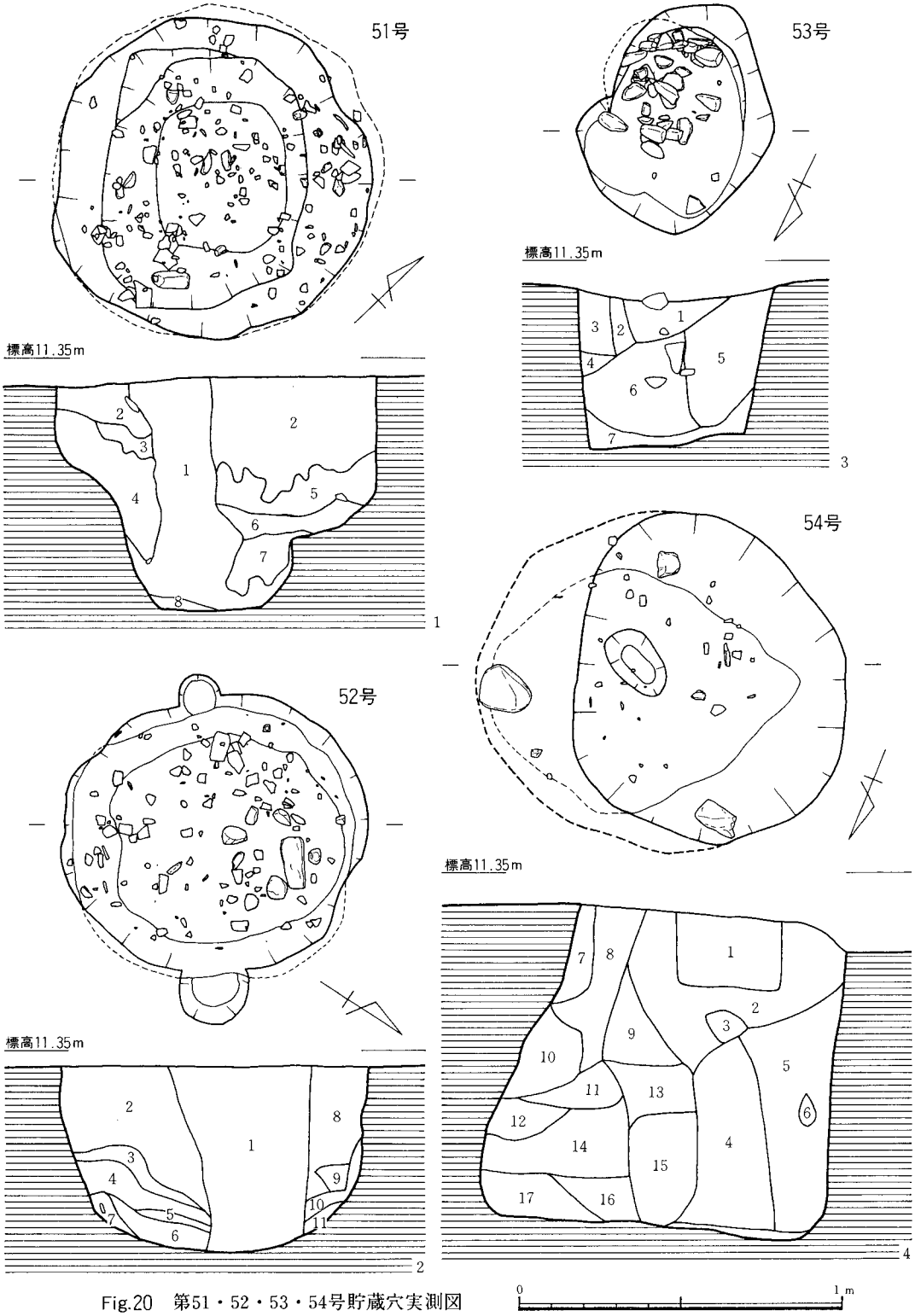


Fig.20　第51・52・53・54号貯蔵穴実測図

第57号貯蔵穴　(Fig.21－5)

径50cmの円形プランで深さ20cmをはかる。底面は平坦で39cm×34cmの円形である。

埋土の堆積は上から，第1層：暗褐色粘質土層，第2層：黒褐色粘質土層となっている。

出土遺物は，縄文式土器片6点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク2点がある。

第58号貯蔵穴　(Fig.21－4)

長80cm，短径67cmの楕円形プランをなし，深さ73cmをはかる。底面は平坦で58cm×60cmの円形である。壁は垂直ないしは若干袋状になるようにたちあがる。

埋土の堆積は上から，第1層：暗黄褐色土層，第2層：黄褐色粘質土層，第3層：黄褐色砂質土ブロック，第4層：暗褐色粘質土層，第5層：暗黄褐色粘質土層，第6層：褐色粘質土層，第7層：淡黒褐色粘質土層，第8層：淡黒褐色粘質土層，第9層：黒褐色粘質土層，第10層：黒褐色粘質土層となっている。

出土遺物は，縄文式土器片78点，石鏃2点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ10点がある。

第59号貯蔵穴　(Fig.21－2)

径77cmの円形プランで深さ50cmをはかる。壁はゆるやかにたちあがる。底面は平坦で，60cm×50cmの不整円形をなす。

埋土の堆積は上から，第1層：灰褐色土層で現代の攪乱層である。第2層：黄褐色粘質土層，第3層：暗黄褐色粘質土層，地山のローム層を含む。第4層：褐色土層，第5層：褐色粘質土層で炭化物を含む。第6層：暗褐色粘質土層，第7層：黒褐色粘質土層となっている。

出土遺物は，縄文式土器片61点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ9点である。

第60号貯蔵穴　(Fig.21－1)

長径78cm，短径74cmの不整円形プランで深さ80cmをはかる。底面は長径55cm，短径33cmの楕円形をなす。底面に2個のピットがある。ピットは北側が径26cm，深さ10cm，南側が径21cm，深さ4cmである。底から約30cmの間には拳大の石をつめ込んでいて，その中に径15cmのピット状の空間部がある。

埋土の堆積は上から，第1層：暗褐色粘質土層，第2層：暗黄褐色粘質土層，第3層：暗黄褐色粘質土層，第4層：暗黄褐色土層で，地山のローム層が混じる。第5層：暗褐色粘質土層，第6層：黒色粘質土層で大部分は自然礫でしめられる。第7層：黒褐色粘質土層，第8層：黒褐色粘質土層となっている。

出土遺物は，縄文式土器片68点，石鏃1点，剝片石器1点，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップ17点である。

第1号土坑

長軸136cm，短軸50cmの長方形の掘り方で，深さ74cm，底面は平坦で，長軸134cm，短軸60

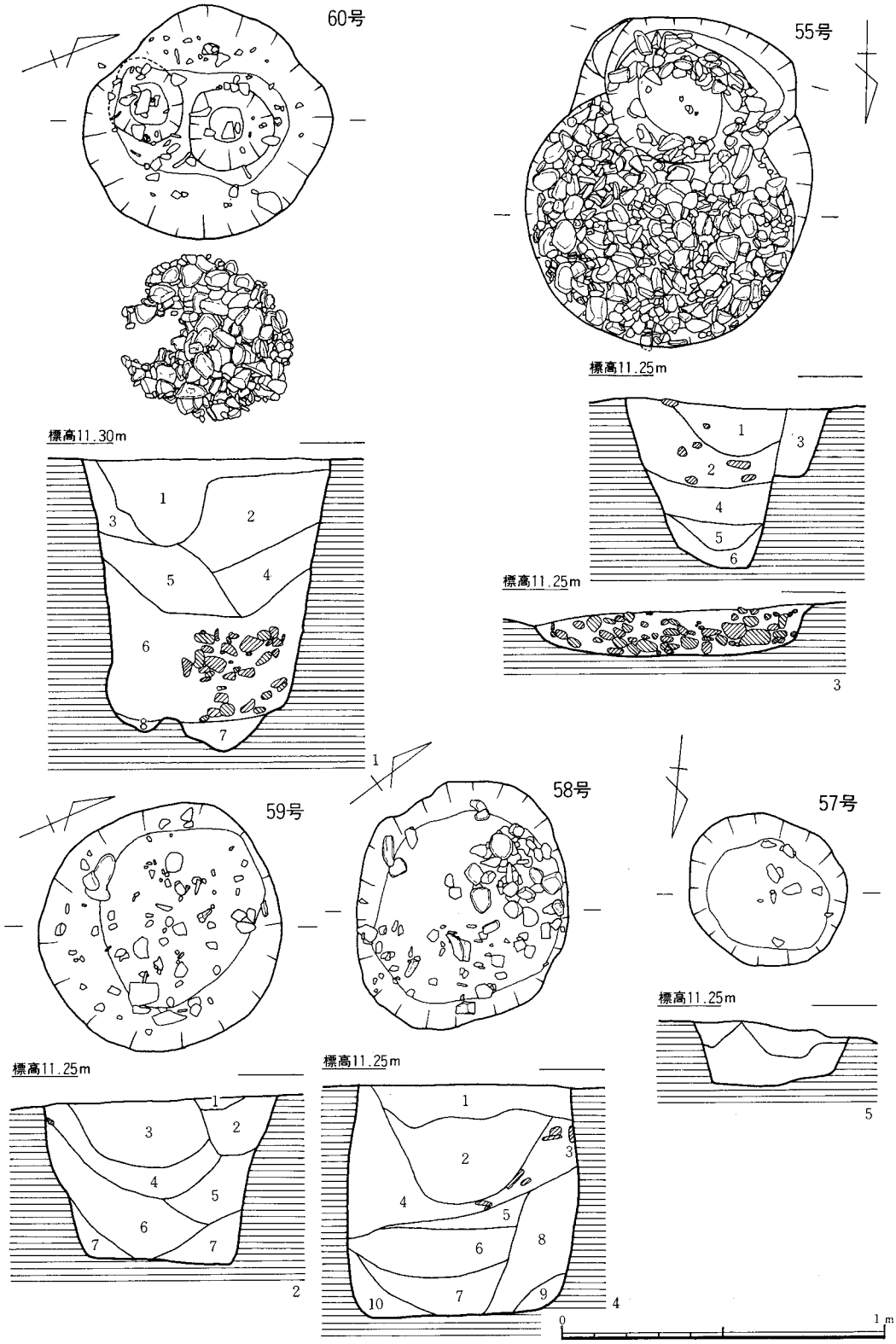


Fig.21　第55・57・58・59・60号貯蔵穴実測図

cmの長方形をなす。壁は垂直ないし袋状になっていて，掘り方上面より底面がやや広くなっている。底面の中央部に径20cm，深さ37cmのピットがある。

内部には木棺が置かれていたものらしく，その痕跡が認められる。木棺の大きさは，長軸96cm，幅40cmの長方形で，深さは20cm以上である。

出土遺物は皆無で，年代その他については不明である。

不明遺構

長軸87cm，短軸49cmの隅丸長方形プランをなす。深さ15cmで，坑底に２列の細長いピットを掘り込む。北側のピットは長軸53cm，短軸17cmの隅丸長方形プラン，南側は長軸76cm，短軸23cmの隅丸長方形プランで深さは共に10cm前後。

遺物はなく，年代，使用目的等は不明である。　　（山崎）

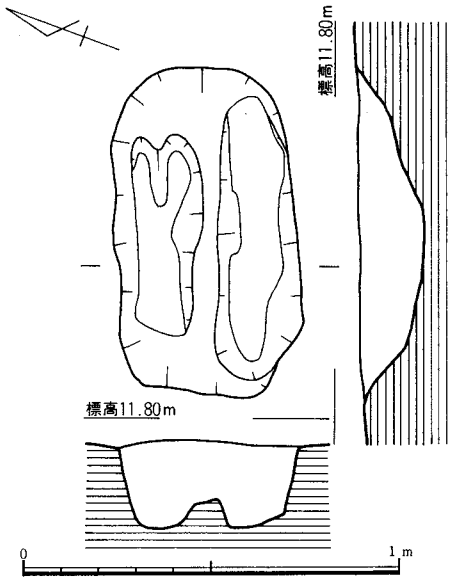


Fig.22　その他の土坑

4) 出 土 遺 物

土　器

出土土器はかなりの量存在するが時間の関係上整理が充分でないので代表的なものを紹介し，今後再論する。

出土土器は大別し，①滑石を混入した胎土で凹線によって文様をつける，いわゆる阿高系土器，②滑石を含まず沈線で文様をつける沈線文の土器，③磨消縄文，④条痕をもった粗製土器の4種類に分かれる。

1～37はいわゆる阿高系の土器である。6，7のような太い凹線で文様をつけるもの，11，16，18のように口縁部に階突文をつけるもの，1，31のようにヘラで曲線を描くものがある。またヘラで直線的な文様をつけるものが多い。1，9，18，22，31は口縁部破片で波状口縁である。

2が1号，1，3，4は2号。5～8，10は4号，9，12，15は15号，11，13は20号，141，16～19は32号，20は35号，21は40号，22は41号，23，25は42号，24は45号，26は47号，28，30は48号，27，29，32，35は51号，3は49号，33，36は52号，34は58号貯蔵穴の出土である。

42～45は沈線文土器，いわゆる阿高系土器とは異る。43は把手，44は口縁部で刺突文様をつける。45はヘラ描きの文様である。42は20号，43は43号，44は48号，45は32c号貯蔵穴の出土である。

46～50は磨消縄文をもつ土器群，47，48は口縁部破片である。46，47は48号，48は47号49は49号，37は50号貯蔵穴の出土である。

38～41，51は条痕文のある粗製土器の一群である。38～41は口縁部破片で波状口縁をなす。38は12号，39は15号，40は16号，41，51は47号貯蔵穴の出土である。　（山崎）

石　器

本遺跡では，磨製石斧・石鏃・石錐・削器類・石皿などの石器と石核・剥片・削片など多量の遺物が貯蔵穴から出土した。石器の総数は131点で，石鏃58%，削器類11.5%，石錐7.6%・砥石6.1%・石皿・剥片石器3.8%，磨製石斧・石錐・石槍？各2点などがある（ここでは，Uフレイクは総数に入れていない）。このほかに旧石器時代の石器6点が出土している。

本遺跡出土石器中，石鏃が最も多く76点出土している。石材は，黒曜石と古銅輝石安山岩をもちいており前者が61.8%をしめている。黒曜石製のうち102のみが姫島産出黒曜石製で，ほかは漆黒黒曜石製である。石鏃の形態が分るものが70点で，無茎凹基部型が54.3%，無茎平基部型が44.3%，有茎石鏃1点である。出土石鏃中素材剥離面を多く残すものが26点あり，この中でも片側縁末加工のものが12点ある。また側縁辺が針状になる鋸歯鏃・側縁辺が歯状になる有歯鏃もそれぞれ6点出土している。46，54，55は片側縁辺のみ鋸歯となり，46，55は他側末

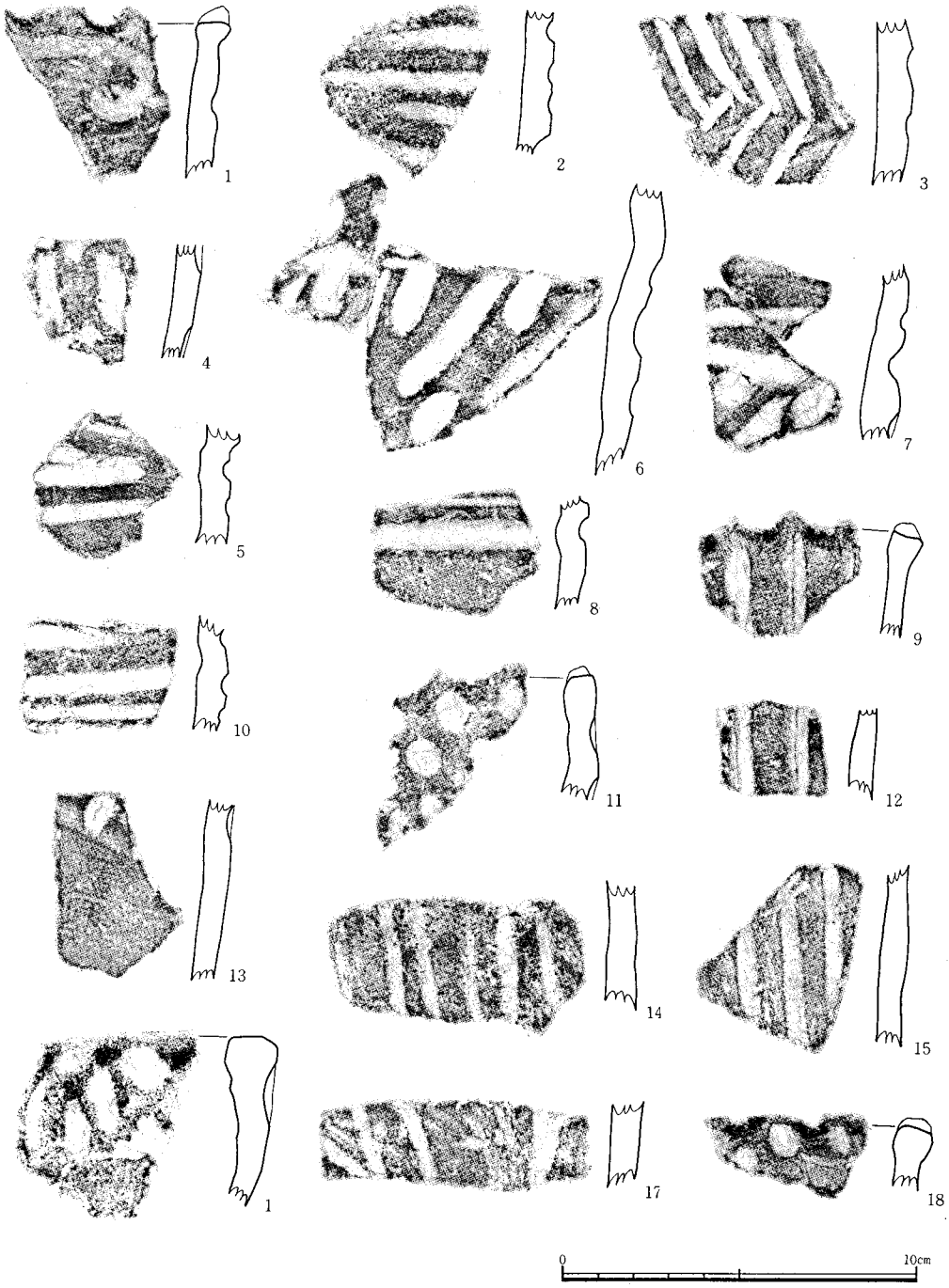


Fig.23　出土土器実測図 I

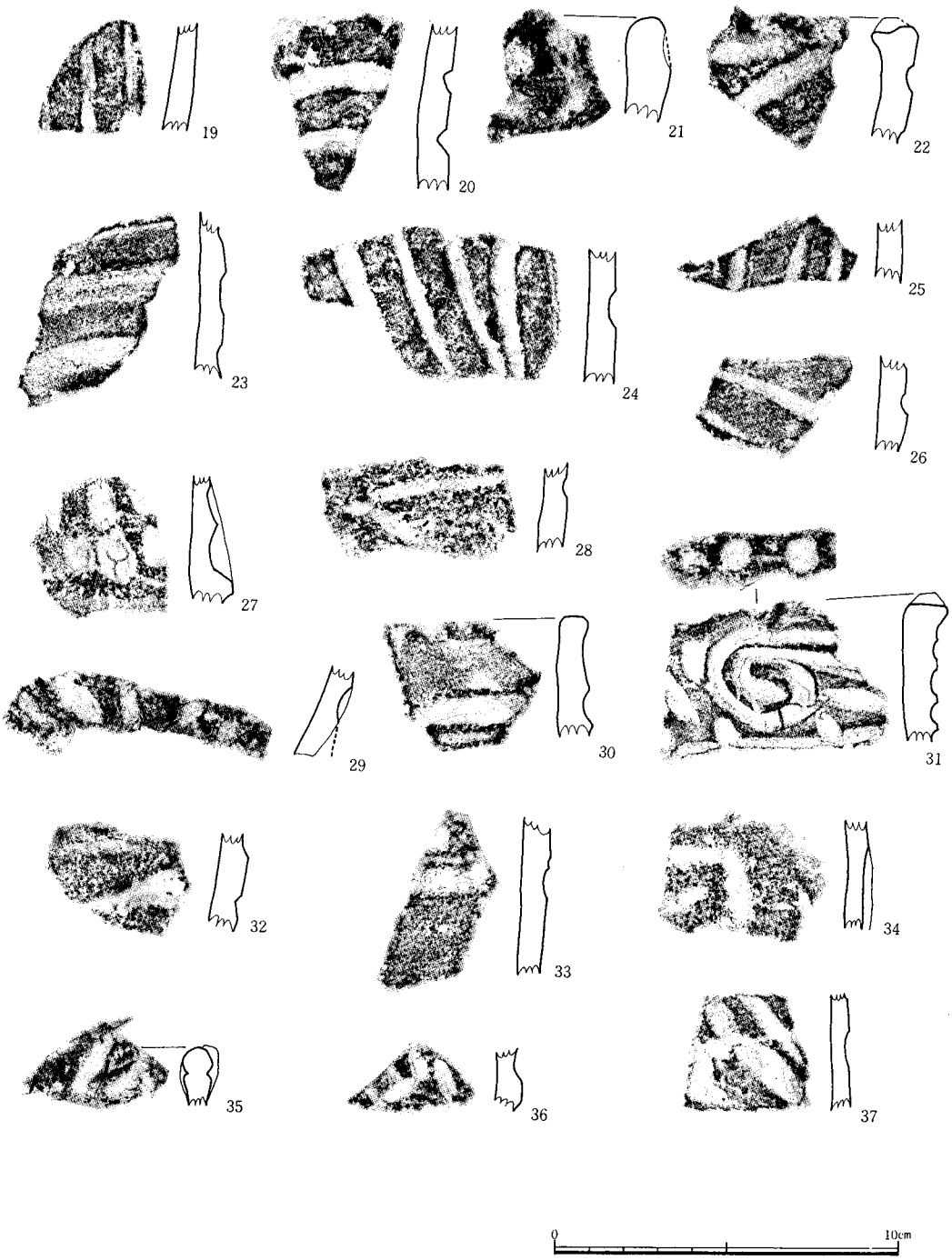


Fig.24　出土土器実測図II

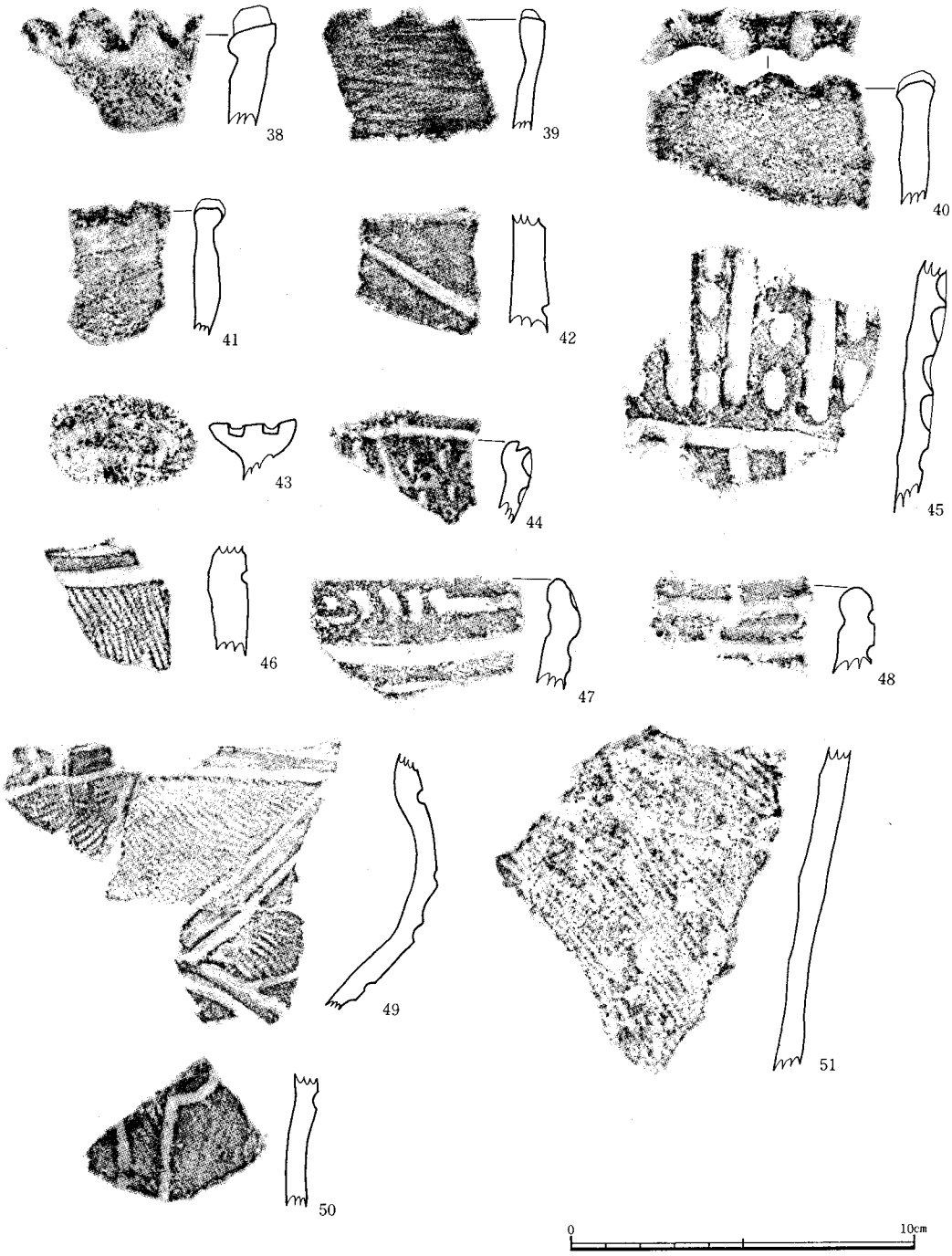


Fig.25　出土土器実測図Ⅲ

出土石器一覧表 (1)

No	出土遺構	器種	石材	重量(g)	備考	挿図
1	第4号竪穴	石鏃	古銅輝石安山岩	0.75＋α	凹基部，先端部，片脚を欠損	
2		石錐	〃	0.9＋α		
3	第8号竪穴	石鏃	〃	1.15	平基部	
4	第12号竪穴	石鏃	〃	2.75	有柄石鏃	
5	第14号竪穴	石鏃	黒曜石	0.6	凹基部，片縁辺は有歯状をなしている	
6		石鏃	〃	1.15	平基部，片縁辺は未加工	
7		石鏃	〃	0.35	平基部，素材剥離面を多く残す	
8		石槍？	古銅輝石安山岩	2.65＋α		
9	第15号竪立	縦長剥片	黒曜石	3.0	縁辺に刃こぼれがみられる	
10		石鏃？	〃	1.35＋α	平基部	
11	第16号竪穴	石鏃	〃	0.3	凹基部，片縁辺は有歯状をなし，他縁辺は未加工	
12		石鏃	〃	0.7	平基部，基部のみ加工	
13		削器	古銅輝石安山岩	3.5		
14	第19号竪穴	石鏃	黒曜石	0.6＋α	凹基部，先端部，脚部欠損	
15	第20号竪穴	石鏃	〃	0.3	鋸歯鏃，凹基部	
16	第21号竪穴	石鏃	古銅輝石安山岩	1.1＋α	平基部，先端部欠損	
17	第23号竪穴	石鏃	〃	0.3＋α	凹基部	
18		石鏃？	〃	2.3	削器か	
19		石鏃	〃	0.3＋α	先端部のみ	
20		削器	〃	3.8		
21	第24号竪穴	石鏃	黒曜石	2.05	平基部，素材剥離面を多く残す	
22	第26号竪穴	石鏃	〃	0.4	凹基部	
23		石鏃	〃	0.15＋α		
24	第27号竪穴	石鏃	古銅輝石安山岩	1.95＋α	平基部，先端部欠損	
25		石錐	黒曜石	0.35		
26		石錐	古銅輝石安山岩	1.5		
27		掻器	〃	18.5		
28	第29号竪穴	石鏃	黒曜石	0.4	平基部，片縁辺は有歯状をなし，他縁は未加工	
29		石鏃？	古銅輝石安山岩	6.3	掻器か	
30	第30号竪穴	石鏃	〃	2.25	平基部	
31	第31号竪穴	石鏃	黒曜石	1.3	平基部	
32	第32号竪穴	石鏃	〃	0.9	平基部	
33		石鏃	〃	0.2	鋸歯鏃凹基部	
34		石鏃	〃	0.2＋α	凹基部，先端片脚端欠損	
35		石鏃	〃	0.65	平基部	
36		石鏃	〃	0.85＋α	平基部，片縁辺は未加工先端部欠損	
37		石鏃？	〃	0.55＋α	ナイフ形石器の基部か	
38		石鏃	古銅輝石安山岩	1.2	平基部	
39		石鏃	〃	0.65＋α	凹基部素材剥離面を多く残す	
40		石鏃	〃	0.75＋α	凹基部素材剥離面を残す	
41		掻器	〃	10.0		
42	第32号竪穴	削器	古銅輝石安山岩	12.8		
43		石錘	蛇紋片岩	11.4	扁平礫の両端に切れ目を入れ紐ずれ痕がある	
44		石錘	石英	18.4	扁平礫の両端中央部を表裏から打ち欠く	
45	第34号竪穴	石鏃	古銅輝石安山岩	0.5	凹基部	
46		石鏃	〃	0.35	凹基部片縁辺は未加工	
47		石鏃	〃	0.5＋α	凹基部先端部欠損	
48		石鏃？	〃	4.8	未製品？平基部	
49	第35号竪穴	石鏃	黒曜石	0.55	凹基部	
50		石鏃	〃	3.3	平基部	
51		石錐	古銅輝石安山岩	0.8＋α		
52		石槍？	〃	4.9＋α		
53	第36号竪穴	石錐	〃	0.35＋α		
54		石鏃	黒曜石	0.45＋α	凹基部片縁辺は鋸歯状となっている	
55	第37号竪穴	石鏃	〃	0.4	凹基部片縁辺は鋸歯状をなし他縁辺は未加工	
56		石鏃	〃	0.25＋α	凹基部片脚欠損	
57		石鏃	古銅輝石安山岩	0.6＋α	鋸歯状，凹基部	
58		石鏃	〃	0.55	鋸歯状，凹基部	
59		石鏃	〃	1.2	凹基部	
60		石鏃	〃	0.55	凹基部，先端基部のみに加工を加える	
61		削器	〃	5.25		
62		石匙	〃	17.7		
63		削器	〃	8.35		
64	第38号竪穴	石鏃	黒曜石	0.5	平基部片縁辺は未加工	
65	第39号竪穴	石鏃	〃	0.45	凹基部	
66		石鏃	古銅輝石安山石	0.7＋α	凹基部	
67	第40号竪穴	石鏃	黒曜石	0.4＋α	平基部，先端部欠損	
68	第41号竪穴	磨製石斧		34.65	蛤刃	
69	第42号竪穴	石鏃	古銅輝石安山岩	3.2	平基部	
70		石鏃	〃	2.2＋α	平基部，先端部欠損	
71		石鏃	黒曜石	0.3＋α	凹基部，片縁辺は有歯状をなし他縁は未加工	
72		石鏃	〃	0.7＋α	平基部，先端部欠損	
73	第43号竪穴	石鏃	〃	0.3	平基部，凹基部，有歯鏃	
74		石鏃	〃	0.6		
75		石錐	古銅輝石安山岩	2.5＋α		
76		石錐	〃	1.4＋α		
77		石錐	〃	0.55＋α		
78		石錐？	〃	3.8＋α		
79		掻器	〃	44.3		
80		掻器	〃	9.45		
81	第45号竪穴	石鏃	黒曜石	1.0	平基部	
82	第46号竪穴	石錐？	〃	0.55＋α	石鏃の脚部分	

出土石器一覧表(2)

No	出土遺構	器種	石材	重量(g)	備考	挿図
83	第47号竪穴	石鏃	黒曜石	1.0	凹基部	
84		石鏃	〃	0.7+α	平基部	
85		石鏃	〃	0.5	凹基部有歯鏃	
86		石鏃	〃	0.3	凹基部片縁辺は未加工	
87		石鏃	古銅輝石安山岩	2.05	平基部	
88		石鏃?	〃	11.8	掻器か平基部	
89		削器	黒曜石	1.9		
90		掻器	古銅輝石安山岩	17.85		
91	第48号竪穴	石鏃	黒曜石	0.9	凹基部片脚欠損	
92		石鏃	〃	0.45	凹基部片縁辺は未加工部多し	
93		石鏃	〃	0.3+α	平基部	
94		石鏃	〃	0.4+α	凹基部片縁辺は未加工,先端部欠損	
95		石鏃	古銅輝石安山岩	0.45	凹基部	
96		石鏃	〃	0.8	凹基部先端部欠損	
97		磨製石斧		180.7+α	蛤刃で刃部から剝離している	
98		削器?	古銅輝石安山岩	2.45	石鏃か	
99		削器	〃	3.3		
100		剝片石器	黒曜石	3.8	不定形剝辺の先端部に二次加工を加えている	
101	第50号竪穴	石鏃	〃	0.75		
102	第51号竪穴	石鏃	〃	0.8	凹基部 姫島産出黒曜石製	
103	第52号竪穴	石鏃	黒曜石	0.6	平基部素材剝離面を多く残す	
104	第54号竪穴	縦長剝片	〃	4.75	縦長剝片の縁辺に二次加工を加えている	
105	第55号竪穴	石鏃	〃	0.65	凹基部素材打点に二次加工を加えている	
106		石鏃	〃	1.25	凹基部素材剝離面を多く残している	
107		石鏃	〃	0.45	凹基部	
108	第58号竪穴	石鏃	〃	0.85	平基部	
109		石鏃	〃	0.7+α	先端部	
110	第60号竪穴	石鏃	古銅輝石安山岩	0.75+α	凹基部先端部欠損,縦長剝片の縁辺に二次加工がみられる	
111		剝片石器	黒曜石	2.8		
112	表採	石鏃	古銅輝石安山岩	0.7	凹基部	
113		剝片石器	黒曜石	5.1	不定形剝片の縁辺に二次加工を加えている	
114		石鏃	〃	0.75+α	平基部先端欠失	
115	第40号竪穴	砥石?	砂岩	37.75	岩偶か	
116	表採	砥石?	凝灰岩	81.55+α	全面研磨	
117	第34号竪穴	石皿	砂岩			
118	第35号竪穴	削器	黒曜石	8.55	旧石器時代か	
119	第32号竪穴	削器	〃		旧石器時代か	
120	第59号竪穴	縦長剝片	頁岩	8.1	旧石器時代か	
121	第14号竪穴	ナイフ形石器	黒曜石		基部欠損	
122	第37号竪穴	ナイフ形石器	〃		先端部のみ	

加工で素材の鋭い縁辺を残している。5など4点は片側縁辺のみ有歯しとなり，11，28，78は他側縁辺未加工で素材の鋭い縁辺を残している。また有歯，鋸歯鏃とも無径凹基部型である。本遺跡出土の石鏃は，素材剝離面を多く，しかも片側縁辺を未加工のまま残すという特徴をもち，有歯・鋸歯鏃が比較的めだつという点が特記できる。このことは，時期的な特徴と同時に用途差を示しているといえよう。

本遺跡出土石器中6点の旧石器時代石器を除き，125点は，縄文時代後記初頭前後の石器と考えられ，比較的良好な資料といえる。今後生活址出土石器の類例をまちたい。　　(山口)

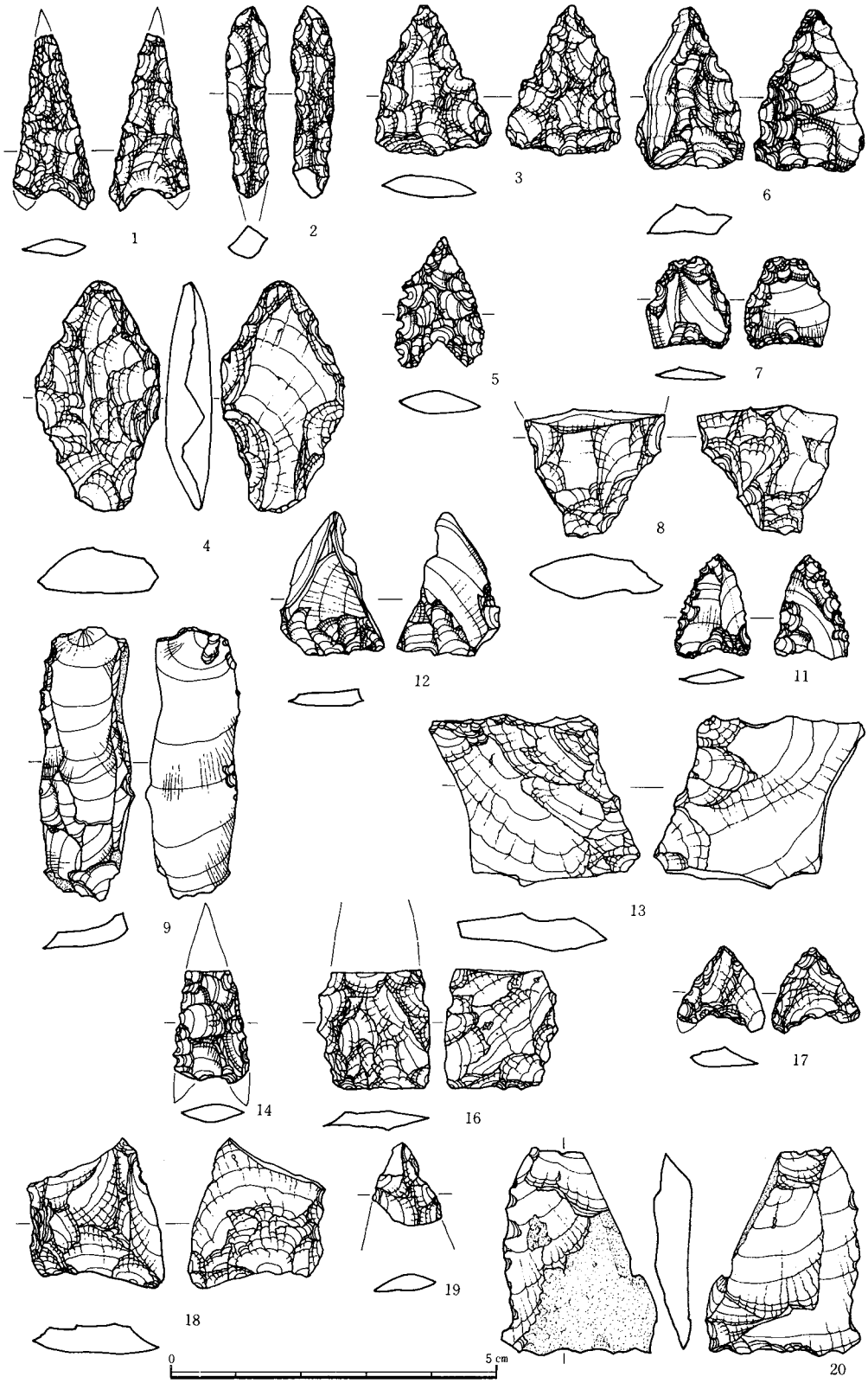


Fig.26　出土石器実測図 I

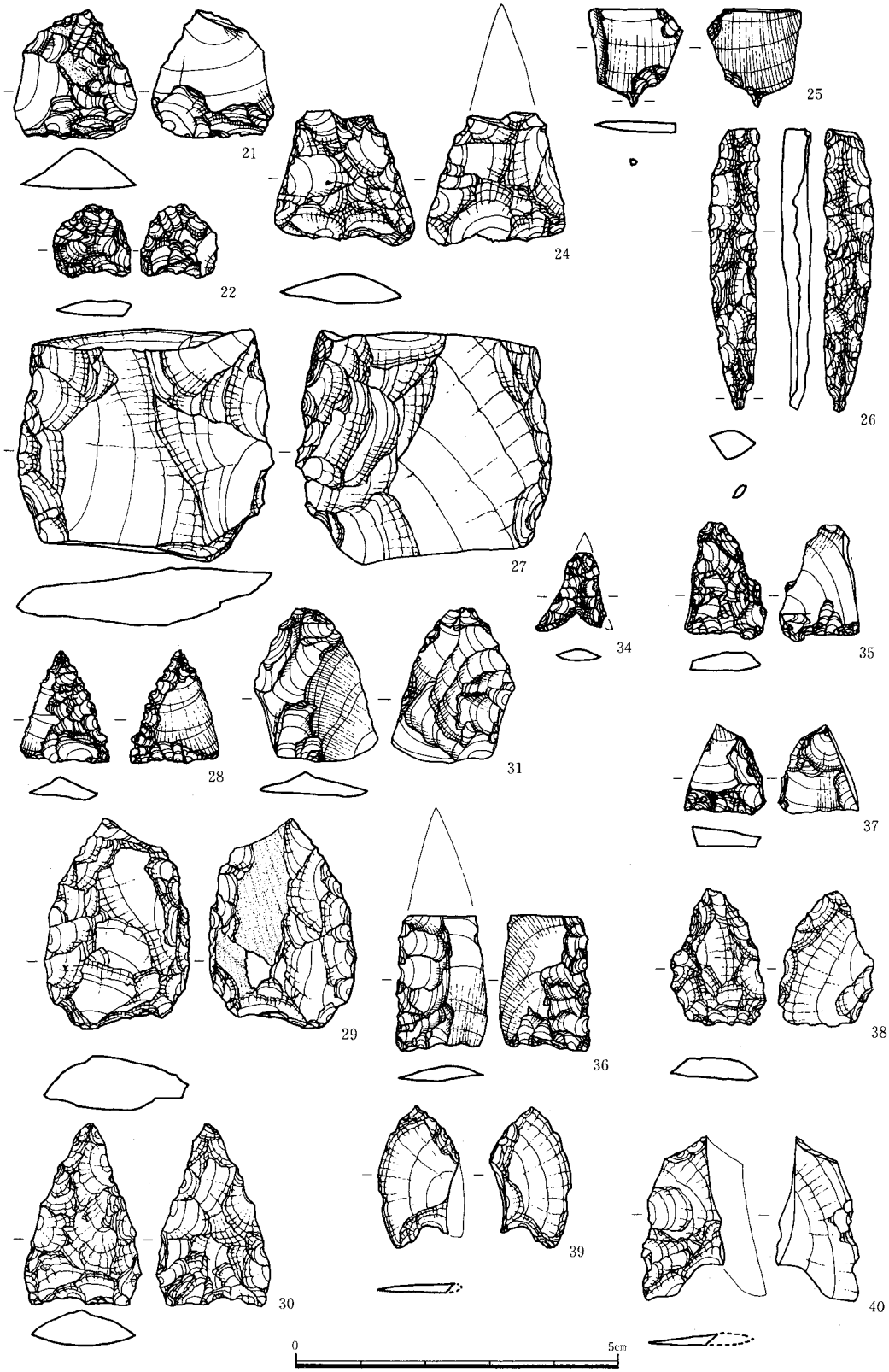


Fig.27. 出土石器実測図 II

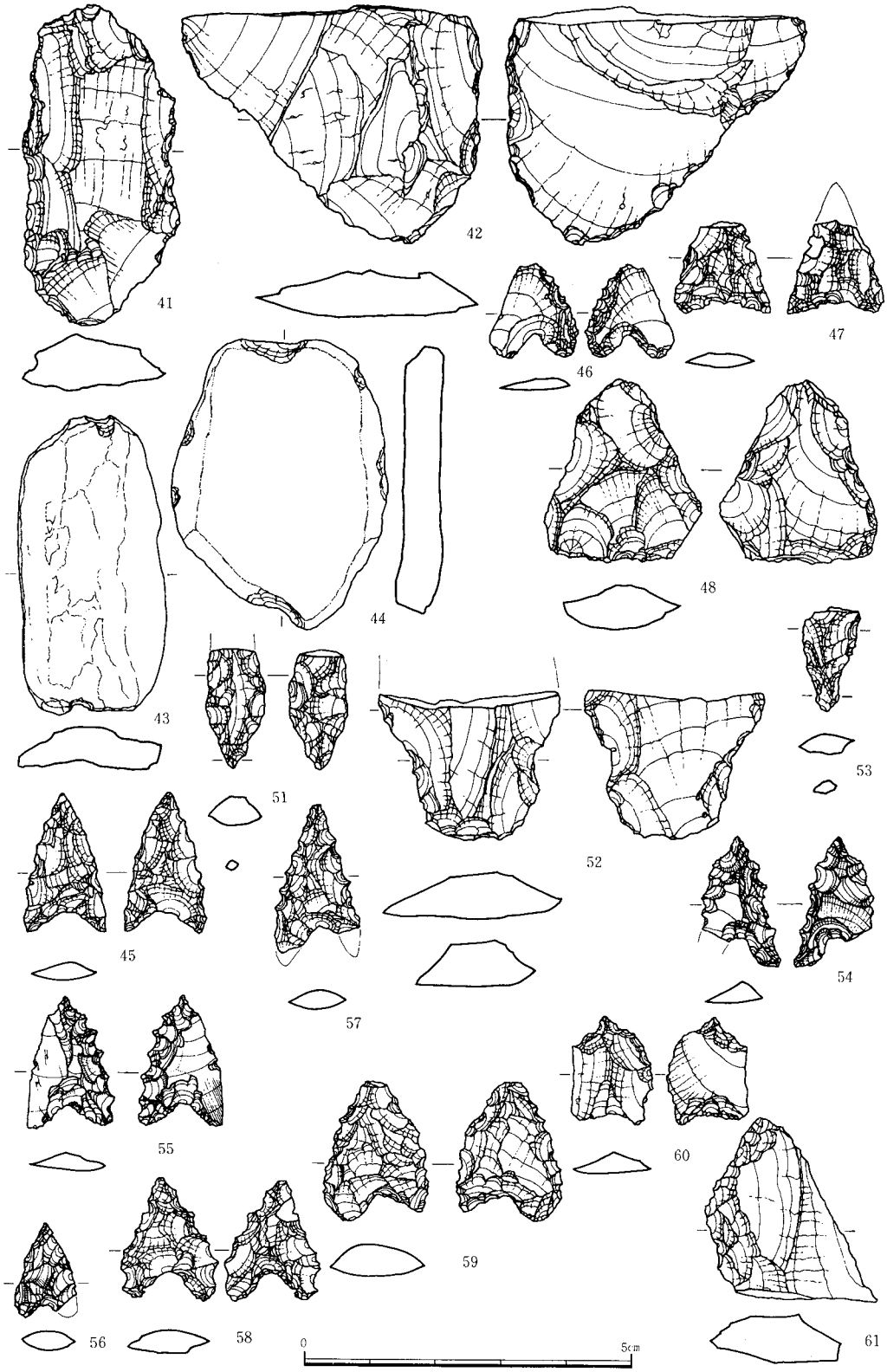


Fig.28. 出土石器実測図 III

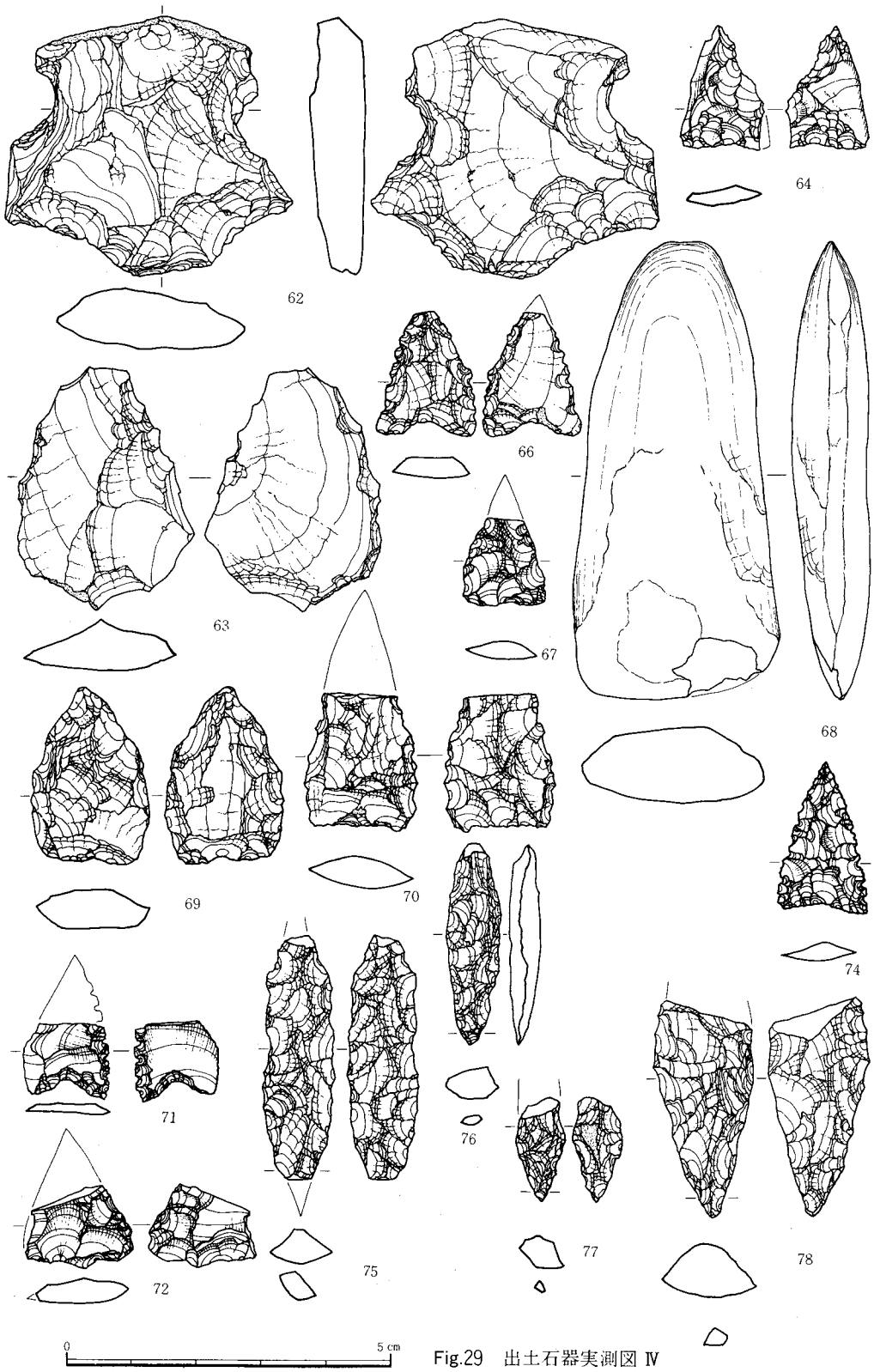


Fig.29　出土石器実測図 Ⅳ

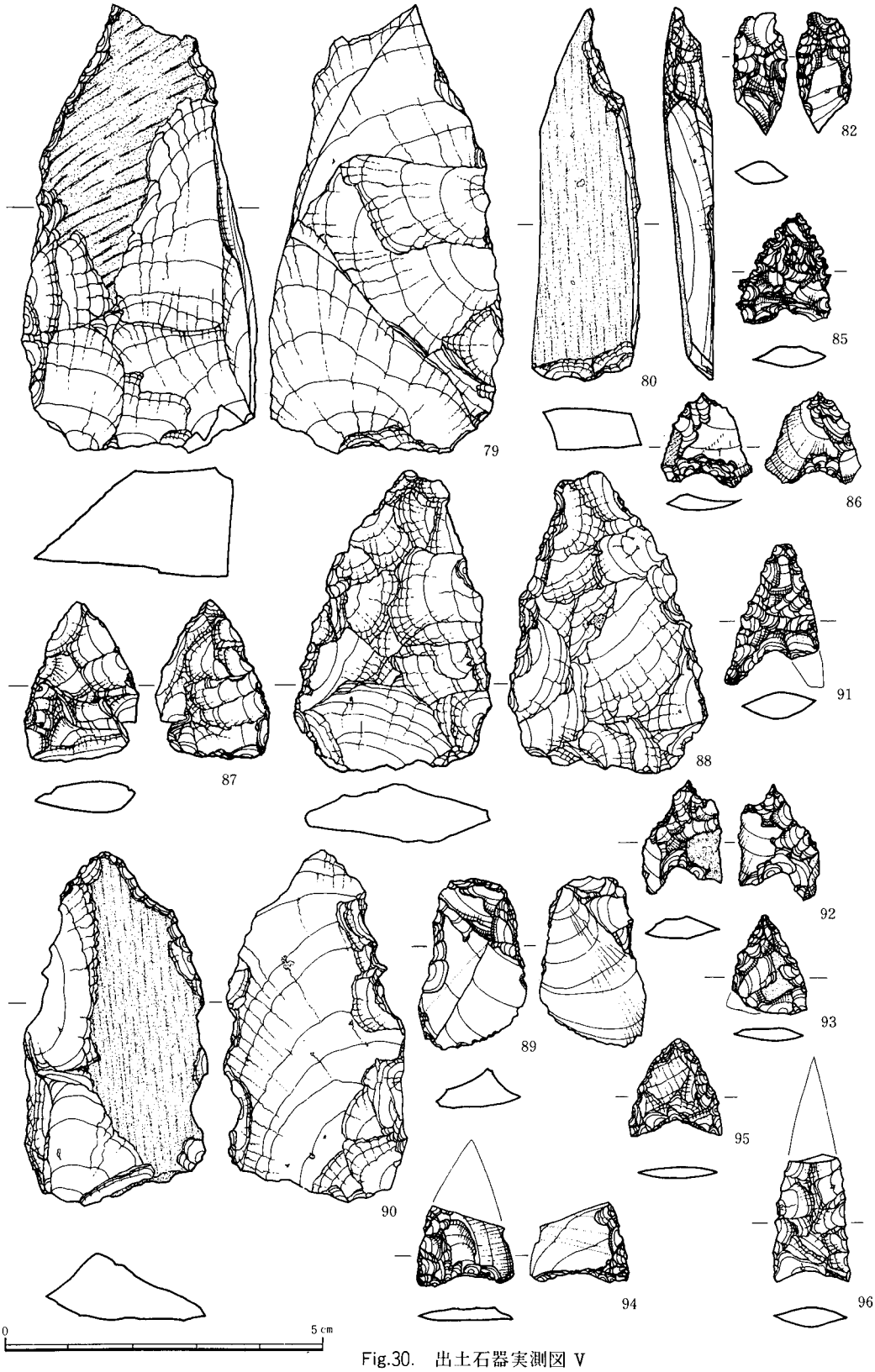


Fig.30. 出土石器実測図 V

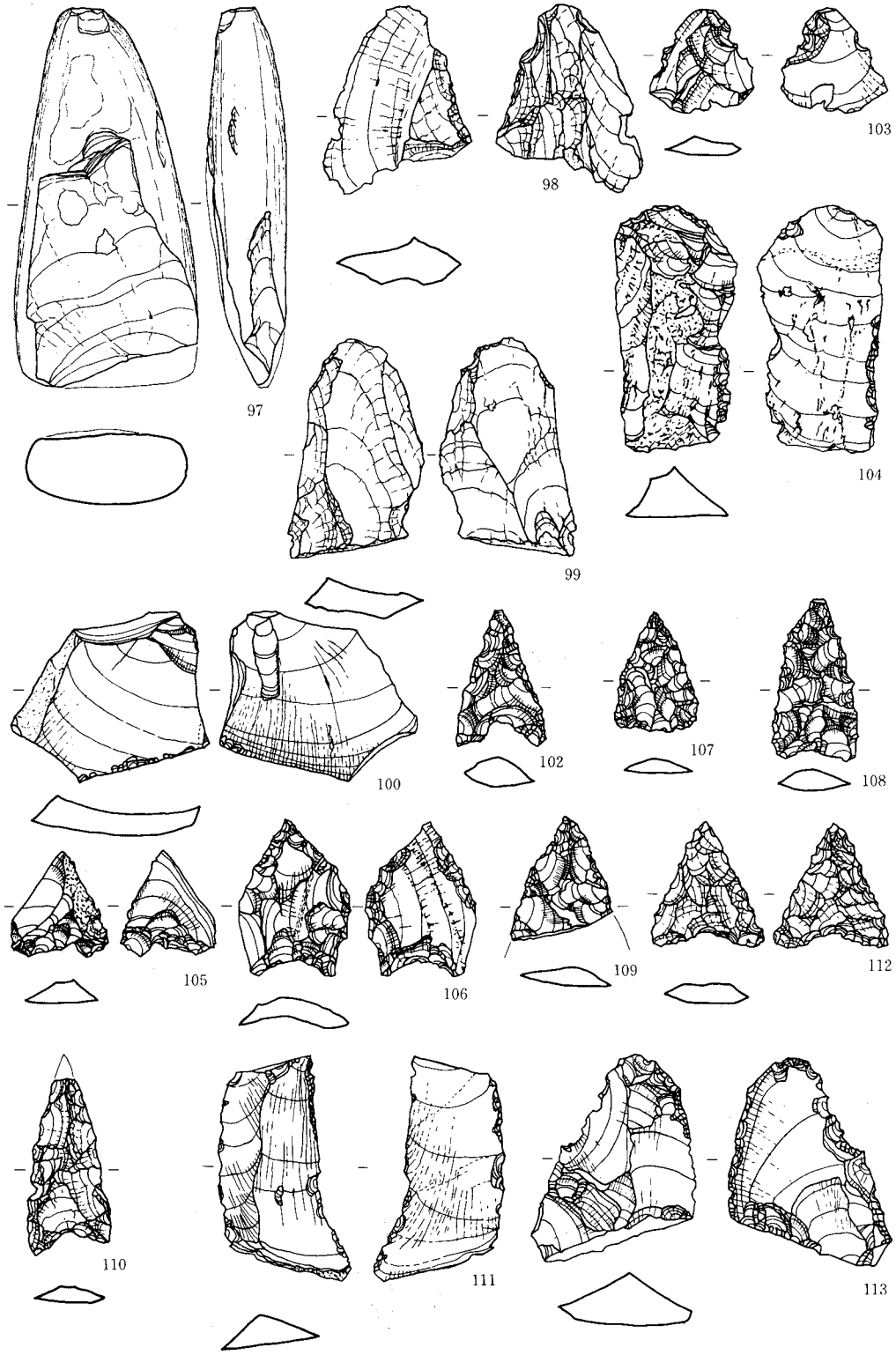


Fig.31-1. 出土石器実測図Ⅵ

0 5cm

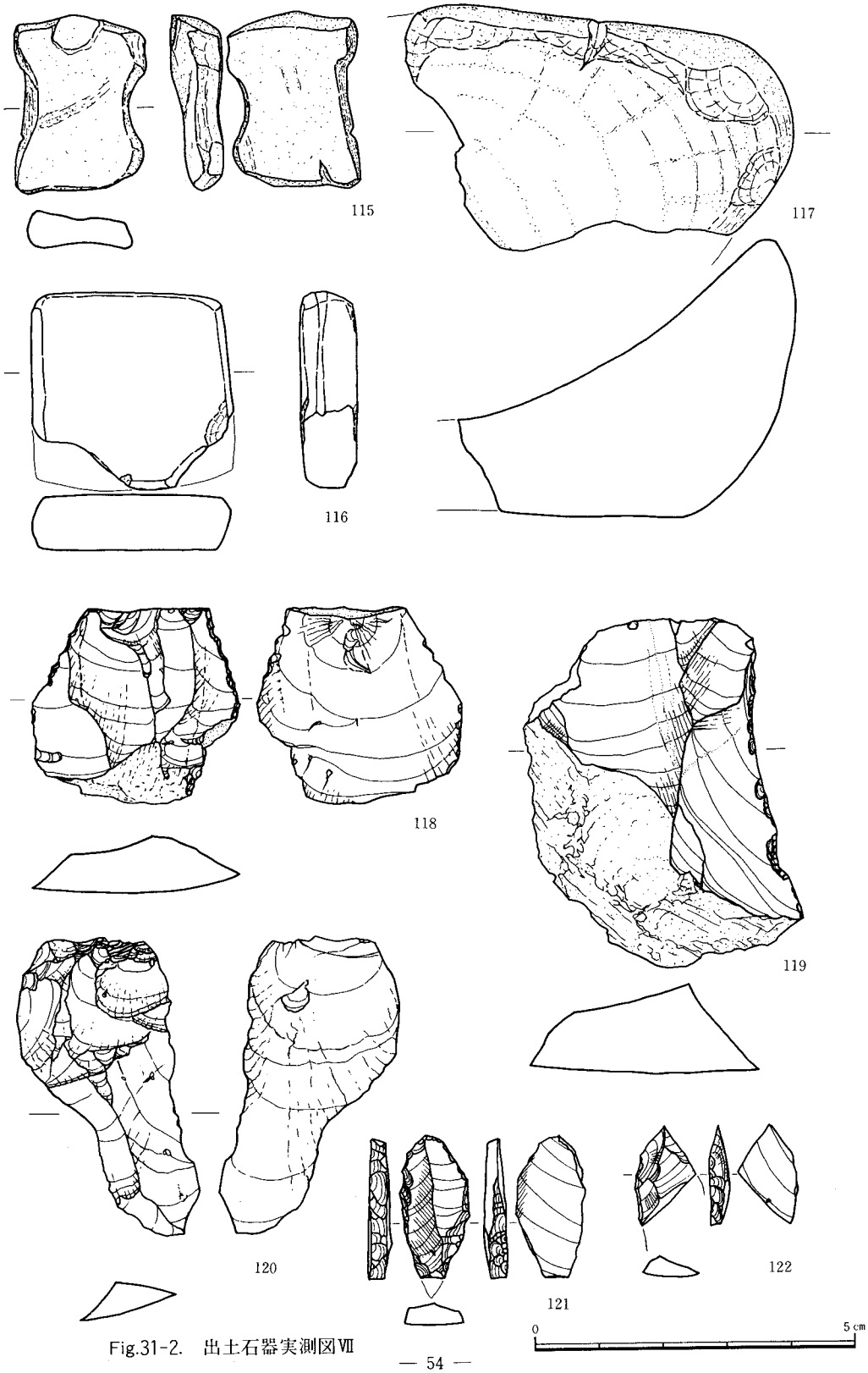


Fig.31-2.　出土石器実測図Ⅶ

5) 小　　結

第５次調査で検出した遺構は，縄文時代中・後期の貯蔵穴60基，時期不明の木棺墓１基と土坑１基，弥生時代後期の粘土採掘坑１基である。

本項では縄文時代の遺構と遺物について若干の考察を加えまとめとしたい。

縄文時代の円形土拡について，本報告では貯蔵穴としての前提条件で説明を加えてきたが，ここで改めて，その使用目的を考えてみたいと思う。

円形土坑は径50cm，深さ20cmを最小とし，最大は径140cm，深さ170cmと個々において大きさにばらつきがあり，一定規模としての規則性は認められない。形態的には平面プランが円形ないしは楕円形で，壁はゆるやかなたちあがりをみせるもの，垂直にたちあがるもの，袋状になるものの三種があるが，一般的には垂直に近いたちあがりをみせる。底面は平坦なものが大部分であり，中に底面に浅いピットをもつものがある。

出土遺物は縄文式土器片，石鏃，石錐，掻器，削器，石皿，磨石，石錘，使用痕ある剝片，黒曜石，古銅輝石安山岩のフレイク，チップがあるが，直接的に円形土坑の使用目的を証明するものではない。自然遺物の遺存に期待し，各遺構の埋土を水洗しその選別を行ったが，ドングリらしい炭化物１点を検出したのみである。

以上の点からこの円形土坑の使用目的を知ることは困難であるが，同時期における類似資料から推測することができる。

福岡市内で類似する資料として，南区に所在する野多目拈渡遺跡と西区に所在する飯盛遺跡とがある。いずれの遺跡でも円形土坑が群集していることが特徴として指摘できる。ここでは報告書の刊行されている野多目拈渡遺跡について検討してみよう。

野多目拈渡遺跡では円形土坑50基を確認していている。分布は自然流路にそった状況で８ケ所の集中区が認められる。形態は径１ｍ～1.6ｍの円形ないしは楕円形プランで，深さ１ｍ～1.6mで個々における大きさの違いがある。12基を調査した結果，いずれの竪穴からもイチイガシ，タデなどの植物種子が多量に出土し，時期的には中期末～後期初めである。

野多目拈渡遺跡，飯盛遺跡における類例を有田高畠と比較すると集中度，土坑の形態等全く同じであり，時期的にも共通性があることから両遺跡と同様にドングリの貯蔵穴とみることに無理はないものといえる。ただ１点ではあったがドングリ類とみられる炭化物は，このことの傍証となろう。

ただし，ここで注意しておきたいのが埋土に認められた柱穴状の掘り込み，すなわち柱痕跡の存在である。Fig. 32―①は柱痕跡をもつ貯蔵穴の分布を示したものである。これをみた場合，第14号，第15号，第16号，第20号，第25号，第26号，第29号貯蔵の柱痕跡は一定の規則性をもっているようで，これに柱痕跡をもたない。第29号と第23号貯蔵穴を組み入れれば２間×

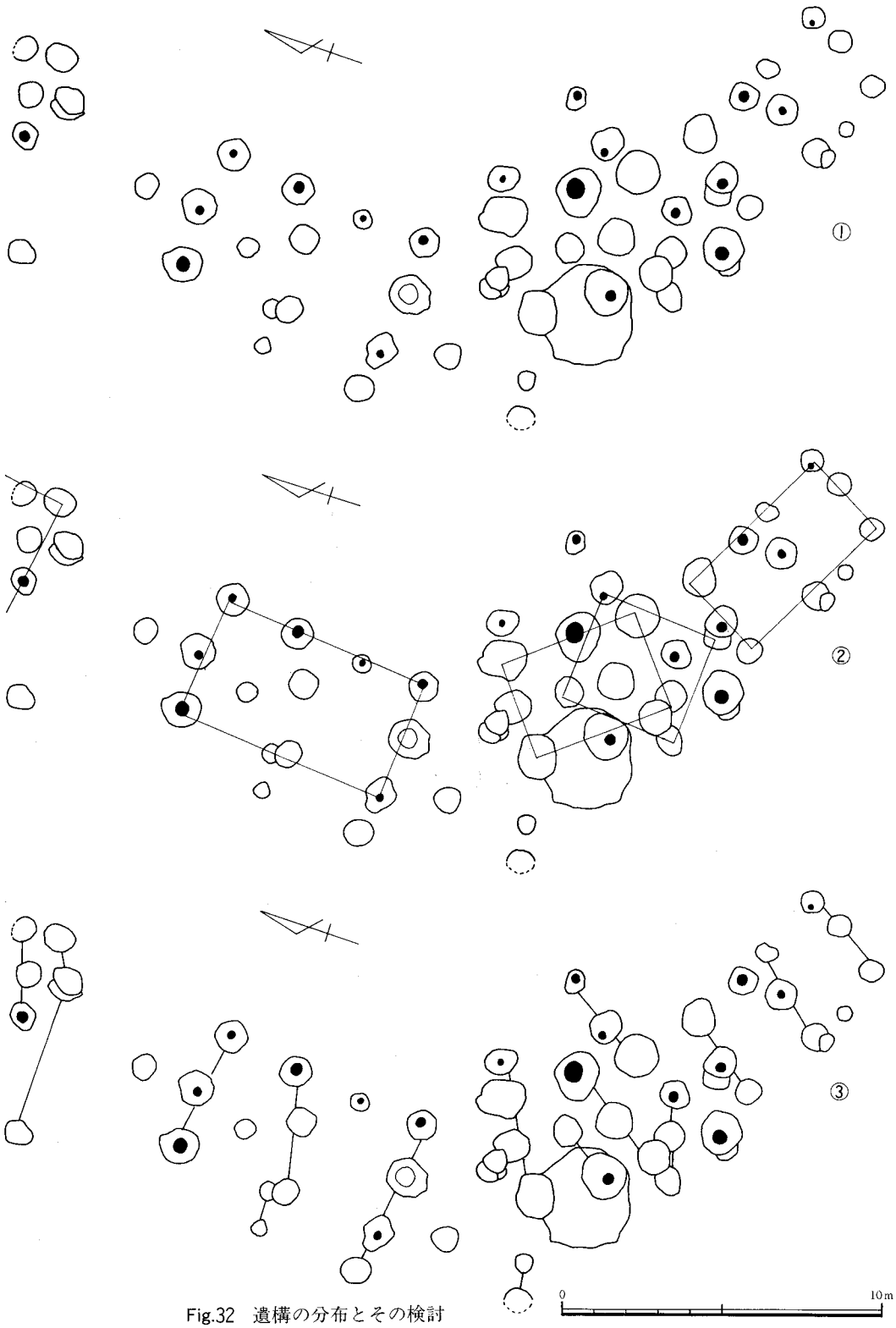


Fig.32　遺構の分布とその検討

3間の掘立柱建物を想定することも可能である。こうした想定で他の貯蔵穴を検討すれば第32c号，第34号，35b号，第32a′号，第37b号，第40号，第44号貯蔵穴で1間×2間の建物，第36号，第39号，第49号，43a 号貯蔵穴の組み合せで1間×1間の建物，第48号，第49号，第50号，第52号，第53号，第60号，第59号，第58号，第57号，第55号貯蔵穴の組み合せで2間×3間の建物を想定することができる。この場合は南に出入口をもち，円形に掘立柱建物をめぐらし，中央部に広場をもつ集落構造を想定できる。(Fig. 32－②)しかし，これは柱痕跡の存在からみた想定であって柱痕跡の上部構造についての可能性を考えてのことで，かならずしもこの想定が成り立つものでない。むしろ筆者は否定的であり，後述する考え方がより可能性があるものと考えている。

柱痕跡は明らかに何かを立てていた痕跡であることは調査時における所見等で肯首できる。このことを証明するのは，先にのべた野多目拈渡遺跡の10号竪穴にみることができる。10号竪穴の報告を引用してみる。「1.7m の円形プランをもち深さ1.6m である。鳥栖ローム層，八女粘土層を掘り，さらに含水層の砂層まで掘られている。床面は平らで鉢形にひらいている。本竪穴の床面中央部には径6cmの柱が，床面から50cm残っており，床面から10cm上には径6cm前後，長80cm前後の丸太材や割り材，半栽木などが出土し，その下から床面までは，多量のイチイガシと少量のタデなどの種子がぎっしりとつまっていた。」

10号竪穴では柱をたてていることは明らかであるが，この柱の使用がどのようなものであったかの検討が必要である。10号竪穴では柱のまわりに木材があり，貯蔵穴の上部に屋根をふいていた可能性は比定できない。しかし，木材のみであって樹皮その他の屋根に必要な材が全然残っていないことや床面近くに多量の種子が遺存していたことを考えれば，この貯蔵穴が屋根をもった出入自由な貯蔵穴とは考えがたい。むしろ，ドングリを貯蔵後は多くのドングリ，ピットの例からみて密封され，その上部に蓋的要素としてわたされていたものである可能性が強い。そして，ドングリ類がくさり消失するにつれて落下し，現在の出土状況になったものであろう。木材より上部の土層堆積が自然の流込みの状況を示していることもこのことを肯定している。ゆえに床面にある柱は屋根をつけるためのものではなく，他の用途を考える必要がある。野多目拈渡遺跡では先に考えたような掘立柱建物もたつような貯蔵穴のならびがなく，建物としては否定できる。ではどのような用途が考えられるであろうか。有田高畠では柱根跡をもつものともたない両者があり，ほぼ半分ずつである。この両者の土層断面を比較すると，柱痕跡のない貯蔵穴では底から自然の流込込みの土層堆積を示し，遺物量も比較的多いことが指摘できる。一方，柱痕跡のある場合は底面に接して炭化物を多量に含んだ層があり，それより上の層位は自然の流れ込み堆積とは考えられない土層堆積を示している。このことは柱痕跡と密接な関係があり，柱痕跡のない貯蔵穴は掘り返されて，穴の状態として遺棄され，自然に埋った場合が想定され，柱痕跡のある場合は野多目拈渡遺跡の10号竪穴と同様のことが考えられ，貯蔵

穴は最初に密封された状況のままであったと想定できる。そうした場合，柱痕跡は貯蔵穴の存在を示す標木として使用された痕跡であったと読みとることができる。

以上から，柱痕跡のある場合は貯蔵穴は密封されたそのままであり，ない場合は再度掘られ，中の貯蔵品（ドングリ）がとりだされたと考えることができる。

次に貯蔵穴とした場合の分布についてみていこう。大きさに大きな違いがあることは先に指摘したが，ほぼ同じ規格をもったものが近接して存在し，かなり直線的にならんでいる。細かな分析を必要とするが，視覚的に，そのつながりを示したのがFig.32－③である。これからみれば，一グループは2～3個の貯蔵穴からなることがわかる。このグループが何に対応するかは確定できないが，今後，同様遺構の集成と分析をおこなえば興味ある結果が得られよう。

なお，遺物について本報告では充分に意をつくしていないのでさらに稿を改めて再論する。

2．第39次調査

1）調査地区の地形と概要

調査対象地は有田１丁目37－７番地に所在する。調査対象面積は527㎡である。

当該地は有田地区の最高所地区の西側に位置する。標高は東が約10m，西が約８ｍを測り，東から西へ緩く傾斜する地形である。当該地点の北側隣接地の第12次調査地点は，昭和42年～43年と昭和53年に調査が２度行なわれており，弥生時代中期の土坑や古墳時代前期の竪穴住居跡，奈良時代の炉跡，掘立柱建物等が検出されている。又，東側30m隔てた第57次調査地点では，古墳時代前期の竪穴住居跡が検出されている。

当該地の発掘調査の契機は昭和54年３月に当該地に対する事前調査願が文化課に提出されたことに始まる。協議の結果，発掘調査を昭和55年９月26日～10月29日迄実施した。

当地点の遺構面は鳥栖ローム層である。表土は耕作土であるが，西側では耕作土の下に黒褐色土の包含層が存在する。南西端は段落ちがあり，谷部と思われる。主な検出遺構は掘立柱建物34棟，土坑８基，溝状遺構などである。他に地下水の流路と思われるような不定形土坑などもあった。出土遺物は多くないが，弥生時代から中世までの遺物が出土している。

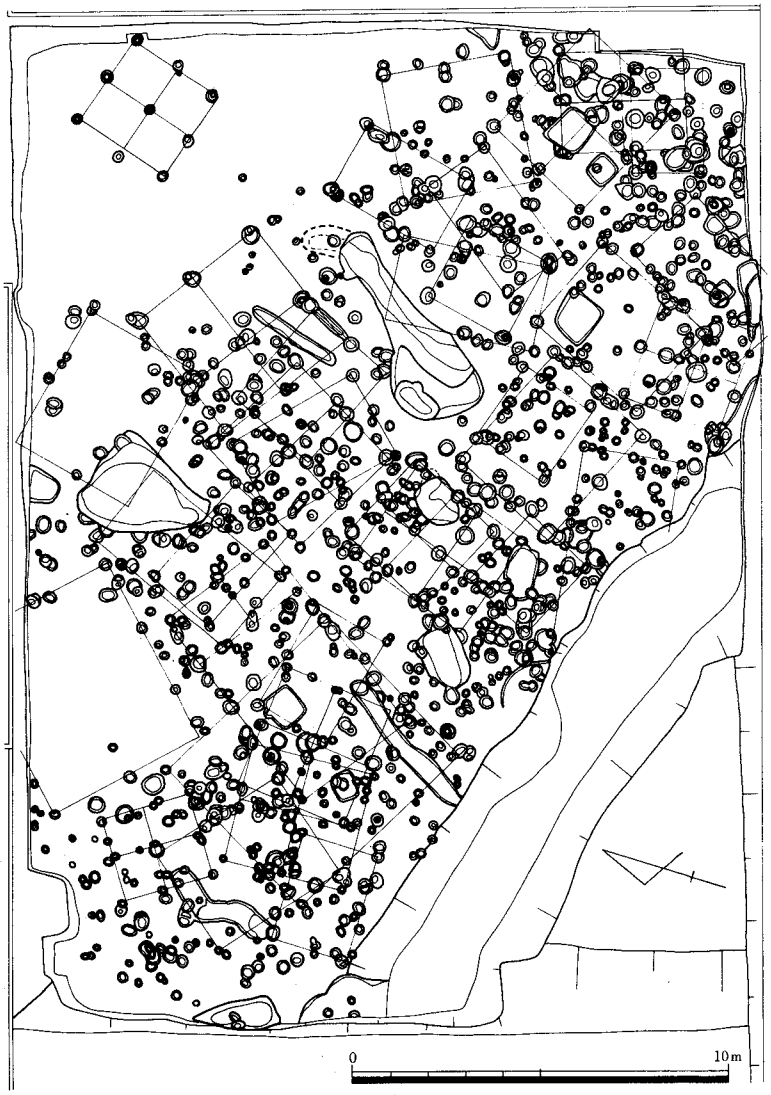


Fig.33　第39次調査遺構配置図（1/200）

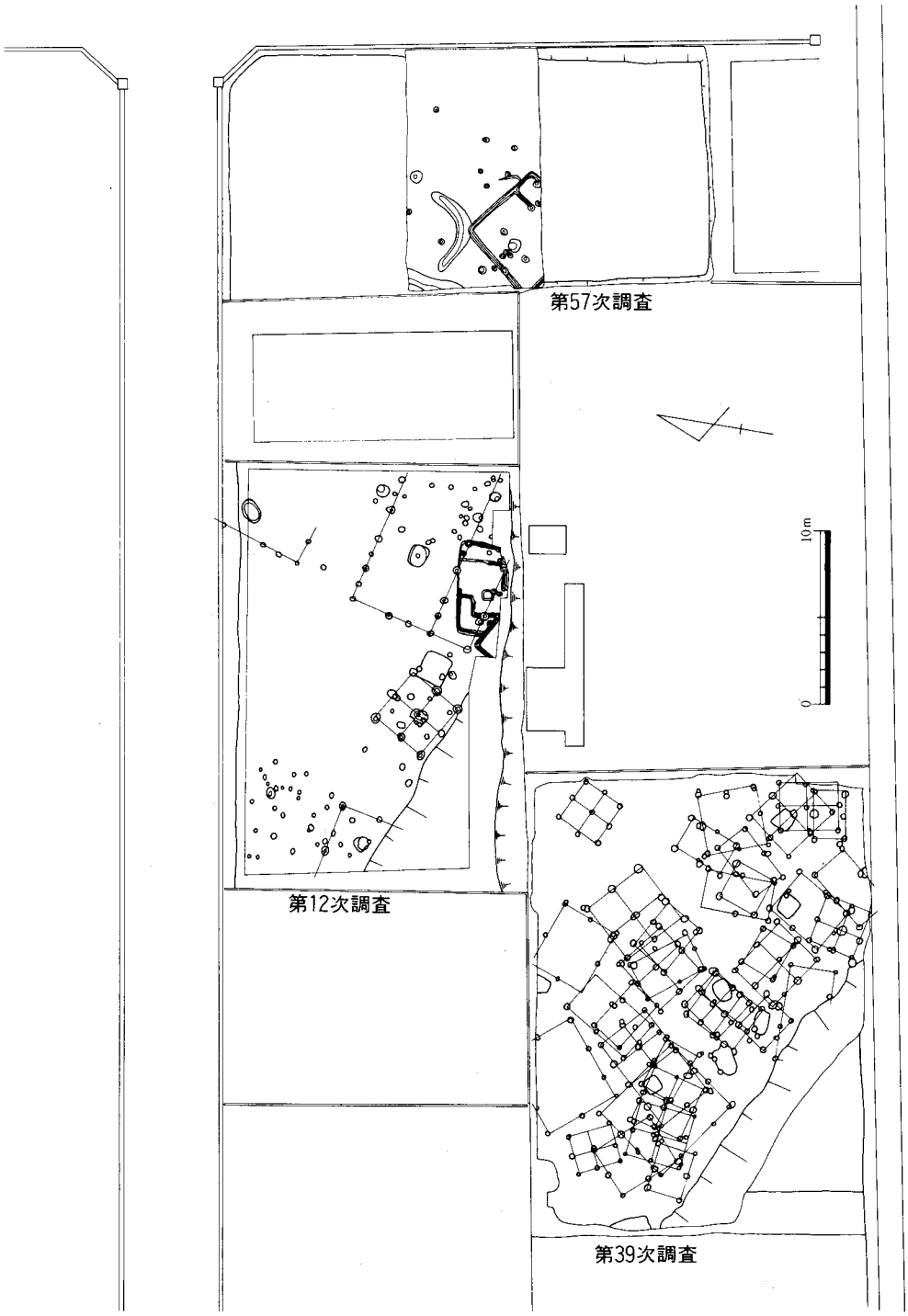


Fig.34　第39次調査周辺発掘調査地点配置図（1/400）

2) 検 出 遺 構

土　坑

1号土坑 (Fig.35, PL.24)

調査区南東隅で検出した。北西隅をPitで切られる。長さ122cm，幅104cm，現存の深さ35cmを測る。平面形は不整方形を，断面形は逆台形を呈する。長軸方位をN64°Wに置く。底は北側に向ってやや低くなる。覆土は黒褐色粘質土に褐色の地山粒子を含むが，土層にほとんど変化がない。遺物は覆土中より須恵器，土師器，高台付椀，糸切りの土師皿の細片，鉄滓1が出土した。

2号土坑 (Fig.35, PL.24)

長さ119cm，幅116cm，現存の深さ35cmを測る。平面形は不整方形，断面は逆台形を呈する。長軸方位をN69°Wに置く。底面はほぼ水平である。北東隅は根石を持った柱穴で切られている。覆土は黒褐色粘質土に地山粒子を含むが，土層に変化がない。遺物の出土は無いが，1号土坑と規模，形態，堆積土の状態も類似している。

3号土坑 (Fig.35, PL.24)

長さ127cm，幅96cm，現存の深さ97cmを測る。平面形は不整の楕円形を呈する。長軸方位はN52°Eに置く。底面は掘りすぎており，本来は水平であろう。底面の南隅には径20cmの角礫が3個あった。壁は直立か又はやや内傾し，断面は箱形もしくは袋状に近い形状を呈す。遺物は奈良～平安時代の須恵器，土師器細片，中世土師皿，青磁片などがある。

4号土坑 (Fig.35, PL.25)

長さ94cm，幅92cm，現存の深さ28cmを測る。平面形は方形の土坑である。長軸方位をN63°Eに置く。壁はほぼ直立し，底面もほぼ水平である。覆土は黒褐色粘質土を主体とするが，多量の木炭や焼土ブロックを混入していた。北隅に押しつぶれた状態で須恵器蓋(21，22)，土師器甕（24～26）などが完形で出土した。いずれも奈良時代の土器である。8号掘立柱建物の中に囲まれており，主軸方位もほぼ一致する。

5号土坑 (Fig.36, PL.25)

長さ164cm，幅120cm，現存の深さ49cmを測る。平面形は隅丸方形を呈する。長軸方位はN41°Eに置く。壁は直立に近い。底面は2段掘りで，南側が1段深くなる。覆土は暗茶褐色粘質土に地山粘土ブロックを混入する。遺物は弥生中期後半の小型壺や断面M字形の突帯を持つ甕の破片が出土している。小型壺を副葬されたものと考えれば5号土坑は土坑墓の可能性がある。

6号土坑 (Fig.36, PL.26)

5号土坑の東側で検出した。一部掘りすぎもあるが，長さ143cm，幅84cm，現存の深さ65cmを測る。平面形は隅丸方形を呈する土坑である。長軸方位はN84°Eに置く。断面形は船底形を

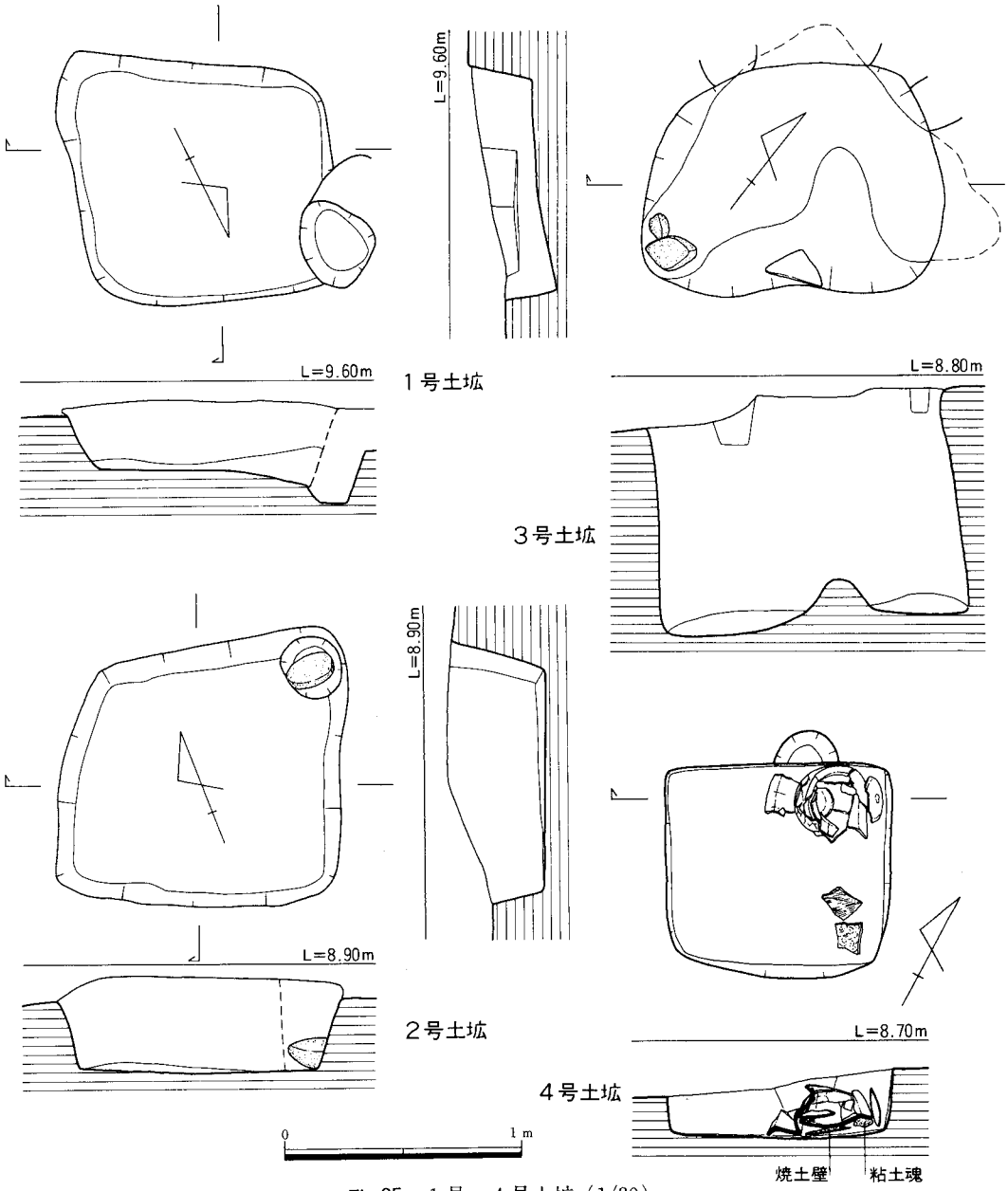


Fig.35　1号～4号土坑（1/30）

呈す。遺物の出土はない。形態から考えて土坑墓の可能性がある。

7号土坑（Fig.36，PL.26）

北側境界地で検出した。現存長は100cm，幅68cm，深さ43cmを測る。床面は掘りすぎており，

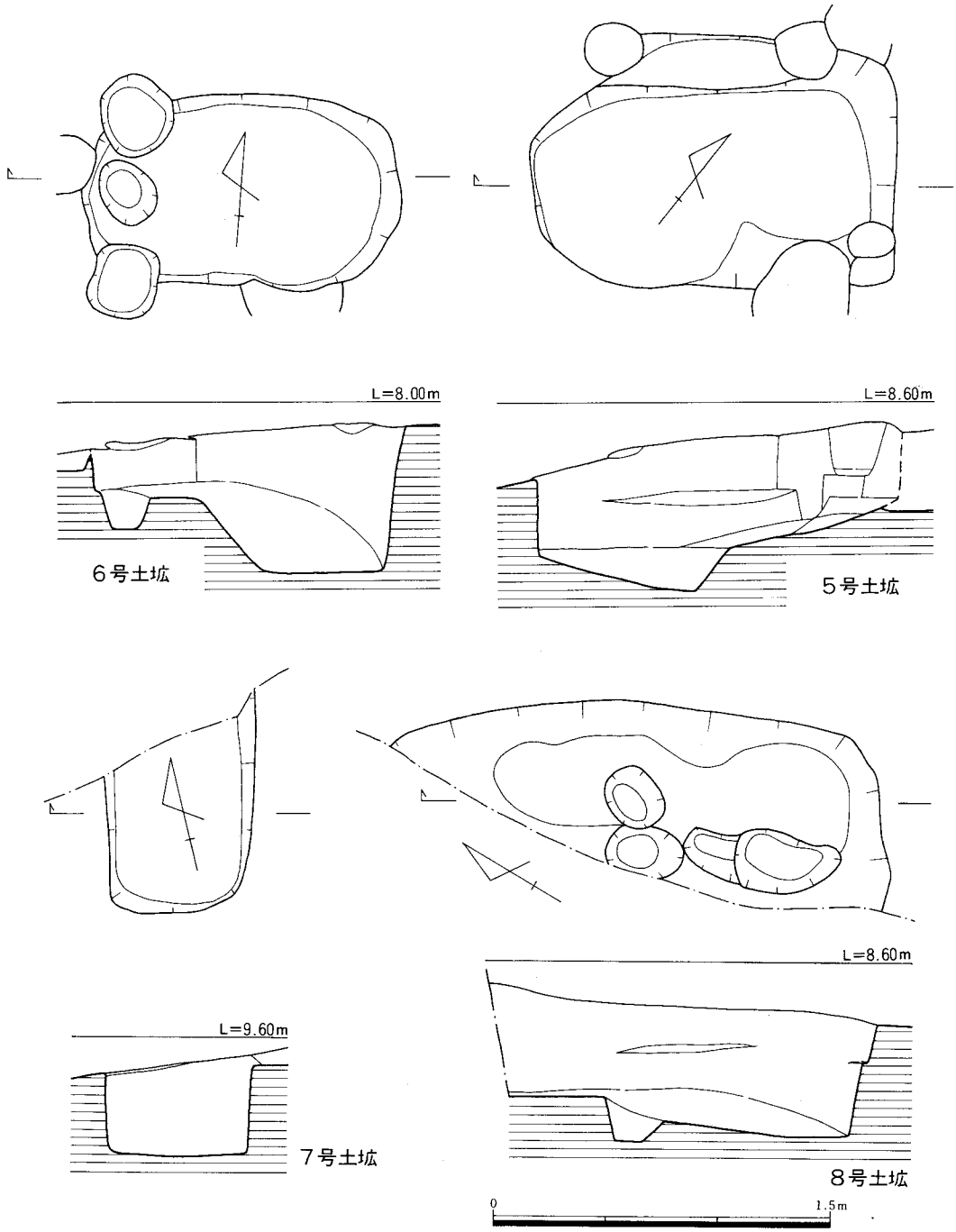


Fig.36　5号～8号土坑（1/30）

土層断面観察によっている。平面形は隅丸長方形を，断面は箱形を呈す。長軸方位はN13°Eに置く。覆土は黒褐色粘質土に褐色土を少量混入する。遺物は須恵器，土師器，瓦質土器の細片が出土している。中世の時代が考えられる。

8号土坑（Fig.36）

西側境界地で検出したため，全体の形状は不明である。現存長は2.1ｍ，現存幅85cm，現存の深さ56cmを測る。平面形は隅丸長方形を，断面形は逆台形を呈する。数個のPitと切り合うため底面はかなり凸凹がある。底面は南東側に低くなっている。土坑内のPit 80より出土した土師器椀は9世紀後半が考えられる。この土坑の時期を考える手懸りとなり得る。その他，鉄滓が3個出土している。

掘立柱建物（Fig.37）

34棟検出した。柱穴数が多く，切り合いが多いので，調査中に確認しえたのは1棟のみである。その他は図上復元によっている。

1号掘立柱建物（Fig.38，PL.24）

調査区の北東隅で検出した。主軸方位をN18°30′Eに置く2間×2間の総柱の建物である。梁行全長は2.7m，桁行全長2.7mを測る。

2号掘立柱建物（Fig.38）

西側段落ち際で検出した。33号掘立柱建物を切り，主軸方位をN88°Wに置く，1間×2間の建物で，梁行全長は2.0m，桁行全長は2.75mを測る。桁行間の中間柱は若干西へ寄っている。

3号掘立柱建物（Fig.38）

主軸方位を磁北に置く，2間×2間の建物である。梁行全長3.15m，桁行全長3.3mを測る。梁行の柱間隔は不揃いである。掘方より時期不明の土師器細片が出土した。

4号掘立柱建物（Fig.38）

西側隅で検出した。35号掘立柱建物と切り合う。主軸方位をN32°Wに置く2間×2間の建物である。梁行全長2.2m，桁行全長2.5mを測る。

5号掘立柱建物（Fig.39）

西側段落ち際で検出した。主軸方位をN54°30′Wに置く，3間×3間の側柱だけの建物である。梁行全長は5.0m（16.7尺），桁行全長は5.8m（19.3尺）を測る。弥生中期～古墳時代迄の土器の細片が出土している。

6号掘立柱建物（Fig.38）

調査区西側で検出した。7号掘立柱建物に切られ，主軸方位をN83°30′Wに置く，2間×2間の総柱の建物であるが，南東隅柱は確認できなかった。梁行全長3.0m，桁行全長3.4mを測る。

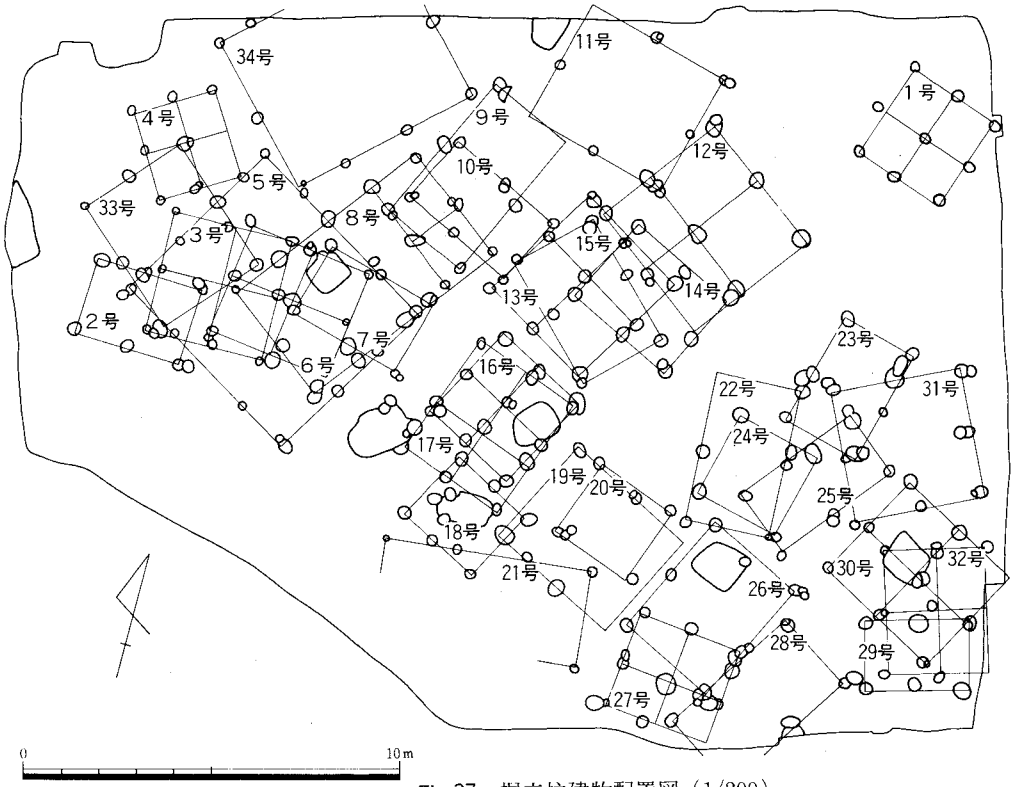


Fig.37　掘立柱建物配置図（1/200）

7号掘立柱建物（Fig.38）

6号掘立柱建物を切る。主軸方位をN74°Wに置く，1間×2間の建物である。梁行全長2m，桁行全長3.15mを測る。糸切りの土師皿の細片等が出土している。

8号掘立柱建物（Fig.39）

2間×4間の建物である。主軸方位をN38°Eに置く，梁行全長3.4m，桁行全長6.0mを測る。北側は間柱，束柱等があり，間仕切があったと考えられる。弥生式土器，中世土師皿の細片が各1点，鉄滓が3点出土している。

9号掘立柱建物（Fig.39）

主軸方位をN27°Eに置く1間×2間の建物である。梁行全長2.4m，桁行全長4.5mを測る。梁行間は8尺で，間隔が広いため間柱が入る。北西隅柱はPit 36に切られ消滅する。

10号掘立柱建物（Fig.39）

主軸方位をN61°30′Wに置く，1間×2間の建物である。梁行全長2.05m，桁行全長3.3mを測る。

11号掘立柱建物（Fig.39）

12号掘立柱建物に切られ，主軸方位をN75°30′Wに置く，2間×2間の側柱の建物である。

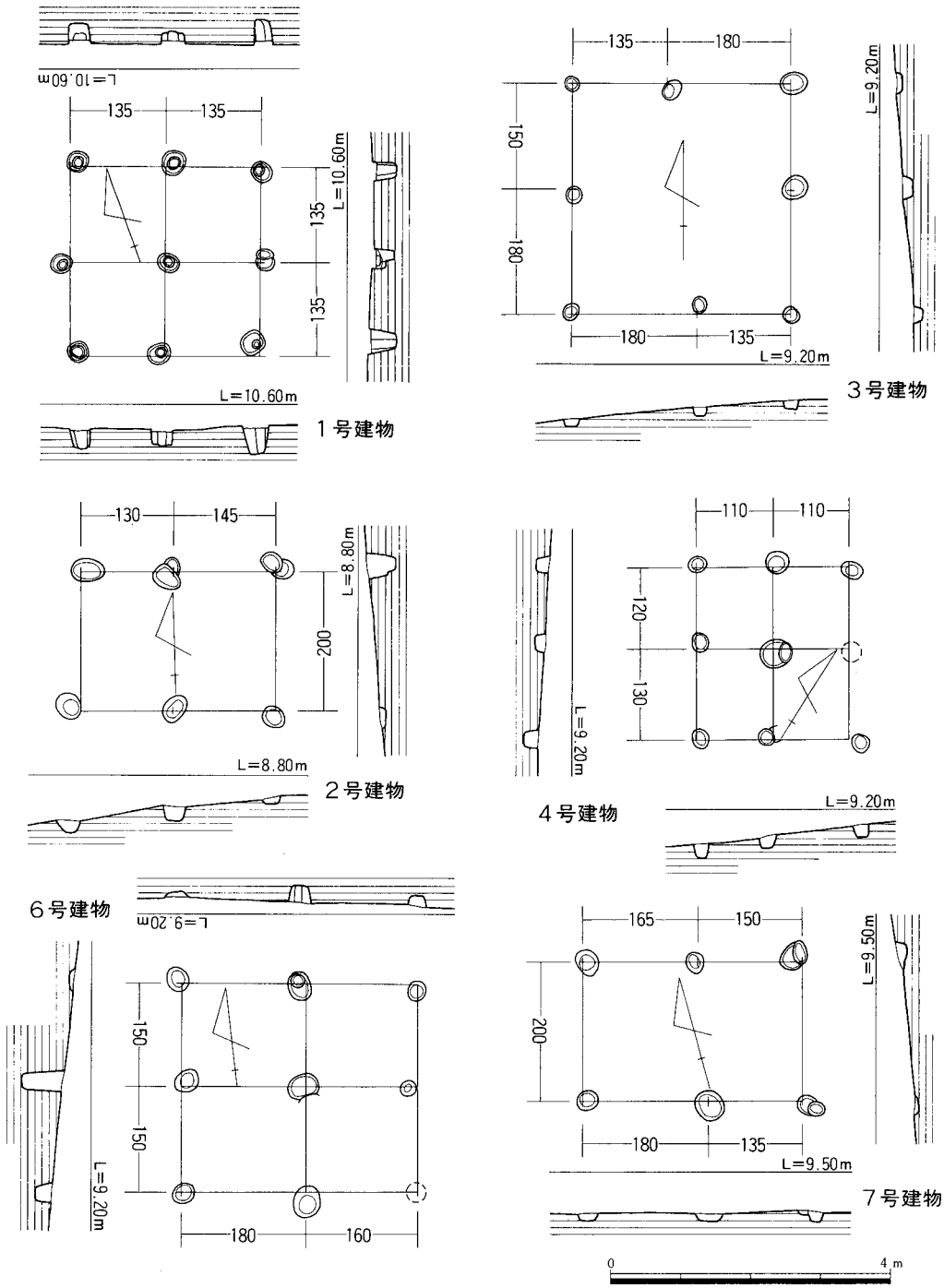


Fig.38　1号～4号・6号・7号掘立柱建物（1/100）

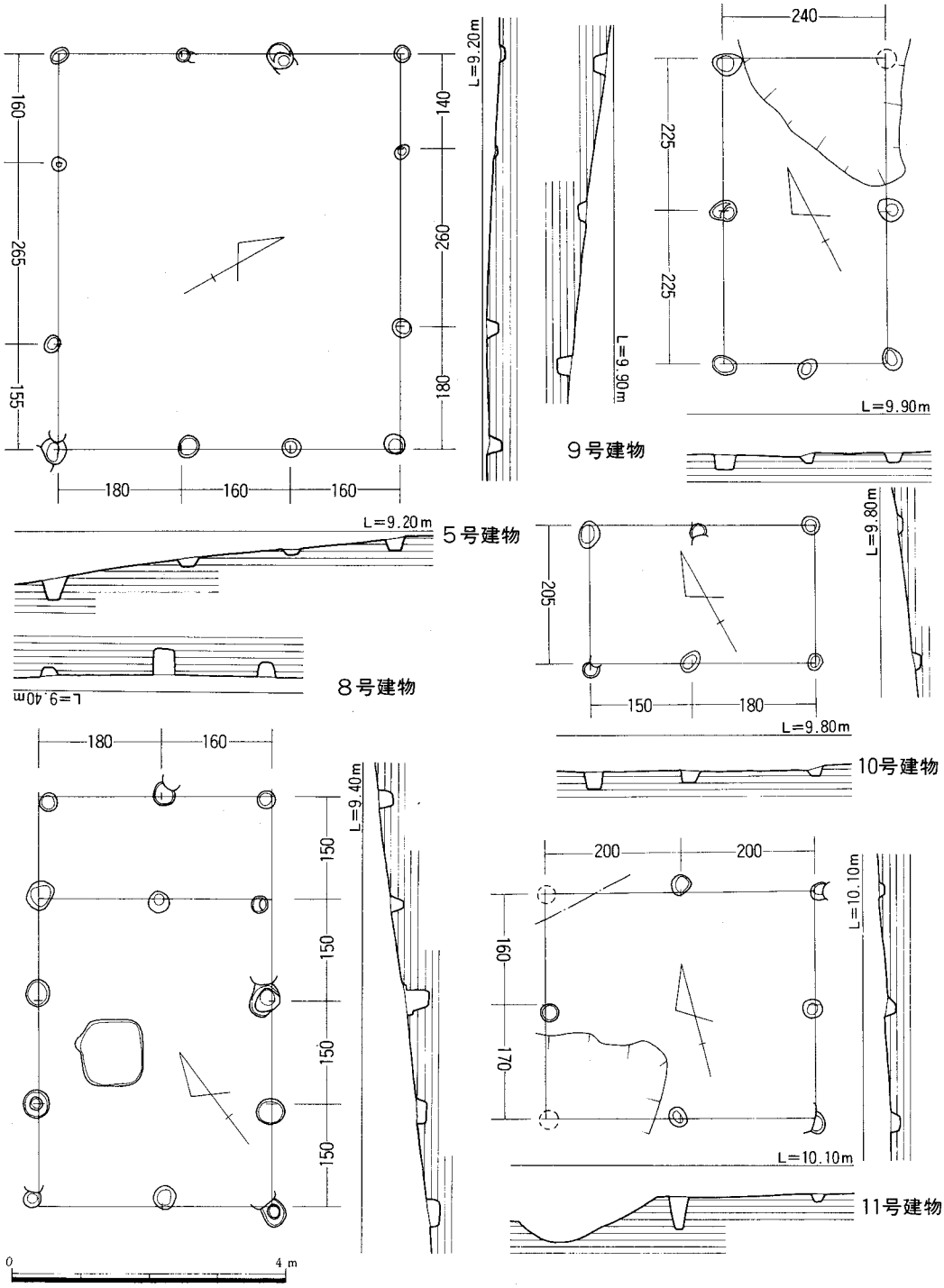


Fig.39　5号・8号・9号～11号掘立柱建物（1/100）

梁行全長3.3m，桁行全長4.0m を測る。南東隅柱は Pit 36に切られ確認できなかった。

12号掘立柱建物（Fig.40）

11，14号掘立柱建物と切り合う。主軸方位をN38°Eに置く，2間×2間の総柱の建物である。梁行全長3.85m，桁行全長3.95m を測る。しっかりとした柱穴である。

13号掘立柱建物（Fig.37）

15号掘立柱建物と切り合う。主軸方位をN33°Eに置く，2間×2間の総柱の建物である。梁行全長3.3m，桁行全長3.55m を測る。柱穴より古墳時代の須恵器，中世の土師器細片が出土した。

14号掘立柱建物（Fig.37）

12号掘立柱建物に切られる。1間×2間で，主軸方位をN62°30′Wに置く建物である。梁行全長2.4m，桁行全長3.2m を測る。柱穴より古墳時代の須恵器・土師器，中世の土師皿や土鍋細片が出土している。

15号掘立柱建物（Fig.40）

16号掘立柱建物を切る。主軸方位をN42°Wに置く，2間×2間の側柱だけの建物である。梁行全長2.4m，桁行全長3.8m を測る。桁行の間柱は西側では南へ，東側は北へやや寄る。

16号掘立柱建物（Fig.40）

15号掘立柱建物より切られる。主軸方位をN58°Wに置く，2間×2間の総柱の建物である。梁行全長2.6m，桁行全長2.7m を測る。

17号掘立柱建物（Fig.40）

16号掘立柱建物を切る。主軸方位をN21°30′Eに置く，2間×2間の総柱の建物である。各桁間の間隔は南側がやや狭い。柱穴より弥生時代～平安頃の土器細片が数点出土している。

18号掘立柱建物（Fig.37）

19号掘立柱建物と切り合う。主軸方位をN58°Wに置く，2間×2間の建物である。梁行全長2.1m，桁行全長2.4m を測る。内側に6号土坑が存在するため中央束柱が確認できなかった。柱穴より須恵器の坏底部片が出土した。

19号掘立柱建物（Fig.37）

18号掘立柱建物を切る。主軸方位をN62°30′Wに置く，2間×2間の総柱の建物である。梁行全長3.0m，桁行全長3.1m を測る。梁行方向の柱筋は通らない。

20号掘立柱建物（Fig.37）

1間×1間で，主軸方位をN74°Wに置く建物である。梁行全長2.1m，桁行全長2.4m を測る。

21号掘立柱建物（Fig.41）

1間×3間の側柱だけの建物と考えられるが，南側段落ちのため詳細は不明である。現存長は桁行2.7m，梁行5.5m を測る。主軸方位はN 84°Eに置く。

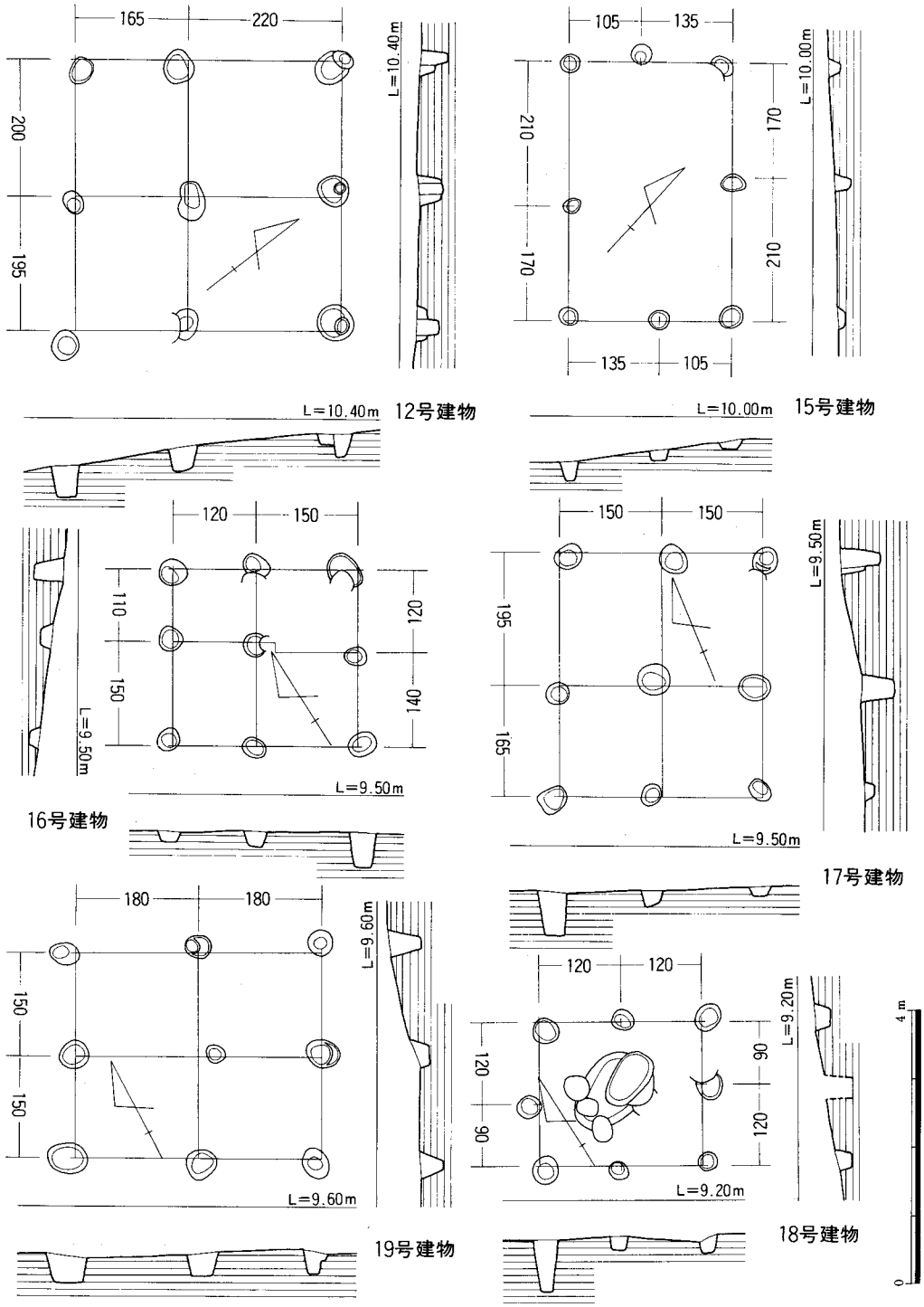


Fig.40　12号・15号～19号掘立柱建物（1/100）

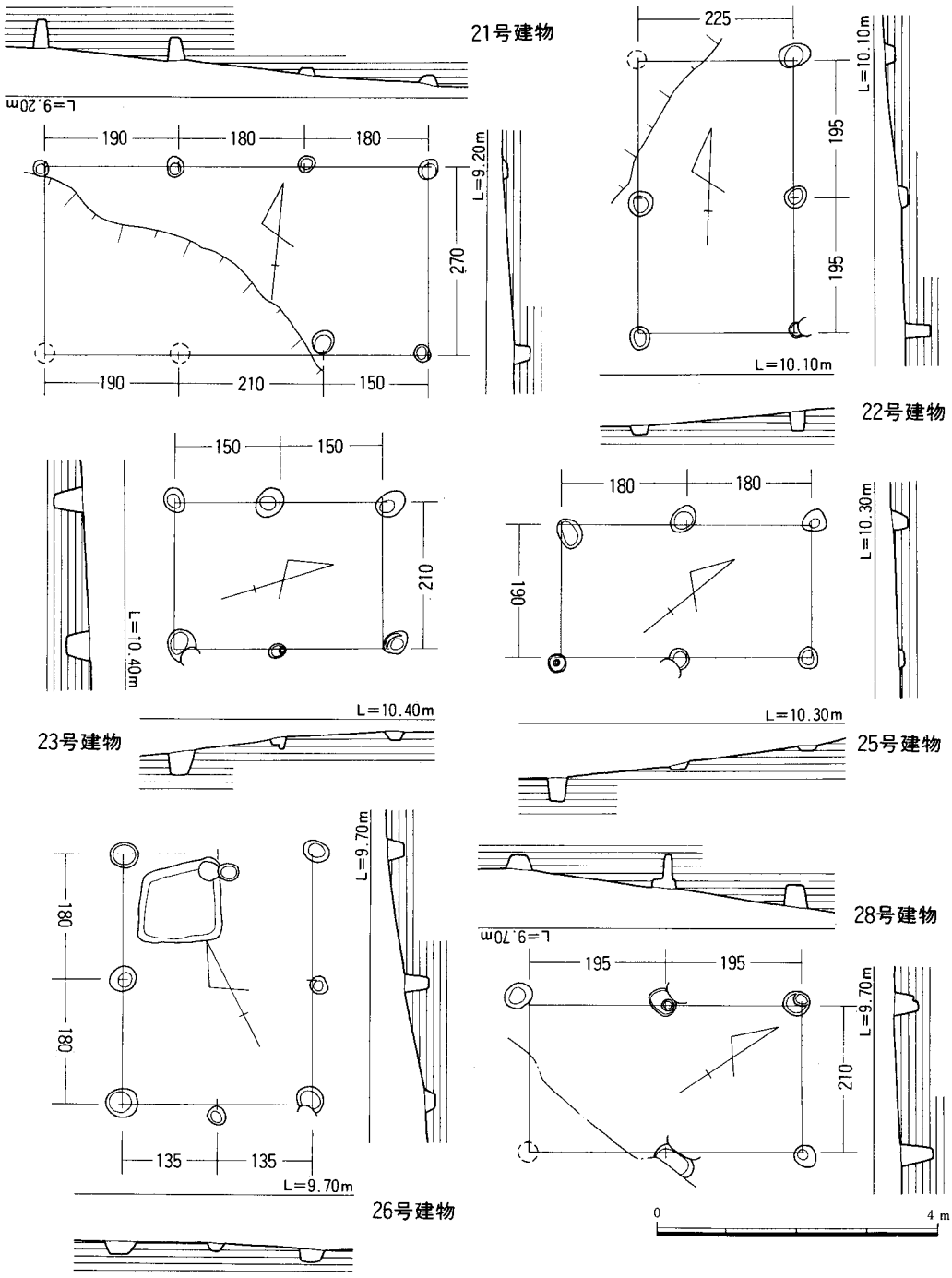


Fig.41　21号～23号・25号・26号・28号掘立柱建物（1/100）

22号掘立柱建物（Fig. 41）

24号掘立柱建物に切られる。主軸方位をN2°30′Wに置く，1間×2間の建物である。北西隅柱はPit 36に切られる。梁行全長2.25m，桁行全長3.9mを測る。

23号掘立柱建物（Fig. 41）

主軸方位をN16°30′Eに置く，1間×2間の建物である。梁行全長2.1m，桁行全長3.0mを測る。

24号掘立柱建物（Fig. 37）

22号建物を切る。主軸方位をN14°Eに置く，1間×1間の建物である。梁行全長2.1m（7尺），桁行全長2.4m（8尺）を測る。弥生中期と思われる土器片が1～2点出土した。

25号掘立柱建物（Fig. 41）

主軸方位をN38°Eに置く，1間×2間の建物である。梁行全長1.9m，桁行全長3.6mを測る。

26号掘立柱建物（Fig. 41）

27号掘立柱建物を切る。主軸方位をN26°Eに置く，2間×2間，側柱だけの建物である。梁行全長2.7m，桁行全長3.6mを測る。梁行は柱筋が通らない。

27号掘立柱建物（Fig. 37）

26号掘立柱建物に切られる。主軸方位をN9°Eに置く，2間×2間の総柱の建物である。南側境界地に位置し，南東隅柱を確認できなかった。梁行全長2.7m，桁行全長2.7mを測る。間柱の位置が桁行，梁行とも一方にやや片寄る。

28号掘立柱建物（Fig. 41）

南側道路との境界地で検出した。主軸方位をN34°Eに置く，1間×2間の側柱だけの建物である。梁行全長2.1m，桁行全長3.9mを測る。柱穴から古墳時代土師器，中世の土師皿の細片が出土している。

29号掘立柱建物（Fig. 42）

南側境界地で検出した。主軸方位をN74°Eに置く，1間×2間の建物である。梁行全長1.8mを測る。

30号掘立柱建物（Fig. 42）

調査区の南東隅で検出した。主軸方位をN59°30′Wに置く，2間×2間の総柱の建物である。

31号掘立柱建物（Fig. 42）

23号掘立柱建物に切られる。主軸方位をN64°30′Eに置く，2間×2間の建物である。梁行全長3.3m，桁行全長3.4mを測る。

32号掘立柱建物（Fig. 42）

調査区の南東隅で検出した。主軸方位をN15°30′Wに置く，桁行2間×梁行2間の総柱の建物である。梁行全長は2.75m，桁行全長3.3mを測る。土師器の細片が出土している。

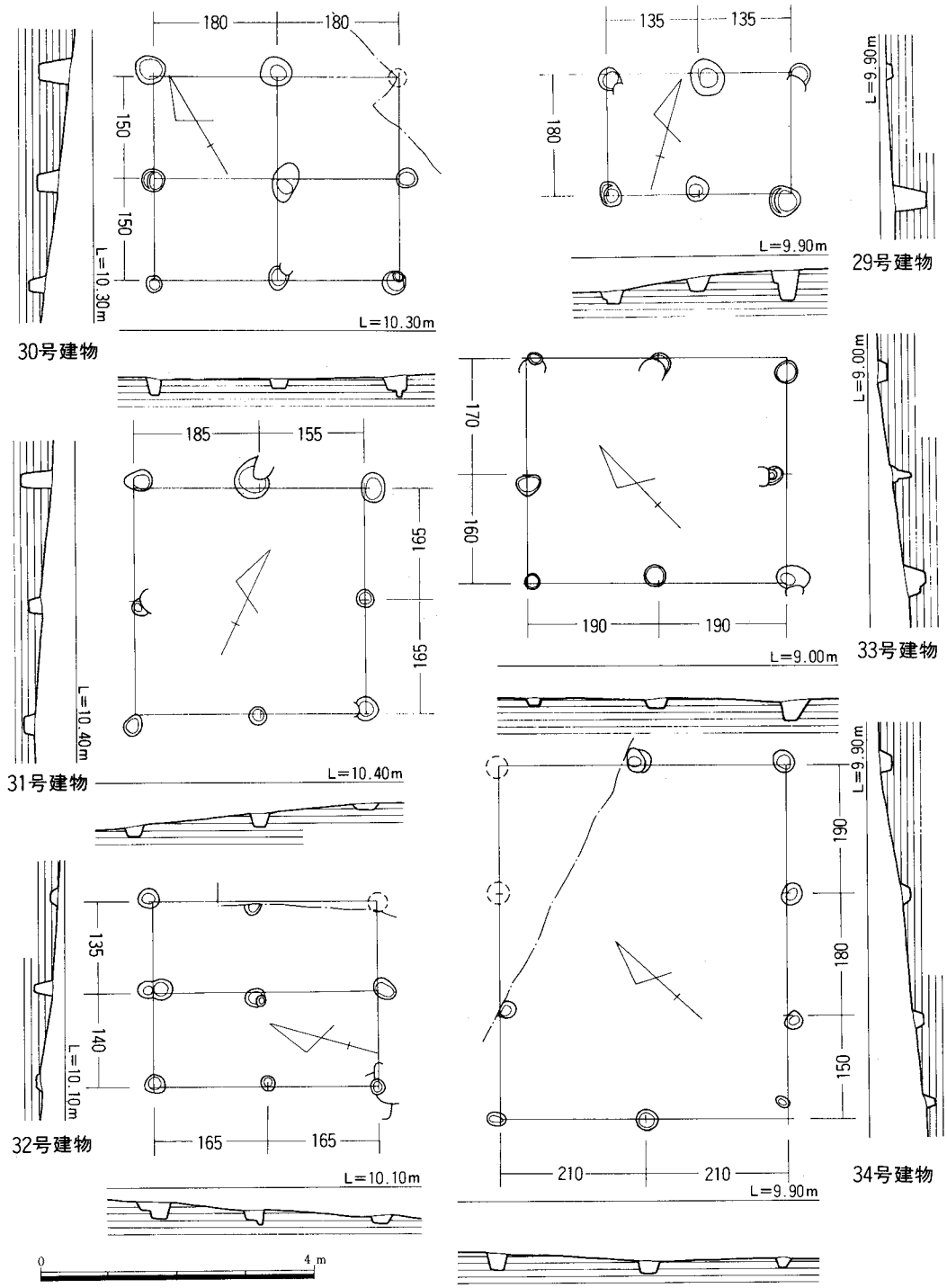


Fig.42　29号～34号掘立柱建物（1/100）

33号掘立柱建物（Fig.42）

調査区の西側で検出した。4号掘立柱建物と切り合う。主軸方位をN47°Wに置く，2間×2

Tab.2　第39次調査掘立柱建物計測表

（単位：cm）

	規模	桁行		梁行		方位	床面積（㎡）	柱穴状態					備考
		実長(尺)	柱間寸法(尺)	実長(尺)	柱間寸法(尺)			Pit数	深さ	長径	短径	柱根径	
1号	2×2	270（9）	4.5・4.5	270（9）	4.5・4.5	N18°30′E	7.29	9	16～40	28～34	24～33	10～20	
2号	2×1	275（9.2）	5・4.3	200（6.6）	6.6	N 88° W	5.50	6	9～43	30～45	25～32		
3号	2×2	330（11）	6・5	315（10.5）	6・4.5	N	10.40	8	7～13	21～40	19～30		中世
4号	2×2	250（8.3）	4.3・4	220（7.4）	3.7・3.7	N 32° W	5.50	8	14～18	23～47	22～38		
5号	3×3	580（19.3）	4.7・8.7・6 5.3・8.8・5.2	500（16.7）	6・5.3・5.3	N54°30′W	29.84	12	4～32	22～43	18～41		古墳時代
6号	2×2	340（11.3）	6・5.3	300（10）	5・5	N83°30′W	10.20	8	4～56	23～46	21～36	18	
7号	2×1	315（10.5）	6・4.5 5・5.5	200（6.6）	6.6	N 74° W	6.30	6	3～12	30～43	18～38		中世
8号	4×2	600（20）	5.5・5.5	340（11.3）	5.3・6	N 38° E	20.40	14	11～33	22～42	21～37	18～20	中世
9号	2×1	450（15）	7.5・7.5	240（8）	8	N 27° E	10.80	6	12～20	30～40	22～32		
10号	2×1	330（11）	6・5	205（6.5）	6.5	N61°30′W	6.77	6	6～25	23～39	20～30		
11号	2×2	400（13.2）	6.6・6.6	330（11）	5.3・5.6	N75°30′W	13.20	6	7～48	28～31	23～26		
12号	2×2	395（13.2）	6.6・6.5	385（12.8）	7.3・5.5	N 38° E	15.21	9	32～46	33～57	22～53	12～23	
13号	2×2	355（11.8）	6・5.8 6.5・5.3	330（11）	6・5 5.5・5.5	N 33° E	11.72	9	9～28	18～44	16～38		中世
14号	2×1	320（10.6）	5.3・5.3	240（8）	8	N62°30′W	7.68	6	8～50	38～46	32～38		中世
15号	2×2	380（12.6）	7・5.6	240（8）	4.5・3.5	N 42° W	9.12	8	10～28	25～38	20～31		
16号	2×2	270（9）	5・4	260（8.6）	5・3.6 4.6・4	N 58° W	7.02	9	14～42	32～56	26～40		
17号	2×2	360（12）	6.5・5.5	300（10）	5・5	N21°30′E	10.80	9	15～58	34～48	25～44		平安時代
18号	2×2	240（8）	4・4	210（7）	4・3	N 58° W	5.04	8	11～78	28～44	26～36		古墳時代
19号	2×2	360（12）	6・6	300（10）	5・5	N62°30′W	10.80	9	20～45	27～58	25～45		
20号	1×1	240（8）	8	210（7）	7	N 74° W	5.04	4	14～22	26～40	23～33		
21号	3×1	550（18.3）	6.3・6・6 6.3・7・5	270（9）	9	N 84° E	14.85	6	6～40	22～32	20～30		
22号	2×1	390（13）	6.5・6.5	225（7.5）	7.5	N2°30′W	8.78	5	10～36	20～47	20～36		
23号	2×1	300（10）	5・5	210（7）	7	N16°30′E	6.30	6	15～40	25～45	19～40	8	
24号	1×1	240（8）	8	210（7）	7	N 14° E	5.04	4	28～42	28～48	25～43		
25号	2×1	360（12）	6・6	190（6.3）	6.3	N 38° E	6.84	6	6～34	26～46	25～32	4	
26号	2×2	360（12）	6・6	270（9）	4.5・4.5	N 26° E	9.72	8	10～34	26～47	24～40		
27号	2×2	270（9）	5・4	270（9）	4・5	N 9° E	7.29	8	16～65	27～54	18～50		
28号	2×1	390（13）	6.5・6.5	210（7）	7	N 34° E	8.19	5	20～50	30～58	28～34	15	中世
29号	2×1	270（9）	4.5・4.5	180（6）	6	N 74° E	4.86	6	10～48	30～53	29～50		
30号	2×2	360（12）	6・6	300（10）	5・5	N59°30′W	10.80	8	13～45	25～60	22～40	14	
31号	2×2	340（11.3）	6.2・5.2	330（11）	5.5・5.5	N64°30′E	11.22	8	10～46	28～50	24～35		
32号	2×2	330（11）	5.5・5.5	275（9.2）	4.7・4.5	N15°30′W	9.08	8	7～28	20～50	18～38	14	中世
33号	2×2	380（12.7）	6.3・6.3	330（11）	5.3・5.7	N 47° W	10.95	8	8～30	26～50	22～40		中世
34号	3×2	520（17.3）	5.6・6.3	420（14）	7・7	N 46° E	22.95	8	5～28	26～42	23～38		

間の建物である。梁行全長 3.3m，桁行全長3.8m を測る。柱穴より糸切りと思われる土師皿の細片が出土している。

34号掘立柱建物（Fig.42）

調査区北側境界地で検出したため北側の隅柱を確認できなかった。主軸方位をN46°Eに置く，2間×3間の側柱だけの建物である。梁行全長 4.2m，桁行全長 5.2m を測る。

溝 状 遺 構

特に図示していないが，全部で4条検出した。いずれも北から南へ流れる小溝である。規模は小さく最大のもので長さ4m，幅0.5m程度である。深さ10～15cmと浅い。遺物の出土はなかった。

Pit 36

調査区中央北側で検出された。長径3.6m，短径2.7m，最大の深さ 1.06m を測る，平面形は不整三角形を呈する土坑である。覆土中よりFig.43－3，6，9などの弥生時代から平安時代迄の土器片や，鉄製品の小片，鉄滓16個，黒曜石片6個が出土した。

3) 出 土 遺 物

Pit 出 土 遺 物 （Fig.43，PL.27）

1はP72，2はP3，4・8はP6，3・6・9はP36，5はP79，7はP66の出土である。ここでは図示していないがP73から鎹片が出土している。

弥生式土器（1～5，8～10）

甕（1～5，8，9）　1は復元口径26cmを測る。最大径が胴部にある。頸部に一条の断面三角形の突帯がめぐる。2は鋤形の口縁部を有し，復元口径30cmを測る。3～5は復元口径がそれぞれ21.8cm，29cm，25.4cmを測る。いずれも口縁部が“くの字”状を呈し，最大径が口縁部にある。胎土は1が精良，他は1～2mmの砂を混入する。色調は4，5がくすんだ赤褐色，他は黄褐色を呈す。

椀（10）　口径13.2cm，器高8.8cmを測る。体部は丸味をもち，内面はヨコナデ，外面はタテハケを施す。胎土に1～3mmの砂を混入し，色調は黄褐色を呈す。

土師器

甕（6，7）7は復元口径32cmを測る。胴部外面はタテハケ，内面はヘラケズリ調整である。口縁部が〝くの字〟形を呈す。胎土に2～3mmの砂を含み，色調は黄褐色を呈す。6は復元口径23.1cmを測る。口縁部は如意形を呈し，胴部外面にタテ，ヨコ方向の叩きを有する。海の中道遺跡出土の玄海灘式製塩土器Ⅰ類といわれるものである。8世紀後半から9世紀前半に比定され[註1]

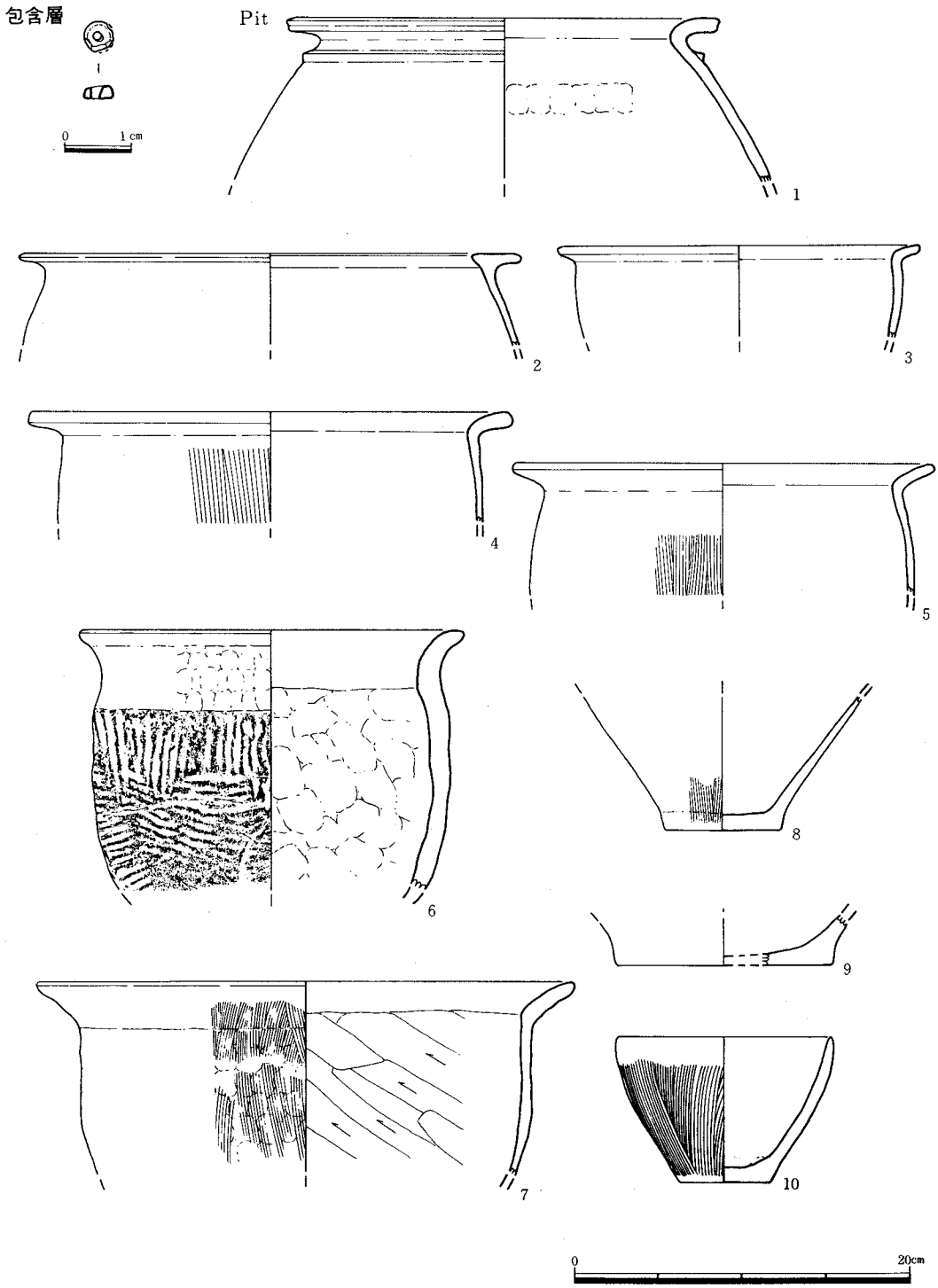


Fig.43　包含層，Pit出土遺物（1/1，1/4）

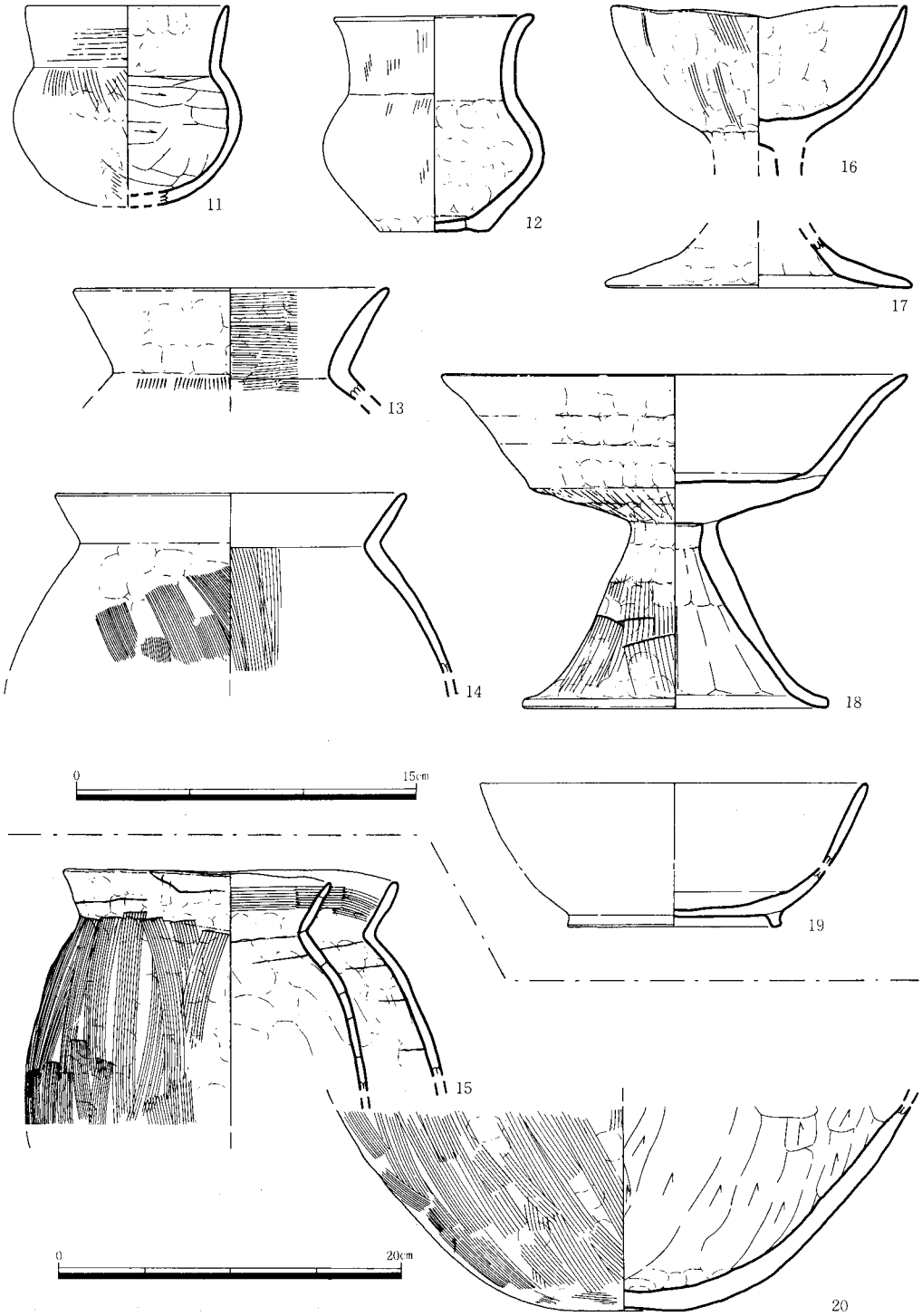


Fig.44　出土遺物（1/3，1/4）

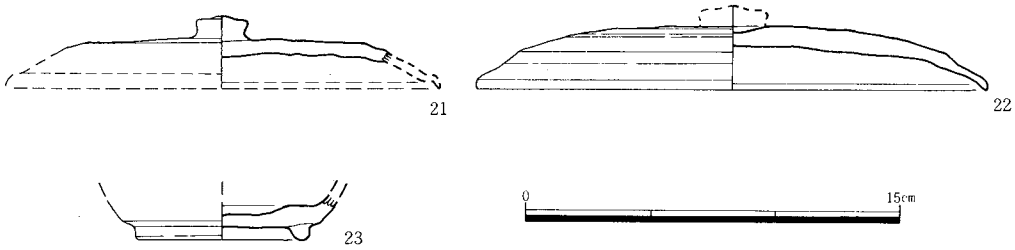


Fig.45　4号土坑出土遺物（1/3）

ている。胎土は1～2mmの砂を多く混入し，焼成は良好。色調は暗褐色を呈す。

鉄　滓

各 Pit より合計33個出土している。

包含層出土遺物（Fig.44，PL.27）

土師器

小型丸底壺（11）口径9.0cm，器高8.8cmを測る。胴部外面はタテハケ後ナデ調整，内面はヘラケズリである。胎土はやや砂粒を含み，色調は黄褐色を呈する。

甕（13～15，20）　復元口径は13は13.9cm，14は15.5cm，15は17.5cmを測る。いずれも口縁部内面に稜を持ち〝くの字〟状に外反する。外面はタテハケ調整である。15，20の胎土には3mm迄の砂粒を多く混入する。色調は13，14がくすんだ黄褐色，15，20は黒灰色を呈す。

高坏（16～18）　16は口径13.1cmを測る。椀形の坏身に脚を付けるものである。17は脚裾部径12.5cmを測る。18は復元口径20.5cm，器高14.7cmを測る。胎土はいずれも1～3mmの砂粒を混入し，色調は16が黒灰色，17がくすんだ黄褐色，18が赤褐色～黄褐色を呈す。

椀（19）　口径17.1cm，器高6.4cmを測る。内外面ともヨコナデ調整。胎土は精選され，焼成はややあまい。色調は赤味を帯びた黄褐色を呈す。

玉　類

小玉（Fig.43）　滑石製で，直径0.9cm，厚さ0.4cmを測る。色調は灰色を呈する。

4号土坑出土遺物（Fig.45，46，PL.28）

土師器

甕（24～26）　口径は24が26.4cm，25が30cm，26が30.3cmを測る。いずれも口縁部内面に稜を有する。胴部はあまり張らず，最大径が胴部にある。内面はヘラケズリ，外面はタテハケを施す。26の外面には丹塗り痕跡がある。胎土には1～3mmの砂粒を多く含み，色調は24，25が黄褐色，26がやや暗い黄褐色を呈す。

須恵器

坏蓋（21，22）　21は⅔片である。復元口径17.3cm，器高29cmを測る。天井部は平坦で，口縁端部を小さく内側へ折りまげている。天井部にはつまみがつく。胎土に砂粒を含む。色調は青灰色を呈す。22は口径20.4cmを測る。天井部は平坦，口縁端部を小さく折りまげている。天井部に扁平な釦状のつまみがつくと思われる。甕（25）の口縁部を覆うような状態で出土した。胎土に2～3mmの石英粒を含む。焼成はややあまい。色調は赤褐色を呈す。赤焼け土器である。

杯身（23）　断面“コの字状”の低い高台が付く。胎土に砂粒を少し含む。色調は暗青灰色を呈す。

4）小　結

以上，調査概要について述べた。ここでは若干のまとめを述べる。

当該地と北側に隣接する第12次調査地点との境は古墳時代以降の造成によって比高差約2mの段落ちになっている。崖下は整地されており，1号掘立柱建物が存在する。今回，検出した遺構は土坑8基，掘立柱建物34棟，溝状遺構4条，不定形土坑2である。

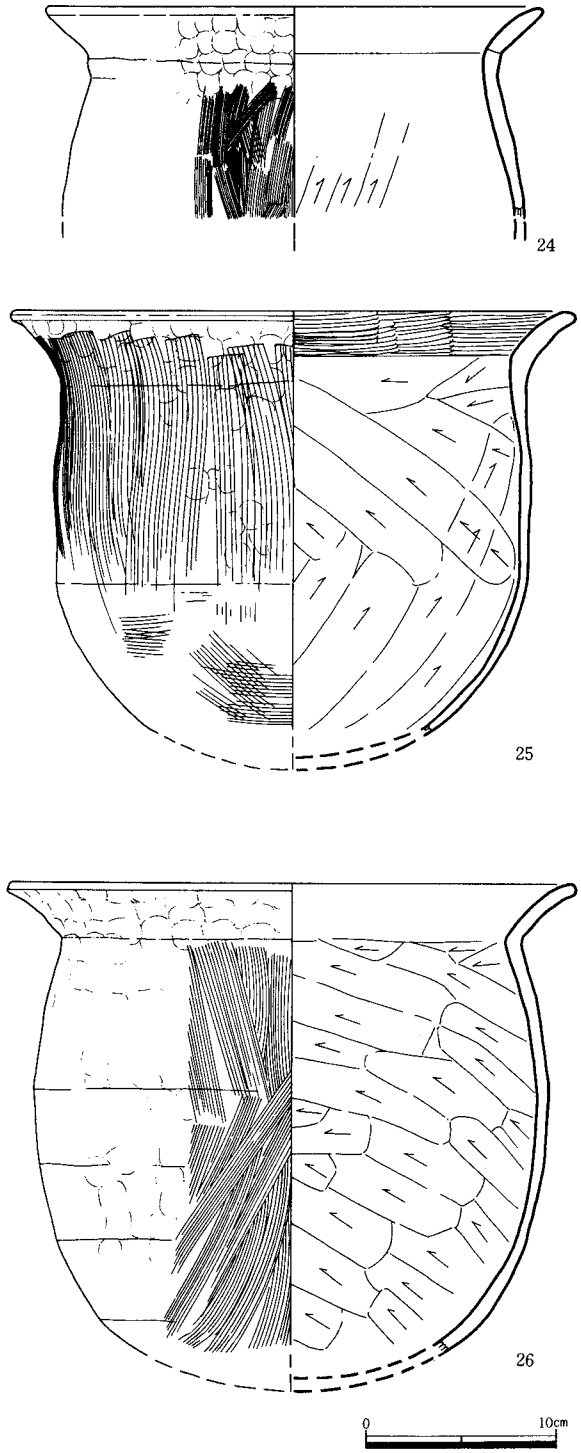


Fig.46　4号土坑出土遺物（1/4）

遺構の時期は大きく3期に分かれる。Ⅰ期は弥生時代中期後半，Ⅱ期は奈良時代，Ⅲ期は鎌倉～室町時代である。

Ⅰ期の遺構には5号土坑，P72がある。

Ⅱ期の遺構には4号土坑がある。4号土坑の中には多量の炭化物と共にほぼ完形の甕形土器がつぶれた状態で出土しており，炉跡と考えられる。8号掘立柱建物の中にあり，第12次調査で検出した奈良時代とされる炉を伴なった1号掘立建物と同様のものかと考えられたが，[註2] 8号掘立柱建物の柱穴P46からは中世の土師器皿の細片が1点出土しており，建物構造について再検討の必要がある。又，不定形土坑P36から出土した製塩土器は第7次調査出土の土錘，第8次調査出土の貝殻が付着した須恵器，第19次調査出土の蛸壺，土錘，第48次調査出土の[註3]浮子[註5]などの各調査地点の漁撈に関連する遺物と合わせて考えると，有田[註4]・小田部の台地上に生活した人々が，海と深く関わりを持っていたことを裏付けるものであろう。

Ⅲ期の遺構には明確な遺物を持つ遺構はない。しかし，7号・14号・15号・28号・33号掘立柱建物の柱穴からは，中世の土師器細片が出土しており，同時期に相当するものと考えられる。

また，本地点では34棟の掘立柱建物が検出されている。その内訳は梁行×桁行＝1×1間が2棟，1×2間が10棟，2×2間が18棟，1×3間が1棟，2×3間が1棟，2×4間が1棟，3×3間が1棟である。掘立柱建物群は調査面積が狭いこともあるが，主軸方向にばらつきがあり仲々まとまりを得ない。16号・17号掘立柱建物のように建て替えも見られる。ただ主軸方向から見れば，大きく東西方向，南北方向の2種類がある。また柱穴出土の遺物から見ても，奈良～平安時代の遺物を含むもの17号・18号掘立柱建物と，中世の遺物を含むもの7号・8号・14号・15号・28号・33号掘立柱建物がある。第12次調査地点との関連で見ると，全体的に建物の規模は小さい。しかし，1号掘立柱建物は第12次調査の2号掘立柱建物と主軸方位はほぼ一致しており，同時期と考えられる。当地点での建物群についての詳細な考察は周辺の調査例の増加を待って今後の課題としたい。

註1．福岡市教育委員会「海の中道遺跡」1982
註2．福岡市教育委員会　昭和53年度調査，現在整理中
註3．福岡市教育委員会「有田・小田部第2集」1982
註4．福岡市教育委員会「有田・小田部第4集」1983
註5．福岡市教育委員会「有田・小田部第5集」1985

3．第51次調査

1）調査地区の地形と概要（付図２）

調査対象地は福岡市早良区有田１丁目23－６番地に所在し，発掘調査対象面積314㎡である。当該地は有田地区の標高12～14m を測る平坦地の北側，台地のくびれ部に位置している。周辺

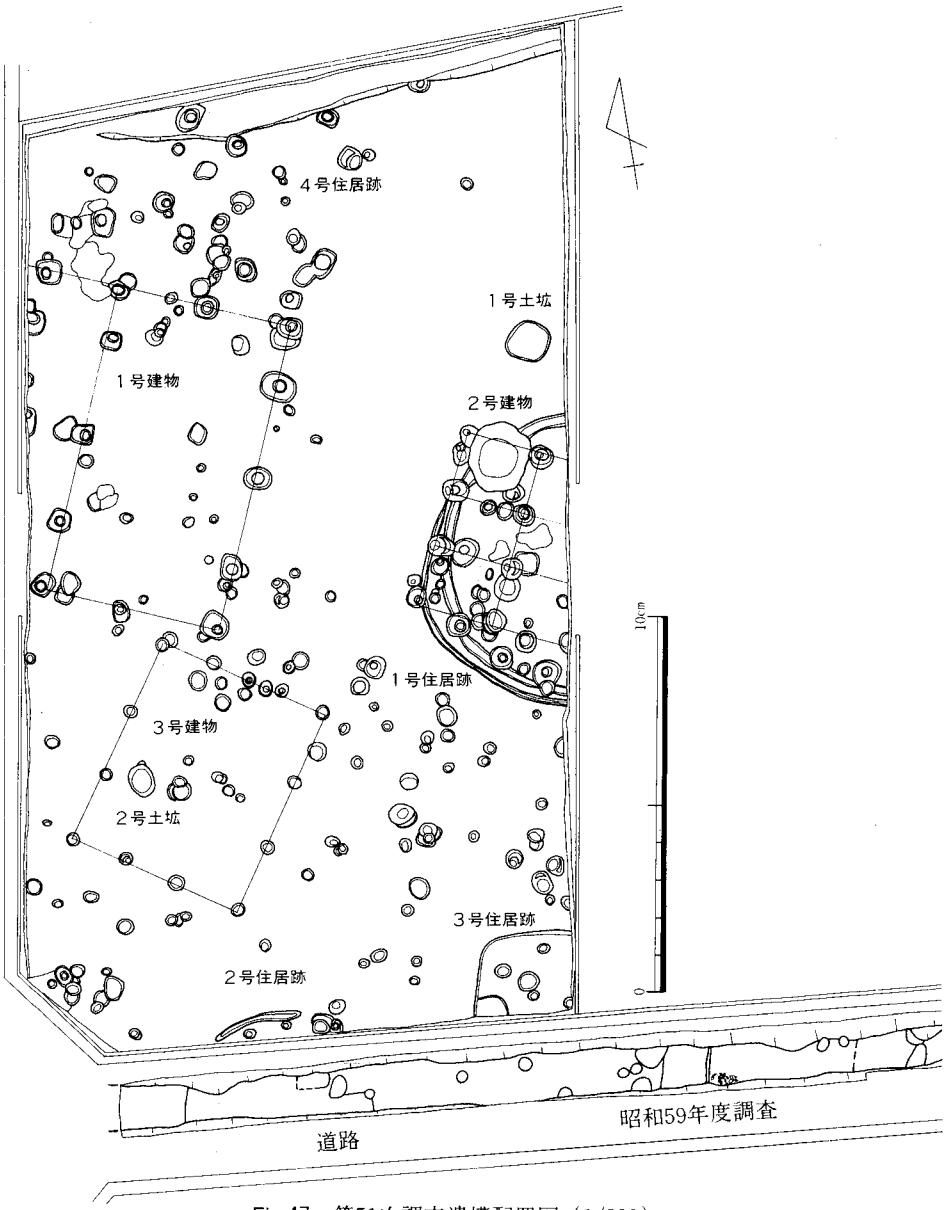


Fig.47　第51次調査遺構配置図（1/200）

では昭和54年度に第30次調査，第71次調査等が実施され，且つ北側に接して，第３次調査が実施されるなど弥生時代～中世迄の遺構の存在を明らかにしている。第３次調査では弥生時代[註1]中期末～後期の集落，古墳時代６世紀頃の集落，古墳時代～奈良時代の掘立柱建物等を検出しており，当該地が第３次調査を補足する資料となり得ると思われた。当該地は駐車場として利用されていたが，今回の開発用途は店舗付住宅である。昭和56年度の国庫補助により発掘調査を行なった。

発掘調査は昭和56年６月15日～７月17日迄実施した。調査は排土処理の関係上２区に分けて行なった。表土の深さは約35cmを測る。遺構は褐色ローム層上面で検出され，標高10.5m を測る。昭和43年の区画整理事業による削平は著しい。

検出した遺構は弥生時代中期末～後期初頭の住居跡４軒，同土坑２，古墳時代住居跡１軒，時期不詳掘立柱建物２棟である。遺物は住居跡から弥生時代の土器，及び鉄器，石器を検出し，掘立柱建物からは弥生時代の土器や古墳時代の土器を検出している。

2) 検出遺構

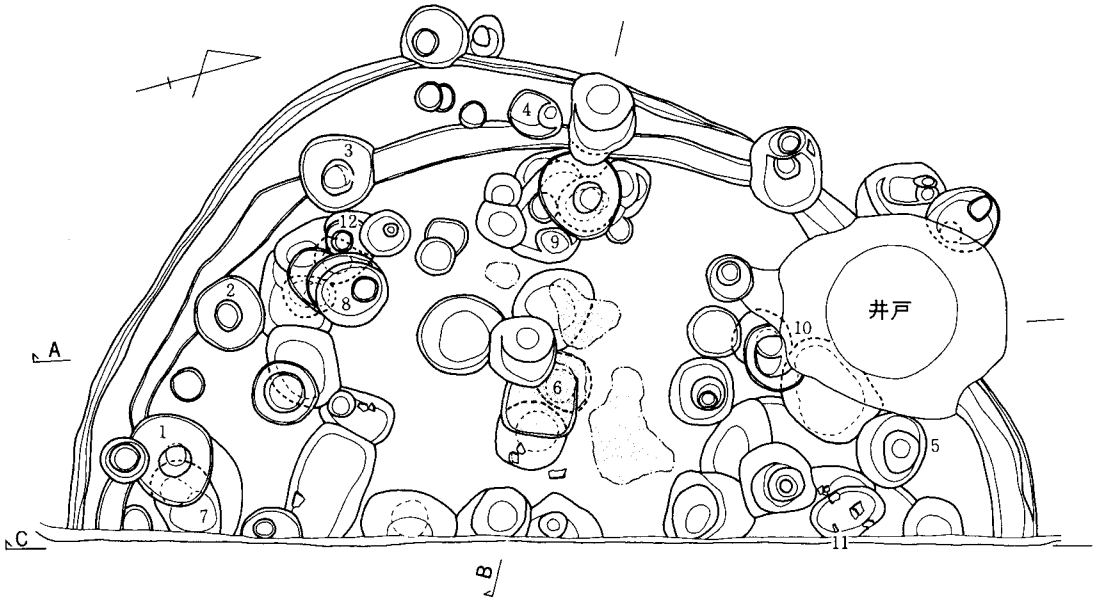
住居跡

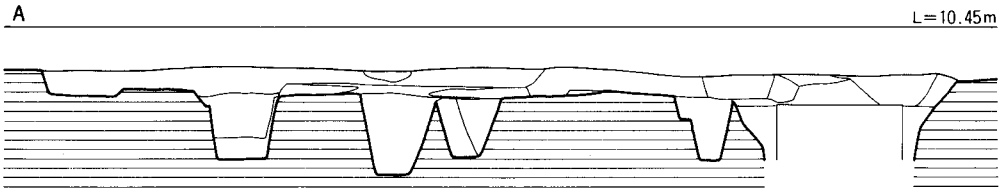
４軒の内，３軒は境界地に位置するため全体の形状は不明である。他の１軒は壁が完全に削平を受けている。円形住居跡３軒，方形住居跡１軒である。

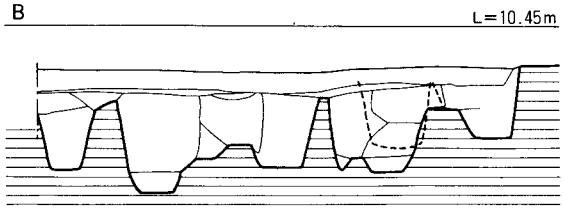
１号住居跡（Fig.48，PL.30）

円形住居跡であるが，境界地のため全体の把握はできない。又，２号掘立柱建物より切られている。南北の直径7.7ｍ，床面の深さ15cmを測る。周溝は２重になっており，内側の周溝は幅25cm，深さ３cmを測り，半周している。外側の周溝は細い溝で，幅17cm，深さ３cmを測り，半周しない。この２つの周溝は住居跡の建て替えを示している。仮に内側の周溝をもつ住居跡をＡ号とし，外側の周溝をもつ住居跡をＢ号とすれば，Ｂ号住居跡に伴なう柱穴はＰ１～５である。径45～65cm，深さ37～53cm，柱根径20cmを測る。これらの柱穴はＡ号住居跡の周溝を切っており，Ｂ号住居跡はＡ号住居跡に後出する。Ｂ号住居跡に伴なう炉跡はＰ６である。この炉跡は長さ約60cm，深さ10cmを測るが，周辺には焼土層がある。床面から鉄鏃１，鉄製刀子，鉄片３，石庖丁，砥石片２，管玉１，黒曜石片多数，壺形土器，甕形土器片，椀形土器２，手づくね土器等の出土がある。

Ｂ号住居跡は直径約7.5ｍを測る。柱穴，及び炉跡はＡ号住居跡の床面の撤去によって把握されるが，周溝に沿ったＰ７～11が伴なうものと思われる。柱穴径55～60cm，深さ50～85cmを測る。遺物は甕形土器片，壺形土器片を出土するが，Ｂ号住居跡との時期差はない。いずれにしろ柱穴は何度も切り合っており，住居跡の建て替えが２度以上あった事を示している。主柱







土層名称

1．埋土（客土）
2．黒褐色粘質土
3．2に16を混入
4．16に茶褐色粘質土混入
5．焼土
6．2に褐色粘質土混入
7．暗灰褐色粘質土に暗黄褐色砂混入
8．16に黄白色地山ブロック混入
9．黒色粘質土
10．黄褐色地山粘土ブロック
11．9に10を混入
12．16に暗黄褐色砂質土混入
13．暗褐色粘質土
14．9に16を少量混入
15．16に黄灰色地山ブロック混入
16．暗茶褐色粘質土
17．13に黒褐色粘質土少量混入
18．黒灰色粘質土に16を混入
19．16に2のブロック混入
20．2に黄褐色地山ブロック混入

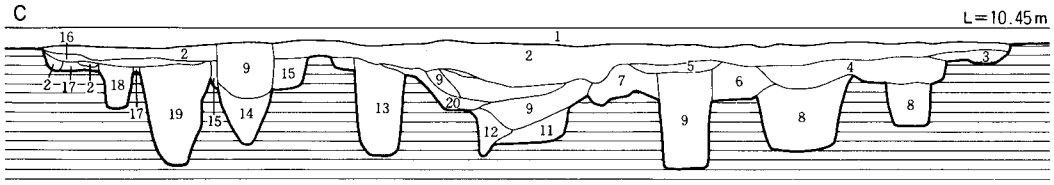


Fig.48　1号住居跡　(1/60)

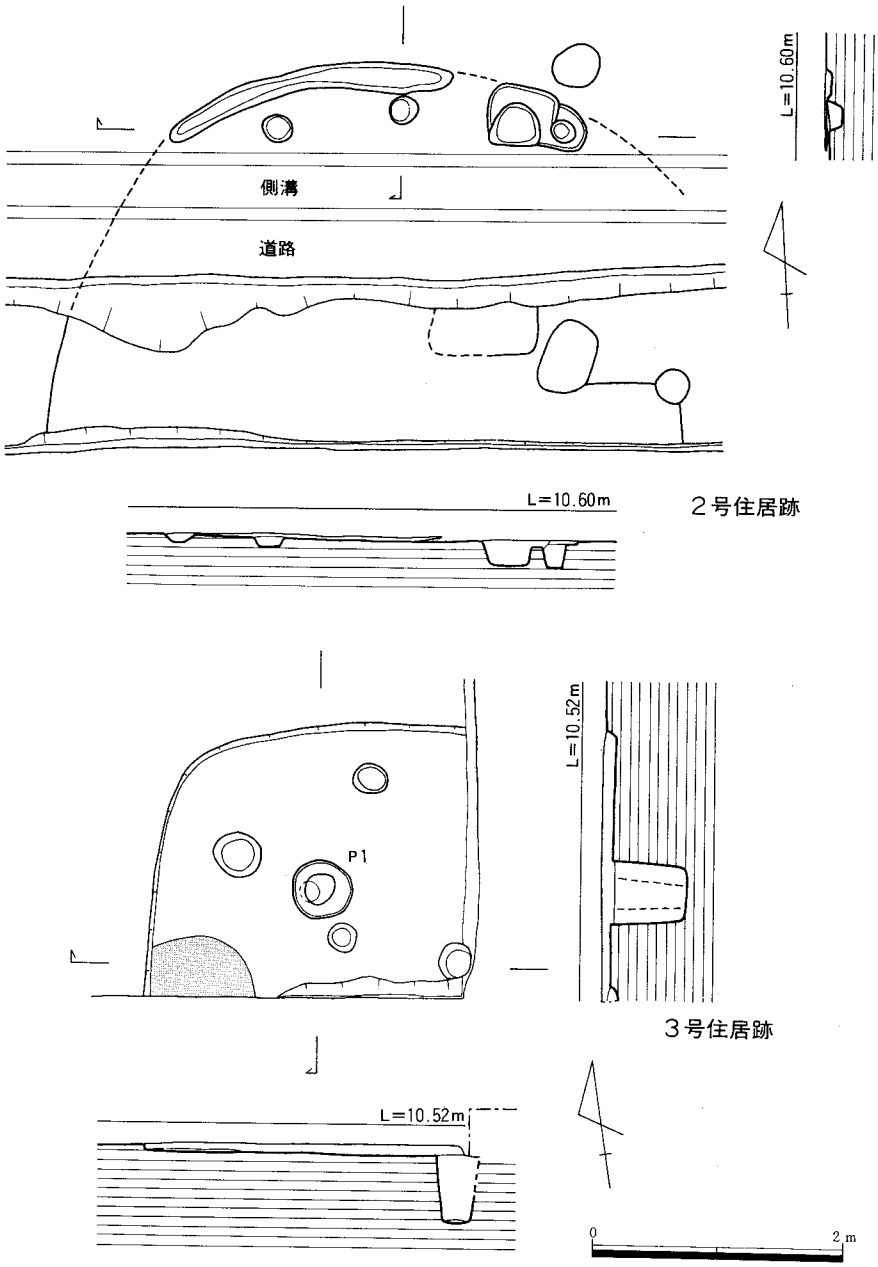


Fig.49　2号・3号住居跡（1/60）

の関係については将来全体を把握した時点で再度検討したい。尚，覆土から鉄滓が出土しているが，他の遺構との切合いが考えられる。柱穴P12の底からは祭祀土器（Fig. 53—13）が出土している。

2号住居跡 (Fig.49, PL.31)

調査区の南端で検出した。平面形は方形の住居跡である。周壁が削平されており，かろうじて周溝の一部を確認できるが，全周しない。周溝幅は25cm，深さ13cmを測る。昭和59年度に当該調査区南側に隣接した道路の舗装化に伴ない遺構確認が行なわれ，当該住居跡の一部を確認している。これから推定直径を求めれば約6mの住居跡を考えることができる。柱穴，及び遺物は検出できなかった。

3号住居跡 (Fig.49, PL.31)

調査区東南隅で検出した。削平のため壁の残りは悪く，南側の隣接道路の調査では残りの部分を検出できなかった。現存長2.5m，壁高10cmを測る。P1は径50cm，深さ60cm，柱根径25cmを測る。位置関係から住居跡に伴なう柱穴であろう。この柱穴の西南には焼土が広がっているが，かまどの位置を示すものと思われる。遺物は少ないが，住居跡の構造から古墳時代6世紀以降の時期であろう。

4号住居跡 (Fig.50, PL.31)

1号掘立柱建物から切られている。円形住居跡であるが，削平のため周壁は完全に失なっている。柱穴は外側に7本，内側に4本で構成される。柱穴径約50cm，外側の柱穴の深さ50～65cm，柱根径20cmを測る。外側の柱穴から住居跡の規模を復元すれば短径約5.5m，長径約6mの楕円形を呈した平面形が考えられる。遺物はP1，2より弥生時代中期末の甕形土器片の出土がある。

土　坑

いずれも上部の削平のため旧形状をとどめていない。

1号土坑 (Fig.50, PL.31)

平面形は隅丸方形状を呈し，直径105cm，深さ18cmを測る。覆土は黒褐色粘質土である。遺物は弥生式土器の細片が出土した。貯蔵穴の底部と思われる。

2号土坑 (Fig.50, PL.31)

平面形は不整円形を呈している。長径86cm，短径70cm，深さ13cmを測る。覆土は黒褐色粘質土である。遺物は弥生時代中期の甕形土器底部，及び鉢形土器が出土している。

掘 立 柱 建 物

検出していた3棟の建物の内，1号建物と2号建物の主軸方位はほぼ一致している。

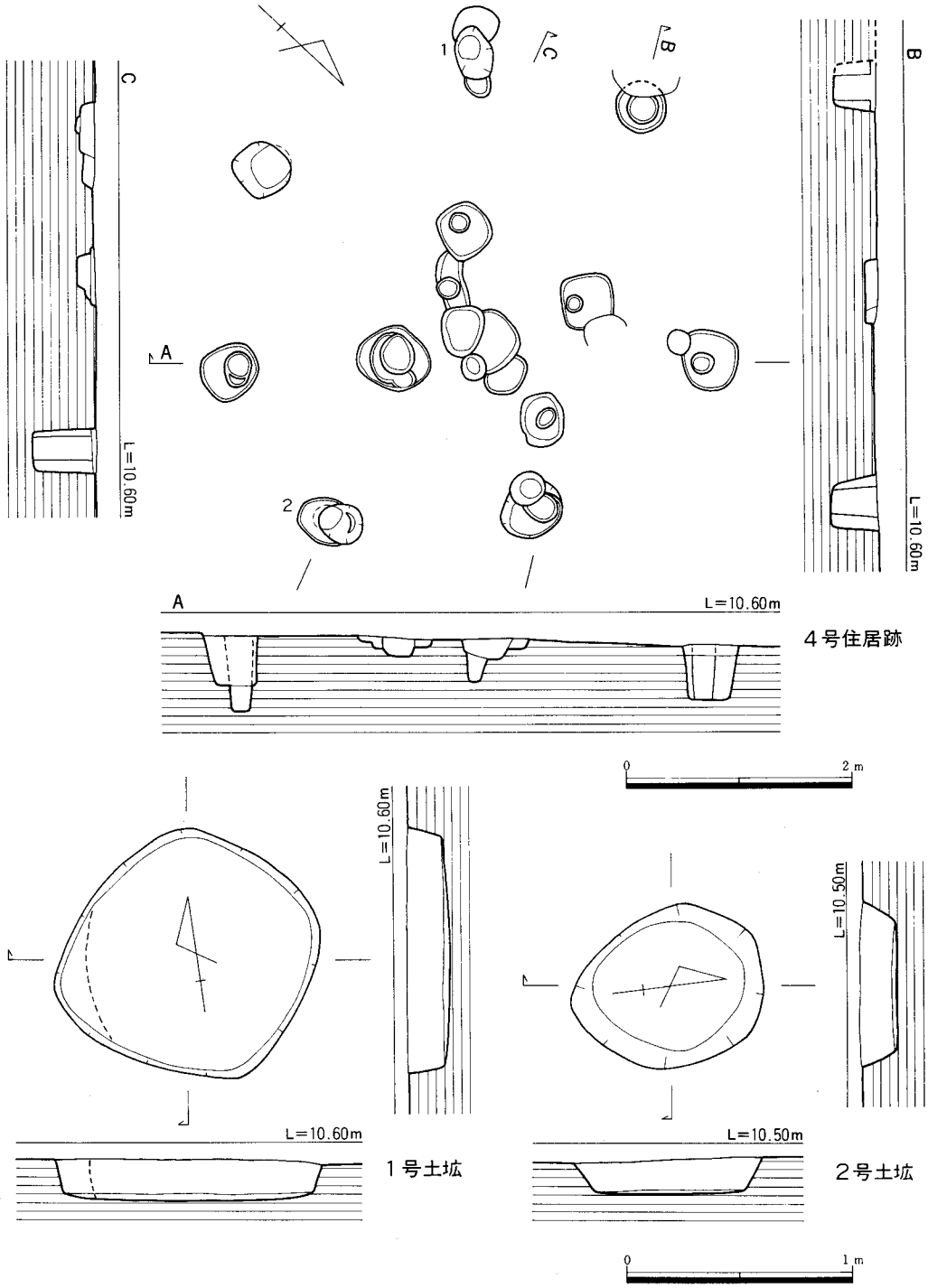


Fig.50　4号住居跡，1号・2号土坑（1/60，1/30）

1号掘立柱建物 (Fig.51, PL.32)

西面に庇を持った建物で，梁行3間，桁行4間の規模である。身舎は梁行2間，桁行4間である。主軸方位はN22°Eである。梁行6.6m，身舎の梁行4.8m，桁行8.4m，身舎の梁間平均2.4m，桁間平均2.1mである。桁行の柱間は両側の梁に近い柱間が狭い。柱穴は径50～90cm，柱根径20～25cm，深さ12～40cmを測る。遺物は弥生時代中期後半～後期初頭の土器片を出土した。

2号掘立柱建物 (Fig.52, PL.32)

東側の境界地に位置しており，規模は明らかではないが，梁行2間，桁行3間の総柱の建物と思われる。主軸方位はN33°30′Eである。梁行4.2m，桁行4.68m，梁間平均210cm，桁間平均156cmを測る。柱穴は径50～60cm，深さ50～70cm，柱根径20cmである。遺物は弥生時代後期初頭

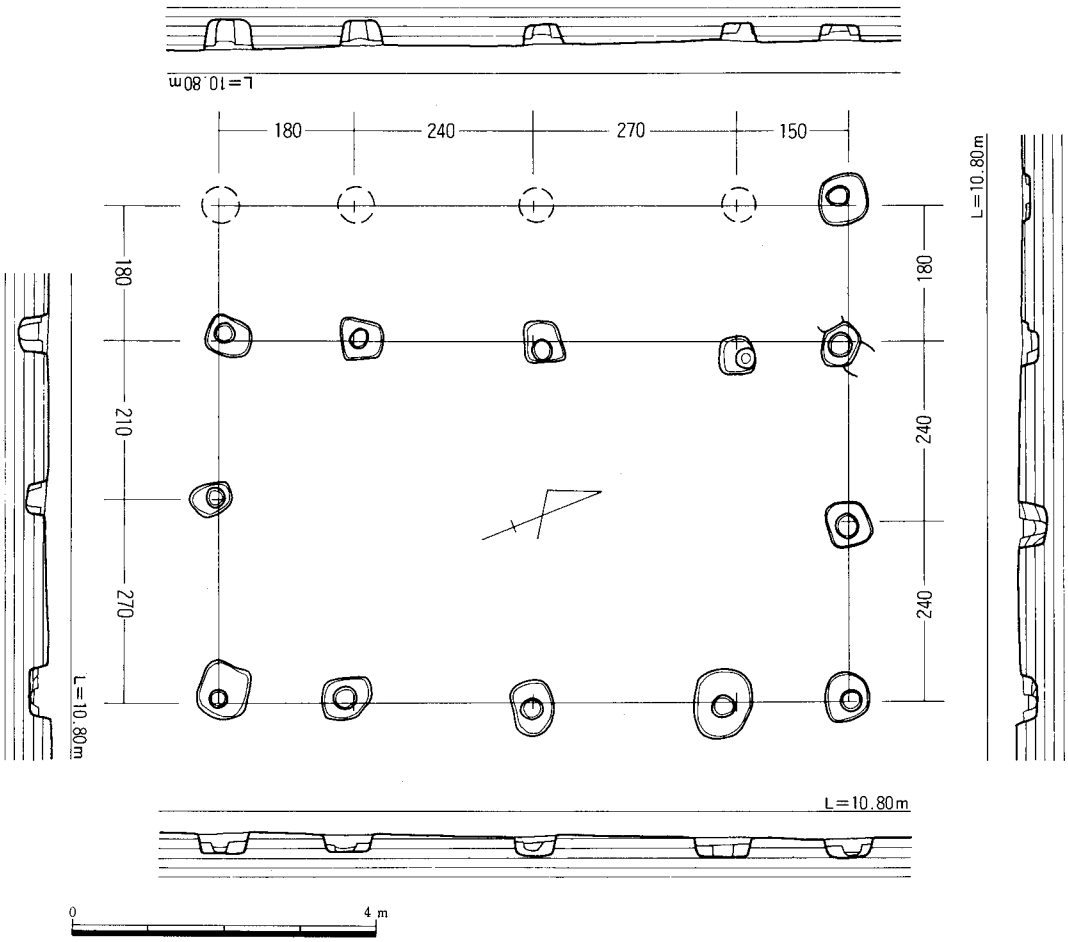


Fig.51　1号掘立柱建物 (1/100)

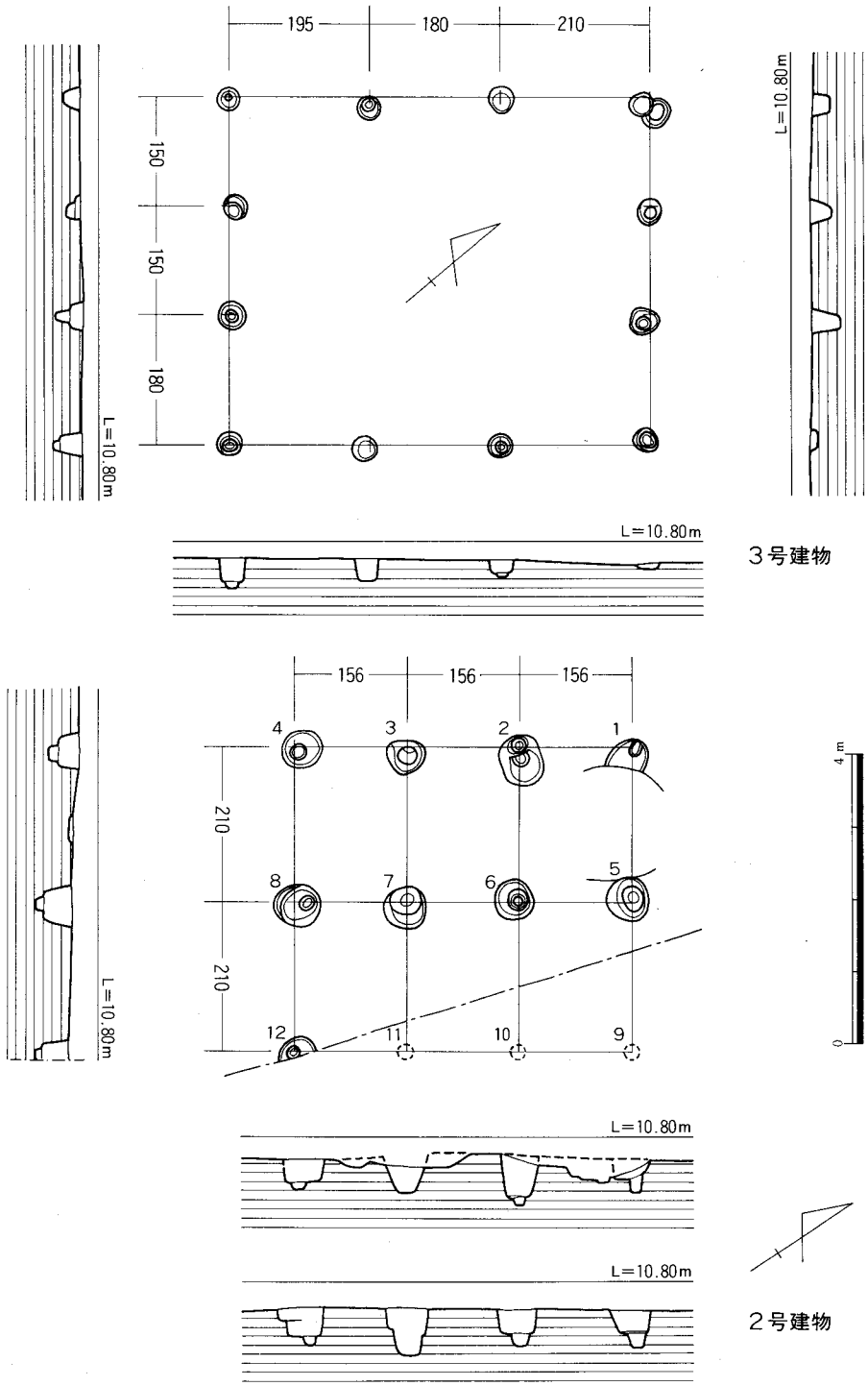


Fig.52　2号・3号掘立柱建物（1/100）

の土器片が多く出土しているがＰ７出土の甕形土器は器形，手法を異にしており６世紀代が比定できる。よって，当該建物は築造年代を６世紀以降と考えて差しつかえないだろう。

３号掘立柱建物 (Fig. 52)

梁行３間，桁行３間の規模をもつ側柱だけの建物である。南北棟で，主軸方位N40°Eである。梁行4.8m，桁行5.85m，梁間平均1.6m，桁間平均1.95mを測る。柱穴径30～40cm，深さ12～40cm，柱根径12～18cmを測る。遺物は弥生式土器片が多く，Ｐ４より中期の高杯片が出土している。

Tab.3 第51次調査掘立柱建物計測表

(単位：cm)

	規模	桁行		梁行		方位	床面積 (㎡)	柱穴状態					備考
		実長	柱間寸法(尺)	実長	柱間寸法(尺)			Pit数	深さ	長径	短径	柱根径	
1号	4×3	840 (28)	5・9・8・6	660 (22)	6・7・9 6・8・8	N 22°E	55.44	13	12～40	52～92	43～76	24～32	
2号	3×2	468 (15.6)	5.2・5.2・5.2	420 (14)	7・7	N33°30'E	19.66	9	40～70	54～70	48～58	18～40	
3号	3×3	585 (19.5)	7・6・6.5	480 (16)	5・5・6	N 40°E	28.08	12	10～42	32～44	30～40	10～22	

3) 出土遺物

１号住居跡出土遺物 (Fig. 53, PL.32)

弥生式土器

器種には壺形土器，甕形土器，椀形土器，手づくね土器がある。覆土及び床面出土である。

壺（1，2，7，8，13） 袋状口縁部を有し，口縁部の口径が広がる器形である。1，2は頸部に三角突帯を一条巡らす，外面は丁寧なナデ調整である。この外面は丹塗りである。13は完形品で，外面は丹塗りである。口径6.8cm，器高8.8cmを測る。袋状口縁部は小さく内弯して頸部の立ち上りは無い。胴部上位は丁寧なヨコナデを施し，下位には指圧調整痕が残る。1は床面貼り土内，13はＰ12より出土。胎土に砂粒を含む。1，13は黄褐色，2は黄灰色を呈している。

甕（3～6，9） 3～5は“くの字形”口縁部である。3の口縁部の立ち上りは強い。頸部に低い三角突帯を有す。5の口縁端部はややハネ上り気味である。6は鍬形口縁部を呈している。3は口径24.5cm，4は口径27.5cmを測る。5は８号住居跡の炉跡より出土。いずれも胎土に砂粒を含み，焼成は良好である。色調は3，4は赤褐色を，5，6は黄褐色を呈し，9は黄灰色である。

椀（10，12） 10は口径10.8cm，器高6.0cm，12は口径14.4cm，器高7.6cmを測る。体部に丸味をもつが，10は底径が小さいため下位がシャープである。10の外面はタテハケ調整で，他はナデ調整である。12は内外面摩滅している。胎土は10が精良で，12は砂粒を含む。色調は10が黄

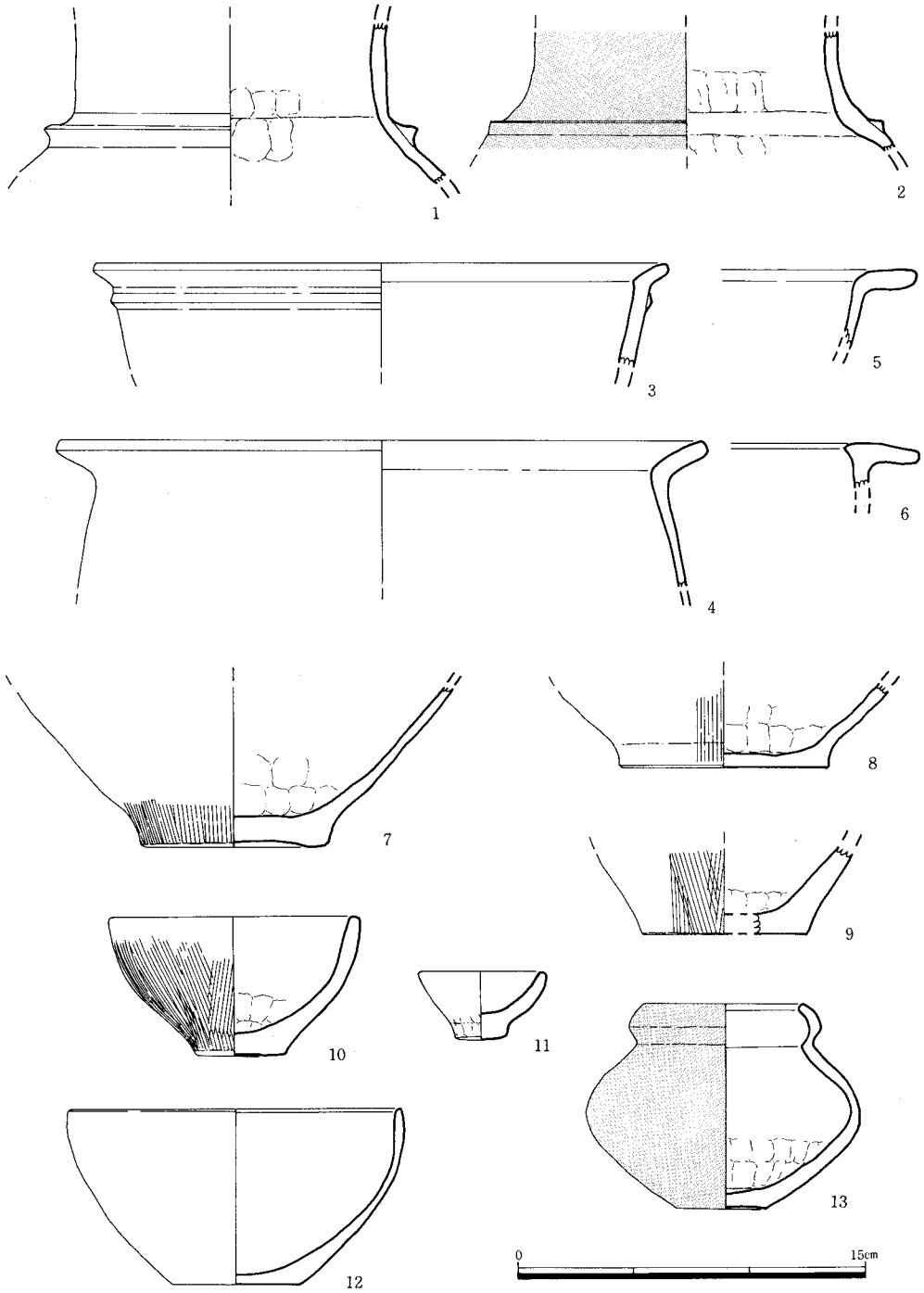


Fig.53　1号住居跡出土遺物（1/3 ）

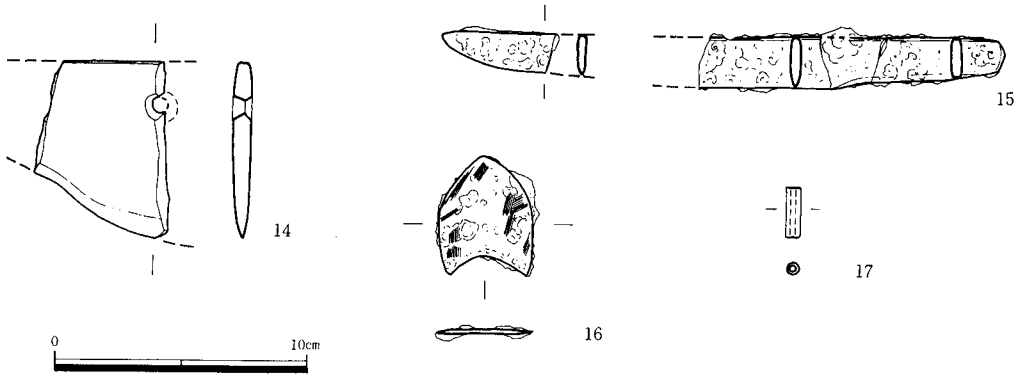


Fig.54　1号住居跡出土遺物（1/3）

灰色，12が乳白色である。

手づくね土器（11）　復元口径5.5cm，復元高2.8cmを測る。体部は鉢状に開く。底部は丸味をもち安定が悪い。指圧調整痕を残している。胎土に細かい砂を含み，暗褐色を呈する。

石　器

石庖丁の他に砥石片（泥岩，砂岩）2点がある。黒曜石片が多い。

石庖丁（14）　穿孔部分にて折れており，且つ先端を欠いている。現存長3.5cm，現存幅4.8cm，厚さ5mmである。背部は平坦に仕上げ，外弯する刃部は両刃である。鎬は不明瞭で，使用のため刃に歪みがある。穿孔は両側から行なっている。粘板岩製である。

鉄製品及び鉄片

鉄鏃（15）　長さ3.2cm，最大幅2.5cm，厚さ1.2mmを測る。三角形式の鏃で，腸抉りのかえしは浅い。全体に錆化が著しいが，表面には不定方向の木質が付着している。床面から出土。

刀子（16）　出土した時点では完全であったが，その後に破損している。現存長11.3cmであるが，推定の長さは15cmが考えられる。関は斜めに緩い刃関である。茎子の尻は丸味をもつ。背部は反りを有し，切先は鋭い。刃部は両刃である。茎子幅1.1cm，刃部最大幅1.4cmを測る。床面より出土した。

その他，4点の鉄片があるが破損しており，器形は不明である。

玉　類

管玉（17）　長さ1.4cm，径3.6mm，孔径1.5mmを測る。碧玉製である。表面は風化しており，淡い緑色を呈している。

鉄　滓

覆土中より鉄滓が1点出土しているが，他の遺構との切合い関係にあることや出土状態が不明なため住居跡に伴なうとは確定できない。

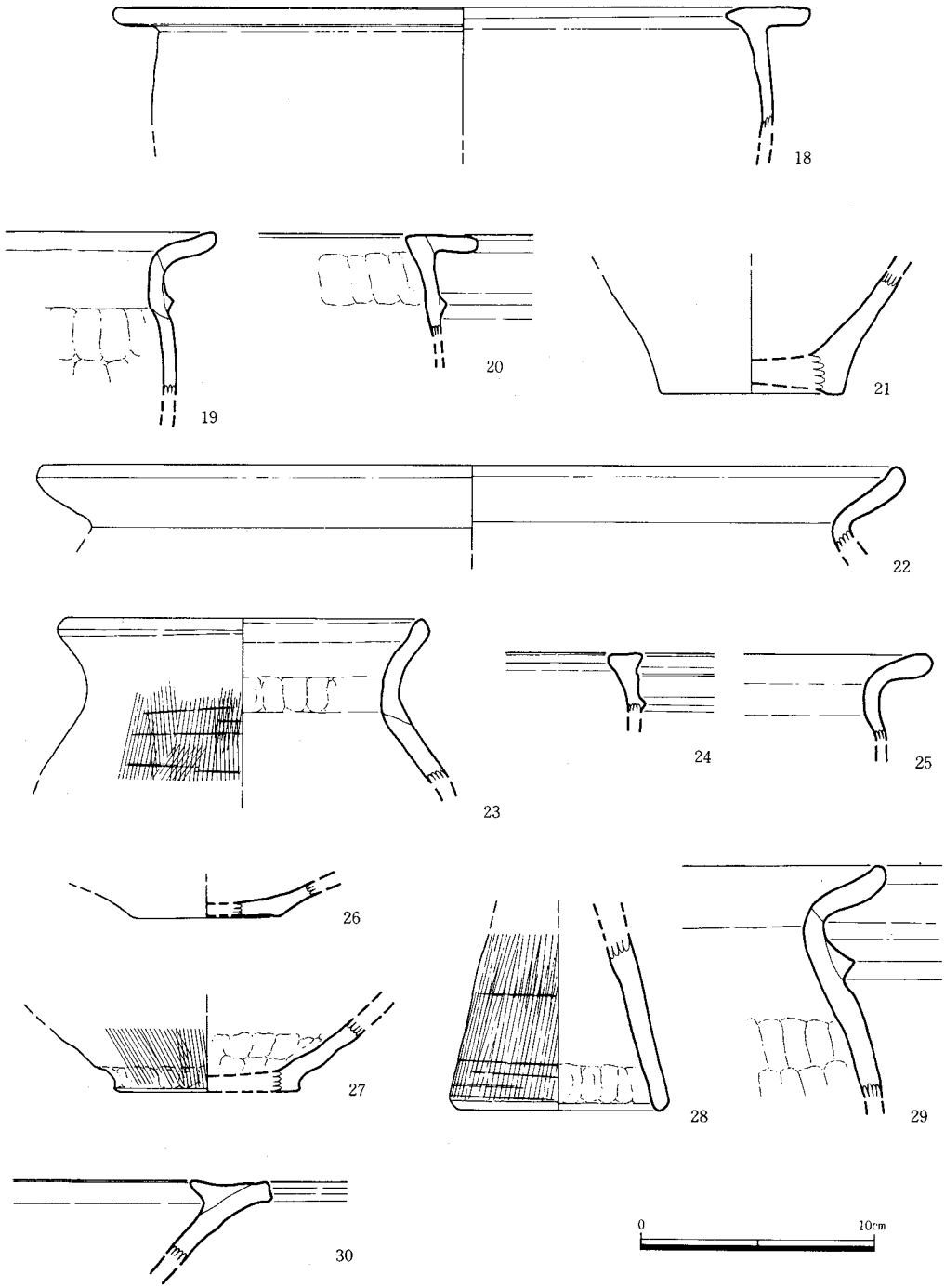


Fig.55　掘立柱建物出土遺物（1/3）

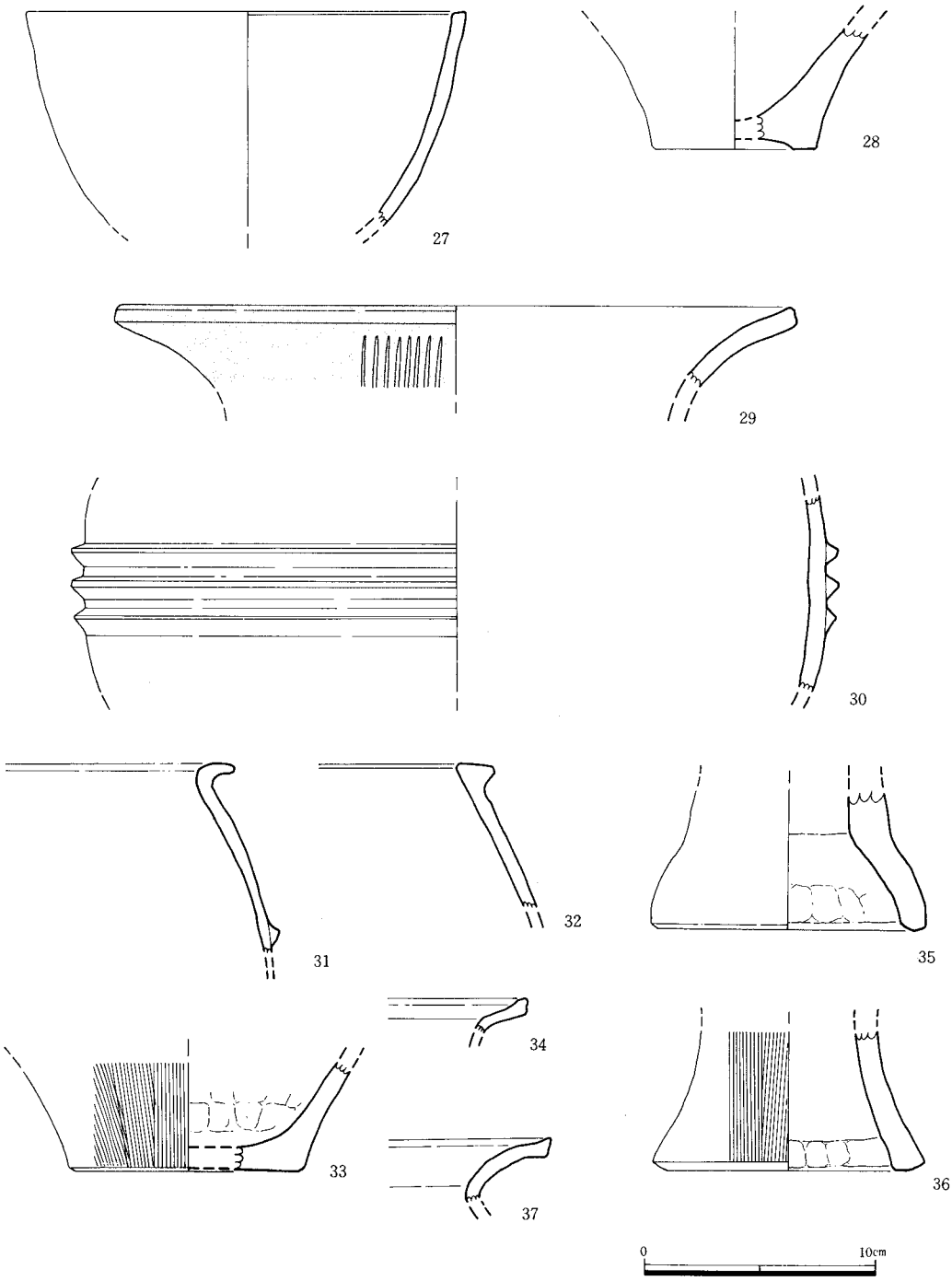


Fig.56　2 号土坑，Pit 出土遺物（1/3）

2号土坑出土遺物 (Fig.56)

弥生式土器

甕 (28)　底径 7.0 cmを測る。内外面摩滅している。上げ底で，体部の立ち上りは強い。中期の古い要素を残している。胎土に砂粒を含み，明褐色を呈している。

鉢 (27)　口径19cm，現存高 9.3 cmを測る。体部下位に丸味をもつ。内外面摩滅。胎土に砂粒を含み，褐色を呈している。

1号掘立柱建物出土遺物 (Fig.55, PL.32)

弥生式土器

甕 (18～21)　18，20のような鍬形口縁が圧倒的に多いが，16の口縁部直下に三角突帯をもつもの，口縁部の平坦部の幅が狭く，器壁の厚いL字形口縁がある。18は口径29.8cmを測る。19は“くの字形”口縁部であるが，端部がハネ上り気味である。18は胎土に微砂を，19～21は砂粒を含む。18は明黄褐色，19，20は黄灰色，21は赤褐色を呈する。

2号掘立柱建物出土遺物 (Fig.55, PL.32)

弥生式土器

甕 (22，25，29)　22，25，29は“くの字”状口縁部を呈する。22は口径36.7cmを測る。22，29の口縁端部はハネ上っている。29の内外面はヨコナデ調整である。いずれも胎土に砂粒を含み，22，29が黄褐色，25が黄灰色を呈する。

鉢 (24)　小さなL字形に縁部を有し，体部は丸味をもっている。内外面ヨコナデ調整。暗褐色を呈する。

壺 (26，27)　26の底径6.1cm，27の底径8.0cmを測る。26はヨコナデ調整後丹塗りを施す。27の外面はハケ調整である。26の胎土は精良，27は砂粒を含む。26は黄灰色，27は暗灰色である。

土師器

甕 (23)　口径 3.2 cmを測る。最大径は胴部にある。口縁部の立ち上りは強く，端部は丸味をもつ。外面はタテハケ調整後，ヨコ方向のハケを部分的に施す。内面はナデ調整，胎土に砂粒を含む。黄褐色を呈する。

器台 (28)　底径 9.4 cm，現存高10cmを測る。端部は丸味をもち，外面はタテハケ後，部分的にヨコハケ調整を施す。甕外面と同一手法である。胎土に砂粒を含み，黄灰色を呈する。

3号掘立柱建物出土遺物 (Fig.55, PL.32)

弥生式土器

壺 (30)　口縁部内側に粘土を貼りつけた鋤形の口縁部を有している。内外面ヨコナデ調整で

ある。胎土に砂粒を含む。黄褐色を呈する。

Pit出土遺物（Fig.56，PL.32）

弥生式土器

壺（33）　口径29.6cmを測る。朝顔形に開く口縁部で，外面はヨコナデ後円塗りを施す。外面にタテ方向の暗文がある。胎土に砂粒を含む。

甕（30～34・37）　31は強く外反したくの字形口縁部を，34，37は口縁端部がハネ上り気味の口縁部を有している。32は小さなくの字形口縁で，最大径が胴部中位にある。30は胴部に3条の三角突帯を貼り付けている。いずれも胎土に砂粒を含む。30～32は赤褐色を呈する。

支脚（35）　底径11.2cm，現存高6.0cmを測る。口縁部は内弯し，端部は丸味をもつ。黄褐色を呈する。

器台（36）　底径10.8cm，現存高6.0cmを測る。口縁端部は肥厚する。外面はタテハケ調整。胎土に砂粒を含み，暗褐色を呈する。

4）小　結

上記の如く狭い調査範囲で検出した遺構を総合的に検討を加えるのは不可能であるが，北側に隣接する第3次調査を含めて一応の整理をしておく。遺構は弥生時代と古墳時代に大別できる。弥生時代の遺構には1号・2号・4号円形住居跡が存在する。1号住居跡は出土した甕形土器，壺形土器から後期初頭の時期が考えられる。この住居跡の床面から鉄鏃，及び鉄製刀子が出土した事は注目される。第3次調査[註1]では同様に数度の建て替えを行なった円形住居跡を4軒検出している。1号住居跡を含んだこれらの住居群は井戸を中心として環状に展開している。4号住居跡は建て替えが行なわれておらず，第3次調査では直径5～6mと推定される単一時の住居跡を2軒検出している。4号住居跡は出土遺物から中期後半代が考えられる。

古墳時代には2号掘立柱建物，3号住居跡がある。3号住居跡はかまどを有した方形住居跡で，有田遺跡では6世紀から出現するものである。2号掘立柱建物はP7の出土遺物からみて6世紀の時期を考えるのが妥当であり，方形住居跡に伴なう建物と考えられる。1号・3号掘立柱建物は主軸方位の相違などから時期差は明らかである。いずれの出土遺物も弥生時代中期～後期初頭を主体としているが，弥生時代としては規模がしっかりしており検討の余地がある。2号建物と1号建物は方位がほぼ一致しており同一時期を示すものかもしれない。

註1．福岡市教育委員会が昭和51年度に発掘調査を実施した。別添の付図2を参考にされたい。

4．第53次調査

1）調査地区の地形と概要

調査対象地は福岡市早良区有田１丁目28－３・28－４番地にある。対象面積は417㎡である。

有田地区の台地最高所は標高14m前後を測り、平坦部を形成する。この平坦部の北側は北東方向と北西方向から谷が入り込むため幅約150ｍの狭長な地形をなしている。当該地はこの狭長な平坦地に位置し，標高12m前後を測る。当該地周辺では北側に第30次調査，西側に第75次調査，東側に第71次調査が接している。第30次調査では古墳時代～中世迄の住居跡，掘立柱建物，火葬墓等が検出されている。その内，第17号・20号建物は当該地にまたがって検出された。第75次調査では柵列，掘立柱建物，溝等が検出された。この溝は当該地の溝と接続するもの[註1]である。第71次調査では古墳時代住居跡，平安時代の井戸，中世の溝，及び井戸が検出されている。当該地の地目は畑地であったが，昭和54年度に共同住宅建設の確認申請が提出されていた。昭和56年度に計画が具体化したため国庫補助を得て発掘調査を実施した。

発掘調査は昭和56年７月21日から８月７日迄実施した。排土処理の関係から調査区を南・北の２区に分けて行なった。遺構は表土直下のローム層上面に検出される。表土の耕作土は約20cmの深さであった。当該地は昭和41～43年の区画整理によって上面を削平され，更に南側，及び東側は道路工事のため遺構は破損を受けている。検出した遺構は古墳時代住居跡１軒，律令時代の溝１条，掘立柱建物１棟，中世の溝３条，内１条は濠である。中世の土壙２基，掘立柱建物１棟を検出した。

2）検出遺構

住居跡

１号住居跡（Fig.58，PL.35）

東側境界地に位置しているため道路によって半分以上を削平されている。現存長3.9ｍ，幅5.1ｍ，現存の深さ12cmを測る。主軸を東西方向において長方形を呈する住居跡と思われる。西側にはＬ字形のベットを有し，ベットの幅は1.0～1.08ｍ，高さ0.8ｍを測る。周壁下とベット下には幅６～８cm，深さ５～８cmの周溝が巡っている。東側にも同形態のベットを有していたと思われる。主柱は東側と西側のベット寄りに各１本設置される。掘方径46cm，深さ74cmを測る。入口は南側中央部分と思われる。遺物は少なくわずかに柱穴より検出した。

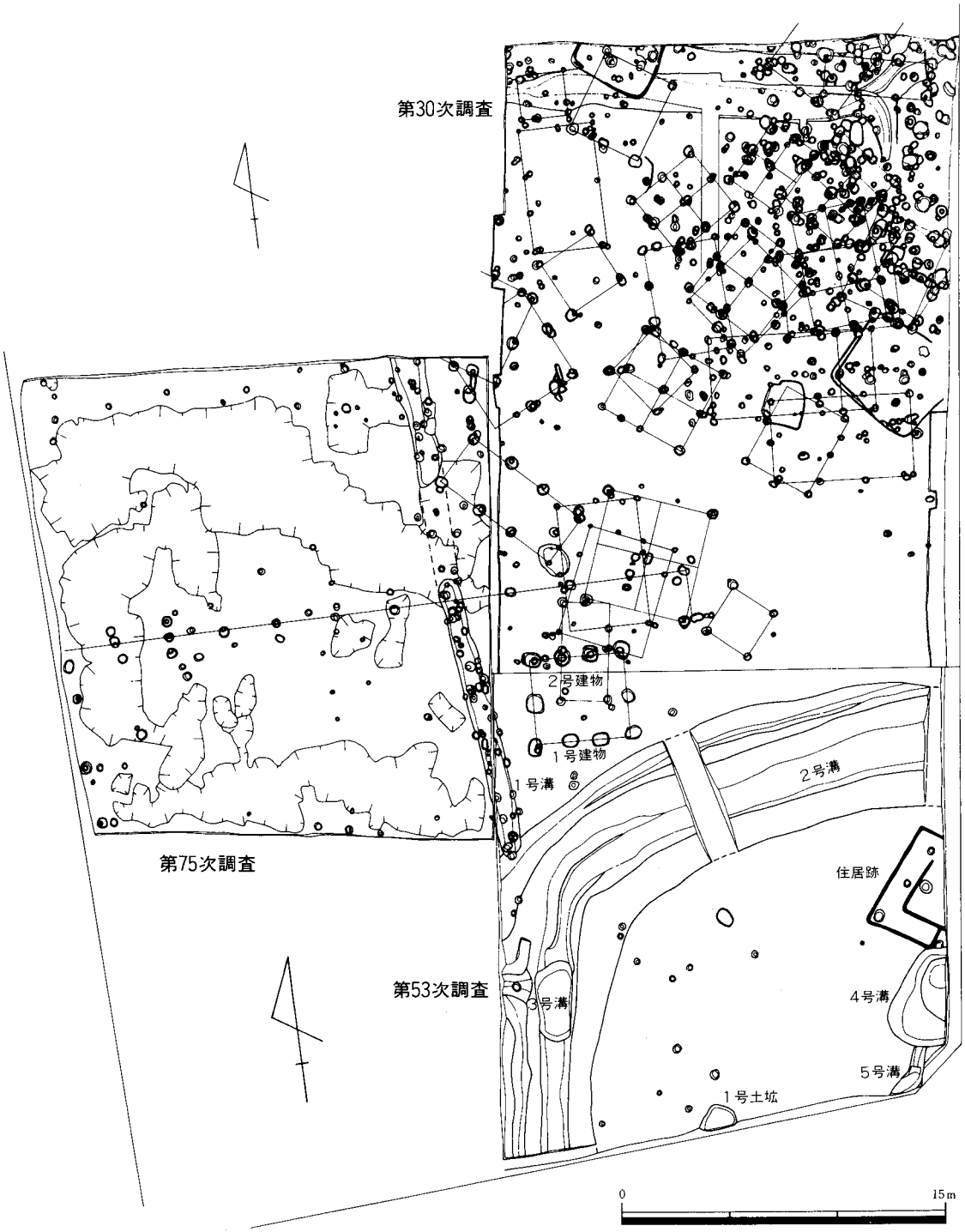


Fig.57　第30・53・75次調査遺構配置図（1/300）

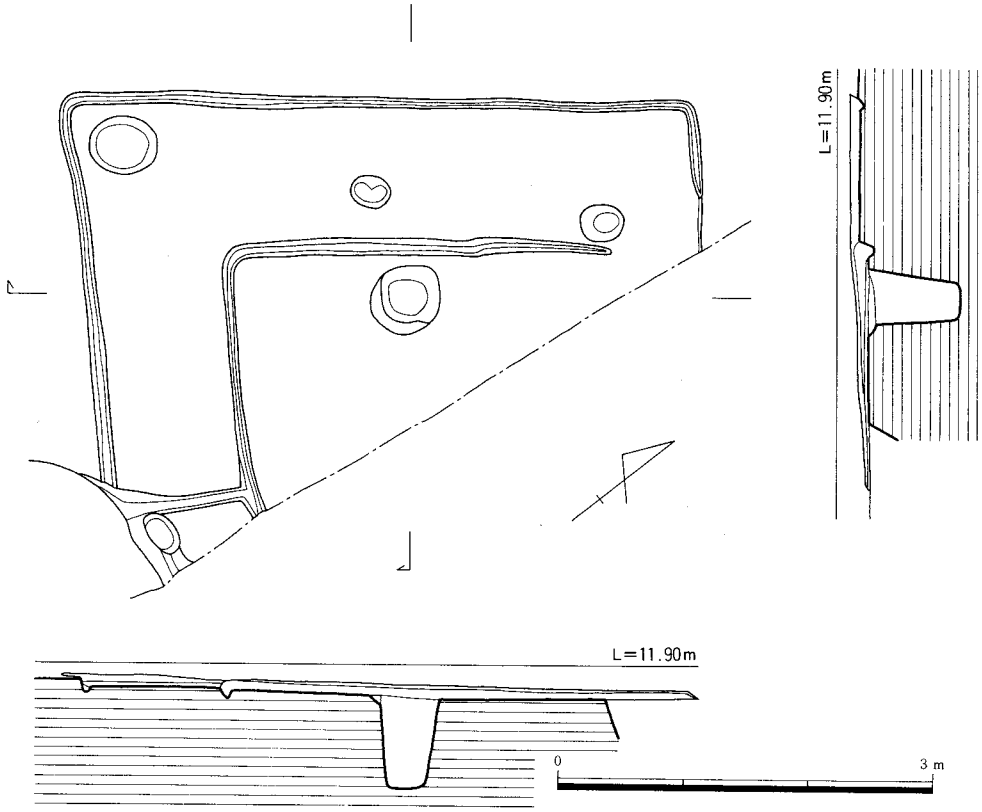


Fig.58　1号住居跡（1/60）

掘立柱建物

2棟検出されたがいずれも第30次調査にまたがっており，1号建物は第30次調査の第17号建物と，2号建物は同じく第30号建物と同一建物であるため計測値は全て第30次調査の掘立柱建物の項で詳細に明記しているので参考にされたい。[註1]

1号掘立柱建物（Fig.57，PL.35）

北側境界地に位置する。長軸を東西方向に置いた3間×2間の建物である。掘方径70～90cmの隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈している。柱根径は約30cmを，現存の深さは15～20cmを測る。覆土は黒褐色を呈し，律令時代の建物と思われる。

2号掘立柱建物（Fig.57）

北側境界地に位置し，1号建物と重複する。第30次調査の30号建物と同一建物である。南北方向に主軸を置く，2間×1間の小規模な建物である。柱穴径は15～26cm，深さ30cmを測る。

土　坑

南側境界地にて検出した。道路によって下部分を削平されている。不整形を呈し，現存径1.7m，深さ70cmを測る。底部には炭化した木質が残存していた。覆土は暗茶褐色粘質土であり，中世後半の時期が考えられる。遺物は全て細片であったが，青磁皿片が1点ある。

溝

1～5号の溝を検出した。2号，4号は幅，深さ共に大規模であり，濠としての機能が充分に考えられる。

1号溝（PL.35－2）

2号溝に切られており，西側境界地にあるため充分な調査ができなかった。覆土は黒褐色土を呈し，幅約100cm,深さ18cmを測る。断面は逆梯形を呈している。遺物は全て細片であった。この溝は北側で第75次調査に延長しており，第75次調査にて時期の判断をしたい。又，南側は約50m離れた位置の第17次調査にて検出された南北方向の2号溝に接続するものと思われる。

2号溝（Fig.60，PL.36）

南側と東側を道路によって切られている。東西方向から南北方向に曲がる溝で，規模，構造からみて，濠として考えられる。最大幅6m,深さ160～180cmを測る。断面形は箱薬研の掘方で，北側の肩は2段に形成される。溝底はほぼ一定しているがわずかに西に低くなる。西側では第3号溝が接続しているため溝底に水落ち穴が形成される。覆土は暗茶褐色土系で構成され，下位に黒灰色の層が存在する。遺物は覆土中より土師皿，須恵器，白磁碗，青磁碗，天目茶碗，染付，唐津焼の皿，香炉，陶器の摺鉢，瓦等が出土している。

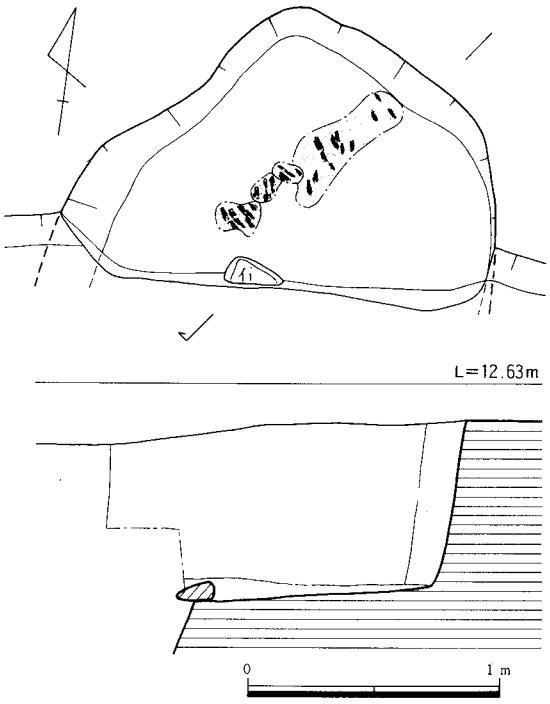
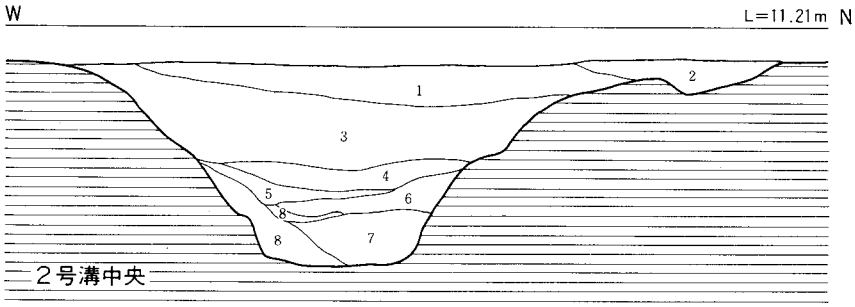


Fig.59　1号土坑（1/30）

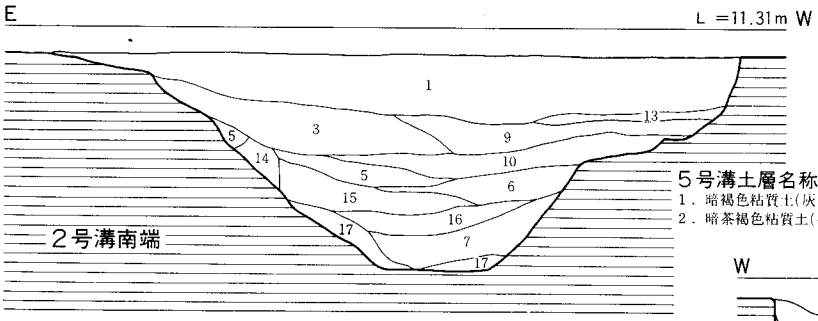
3号溝（Fig.60，PL.36）

上記に述べたように2号溝に接続しており，2号溝の溝底に水落ち穴が形成されて



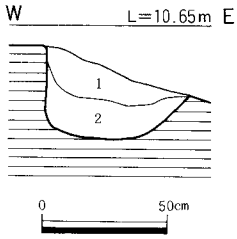
2号溝土層名称

1．暗茶褐色粘質土(褐色土の粒子を多く含む)
2．暗茶褐色粘質土(褐色土少量混入)
3．暗茶褐色粘質土(褐色土，黒色土のブロック混入)
4．暗茶褐色粘質土(褐色土少量混入)
5．1より暗い
6．暗灰褐色土(褐色土ブロック少量混入)
7．黒灰色粘質土(マンガン含む)
8．黒灰色粘質土(褐色土多く含む)
9．3と内じ(褐色土と黒色土のブロックが互層を成す)
10．6と同じ(褐色土の大型ブロックを含む)
11．淡黒色土(褐色土混入)
12．暗茶灰色土
13．1と同じ(褐色土のブロック層を含む)
14．暗褐色粘質土(暗茶褐色土混入)
15．5と同じ(やや灰色を帯びる)
16．6と内じ(マンガン含む)
17．7と同じ(灰色強い)



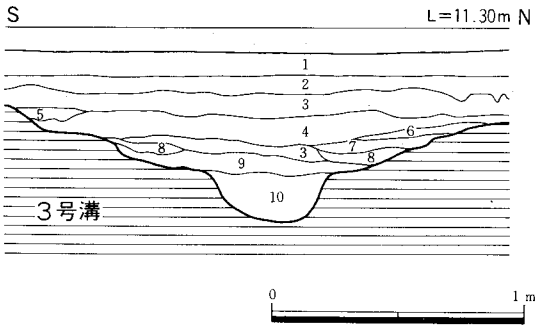
5号溝土層名称

1．暗褐色粘質土(灰色砂質土を含む)
2．暗茶褐色粘質土(褐色土，八女粘土ブロック多く含む)



3号溝土層名称

1．基礎
2．耕作土
3．暗茶褐色粘質土(褐色土を多く含む)
4．3よりやや明るい(褐色土粒子を多く含む)
5．黄褐色粘質土(茶褐色土を多く含む)
6．3．4より暗い
7．暗黄褐色粘質土(茶褐色土と黒色土を混入)
8．7に褐色土のブロックを多く含む
9．暗茶褐色粘質土(褐色土と黒色土を多く含む)
10．9に褐色土と黒色土の小ブロックを多く含む
11．暗茶灰褐色粘質土



4号溝土層名称

1．淡黒褐色粘質土
2．1に茶褐色土，黒色土の小ブロックを混入
3．1に茶褐色土を少し混入
4．暗褐色粘質土(暗茶褐色土を混入)
5．1と同じ、炭化物を少し混入
6．暗茶褐色粘質土
7．1と同じ、褐色土の小ブロックと灰色土少々混入

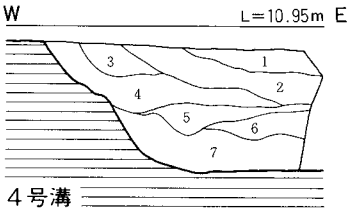


Fig.60　2号～5号溝断面土層図（1/30）

いるところから同時存在したものと考えられる。幅約3.7m，深さ80cmを測る浅い溝である。断面形は階段状に深くなり，底部はU字形を呈している。この溝は西側約30mに位置する第71次調査検出の1号溝に接続する可能性がある遺物は青磁片を検出した。

4号溝 (Fig.60, PL.37)

東側境界地に一部検出したのみで規模，構造等は不明である。東西方向の溝で，幅は約4.5m，深さ約1mを測る。覆土は暗茶褐色土で構成される。断面形はU字形で，2段掘りである。

5号溝 (Fig.60, PL.37)

4号溝と切合う形で，南北方向に延びる溝である。断面形はU字形を呈する。4号溝との先後関係は不明である。幅1.1m，深さ約80cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土である。遺物は中世末の土鍋片が出土している。

3) 出土遺物

2号溝出土の遺物以外は全て細片のため図化し得なかった。

2号溝出土遺物 (Fig.61, PL.37, 38)

陶質土器

坏蓋（1）天井部を欠いている。口径15cm，現存高3.7cmを測る。体部は丸味をもち，口縁部は内側に小さく屈折する。口縁部と体部との境には断面三角形の突帯が付いている。体部外面はヘラケズリを施している。胎土は精良である。内外面淡灰青色を呈する。

甕（2）口頸部の破片である。外面にはタテ方向の平行タタキを施すが部分的にヨコ方向のナデ消しを行なっている。内面は同心円状のナデが施される。胎土に微砂を含む。焼成は良好で，青灰色を呈する。

須恵器

器台（3）器台の脚部片である。現存高7.9cm，口頸部径15cmを測る。筒部は裾広がりであるが，外面には約8cm間隔で低い三角突帯を巡らし，その突帯間には三角形状の透しを施している。胎土に細かい砂粒を多く含む。外画は暗青灰色，内面は青灰色を呈する。焼成は良好である。

土師器

皿（4）口径8.7cm，器高1.5cm，底径6.9cmを測る。体部は丸味をもっている。糸切り底である。茶褐色を呈し，胎土に砂粒を多く含む。

白磁

碗（5～8）　3種類に分けられる。5と6は大形の玉縁を有する碗で，5は内底見込みに沈

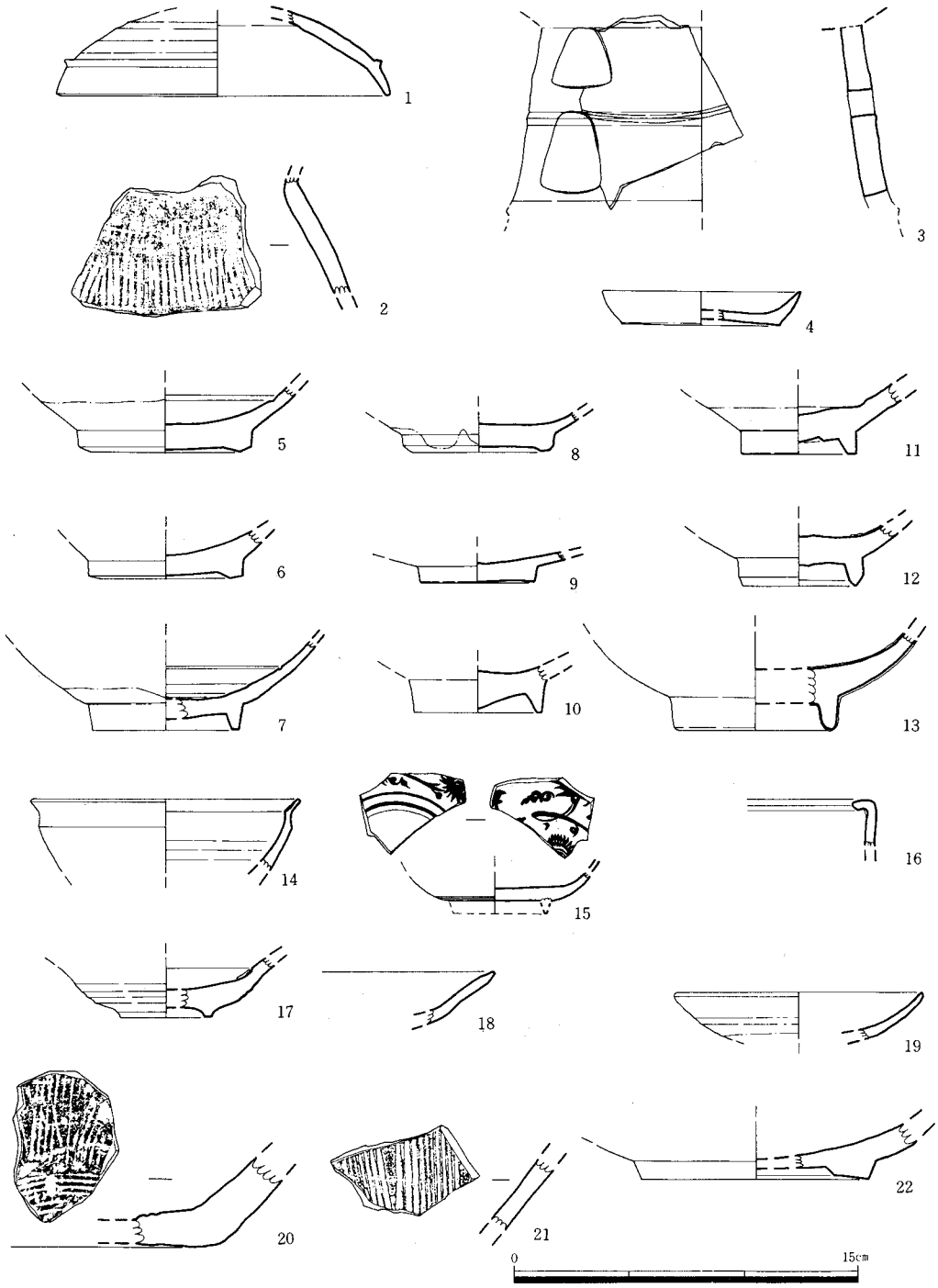


Fig.61　2号溝出土遺物（1/3）

線を施す。高台径は6.5cm，6が5.6cmを測る。釉色は5が灰白色を，6は黄灰色を呈し，気泡が多い。5の外面に貫入がある。6の焼成は軟質である。7は口縁端部が小さく水平に外反する碗で，内底には沈線が一条施され，見込みは環状のカキ取りがある。高台径6.4cm，高台高0.7cmを測る。釉色は灰白色を呈し，外面下半は露胎である。8は高台径6.0cmを測る。内底のケズリ込みは浅く，高台の作りは粗雑である。体部は器壁が薄く，立ち上りは低い。釉はくすんだ灰色を呈し，一部高台外面迄垂下している。玉縁を有する白磁碗の底部の作りに比べると著しく雑であり，新しい時期が考えられる。

皿（9，19）　9は底径5.0cm，19は口径10.9cm，現存高2.0cmを測る。9の底部は円盤を貼付けた状態を呈しており，体部の立ち上りの低さから皿とした。19の体部は丸味をもっている。9の釉は乳白色を呈し，粗い貫入がある。高台は露胎である。19の釉はやや緑味をもった灰色釉で，体部下位は露胎である。19は二次熱を受け，露胎部分は黒色に変化している。釉色も変化し，貫入が多い。胎土は軟質で陶器質に近い。いずれも中世後半の皿であろう。

青　磁

碗（10～13）　形態からみて4種類に分けられる。10，11はいずれも同安窯系の碗である。10の高台は畳付きが尖り気味で，内側の削りが深いため外底部が山形状を呈している。高台径5.6cmを測る。11は高台径5.1cmを測る。畳付がコの字形を呈し，内側の削りは10に比べ浅い。釉は体部下位迄施され，10が灰黄色を，11が灰釉色を呈している。11は細かい貫入がある。12は高台径5.0cm，高台高1.0cmを測る。釉は青緑色を呈し，全体に施されるが，内底には釉を施さない。気泡が多い。又，畳付は内外面から面取り鋭角を呈している。内底見込みと畳付に重ね焼の痕が認められる。露胎部分は褐色に発色している。胎土は灰白色である。13は高台径7.1cm，現存高3.9cmを測る。畳付は丸味をもち，釉は全体に厚く施される。濃緑色を呈し，粗い貫入がある。胎土は灰褐色を呈している。12，13は15～16世紀の明の時期が考えられる。

染　付

碗（15）体部の大部分と高台部分を欠いている。高台の推定径4.0cmを測る。細く尖った高台に丸味のある体部である。全体に乳白色の釉が施され，内外面に牡丹唐草文が呉須によって描かれる。外面の高台との境には2条の横線を施す。明代の染付であろう。

陶　器

天目茶碗（14）　口径11.7cm，現存高31.5cmを測る。内外面に飴色の釉を施す。貫入がある。胎土は暗青灰色を呈し，砂粒を多く含んでいる。南宋の時期である。

皿（17，18）　17は伊万里系，18は唐津系と思われる。17の高台径7.1cm，現存高3.9cmを測る。高台は小さくコの字形を呈し，外底の削りは浅い。内底見込に段を有している。又，見込には目痕が残っている。体部外面には水引き痕が明瞭である。釉は灰釉色を呈し，胎土は灰褐色である。砂粒を含まない。18の口径は不明である。腰部を形成し，体部はゆるく外反する。釉は

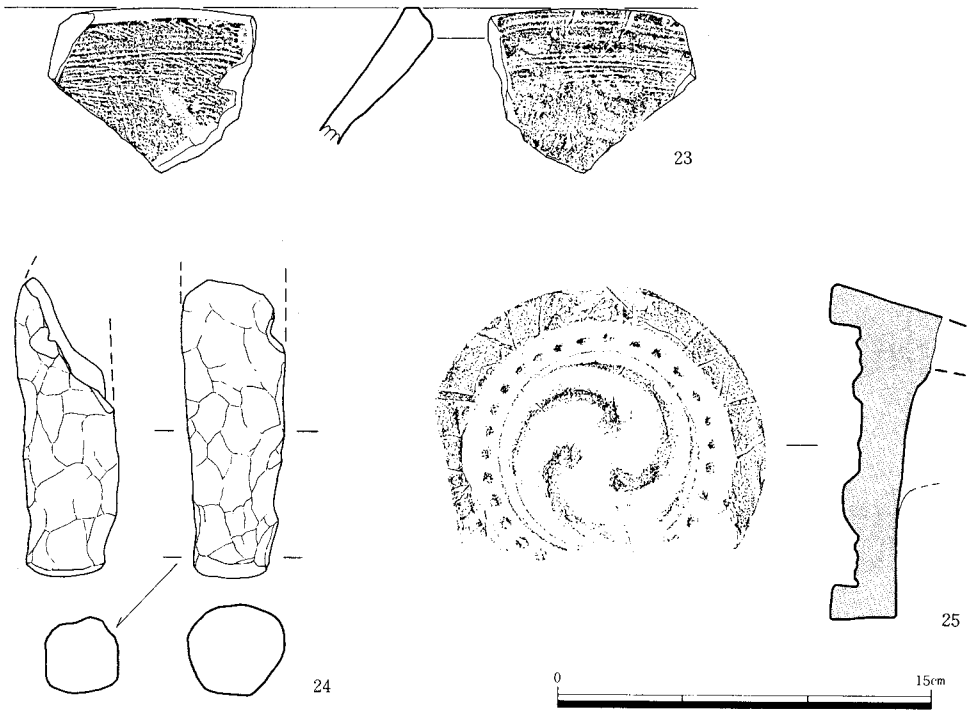


Fig.62　2号溝出土遺物（1/3）

淡茶褐色を呈し，細かい貫入がある。胎土は微密で淡褐色を呈している。

摺鉢（20，21）　いずれも褐釉陶器である。20は体部内面に7本単位の条線を重ね合せるように施し，更に内底部にも同心円状に条線を施す。使用頻度が高く，つるつるに磨滅している。内面淡褐色，外面褐色を呈し，胎土に砂粒を含む。21は体部内面に幅広い7本以上を単位とした条痕を旋す。外面は丁寧なヨコナデ調整で，胎土に砂粒を含んでいる。内面暗茶褐色，外面は暗いえんじ色を呈している。21は備前系と思われる。

盤（22）　体部がわずかに立ち上っており，鉢の可能性がある。唐津系と思われる。高台径10cm，現存高1.5cmを測る。内外面に茶褐色の釉を施す。一部に黒斑があり，又，内底には淡灰緑色の釉溜りがある。胎土は黒灰色で，砂粒を多く含んでいる。

瓦質土器

鉢（23）　片口の破片である。口縁部は厚く肥厚し，口唇部を小さく面取りしている。口縁部の厚さ1.5cmを測る。口縁部外面はヨコハケ，体部内面はヨコ，ナナメ方向のハケ調整後に細い条線を施す。胎土に砂粒を含み軟質である。黒灰色を呈す。

土師質土器

支脚（24）　現存長11.8cm，最大厚4cmを測る。先端は断面方形状に，基部は不整円形に成形する。基部の一面は丸味をもっていることから，鉢や焙烙等の柄の可能性がある。全体に指圧

成形痕があり，淡褐色を呈する。胎土に砂粒を含まず，焼成はやや軟質である。

瓦　類

軒丸瓦（25）　瓦当面の一部を欠いている。瓦当径13.4cm，内径は10.3cmを測る。外縁は高く，内区と外区の界線は無い。三巴文は左回りで，尾は長く他の巴の¾あたりに接続する。珠文は径0.7cmを測り，29個を数える。瓦当裏面はナデ調整を，丸瓦部分はヘラケズリを施される。瓦当面には離れ砂が付着している。全体のいぶしは弱い。灰褐色を呈する。第19次調査第2号溝出土の軒丸瓦Ⅰ類と同一範である。

4）小　　結

調査区が狭いものの大きく3期に分けることができる。Ⅰ期は古墳時代前期，Ⅱ期は律令時代，Ⅲ期は中世後半の時期である。

Ⅰ期の住居跡は住居跡の形状から4世紀代の時期が考えられる。又，Pit 1から出土した高杯脚片は4世紀中頃が考えられる。

Ⅱ期は律令時代の遺構である。1号掘立柱建物規模等から他の建物と相違している。第30次調査，第75次調査で検出した東西方向柵列はこの建物に並行し，建物の東側で南に曲がって終っており，明らかに建物と柵列が一体化している。1号溝は先述しているように第17次調査検出の2号溝と接続すると思われるが，他のどのような遺構と関連するのか今のところ把握できていない。第55次，第32次調査で検出した大規模建物群を囲繞する溝とは方位からみて合致しない。遺物は第75次調査地より出土しており，須恵器の高台付埦や蓋等は8世紀の年代が考えられよう。

Ⅲ期は中世後半の濠を主体とする。2号溝は第70次調査で検出した1号溝，第71次調査の2号溝と直結するもので，第70次調査のコーナー部分から当該溝のコーナー迄の長さは約95mを測る。2号溝の南北方向は更に第47次調査の1号溝に接続し，終了している。この延長は約70mを測る。上記から濠によって囲まれた郭が形成されているものと考えられる。又，2号溝の西側肩に接続する3号溝は第72次調査の1号溝に接続すると予想される。この濠の時期の検討は少ない資料なので問題があるが，この濠の埋没時期については伊万里系の皿（17）と唐津系の皿（18）がある。伊万里系の皿の内底には目痕が残るが，この目痕は胎土目積であるから17世紀初頭には下らないと思われる。他にも中世後半期の遺構があるが，形状が明確では無いため今後の資料を待ちたい。又，城郭形成の可能性をもつ濠については今後も構成・構造について検討してゆきたい。

註1．福岡市教育委員会「有田・小田部第5集」1984

5．第56次調査

1）調査地区の地形と概要

調査対象地は福岡市早良区有田１丁目32―９番地に所在し，対象面積は513㎡である。

有田地区での台地の標高は12～14m を測り，平坦部を形成する。この平坦部の北東側と北西

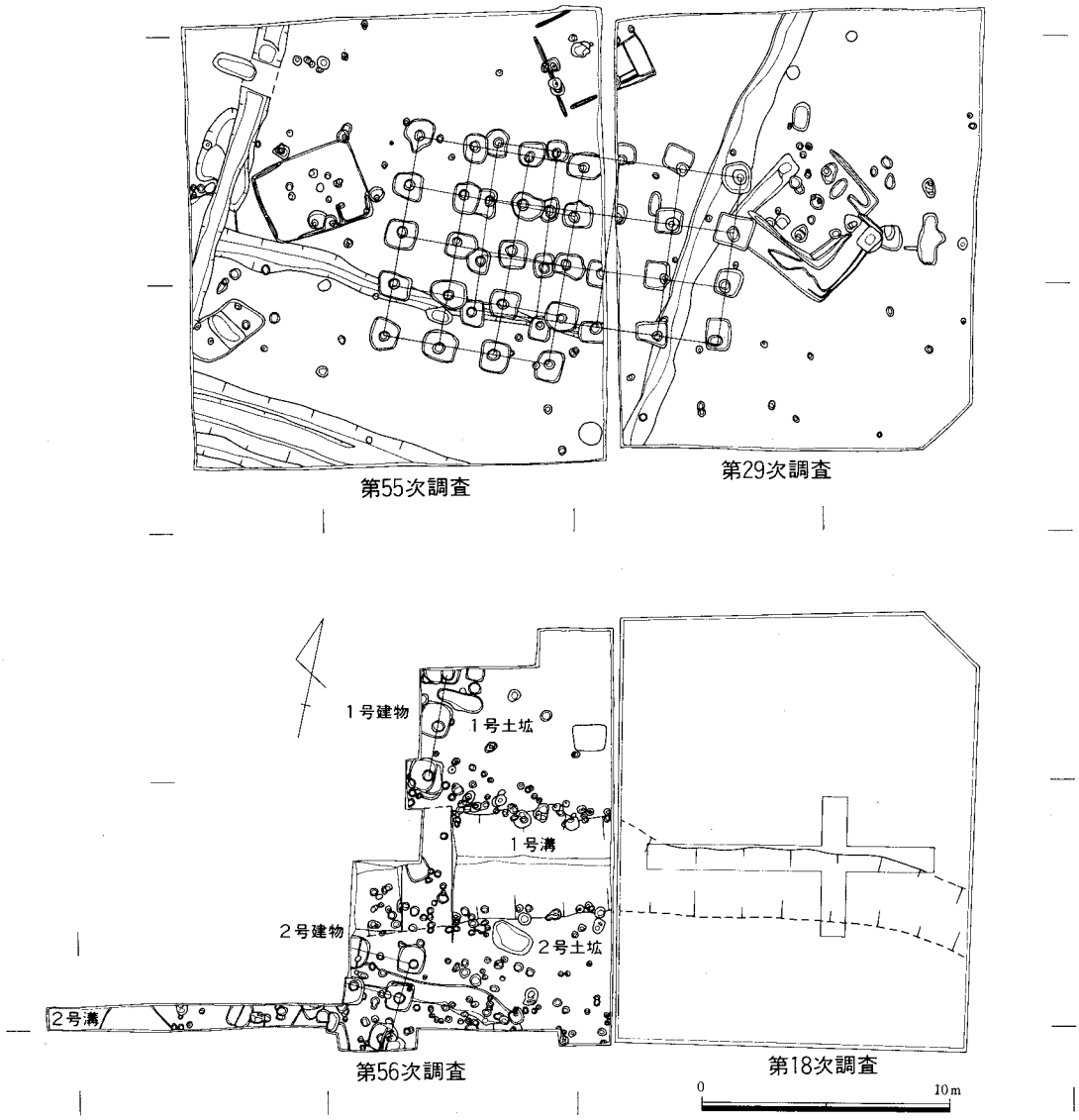


Fig.63　第18・29・55・56次調査遺構配置図（1/300）

側から谷が入り込むが，当該地はこの北西側の谷頭付近に位置しており，標高13m 前後を測る。東側に隣接して第18次調査が，北側に接して第29次，第32次，第55次調査が実施されており，当該地の遺構の存在については予想されていた。昭和56年度に有田バプテスト教会より司祭の住宅を教会敷地に建設する計画が申請された。上記に基づき，昭和56年度の国庫補助を得て発掘調査を実施した。

発掘調査は昭和56年８月25日から10月28日迄実施した。調査範囲は住宅用地の他，教会敷地部分にもトレンチを設け遺構の状態を確認した。又，表土及び残土については調査区外へ一旦持出し，調査終了後に埋戻す形をとった。表土は20～40cmである。遺構はローム層上に確認される。北側半分は削平を受け遺存状態は悪い。南半分は黒褐色の包含層が10～20cm堆積しており，弥生時代～古墳時代の遺物を多く検出した。

遺構は縄文時代末～弥生時代初頭の溝１条，古墳時代の溝１条，土坑１基，律令時代の掘立柱建物２棟，中世の土坑墓１基を検出した。

2）検 出 遺 構

土　　坑

１号土坑（Fig.64，PL.40）

不整隅丸長方形を呈し，長さ1.85m，幅45～70cm，深さ18cmを測る。主軸方位はE7°Sである。横断面は逆梯形状を呈しているが，両小口は２段にステップがつく。覆土は暗茶褐色粘質土で，底部中央には土師皿２個，白磁碗１個が副葬されていた。土壙墓である。

２号土坑（Fig.63）

不整隅丸長方形を呈し，長さ1.8m，幅1.1m，深さ40cmを測る。断面形は舟底状を呈し，覆土は黒褐色土であった。遺物は古墳時代の甕片が出土している。

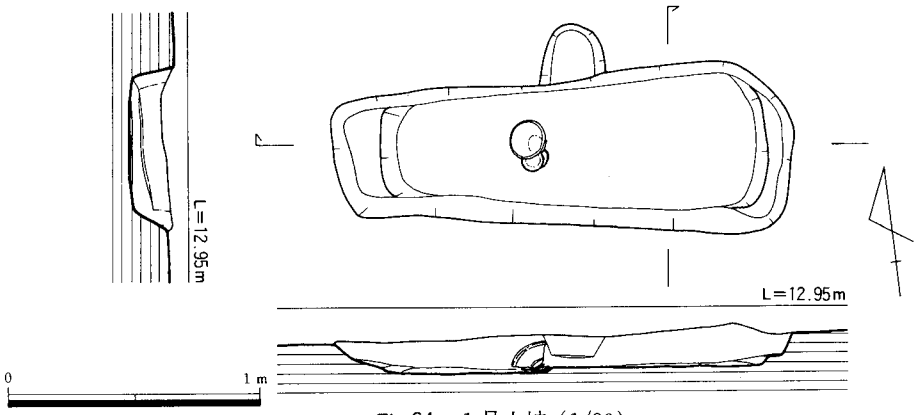


Fig.64　１号土坑（1/30）

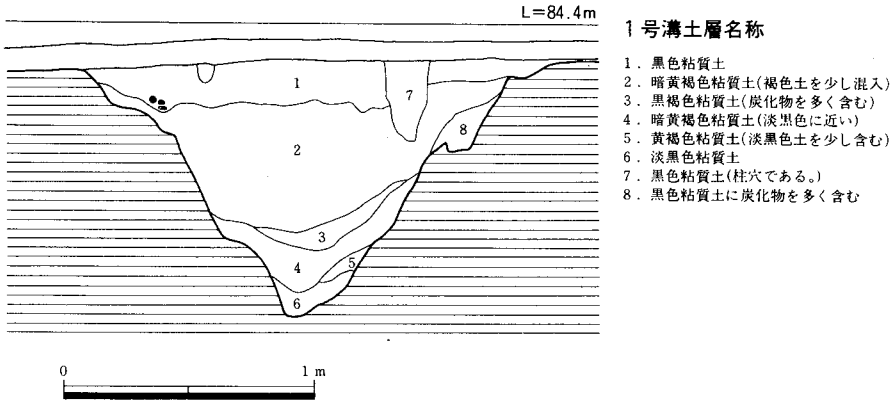


Fig.65　1号溝断面土層図（1/30）

掘立柱建物

いずれも調査区の西側境界地にあるため全体形は明らかではない。

1号掘立柱建物　(Fig.66, PL.41)

主軸方位をN1°30′Wに置いている。掘方は隅丸長方形を呈し，径は120cm×170cm，柱根径40cm，深さ42×75cmを測る。桁行長は420cm，各柱間は7尺である。遺物は少ない。

2号掘立柱遺物　(Fig.66, PL.41)

主軸方位をN4°Eに置いており，現状では2間×1間の規模しか確認できない。桁行長は300cm＋α，梁行長は204cm＋αを測る。掘方は隅丸長方形で，柱根径は30～35cm，深さ36～80cmを測る。総柱の建物である。

溝

1号溝　(Fig.65, PL.40)

東隣りの第18次調査にて検出されていた。東西方向に延びる溝で，断面形はV字形を呈する。南方向から西方向に曲がっており，第1・2次調査で検出した19街区の弥生時代初頭の溝に接続続するものと思われる。幅は3.8m，深さ2.6mを測る。覆土は黒褐色を呈している。第18次調査査では遺物は出土していない。今回の調査でも著しく少ない。

2号溝

教会建物の南側に設置した東西方向のトレンチの西端に検出した。南北方向に延びる溝であるが幅，深さ共に不明である。覆土は第1層一暗茶褐色土，第2層一黒褐色土を呈している。遺物は著しく出土したが，須恵器は含んでいない。

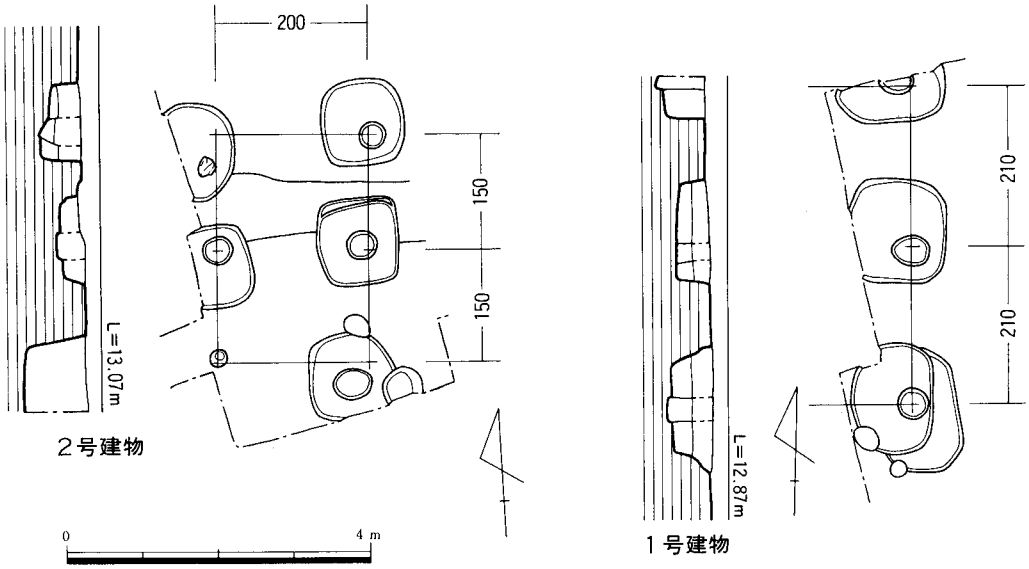


Fig.66　1号・2号掘立柱建物（1/100）

Tab.4　第56次調査掘立柱建物計測表

(単位：cm)

	規模	桁行		梁行		方位	床面積(㎡)	柱穴状態					備考
		実長	柱間寸法(尺)	実長	柱間寸法(尺)			Pit数	深さ	長径	短径	柱根径	
1号	2	420 (14)	7・7	——	——	N1°30′W	——	3	44～65	135～148	108～135	40～50	
2号	2×1	300 (10)	5・5	204 (6.8)	6.8	N 4°E	6.12	5	37～82	114～126	110～118	36～50	

3) 出土遺物

1号土坑出土遺物　(Fig.67, PL.43)

土師器

皿（1，2）　いずれも糸切り底で，口径8.5～8.6cm，器高0.7～1.1cmを測る。体部は丸味をもつ。内外面ヨコナデ調整を施す。淡黄褐色を呈し，胎土に砂粒を含む。

白磁

碗（3）　太い玉縁の口縁を有した碗の完形品である。口径16.6cm，器高7.0cm，高台径7.0cmを測る。内底見込みに1条の沈線を施し，貫入がある。口縁部の内外に釉垂れがある。釉は緑味を帯びた黄灰色を呈する。

2号土坑出土遺物　(Fig.67)

土師器

甕（4）　口径15.5cm，現存高8.6cmを測る。短頸の甕で，口縁部は小さく外反する。胴部は肩が張らない。胴部内面はヘラケズリが，外面及び口縁部内面はヨコナデ調整である。胎土に

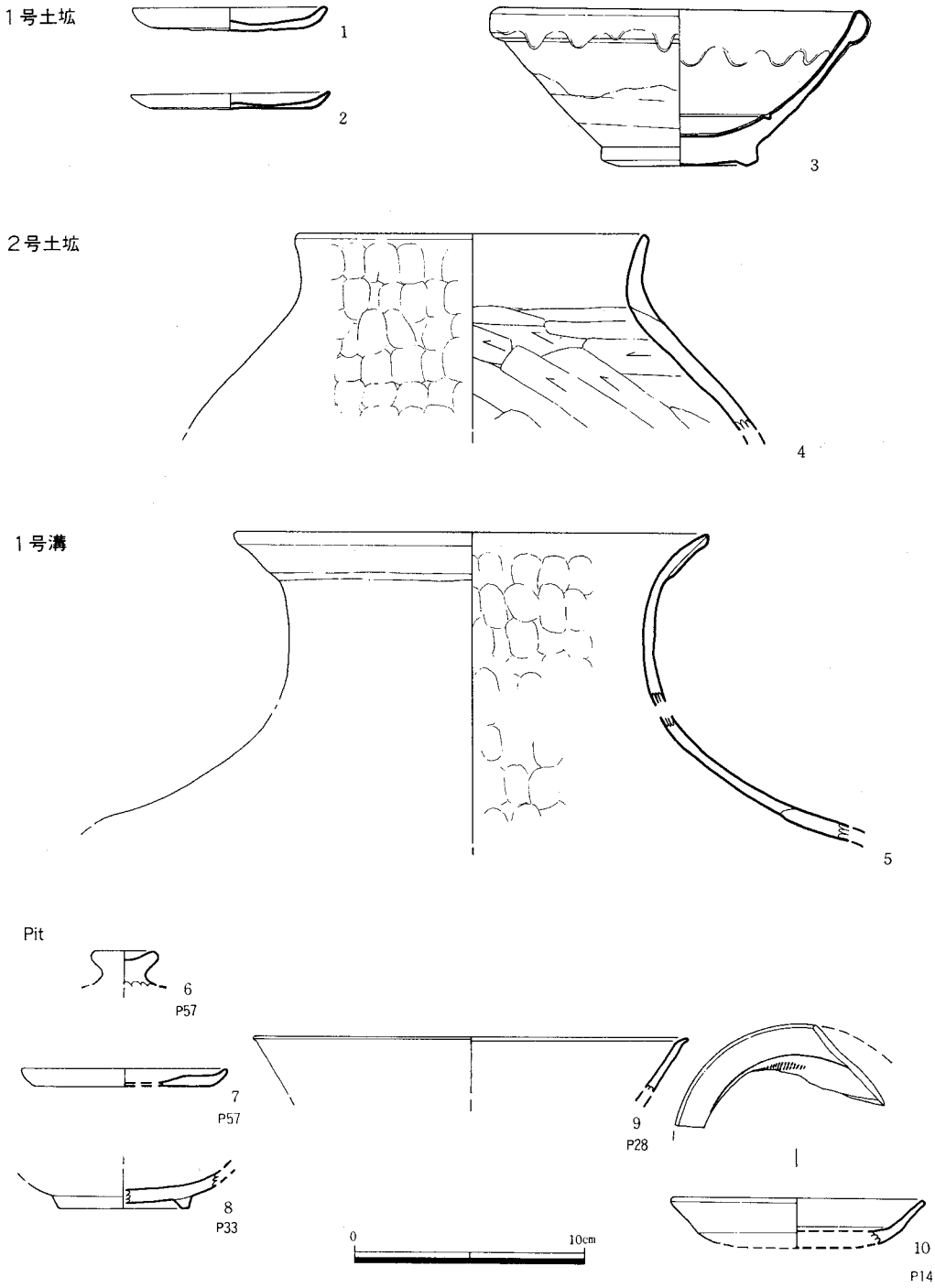


Fig.67　出土遺物（1/3 ）

砂粒を多く含み，淡黄褐色を呈する。

掘立柱建物出土遺物（Fig.67）

遺物は全て細片が多いが，２号建物より須恵器杯蓋片，つまみや古墳時代の土師器の甑把手が出土している。

須恵器

杯蓋　　図示し得ないが，口縁部の内側に三角形のかえりを有している。かえりは口縁端部より下に出ない。暗青灰色を呈している。

つまみ（66）　径３cm，高さ1.2cmを測る。中央部分をくぼませ，外縁をつまみ出している。砂粒を含まず，青灰色を呈する。

１号溝出土遺物（Fig.67）

細片が多く図化できたのは１点だけであった。土器片は溝の第５層より検出している。

弥生式土器

壺（５）　図上で復元した。口径22.5cm，現存高17.5cmを測る。肩が大きく張っているが内外面共に頸部の境は明瞭でない。口縁部は緩く外反し，外面には粘土を貼付けて頸部との境とするが明瞭な段は形成しない。口縁端部は断面が“コの字形”ではなく，下端部がふくらみ丸味をもっている。全体にナデ調整を施すが整形は粗い。胎土に砂粒を多く含み，淡黄褐色を呈する。外面に丹塗りの痕跡がある。器形にめりはりが無く，更に調整が粗いなど疑問も残るが，胎土などから弥生時代の土器とした。

２号溝出土遺物（Fig.68～70，PL.42～44）

土師器

鉢（11～14）　11の口径16.5cm，現存高6.9cm，12の口径14cm，現存高6.0cm，13の口径14cm，現存高7.5cm，14の口径14.4cm，現存高6.6cmを測る。体部は12のように球形に近いものと，13のように体部に余り張りの無い器形がある。13，14の口縁部はやや内弯気味である。12，14の体部内面にはヘラケズリが認められる。11，13の調整は不明である。12の胎土は精良であるが，他は砂粒を多く含む。12は明橙色を，他は明褐色を呈している。

碗（17，18）　17の口径14.2cm，現存高4.7cm，18の口径13.6cm，器高3.9cmを測る。17の器壁は厚く，口縁部は内弯する。18の体部下半にはヨコ，ナナメのハケ調整を施す。他は内外面ナデ調整である。17の胎土には砂粒を含まない。17は赤褐色を，18は淡褐色を呈する。

高台付鉢（21～23）　21は脚の低い高杯の可能性がある。21は脚部径7.5cm，脚高1.5cm，22は脚径8.0cm，脚高3.0cm，23は脚径12.5cm，脚高4.0cmを測る。21の脚はやや内弯気味である。

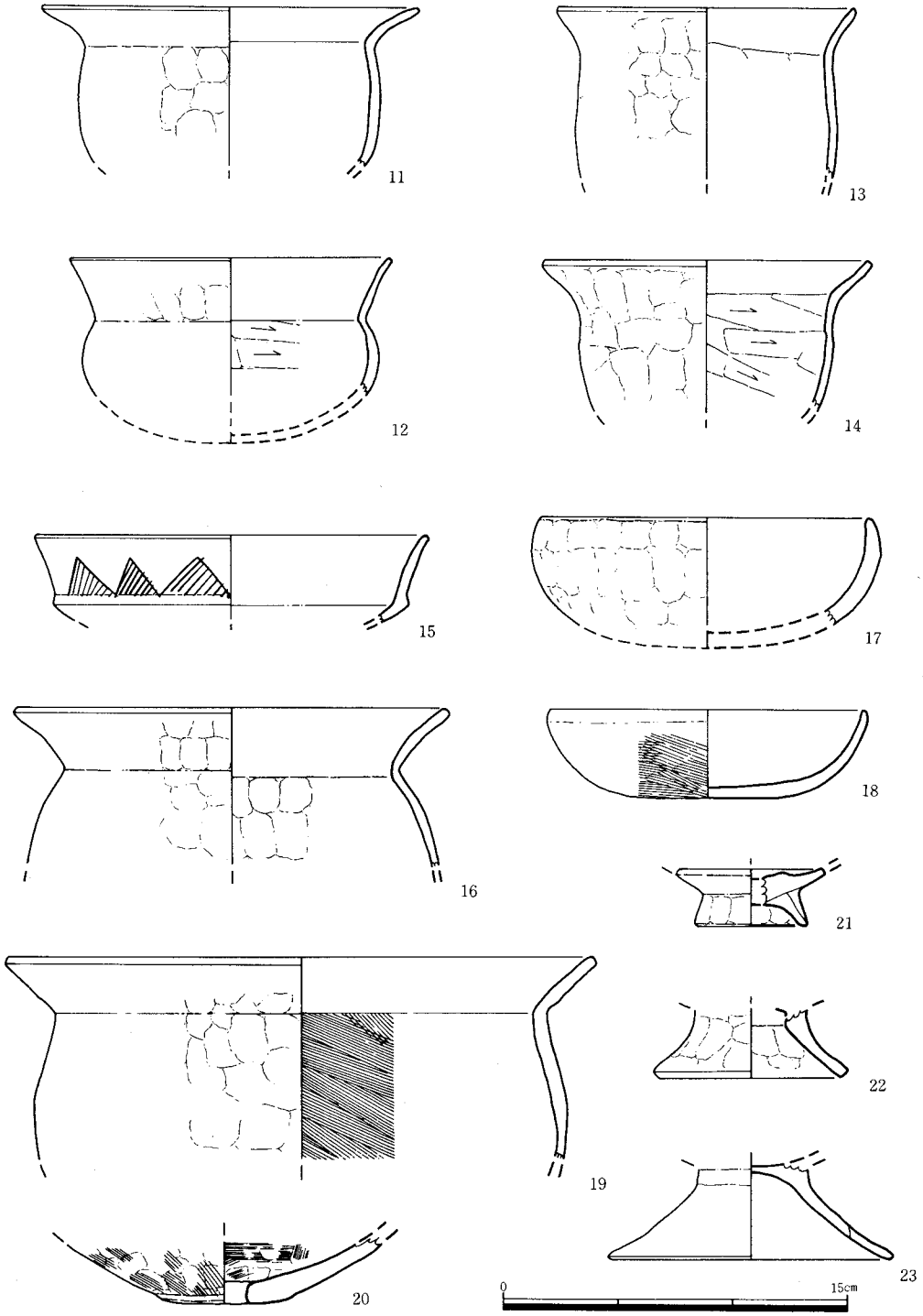


Fig.68　2号溝出土遺物（1/3）

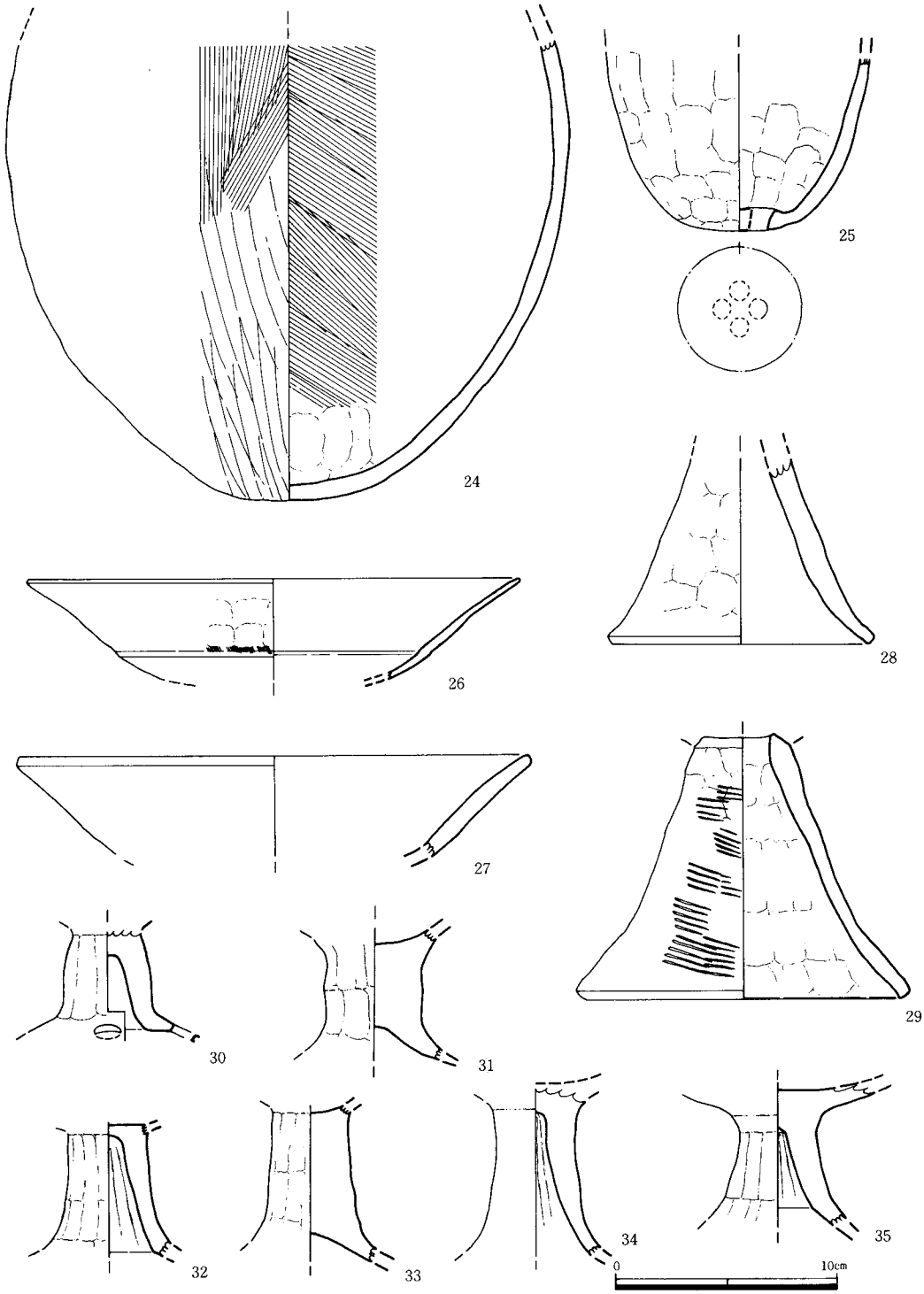


Fig.69　2号溝出土遺物（1/3）

23は強く外へ張っている。いずれもヨコナデ調整を施すが，23はヘラによるヨコナデ調整である。いずれも胎土に砂粒を含む。21，22は淡褐色，23は明褐色を呈する。

壺（15）　口径15.2cm，現存高3.8cmを測る。口縁部の段は強く張っている。段より下位は丸味をもっている。口縁部外面に櫛描きの鋸歯文を施す。内外面ヨコナデ調整を施す。胎土は微密で，赤褐色を呈する。

甕（16,19,24）口径は16が19cm，19が25.7cm，24の最大胴径25.5cm，現存高70cmを測る。16は小形の甕で，胴部は強く張らない。19，24の体部内面にはヨコ，ナナメ方向のハケ調整を施す。いずれも胎土に砂粒を含む。16は淡灰褐色，19は明黄褐色，24は淡赤褐色を呈す。

甑（25）　小型の丸底甕で，底部に4個の穿孔がある。現存高7.5cm，孔径1.0cmを測る。内外面ナデ調整で，胎土に砂粒を含む。外面は暗茶褐色を呈する。

高坏（26～35）　26，27は坏部で，26は口径22.2cm，27は口径23.2cmを測る。26の底部は丸味をもち，体部は大きく外反する。底部との境は小さな段がある。器壁は薄い。26，27ともにヨコナデ調査を施す。26の体部にタテハケ調整の痕跡がある。26には砂粒を含まない。26は褐色を，27は黄褐色を呈する。28～35は脚部片である。28，29は円錘形を呈す。28の脚径12.8cm，29の脚径15cm，器高4.8cmを測る。29の外面には5本単位のタタキをヨコ方向に施す。28の内面はヨコ方向のヘラケズリを施す。28，31は筒部が空洞になっていない。30は筒部がふくらみ，脚裾部との境に径1.2cmの孔を2～3カ所設ける。32～35は裾部との境の内外面に屈折を有している。30，32～35の筒部外面はタテ方向のヘラナデを施す。30，35の胎土は精選されている。28～32，35は明褐色，33は暗褐色，34は褐色を呈する。

手づくね鉢（36～38）　36の口径5.8cm，現存器高6.9cm，37の口径6.0cm，現存高7.0cm，38の現存高4.0cmを測る。体部は丸味をもち，底部はやや尖り気味である。37は腰が張る。破片のため口縁部直下に穿孔は認められないが，タコ壺の可能性もある。内面は下から上方向へ成形痕が残る。ナデ調整である。胎土に砂粒を含み，37は黄灰色，36，38は黄褐色を呈する。

器台（39～41）　39，40は完形品である。39は器高6.8cm，脚端部径10.2cm，底部径7.1cm，40は器高9.8cm，脚端部径12.3cm，底部径7.5cm，41は脚端部径10.4cmを測る。41は筒形で，端部は丸味をもつ。39，40は内部が空洞になっており，39の端部は平坦に仕上げる。内外面ナデ調整を施す。41の内面はタテ，ヨコ方向のハケ調整である。胎土に砂粒を含み，39は黄褐色，40，41は淡黄褐色を呈する。

支脚（42）　完形品である。器高16.4cm，底径8.0×9.0cmを測る。断面は不整円形の円柱状をなし，先端部は細くなり，内傾する。内傾部分の背部には幅2cmを測る把手が作られる。ナデ調整で，全体にスサが付着している。砂粒を含み，褐色を呈する。3本を1組として支脚としての用を足したものと思われる。

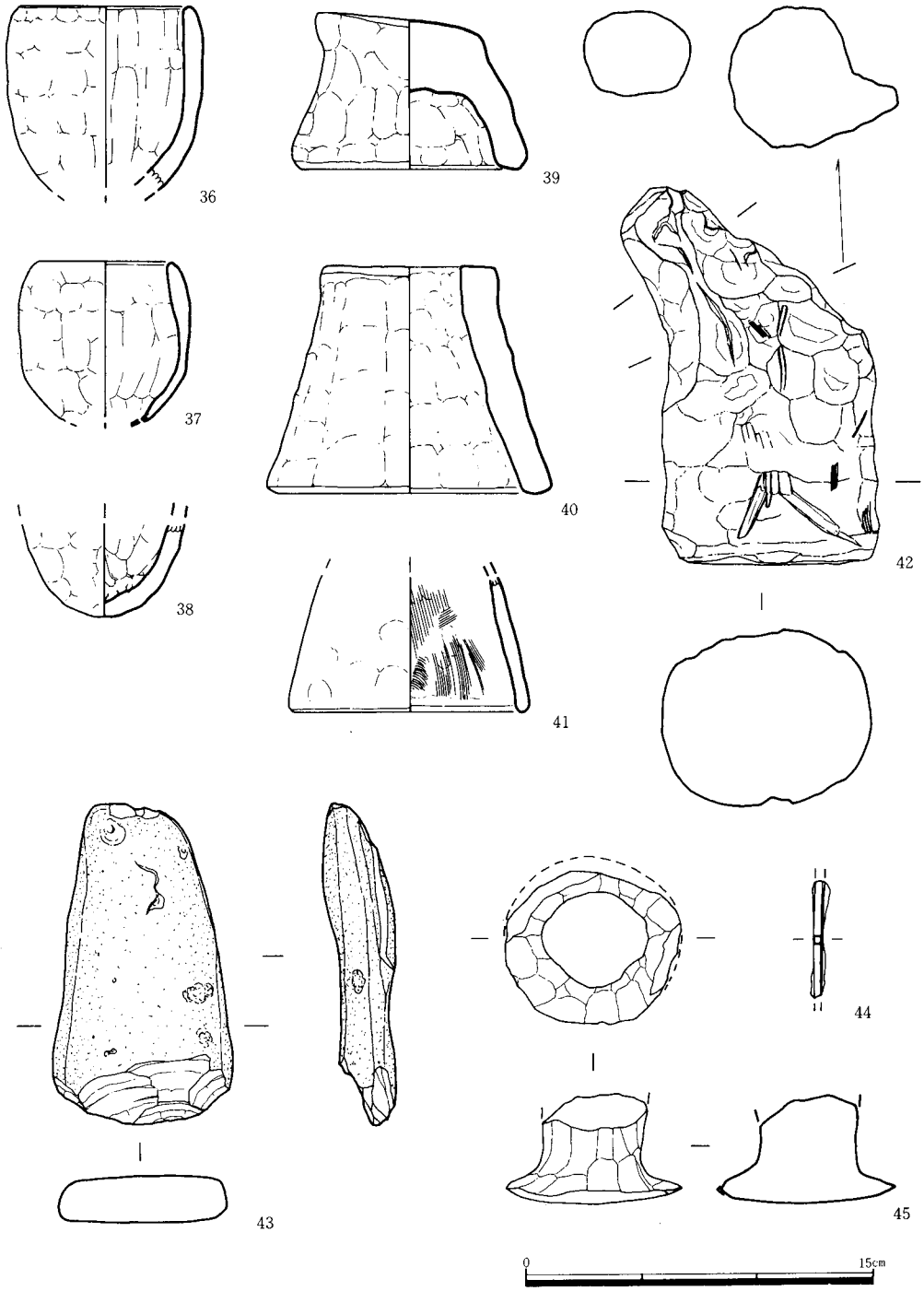


Fig.70　2号溝出土遺物（1/3）

石　器

敲打器（43）　長さ6.6cm，最大幅5.0cm，最小幅3.6cm，厚さ2.2cmを測る。扁平の玄武岩質の礫を用いている。上，下の両先端を敲打に利用している。両側辺は面取り調整が施されている。内面は自然面を残す。

滑石製品

石鍋（45）　石鍋底部片の転用品で，径0.7～1.2cmの穿孔が3カ所ある。欠損部は部分的にケズリを施す。錘りに使用した可能性もある。混入したもので2号溝に伴わない。

鉄製品

釘（44）　長さ5.2cm,厚さ3mmを測る。断面形は方形を呈している。基部,先端部を欠いている。

Pit出土遺物　（Fig. 67，71．　PL.44）

土師器

皿（7）　P57出土。糸切り底で，口径9.0cm，器高0.8cmを測る。体部の立上りは低い。内面はナデ調整である。明褐色を呈する。

瓦　器

椀（8）　P33出土。高台径6.1cmを測る。高台は断面三角状を呈す。内外面ナデ調整で，外面黒灰色を呈する。

白　磁

碗（9）　P28出土。口径19.0cmを測る。口縁端部は小さく外反する。釉は灰白色を呈する。

青　磁

皿（10）　P14出土。同安窯系の皿で，内底見込に圏線を，内底に猫描文を施す。口径11.2cmを測る。釉は明黄緑色を呈する。滑石製品48，50が伴う。

滑石製品

蓋（48，50）　P14出土。48は多辺形に，50は四角形に成形する。48はA面の調整も粗く，側辺の面取りも充分でないので，未成の段階と思われる。50には四辺の中央に一孔が設けられ，隅丸方形を呈した鉄製リングが付けられている。吊り下げる用途が考えられるかもしれない。B面は滑らかである。50のA面中央部分には記号状の刻線がある。48には媒が付着している。

石鍋（51）　P26出土。口縁部直下に鍔状の突帯を設けている器形で，外面のケズリはタテ長である。

石　器

砥石（49）　P44出土。現存長7.9cm，最大幅5.0cm，厚さ3.4cmを測る。4面を砥面として利用。下小口は敲打調整である。頁岩質である。

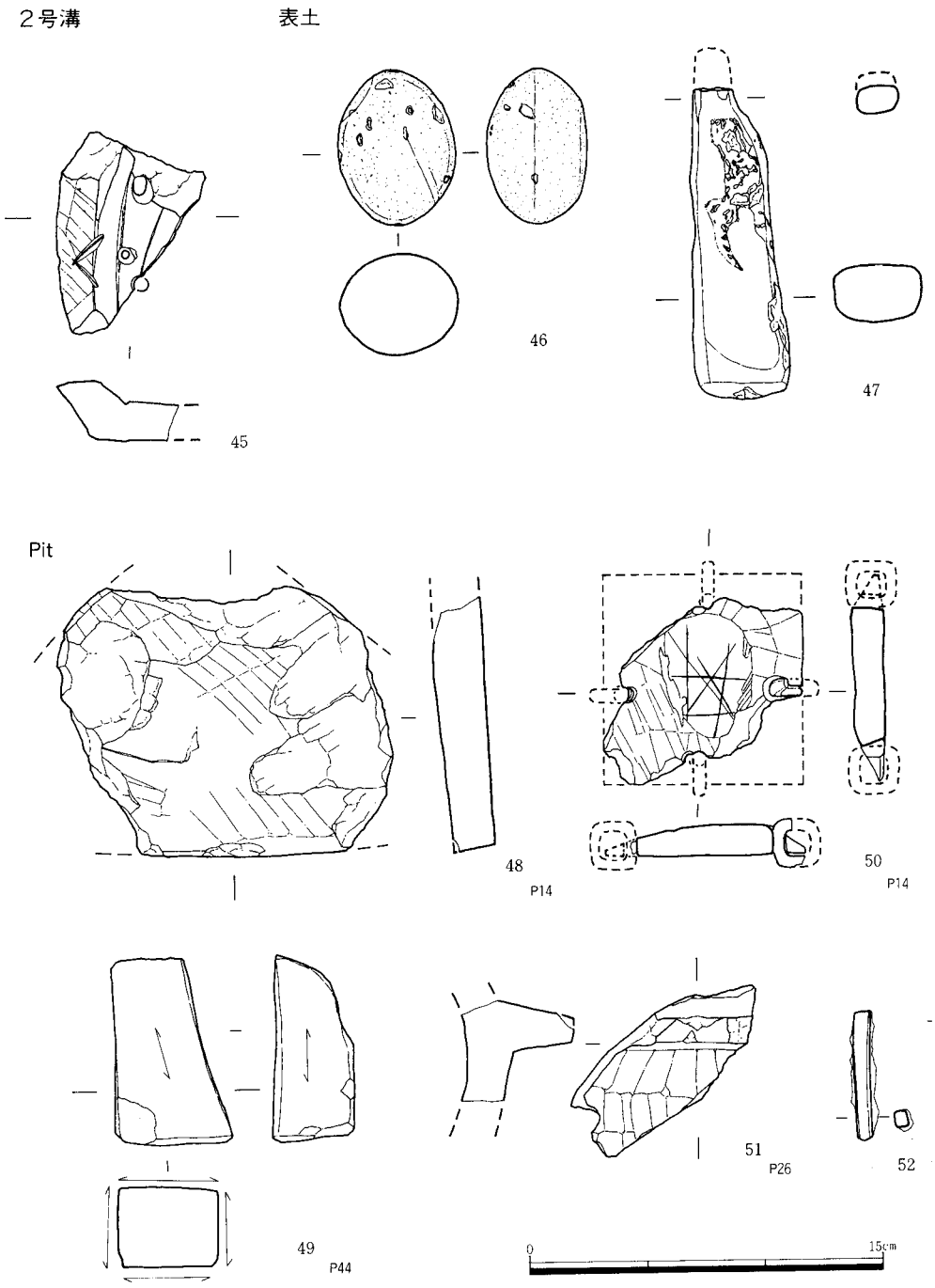


Fig.71　出土遺物（1/3）

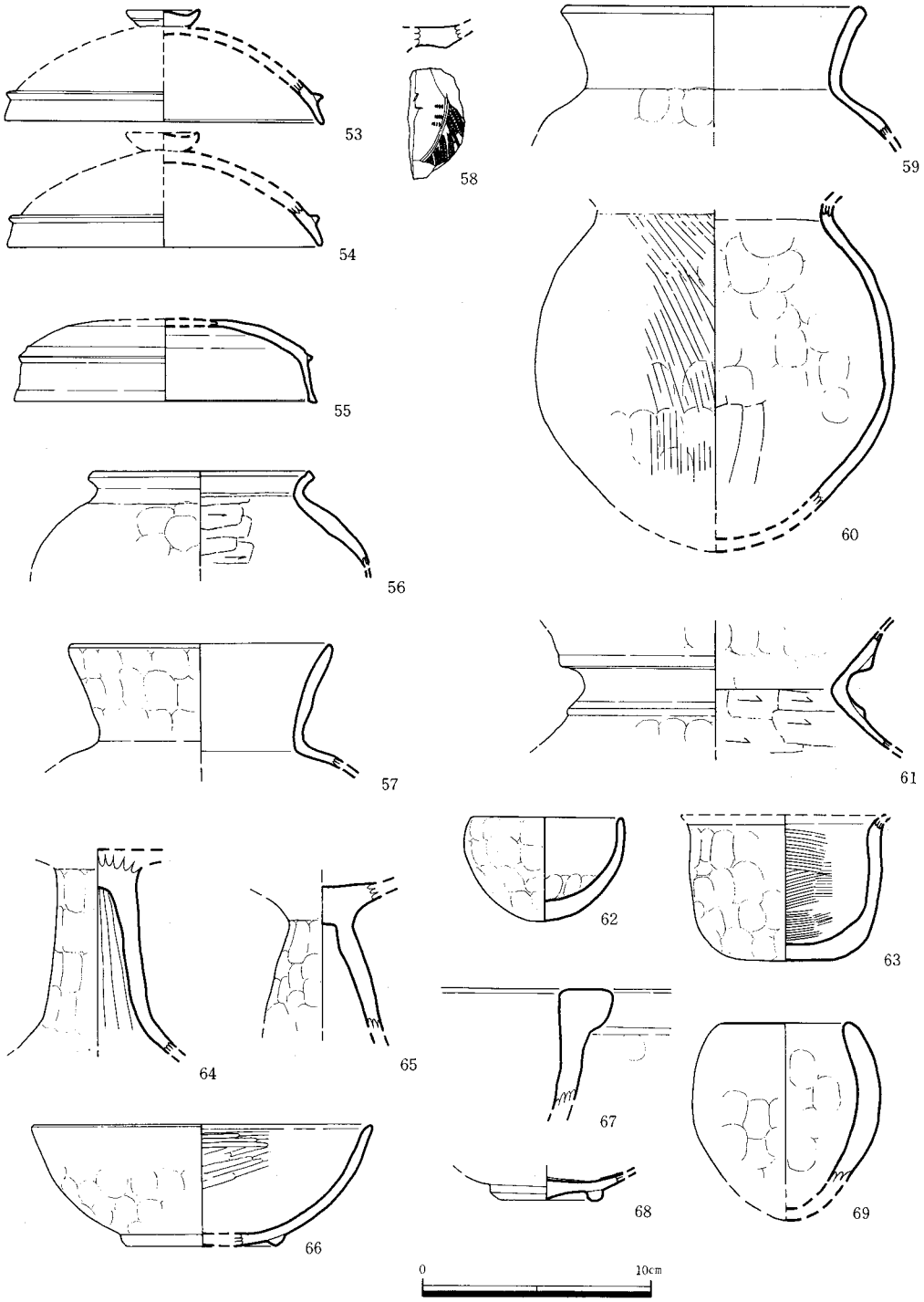


Fig.72　表土，包含層出土遺物（1/3）

包含層、及び表土出土遺物 (Fig.71, 72, PL.44, 45)

黒褐色土の包含層より出土したものは古墳時代迄の遺物が多い。中世の遺物は後世の混入品である。表土からの遺物は45, 53, 54, 64, 66である。

陶質土器

坏蓋 (53, 54)　いずれも口縁部の細片で，口縁部外面に三角形の突帯を付けている。体部は丸味をもち，53のつまみが貼付くと思われる。推定復元口径は14cmである。胎土は精良で，53は暗青灰色，54は灰色を呈する。

器台 (58)　破片であるが，外面に櫛描文を施す。胎土は精良で，暗青灰色を呈す。

須恵器

坏蓋 (55)　口径13cm，現存高 3.7 cmを測る。体部と口縁部の境には三角形状の強い段を有す。口縁端部は少し外へつまみ出す。体部全体に時計回りのヘラケズリを施す。胎土は精良で，外面は暗灰色，内面は青灰色を呈す。

土師器

甕 (59, 60)　59の口径13.5cm，60の現存高13cm，胴部最大径16cmを測る。59の体部内面はヘラケズリを施し，60の外面はタテハケを，内面はナデ調整である。いずれも胎土に砂粒を含み，褐色を呈する。

壺 (56, 57)　口径は56が 10cm，57は11.6cmを測る。56は短頸で，口縁部の上部をつまみ出している。体部は球体に近く，内面はヘラケズリを施す。口縁部はヨコナデ調整である。57は長く高い口縁部を有し，体部はやや肩が張る。56は淡褐色を，57は淡赤褐色を呈す。胎土に砂粒を含む。56は短頸の甕とも考えられる。

鼓形器台 (61)　口縁部及び脚裾部分を欠いている。現存高 4.8 cmを測る。内面下半はヘラケズリを施す。胎土に砂粒を含み，淡灰褐色を呈する。

高坏 (64, 65)　65は筒部が膨らむ。64は裾部は軽く屈折する。内面はいずれもヨコ方向のヘラケズリを施される。いずれも胎土に砂粒を含み褐色を呈する。

手づくね土器 (62,63,69)　62口径6.5cm，器高4.5cm，63は推定口径8.6cm，推定高6.3cm，68は口径5.8cm，現存高7.0cmを測る。62は平球体を呈し，ナデ調整である。63は平底状を呈し，口縁部は小さく外反する。内面はヨコハケ調整である。68は口径が小さく，胴部が強く張り出している。内外面ナデ調整である。62は黄褐色，63は黄灰色，69は明橙色を呈する。

調整具 (45)　上部を欠いている。下部は凸レンズ状を呈し，表面は滑らかである。上部は不整円柱状で，側面はタテ方向のナデ調整が行なわれる。円柱状の部分は把手と思われるので，器面タタキ調整の際の内面からの当て具とも考えられよう。

土師質土器

鍋 (67)　L字形の口縁部を肥厚させている。第32次調査の井戸出土の鍋と同器形で，白磁皿

註1

に伴なうと思われる。暗褐色を呈す。

瓦　器

椀（66）　口径11.6cm，器高5.3cm，高台径7.0cmを測る。高台は断面三角形を呈す。内面と口縁部外面はヘラミガキを施す。口縁部は黒色を，他は灰色を呈す。

白　磁

皿（68）　高台径5.8cmを測る。釉は灰白色を呈し，口縁部外面迄施す。内面には環状のカキ取りがある。

石　器

磨石（46）　長さ6.6cm，最大幅5.0cm，最大厚4.3cmを測る。卵形を呈し，全体に磨滅している。細粒砂岩質である。

道具（47）　扁平棒状の自然石を用いており，先端部は細くなっている。長さ7.9cm，基部幅5.0cm，先端部幅1.8cm，厚さは1.2～2.5cmを測る。断面は隅丸長方形を呈し，器面全体に貝殻が付着している。海辺にて使用された道具と思われる。粘板岩質である。

4）小　結

この調査の成果については範囲に限定もあるので簡単にまとめたい。大きく4つの時期に分けられ，Ⅰ期は1号溝の時代，Ⅱ期は黒褐色包含層及び2号溝の時代，Ⅲ期は1号・2号建物の時代，Ⅳ期は1号土坑の時代である。

Ⅰ期の1号溝は第1・2次調査の19街区より検出された溝の延長上にあると思われる。隣接の第18次調査では第19街区の溝が西方向に緩くカーブする事が把握されている。とすると，この溝は台地の縁辺を巡る形態をとらず，現在の時点では台地上平坦部分を断ち切り，北西方向からの谷を囲む形で巡る形状を示している。調査個所が少ないので，必要以上の言及は避けるが，板付遺跡，比恵遺跡とは若干相違した環濠形態をとる可能性をもっている。出土した壺形土器は破片からの復元のため器形的に多少問題もあるが，胎土は明らかに弥生的である。口縁部の作りは板付Ⅱ式のようにめりはりは無いが，粘土を貼付けて肥厚させるなどの手法を用いている。肩部が強く張っており，頸部との境が不明瞭などが特徴的である。

Ⅱ期は黒褐色の包含層，及び2号溝の出土遺物を主体とするが，遺物には須恵器を含まない。形態的に2～3型式に分離することが可能である。4世紀代の遺物である。

Ⅲ期は奈良時代と思われる建物群で，1号・2号建物ともに柱穴掘り方規模や柱根は大きい。

註1.　福岡市教育委員会「有田・小田部第4集」1983

第55・56次調査検出の建物と同規模で，恐らく３間×４間の総柱の建物になるものと思われる。１号建物は第55・56次調査の１号建物と方位を一致する。昭和58年度の第77・78次調査では３間×６間，３間×９間の側柱だけの建物をも検出しており，建物群の構成を考えるうえの大きな資料を得ている。

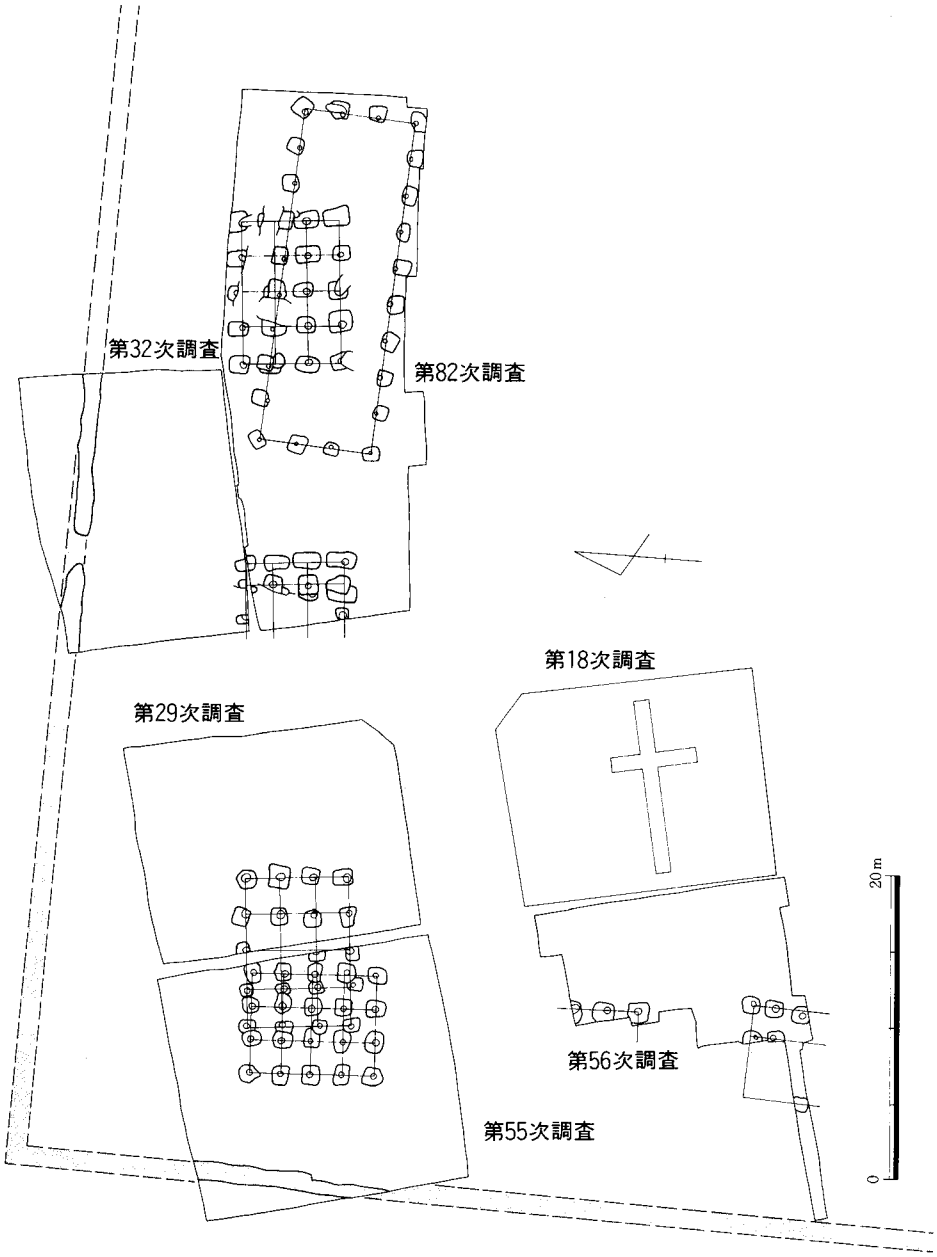


Fig.73　掘立柱建物配置図（1/500）

6．第57次調査

1）調査地区の地形と概要

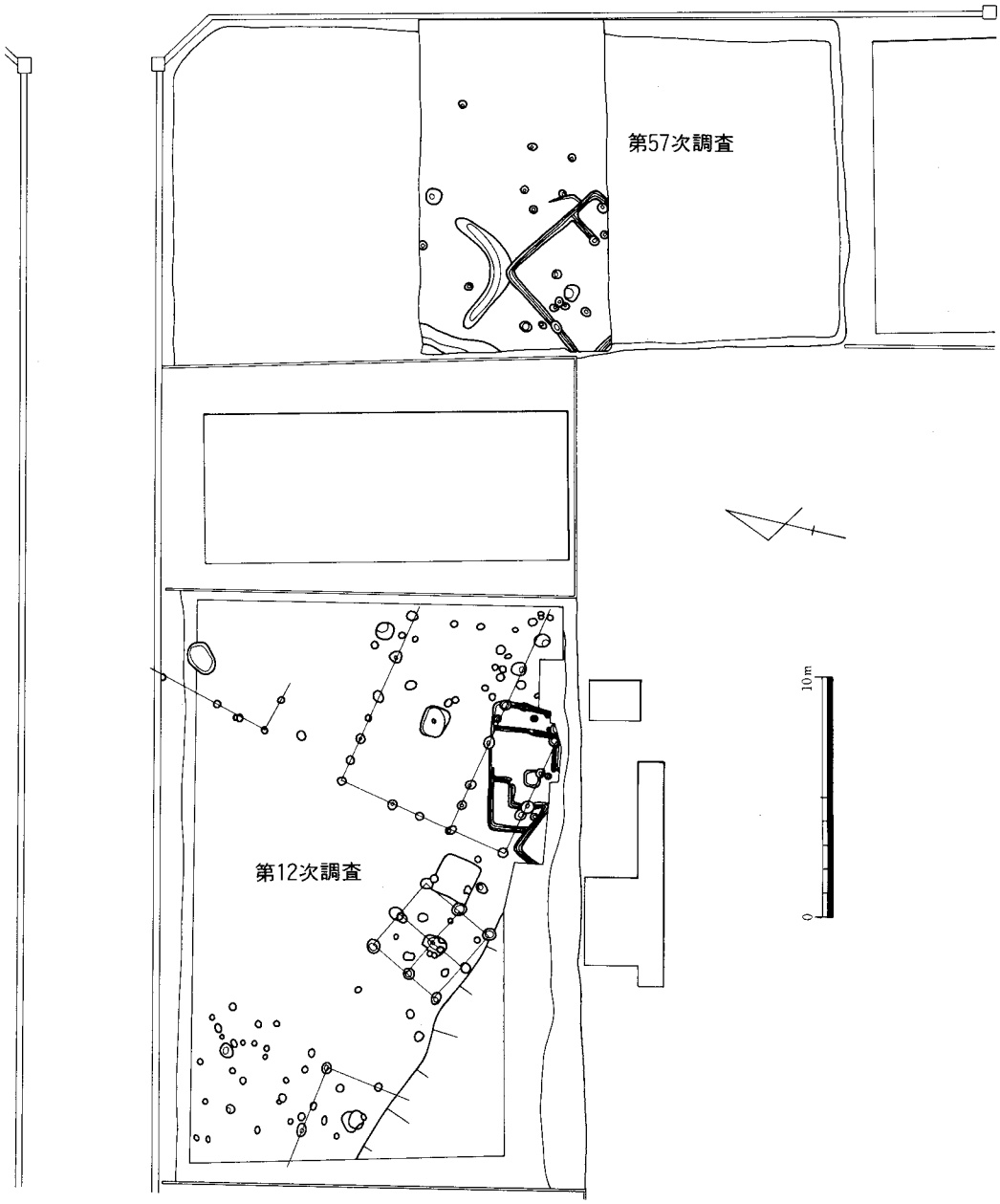


Fig.74　第12・57次調査遺構配置図（1/300）

調査対象地は福岡市早良区有田１丁目241－２番地にある。調査対象面積は275㎡である。

有田地区の台地最高所の標高は14m前後を測る。かって15m前後を測った地形は区画整理等の削平などで著しく現況が変更している。当該地はこの平坦地の西側に位置し，標高約12mを測る。周辺では西側に第１次，第２次，第12次，第39次調査がある。隣接の第12次調査は九州大学考古学研究室が実施した第１次，第２次調査（第13街区）の再調査的な要素が強い。九州大学の成果では炉跡４基，古墳時代住居跡２軒を検出したが，第12次調査では，その他小型の竪穴住居

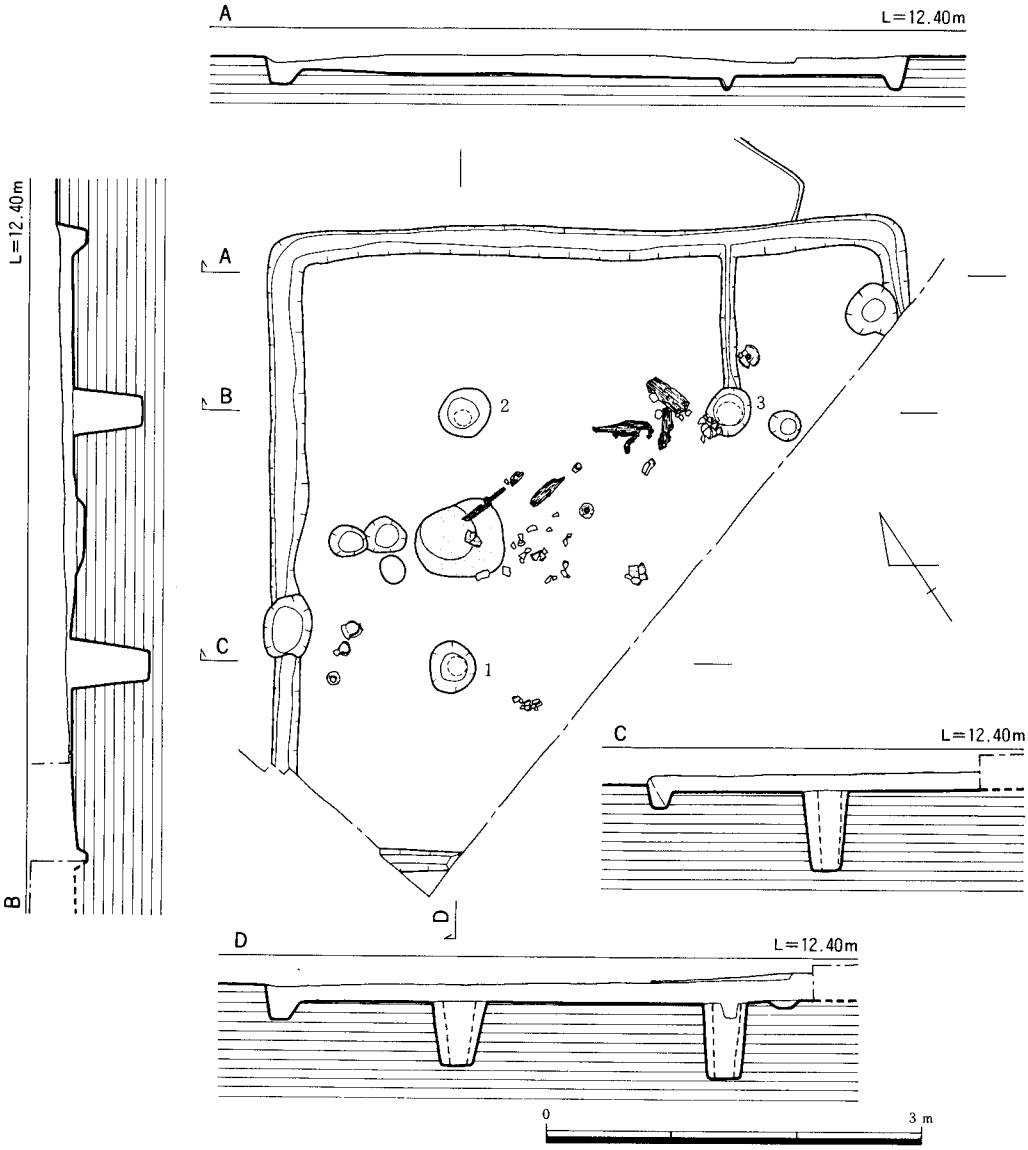


Fig.75　住居跡（1/60）

跡１軒，掘立柱建物４棟を検出している。当該地の現況は畑地であったが，昭和56年度の専用住宅の申請に基づき昭和56年度の国庫補助を得て発掘調査を実施した。

発掘調査は昭和56年10月１日から10月14日迄実施した。対象地の面積が狭いため原因者の了解を得て表土，及び排土は全て調査外へ搬出した。

遺構はローム層面に検出される。表土は耕作土で約15cmの深さを測る。検出した遺構は古墳時代住居跡１軒，同じく周溝状遺構，中世末の溝１条である。

2) 検 出 遺 構

住 居 跡

１号住居跡 (Fig.75，PL.45)

西南部の境界地に位置するための住居跡の全体形は把握できなかった。東西辺は5.2m，南北辺は約5.1ｍを測り，方形を呈する。周壁は削平のため遺存状態は悪く，深さ15cmを測る。壁下には周溝が巡り，幅約20cm，深さ約16cmを測る。この周溝から住居跡の柱穴Ｐ３に直結する溝が延びている。ベッドのなごりを残すものと思われる。炉は柱穴Ｐ１とＰ２の間に作られ，長径70cm×短径60cm，深さ６cmを測る。柱穴は４本で構成され，掘方径40cm，柱根径15cm，深さ50～60cmを測る。遺物は床面に密着した状態で出土し，甕，壺，鉢，高杯がセットをなしている。その他，床には炭化した木材が認められた。住居跡の平面形は４世紀代，５世紀前半代に比べて完全に方形化され，４本柱となっているが６世紀前後の住居跡に比べ規模が大きく，まだ“かまど”を有していない特徴をもっている。

周 溝 状 遺 溝 (Fig.76，PL.45)

半円形を呈している。削平のため全形を知ることができないが，本来，円形を呈した可能性がある。覆土は黒褐色土を呈している。弧形部の両先端での内径は約４ｍを測る。幅は中央部

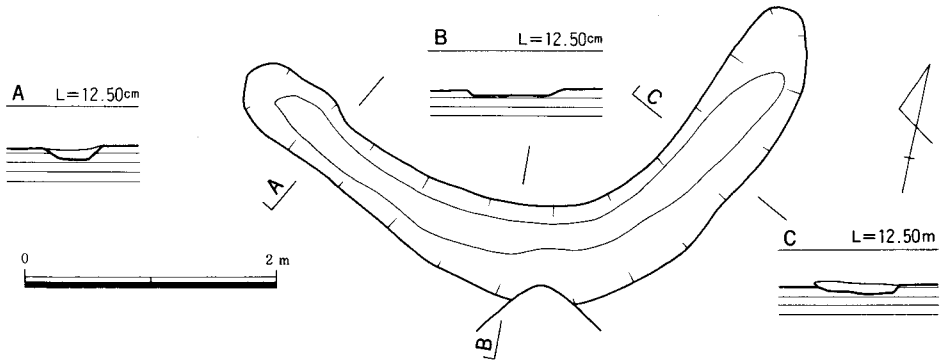


Fig.76 溝状遺構 (1/60)

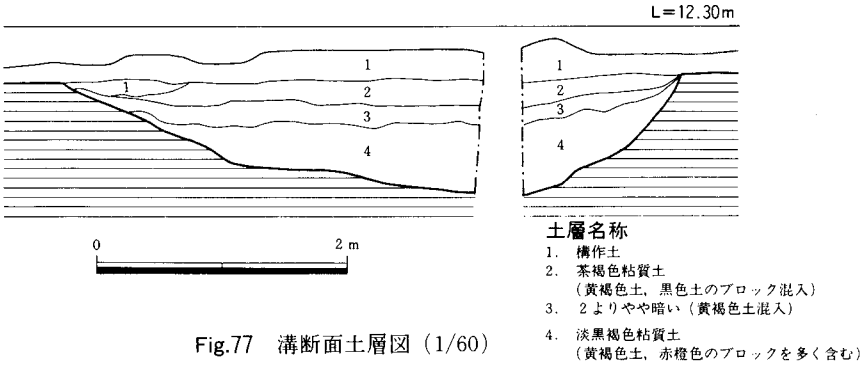


Fig.77　溝断面土層図（1/60）

分で約80cm，先端部で50～60cmを測る。深さは5～8cmである。遺物は出土しなかった。

溝（Fig.77，PL.46）

中世の濠を形成する溝であるが境界地のため幅，深さともに不明である。覆土は暗茶褐色粘質土を主体としており，下層には淡黒褐色土の層が存在する。遺物はいずれも中世末の雑器片であったが，鼎等の破片も含んでいる。第53次，第71次，第55次で検出された濠と同時期の遺構で，城郭を構成するものと思われる。

3）出土遺物

住居跡出土遺物（Fig.78，79，PL.47）

土師器

小型丸底壺（1～4）　3は口縁と体部下位を，4は体部下位を欠損している。1は口径8.9cm，器高10.7cm，2は口径8.0cm，器高9.3cmを測る。4は口径9.2cmを測る。2～4の体部は丸味をもち，1の体部は胴部中程が強く張り“そろばん”玉状をなす。口縁部は外反し直線的に立ち上るが，胴部最大径よりも口径は狭い。1，2の胴部内面にはヨコ方向のヘラケズリが施される。4は1～3に比べ器壁は薄く，胎土は精良である。4は褐色を，1は淡黒灰色，2，3は淡褐色を呈している。4以外はいずれも胎土に砂粒を含む。焼成は4が著しく軟質の他は良好である。

杯（5，6）　5は鉢状に外開きする器形で，口縁部はひずみをもっている。口径10.9cm，器高7.3cmを測る。外面はヨコナデ調整し，内面はヨコ方向の丁寧なヘラケズリを施している。6は口径8cm，現存高5cmを測る。体部下位は丸味をもち，口縁端部はシャープに仕上げる。

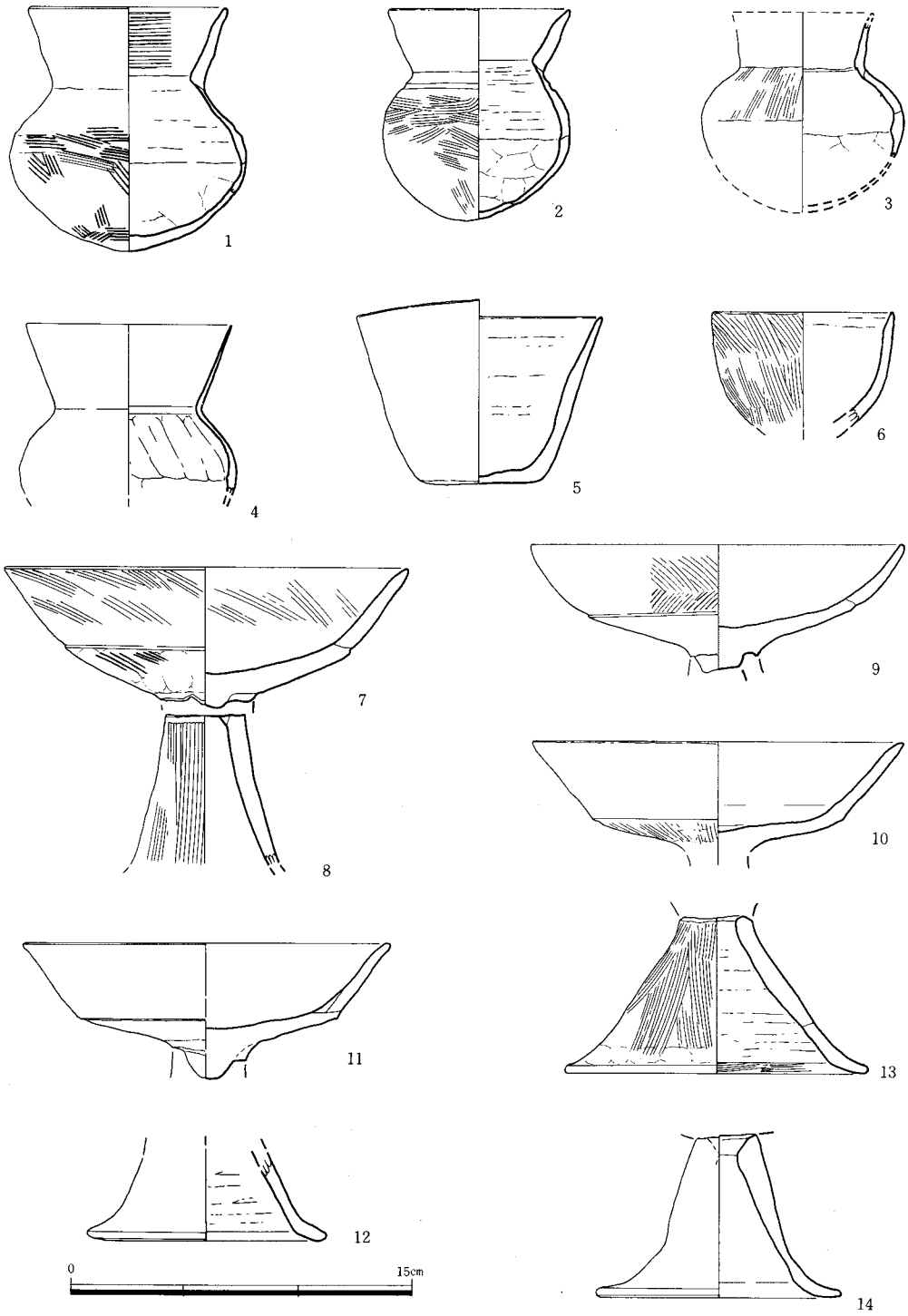


Fig.78　住居跡出土遺物（1/3）

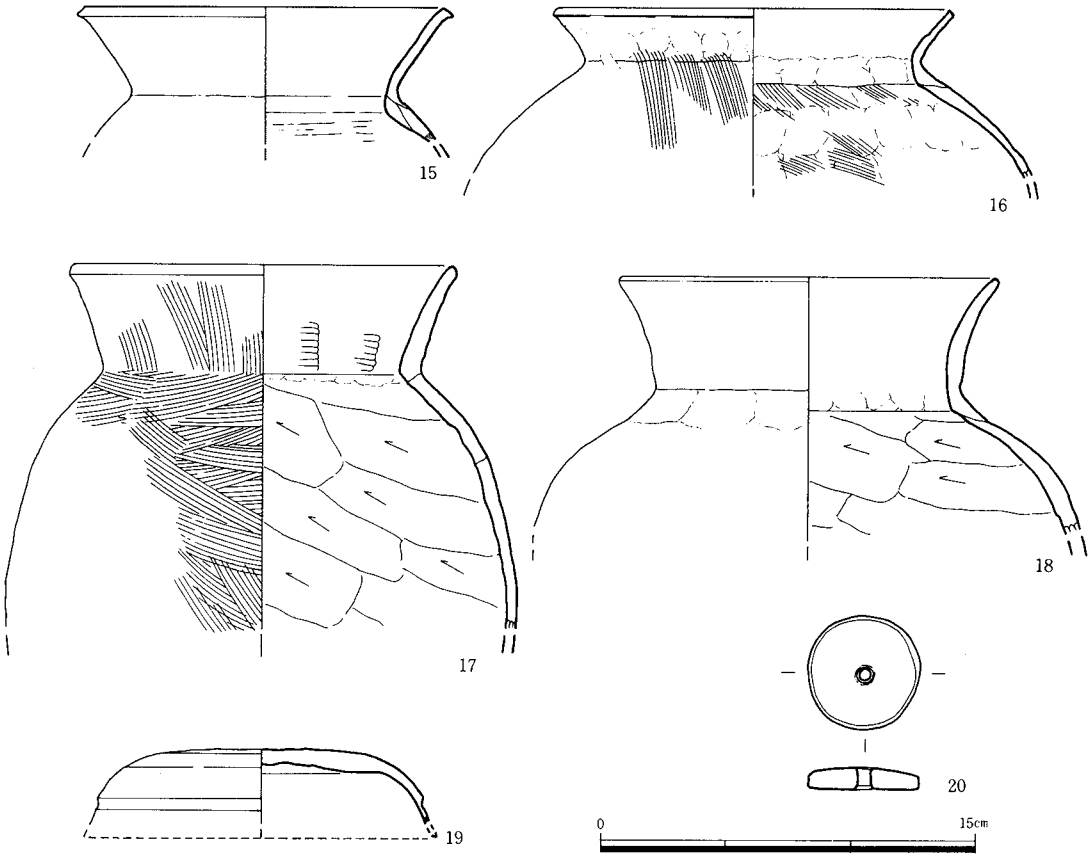


Fig.79　住居跡，Pit出土遺物（1/3）

外面は粗いタテハケを施す。いずれも胎土に砂粒を含み，5はやや暗い黄褐色を，6は暗黄灰色を呈している。砂粒を多く含む。

高杯（7～14）　7と8，11と12は同一個体と思われる。他の土器は胎土，調整に共通点が少なく別個体とした。7は口径17.7cm，杯高5.5cm，8の脚部現存高と合せて現存器高12.0cmを測る。9は口径16.4cm，杯高5.0cm，10は口径16.5cm，杯高4.5cm，11は口径16.2cm，杯高4.5cmを測る。12の脚裾部径は10.4cm，13は脚高7.0cm，裾部径13.4cm，14は脚高7.2cm，裾部径10.8cmを測る。杯の形態とは2種類あって，10，11のように体部下位が屈折し，強い稜線を形成し，口縁部が軽く外反するものと9のように体部が丸味をもつものがある。7は底部，体部ともに丸味をわずかにもっており，両者の中間形態をとる。7は内外面に，10は底部外面にハケを施した後ナデ調整を行なう。8は体部外面に稜杉状にハケを施す。8，13は外面にタテ方向のハケを施し，10，13の内面はヨコ方向のケズリを施している。いずれも胎土に砂粒を多く含むが，14は砂粒が少ない。10，14は褐色を，9，11，12は黄褐色を，7，8は暗黄灰色を，

13は淡黄褐色を呈する。焼成は14を除いて良好である。

甕（15～18）　15は口径15cm，現存高5.4cm，16は口径16.0cm，現存高7.0cm，17は口径15.6cm，現存高14.5cm，18は口径15.3cm，現存高10cmを測る。大きく2種の形態に分けられる。15，16の外反する口縁部はやや内弯気味であり，端部は平坦に仕上げる。15は更に外側へ端部をつまみ出している。15の胴部内面はヘラケズリを施すが，16はハケ調整後ナデ仕上げである。いずれも最大胴径が上位にあるものと思われる。体部下位の屈折が不明瞭で17，18の口縁部はかるく外反し，端部は丸味をもつものとがある。15，16に比べ器壁は厚く，最大胴径が中位に下がっている。17の外面は口縁部はタテハケ，胴部上位はヨコ，下位はナナメのハケを，口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデ調整である。17，18共に胴部内面はヘラケズリを施す。15，18の外面はマメツしている。15，16は黄灰色を，17，18は黄褐色を呈する。16の外面は二次熱を受け赤橙色に，17の一部には丹塗りの痕跡がある。焼成は15を除き良好である。16は細かい砂を，15，17，18は砂粒を多く含む。

紡錘車（20）　直径4.5cm，厚さは中央部で0.9cm，縁辺部で0.6～0.7cm，孔径0.5cmを測る。全体に丁寧なヘラミガキを施している。焼成は良好で，砂粒を多く含む。黄褐色を呈し，A面は黒変する。

Pit出土遺物（Fig.79）

須恵器

杯蓋（19）　Pit 1より出土。口縁部を欠いており推定口径13.8cm，推定器高3.1cmを測る。体部と口縁部の境に段を有し，沈線状に形成する。口端部は内側に小さい段を有している。天井部外面には時計回りのヘラケズリを施す。外面は暗灰青色を，内面は青灰色を呈す。砂粒を少し含み，焼成は良好である。

4）小　結

狭い調査範囲のため，遺跡の構造について言及することは困難であるが，第1・2次，第12次，第31次調査との関連で云えば，第1・2次，第12次調査では4世紀代の住居跡を，第31次調査では6世紀中頃の住居跡を検出している。当該調査地の住居跡の年代は土器形態や須恵器をもたない事，更に住居跡の形態が方形を呈するなどの条件から5世紀中頃が考えられる。3つの調査地点が狭い地域に限られている事を考えれば，住居跡の密度は高いものと思われる。有田・小田部の台地上に於いて集落を構成する単位数と一単位の住居跡数の問題は今後の経過を踏まえながら整理していきたい。

7．第66次調査

1）調査地区の地形と概要

調査対象地は福岡市早良区有田１丁目20－１番地に所在する。対象面積は503㎡である。

有田地区に所在し，標高14mを測る台地最高所より，東へ約100mの緩斜面に位置する。周辺では東側に第７次調査，西側に第６，19，28次調査が実施されている。地目は畑地で，標高約13mを測る，昭和55年12月26日に専用住宅建設計画書が申請されたため，昭和57年度の国庫補助を得て，発掘調査を実施した。

発掘調査は昭和57年５月７日から６月10日迄実施した。排土処理の関係上から，調査区を南・北の２区に分けて行なった。表土の耕作土は約20cmの深さである。遺構は表土直下のローム層上面に検出される。当該地は昭和41～43年の区画整理によって削平を受けているが，当時の造成工事に伴ない，九州大学考古学研究室が発掘調査を一部実施し，その成果を報告している。[註1] それによれば当該地は31街区の調査地点と称され，３本のトレンチによって弥生時代前期の貯蔵穴２カ所，古墳時代の溝１条が検出されている。しかし，これらの遺構図は既報告分に掲載されておらず，今回の調査の手掛りとなり得なかった。遺構の内，溝は大部分が未掘の状態であったので遺物の検出や埋土の状態を知ることが可能であったが，貯蔵穴は完掘されており，既報告によって時期を知り得るものの原図等が散逸しているため正確な構造を把握することができなかった。

検出した遺構は上記の他に，古墳時代の溝１条，同柵列１条，奈良時代の掘立柱建物３棟，同井戸１カ所，同土坑１カ所，古墳時代～中世の掘立柱建物14棟，中世の土坑１カ所である。但し，当該地の東側，北側，南側の３面を道路工事により地下げしているため，各々の遺構の構成状況は知り得なかった。遺物は古墳時代の溝より，甕，壺，台付鉢，椀，杓子形土器を，井戸からは奈良時代の須恵器椀，杯を，中世土坑からは明の染付皿を，その他陶質土器や鉄製鎹等が出土している。

2）検 出 遺 構

遺構は弥生時代前期から中世（16世紀）迄及んでいる。既に述べたように弥生時代前期の貯蔵穴と古墳時代の１号溝の一部は九州大学によって発掘調査されている。

貯 蔵 穴

既に完掘されているが，その後の崩壊が著しく，旧形状をとどめているとは思われない。しかし，既報告では遺構図，及び遺構説明が記載されていないので，敢えて遺構説明を行なう。

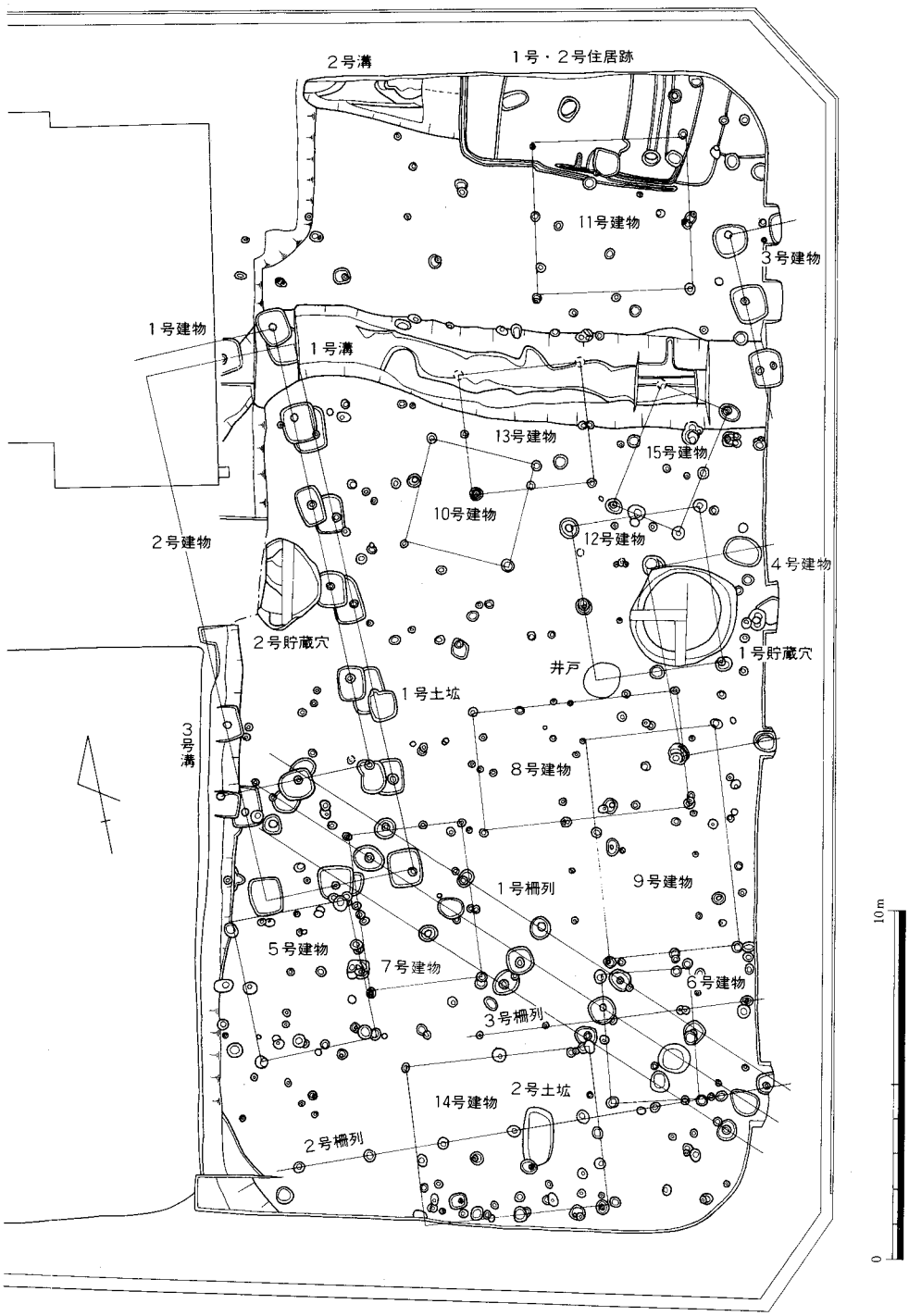


Fig.80　第66次調査遺構配置図（1/200）

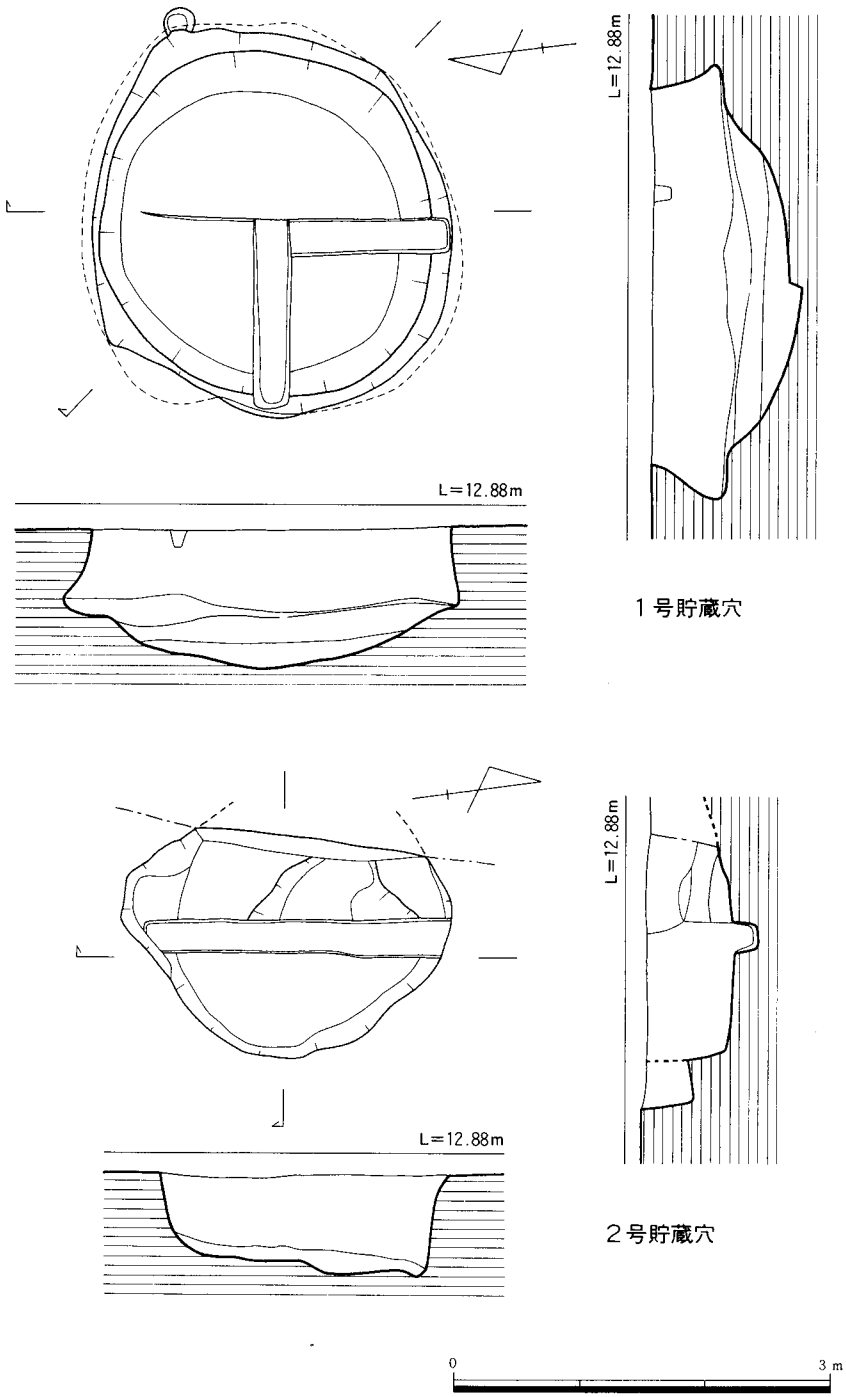


Fig.81　1号・2号貯蔵穴（1/60）

1号貯蔵穴 (Fig.81, PL.50)

上端部の平面形は不整円形である。断面形は上部がすぼまった袋状を呈している。底部は深い摺鉢状に窪むが，底部と壁体との境には幅の狭いテラス状の段を有している。底部には幅30cmを測る“T字形”のトレンチが設けられている。現状での上端部口径2.85m，最大径3.15m，深さ1.1mを測る。

2号貯蔵穴 (Fig.81, PL.50)

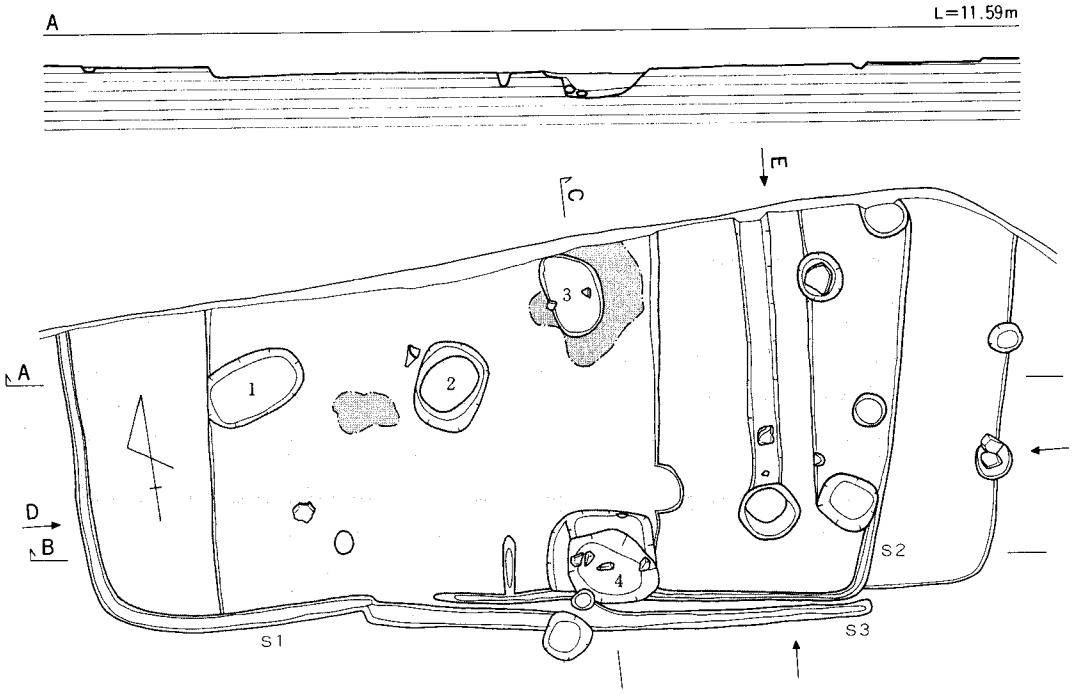
1号同様に既に完掘されている。当時の調査にて1号掘立柱建物の柱穴の一部を破損している。上端部の平面形は不整円形であるが，隅丸方形状を推測させる。断面形は底面が摺鉢状を呈しており，全体形はU字形である。底面には幅30cmを測るトレンチが南北方向に設定されている。現状での上端部の口径は最大2.25m，最小2.15m，深さ70cmを測る。

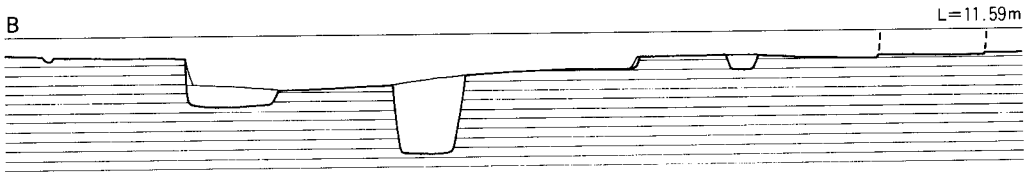
住居跡

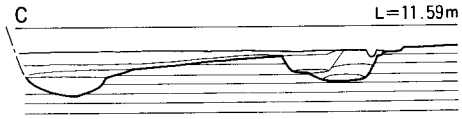
調査区の境界地にあることや上面が削平を受けていることなどから明確な形状を把握し得なかった。

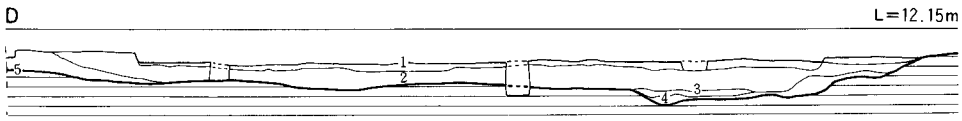
1号・2号住居跡 (Fig.82, PL.49)

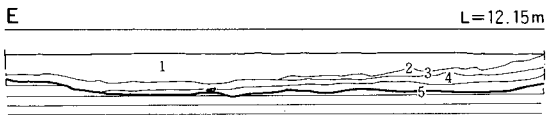
北側を道路工事のため削平されている。この住居跡は2号溝と重複している。区画整理時の削平のため残存状態は著しく悪い。1号・2号住居跡を合わせた最大長は7.15m，現存の最大幅は3.3m，深さ22cmである。南側の周溝が2重に廻ることや周溝が不連続であること，更に住居跡の貼り床が数枚存在することなどから，上部に数軒の住居跡が重複していた可能性もある。住居跡の東と西壁に接して幅の狭いベットが貼り付けられている。東側は幅85～90cm，高さ約12cm，西側は幅90～110cm，高さ20cmを測る。東側ベット下には周溝が存在するが，西側ベット下には存在しない。南壁のほぼ中央に接して隅丸方形を呈したPit 4がある。このPitは長さ85cm，幅72cm，深さ25cmを測り，底面は2段になっている。焼土は2カ所検出した。1カ所はP1とP2の間にあって，長さ約50cm，幅約33cmを測る。もう1カ所はP3の上部を覆っており，長さ100cm以上，幅約85cmを測る。P3は楕円形を呈し，長さ約70cm，幅42cm，深さ17cmを測る。炉跡と考えて良いだろう。P3を覆う焼土は焼けているが，この焼土は数枚の貼り床を除去した最下の床面に存在した。この住居跡に伴なうPitは上記の通りP1，P2，P3，P4であるが，P1は浅いため柱穴とは考えられない。P2は最大径70cm，深さ65cmを測るので柱穴と考えられるが位置にやや疑問が残る。P2はP3より上面の貼り床で検出した。その他に，発掘途中にP3，P4の東側にベット状の段落ちがあることを確認した。この段落ち下の床面と住居跡西壁ベット下の床面との比高差は約10cmを測るが，ベット上面と段落ち上面と











E 土層名称

1．黒褐色粘質土
2．褐色粘土の貼床層(黒色土ブロックを少し含む)
3．黒色土と褐色土の混合土(しまりがある)
4．黒褐色土(褐色土のブロックを少し含む)
5．黄褐色粘土の貼床

D 土層名称

1．黄褐色～茶褐色粘質土(たたき締られている)
　住居跡床面
2．黄褐色粘質土と黒色土の混合土(　〃　〃　)
3．黒色粘質土
4．暗褐色と黄褐色粘質土の混合土
5．暗褐色粘質土(黄褐色粒子を多く含む・溝の埋土)

0　3 m

Fig.82　1号・2号住居跡及び土層図（1/60）

の比高差は無い。又，周溝Ｓ１とＳ３は不連続であるが，Ｓ１とＳ２はほぼ連続している。更にこの周溝は住居跡に伴なうＰ４を切っている。周溝Ｓ２は住居跡東側のベット下を廻ってはいるが，周溝Ｓ１が西側ベットの外側，すなわち住居跡の周壁下を廻っている。東側の段落ち上面に設けた幅20cmのサブトレンチからは貼付床を検出したが，このレベルはＰ３を覆う焼土と同一レベルである。以上の条件を整理すると周溝Ｓ１とＳ２をつなぐ範囲の住居跡が１軒考えられ，又それに切られて，住居跡の存在が確認できる。周溝Ｓ１，Ｓ２のつなぐ住居跡を１号とすれば，この住居跡には西側のベット及び，東側の段落ち部分が東西のベットと理解される。よって，１号住居跡は東西6.8m，南北2.9m以上の規模を測る。

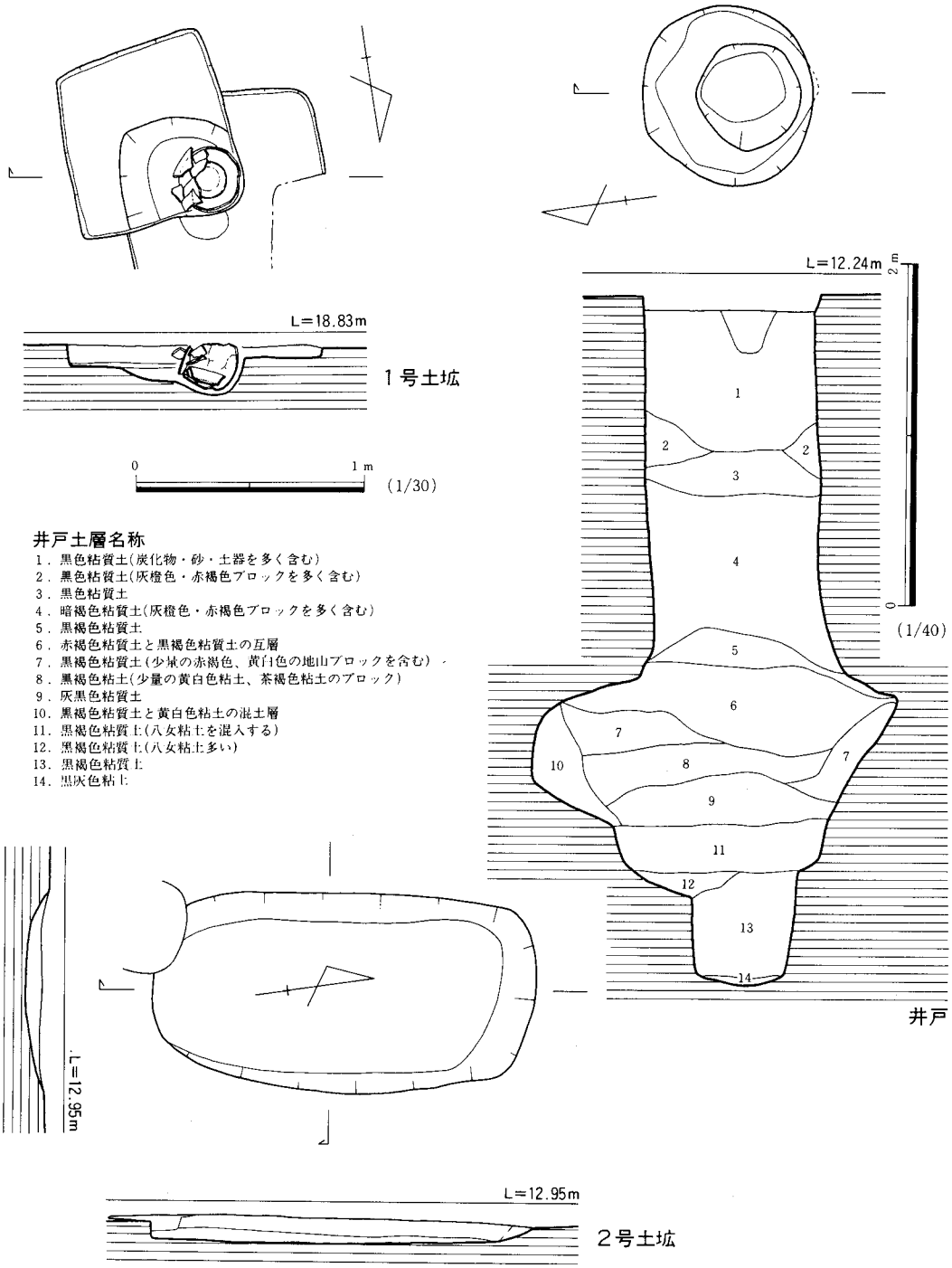
１号住居跡に切られた住居跡を２号住居跡とすれば，２号住居跡にはＰ３の炉，及びＰ４，東側のベットが伴なうが，西側ベットの規模は不明である。２号住居跡の床面は北へ緩傾斜する。Ｐ４からは長さ15cm前後の礫が４個出土している。これに伴なう柱穴はＰ２であろう。１号・２号住居跡の時期差は無く，１号住居跡より検出した甕形土器は４世紀中頃の時期を示している。

土　坑

２カ所検出したが，いずれも遺物が出土しており，年代は明確である。又，遺構の性格も墓跡としての要素が強い。

１号土坑　(Fig.83，PL.51)

１号掘立柱建物の柱穴掘り方を切って作られている。平面形は方形を呈し，一辺128×122cm，深さ約10cmを測る。底面は平坦であるが，土坑の北西隅に50×40cmの浅い掘り込みが設けられる。この掘り込みには土壙の北西角に接して，土師器の甕が据えられており，甕の周囲には粗砂を多く含む土が充塡されていた。甕は削平のため口縁部を失っている。やや西にかしいでいるものの直立している。この甕の底部には須恵器の高台付椀が置かれていた。椀の周囲からは炭化物を検出したが，椀の下は特に多量であった。更に，この甕は底部を径約7.5cmの大きさに穿孔されており，須恵器椀は穿孔部分の上位に置かれていた。当初，須恵器椀は蓋として用いられたとも考えたが，甕の口径が大きいことや，出土状態から見て上位からの転落とは考え難い。人骨片などは検出されなかった。多量の炭化物が何を意味するのか類例が少ないため不明であるが，第89次調査では倒立して置かれた甕の下部に須恵器椀を置き，その内部には人骨片を多量に詰め込んだ状態で出土した例がある。[註1] １号土壙は甕からの人骨片が出土しないものの火葬墓として考えて良いであろう。



井戸土層名称

1．黒色粘質土(炭化物・砂・土器を多く含む)
2．黒色粘質土(灰橙色・赤褐色ブロックを多く含む)
3．黒色粘質土
4．暗褐色粘質土(灰橙色・赤褐色ブロックを多く含む)
5．黒褐色粘質土
6．赤褐色粘質土と黒褐色粘質土の互層
7．黒褐色粘質土(少量の赤褐色、黄白色の地山ブロックを含む)
8．黒褐色粘土(少量の黄白色粘土、茶褐色粘土のブロック)
9．灰黒色粘質土
10．黒褐色粘質土と黄白色粘土の混土層
11．黒褐色粘質土(八女粘土を混入する)
12．黒褐色粘質土(八女粘土多い)
13．黒褐色粘質土
14．黒灰色粘土

Fig.83　1号・2号土坑及び井戸（1/30, 1/40）

2号土坑 (Fig.83, PL.50)

2号柵列と切り合い関係にあるが，前後関係は不明である。上面は既に削平を受けている。平面形は隅丸長方形を，断面形は浅い舟底状を呈す。長さ約170㎝，幅約90㎝，深さ11㎝を測る。主軸は南北方向である。覆土は暗茶褐色粘質土である。粘土等の貼付は認められない。遺物は明の染付皿片を出土した。16世紀前半から中頃の所産であろう。

溝

3条の溝を検出した。いずれも削平のため一部を除いて規模を明確にし得ない。1号溝は西端部分が南へ曲がっているので，南北方向の3号溝と接続する可能性をもっている。2号溝は1号住居跡に切られている。いずれも古墳時代の溝である。

1号溝 (Fig.84, PL.52)

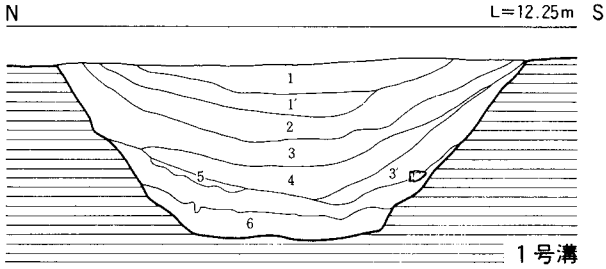
前述の通り，九州大学考古学研究室が一部を調査している。東西方向の溝である。幅は2.0～2.7m，深さは東側で98㎝，西側で60㎝を測る。断面形は東端はV字形を，西側は逆梯形状を呈している。底は西から東へ傾斜する。底面には流水の跡を思わせる起伏がある。覆土は大きく6層に分かれる。第1層ー淡黒色粘質土，第2層ー暗茶褐色粘質土，第3層ー淡黒褐色粘質土，第4層ー黒色粘質土，第5層ー黄褐色粘質土，第6層ー暗茶褐色粘質土である。出土遺物は極めて少ない。この溝の西端は南方向へ曲がっている。後述する3号溝は調査区の西端にわずかに残存しており，東西方向に位置する。両溝の位置関係から1号溝のコーナー部分の延長線と3号溝は一致する。よって時期差も無いので同一溝と考えて良いだろう。

2号溝 (Fig.84, PL.52)

1号住居跡と重複している。1号溝に平行する東西溝であるが，北側を道路により削平される。現存幅は2.3m，深さは80㎝を測る。横断面形は逆梯形状と思われる。覆土は5層に分かれる。第1層ー黄褐色粘質土と黒色土の混合土，第2層ー黄褐色粘質土（黒色土をわずかに含む），第3層ー黒褐色土（黄褐色土のブロックを多く混入），第4層ー3層に赤褐色土のブロックを多く含む，第5層ー黒色土（黄褐色土のブロックを少し含む），第6層ー黄褐色土(黒色土を少し含む）である。溝の底面は1号溝と同じく流水の跡を示す如く起伏が著しい。第3層より甕，壺，椀，台付鉢などがまとまって出土した。これらの土器から，この溝の年代は古墳時代初頭期が考えられる。

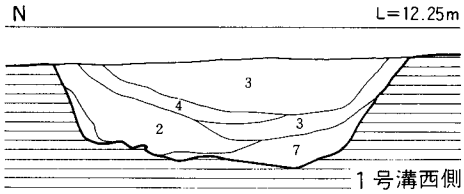
3号溝 (Fig.84, PL.52)

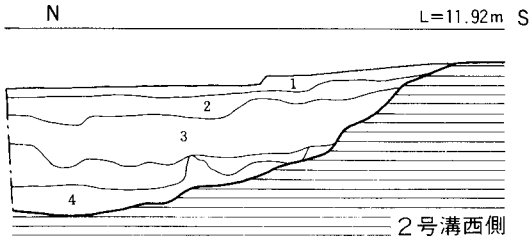
南北方向の溝であるが，西側境界地に在るため，溝の一部を検出するにとどまった。覆土は



1号溝土層名称

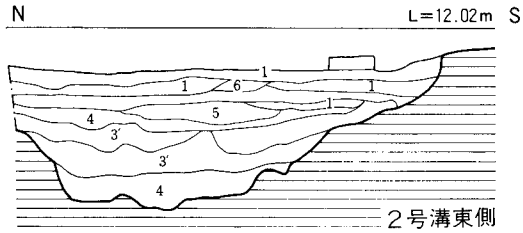
1．淡黒褐色粘質土（黄褐色土の小ブロックを多く含む）
1′．1に比べ黒色土の小ブロックが多いため黒色が強い
2．暗茶褐色粘質土(黄褐色土の小粒子を多く含む)
3．淡黒褐色粘質土(黄褐色土の小粒子を多く含む)
3′．3とほぼ同一層(黄褐色土の小粒子を少し含む)
4．黒色粘質土(黄褐色土の小粒子を少し含む)
5．黄褐色粘質土(暗茶褐色土をわずかに含む)
6．暗茶褐色粘質土（茶褐色土のローム大ブロックを多く含む）
7．暗黄褐色粘質土（黄褐色土のブロックを少し含む 〃 の粒子多い）





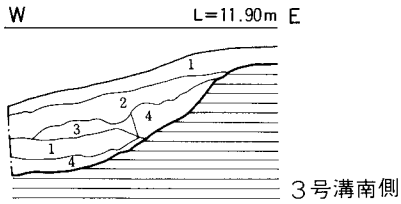
2号溝土層名称

1．黄褐色粘土と黒色土の混合土
2．黄褐色粘質土(黒色土をわずかに含む)
3．黒褐色粘質土(黄褐色土のブロックを多く含む)
3′．3より暗い
4．3に赤褐色土，黄褐色土のブロックを多く含む
5．黒色粘質土(黄褐色土のブロックを少し含む)
6．黄褐色粘質土(黒色土を少し含む)



3号溝土層名称

1．褐色粘質土
2．黒褐色砂質土
3．黒色粘質土(やや褐色を帯びる)
4．黒褐色粘質土(茶褐色土を含む)
5．暗褐色粘質土(褐色土のブロックを含む)



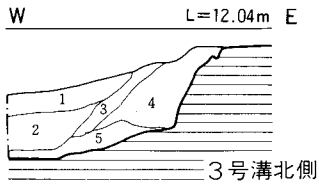


Fig.84　1号～3号溝断面土層図（1/40）

第１層ー褐色粘質土，第２層ー黒褐色粘質土である。１号溝の項で述べた通り，１号溝の西端が南方向に曲がっており，３号溝北端部との位置関係から同一溝と見做すことが可能である。又，３号溝の南端は更に東方向へカーブを描いており，１号，３号溝が一辺約26ｍの方形区画を形成するかもしれないが，調査区の東側，南側が既に地下げのため消滅しているため明らかにはできない。

掘立柱建物

15棟の掘立柱建物を検出した。時期決定ができる出土遺物は少ないが，規模や覆土，及び切合い関係から大きく３つの時期に分けた。覆土は黒色粘質土を主体とするものと，暗茶褐色粘質土を主体とする２つに分けられる。暗茶褐色粘質土は従来の調査例より14～16世紀の幅がある。黒色粘質土は弥生時代から12世紀に及んでいる。１号～３号掘立柱建物は黒色粘質土が覆土であるが，建物規模や柱穴規模が全く同一であり，更に１号土坑との切合い関係から奈良時代が考えられる。10号･11号･13号掘立柱建物の覆土は1号～3号掘立柱建物と同じであるが規模が小さく，古墳時代～奈良時代迄の幅が考えられる。４号～９号・12号・14号・15号掘立柱建物の覆土は暗茶褐色粘質土，もしくは茶褐色粘質土である。これらの覆土からは14～16世紀の遺物を出土しており，大略この時期幅をみて良いが，建物の主軸方向や２号・３号柵列との切合い関係などから更に少なくとも３つ以上の時期に分けられる。主軸方位と位置関係からみればＡグループは７号・９号・13号・14号掘立柱建物など，方位を同一とするグループである。

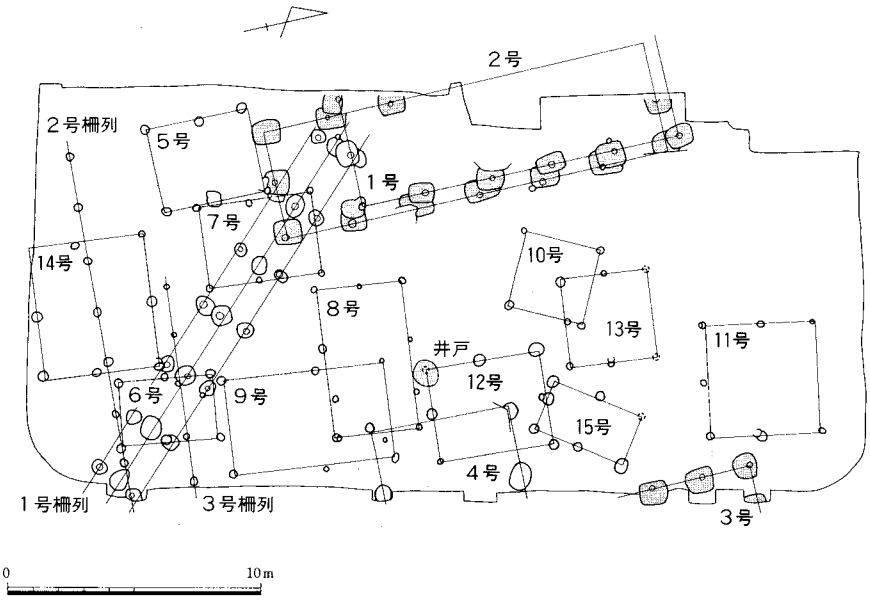


Fig.85　掘立柱建物配置図（1/300）

※アミは奈良時代の遺構

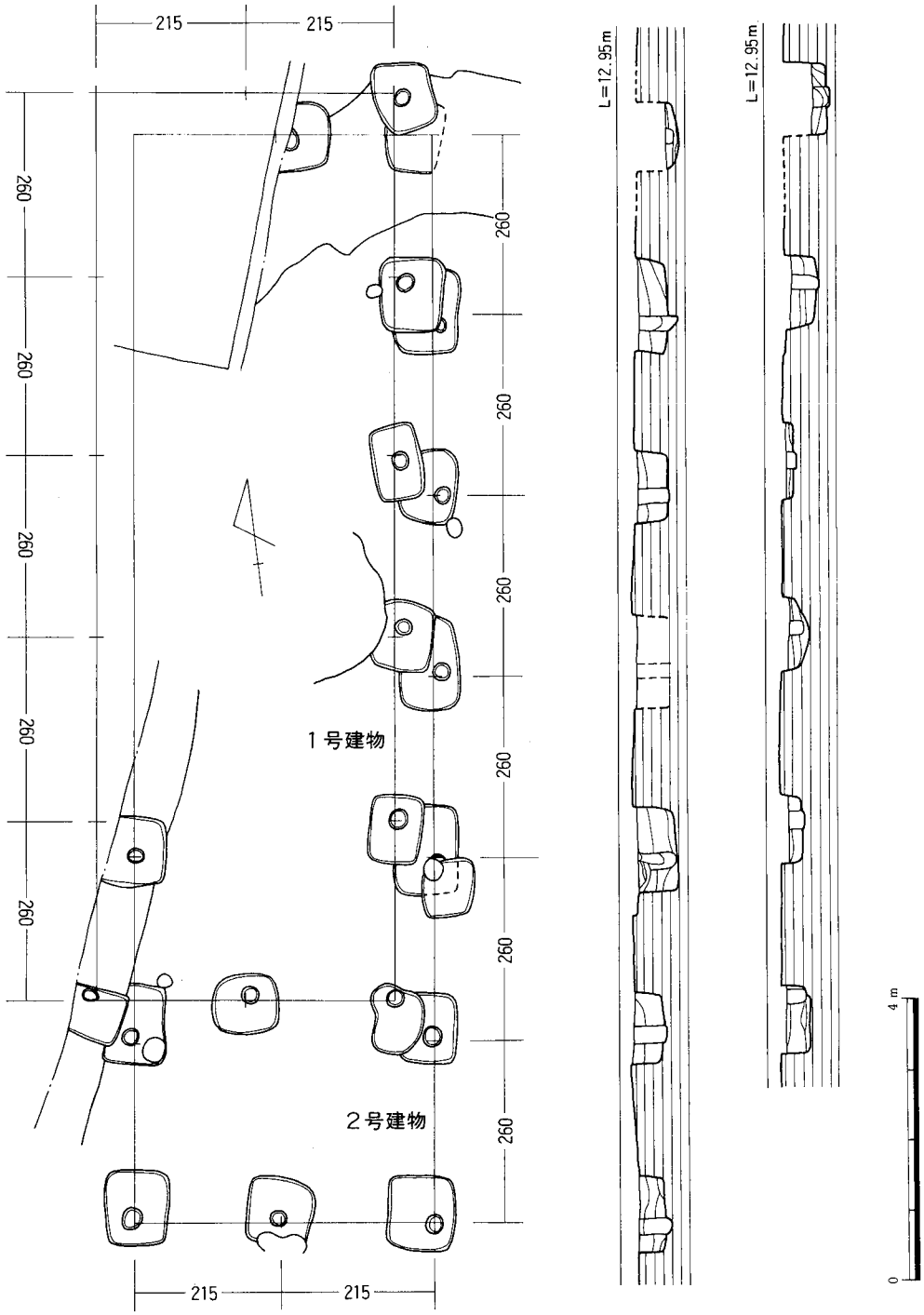


Fig.86　1号・2号掘立柱建物（1/100）

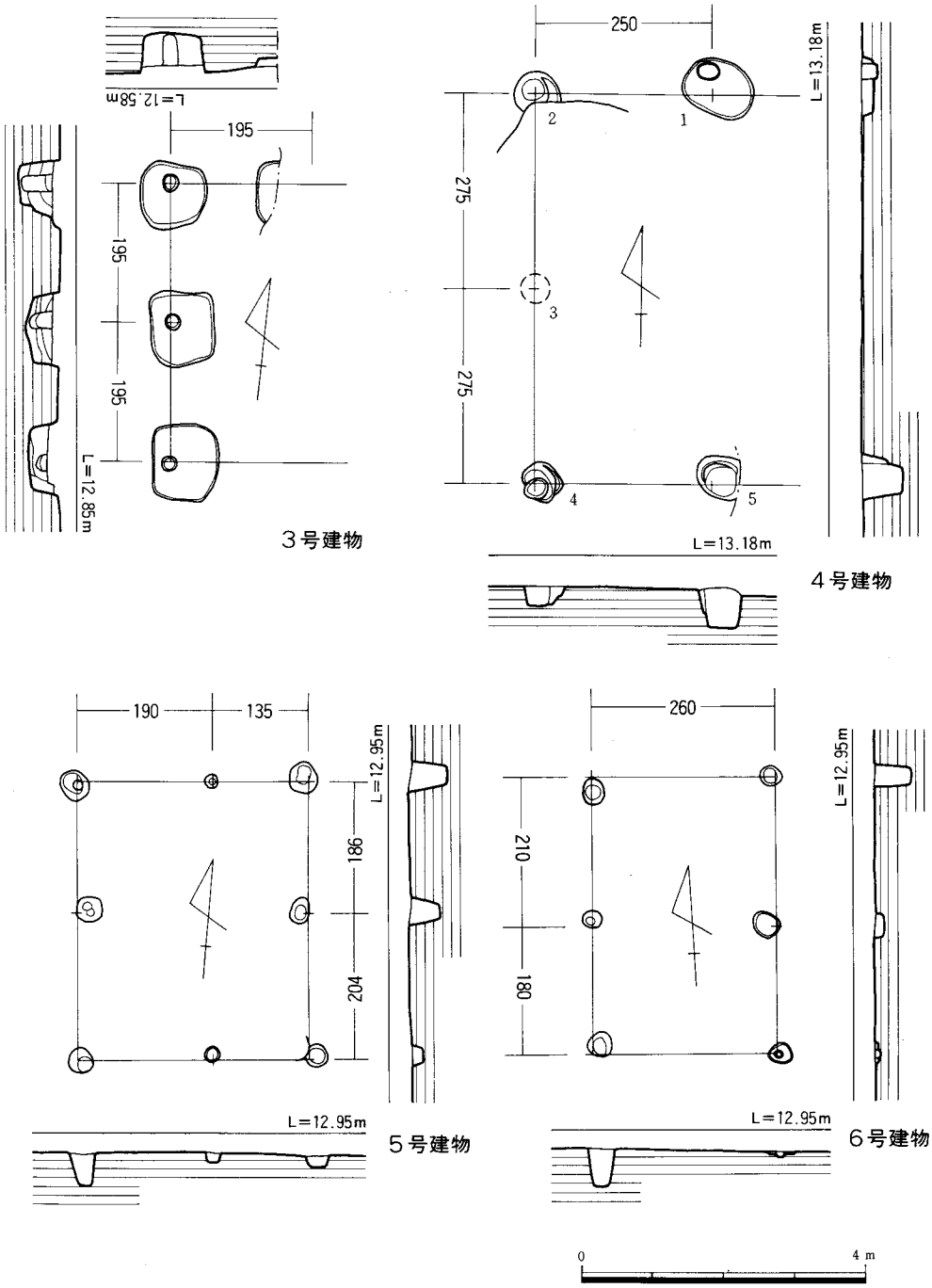


Fig.87　3号～6号掘立柱建物（1/100）

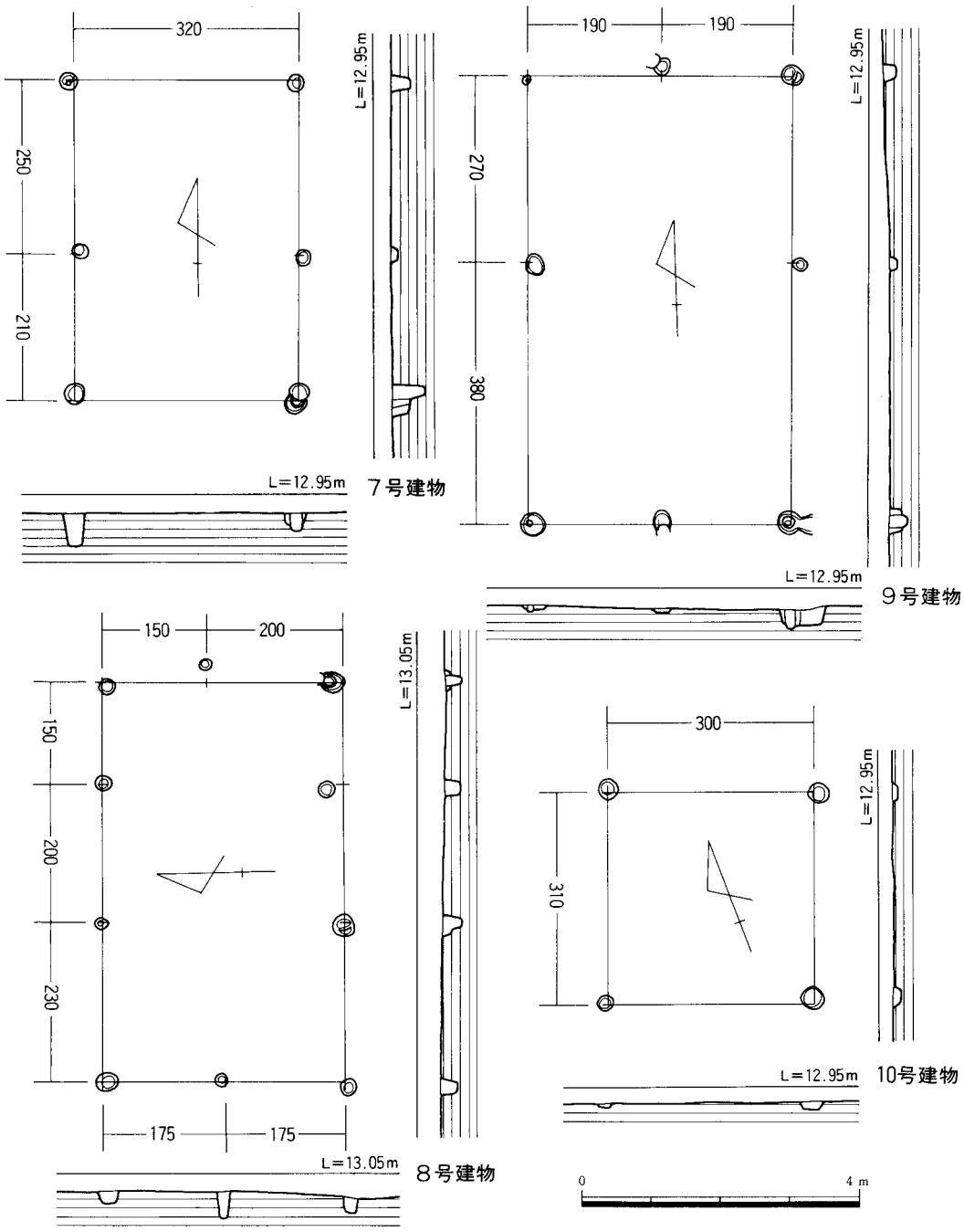


Fig.88　7号～10号掘立柱建物（1/100）

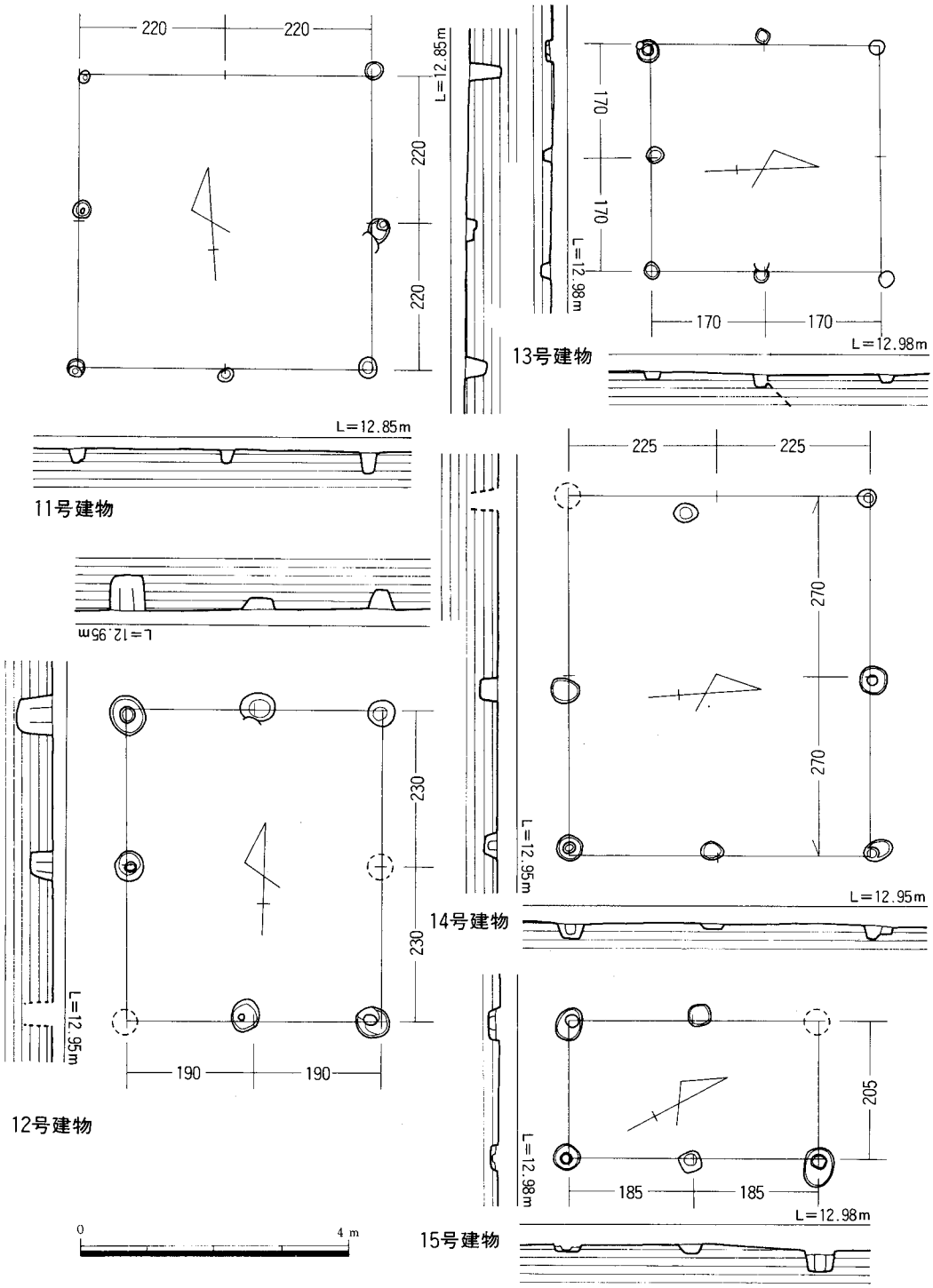


Fig.89　11号～15号掘立柱建物（1/100）

7号建物の柱穴からは14世紀代の土師皿を出土している。Bグループは2号柵列と4号掘立柱建物のグループ，Cグループは5号，12号掘立柱建物のグループである。

1号掘立柱建物 (Fig.86，PL.54)

2号掘立柱建物と主軸方向が同一で，側柱だけの建物である。2号掘立柱建物の建て替えと思われる。南北棟で，主軸方位はN7°50′Eである。北側と西側を削平されている。現存では梁行2間，桁行5間の規模をもち，梁行実長430cm，桁行実長1300cm，梁行柱間7.2尺，桁行柱間8.7尺である。掘り方は隅丸方形を呈し，掘り方の長辺は長さ90～110cmを測る。柱根径は約20cmを測る。

2号掘立柱建物 (Fig.86，PL.54)

1号掘立柱建物，及び1号土坑に切られる。主軸方位は1号掘立柱建物と同一である。住宅のため北西隅を削平される。南北棟で梁行2間，桁行6間の規模で，側柱だけの掘立柱建物である。梁行柱間は7.2尺，桁行柱間は8.7尺を測る。柱穴掘り方は隅丸長方形を呈し，長辺の長さ110～140cmを測る。柱根径は20～30cmを測る。1号土坑から出土した須恵器椀 (Fig.95) は8世紀中頃の時期を示しており，2号掘立柱建物は1号土坑に近い時期が考えられる。

3号掘立柱建物 (Fig.87，PL.54)

建物の東側は道路によって削平されており，規模は不明。総柱の倉庫と考えられる建物で，現状では東西1間？，南北2間？の規模である。南北方向の柱間は6.5尺を測る。柱穴掘り方は不整隅丸長方形を呈し，長辺の長さ100～110cm，柱根径は約20cmを測る。2号掘立柱建物とは13mの間隔をもって並置されている。

4号掘立柱建物 (Fig.87)

東側を道跡によって切られ，又，九州大学の調査でP2，4を除いて完掘されている。2間×1間以上の東西棟である。北面に庇を有した建物で，身舎は梁行1間，桁行1間以上の規模である。梁行柱間は8.3尺，桁行柱間は9.2尺を測る。2号柵列と同一方位である。

5号掘立柱建物 (Fig.87，PL.55)

南北棟で，梁行2間，桁行2間の側柱だけの建物である。梁行柱間6.5尺，桁行柱間6.5尺を測る。柱穴径は30～40cm，深さ15～52cm，柱根径は15cmを測る。

6号掘立柱建物 (Fig.87，PL.55)

梁行１間，桁行２間の側柱だけの建物である。柱間は梁行8.5尺，桁行6.7尺を測る。柱穴径は25～40cm，深さ５～55cmを測る。２号，３号柵列と重複するが前後関係は不明である。

７号掘立柱建物（Fig.88，PL.55）

南北棟で，梁行１間，桁行２間の側柱だけの建物である。柱間は梁行10.7尺，桁行7，8.4尺を測る。５号掘立柱建物と重複関係にあるが前後関係は不明，９号，13号，14号掘立柱建物とは主軸方向が同一である。柱穴Ｐ53出土の土師器皿は14世紀代の時期が比定できる。

８号掘立柱建物（Fig.88，PL.55）

東西棟で，梁行２間，桁行３間の側柱だけの建物である。柱間は梁行柱間が5，6.7尺，桁行柱間は各々5，6.7，7.7尺を測り，不統一である。桁行南面の柱通りは悪く，梁行東面の中間柱は東に寄っている。柱穴は円形，もしくは楕円形を呈し，径は18～30cm，深さ18～40cmを測る。

９号掘立柱建物（Fig.88，PL.56）

南北棟で，梁行２間，桁行２間の側柱だけの建物である。梁行柱間は6.4尺で統一され，桁行柱間は９，12.7尺である。桁行中間柱が北へ寄っている。柱穴は円形又は楕円形である。

10号掘立柱建物（Fig.88）

１間×１間の建物である。梁行実長は300cm，桁行実長は310cmを測る。柱穴は円形である。

11号掘立柱建物（Fig.89，PL.56）

梁行２間，桁行２間の側柱だけの建物である。梁行，桁行の実長は440cmで，柱間平均は7.3尺である。但し，西面の中間柱は北に，北面の中間柱は東に片寄っている。６号掘立柱建物と同一方向である。

12号掘立柱建物（Fig.89，PL.56）

梁行２間，桁行２間の南北棟で，側柱だけの建物である。梁行柱間は6.3尺，桁行柱間は7.5尺で統一される。桁行東面の中間柱は九州大学の調査によって失なっている。４号掘立柱建物とは同一方向で，重複するが先後関係は不明である。５号掘立柱建物と同一主軸である。

13号掘立柱建物（Fig.89）

梁行２間，桁行２間の建物で，各柱間は均等である。梁行柱間5.6尺，桁行柱間5.6尺を測る。柱穴は円形を呈し，この建物は２号溝が埋没後に建てられている。

14号掘立柱建物 (Fig.89, PL.56)

東西棟で，梁行２間，桁行２間の側柱だけの建物である。南西隅柱は検出できなかったが，梁行柱間7.5尺，桁行柱間は９尺である。梁行西面の中間柱は南へ片寄っている。柱穴は円形又は楕円形を呈し，２号柵列と重複しているが先後関係は不明。

15号掘立柱建物 (Fig.89)

南北棟で，梁行１間，桁行２間の側柱だけの建物である。梁行柱間6.8尺，桁行柱間6.2尺を測る。柱穴は円形，又は楕円形を呈し，径35～60cm，深さ５～30cm，柱根径13～18cmを測る。

柵　列

３条の柵列を検出したが，狭い調査範囲のため，機能について把握することはできない。３本柱にて構成される柵列を１号柵列，１本柱が連続する柵列を２号，及び３号柵列とする。

１号柵列 (Fig.90, PL.57)

北西から東南方向の柵列で，主軸方位はN40°Wである。北側は1号・2号掘立柱建物によって切られる。柵列の柱穴の一部は既に九州大学考古学研究室によって完掘されており，柱痕は検出で

Tab.5　第66次調査掘立柱建物計測表

(単位：cm)

	規模	桁行		梁行		方位	床面積(㎡)	柱穴状態					備考
		実長	柱間寸法(尺)	実長	柱間寸法(尺)			Pit数	深さ	長径	短径	柱根径	
1号	5×2	1300(43.5)	8.7・8.7・8.7 8.7・8.7	430(14.4)	7.2・7.2	N7°50′E	55.90	9	18～67	94～106	69～92	18～30	
2号	6×2	1560(52.2)	8.7・8.7・8.7 8.7・8.7・8.7	430(14.4)	7.2・7.2	N7°50′E	67.08	12	48～61	98～145	85～93	20～30	
3号	2×1？	390(13)	6.5・6.5	195(6.5)	6.5	N6°10′W	7.61	4	15～60	106～108	84～93	20～22	
4号	2×1	550(18.3)	9.2・9.2	250(8.3)	8.3	N 1°W	13.75	4	20～56	54～102	48～75	20～28	中世
5号	2×2	390(13)	6.8・6.2	325(10.8)	6.3・4.5	N4°30′W	12.68	8	15～52	18～45	14～38	8～28	中世
6号	2×1	390(13)	6・7	260(8.7)	8.7	N 3°E	10.14	6	8～52	25～40	25～32	12	中世
7号	2×1	460(15.4)	7・8.4	320(10.7)	10.7	N1°30′E	14.72	6	10～50	22～32	20～30	5～18	中世
8号	3×2	580(19.3)	5・6.7・7.7	350(11.6)	6.7・5	N 89°W	20.30	10	18～40	16～30	15～28	15	中世
9号	2×2	650(21.7)	12.7・9	380(12.8)	6.4・6.4	N1°30′E	24.70	8	6～28	15～32	12～32	10～15	中世
10号	1×1	310(10.3)	10.3	300(10)	10	N20°50′E	9.30	4	3～12	22～33	22～30		
11号	2×2	440(14.6)	7.3・7.3	440(14.6)	7.3・7.3	N3°30′E	19.36	7	15～48	20～31	16～28	18	
12号	2×2	460(15.3)	7.7・7.7	380(12.7)	6.3・6.3	N2°30′W	17.10	6	18～56	38～60	38～50	20～25	中世
13号	2×2	340(11.3)	5.7・5.7	340(11.3)	5.7・5.7	N2°50′E	11.56	7	10～20	24～35	20～32	18	
14号	2×2	540(18)	9・9	450(15)	7.5・7.5	N87°30′W	24.30	8	7～65	30～46	25～42	12～15	中世
15号	2×1	370(12.3)	6.2・6.2	206(6.8)	6.8	N 28°E	75.85	5	5～31	32～60	28～46	18～24	

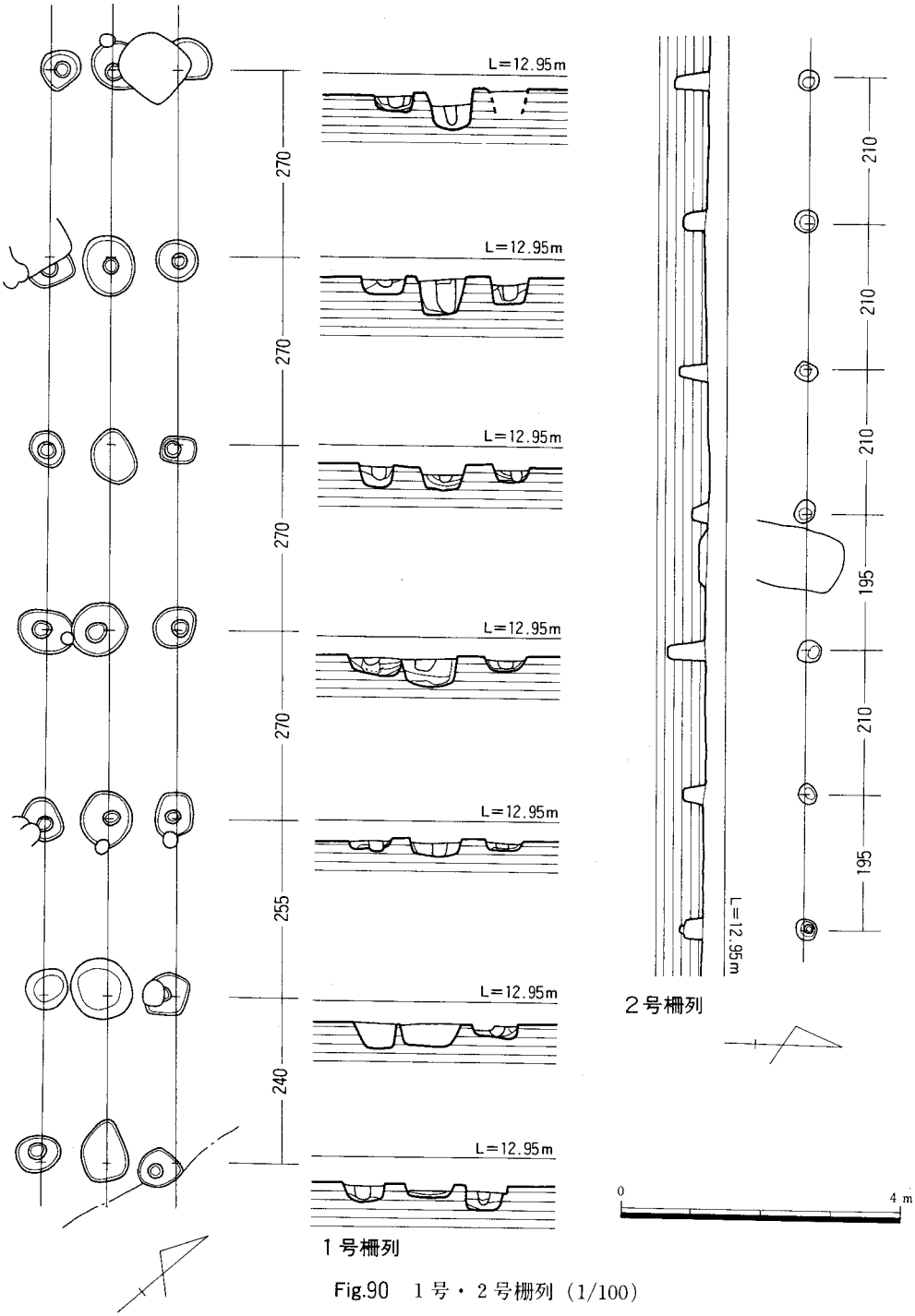


Fig.90　1号・2号柵列（1/100）

きなかった。主柱と２本の支柱で構成され，現状での長さは15.85ｍを測る。各柱間の平均値は約2.64ｍである。柱穴掘り方は不整円形，及び隅丸方形を呈している。掘り方径は主柱で70～90cm，支柱は40～70cmを測る。柱根径は主柱が22～32cm，支柱が20～28cmである。覆土は黒褐色粘質土，もしくは黒褐色粘質土と黄褐色粘質土の混合土である。時期を比定できる土器はないが，奈良時代以前の土器しか出土していない。

２号柵列（Fig.90，PL.57）

調査区の南端に位置する。東西方向の柵列で，主軸方位はN2°Wである。現状での長さは12.3ｍを測り，各柱間の平均値は約2.05ｍである。柱穴は径25～35cm，深さ24～52cmを測る。覆土は暗茶褐色土で，中世の遺構と考えられる。２号土坑と切合うが前後関係は不明。

３号柵列（PL.57）

２号柵列の北側に平行している。主軸方位はN4°Wである。現状では長さ7.7ｍで，柱間の平均値は約1.9ｍである。柱穴は径18～30cm，深さ５～20cmを測る。削平のため残存状況は悪い。

3）出土遺物

１号・２号住居跡出土遺物（Fig.91，PL.58）

住居跡の削平のため遺物は少ない。器種には鉢形土器，甕形土器，高杯形土器，つまみ形土器がある。石器には砥石と弥生時代の石斧が各々１点ある。

土師器

鉢（１）　口径19cm，現存高7cmを測る。口縁部は“くの字”形を呈し，内面に稜を有している。外面はタテハケ，内面はヨコハケ調整である。胎土に砂粒を含み，明褐色を呈する。住居跡に付設したＰ4から出土した。

甕（２，３）　2は口径19.4cm，3は口径20cm，現存高17.2cmを測る。口縁部は“くの字”形を呈し，内面に稜を有している。外面は叩き後タテハケ調整。内面は２がヨコナデ，３がヨコ，タテハケ調整である。胎土は精良で，２は淡褐色，３は暗茶褐色を呈する。３は床面出土。５は胴部上位外面に円形刺突紋を施す。胎土に砂粒多く，淡茶褐色を呈している。

高杯（４）　脚部片である。径4.5cmを測る。外面に環状刺突紋を施す。灰白色を呈する。

甕把手（６）　直径28cm，高さ２cmの円錘状を呈する。指圧調整が残っており，内面はハケ調整，胎土精良で，淡褐色を呈する。

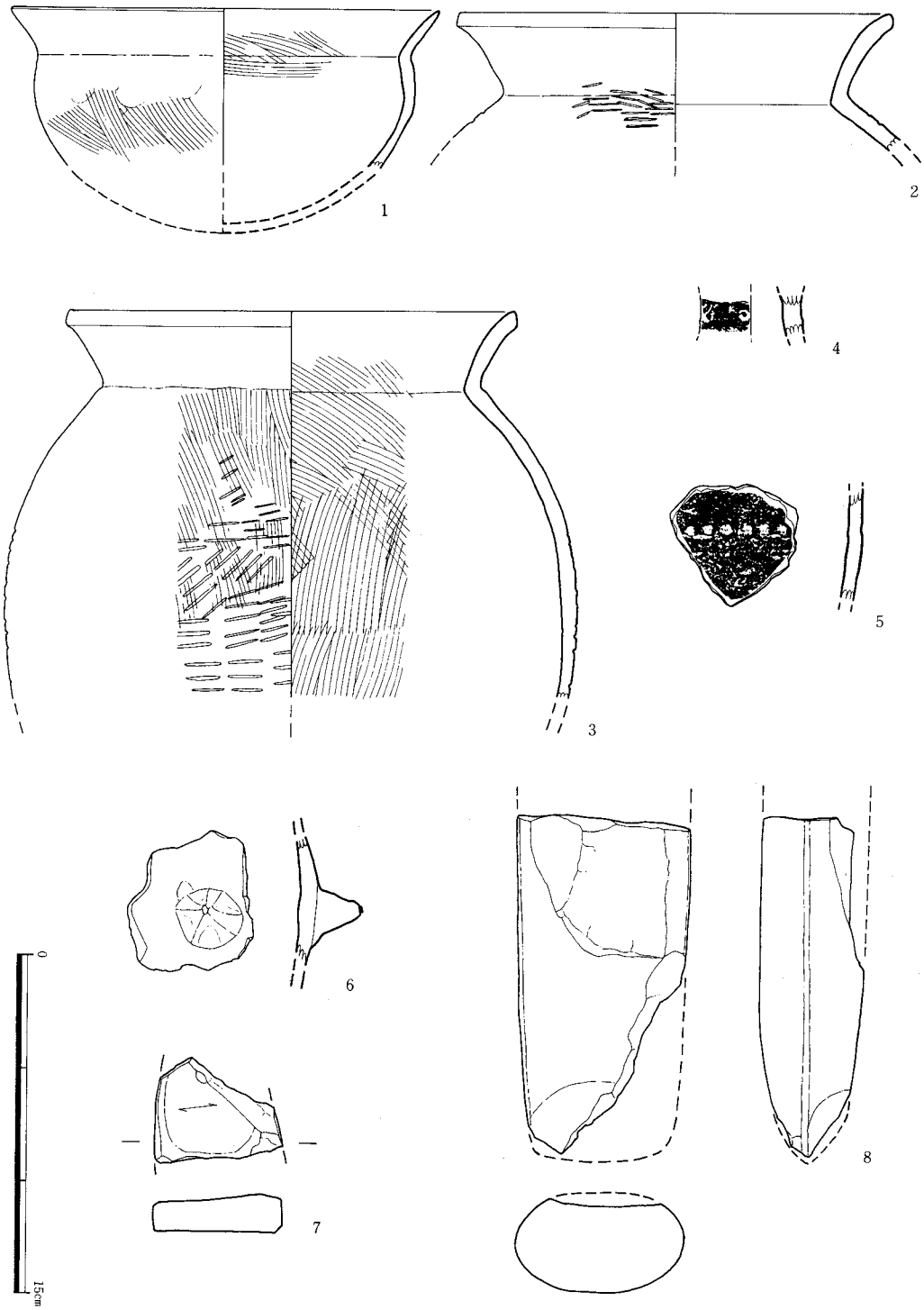


Fig.91　1号・2号住居跡出土遺物（1/3）

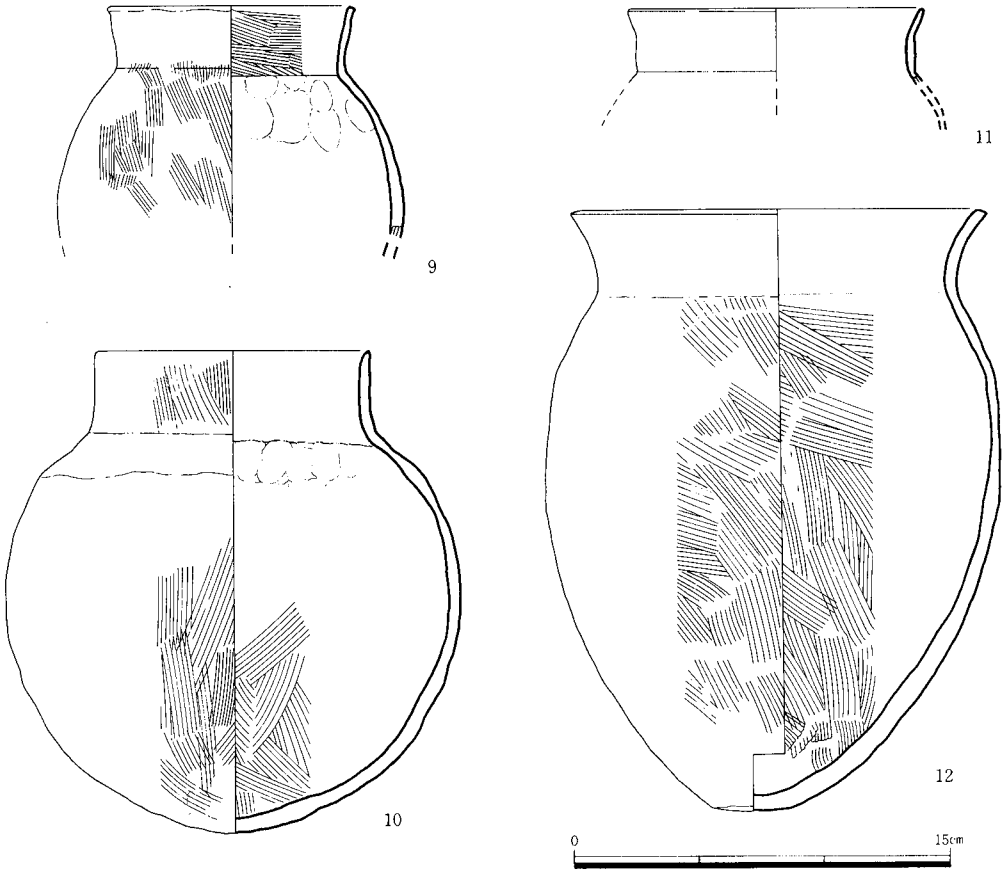


Fig.92　1号溝出土遺物（1/3）

石　器

石斧（8）　蛤刃石斧で，現存長15cm，最大幅7.6cm，最大厚4.6cmを測る。表面は摩滅している。玄武岩製である。

砥石（7）　長さ5.8cm，幅3.8cm，最大厚1.6cmを測る。2面を利用する。砂岩である。

1号溝出土遺物　(Fig.92，PL.59)

土師器

壺（9～11）　9は口径10.1cm，現存高9.3cm，10は完形品で，口径10.5cm，器高19.3cm，11は口径12cmを測る。胴部は球体に近く，9，11の口縁部はやや外反し，10の口縁部は内傾する。9の口縁端部は平坦である。9の外面はタテハケ，口縁部内面はヨコハケ調整後ヨコナデを施す。胴部内面はヘラケズリである。10は内外面ハケ調整後ヨコナデを施す。10の胎土は精良である。9は淡褐色，10は黄褐色，11は明褐色を呈する。

甕（12）　口径16.8cm，器高24cmを測る。底部は小さく，外反した口縁端部は平坦である。口縁部内外面ヨコナデ，胴部内外面はタテハケ後ナデを施す。胎土に砂粒を含み，明褐色を呈する。

2号溝出土遺物　(Fig.93，94，PL.58，59)

器種は壺形土器，甕形土器，台付鉢形土器，鉢形土器，椀形土器、杓子形土器がある。14，17，18，22は第1層，その他は第2層より一括状態で出土した。その他，縄文時代晩期の土器の底部が出土している。

壺（13，15）　13は口径11cm，現存高8.2cm，15は完形品で，口径19cm，器高31.1cmを測る。13の口縁部はやや外反する。15は球体の胴部を有し，口縁部は退化した2重口縁である。口縁段部に突帯を貼り付ける。いずれも内外面ハケ調整を施し，13は口縁部内外を，15は口縁部内外と胴部下位をナデ消している。15の胴部内面下位はヨコナデである。胎土は13が砂粒を少し含み，15は精良である。色調は13が淡褐色，15が明褐色である。

甕（14，17，21）　14は口径13.8cm，17は口径17.8cmを測る。“くの字”形口縁部で，長胴化している。14の外面は叩きを施す。内面はヘラケズリである。17の内面はハケ調整である。口縁部内外面はいずれもヨコナデ調整。胎土に砂粒を少し含み。14は茶褐色，17は黒褐色を呈する。21は大型甕で，復元高61cm，口径56cmを測る。胴部は砲弾形を呈し，肩部と下位に幅広い台形突帯を貼り付ける。口縁部外面はタテハケ，胴部はヨコ，タテハケ，内面はヨコハケ調整である。胎土は精選され，茶灰色を呈する。

高台付鉢（16）　完形品である。口径15.9cm，器高12.5cmを測る。半球形の体部を有し，器高の低い台が付く。外面はハケ調整，口縁部外面と内面はヨコナデ調整である。脚部内外面もヨコハケ調整である。胎土に砂粒を含み，淡褐色を呈する。

椀形土器（18，19）　口径15.2cmを測る。口縁端部は丸味をもっている。内面ヘラ調整。内外面ナデ調整である。19は口径13.8cm，器高6.8cmを測る。体部は半球状を呈す。内外面摩滅。18の胎土は精良で，18，19は淡灰褐色を呈する。

杓子形土器（20）　柄部を欠いている。口径9.0cm，器高4.7cmを測る。柄部の幅は約1.5cmと思われる。手づくね土器で，内面はナデ，外面の下位に叩きを施す。胎土に砂粒を含み，明褐色を呈する。

石　器

石鏃（22）　縄文時代に伴なう石鏃で，抉りは深い。両面の剝離調整は丁寧である。現存長3.4cm，現存最大幅2.0cm，厚さ0.4cmを測る。

3号溝出土遺物　(Fig.94，PL.59)

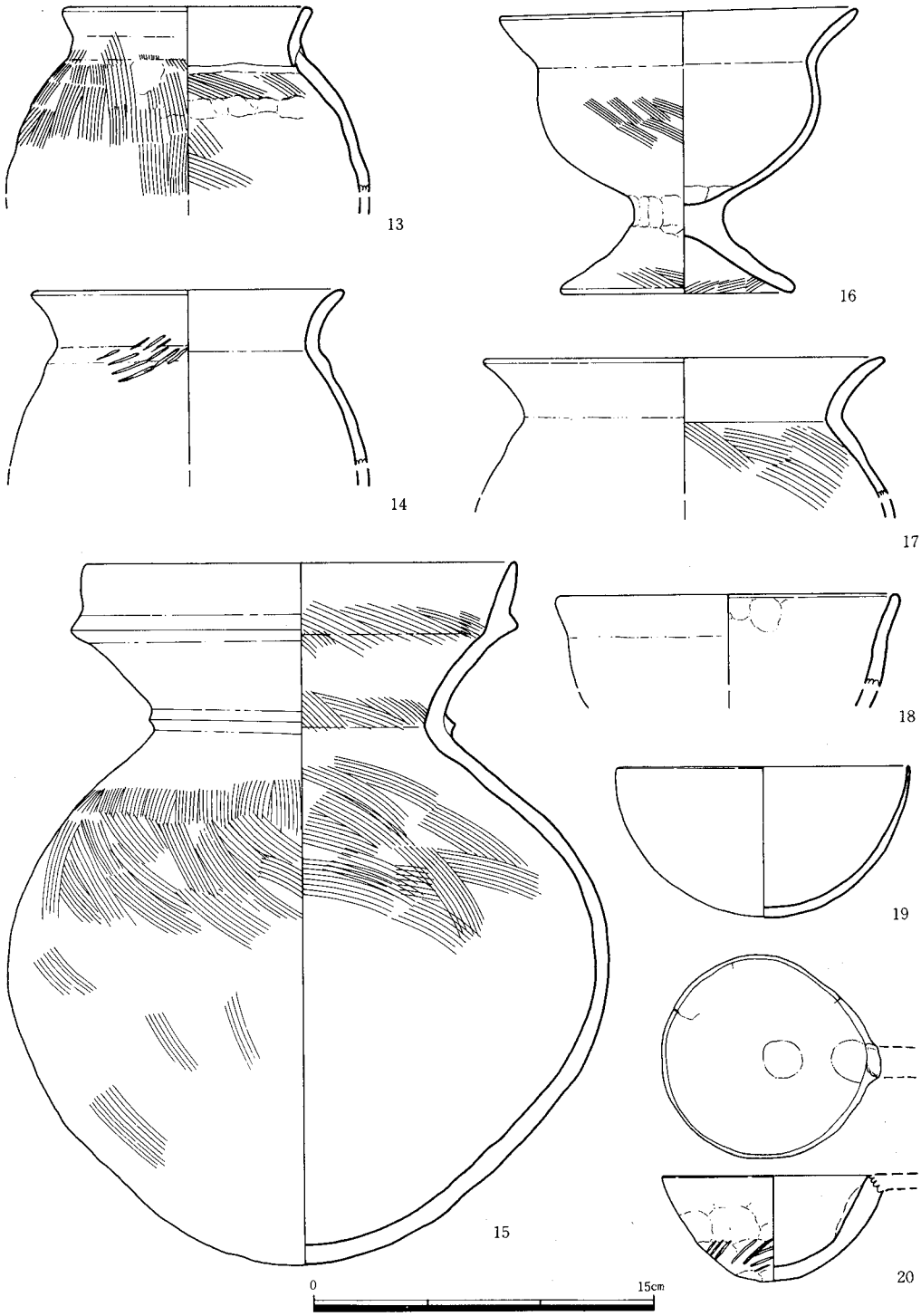


Fig.93　2号溝出土遺物（1/3）

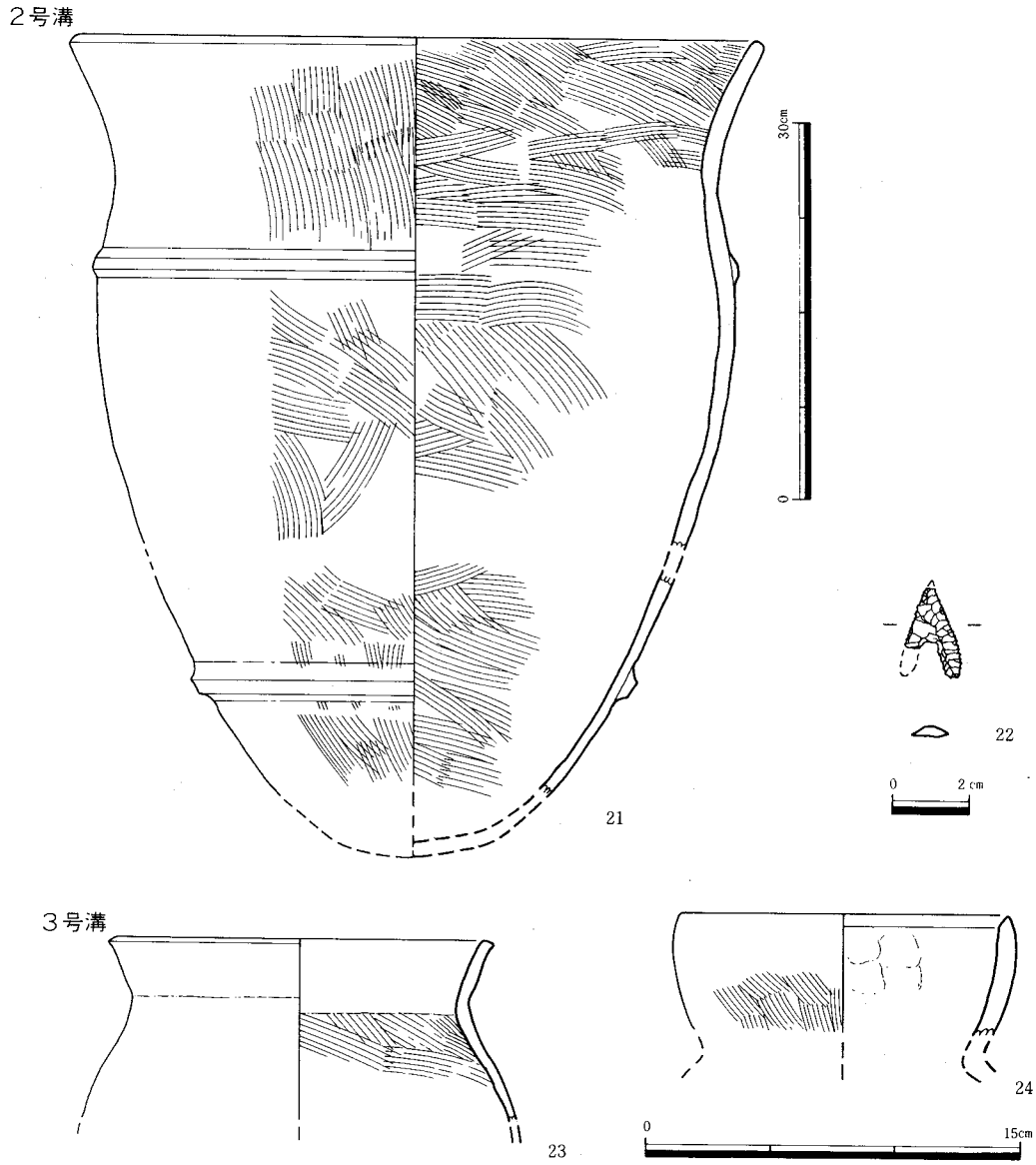


Fig.94　2号・3号溝出土遺物（1/2, 1/3, 1/6）

甕（23）　口径15.4cmを測る。口縁端部は平坦で，体部は長胴である。内面はヨコハケ後，口縁部はナデ消している。

壺（24）　口径13.0cmを測る。口縁部は内弯し，端部は鋭角である。内面はナデ，外面はハケ調整後ヨコナデを施す。胎土に砂粒を含み，茶褐色を呈する。

1号土坑出土遺物　（Fig.95, PL.60）

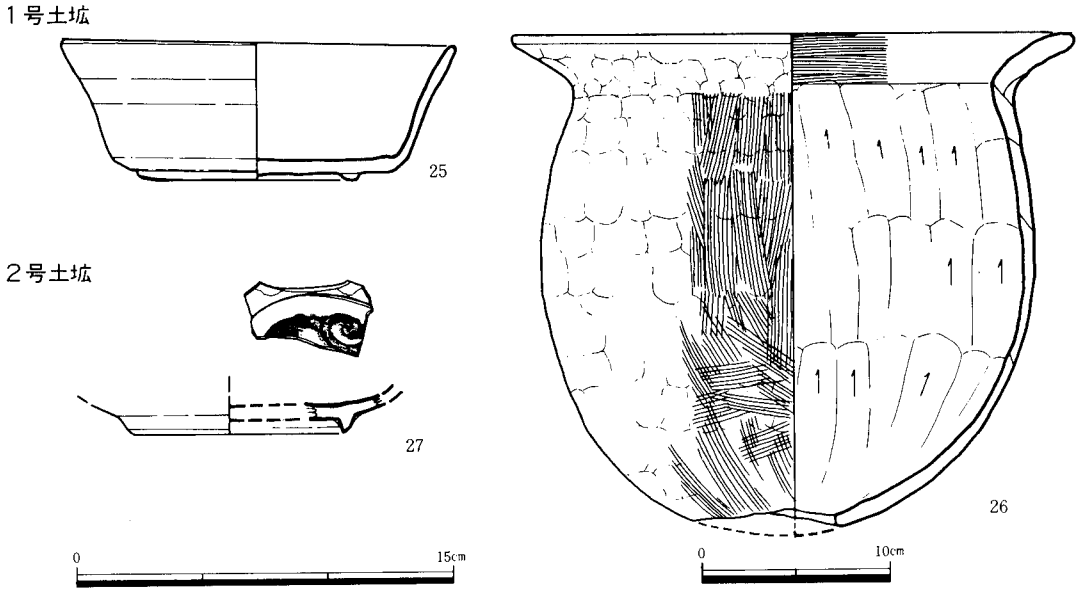


Fig.95　1号・2号土坑出土遺物（1/3, 1/4）

須恵器

椀（25）　低い高台が付く。口径15.8cm，器高5.6cmを測る。内外面ヨコナデ調整。胎土に細粒を含むが精良である。灰色の強い淡褐色を呈する。赤焼け土器と思われるが，土師質の軟質土器である。土師器甕の内底部より出土した。

土師器

甕（26）　須恵器椀とセットをなす。口径30cm，器高26.4cmを測る。胴部は球体を呈し，肥厚した口縁部は強く外反する。胴部外面はタテハケ，内面はヘラケズリである。底部に径約75cmを測る穿孔がある。

2号土坑出土遺物　(Fig.95, PL.60)

染　付

皿（27）　高台径5.5cmを測る。内外面は青味をもった乳白色釉を厚目に施す。畳付周辺はカキ取っている。胎土は乳白色である。内底見込みに呉須による圏線と唐草文をあしらう。

井戸出土遺物　(Fig.96, PL.60)

須恵器

杯（28）　口径13.6cm，器高3.6cmを測る。底部は丸味をもち，体部は外弯気味である。灰青色を呈する。第1層出土。

椀（29～31）　いずれも低い高台が付く。体部の立ち上りは強く，高台径は29が8.6cm，30が9.5cm，31の口径16cm，高台径11cmを測る。胎土は29が精選され，30，31は微砂を含む。色調は

29が淡青灰色，30が青灰色，31が灰色を呈する。29は第３層，31は第１層出土。

皿（32）　口径15cm，器高1.6cmを測る。内外面ヨコナデ調整。砂粒を含み，青灰色を呈する。第３層出土。

蓋（33，34）　33は腰部に丸味をもち口縁端部が外弯する。34は口縁端部をつまみ出している。33の口径15cm，器高2.4cm，34の口径20cmを測る。いずれもヨコナデ調整。胎土に砂粒を含み33は暗青灰色，34は灰青色である。

壺（35）　現存高6.9cmを測る。強く外反した口縁部外面に２条の三角突帯を貼付ける。内外面ヨコナデ調整。内面に灰釉が付着している。外面は黒色を，内面は灰青色。

土師器

甕（36）　口径19cmを測る。胴部外面タテハケ，内面はヘラケズリである。口縁部は肥厚し，内面ヨコハケ調整を施す。淡黄褐色を呈する。第３層出土。

かまど（37）　確定できないが，形態的な近似より判断した。底面口径34cm，現存高10cmを測る。外面はタテハケ，内面はヘラナズリを施す。口縁付近は粗い成形のため指痕や粘土塊が付着している。口縁平坦面は無調整で，板などの平坦なものに置いて成形されたことを物語っている。砂粒を多く含み，淡黄褐色を呈する。井戸上層より出土。

土製品

円盤（38）　長径6.0cm，短径5.1cm，厚さ1.2cmを測る。土器片を再利用したもので，外面にハケ目を残している。胎土に砂粒を含む。井戸底の上部より出土。

土錘（39，40）　39は長さ6.3cm，最大幅2.6cm，孔径１cm，40は長さ4.6cm，最大幅２cm，孔径0.8cmを測る。丁寧なナデ仕上で，胎土に砂粒を含み，二次熱のため黒褐色，又は褐色を呈する。

Pit出土遺物（Fig.97，PL.60）

土師器

高杯（46）　１号建物－Ｐ７出土。口径24cmを測る。底部と体部の屈折は小さく，体部が外弯する。胎土は精良で，赤褐色を呈する。

皿（41）　Ｐ53出土。７号建物の柱穴出土である。完形品で糸切り底である。内外面ヨコナデ調整，砂粒を少し含み，灰黄色を呈する。口径8.0cm，器高1.3cmを測る。

杯（42）　Ｐ119出土。口径10.6cm，器高2.6cmを測る。内外面摩滅。底部は糸切り底である。胎土は精良で，明褐色を呈する。

壺（44）　１号建物－Ｐ１出土。口径11cmを測る。頸部は強く屈折し，薄手の口縁部は立ち上りが強く，やや内弯する。胎土は精良。明褐色を呈する。

須恵器

椀（43）　Ｐ39出土。低い高台付椀で，口径15.5cm，器高3.8cmを測る。腰部の屈折は強く，

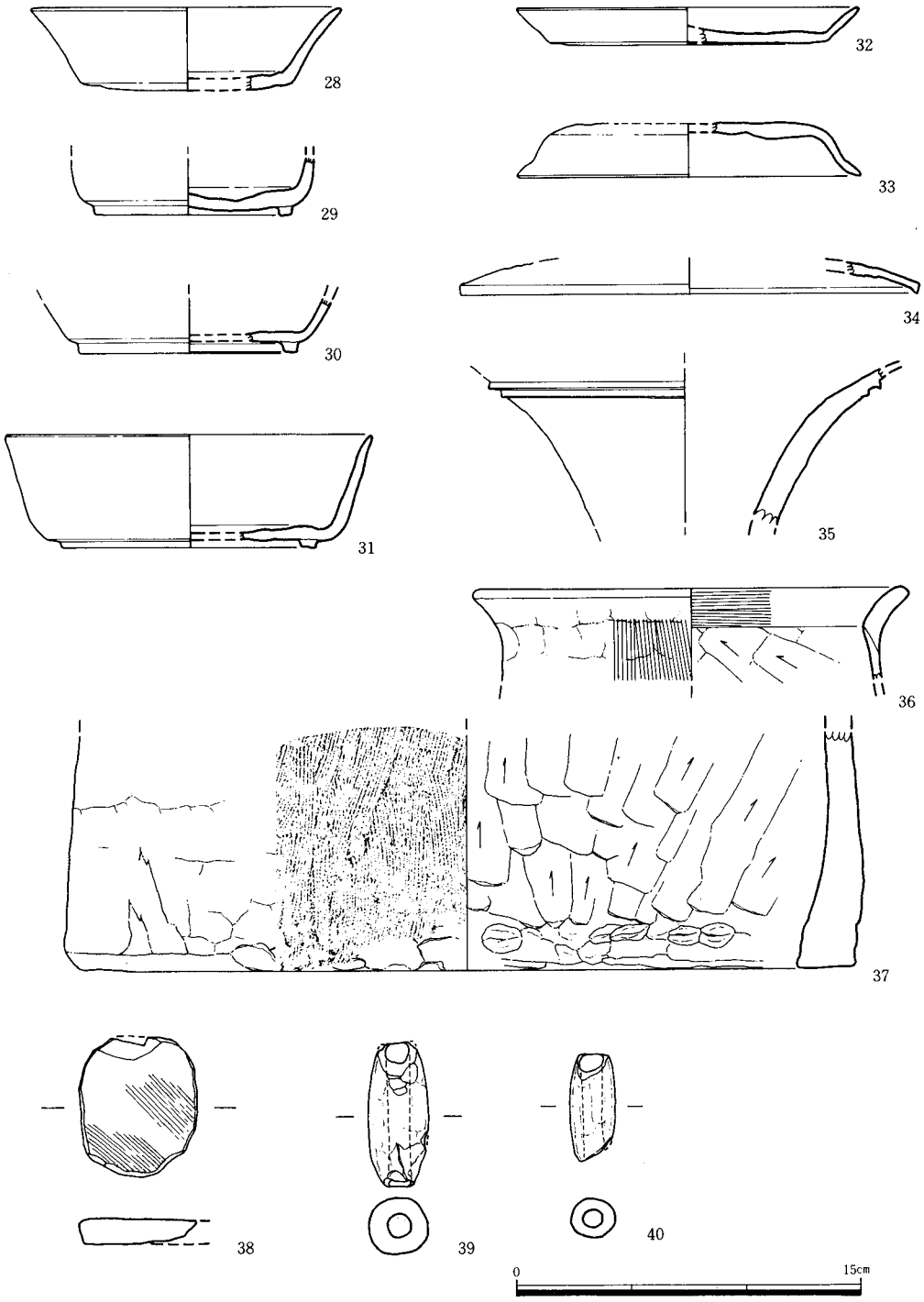


Fig.96　井戸出土遺物（1/3）

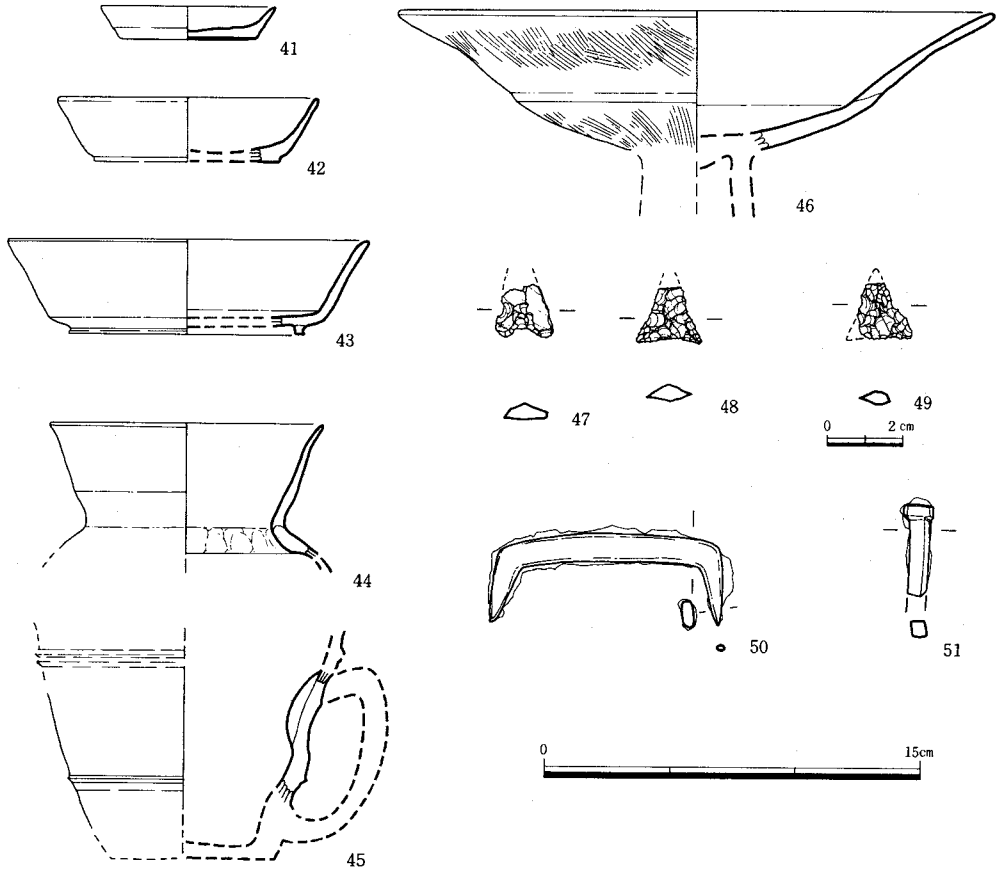


Fig.97　Pit出土遺物（1/2，1/3）

体部は開く。胎土は精良で，青灰色もしくは黒灰色を呈する。

陶質土器

ジョッキ形（45）　6号建物出土。口縁部と底部を欠く。現存高5.7cm，最大径11.8cmを測る。底部は平底で，体部は鉢状に開く。体部下位に小さな三角突帯を有す。胎土，焼成とも良好で外面は黒灰色，内面暗灰色を呈する。

石　器

石鏃（47～49）　いずれも先端を欠く。剥片鏃で，調製は粗い。腸抉りのかえしは小さい。48，49は三角鏃で，抉りは浅い。47は長さ1.3cm，厚さ0.5cm，48は長さ1.5cm，厚さ0.4cm，49は長さ1.5cm，厚さ0.4cmを測る。黒曜石製で，48のみ姫島産である。47，48はP46，49はP39出土。

鉄製品

鎹（50）　P61出土。最大長9.2cmを測る。体部の断面形は長方形，両先端屈折部の断面形は円形状を呈している。体部の厚さは1.1cm×0.3cmである。銹化が著しい。

釘（51）　P144出土。現存長3.9cm，頭部の幅1cm，釘身の厚さ0.6cmを測る。断面方柱状を呈し，頭部は方形を呈している。鼎片が伴なう。

4）小　　結

以上，調査経過について報告したが，これらの時期を大別すると4期に分類できる。Ⅰ期は1号，2号土坑を主とした弥生時代前期の遺構である。これらの貯蔵穴は第6次調査で検出した前期後半の溝に伴なう遺構であろう。

Ⅱ期は1号～3号溝，住居跡を含む古墳時代初頭から前半期の遺構である。これらの遺構の内，1号溝で検出した甕（12）はレンズ状底部をもつものの，口縁部の外反は弱く，内面に稜を有していない。又，壺（10）の口縁部は内傾するものの，球体の胴部を形成するなど，弥生時代終末の特徴は失われており，これらの土器群は西新町式土器の次の段階に出現する1群といえる。2号溝第3層出土の壺や台付鉢，甕なども同時期の特徴をもつものといえる。住居跡出土の甕（2，3）は外面に平行叩きを施し，内面はヨコハケ調整である。2号溝第1層出土の甕(11，14)は同様な特徴をもっており，2号溝の第2層出土土器群より後出するものと考えられよう。2号溝の掘削と埋没に1型式の時間差があることが伺える。3号溝の壺（23）は口縁部が内弯するが，この特徴は布留系の土器，特に4世紀末から5世紀前半の甕に同様な形態がみられる。5世紀中頃には内弯口縁部形態は消滅をみるところから，壺（23）は5世紀前半が考えられる。当初，1号溝と3号溝が接合する可能性を示したが，土器による時期差が明らかとなった。尚，住居跡より出土した把手（26）は無文土器の把手に類似するものである。

Ⅲ期は1号・2号・3号掘立柱建物及び井戸，3号土坑である。1号・2号掘立柱建物は1号土坑に切られるが，この土坑より出土した甕形土器，及び赤焼け土器は8世紀中頃の時期を示しており，又，井戸より検出した須恵器椀も大略，同時期を示している。井戸は建物群の中間に位置しており，建物群との関連は明らかである。よって，これらの建物群の時期を8世紀中頃と考えるのが妥当である。これらの大型建物群が台地中央の第55・56・82次調査検出の建物群とどう関わるのか今後の検討課題である。

Ⅳ期は中世全般に亘り，主に第4号～9号・12号・14号・15号建物，及び2号土坑である。2号土坑からは明の染付皿片が出土し，16世紀前半から中頃の時期を考えている。又，7号掘立柱建物出土の土師器は器高が高く,14世紀代の時期が比定できる。2号柵列には4号・5号・3号柵列には7号・9号・12号建物が伴なうものと思われる。

上記の他，1号柵列は時期を知る手懸りが無いが，第6次調査検出の柵列[註2]に直交しており，今後の報告を待ちたい。

註1.　福岡市教育委員会が昭和58年度に発掘調査を実施した。現在整理中。
註2.　福岡市教育委員会が昭和51年度に発掘調査を実施した。付図1を参考にされたい。

8．第76次調査

1）調査地区の地形と概要

調査対象地は福岡市早良区南庄３丁目114－３番地に位置し，対象面積は355㎡である。

小田部台地は八手状に北側へ拡がっているが,当該地はその台地の東北部に位置する。標高約７ｍで，丘陵頂部から東へ緩傾斜を示す。この地域では昭和56年に第58次調査が，昭和58年に第86次調査，昭和59年に第93次調査が実施されており，弥生時代から中世に至る遺構が検出されている。試掘調査では柱穴を数個確認した。農機具倉庫の建設に伴ない，昭和58年４月１日～４月20日まで発掘調査を実施した。遺構は新期・鳥栖ローム層に掘りこまれるが，旧家屋の基礎および地下げ工事による削平が著しい。検出された遺構は古墳時代の竪穴住居跡１基と奈良～平安時代の掘立柱建物７棟，溝１条である。

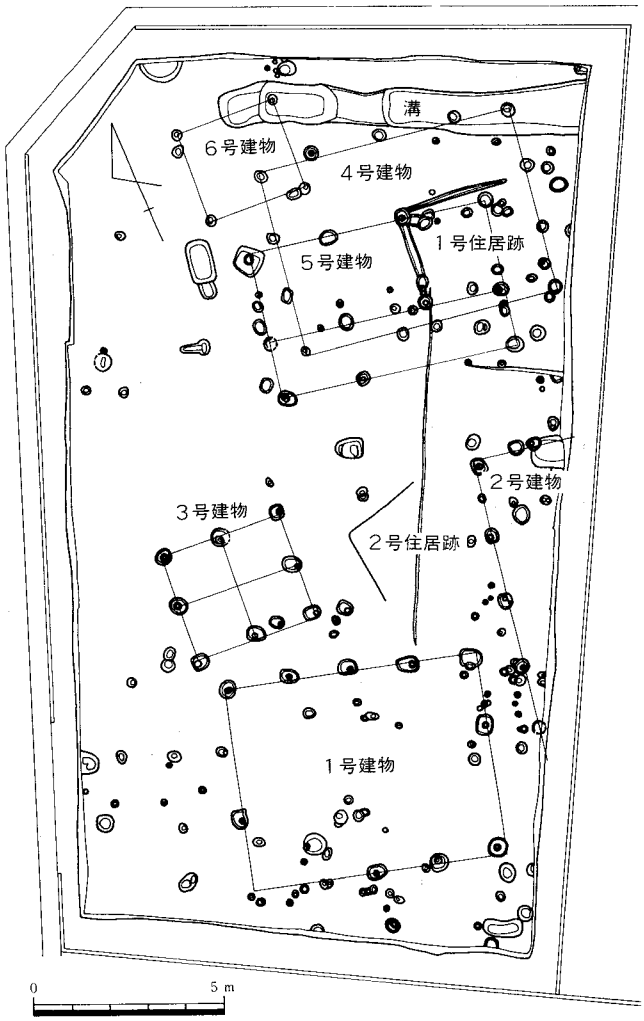


Fig.98　第76次調査遺構配置図（1/200）

2）検 出 遺 構

住 居 跡

削平のため遺構の残存は極めて悪く，床面の一部あるいは周溝の一部を検出した。

１号住居跡　(Fig.99，PL.62)

５号掘立柱建物と重複している。北側と西側の周溝の一部を検出したのみで全体の規模は不明であるが，長方形の竪穴住居跡と考えられる。周溝の幅はほぼ0.20ｍ前後で，深さ0.05ｍ前後を測る。残存している周溝の規模は北辺 3.0ｍ，

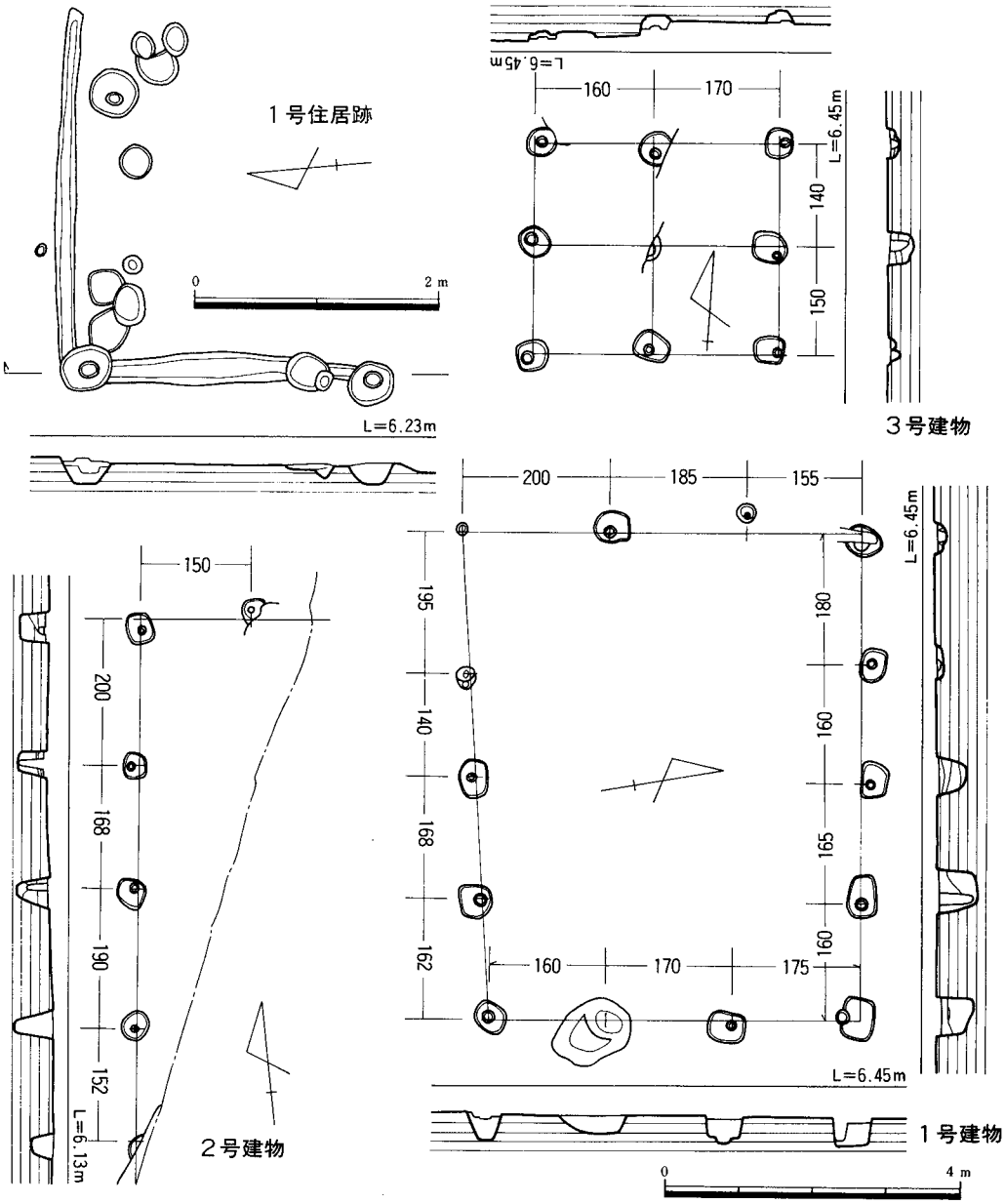


Fig.99　1号住居跡，1号～3号掘立柱建物（1/60，1/100）

西辺2.6mを測る。主柱穴は認められない。出土遺物は古墳時代の細片土師器の細片だけであった。

2号住居跡　(Fig.98，PL.62)

遺構は大部分を既に削平を受け，貼床によって形状を把握できた。西側では1cmの厚さで，

Tab.6 第76次調査掘立柱建物計測表

	規模	桁行		梁行		方位	床面積 (㎡)	柱穴状態					備考
		実長	柱間寸法(尺)	実長	柱間寸法(尺)			Pit 数	深さ	長径	短径	柱根径	
1号	4×3	665 (22.2)	6.5·4.7·5.6·5.4 6·5.3·5.5·5.3	540(18) 505(16.8)	6.7·6.2·5.2 5.3·5.7·5.8	N 79° W	32.66	14	10～55	28～58	28～46	15～20	
2号	4×1	710 (23.7)	6.7·5.6·6.3·5.1	150 (5)	5	N6°20′E	10.49	6	28～54	36～44	32～40	10～15	
3号	2×2	330 (11)	5.3・5.7	290(9.7)	4.7・5	N86°15′E	9.98 9.65	9	14～36	42～50	38～42	11～18	
4号	4×3	690 (23)	5.2·6.5·6.5·4.8 5.2·6.5·2.7·8.7	510 (17)	5.7·5.5·5.8	N84°30′E	14.97 14.16	14	8～35	22～38	22～34	15	
5号	3×1	630 (21)	7・7・7	380(12.7)	5・7.7	N86°40′E	33.51 32.69	11	20～30	26～46	22～40	12～14	
6号	1×1	220 (7.3)	7.3	200 (6.7)	6.7	N 89° E	6.62	4	30～45	26～30	24～28		

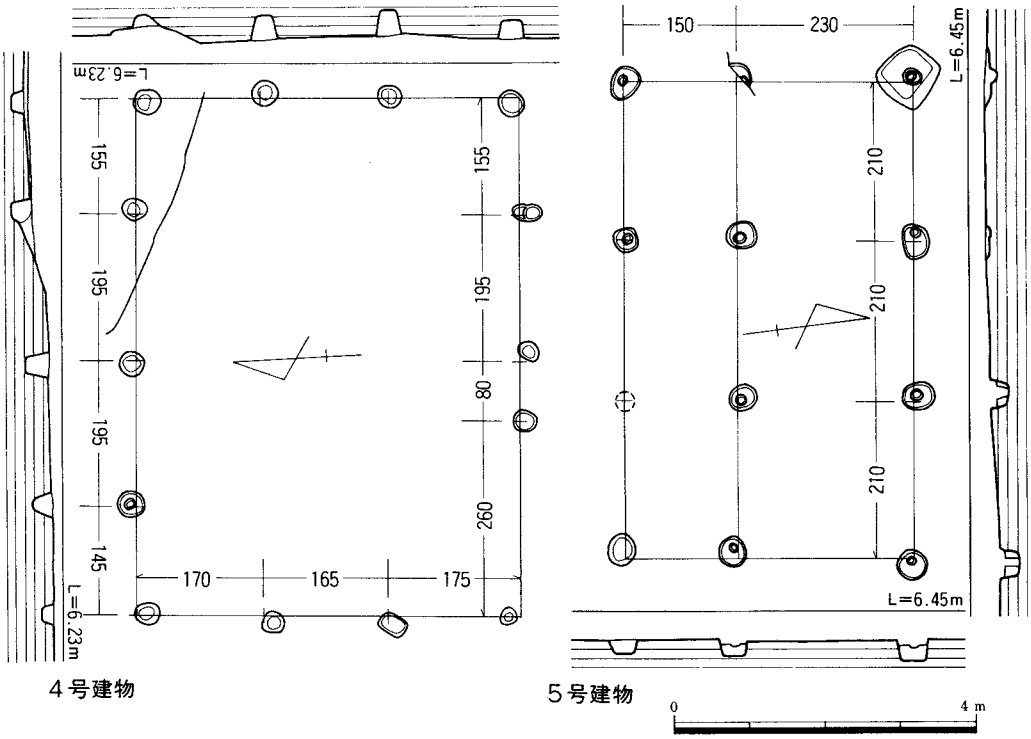


Fig.100 4号・5号掘立柱建物 (1/100)

東では薄くなり消滅する。貼床面は直角三角形状を呈するが，本来長方形を示すものと考えられる。規模は2.3m×2.0mで，主軸をN56°Eにとる。柱穴は認められないので全体の規模は不明である。遺物は出土してないが形状より古墳時代と考えられる。

溝状遺構 (Fig.98, PL.63)

調査区の北辺にそって検出した。東西方向の溝で，東側調査区外へ伸びる。幅は中央部で0.98m，東側で1.45m，現存長4.65m，最深部0.7mを測る。断面は深皿状を示す。西から東へ向って幅，深さ共に広く，深くなる。溝の中央から少し西に寄った部分は一段高くなり，陸

橋部を形成する。規模は幅1.1ｍ，長さ0.8ｍである。更に，その西側には溜部を付設する。土層は茶褐色土，或は暗褐色土で，自然の堆積状況を示す。出土遺物は土師器の細片のため時期不明だが，4号建物より新しい。埋土の状態等から平安時代の新しい時期と考えられる。

掘立柱建物

合計7棟を検出した。西側は削平を受けている。7号建物などの1間×1間のものは本来，竪穴住居跡の柱穴と考えられる。比較的大型の建物が多い。一棟だけ総柱の建物があり，居住用建物と倉庫の組み合せで構成される。4号建物と5号建物は重複している。

1号掘立柱建物　(Fig.99，PL.62)

梁行3間，桁行4間の規模で，側柱だけの掘立柱建物である。主軸方位はN79°Wである。全体にゆがみがあり，西側に拡がっている。P11，P12は柱穴の掘り方はない。東側と北側の柱穴は規則的で，柱間距離は1.68m及び1.62mを測る。

2号掘立柱建物　(Fig.99，PL.62)

東側境界地にあるため規模は不明である。梁行1間以上，桁行4間以上で，主軸方位はN6°20′Eを測る。1号建物と同規模の側柱だけの建物と考えられる。柱間距離は1.5～1.92mである。

3号掘立柱建物　(Fig.99，PL.62)

総柱の建物である。梁行2間×桁行2間の規模を測る。主軸方位はN86°15′Eを測る。柱間距離は全体に長短があり，1.50m前後を測る。北側の柱穴が東へ少し寄っている。

4号掘立柱建物　(Fig.100)

梁行3間×桁行4間の側柱だけの掘立柱建物である。主軸方位はN84°30′Eを測る。東北隅の柱穴が1号溝に切られている。柱間距離は梁行が1.5～1.7m，桁行が1.4～2.04mである。

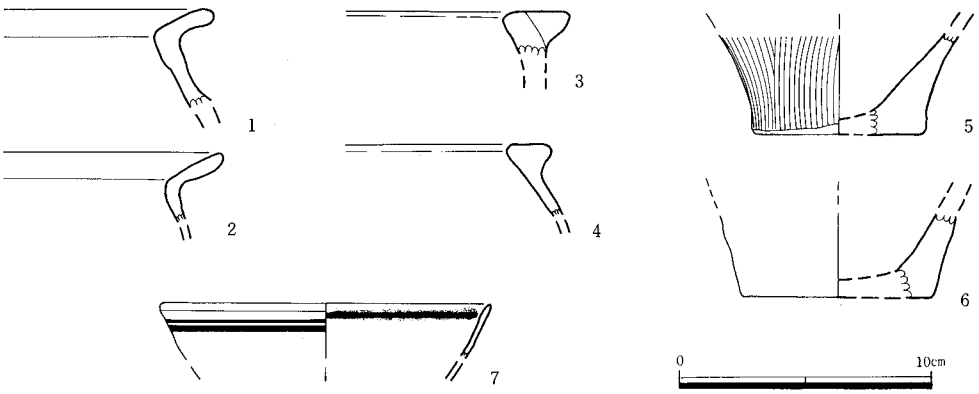


Fig.101　出土遺物 (1/3)

5号掘立柱建物 (Fig.100, PL.63)

4号建物と重複する。身舎は梁行2間×桁行3間の規模を測る。南の桁行には半間の柱列を配置している。主軸方位はN86°40′Eを測り，4号建物とほぼ同一方位である。或は1間×1間の2棟の建物の可能性もある。柱間は梁行が2.30mと1.50m，桁行が2.10mを測る。

6号掘立柱建物 (Fig.98, PL.63)

1号溝と重複する。梁行1間×桁行1間の掘立柱建物である。主軸方位はN89°Eを測り，竪穴住居跡の四本柱の可能性が強い。柱間距離は2.40mを測る。

3) 出土遺物

住居跡，溝状遺構，掘立柱建物からは弥生式土器，土師器の細片の出土であった。

Pit出土遺物 (Fig.101)

1はP23，2はP25，4はP36，5はP32，6はP7，3は2号建物から出土した。いずれも弥生式土器である。

4) 小　結

試掘調査ではピットが数個検出されただけであったが，発掘調査の結果，当初の予想よりも多くの遺構を検出した。今回検出した遺構は古墳時代の住居跡と奈良～平安時代の掘立柱建物，溝状遺構であるが，ピットから弥生式土器が出土していることや遺構面が削平されていること，隣接の第58次調査では弥生時代中期の住居跡を検出していることから弥生時代の遺構が本来あったものと考えられる。

Ⅰ期の古墳時代の遺構は竪穴住居跡2棟である。6号建物も住居跡とすれば，合計3棟になる。既に削平された住居跡も考えられるので，ある単位の集落を構成したものと考えられる。出土遺物がないことや住居跡の規模，構造が不明であることがおしまれる。

Ⅱ期の奈良・平安時代には少くとも掘立柱建物が5棟ある。4号建物と5号建物は重複しているので少くとも2時期に分離することが可能である。1号建物と4号建物は規模と方向がほぼ同一であることから同一時期の可能性がある。1号建物と2・3号建物は方向が異なることや距離が近接しすぎていることから時期差の可能性が強い。2・3・5号建物は同一時期の可能性がある。但し，調査区が狭いため建物群が調査区内で終結するのではなく，広い範囲に拡がると考えられる。詳細については周辺の調査を待って検討したい。

9．第86次調査

1）調査地区の地形と概要

調査対象地は福岡市早良区小田部５丁目143－３番地に所在する。発掘調査対象面積は247㎡である。

有田・小田部台地の北側はハツ手状に舌状地を分岐しているが，各々の台地最高所の標高は東側から10～７ｍを測る。当該地はこれらの西側台地に所在し，標高７ｍ前後の台地縁辺部に位置している。当該地の西側は昭和55年度に第36次調査と昭和56年度の第46次調査が実施され弥生時代中期の甕棺墓，古墳時代～中世の土坑，中世の溝，柵列，井戸，及び時期不詳の掘立柱建物３棟を検出した。又，東側は昭和55年度に第35次調査，昭和57年度に第64次調査が実施され，弥生時代中期～後期の甕棺墓，同前期の貯蔵穴，古墳時代の住居跡群，中世の溝及び濠，井戸等を検出した。[註1] 特に甕棺墓は50ｍ四方に限られることが判明している。[註2] 当該地の試掘調査では前期甕棺墓を検出している。当該地の開発用途は専用住宅である。

発掘調査は昭和58年10月11日～11月７日迄実施した。遺構は褐色ローム層上面に検出された。表土は耕作土で，20～30cmの深さである。

検出遺構には第36次調査と第64次調査にまたがる溝や掘立柱建物がある。縄文時代後期～晩期の土坑１，弥生時代前期甕棺墓３基，同中期甕棺墓１基，中世溝３条，同土坑１，近世溝状遺構２条，時期不詳土坑２，同掘立柱建物３棟，同柵列である。遺物は１号溝から中国製陶磁器，瓦質土器，石鍋等が，４号溝から土師質土器，李朝陶磁器などが出土している。

尚，１号掘立柱建物は第36次調査にまたがっており，１号溝は第64次調査の２号溝と接続する。４号溝は第36次調査１号溝と，第64次調査３号溝と同一である。

2）検 出 遺 構

土　坑

土坑は時期不詳のものを含めて６基検出した。４号は中世に，６号は縄文時代に比定できる。１号，２号土坑は不定形で，溝状に近い遺構である。

１号土坑（Fig.168）

長さ170ｃｍ，最大幅36cm，最大の深さ13cmを測る。細長く，両先端は丸味をもっている。横断面形はＵ字形を呈している。覆土は暗茶褐色粘質土である。遺物は土師器等の細片がある。覆土から中世の遺構と思われる。

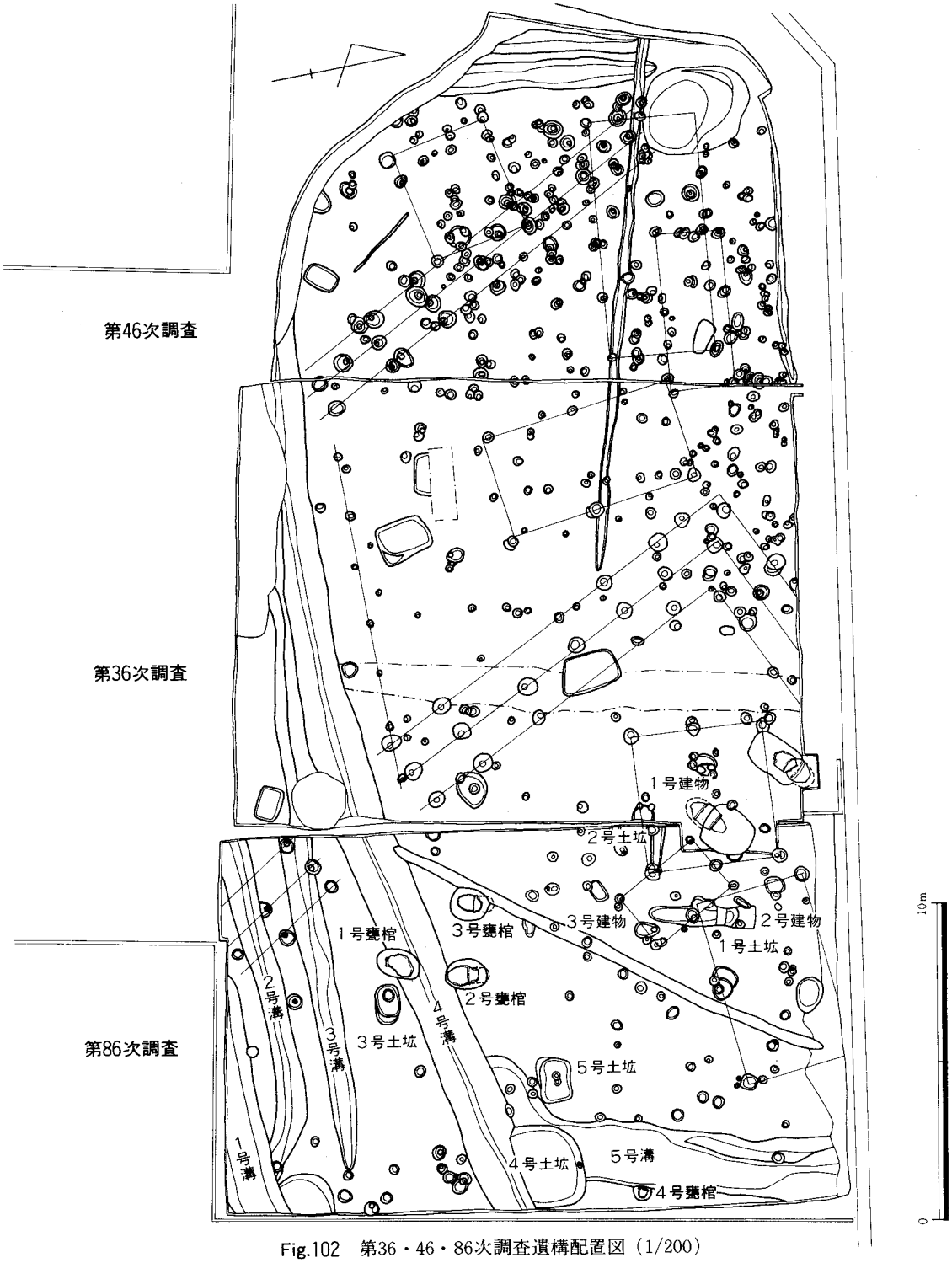


Fig.102　第36・46・86次調査遺構配置図（1/200）

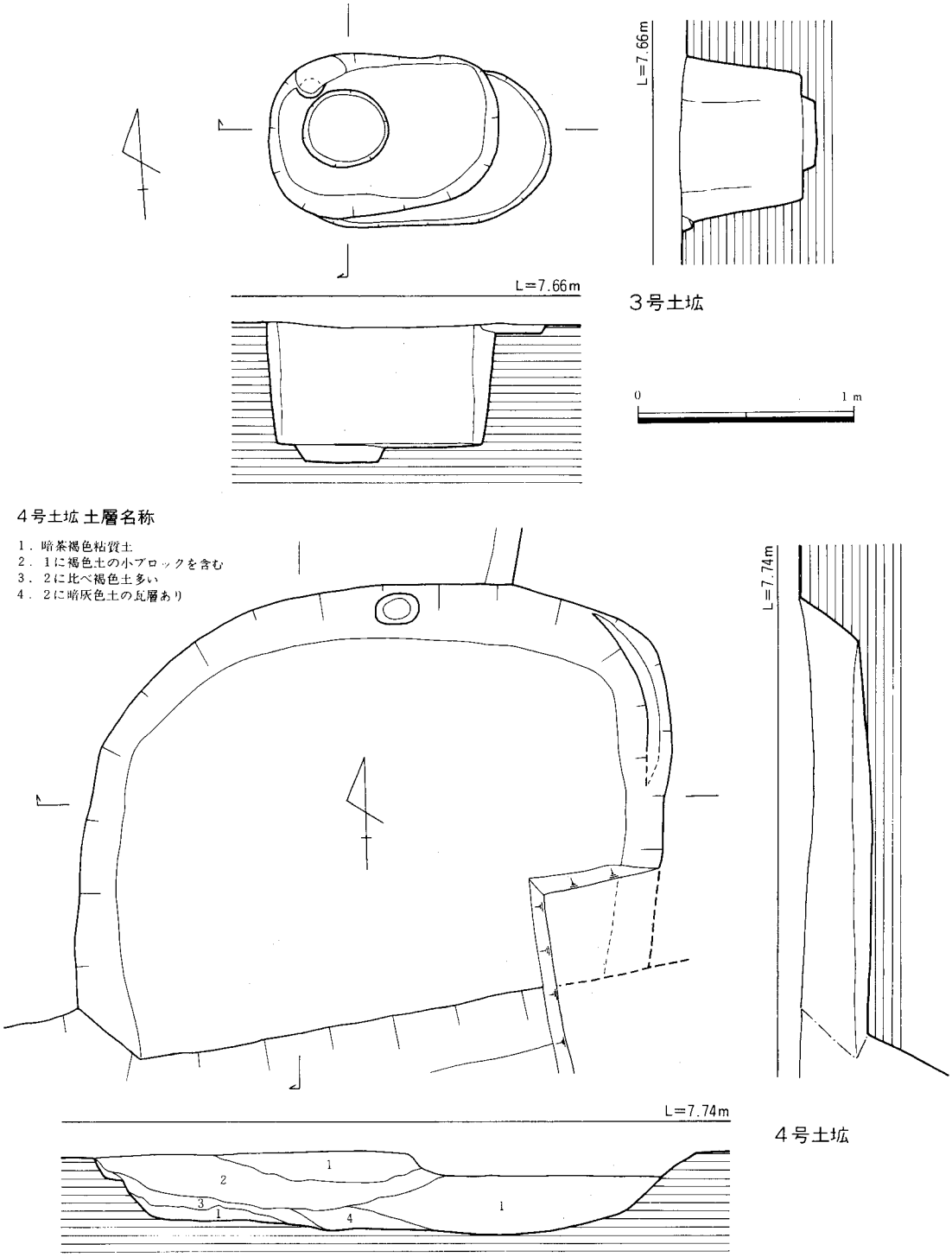


Fig.103　3号・4号土坑（1/30）

2号土坑 (Fig.102)

1号土坑同様な形態をもち，現存長135 cm，幅40cm，深さ7 cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土である。1号土坑に直交する方向に位置している。

3号土坑

(Fig.103，PL.66)

平面形は隅丸長方形を呈している。東側に深さ4 cmを測る浅い張り出し部がある。土坑の長さ166 cm，幅75cm，深さ57cmを測る。坑底の西寄りに，径40×36cm，深さ8 cmの円形 Pit が設けられる。覆土は長楕円形の張り出し部分が暗黒褐色粘質土，隅丸長方形の土坑主体部が暗黒灰色粘質土である。遺物は土器の細片であるため時期比定できない。

4号土坑

(Fig.103，PL.66)

4号・5号溝に切られており，全形状は不明であるが，隅丸方形の平面形を呈したものと思われる。東西長212 cm，南北現存長200 cm，深さ38cm

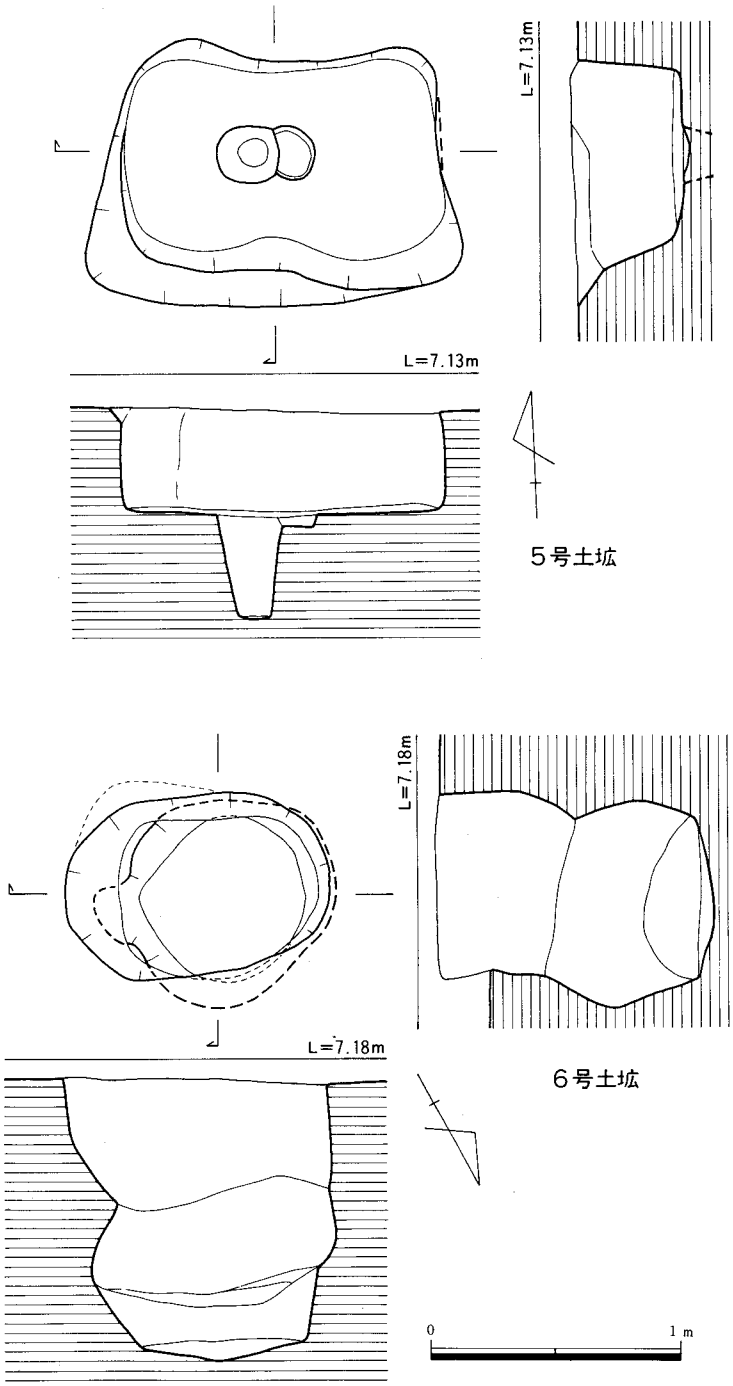


Fig.104　5号・6号土坑 (1/30)

を測る。覆土は上層が暗茶褐色粘質土，下層が暗褐色粘質土である。遺物は瓦質土器の鉢などを出土した。4号溝が16世紀に比定できるので，ほぼ近い時期に相当するものと思われる。

5号土坑 (Fig.104，PL.66)

不整隅丸長方形を呈しており，南側半分に張り出しがあるが，埋没時に崩壊した部分と考えられる。最大長152cm，最大幅107cm，深さ41cmを測る。主体部の長さ127cm，幅82cmである。坑底には円形Pitが西寄りに設けられる。直径約25cm，深さ43cmを測る。覆土は暗褐色粘質土である。遺物は土器細片のみを検出するにとどまった。

6号土坑 (Fig.104，PL.66)

調査区北側道路との境界地で検出した。平面形は不整楕円形を呈し，東西長105cm，南北長70cm，深さ111cmを測る。坑底は径約67cmを測り，円形状を呈している。土坑壁は2段に屈折しており，上部は直壁に近く，中頃で内側に張り出した段を有している。下位の壁は袋状を呈する。覆土は上部が黒色粘質土である。下部は暗茶褐色粘質土に黒色土の小ブロックを混入する層である。遺物は土器片，黒曜石，黒曜石製石鏃1点，乳棒状磨製石斧1点が出土している。土器片の胎土や石斧の形状よりして縄文時代後期～晩期の遺物と思われるので，土坑の時期も大略この時期に相当するものと思われる。

甕棺墓

当該調査区では4基の甕棺墓を検出した。前期は3基，中期は1基である。第36次調査では中期2基，第64次調査では中期～後期の甕棺28基を検出している。

1号甕棺墓 (Fig.105，PL.65)

上部を削平のため破損しており，且つ，4号溝のため底部を削平されている。墓坑は不整楕円形状を呈し，現存長123cm，現存幅84cmを測る。坑底は2段になっており，1段目の深さ32cm，2段目は上端からの深さ63cmを測る。甕棺は単棺である。主軸方位N31°E，埋置角度46°である。いわゆる金海式甕棺の範疇に入る土器である。棺内より石鏃が1点出土した。

2号甕棺墓 (Fig.105，PL.65)

上部を削平のため破損している。墓坑は現存長115cm，最大幅90cmを測り，平面形は楕円形状を呈している。下甕部分の坑壁はややオーバーハングする。甕棺は覆口で合されており，上甕は大型である。甕棺の主軸方位はN11°E，埋置角度は44°である。前期板付Ⅱ式併行の甕棺墓である。

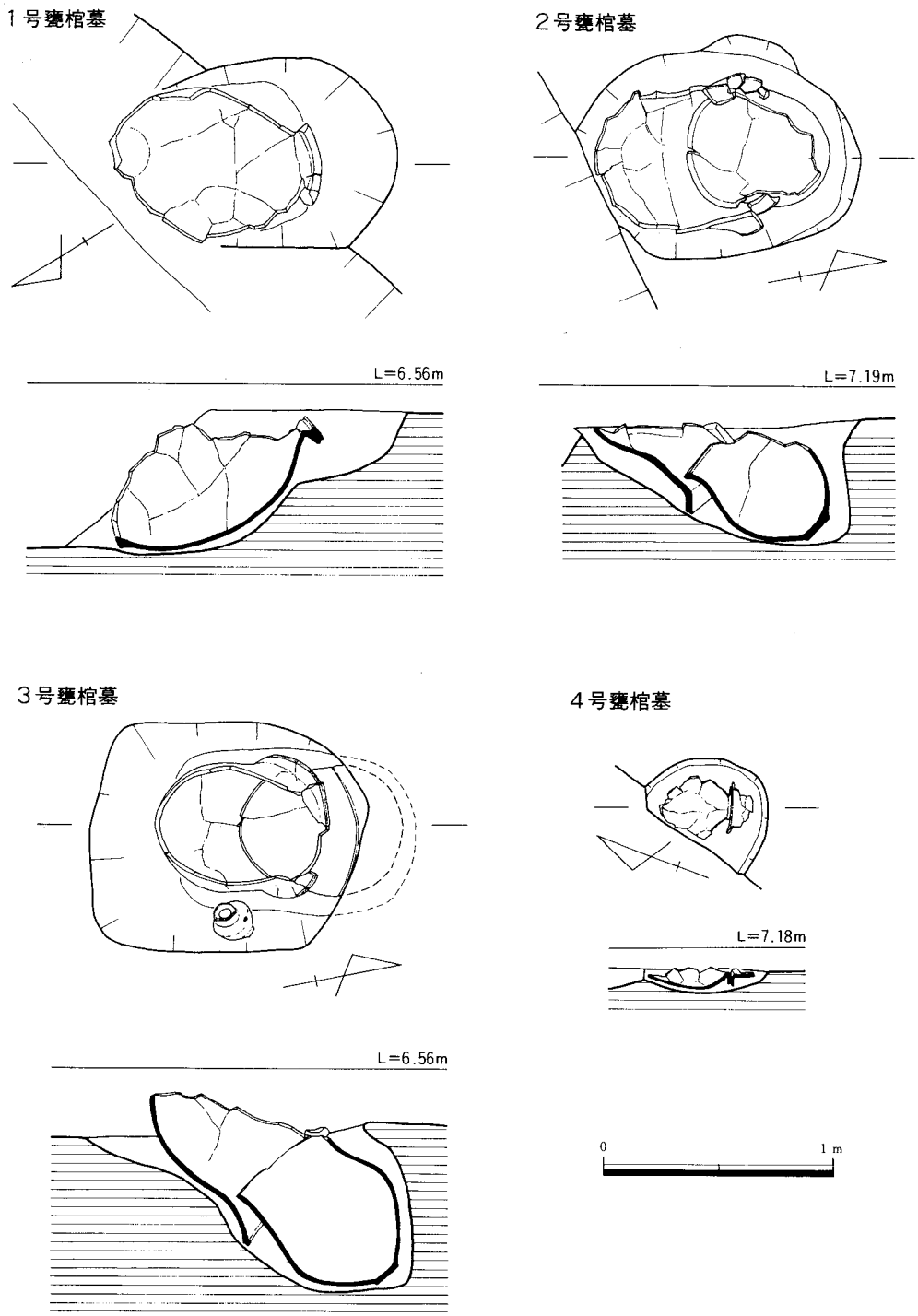


Fig.105　1号～4号甕棺墓（1/30）

3号甕棺墓 (Fig.105, PL.65)

上部を削平のため破損している。墓坑は長さ118cm，幅100cmを測る。平面形は隅丸長方形を呈する。坑底は棺に合わせて斜角を保つが，起伏がある。下甕の位置する坑壁は，下甕の差し込みのためオーバーハングしている。甕棺は覆口の形態をとるが，同じ大きさの甕を用いるため，下甕の口縁部を打ち欠いている。主軸方位はN10°Eで，埋置角度は45°である。甕棺の東側に壺形土器が副葬されていた。壺は南側にやや倒れた状態で出土した。この壺形土器は胴部上位に穿孔がある。甕形土器は壺の特徴を残してはいるが，いわゆる金海式甕棺の範疇に入る。

4号甕棺墓 (Fig.105, PL.65)

上部の削平著しく，残存状態は悪い。墓坑は円形状を呈しているが，西側を5号溝のため削平される。現存長54cm，現存幅52cm，深さ12cmを測り，断面レンズ状を呈している。甕棺は合口の小児棺である。ほぼ水平に埋置され，角度1°50′である。主軸方位N20°45′Eである。

溝状遺構

中世3条，近世2条の計5条の溝を検出した。1号溝は第64次調査の3号溝に接続し，4号溝は第36次調査1号溝，第64次調査2号溝と同一である。3号溝は第36次調査2号溝に接続する。

1号溝 (Fig.102, PL.64)

調査区南側隅にて検出したもので，第64次調査の3号溝に接続する。南北方向から東西方向へ矩形に曲がる溝である。総延長約36mを測る。溝の断面形は逆梯形を呈している。溝上端の幅は170cm，溝下端の幅90cm，深さ62cmを測る。覆土は暗茶褐色系の粘質土である。遺物には陶質土器片，土師器皿，杯，白磁椀，瓦質・須恵質土器の捏鉢，陶器の摺鉢，石鍋が出土している。

2号溝 (Fig.106, PL.64)

東西方向の溝であるが，東端は南側へ曲がっている。この溝は1号溝を切っている。覆土は暗茶褐色粘質土を主体としている。幅100cm，深さ25cmを測り，断面形はレンズ状を呈する。遺物には近世陶器を含んでいるが，全体に数は少ない。

3号溝 (Fig.106, PL.64)

2号溝の北側に平行して走る東西方向の溝である。東側は浅くなり消滅する。覆土は茶褐色及び暗茶褐色粘質土である。幅75cm，深さ14cmを測り，断面形はレンズ状を呈する。遺物は近

世の陶器片を含んでいる。

4号溝 (Fig.102, PL.67)

第36・64次調査に接続する東西方向の溝である。断面V字形を呈し，溝幅170 cm，深さ70cmを測る。覆土は1号溝と同様に暗茶褐色系の粘質土である。この溝は4号土坑，5号溝を切っている。第64次調査から第46次調査迄続く総延長は約62.5mを測る。第64次調査では南方向に矩形に曲がっており，第46次調査では反対に北方向に矩形に曲がって終っている。溝のもつ意味については遺構全体が把握できない段階のため今後に託したい。出土遺物は青磁椀片，越州窯系椀片，季朝皿片，瓦質土器の湯釜，火舎，捏鉢，鍋，土師質土器の鍋，板碑片，茶臼下臼片などがある。16世紀の年代が考えられよう。

5号溝 (Fig.102, PL.67)

南北方向の浅い溝である。4号溝を切っている。幅約2m，深さ13cmを測り，断面レンズ状の浅い溝である。溝底は起伏がある。出土遺物には土師器皿，越州窯系椀，瓦質土器の摺鉢片がある。土師皿は器高が高く，口径と底径に差をもつなどの特徴を持っているので15世紀以降の時期が考えられる。

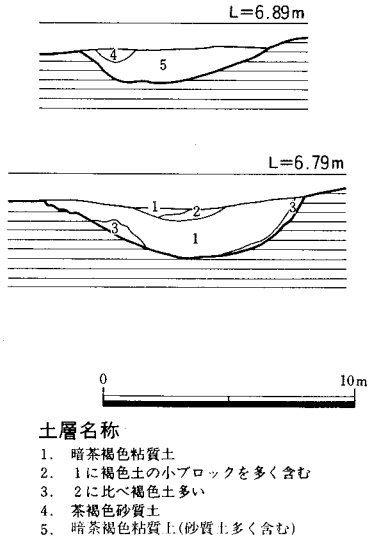


Fig.106 2号・3号溝断面土層図 (1/30)

掘立柱建物

1号掘立柱建物 (Fig.107)

第36次調査にまたがっている。東西棟で，梁行1間，桁行2間の側柱だけの建物である。主軸方位はN4°50′Wにある。梁行426cm，桁行400cm，桁間平均200 cmを測る。梁行には中間柱が存在したと思われるが検出し得なかった。

2号掘立柱建物 (Fig.107)

北側境界地にあるため規模を把握し得ない。南北棟で梁行2間，桁行2間以上の側柱だけの建物である。梁行570cm，梁間平均285cm，桁間250 cm以上を測る。主軸方位はN7°W である。柱穴は48～68cm，柱根は20cm，深さ15～40cmを測る。

3号掘立柱建物 (PL.67)

東西棟で，梁行1間桁行2間の建物である。梁行は180 cm，桁行300 cm，桁行平均150 cmを

測る。主軸方位はN29°Eである。

Tab.7　第86次調査掘立柱建物計測表

(単位：cm)

	規模	桁	行	梁	行	方位	床面積 (㎡)	柱穴状態					備考
		実長	柱間寸法(尺)	実長	柱間寸法(尺)			Pit数	深さ	長径	短径	柱根径	
1号	2×1	400 (13.3)	6.7・6.7	426 (14.2)	14.2	N4°50′W	17.04	6	40～70	44～62	38～46	5～20	
2号	1?×2	250 (8)3)	8.3	570 (19)	9・10	N 7°W	14.25	4	15～40	50～68	34～58	15～20	
3号	2×1	300 (10)	5・5	180 (6)	6	N 29°W	5.4	6	15～45	30～48	25～40	18～20	

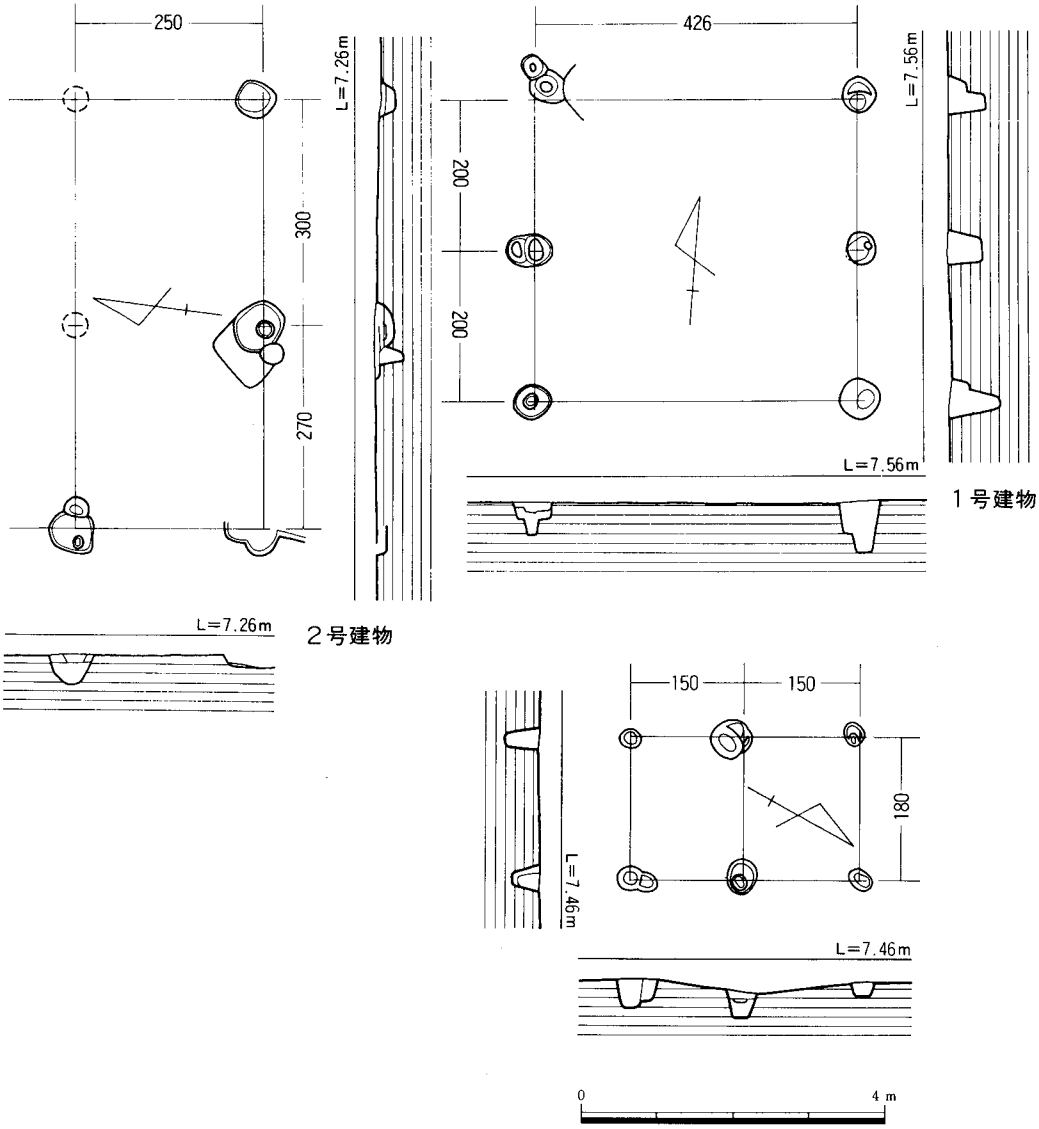


Fig.107　1号～3号掘立柱建物（1/100）

柵　列

第36次調査で検出された3本柱で構成される柵列に接続する。1間幅分の柵列を検出したにとどまった。この柵列の総延長20.2mを測る。1間の長さは柱根を中心として190cmを測る。主柱と支柱との柱間は平均96cmである。当該柵列の方位はN34°30′Wにあって，第36次調査の柵列に対しやや2°ほど西に振れている。

3) 出 土 遺 物

表土出土遺物　(Fig.110，PL.69)

青　磁

椀（9）　高台径5.7cmを測る。龍泉窯系の椀で，内底見込みにはへら彫りの雲文を施す。釉は厚目で，高台まで施す。灰緑色を呈し，胎土は灰白色である。

甕棺墓出土遺物　(Fig.108，109，PL.68)

1号甕棺墓

単棺（3）　口径79.2cm，器高92.8cmを測る。口縁部は粘土を貼り付け，肥厚させる。口縁部下端に刻みを設ける。胴部最大径は下位にある。胴部と頸部との境は屈折を失なっている。境には2条の沈線を施す。胴部にヘラミガキの痕跡をもち，沈線周辺はヨコハケを施す。砂粒を多く含み，淡褐色を呈する。外面に黒斑がある。

石　器　(Fig.113)

石鏃（42）　長さ2.0cm，最大幅1.5cmを測る。剝片鏃で，両面の縁辺調整は丁寧ではない。腸抉りの抉りは浅い。サヌカイト製である。

2号甕棺墓

上甕（1）　口径67.4cm，現存高53.8cm，胴部最大径65.2cmを測る。口縁部は肥高させるが，平坦面を形成しない。口唇部下位に刻目を入れる。口縁部，頸部，胴部には屈折をもつが沈線等はない。胴部は肩が張る。内外面摩滅しており，外面の一部にヘラミガキの痕跡がある。砂粒を多く含み，黄褐色を呈する。外面に黒斑がある。

下甕（2）　口径51.8cm，器高55.5cmを測る。口縁部は肥高し，平坦面を形成する。口唇部下端に刻目を入れる。頸部は如意形を呈するが，口縁部と胴部とに明瞭な境をもたない。底部は非常に厚い。胴部外面はヘラミガキを施す。外面に黒斑がある。砂粒を多く含み，黄灰色を呈する。

3号甕棺墓

上甕（4）　口径55.8cm，器高72.5cmを測る。頸部は如意形を呈し，口縁部は肥厚させる。口

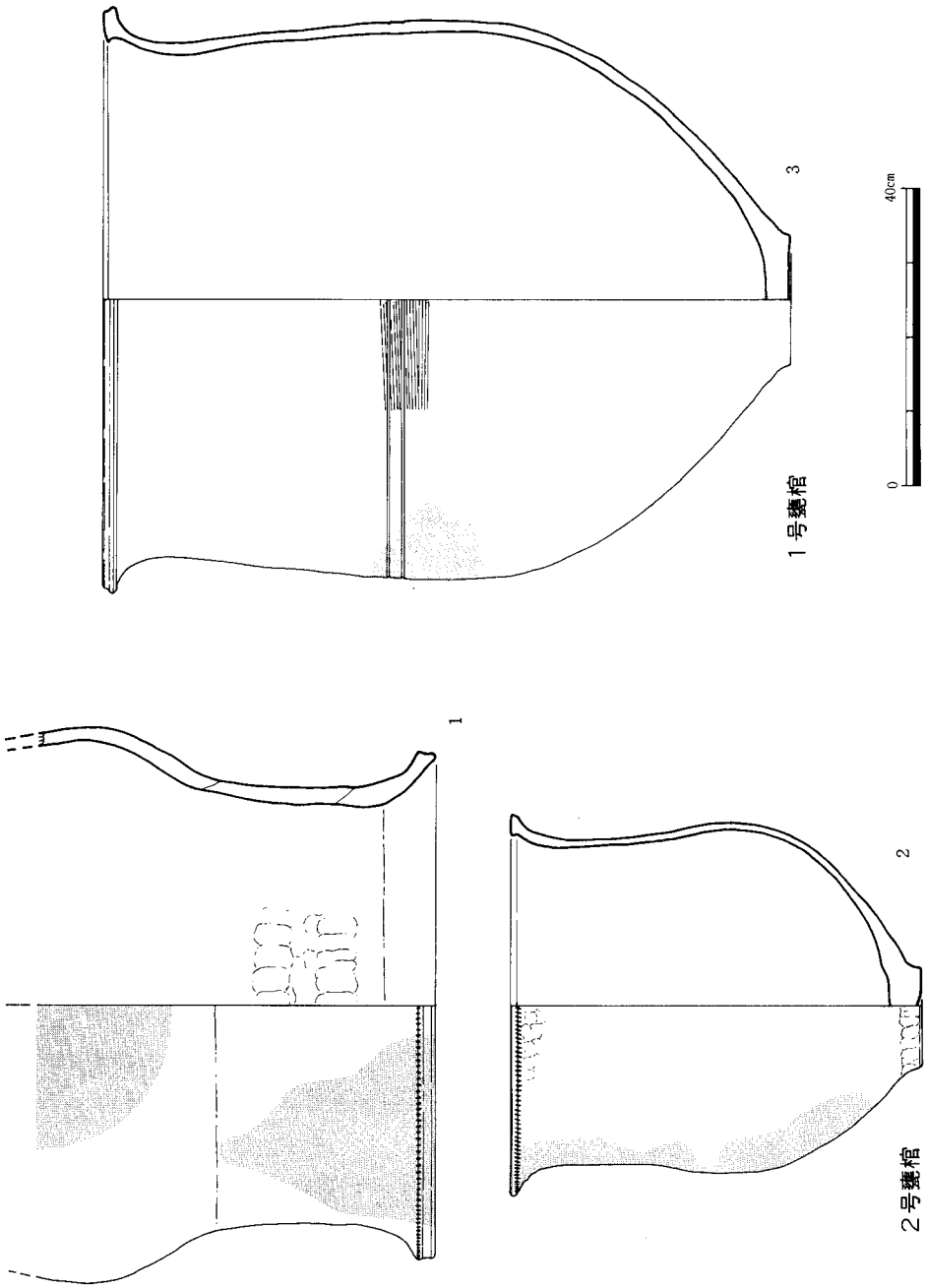


Fig.108　甕棺墓出土遺物　(1/10)

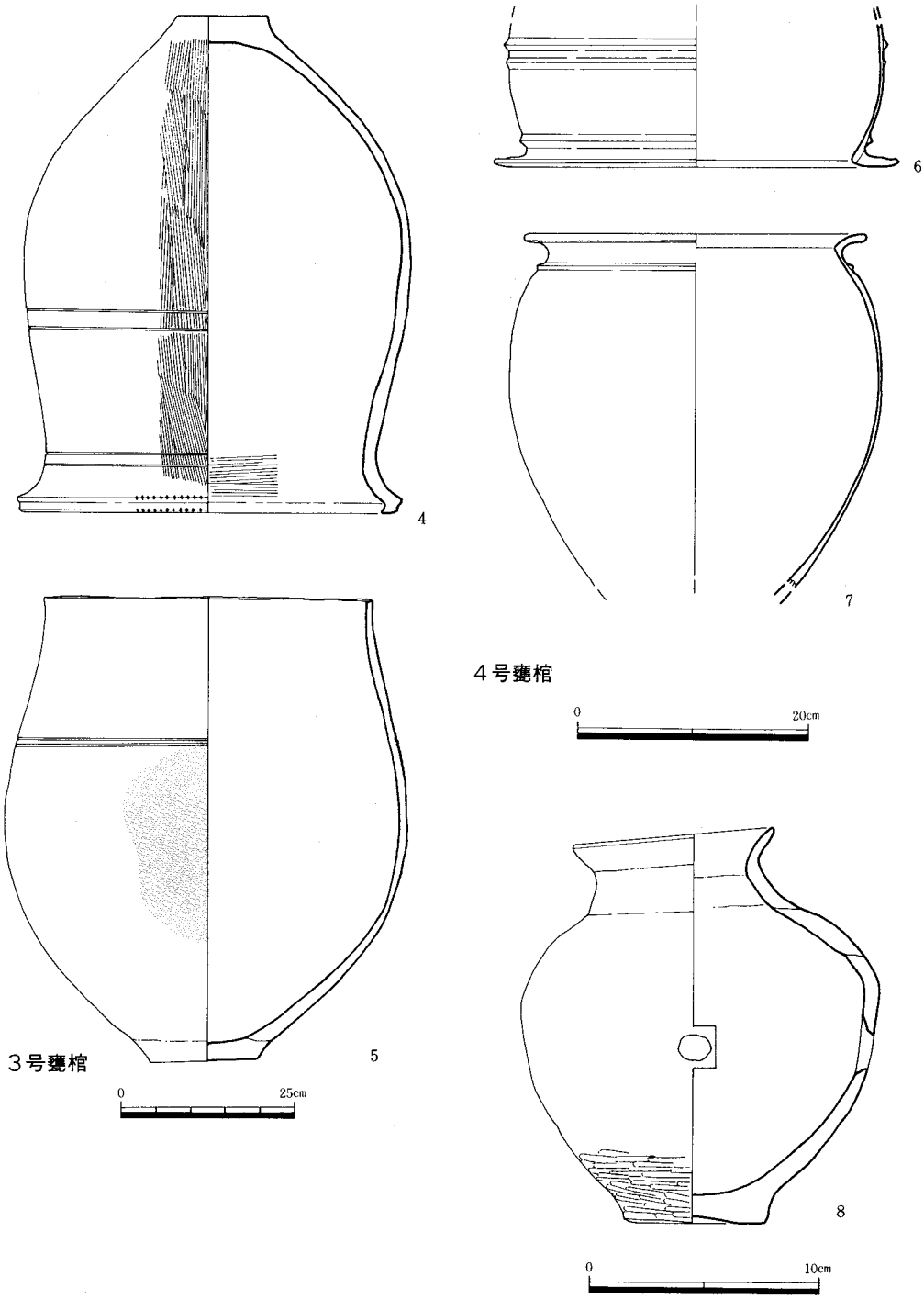


Fig.109　甕棺墓出土遺物（1/3, 1/6, 1/10）

唇部の上・下位に刻目を施す。胴部，頸部，口縁部との境には２条の沈線を施す。外面はタテハケ，口縁部内面はヨコハケ調整である。胎土に砂粒を多く含み，黄灰色を呈する。

下甕（５）　口縁部を打ち欠いている。現存高67.5cm，胴部最大径59.5cmを測る。頸部は如意形を呈し，胴部との境に２条の沈線を施す。外面にヘラミガキの痕跡と黒斑がある。上・下甕ともに金海タイプ古式の甕棺である。

壺形土器（８）　完形品である。３号甕棺墓の副葬品で，口径８.６cm，器高16.7cmを測る。頸部と口縁部，胴部との境は明瞭である。肩部は張っており，胴部中位に径１.４cmの穿孔がある。内外面は摩滅しているが，外面底部周辺にはヘラミガキを施す。胎土に砂粒を含み，黄灰色を呈す。

４号甕棺墓

上甕（６）　底部を欠いている。口径29.8cm，現存高30.3cmを測る。屈折の強い“くの字”形口縁部の直下に１条の三角突帯を貼付ける。最大径は胴部にある。内外面とも摩滅している。胎土に砂粒を含み，黄灰色を呈する。

下甕（７）　胴部下半を欠いている。口径35.2cm，現存高12.5cmを測る。口縁部は逆Ｌ字形を呈し，内面に稜をもっている。頸部に１条，胴部中位に２条の三角突帯を施す。内外面は摩滅している。胎土に砂粒を含み，黄白色を呈する。

１号溝出土遺物　(Fig.110，113，PL.69，70)

陶質土器

器台（12）　破片である。内外面ヨコナデ調整である。外面に２重の連孤紋を施す。孤文の下部に小さな三角突帯を作り出す。胎土は微砂を含み，内外面は暗青色を呈する。溝上位の出土。

壺（13）　口径13.2cmを測る。口縁部の上端をつまみ出し，口唇部は丸味をもたせる。内外面はヨコナデ調整。胎土に微砂を含む。溝中位出土。

いずれも溝の時期を決定する遺物ではない。

白　磁

椀（14～17）　形態より３種に分類できる。Ａ類(14，15)，Ｂ類(16)，Ｃ類(17，18)である。14は口径16.9cmを測る。口縁端部を小さく外反させる。15は高台径6.0cmを測る。断面形は“コ字”形を呈し，内底見込みに沈線を施す。16は高台径６.２cmを測り，断面形がＶ字形を呈する。17，18は玉縁口縁を有する底部である。高台内側を斜めに削る。釉は14，15，17，18が青味を帯びた灰白色，16がやや茶色を帯びた灰白色を呈する。14は貫入がある。17は内底部に砂が付着している。いずれも溝中位より出土。

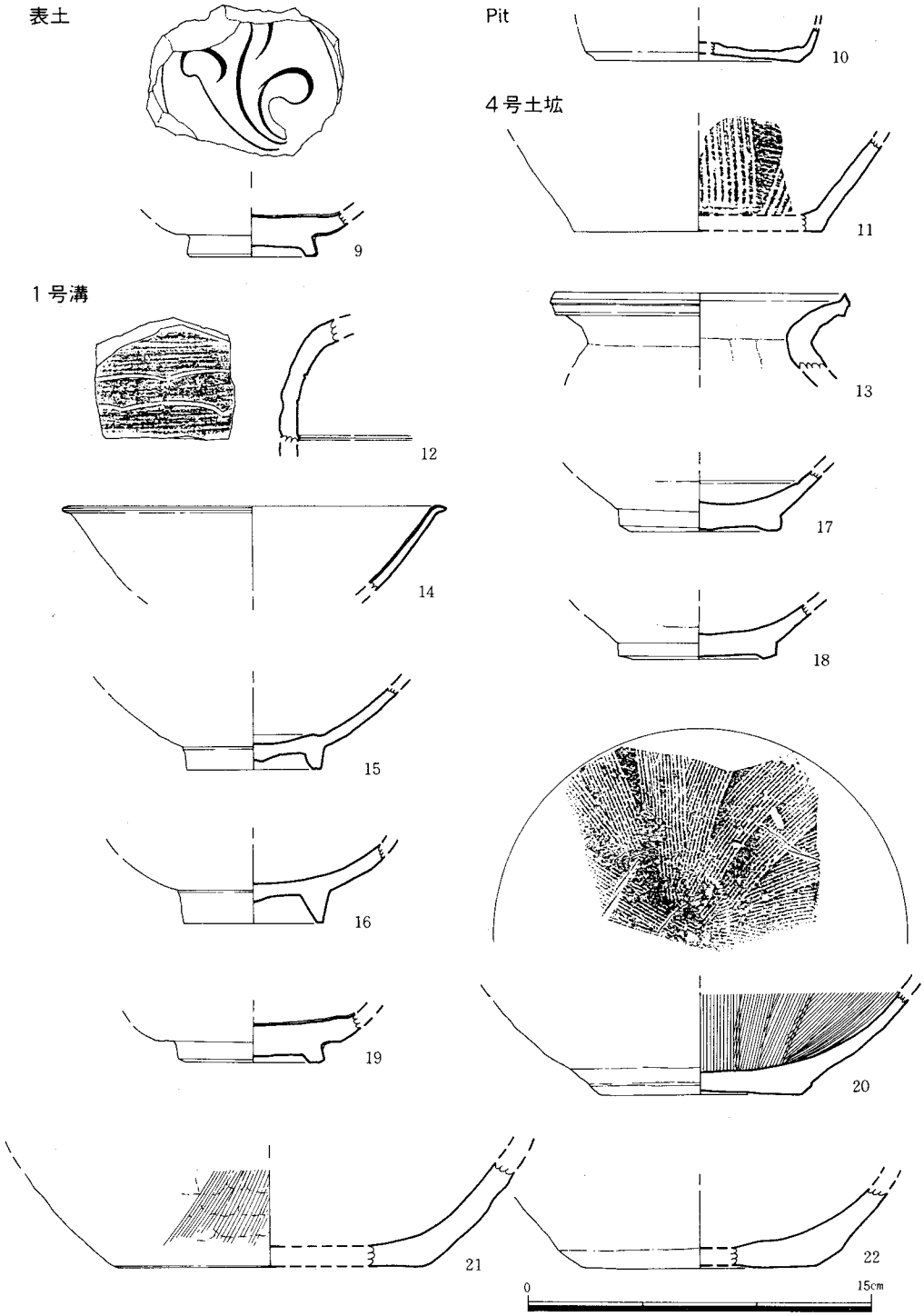


Fig.110　出土遺物（1/3）

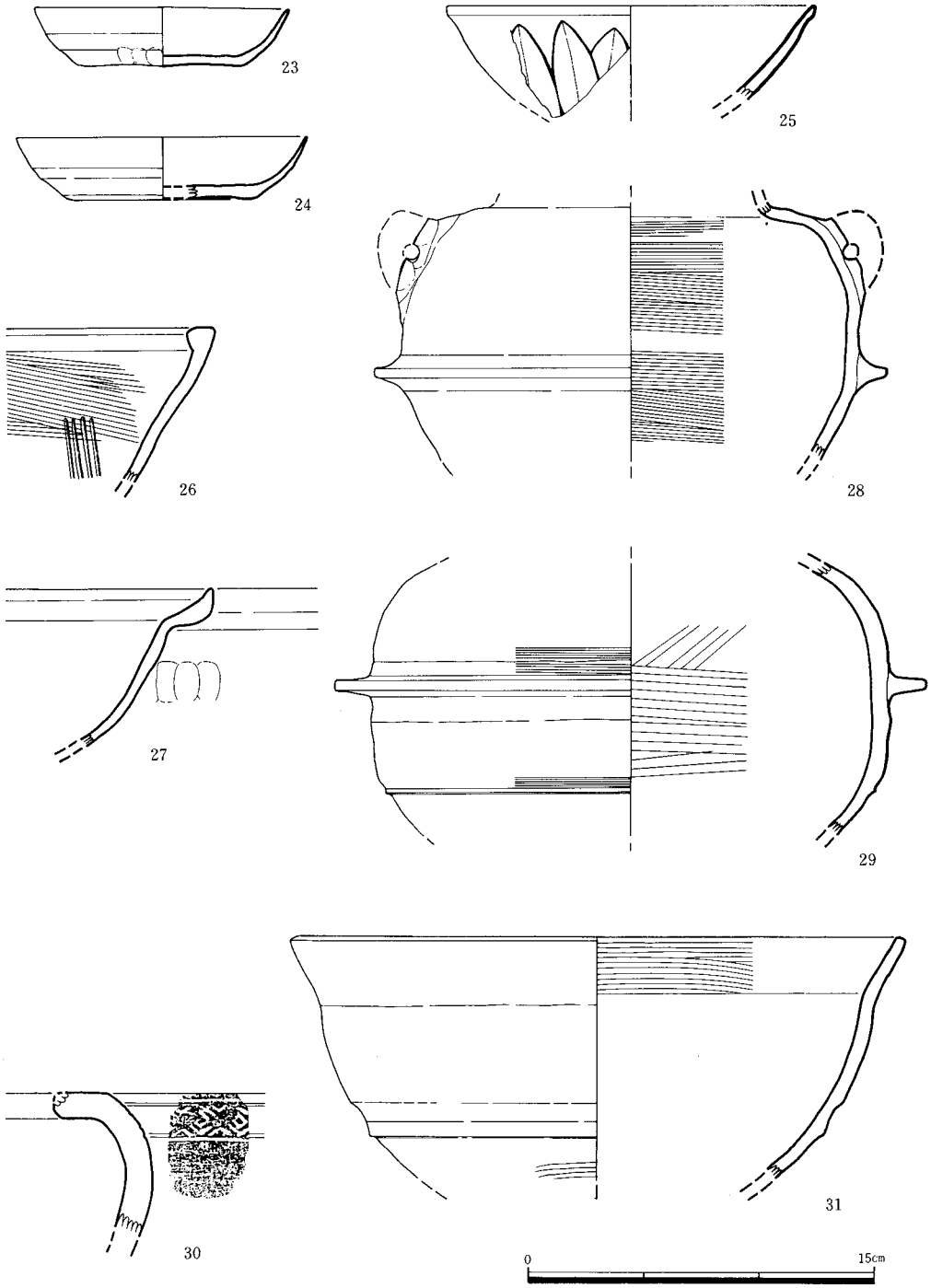


Fig.111　4号溝出土遺物（1/3）

青　磁

椀（19）　底部6.4cmを測る。内外面に厚目の暗緑色釉を施す。外底部は露胎である。

陶　器

摺鉢（20）　底径9.0cm，現存高4.5cmを測る。やや上げ底で，体部は丸味をもつ。内面の条線は13本単位で，内底の中心より始まる。条線は密で，空間が少ない。外面はヨコナデ調整である。胎土に砂粒を含み，焼成は良好。暗茶褐色を呈する。溝中位より出土。備前系の摺鉢には同様な器形と手法のものは見当らない。

捏鉢（22）　底径10.4cmを測る。体部は丸味をもち，内側に2重山形の突帯を設けた口縁部がつく器形である。内底は使用により摩滅している。気泡が多い。胎土に砂粒を含み，外面は暗褐色を呈する。中国製である。溝下層より出土。

瓦質土器

捏鉢（21）　底径13.9cmを測る。体部は丸味をもっている。外面は部分的なタテハケ後ヨコナデ調整を施す。内面は使用により滑らかである。胎土は精良で，外面は暗灰色を，内面は灰白色を呈する。溝上層出土。

須恵質土器

片口　　捏鉢又は摺鉢。破片である。口縁部は肥厚させ丸味をもつ。胎土に微砂を含み，青灰色を呈している。

石　器

石斧（41）　玄武岩質の小型転石を利用した石斧の未製品である。両面の縁辺に粗い剥離を入れ，形状を整えている。刃部も同じく両面から粗い調整を行なう。全体に自然面を残している。

石鍋（39，40）　39は口径26cmを測る。いずれも口縁部は内傾する。外面の口縁部直下に截頭三角形の突帯を作り出す。40は三角形状を呈す。39は器高が低く，内外面は丁寧な作りで，削り痕を残さない。40は外面にタテ長の削り痕を残す。良質の材料を使用している。いずれも灰黒色を呈する。その他破片が4点ある。

4号溝出土遺物（Fig.111，PL.69，70）

土師器

杯（23，24）　糸切り底である。23は口径11cm，器高2.5cm，24は口径12.5cm，器高2.7cmを測る。体部は丸味をもち，薄手である。23は内外面ヨコナデ調整で，外底部に板目が残る。いずれも胎土に砂粒を含み，淡黄褐色を呈する。

青　磁

椀（25）　口径16cm，現存高4.1cmを測る。外面に鎬蓮弁をもつ。釉は厚目で，緑色を呈する。貫入がある。

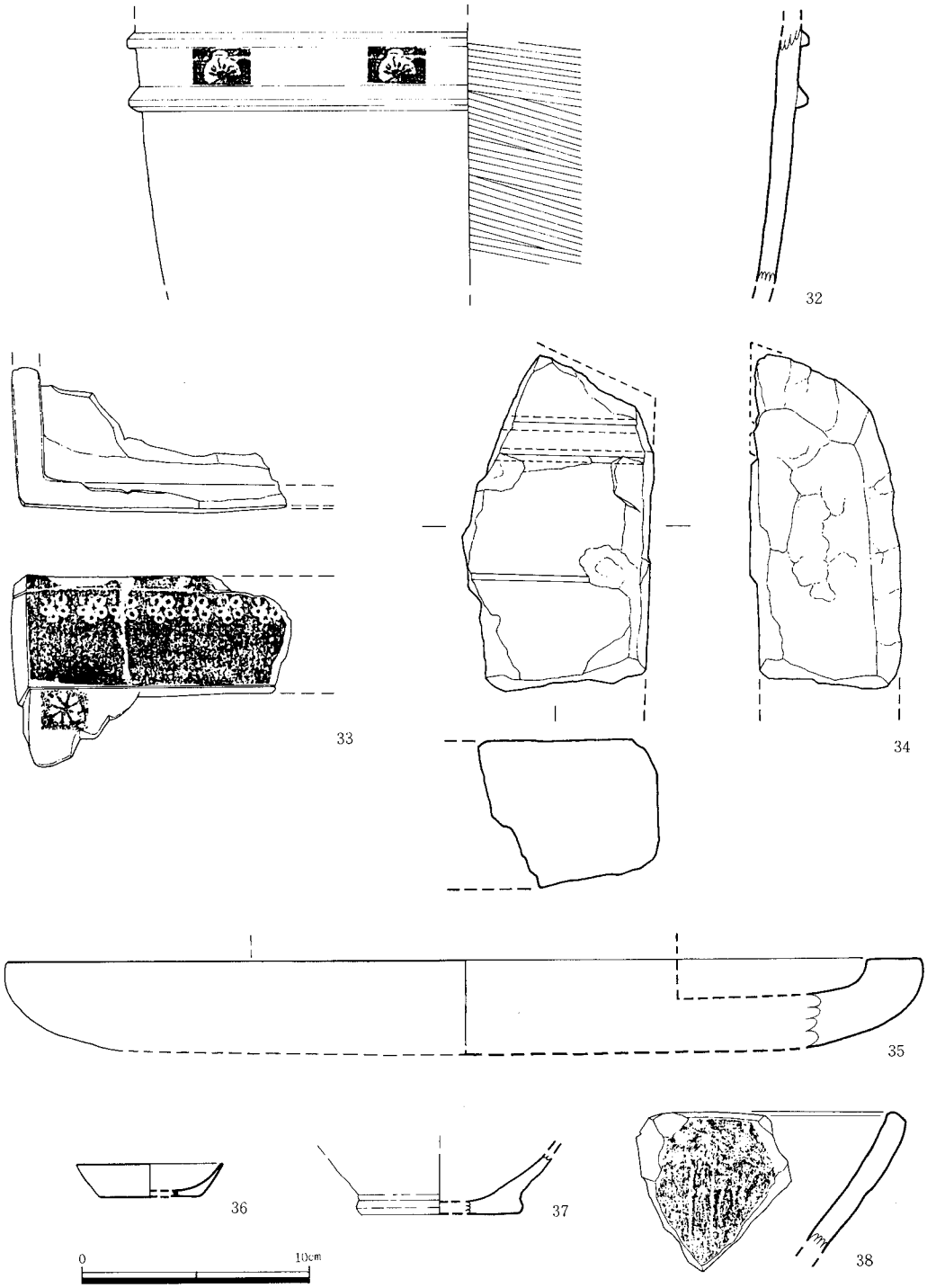


Fig.112　4号・5号溝出土遺物（1/3）

瓦質土器

摺鉢（26）　口縁部の内側を肥厚させ，断面は三角形状を呈する。内面と外面上部にはヨコハケ調整で，9～11本の条線を施す。砂粒を胎土に含み，暗灰色を呈する。

鼎（27）“くの字”形口縁部を肥厚させるが，端部はまだ内側へつまみ出していない。内外面は摩滅している。外面に媒が付着する。胎土に砂粒を含み，暗灰褐色を呈する。

湯釜（28，29）　底部と口縁部を欠く。28の現存高11.2cm，鍔径22.2cm，29の現存高11.8cm，鍔径25.5cmを測る。球体の胴部で，28は肩が張る。肩部に釣手の耳を1対貼り付ける。内面は粗いヨコハケ，外面は細かいヨコハケ調整後ナデ消す。29の下位には小さな三角突帯を作り出す。媒は鍔より下位に付着する。いずれも外面黒灰色，内面暗灰青色を呈する。

火舎（30，32）　2種類ある。30は平面形は円形で，体部は丸味をもち，器高は低い。口縁部は内側へ折り曲げて平坦部を形成している。外面に二直違紋を施す。32は平面形は円形で、筒形を呈する。口縁部直下と底部周辺に突帯を貼り付け，その間に菊花紋を刻印する。最大胴径30.2cmを測る。30，32ともに外面はいぶしとヘラ研磨のため黒色を呈する。胎土は精良である。

土師質土器

鍋（31）　口径26.6cm，現存高10.6cmを測る。口縁部は“くの字”形に小さく外反する。体部は丸味をもち，下位に小さな三角突帯を作り出している。口縁部内面はヨコハケ，外面の一部にヨコハケ調整が残る。外面に媒が付着している。胎土に砂粒を含み，暗茶褐色を呈する。下層出土である。

火舎（33）　平面形が長方形を呈し，器高は低い。底部の各隅には4つの三角形状の脚がついている。外面には口縁部直下に梅花文を，脚に菊花文を刻印する。器高5.0cm，脚高3.4cmを測る。胎土に砂粒を含み，褐色を呈する。

石　器

板碑（34）　碑伝の一種と思われる。破片で，現存高14.8cm，厚さ6.5cmを測る。三角頭部を呈し，額と頭項部を碑身よりも高く削り出している。砂岩製である。外面は焼けている。

茶臼（35）　下臼の受け皿部分である。口径40.5cmを測る。内外面は丁寧なケズリを施す。石材に気泡がみられる。砂岩である。その他凝灰岩製の破片が1点ある。

5号溝出土遺物　（Fig.112，PL.69，70）

土師器

皿（36）　口径6.5cm，器高1.5cmを測る。糸切り底で，体部は強く開く。胎土に砂粒を含み，黄灰色を呈する。

青　磁

椀（37）　越州窯系である。復元底径7.4cmを測る。外面は露胎で，内面は灰緑色釉を施す。

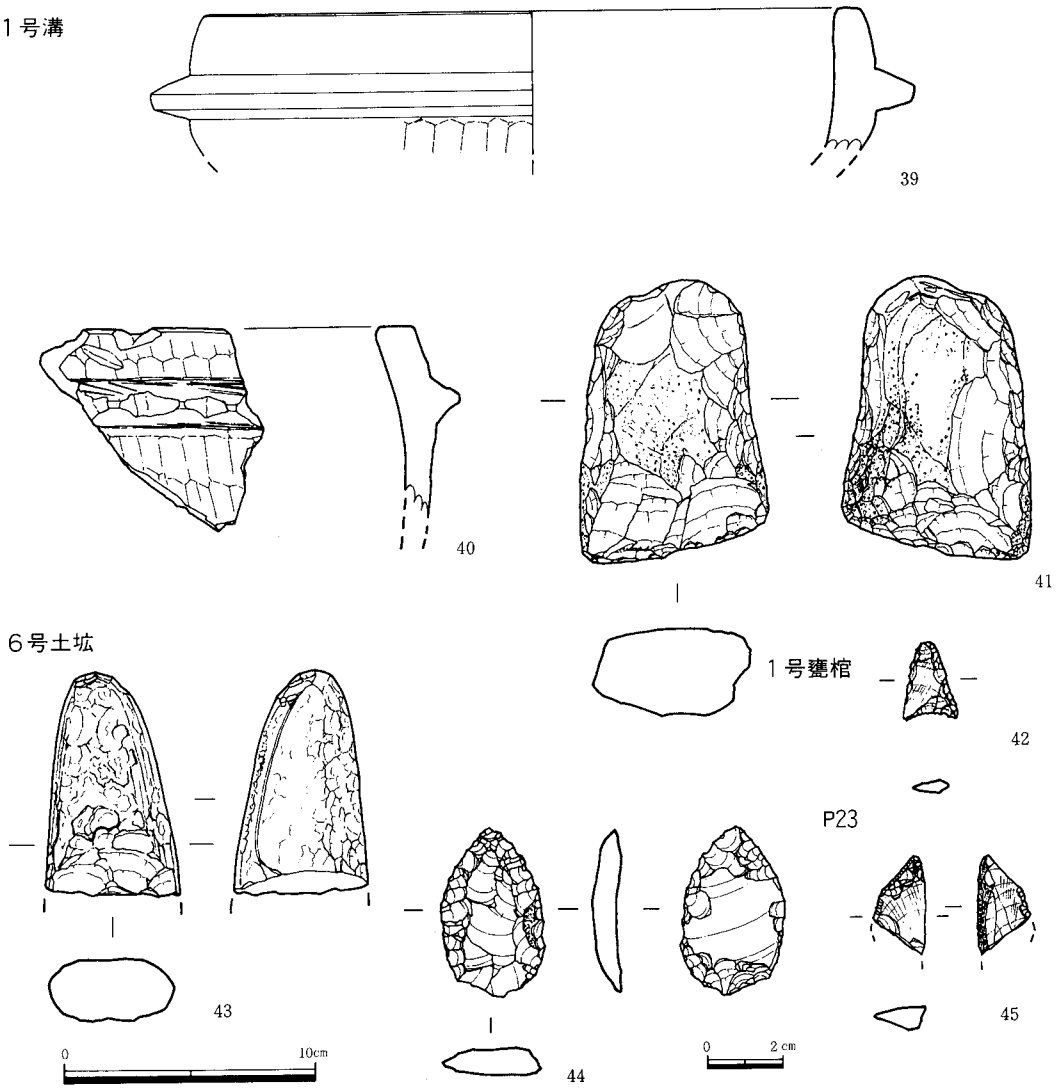


Fig.113　出土遺物（1/3，1/2）

瓦質土器

捏鉢（38）　内面はヨコハケ調整で，4本以上の条線を施す。砂粒を含み，暗灰色を呈する。

4号土坑出土遺物　（Fig.110，PL.70）

瓦質土器

摺鉢（11）　底径11cmを測る。平底で，開いた体部の内面には9本単位の条線を見込みより施す。内外面ヨコナデ調整である。焼成は良好で，灰色を呈する。

6号土坑出土遺物 (Fig.113, PL.68)

石　器

石斧 (43)　いわゆる乳棒状を呈した磨製石斧である。刃部を破損している。外面は風化のため調整不明。現存長 9.1 cm，最大幅 5.3 cm，最大厚 2.5 cmを測る。石材は安山岩系である。

石鏃 (44)　未製品で，基部の調整はできていない。大型の剝片を利用し，両面の調整は丁寧である。三角鏃の形態を呈している。黒曜石製である。

Pit出土遺物 (Fig.110, 113, PL.68)

須恵器

杯 (10)　底径 9 cmを測る。底部は上げ底で，体部は丸味をもつ。内底はナデ，体部はヨコナデ調整である。青灰色を呈する。P 23出土。

石　器

ナイフ型石器 (45)　半折している。長さ 4 cm，最大幅 2 cm，最大厚 4 mmを測る。片面に自然面を残している。刃部の調整は丁寧である。

4) 小　結

今回の調査は西側調査区の第36次，44次調査，及び東側の第64次調査の補足的な発掘調査である。その結果，従来の通り弥生時代～近世の各遺構を検出した。大きく5期に分けられる。

Ⅰ期は6号土坑である。縄文時代の土坑としては第5次調査（高畑）の中期～晩期が知られているが，当該土坑は後期～晩期が比定される。周辺では初見である。

Ⅱ期は甕棺墓である。この周辺の甕棺墓の墓域はほぼ50m四方に推定されるところだが，今回の前期甕棺の検出により，甕棺墓群が前期末から後期に至ることが判明した。[註1] 前期の甕棺墓は型式より1号甕棺が2号・3号甕棺より後出する。1号甕棺は金海式甕棺の古期に，2号・3号甕棺は板付Ⅱ式併行期の新しい時期が比定できる。

Ⅲ期は中世であるが，1号溝より出土した遺物は13世紀代に比定できるものがある。但し，20の摺鉢は条線を全体に入れており，国産とすれば備前等の古い鉢にはみられない。この摺鉢の時期比定によっては溝の時期を下らせることになる。

Ⅳ期の4号溝は第36調査，第64次調査でも検出されており，朝鮮陶磁器や明の赤絵の出土がある。大略16世紀前～中頃を比定している。この溝は屋敷地の区画溝と思われるが屋敷に伴なう建物を溝の内側に見い出せない状況にある。

Ⅴ期は2号・3号溝を中心とした遺構である。これらの溝は近世の地割り溝と思われるが定かではない。

註1．福岡市教育委員会「有田・小田部第4集」1983
註2．福岡市教育委員会「有田・小田部第5集」1984

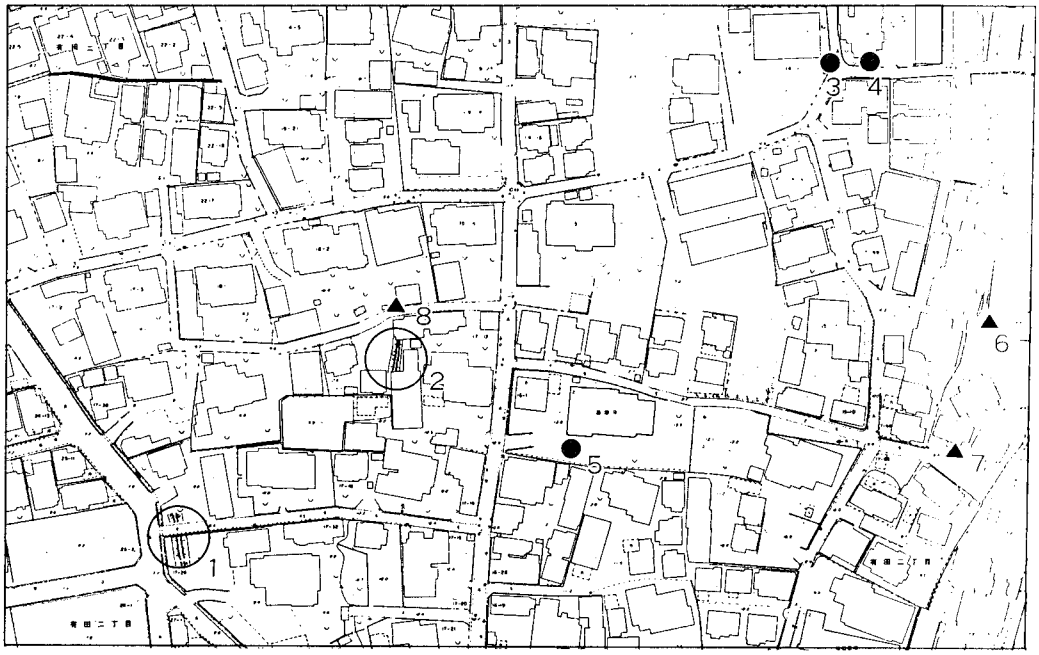
10．有田・小田部地域内の分布調査資料

有田・小田部の台地は，１万年以上も昔の旧石器時代にすでに人々の生活が営まれ，以後絶える事なく人々の生活の場として利用されてきた。特に室町時代には荒平城主小田部氏の里城として，小田部城が当地に築かれ，早良平野の交通の要所として繁栄を築いたが，天正８年（1581）に荒平城が落城し，小田部氏滅亡と共に当城も廃絶し，今日に至った。現在においても，当台地上には小田部城を中心とする中世，近世の多くの遺構・遺物が現存しており，当地区の緊急発掘調査と共にそれらの現状確認調査も重要となった。

今回は特に有田の集落の中心である有田２丁目地内に存在する土墨・古井戸・石塔類について若干の報告を行なう。その他，姪浜より出土した遺物について資料として収録した。

1）土　墨

土墨は有田２丁目17―32番地坂口武雄氏宅（１号土墨）と同２丁目22―３番地 松尾典雄氏宅（２号土墨）の敷地内に２ケ所現存する。昭和56年３月２～４日にかけて両土墨の現況地形測量調査を実施した。



１．１号土墨　　４．１号井戸　　７．散布地第２地点
２．２号土墨　　５．２号井戸　　８．散布地第３地点
３．第45次調査検出井戸　　６．散布地第１地点

Fig.114　土墨及び散布地の分布図（1/1500）

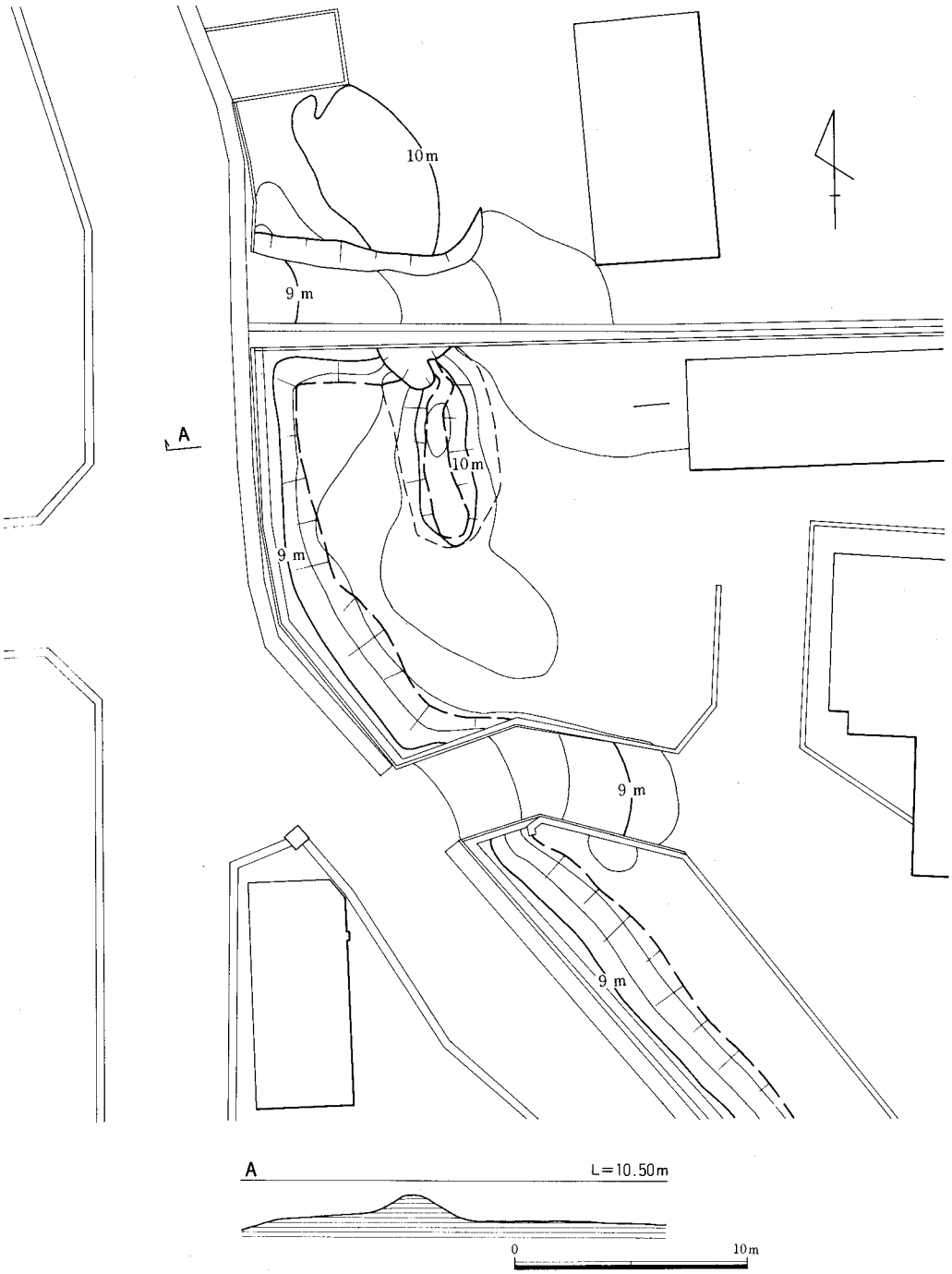


Fig.115　1号土墨測量図（1/300）

1号土墨(Fig.115, PL.71)

当土墨は坂口武雄氏方敷地内に所在し,有田・小田部の台地の南端基部，西に低地を臨む台地縁辺に立地する。土墨は，かつては当敷地西側台地縁辺に沿って南北方向に全体に亘って存在したが，度重なる開発によって削平を受け，今では同敷地内の北西隅にしか存在せず，土墨の遺存状態は不良である。土墨の最も残りのよい部分で長さ9m，下部幅4～4.3m，上部幅1.2～1.5mを測り，北側隣接地の土墨の痕跡と思われる部分を入れて約20mとなる。土墨の最大標高は10.39mを測り，台地下道路面からの比高2.4m，台地側からの比高0.9mを測る。かなりの削平及び盛土の流出が考えられる。土墨の断面形はほぼ台形を呈す。

当土墨の西側台地下（現道路面）には当地区でホカヤネと呼ばれる幅2m，長さ160m程の濠が存在し，昭和48年に埋めたてられたと言う[註1]。昭和57年1月に行われた西福岡高校北側の第68次調査では，濠の一部を検出した。ホカヤネが幅2m以上，深さが2m以上を測るもので，箱薬研掘状の大きな水濠であっ

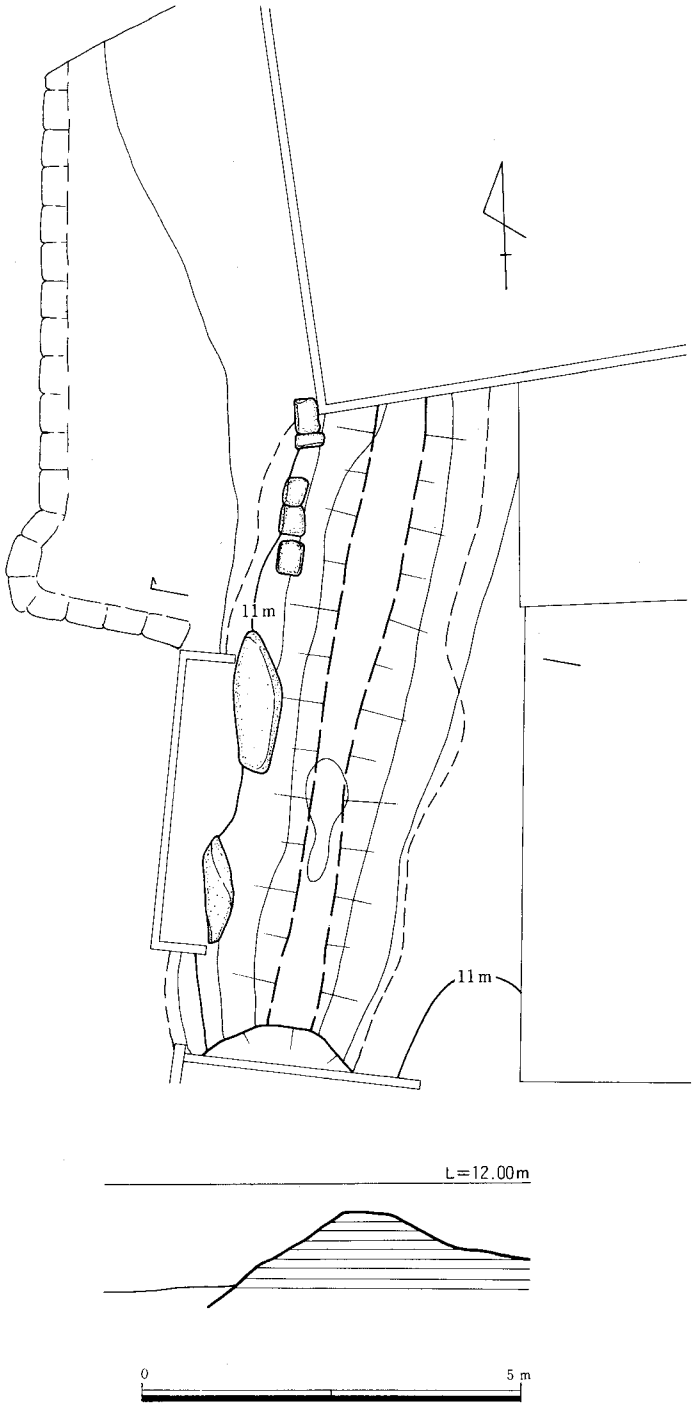


Fig.116　2号土墨測量図（1/100）

た事を確認した。濠内堆積土は青灰色粘土が主流で常に水がたたえられた状況を示していた。土墨の内側は旧字名を馬場と称し，馬術を行なった所といわれる。土墨周辺からは遺物は採集出来なかった。

2号土墨 (Fig.116, PL.71)

松尾典雄氏宅敷地の北西隅に所在する。土墨は東側・南側・北側の三方が建物で囲まれ，西側も屋敷神の祭壇で削られるなど残存状態はよくない。昭和40年に始まった区画整理事業前迄は，土墨は現在より更に北側まで続いて存在したという。

土墨の現存長は9m，下部幅3m，上部幅0.3～0.5mで，土墨の断面は台形を呈す。土墨の最大標高は11.75mを測り，現地表面からの比高は西側で1.1m，東側は0.75mを測り，若干東側が高くなる。土墨主軸線はN12°Eに取り，やや東に寄る。土墨の規模及び立地状況から考えて，城内の一つの区画を示し，土墨上部には築地等があった可能性もある。又土墨の西側には空濠が存在したかもしれない。当地も旧字名馬場の地域内に入る。

2号土墨表採遺物 (Fig.117, PL.71)

土墨上より五輪塔の水火輪の部分を表採した。当資料は砂岩材の一石作りである。水輪部は断面が楕円形，火輪部が方形を呈す。水輪部の表面にはキリーク（阿弥陀如来）の梵字を薬研彫りに表出している。表面全体は研磨調整を施されているが，熱をうけたためか，部分的に赤変しており，表面はかなり破損している。地輪と風輪との接続部は打ち壊されたような状態を示している。現存高21.8mを測る。

2) 古井戸

石組みの古井戸が2カ所現存する。いずれも現在では飲料水としては利用されていない。昭和56年度の第44次調査検出の井戸構造と類似する。

1号井戸 (Fig.114, PL.72)

有田2丁目11—16番地松尾氏方に所在する。現在、井戸の半分が建物の下になっている。井戸の上部縁辺はセメントで固められ，コンクリートの円筒形の井側がかぶっている。当地点の標高は約9m位で台地の緩やかな斜面上に立地する。井戸の内径は0.5mを測り，深さは不明。水位は現地表下約1.8mの所にある。水質は良好で，つい最近迄飲用していたが，現在では汚染が進み，雑用水にしか利用されていない。石積みの構造は10～30cm前後の転石を小口積みで，円筒状に積み上げている。

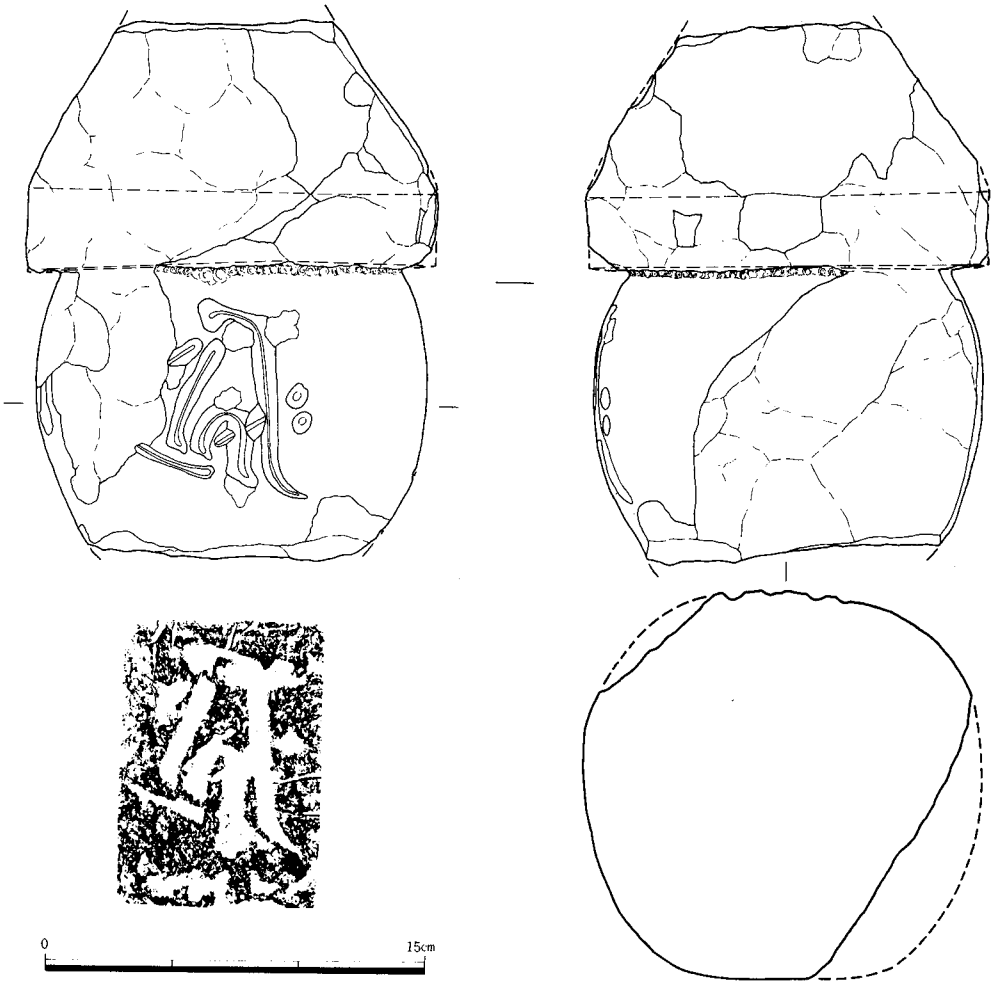


Fig.117　2号土塁出土石塔（1/3）

2号井戸　(Fig 114　PL.72)

有田2丁目16－1番地，真宗西應寺境内に所在する。地区では殿様井戸と呼んでいる。井戸は現在使用していない。井戸はやや不整円形を呈し，内径は55～62cm，深さは5m以上を測る。[註1] 水位は現地表下4mの所にある。井戸の構造は10～30cm前後の転石を小口積みで，円筒状に積み上げる。一番上には長方形の板石を井桁状に組み合せている。

当地点は有田の集落内でも周囲より一段と高い所に立地し，小田部城の本丸と推定される所である。尚，他に五輪塔や石像も散布する。

3) 石塔類散布地

有田2丁目の集落内には至る所で，石塔類の散布が認められる。主な散布地3カ所について

述べる。

散布地第1地点 (Fig.114 PL.72)

有田2丁目85番地 古賀龍雄氏敷地内南西の隅に所在し，昭和56年に実施した第42次調査の際に発見した。板碑類や五輪塔の一部分が無造作に寄せ集められていた。

散布地第2地点 (Fig.114 PL.72)

有田2丁目7番地。第1地点より約50m南の地点に所在する。板碑類の破片を寄せ集め，その中で一番大きな板碑の破片を地蔵仏として祀り，信仰の対象としている。

散布地第3地点 (Fig.114)

有田2丁目23－8番地 坂口正敏宅の屋敷神の祠に宝篋印塔の笠の部分が置かれていた。砂岩製でかなり磨滅がひどい。隅飾りの部分を一部欠失する。現存規模は23cm×19cm，現存高16cmを測る。

4) 寄贈遺物

姪浜出土資料 ① (Fig.118－1～7)

福岡市早良区有田在住の松尾孫一氏所蔵の遺物である。出土地は五島山との事であるが，詳しい場所は不明である。いずれも完成品である。

須恵器

杯身（1，2） 1は口径12.4cm，器高4.2cmを測る。蓋受け部は小さく，上向きである。立上りは約1.2cmを測り，内傾する。端部はやや角ばっている。体部の約½にヘラ削りが施される。ヘラ削りの方向は逆時計回りである。外面は摩滅風化しており，暗青色を呈している。2は口径12cm，器高4cmを測る。蓋受け部は水平につまみ出し，立ち上り内傾し，端部は丸味を帯びる。立ち上りは器肉が厚く，約0.8cmを測る低いものである。ヘラ削りは体部の約⅔迄施されるが，方向は摩滅のため不明である。色調は暗青灰色を呈している。天井部にはヘラ記号が認められる。

杯蓋（3，5） 3は口径10.4cm，器高3.5cmを測る。天井部，体部ともに丸味をもっており境は不明瞭である。口縁端部は細く，仕上げはやや内弯させている。体部のヘラ削りは約¾迄施され，削りの方向は時計回りである。天井部にヘラ記号が認められる。色調は灰色を呈する。5は口径9.5cm，器高2.8cmを測る。天井部はやや凹みを呈し，体部は丸味をもっている。口縁端部は細く仕上げている。内外ナデ仕上げが行なわれる。天井部にヘラ記号が認められる。暗

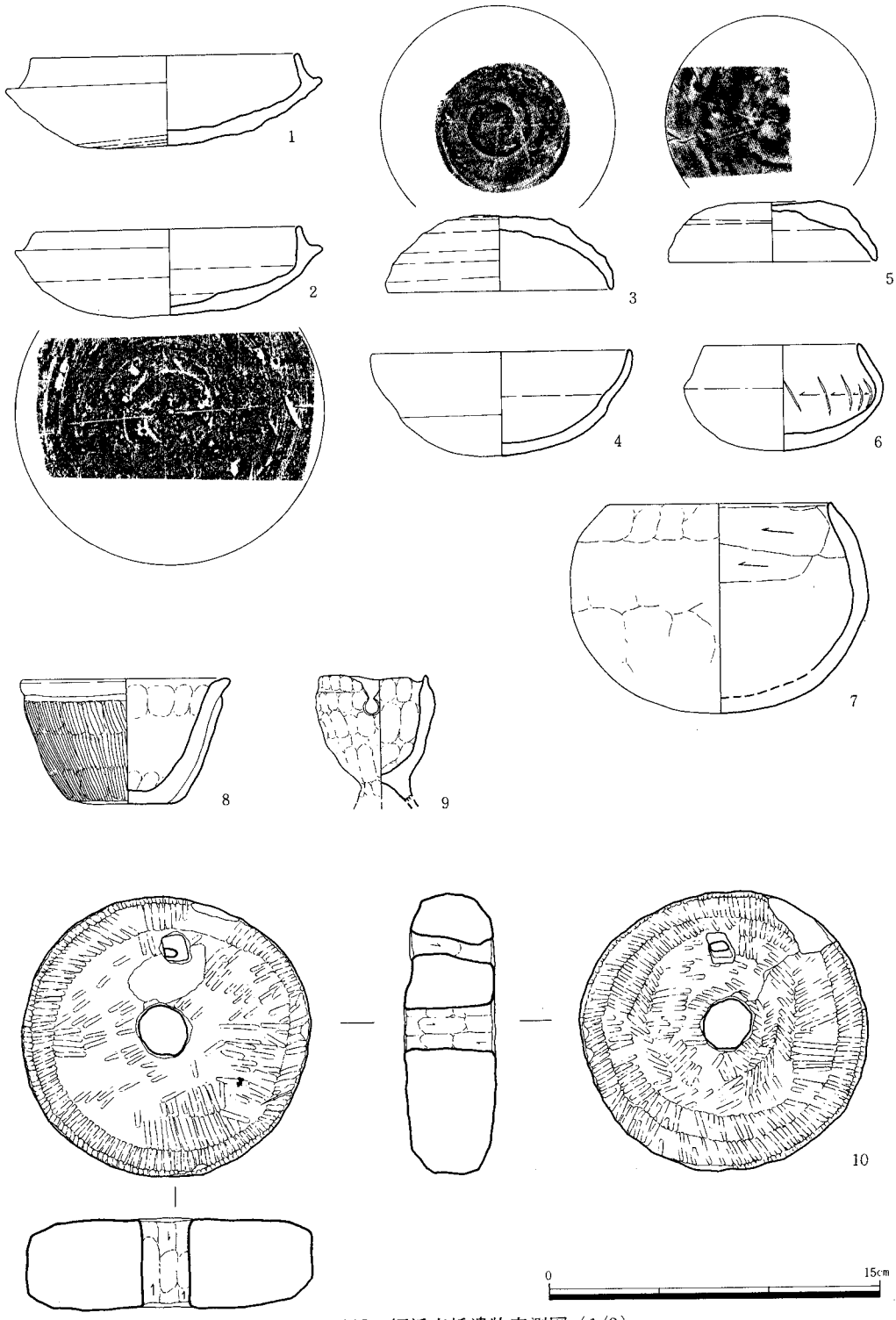


Fig.118　姪浜表採遺物実測図（1/3）

灰色を呈する。

土師器

杯（4，6）　4は口径11.8cm，器高4.8cmを測る。底部は丸く，体部と口縁部の境に緩い段をもち，内面にかるく稜をもっている。口縁は細く，内弯して立上る。全体に器壁が薄く，内面は丁寧なナデ仕上げである。外面はヘラナデが施される。色調は暗黄褐色を呈する。6は口径7.2cm，器高4.8cmを測る。底部は丸く，口縁との境は強く張った肩を形成する。口縁は内傾し，内面がわずかに肥厚する。体部内面にはヘラ削り状のヨコ方向の仕上げ調整痕が認められる。外面は剝落風化している。色調は茶褐色を呈している。

椀（7）　体部は球体を呈しており，口径10cm，器高9.5cmを測る。口縁端部はつまみ出す様に細く仕上げ，小さく外反させる。外面は指圧整形痕を残し，内面上位にはヨコ方向のヘラ削りが認められる。内外面剝落が著しい。色調は暗い黄土色を呈している。

姪浜出土資料　②　(Fig.118－8～10)

姪浜3丁目5－18番地，西嶋義記氏宅の住居改築工事中に古墳時代の土師器2点，石錘1点が出土した。出土状態は不明であるが，いずれも砂層から出土している。

土師器

手捏ね土器(8，9) 8はほぼ完成品である。底部は平底で，胴部はやや外方に緩やかに立上り，口縁部はくの字形に外反する。器壁は厚く1cmを越える。外面には1～2mmの間隔でハケ目が入り，内面は指ナデ調整で指圧痕が残る。色調は灰黄褐色を呈し，焼成は良好。胎土もほぼ良好である。口径9.5cm，器高5.7cmを測る。

9は製塩土器である。脚部が欠失し形状は不明であるが，今山の例[註2]に見られるろうに脚が短くハの字状に開くタイプであろう。口縁部は段をもって直立し，口縁直下に直径6～7mmの孔が穿たれている。器表全体に指圧痕が残る。色調は製塩に使用されたためか赤褐色を呈し，器壁も固く緻密である。口径5.0cm，現存高5.5cmを測る。

石製品

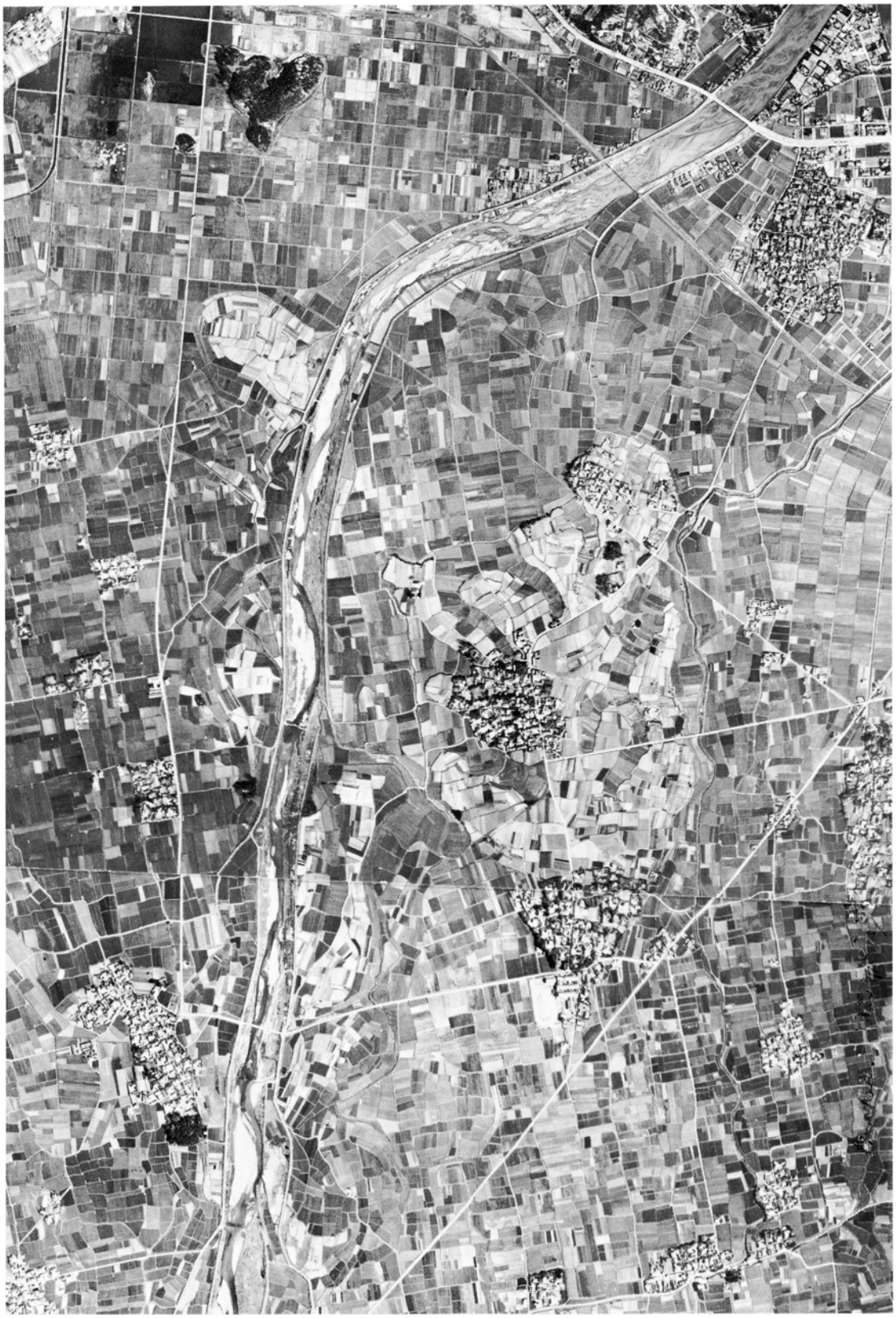
石錘（10）　直径13.0cm，最大径3.9cmを測る。中央に直径2.5cmの円形の孔，その中間に直径1cm程の方形の孔が幅約1cmののみで両側から穿たれている。器形全体を幅3mm程の細いのみで丹念に成形した後，全体に大まかに研磨を加えている。当石錘の使用に際しては，2つの孔をひもで結んで使用したのであろうが，明瞭なひもずれ痕が認められず，石錘以外に使用された可能性もある。当石錘の石質はザクロ石角肉石，色調は淡い緑青色を呈す。

註1．山口律「有田郷土史」1973
註2．福岡市教育委員会「今山・今宿遺跡」1981

図　　版
PLATES

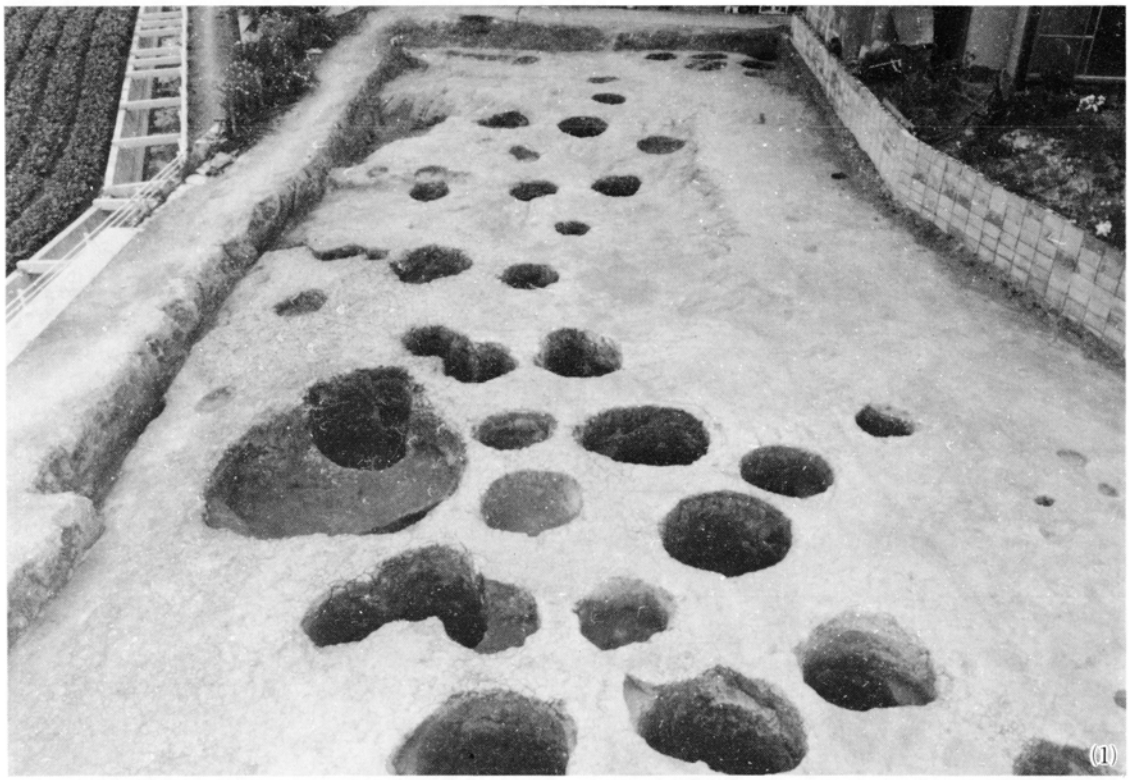
作業風景（昭和57年６月　第66次調査）

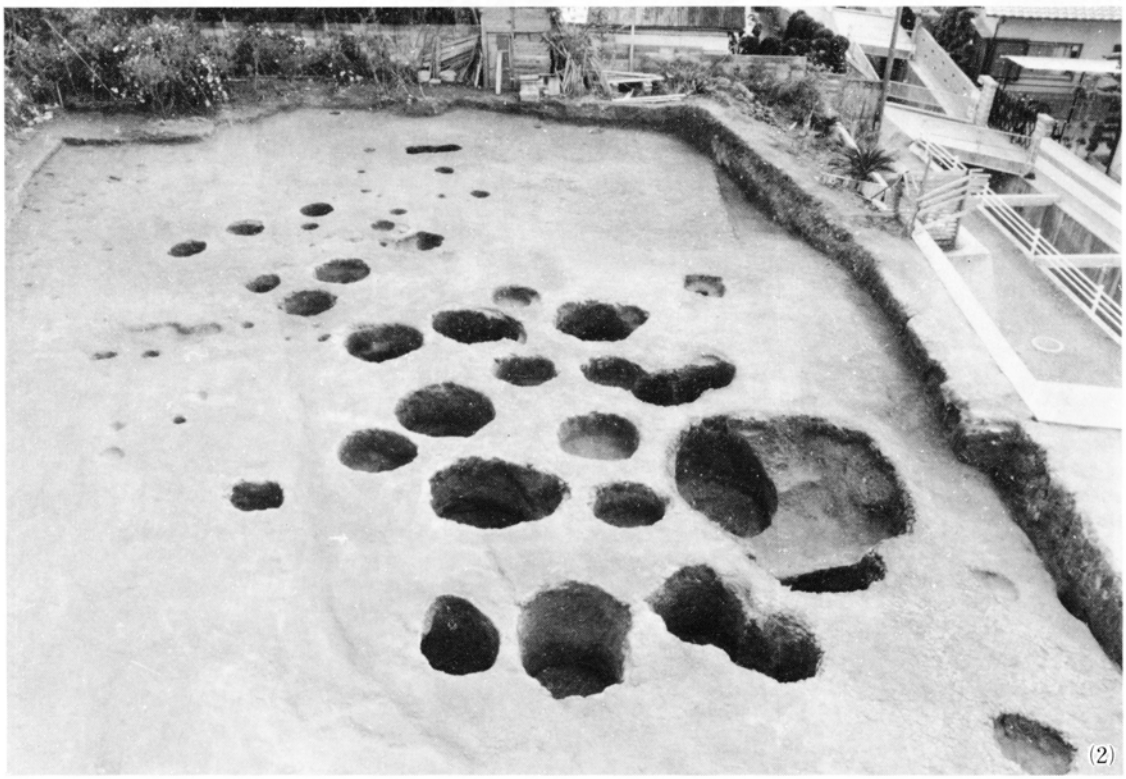
有田・小田部周辺航空写真（昭和50年撮影）



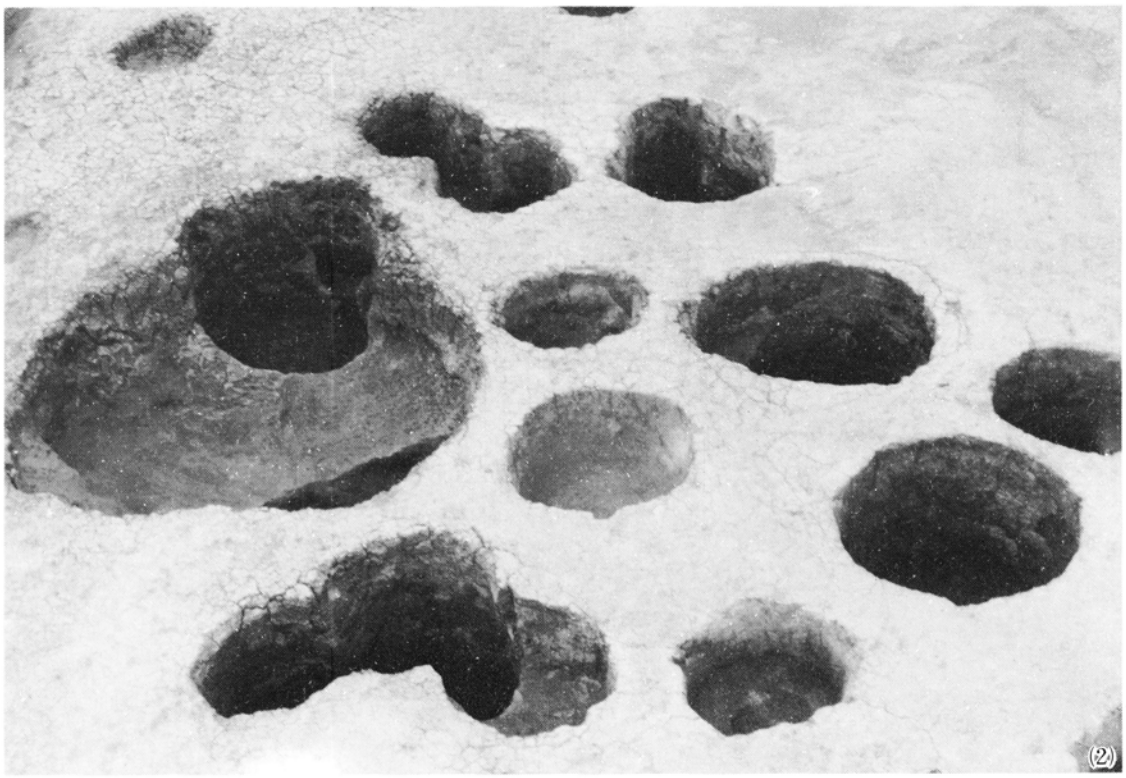
有田・小田部周辺航空写真（昭和21年米軍撮影）

第5次調査

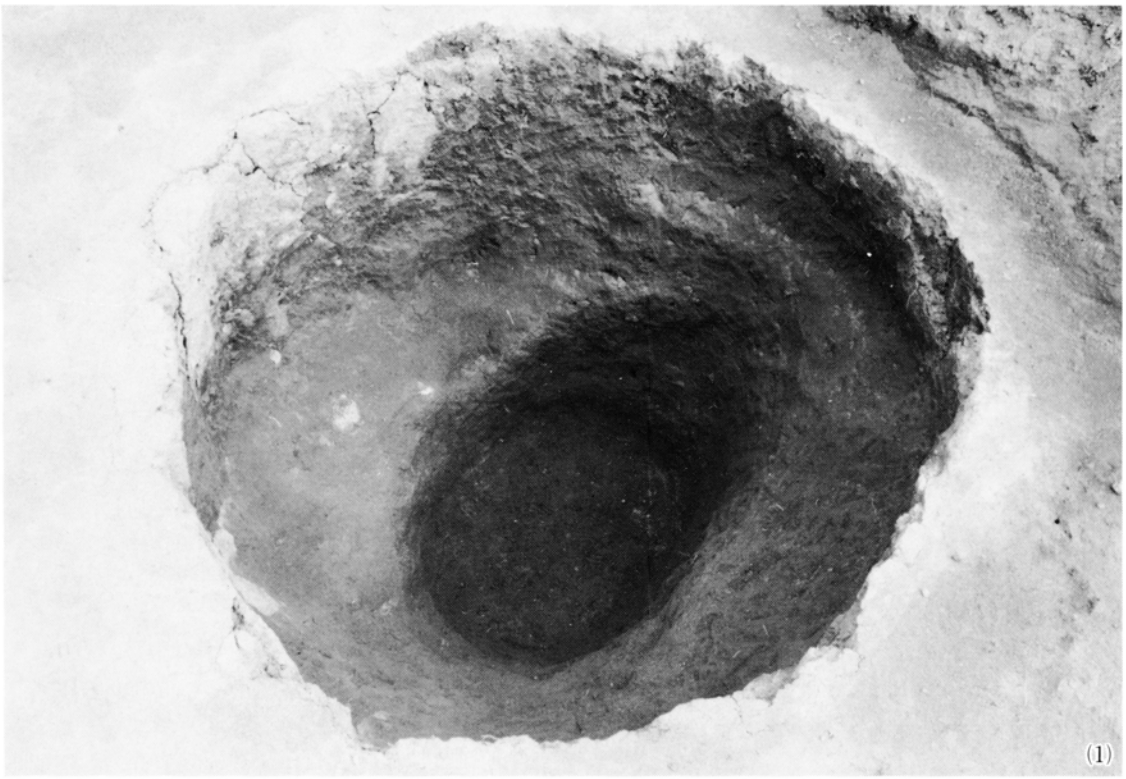




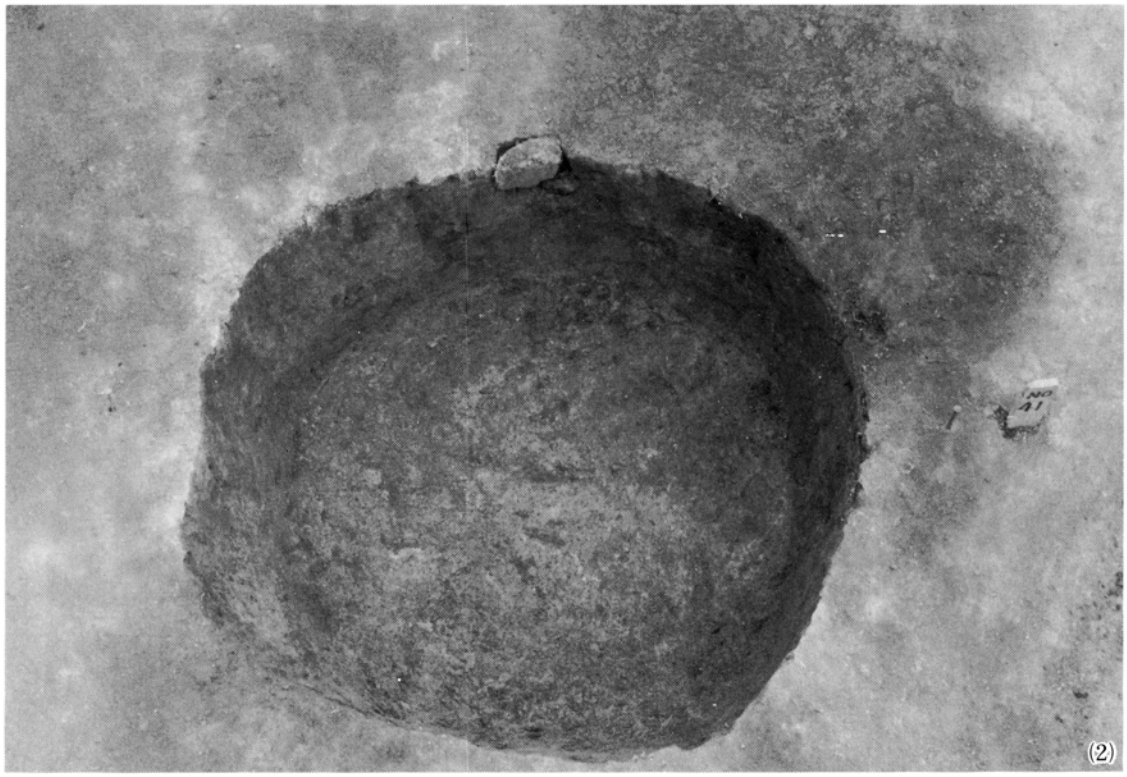
(1)　第５次調査区（南より）　(2)　第５次調査区（北より）



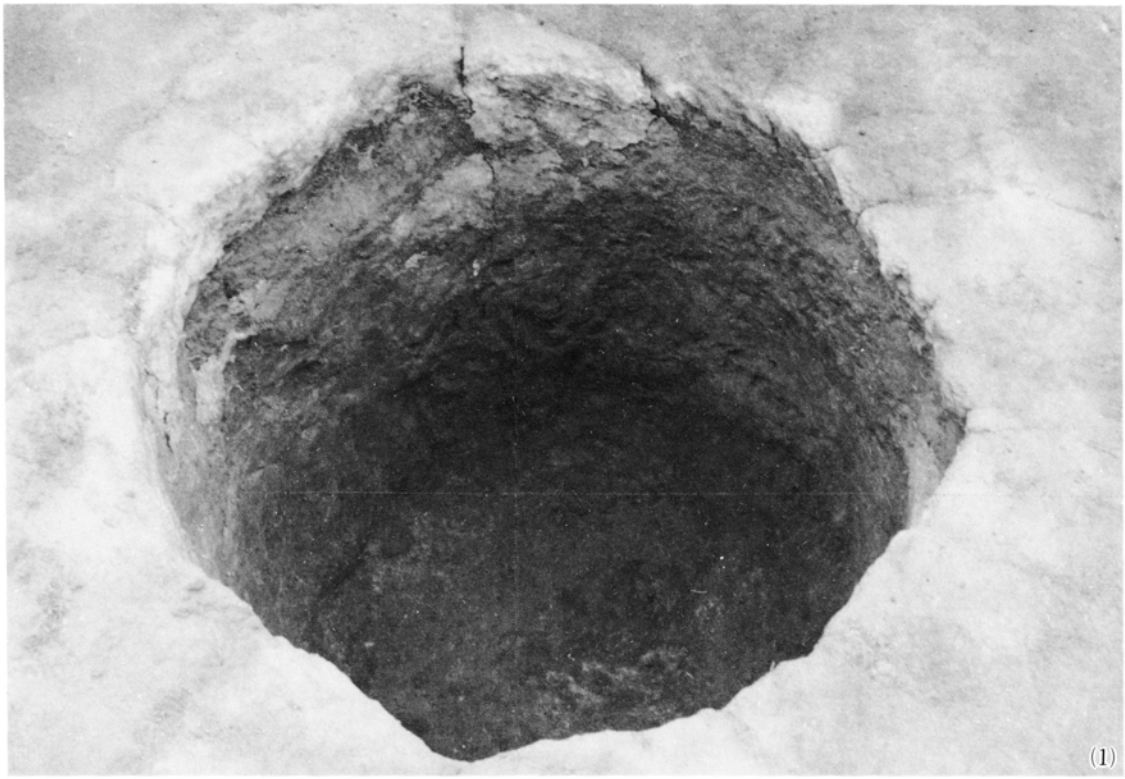
(1) 貯蔵穴群（北より） (2) 貯蔵穴群（南より）



(1)　第 7 号貯蔵穴　(2)　第29号貯蔵穴



(1)　第 8 号貯蔵穴　(2)　第41号貯蔵穴



(1)　第15号貯蔵穴　(2)　第23号貯蔵穴

(1) 第26号貯蔵穴 (2) 第27号貯蔵穴

(1) 第38号貯蔵穴 (2) 第32号貯蔵穴

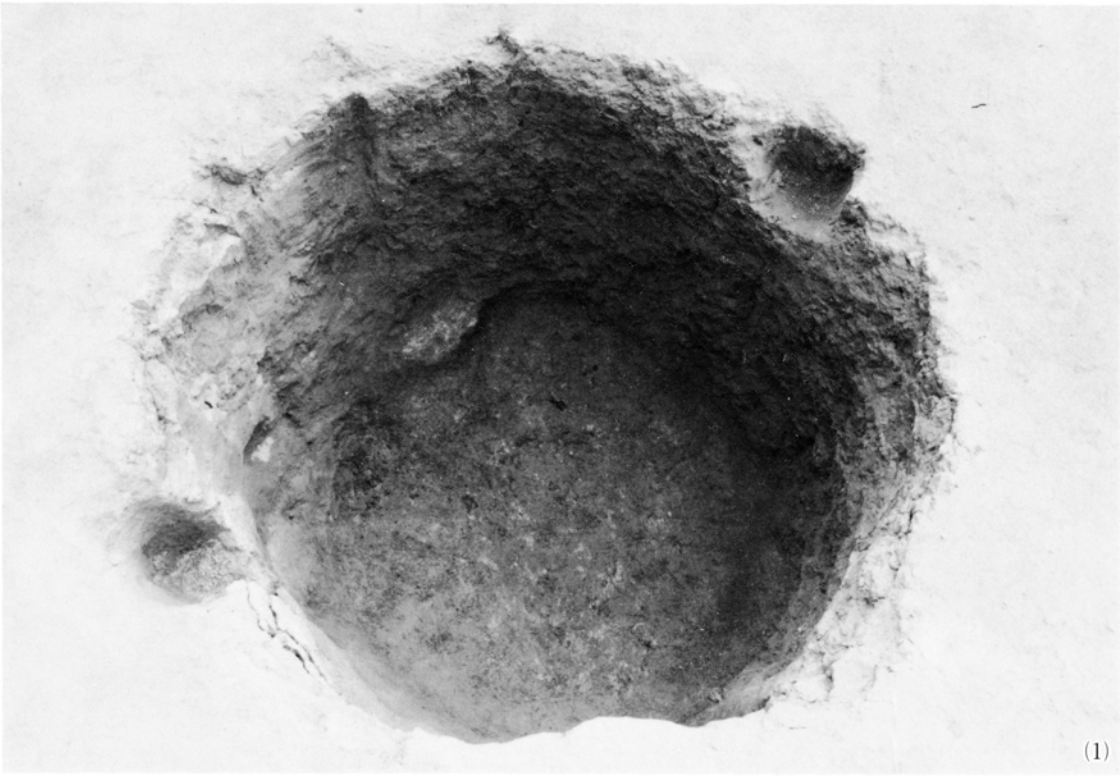
(1) 第33号貯蔵穴 (2) 第34号貯蔵穴

(1)

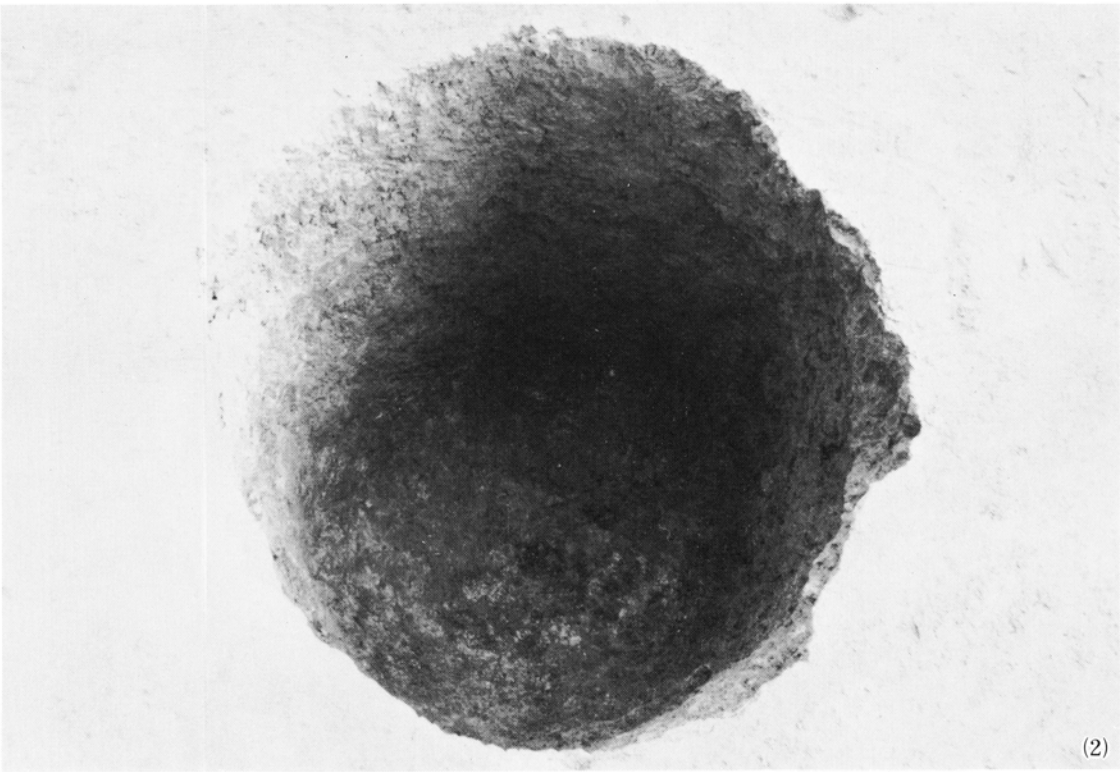
(2)

(1)　第46号貯蔵穴　(2)　第37号貯蔵穴

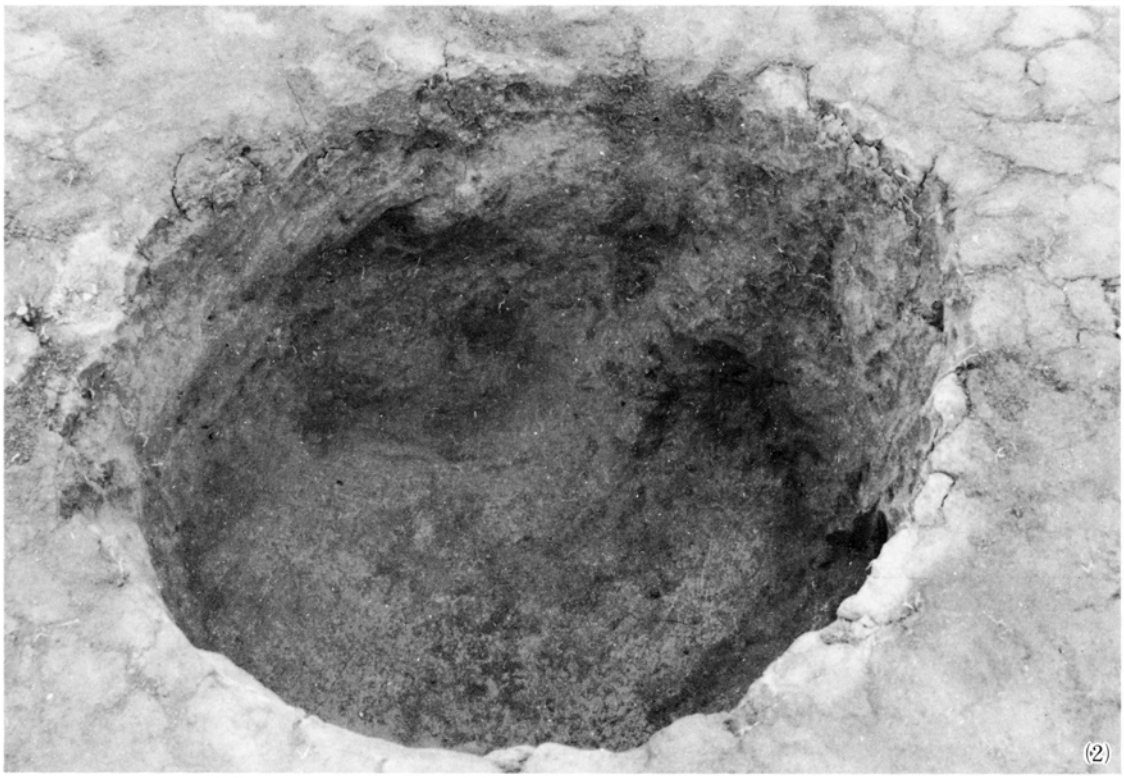
(1) 第49号貯蔵穴 (2) 第39号貯蔵穴



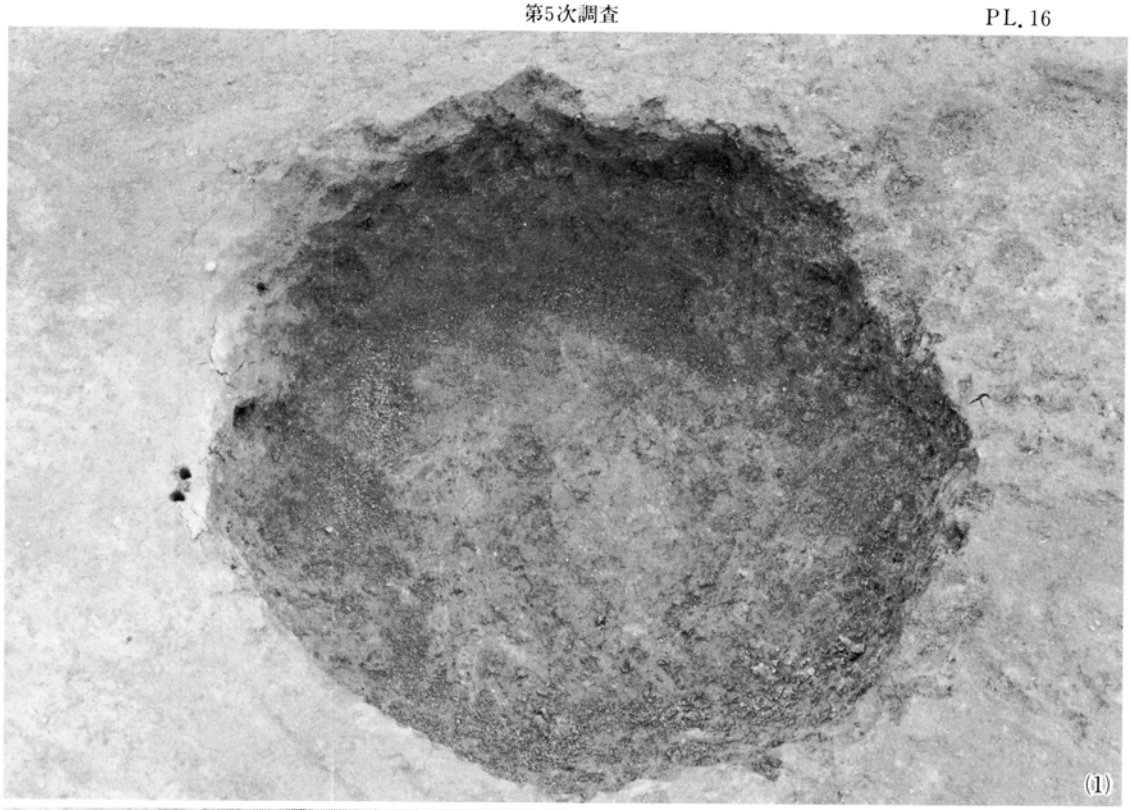
(1)　第52号貯蔵穴　(2)　第45号貯蔵穴



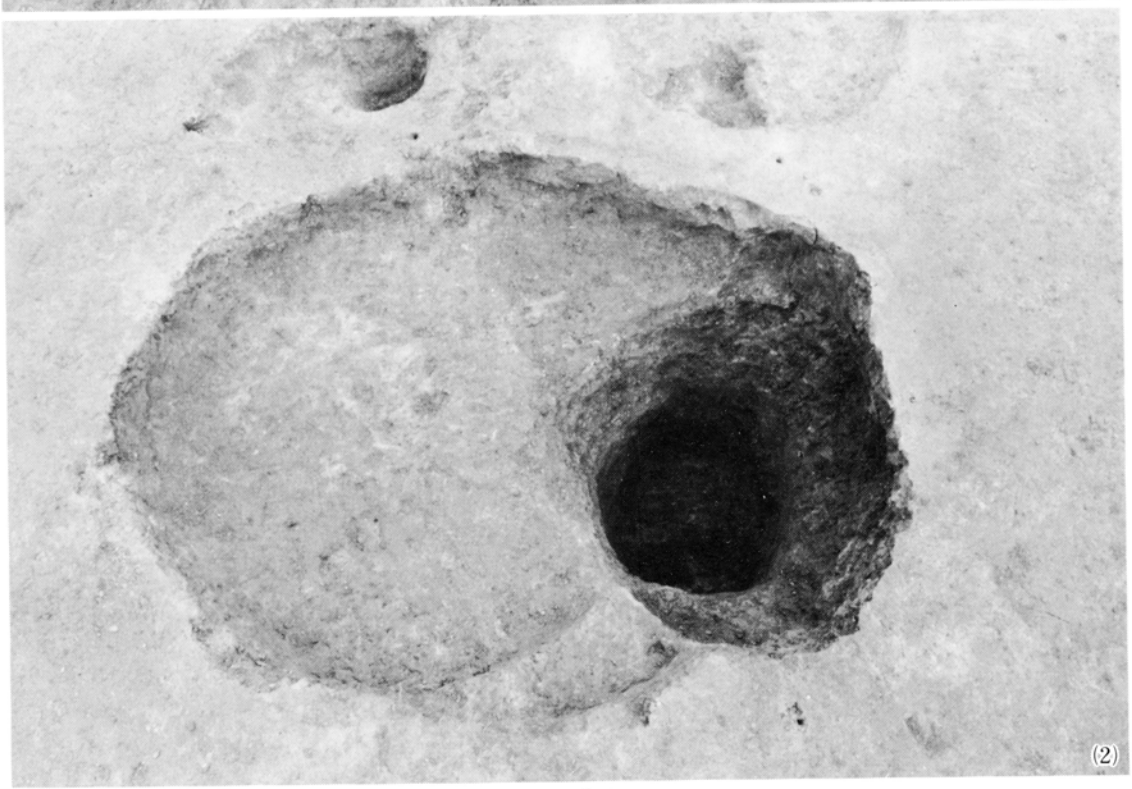
(1) 第45号貯蔵穴 (2) 第 4 号貯蔵穴



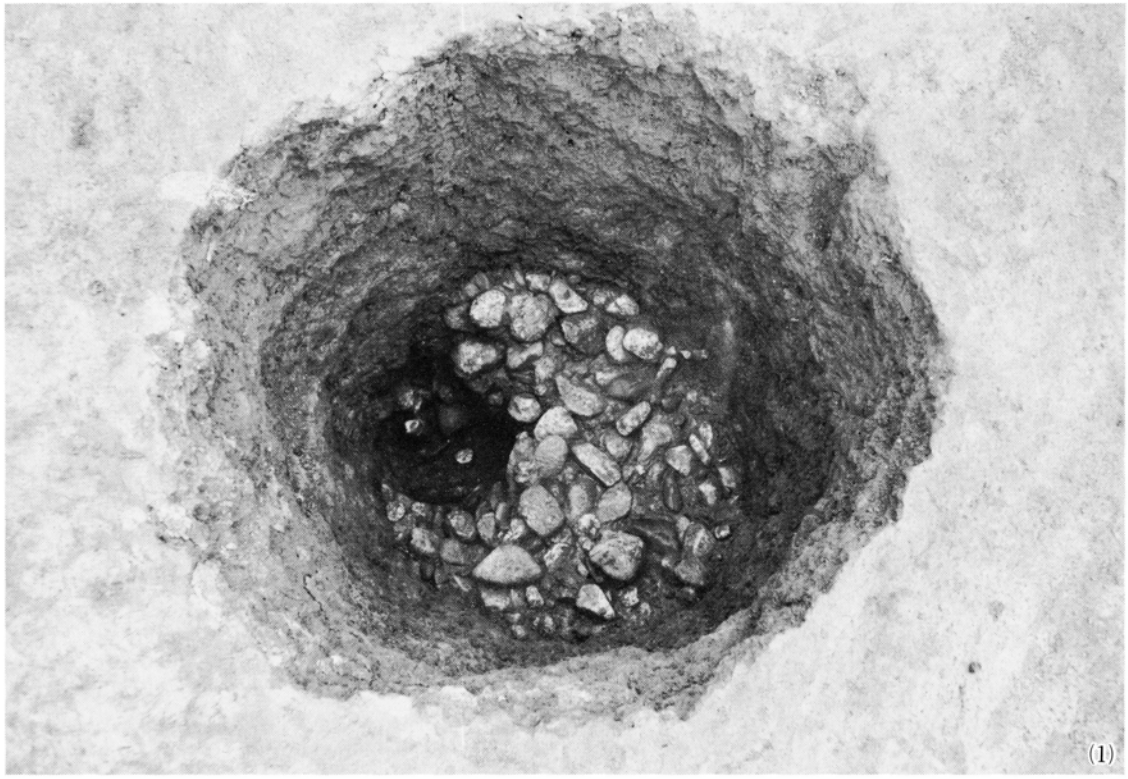
(1)　第40号貯蔵穴　(2)　第30号貯蔵穴



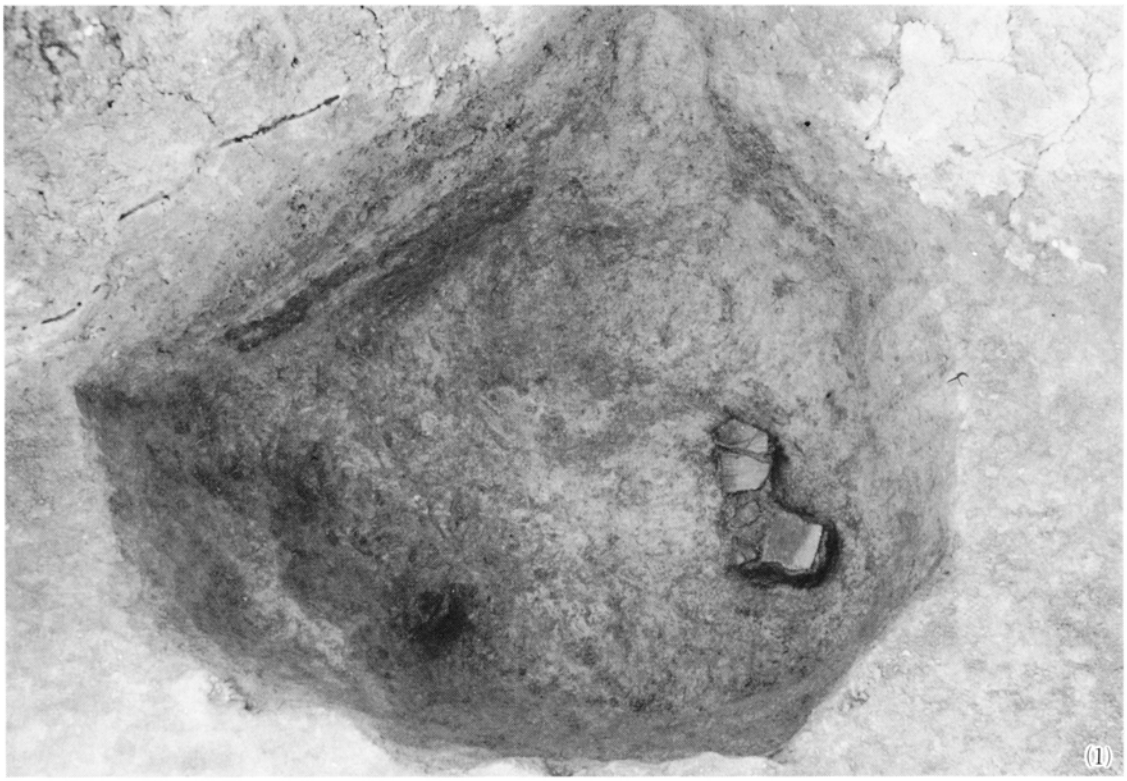
(1) 第31号貯蔵穴 (2) 第1号貯蔵穴

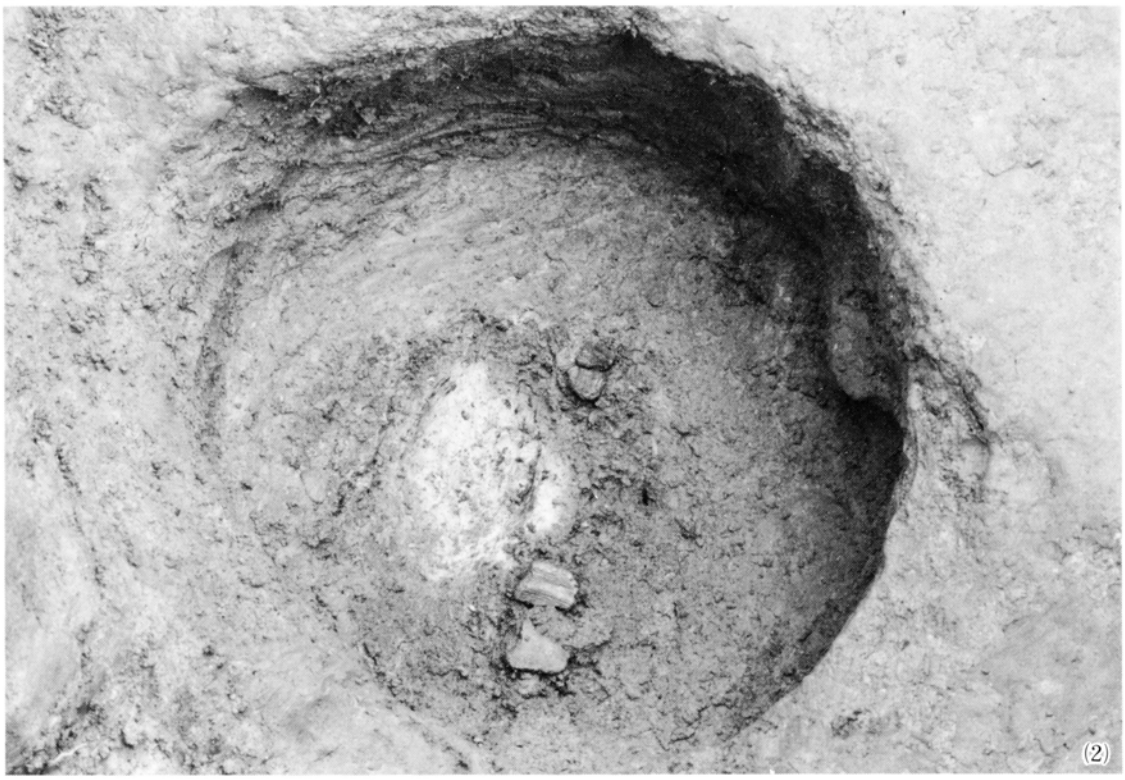


(1)　第55号貯蔵穴の集石状況　(2)　第55号貯蔵穴

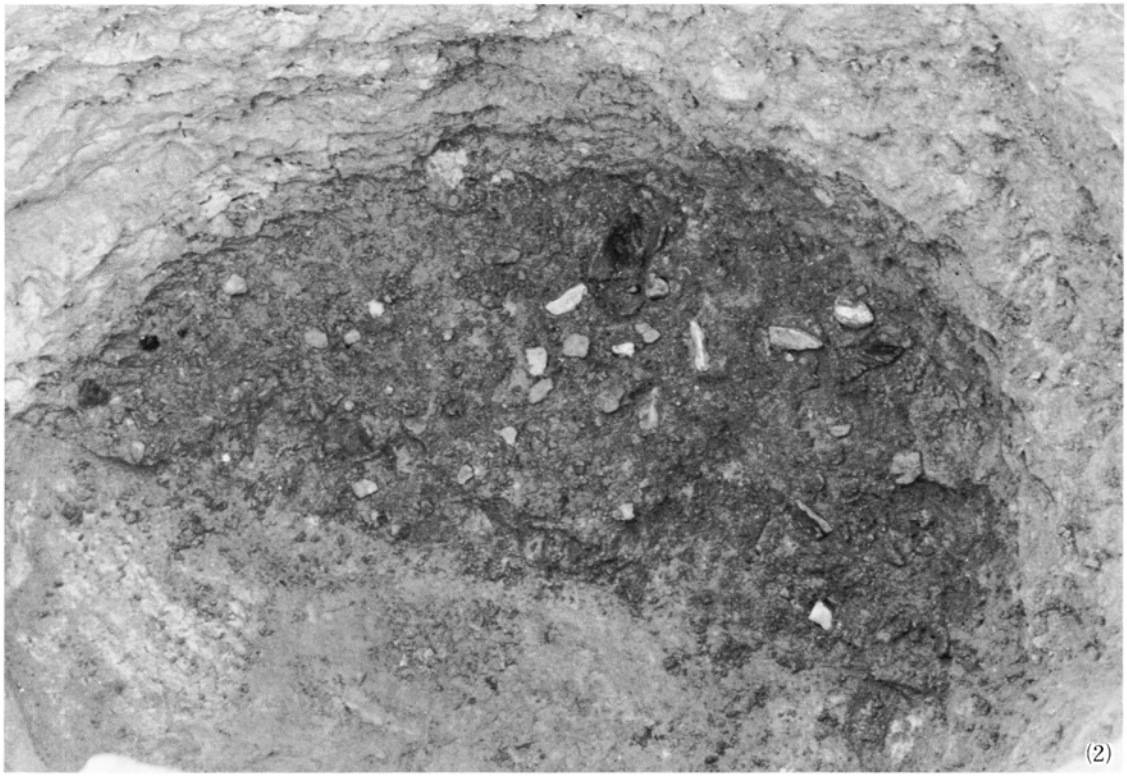


(1) 第60号貯蔵穴 (2) 第60号貯蔵穴集石状況

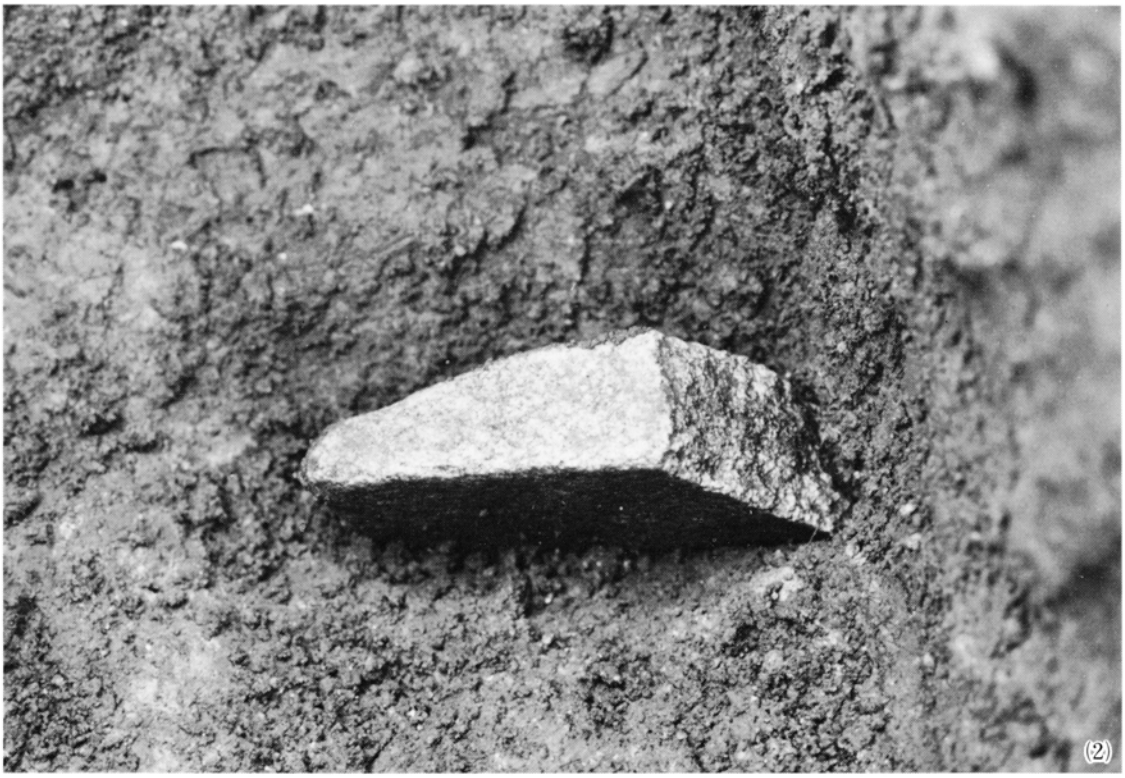




(1)　貯蔵穴遺物出土状況　(2)　貯蔵穴遺物出土状況



(1)　貯蔵穴遺物出土状況　(2)　貯蔵穴遺物出土状況

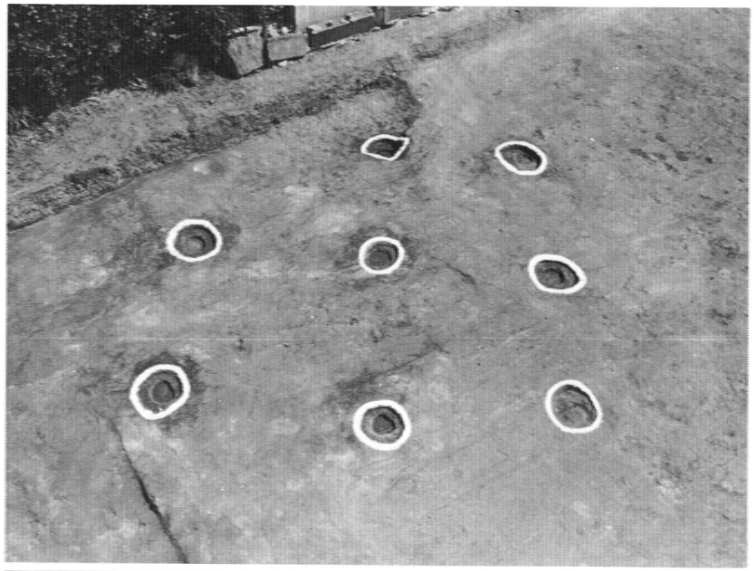


(1)　貯蔵穴遺物出土状況　(2)　貯蔵穴遺物出土状況

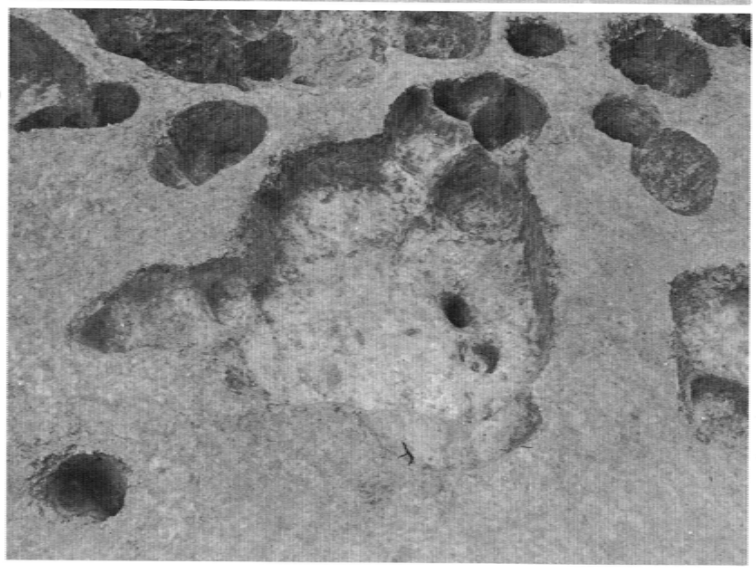
(1) 貯蔵穴遺物出土状況 (2) 貯蔵穴遺物出土状況

(1)　第39次調査全景（西から）

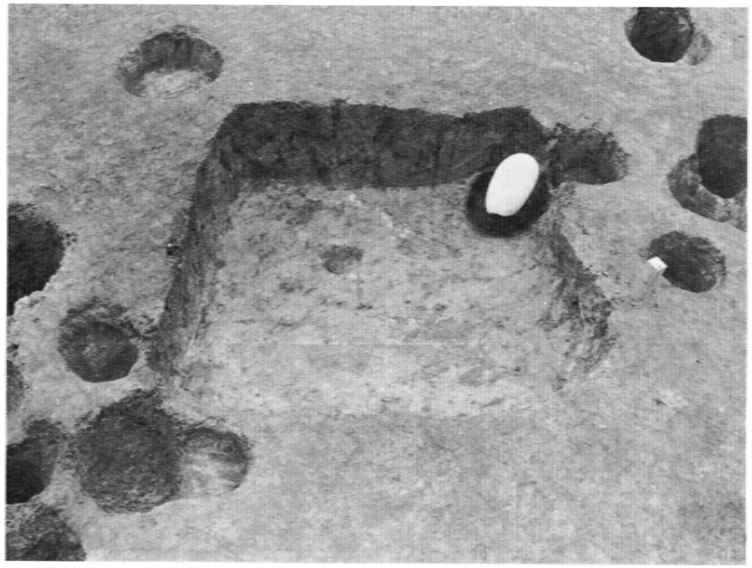
(2)　第39次調査全景（北から）



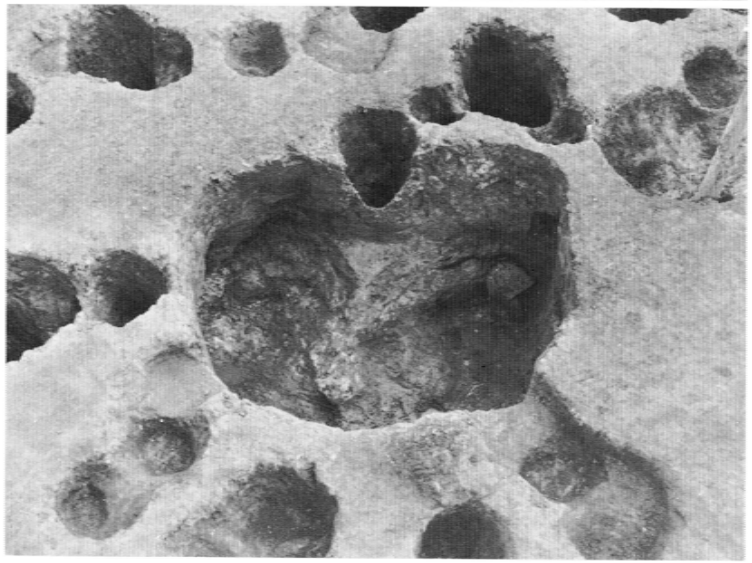
(1) 1号掘立柱建物（西から）



(2) 1号土坑（東から）

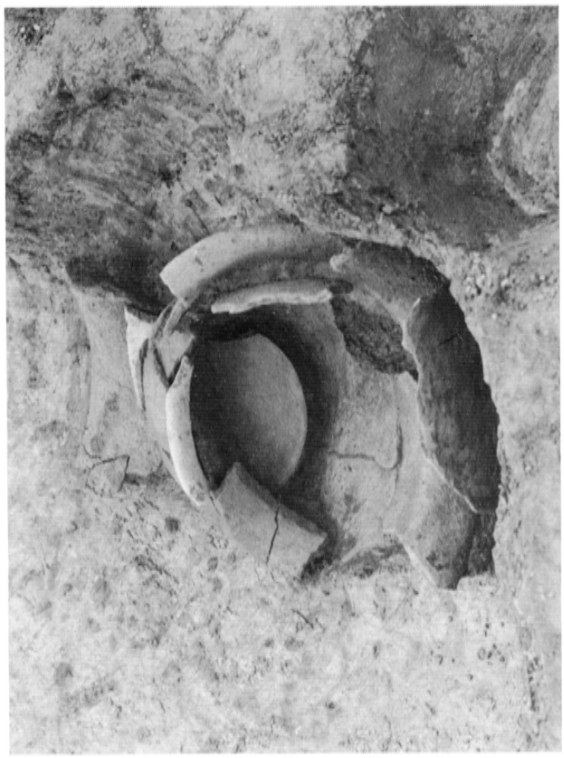


(3) 2号土坑（南から）

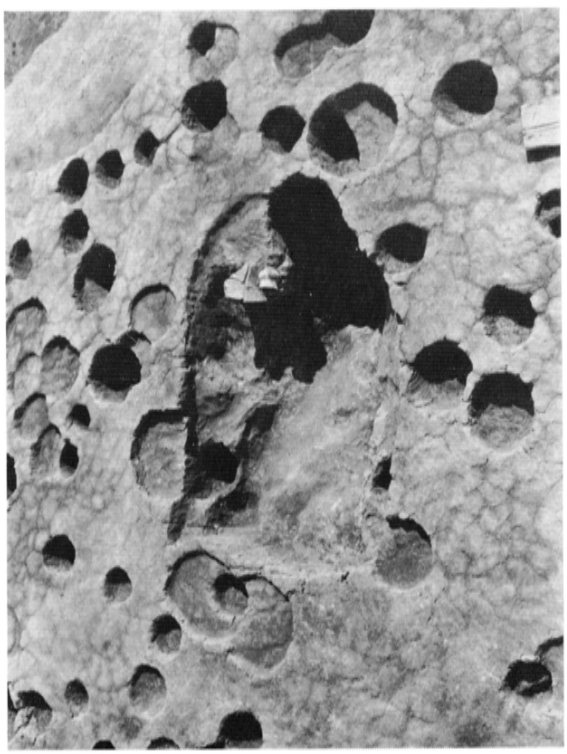


(4) 3号土坑（北から）

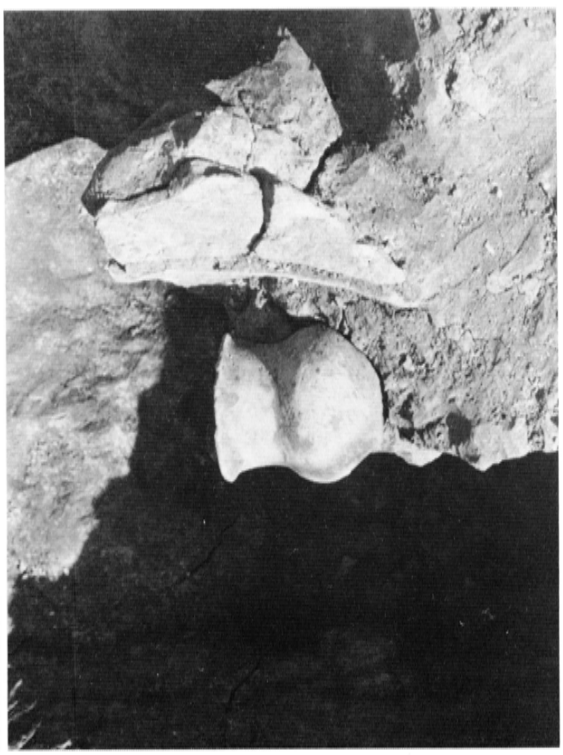
(1)　4号土坑（南から）



(2)　4号土坑遺物の出土状態



(3)　5号土坑（北から）



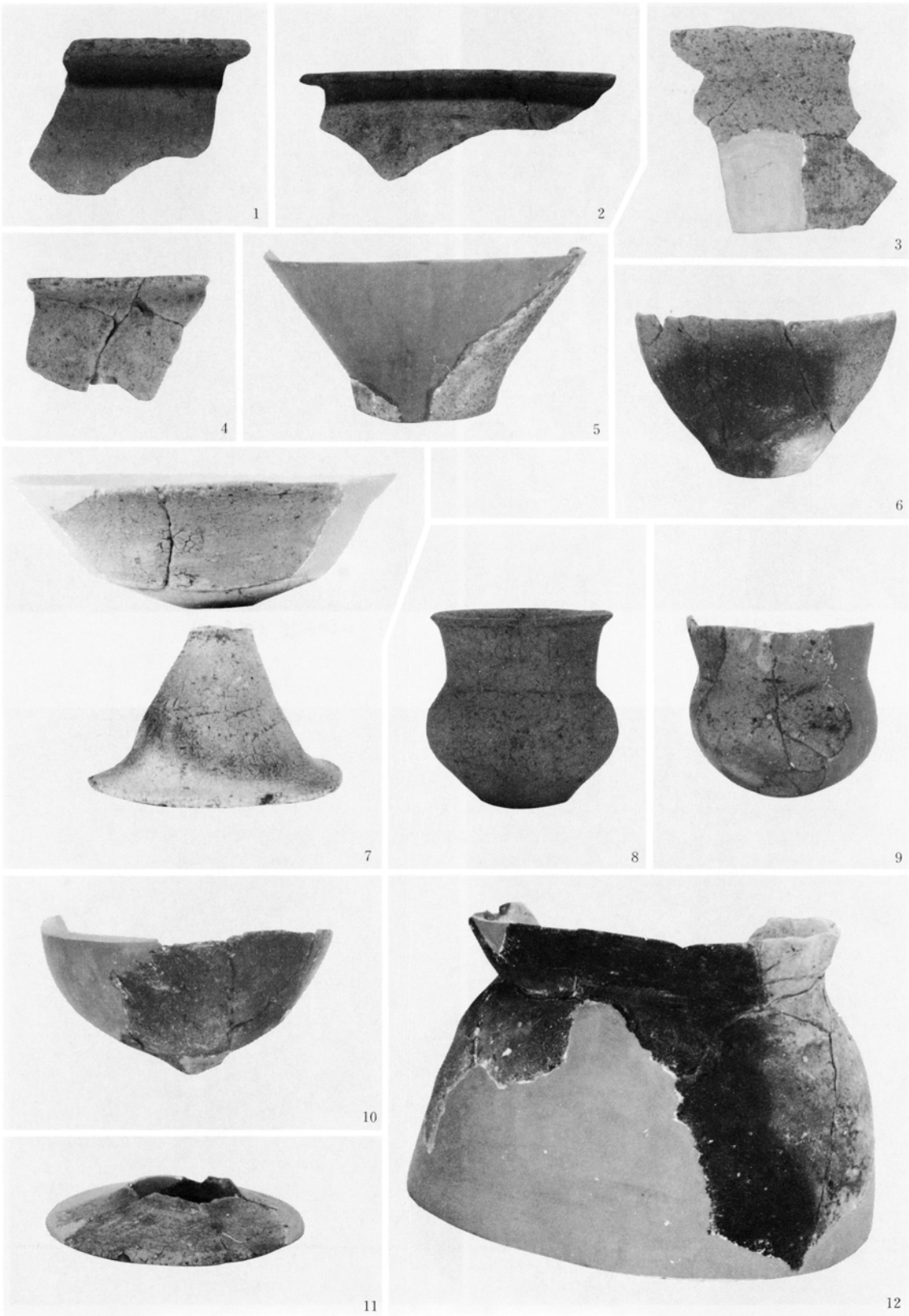
(4)　5号土坑遺物の出土状態

(1)　6号土坑（北から）

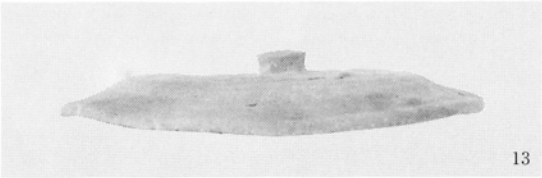
(2)　7号土坑（東から）

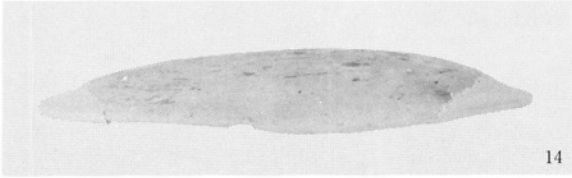
(3)　8号土坑（西から）

(4)　P72内土器出土状態



出土遺物　（1～6はpit出土，7・9～12は包含層出土，8は5号土坑出土）


13


14

15

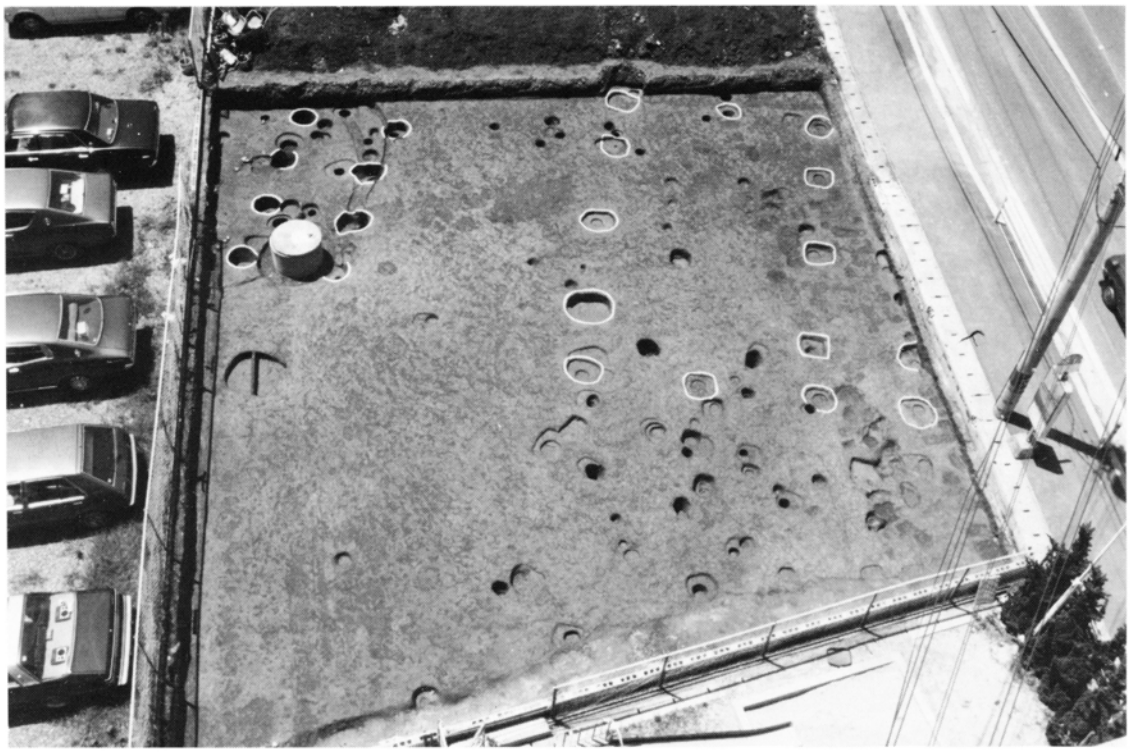
16

17

18

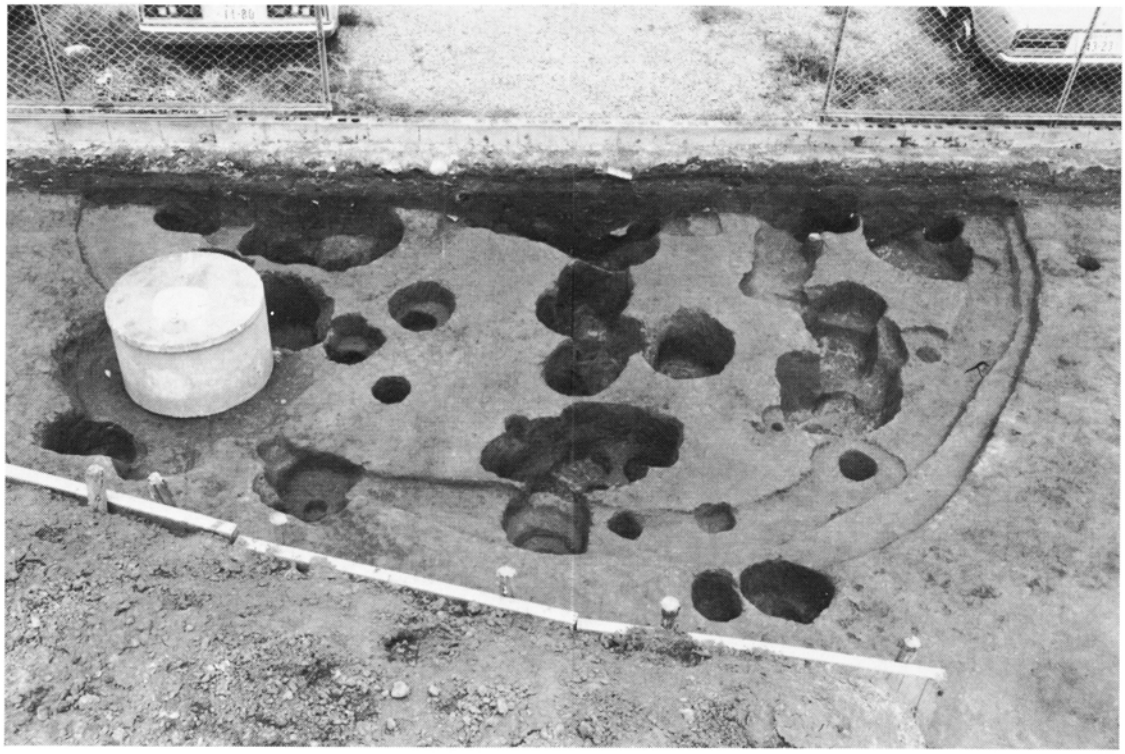
19

出土遺物　(13～19は４号土坑出土)



(1)　第51次調査北半部（北から）

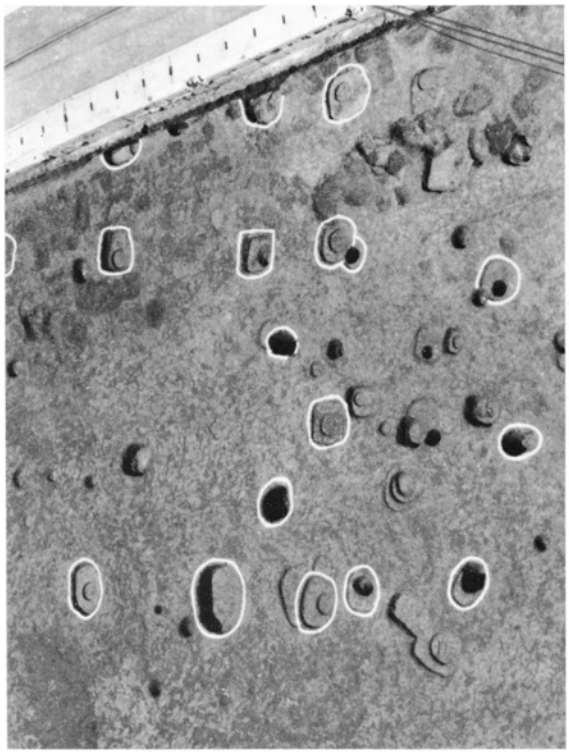
(2)　第51次調査南半部（北から）



(1)　1号住居跡完掘状態（北から）

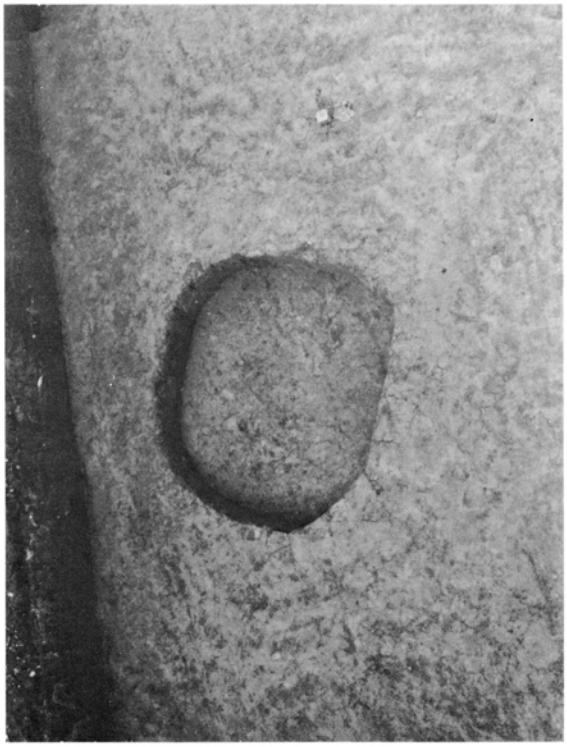
(2)　鉄製刀子出土状態

(3)　床面の土器出土状態



(1)　4号住居跡（北から）

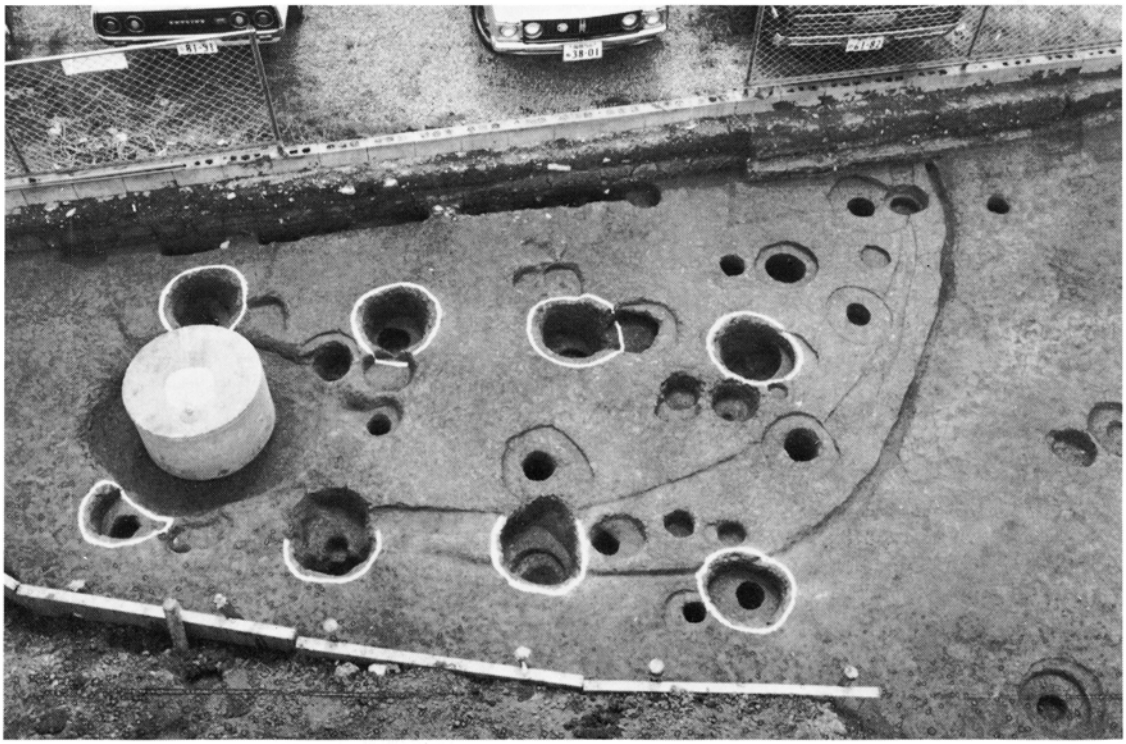
(2)　3号住居跡（北から）



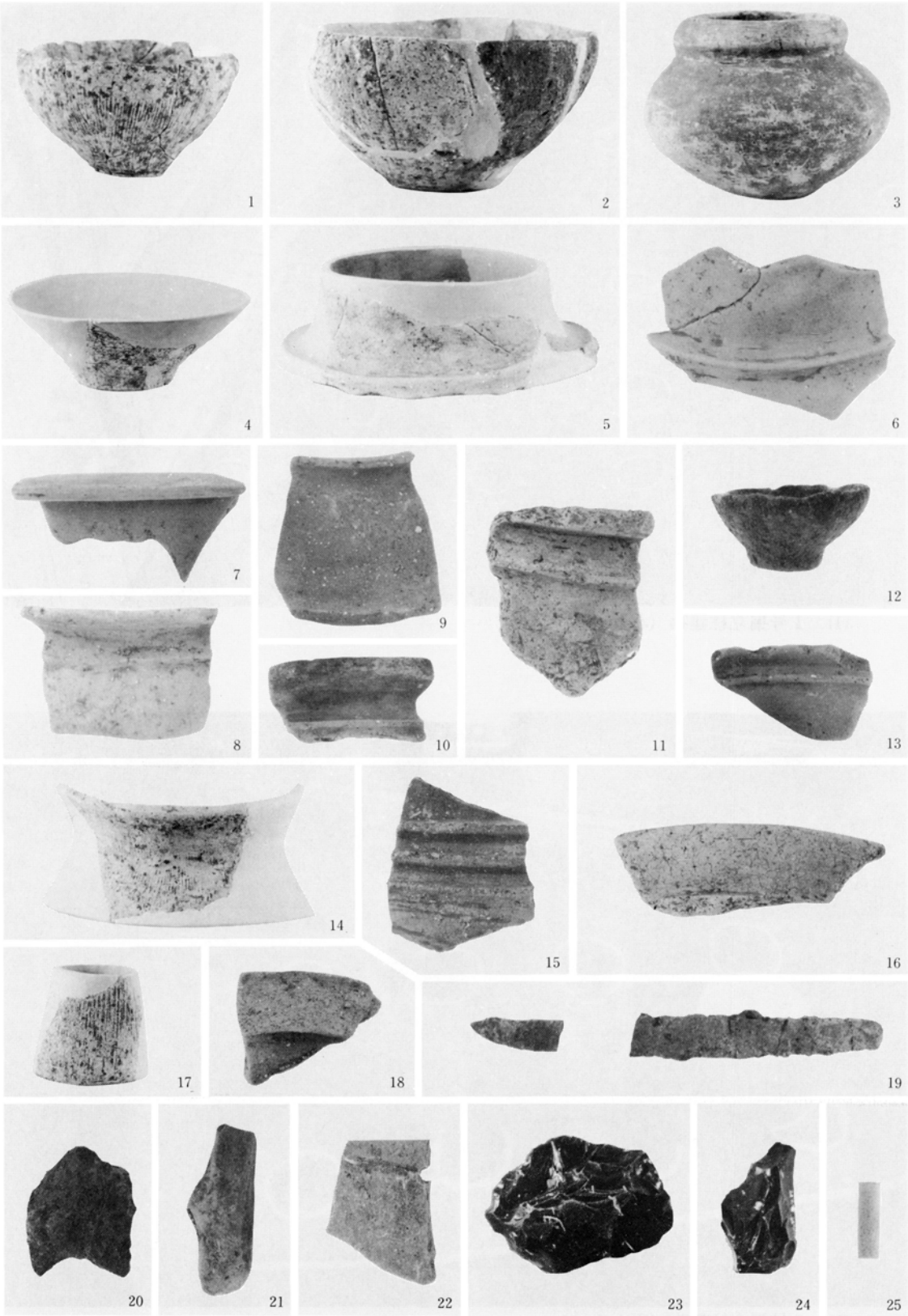
(3)　1号土坑（西から）

(4)　2号土坑

(1)　1号掘立柱建物（北から）



(2)　2号掘立柱建物（西から）



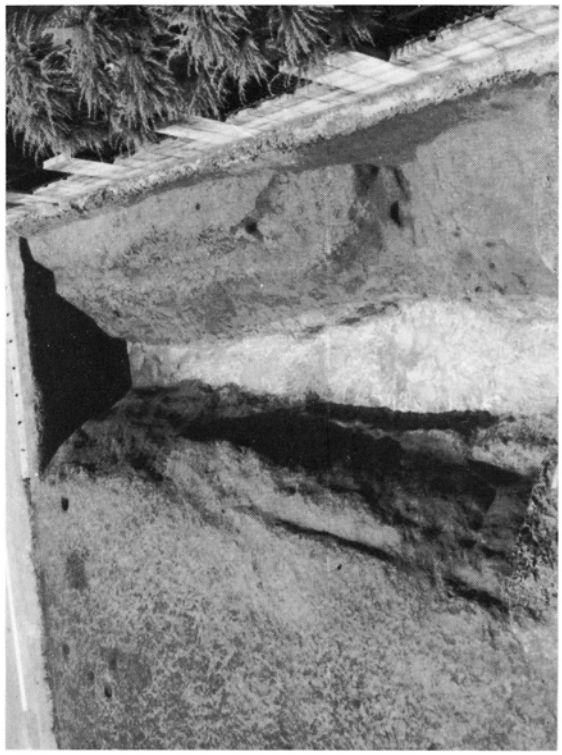
出土遺物　(1～6・12・13・18～21・24は１号住居跡、7・8・10・11・14・16・17・30は掘立柱建物出土、9・15はpit出土)

(1)　第53次調査南半部（東から）

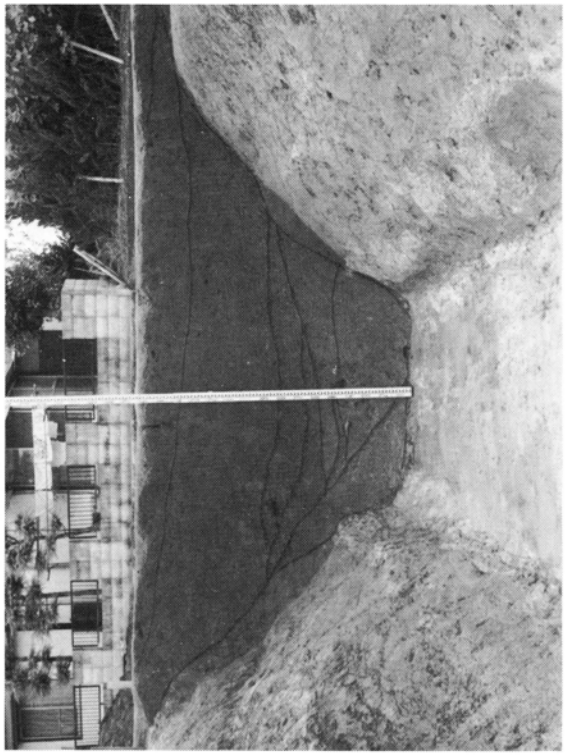
(2)　第53次調査北半部（東から）

(1)　1号住居跡（南から）

(2)　1号掘立柱建物及び2号溝（南から）

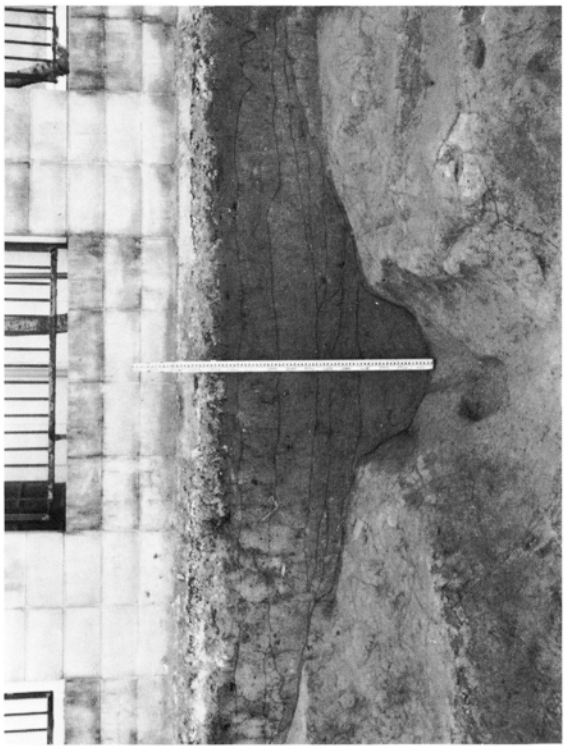


(1)　2号溝（北から）



(2)　2号溝中央部土層状態（東から）

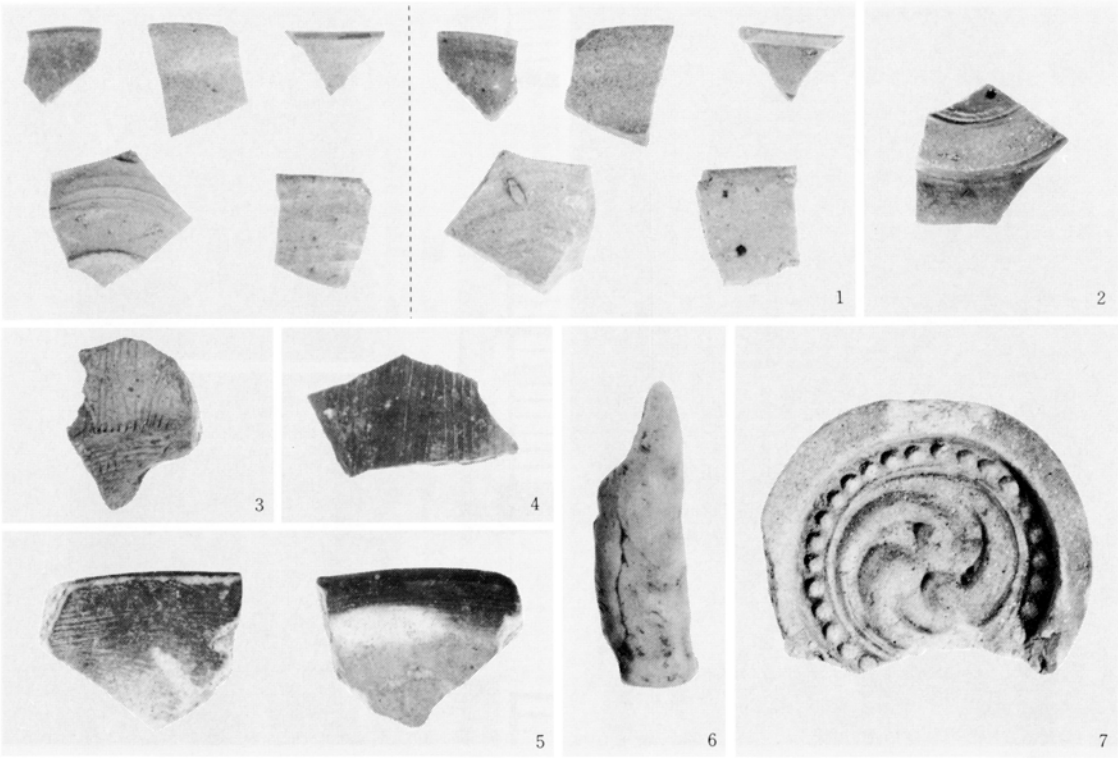
(3)　3号溝（北東から）



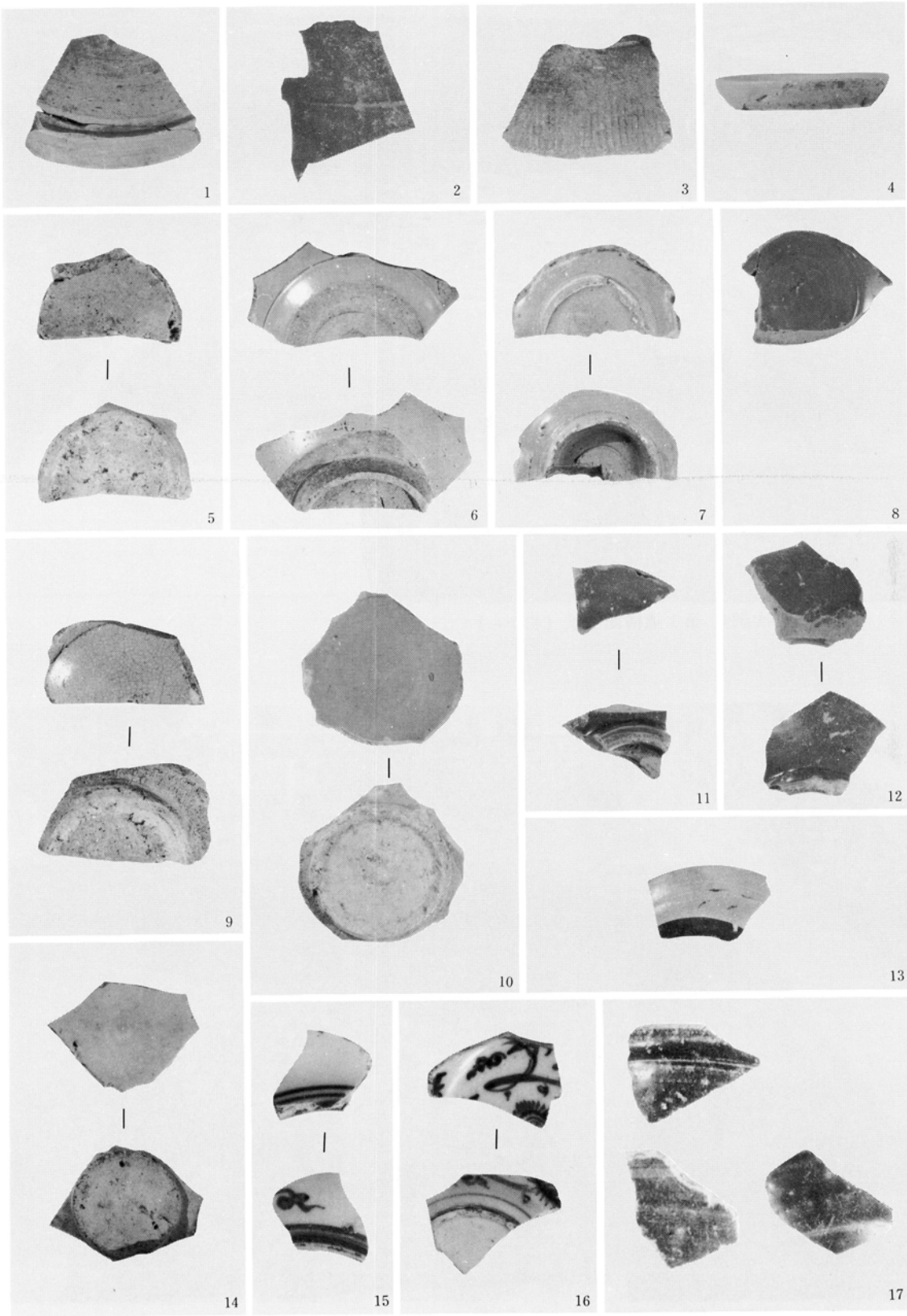
(4)　3号溝土層状態（東から）

(1)　4号・5号溝（南から）

(2)　1号土坑（南から）



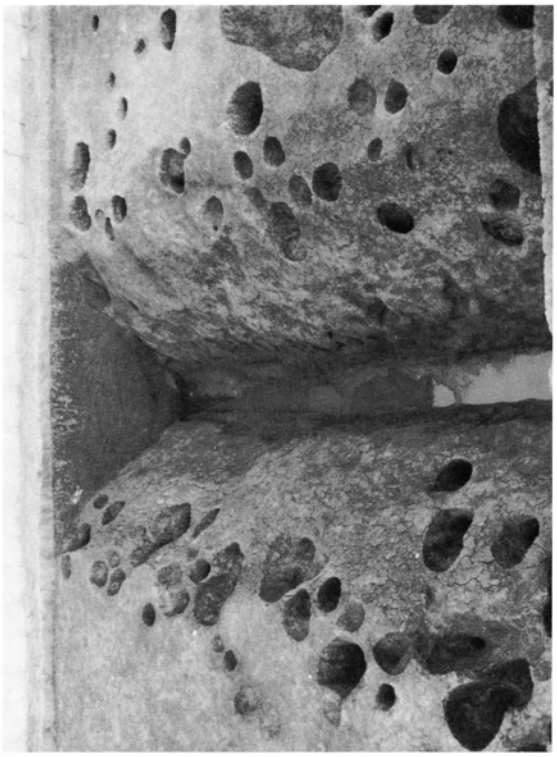
出土遺物（1～7は2号溝出土）



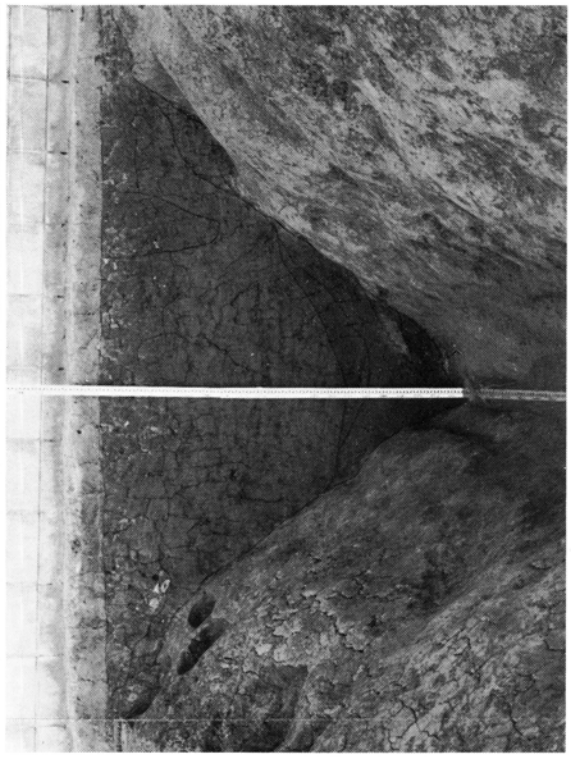
出土遺物（1～17は2号溝出土）

(1)　第56次調査 第１遺構面全景（北から）

(2)　第56次調査 第２遺構面全景（北から）

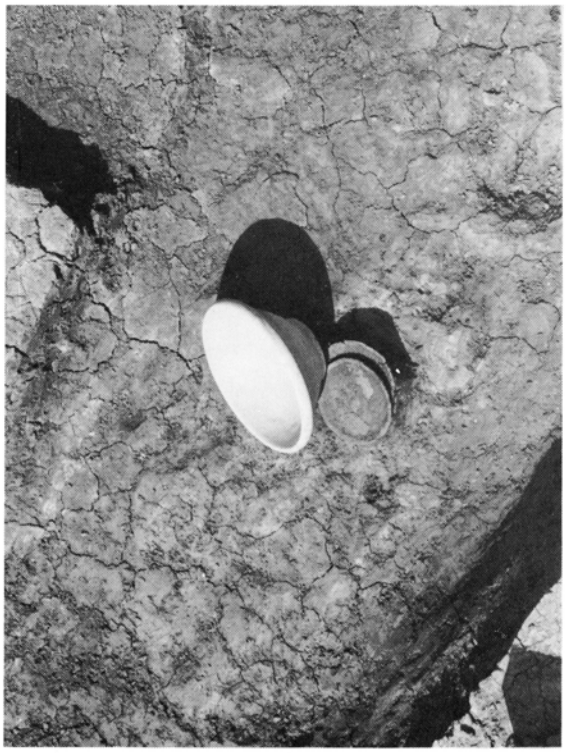


(1)　1号溝（西から）

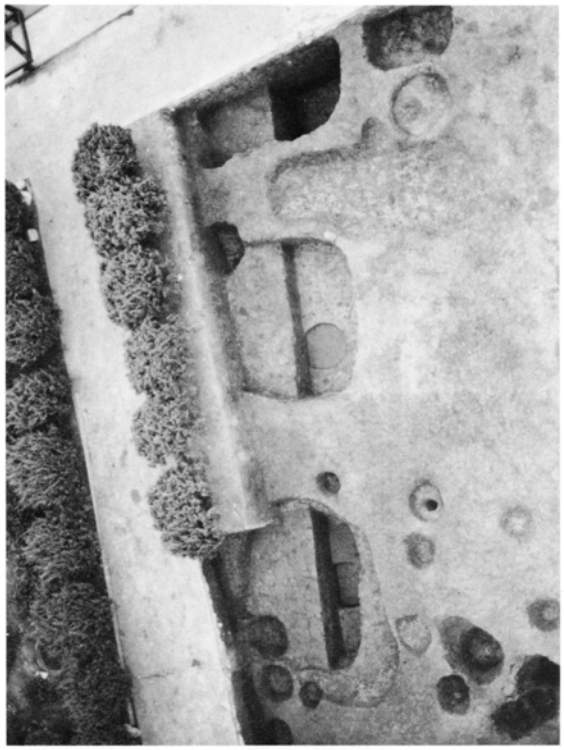


(2)　1号溝北側土層状態（西から）

(3)　1号土坑（北から）



(4)　1号土坑遺物出土状態（北から）



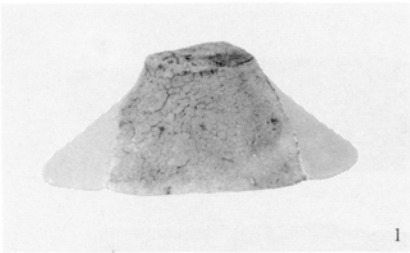
(1)　1号掘立柱建物（東から）

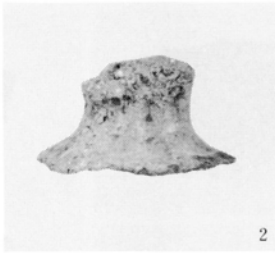
(2)　2号掘立柱建物（東から）

(3)　1号掘立柱建物柱穴断面の状態

(4)　拡張区の状態（東から）

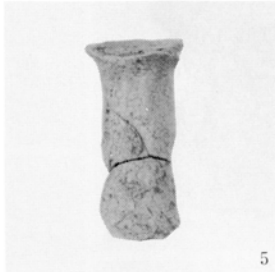
出土遺物　（1～8・12～14・16は2号溝出土、9～11・15は表土・包含層出土）


1

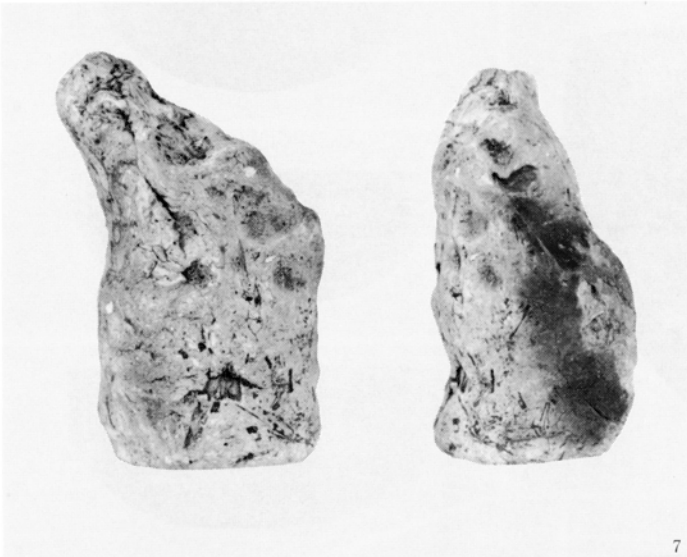

2

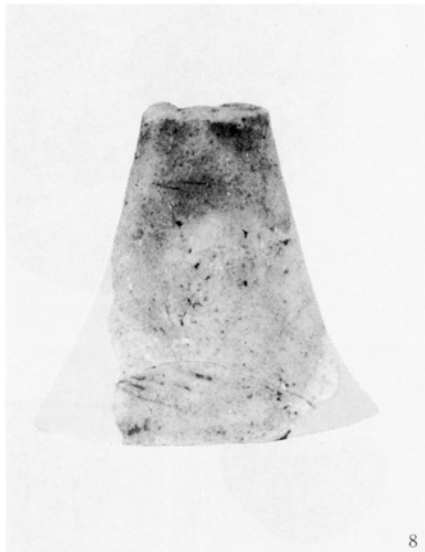
3

4


5

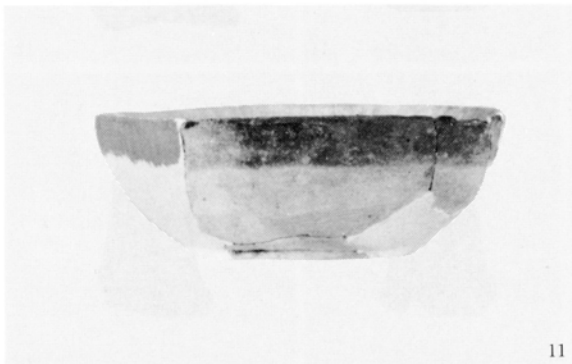
6


7


8

9

10

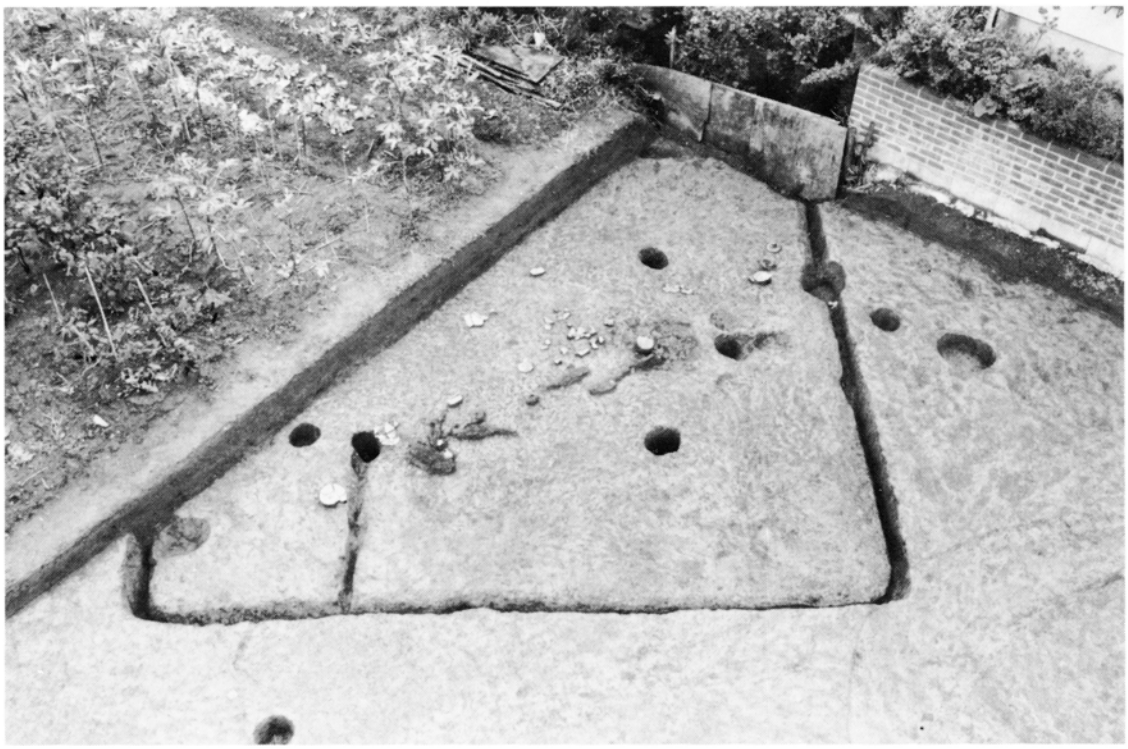

11

12

出土遺物（1・2～8は2号溝出土、9・10・12は1号土坑出土、1・11は包含層出土）

出土遺物 (1～3・8・9・13はpit出土、4・6・10は2号溝出土、1・5・7は包含層出土)

(1)　第57次調査全景（東から）

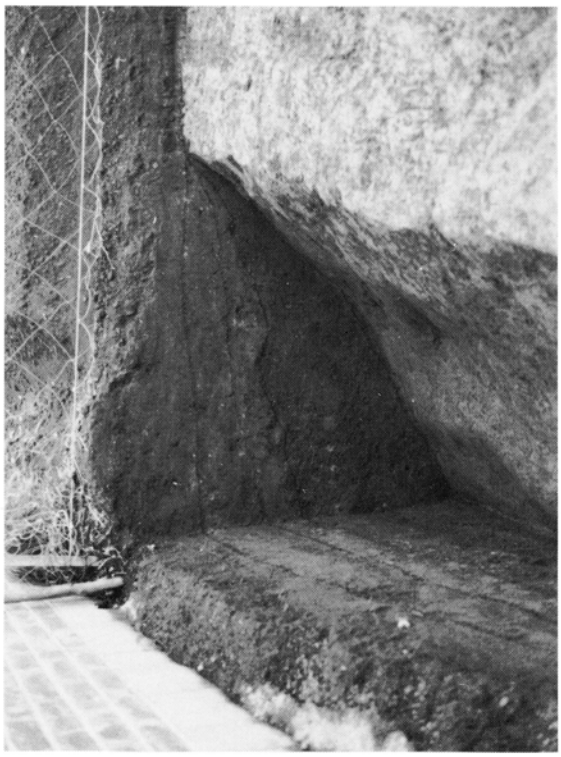


(2)　1号住居跡（東から）

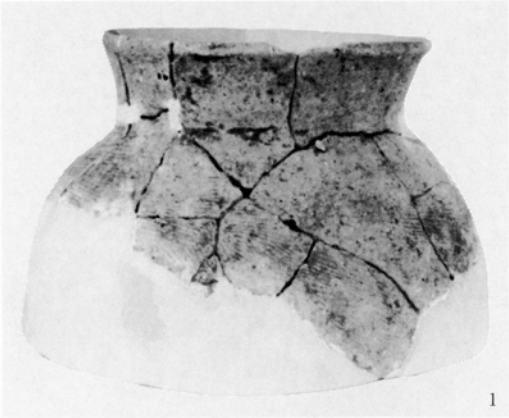
(1)　1号住居跡遺物出土状態

(2)　1号住居跡遺物出土状態

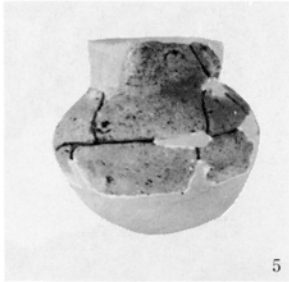
(3)　1号溝の状態（東から）

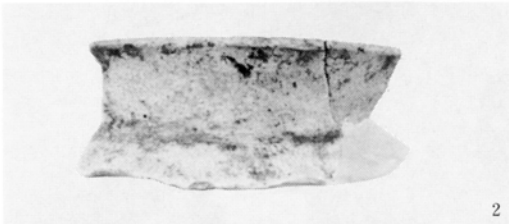


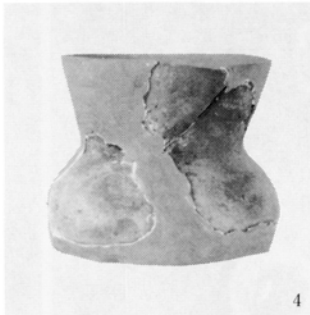
(4)　1号溝の土層状態（南から）

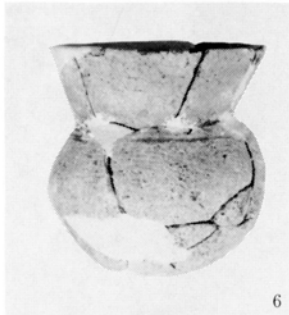

1

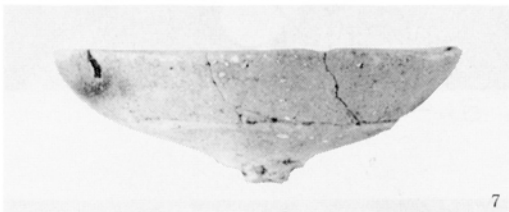
3


5

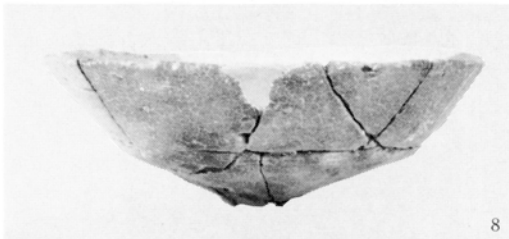

2


4

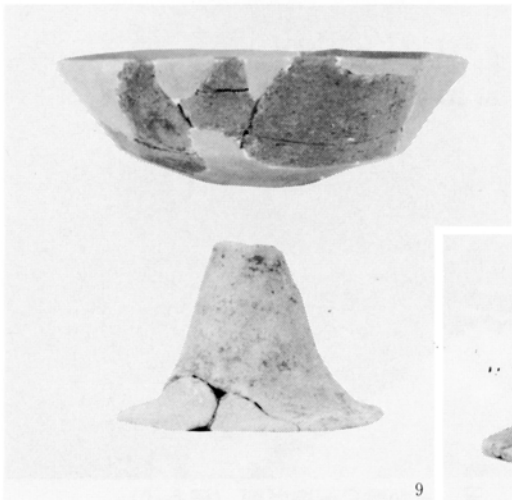

6

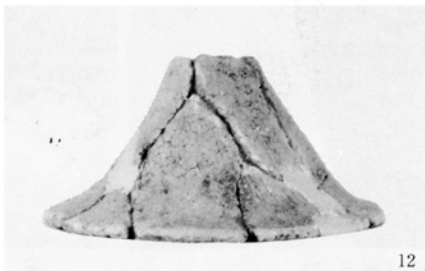

7

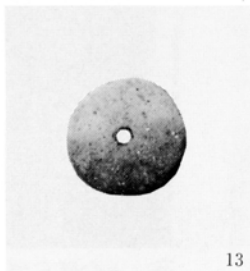
10


8

11

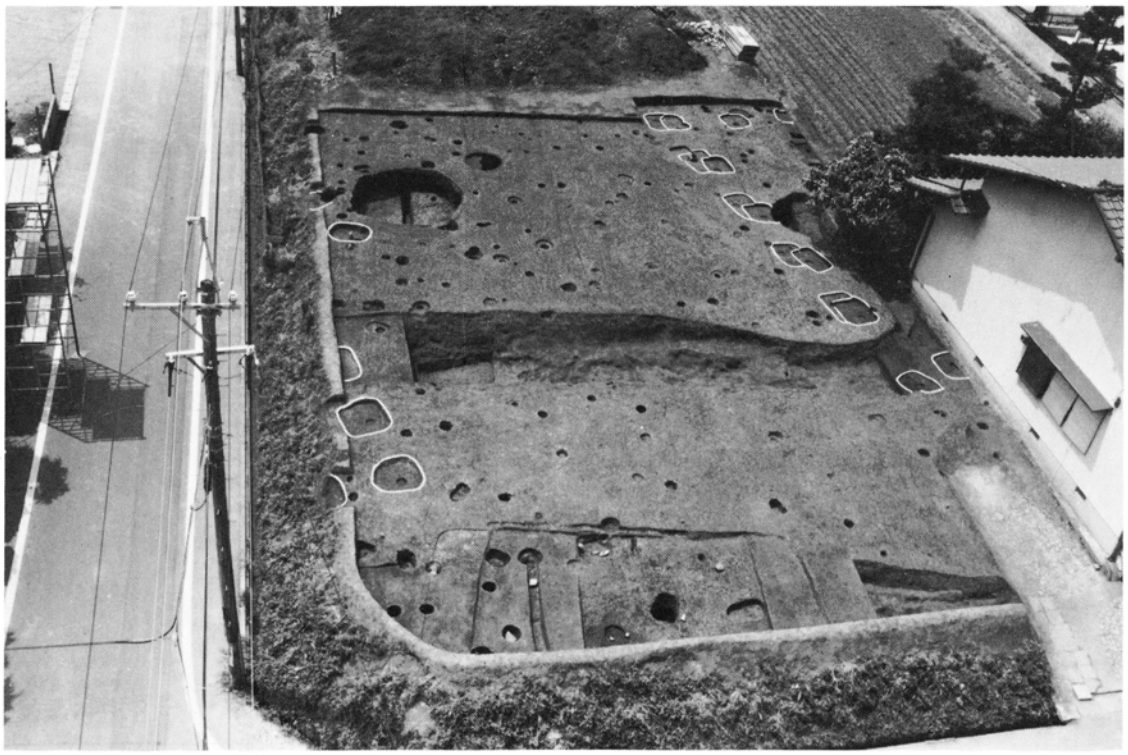

9


12


13

出土遺物　（1～13は住居跡出土）

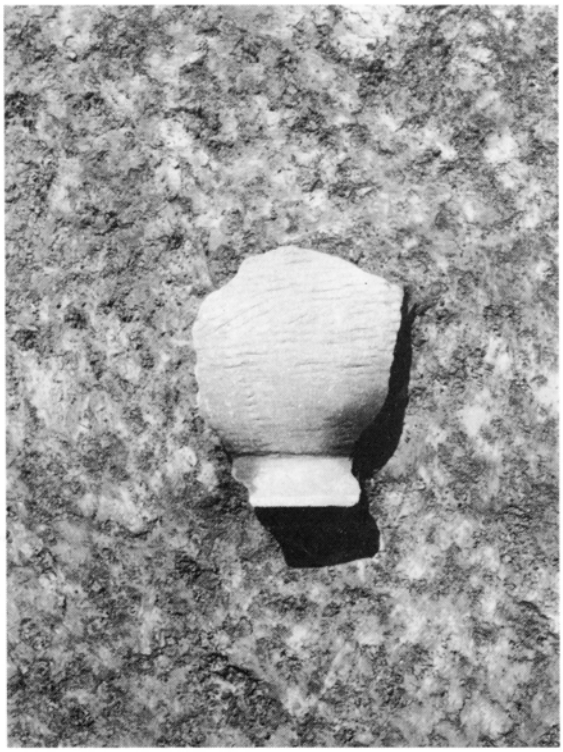
(1)　第66次調査南側全景（北から）



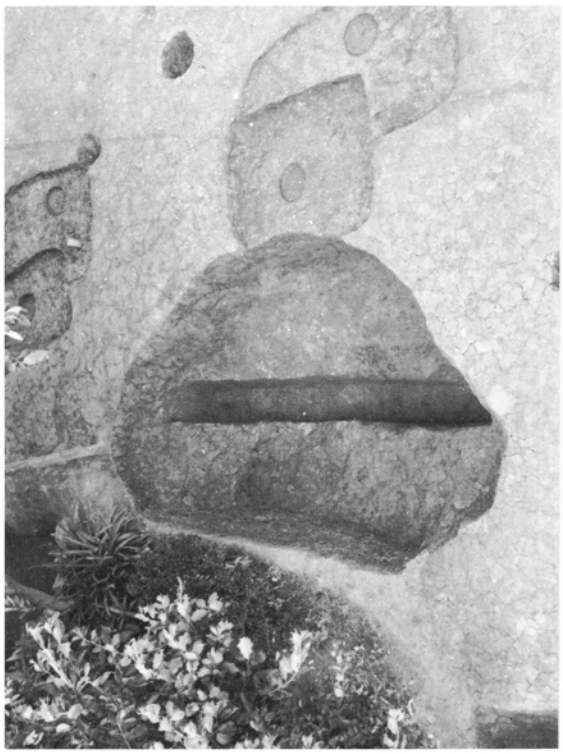
(2)　第66次調査北側全景（北から）

(1)　1号・2号住居跡（北から）

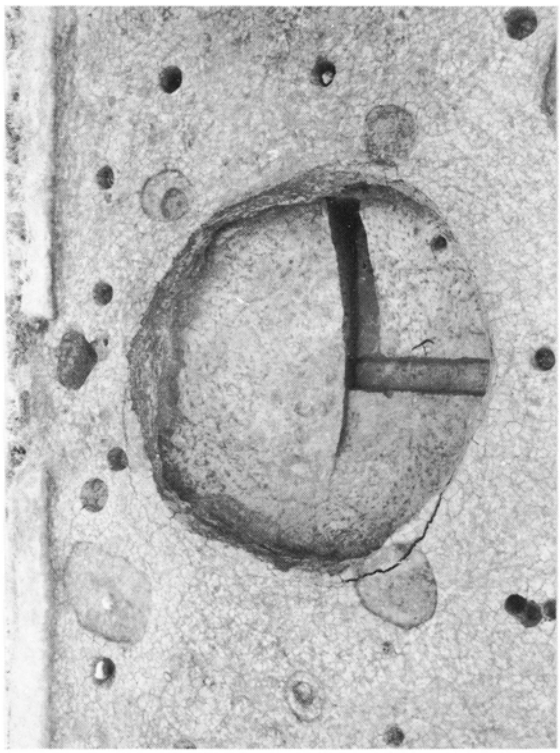
(2)　1号住居跡内土坑（北から）



(3)　1号住居跡床面遺物出土状態

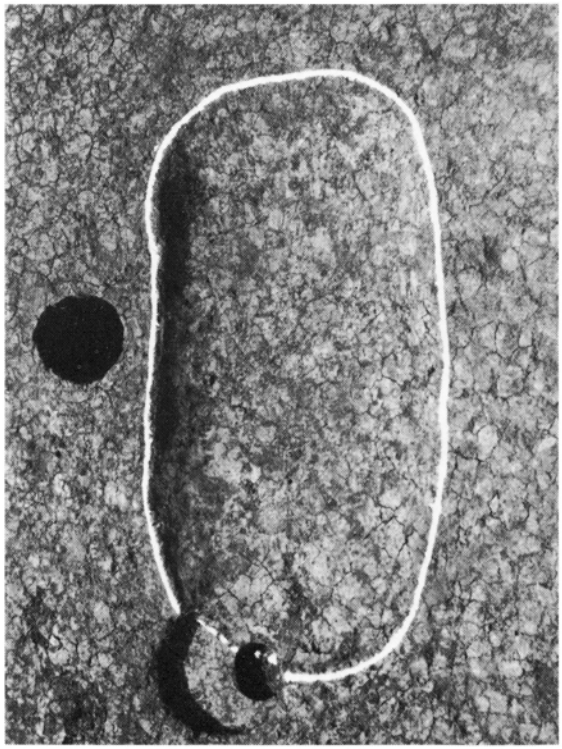


(1) 1号貯蔵穴（南から）



(2) 2号貯蔵穴（西から）

(3) 井戸（北から）

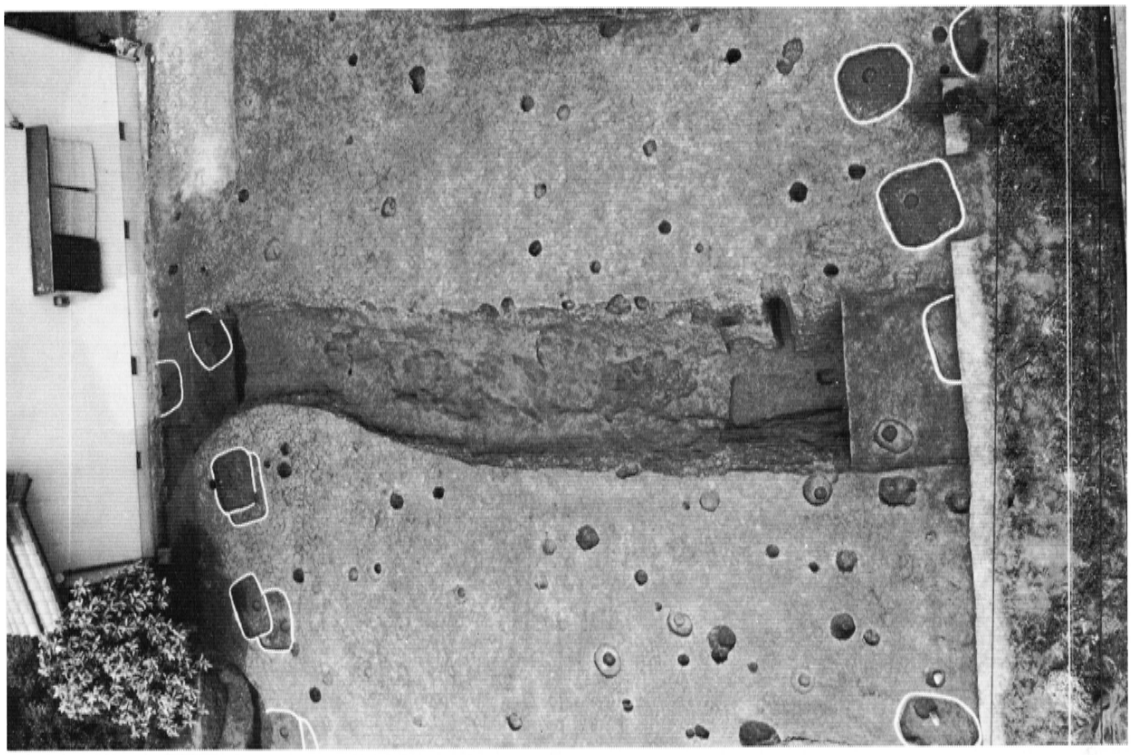


(4) 2号土坑（北から）

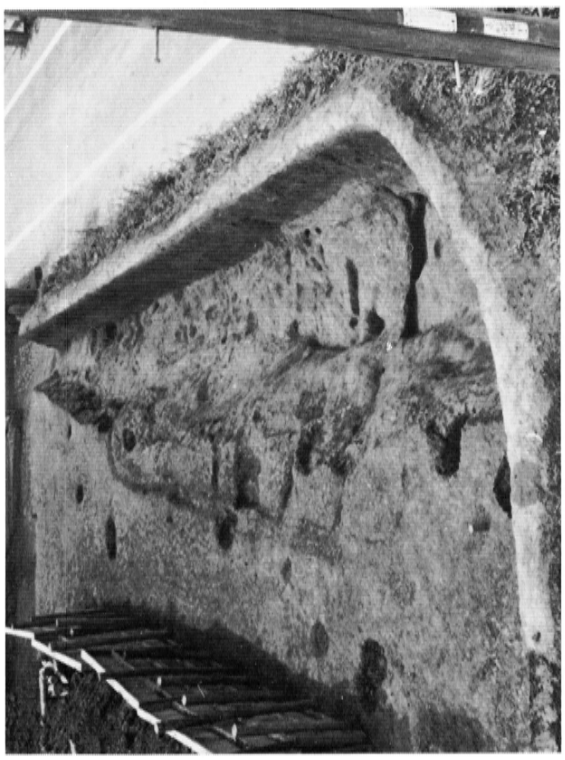
(1)　1号土坑（東から）

(2)　甕と椀の状態（北から）

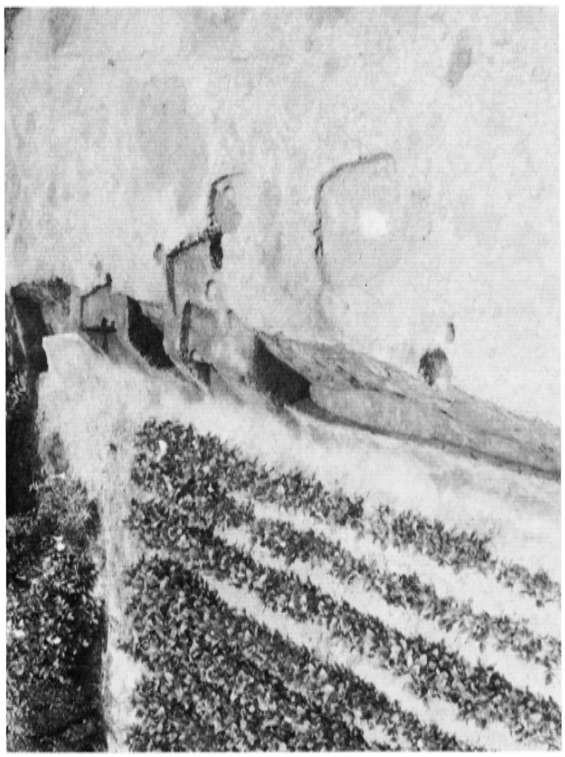
(3)　甕底部の状態（北から）



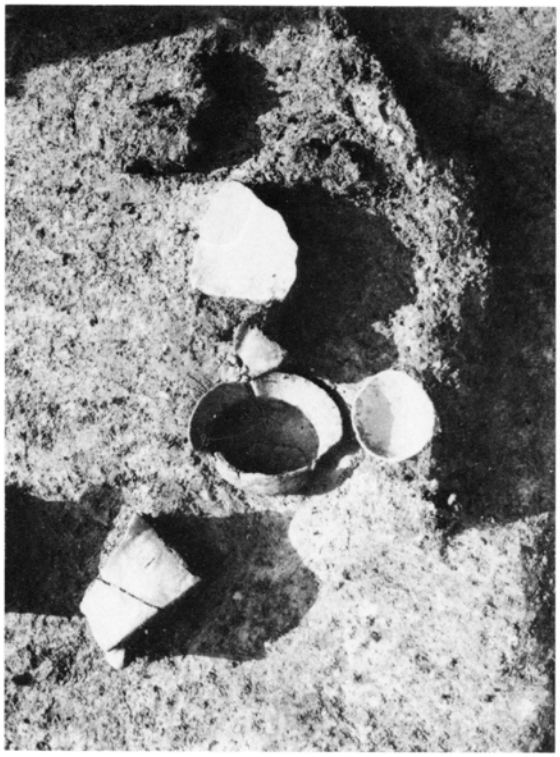
(1)　1号溝（東から）



(2)　2号溝（東から）

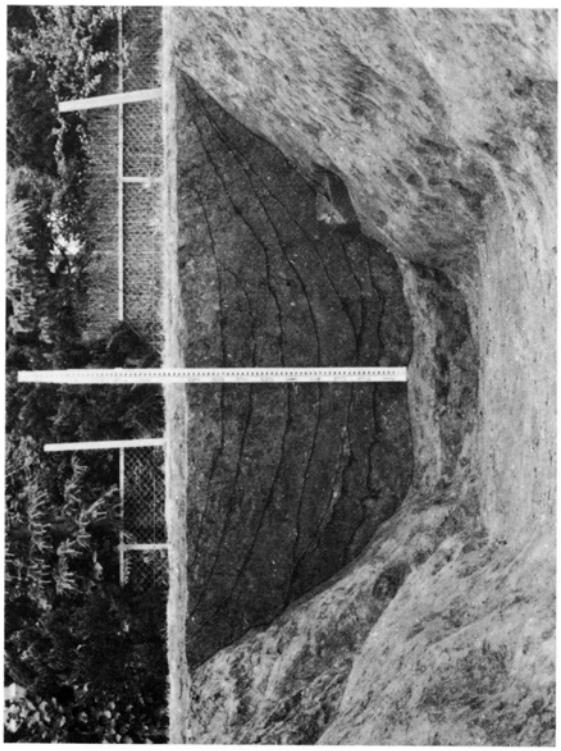


(3)　3号溝（南から）

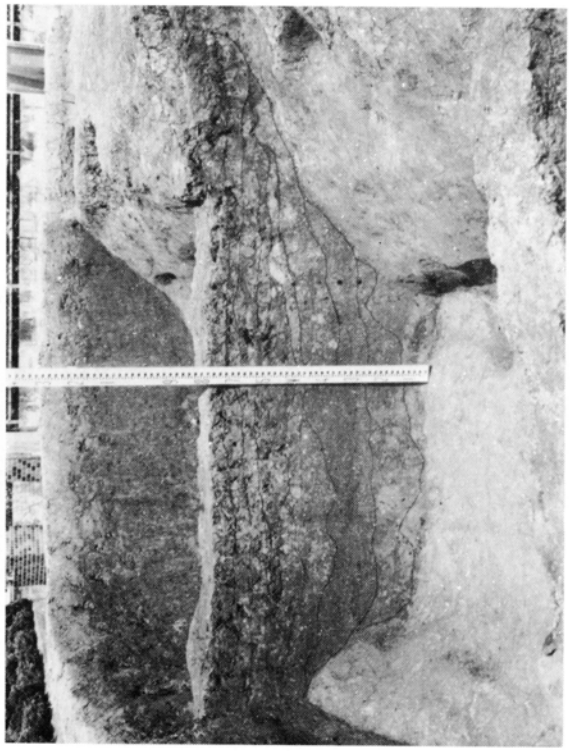


(1)　2号溝遺物出土状態

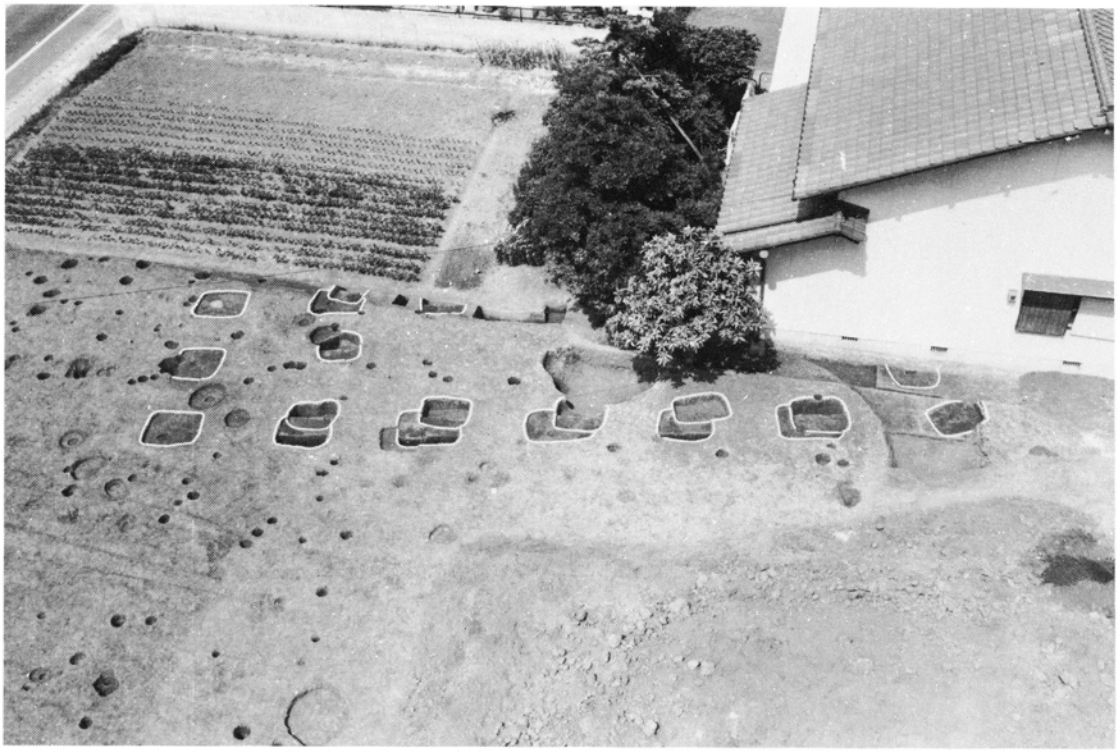
(2)　2号溝遺物出土状態



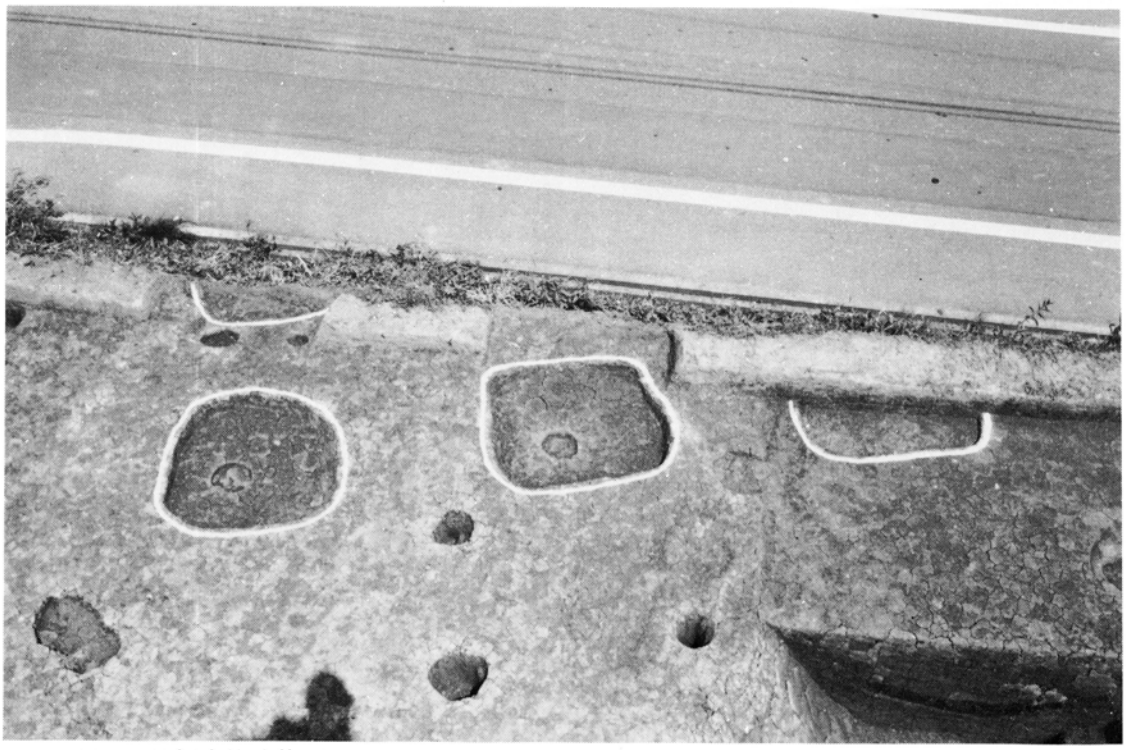
(3)　1号溝土層状態（東から）



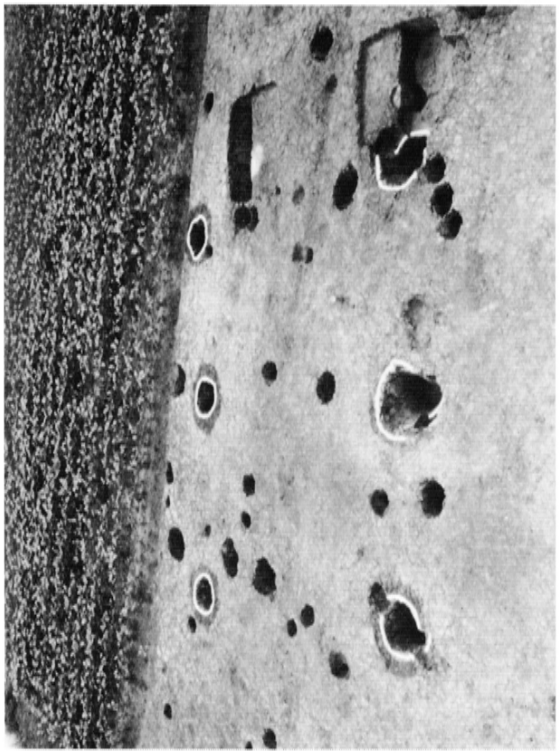
(4)　2号溝土層状態（西から）



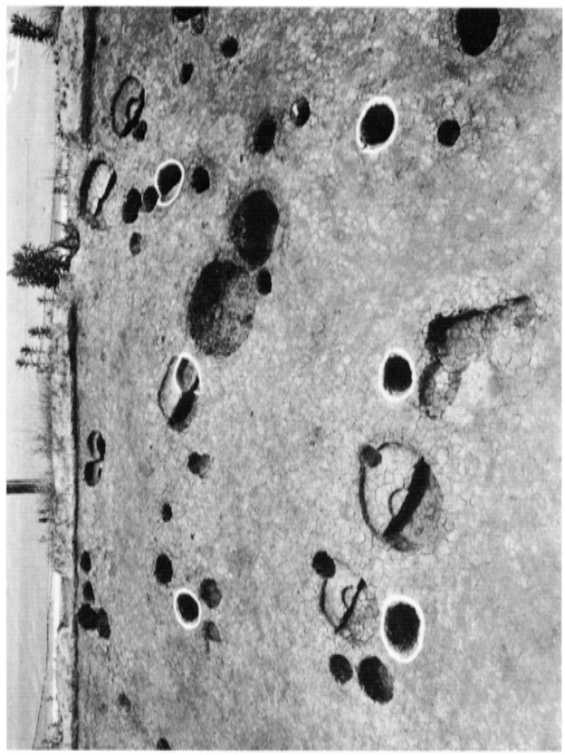
(1)　1号・2号掘立柱建物（東から）



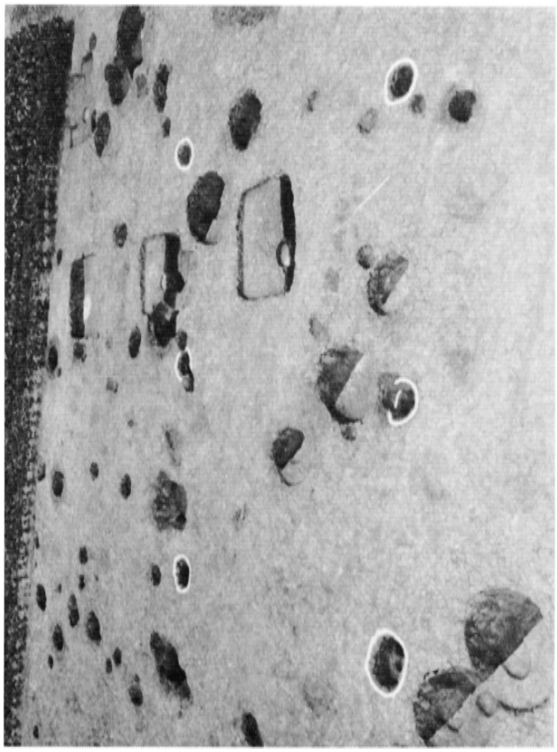
(2)　3号掘立柱建物（西から）



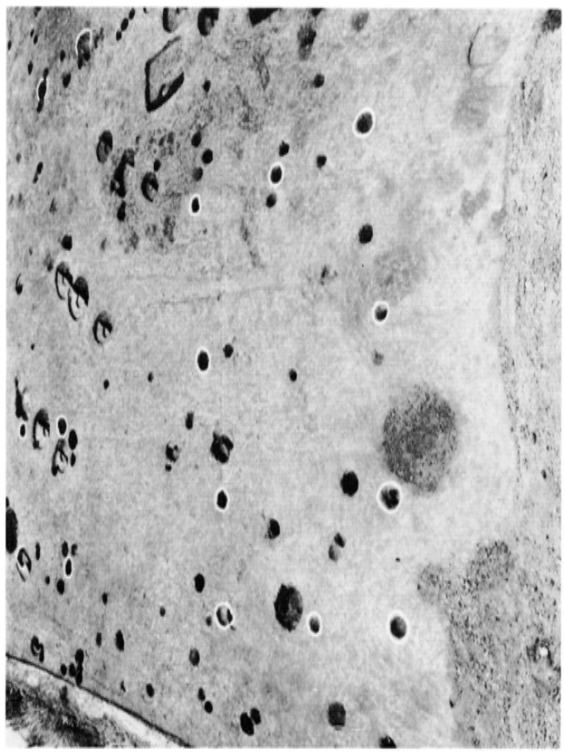
(1)　5号掘立柱建物（東から）



(2)　6号掘立柱建物（西から）

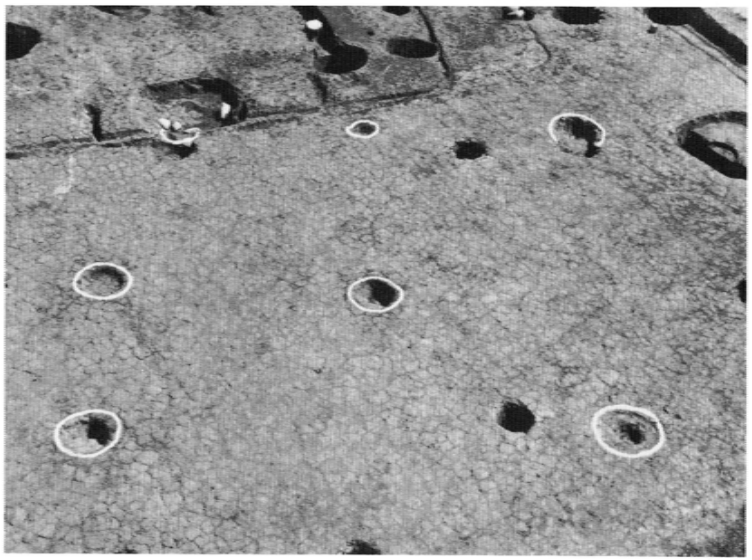


(3)　7号掘立柱建物（東から）

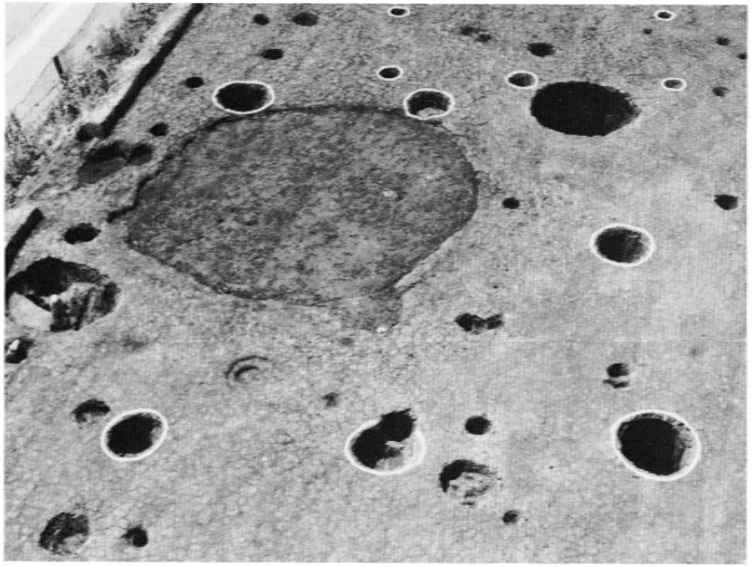


(4)　8号掘立柱建物（北から）

(1) 9号掘立柱建物（東から）

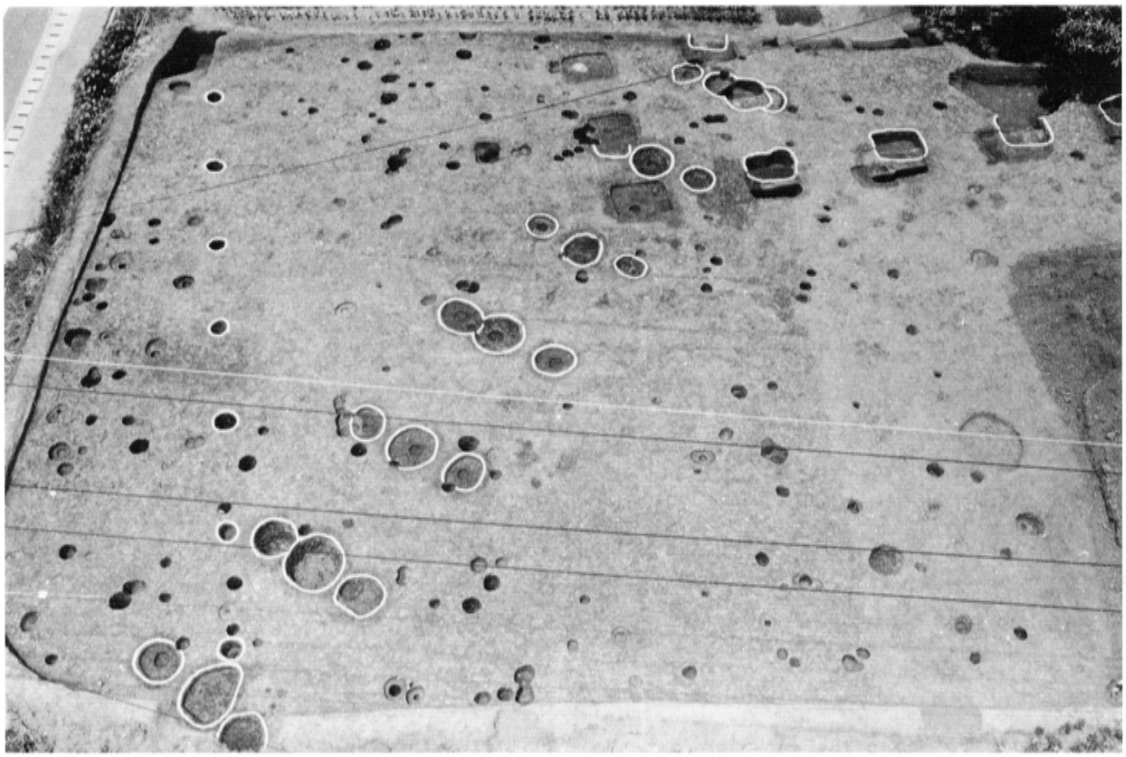


(2) 11号掘立柱建物（南から）

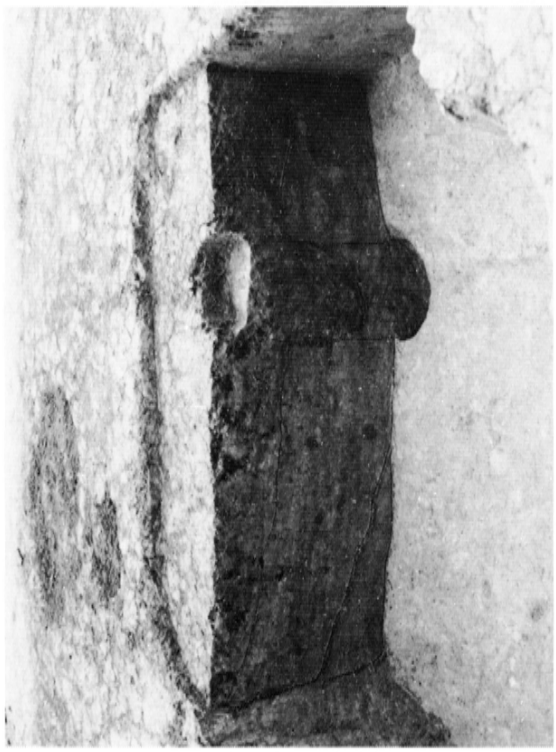


(3) 12号掘立柱建物（東から）

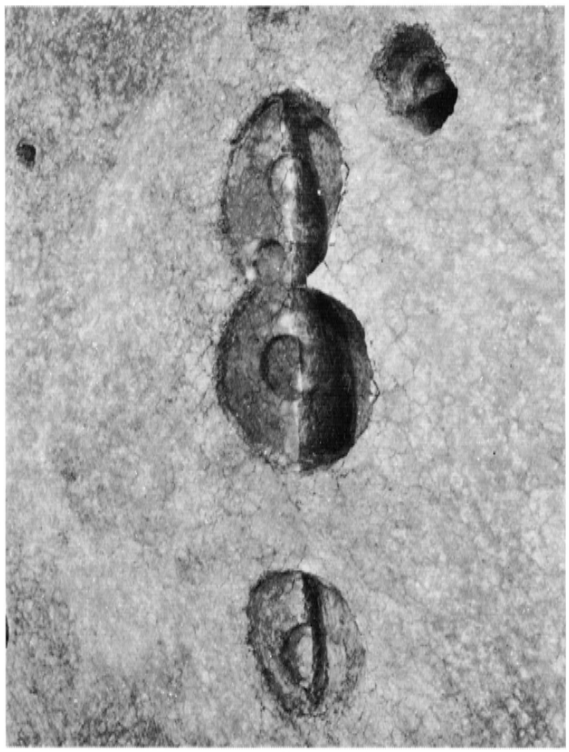
(4) 14号掘立柱建物（東から）



(1)　1号・2号柵列（東から）

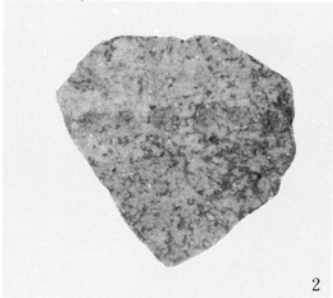


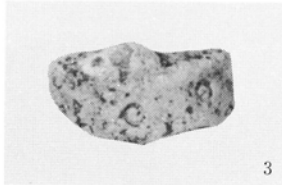
(2)　1号掘立柱建物柱穴断面の状態

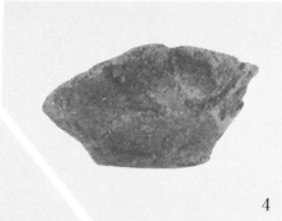


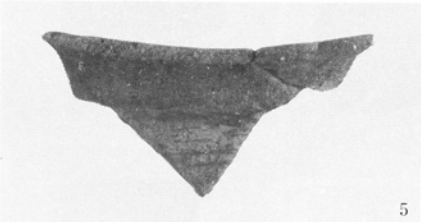
(3)　1号柵列柱穴の状態

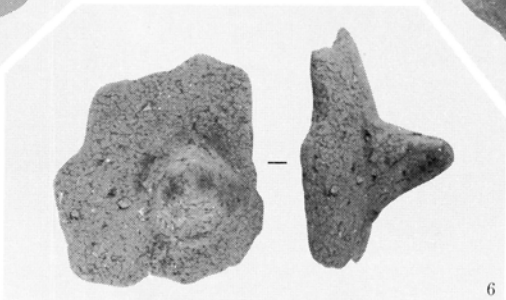
1


2


3

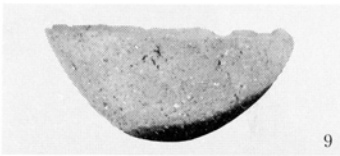

4

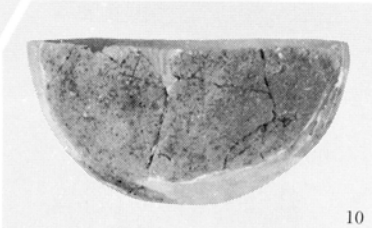

5

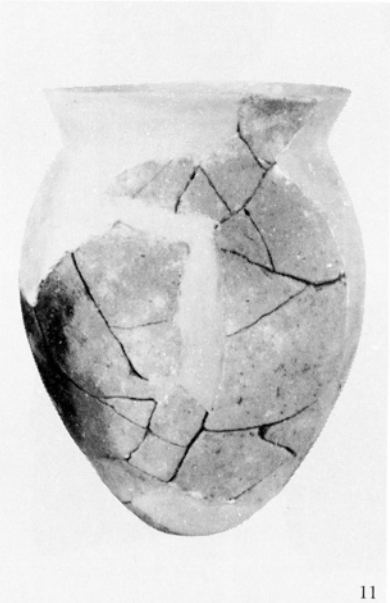

6

7

8

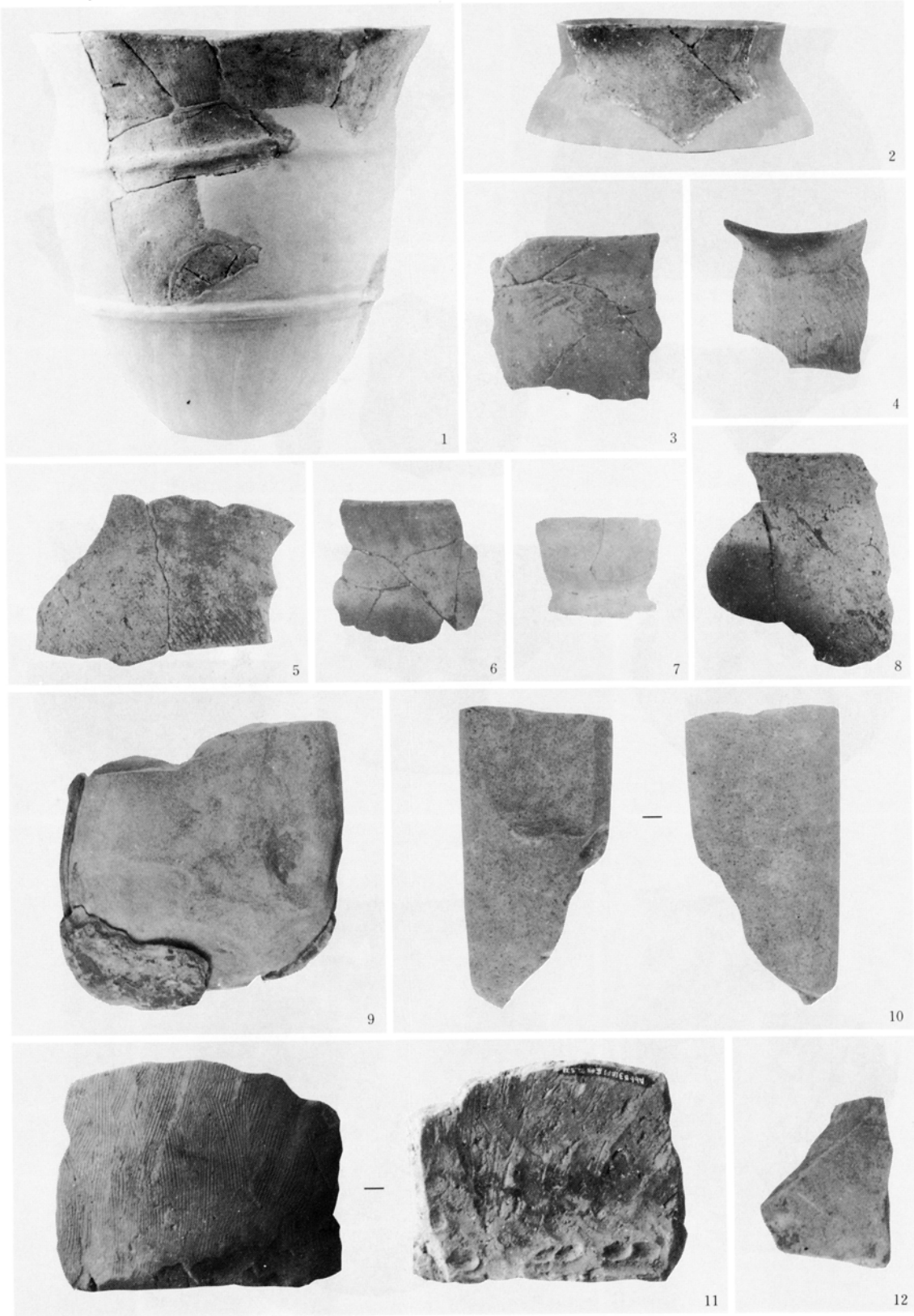

9


10

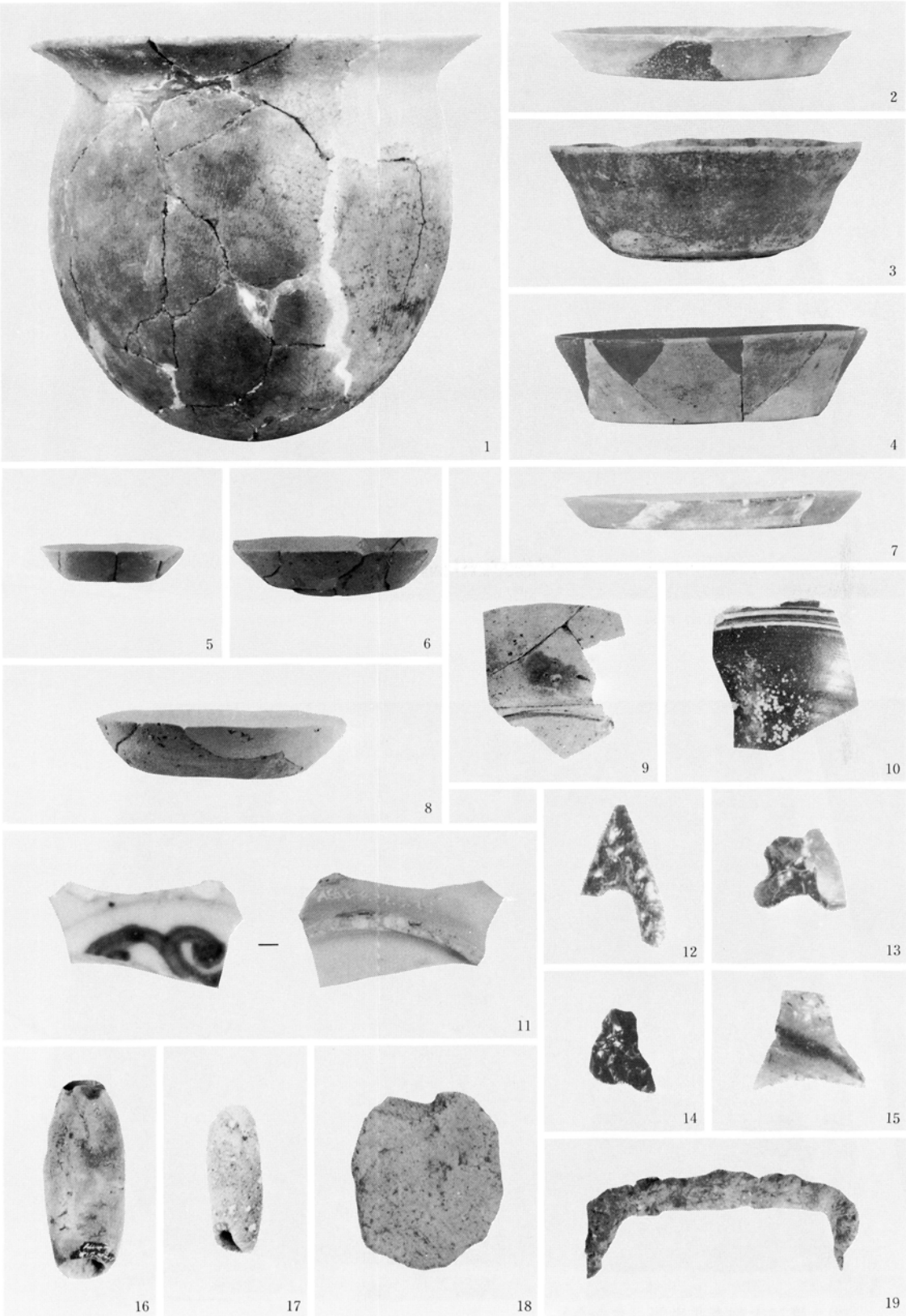

11

12

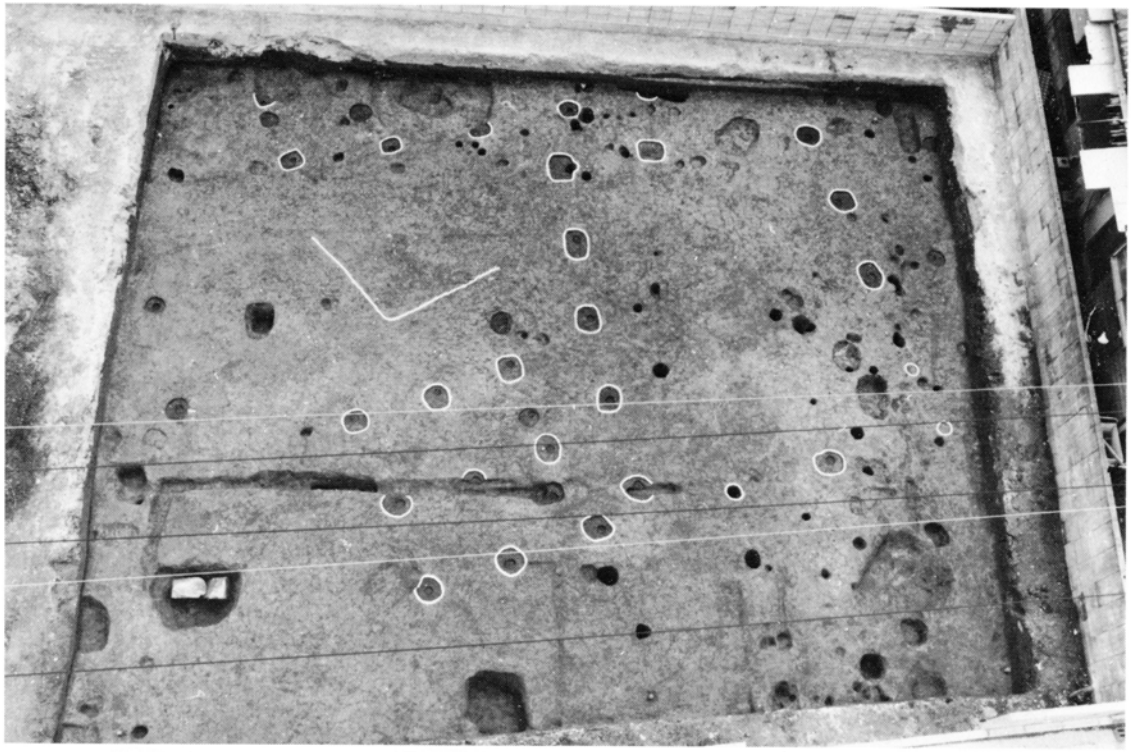
出土遺物（1～6は1号作居跡出土、8～10・12は2号溝出土、7・11は1号溝出土）



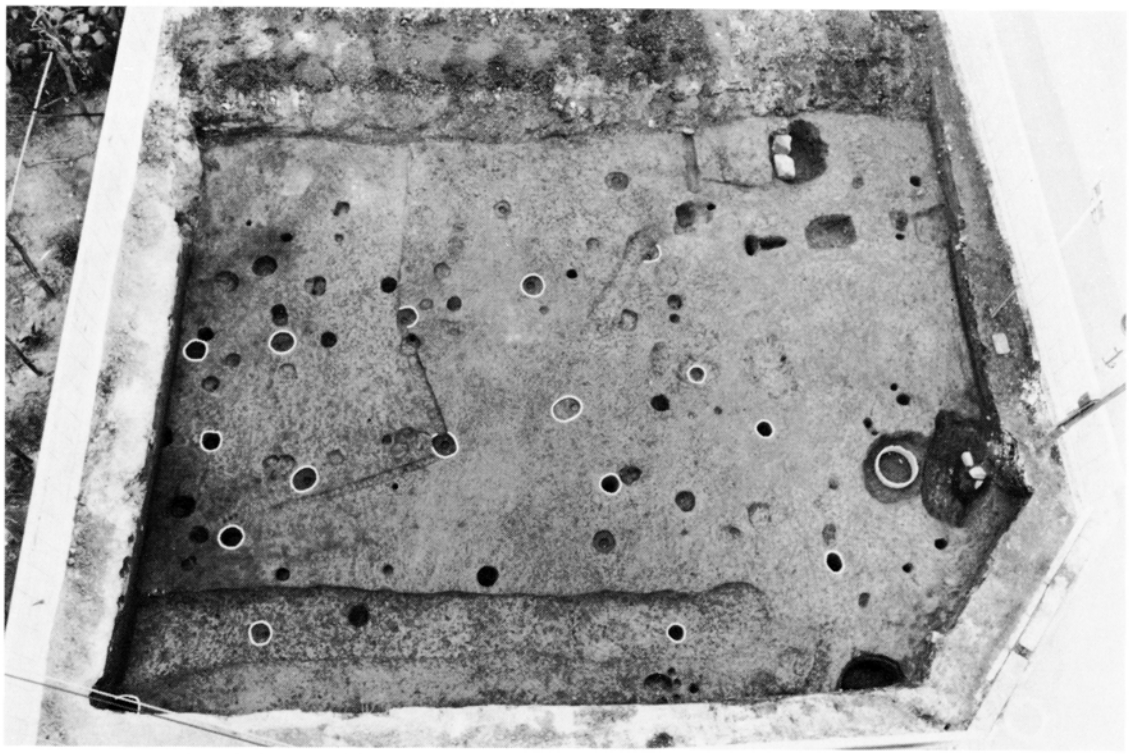
出土遺物　(1・3・4・6は2号溝出土、8は1号溝出土、5・9・10・12・は1号住居跡出土、2は3号溝出土、11は井戸出土)



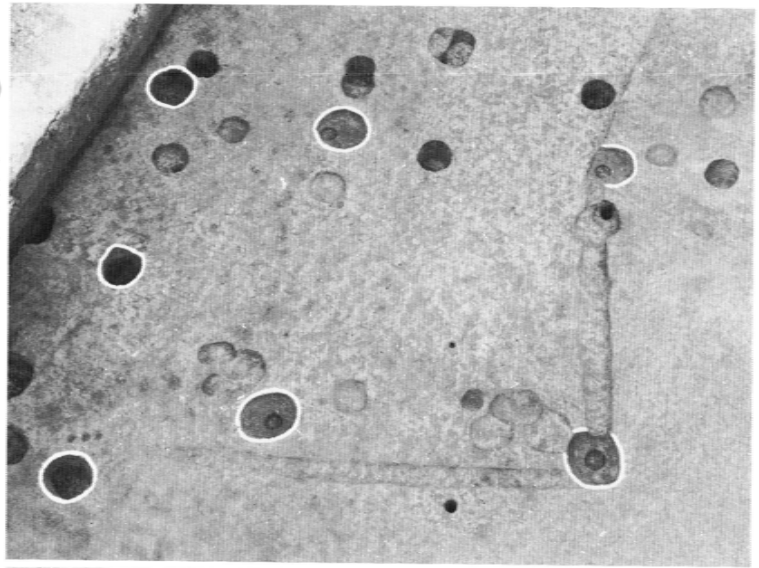
出土遺物　(1・3は1号土坑出土、2・4～10・15～17は井戸出土、11は2号土坑出土、12は2号溝出土、他はPit出土)



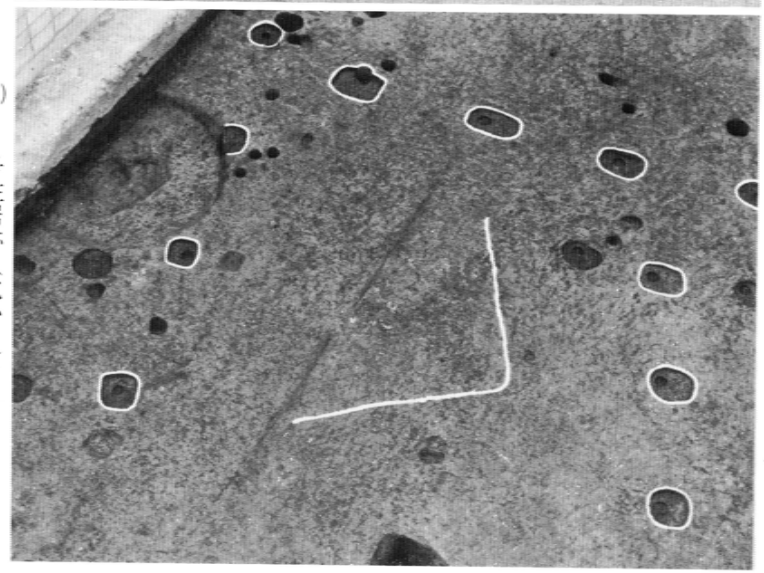
(1)　第76次調査南半部（西から）



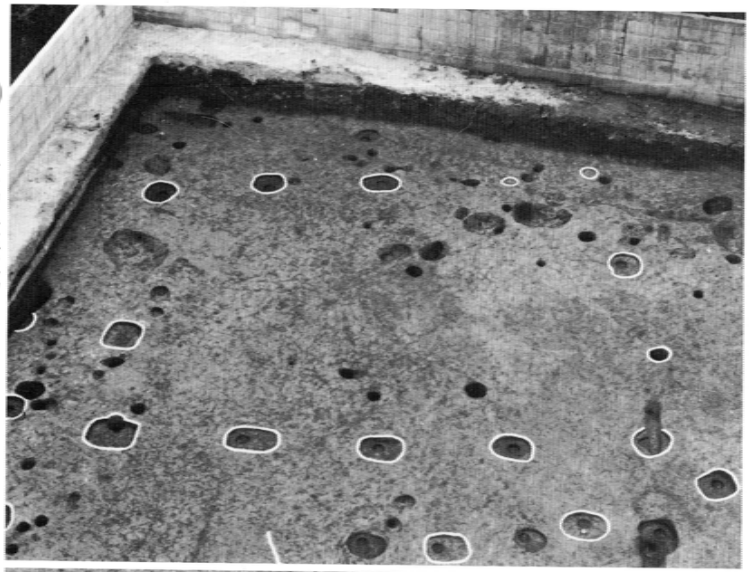
(2)　第76次調査北半部（北から）



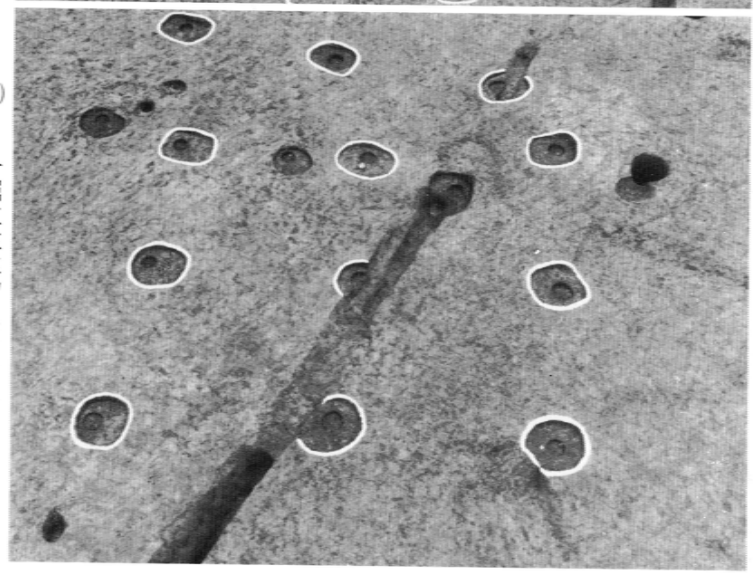
(1) 1号住居跡（北から）



(2) 2号住居跡（北から）



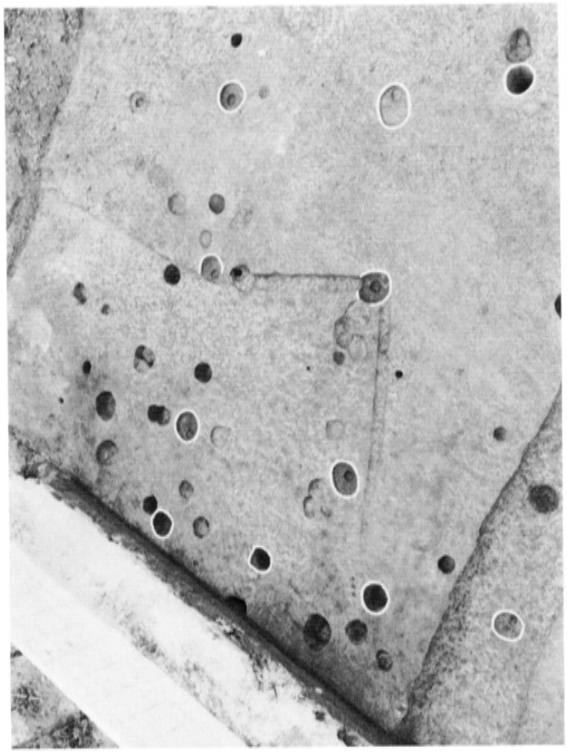
(3) 1号掘立柱建物（北から）



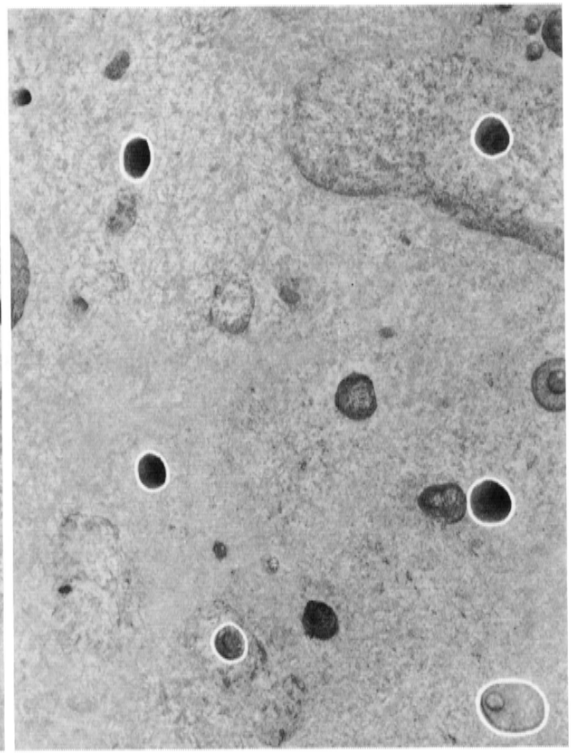
(4) 3号掘立柱建物（北から）

(1)　1号溝（西から）

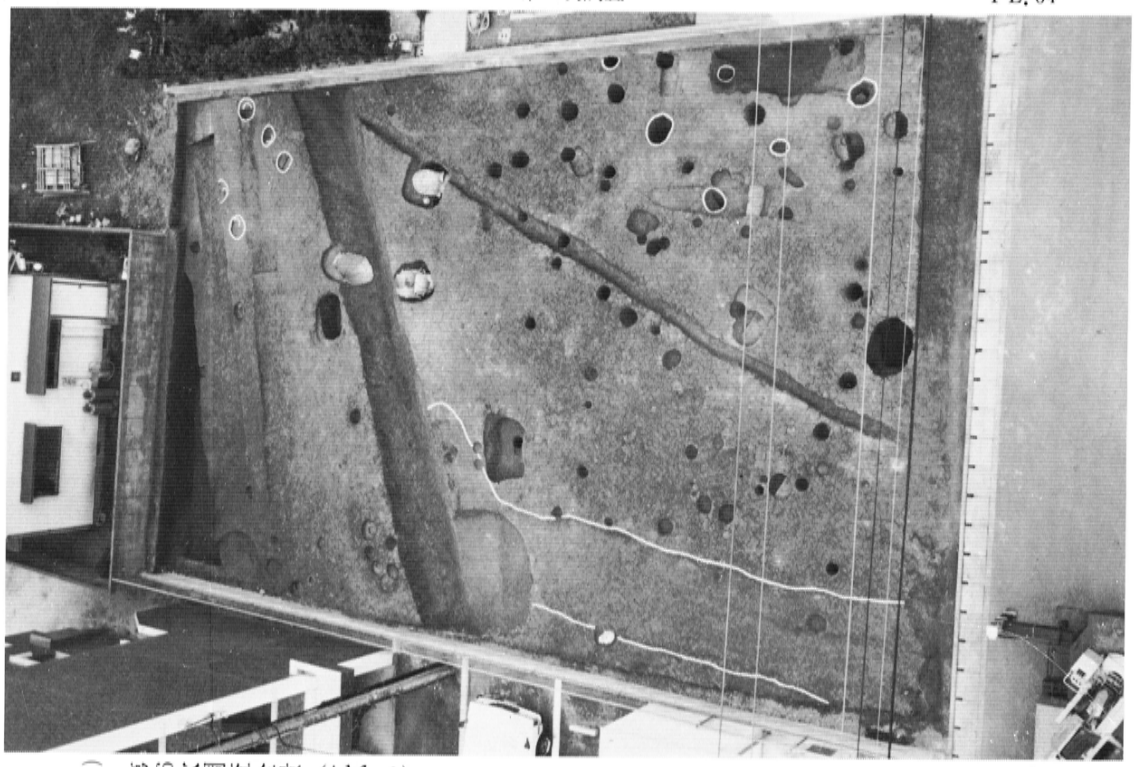
(2)　2号掘立柱建物（北から）



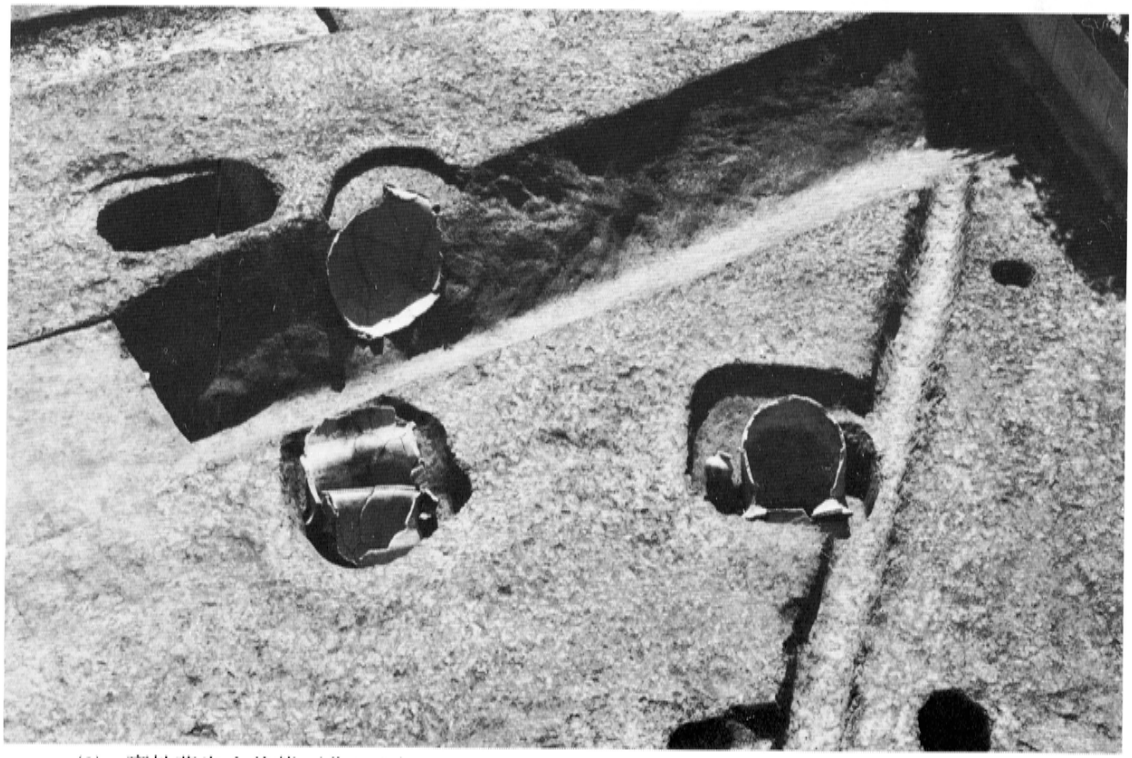
(3)　5号掘立柱建物（北から）



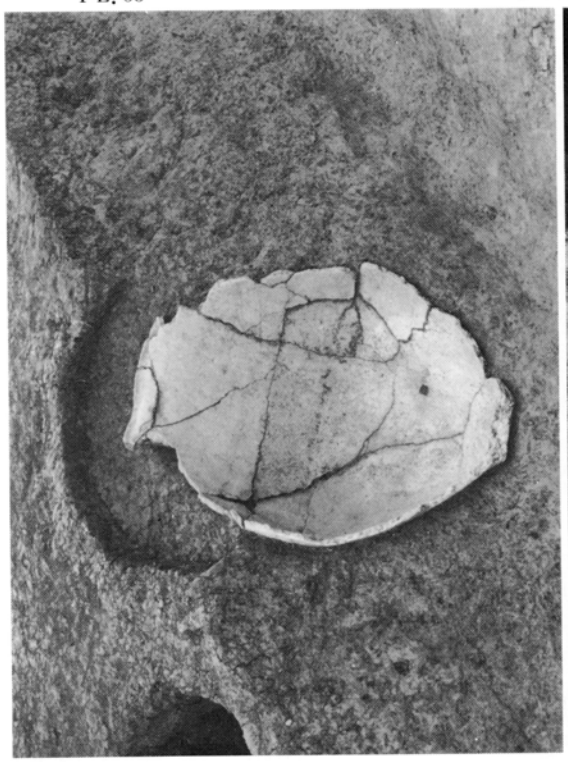
(4)　6号掘立柱建物（東から）



(1)　第86次調査全景（北から）



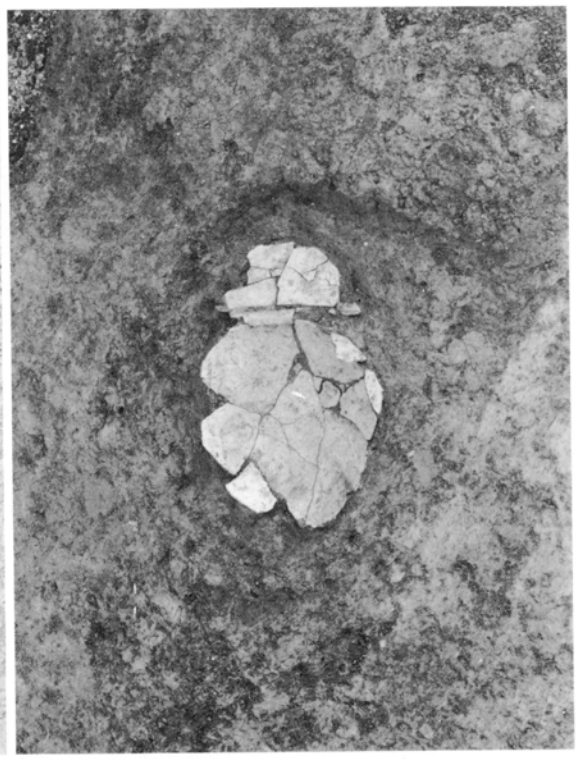
(2)　甕棺墓出土状態（北から）



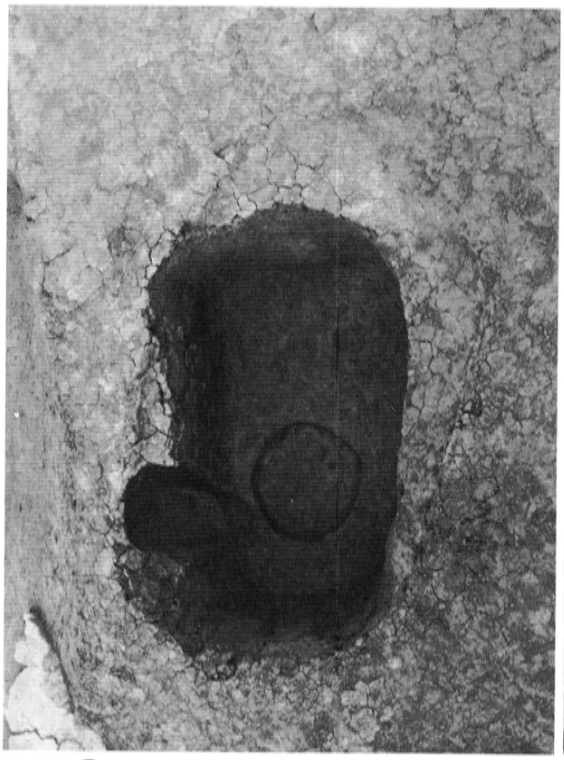
(1)　1号甕棺墓（北から）

(2)　2号甕棺墓（西から）

(3)　3号甕棺墓（西から）

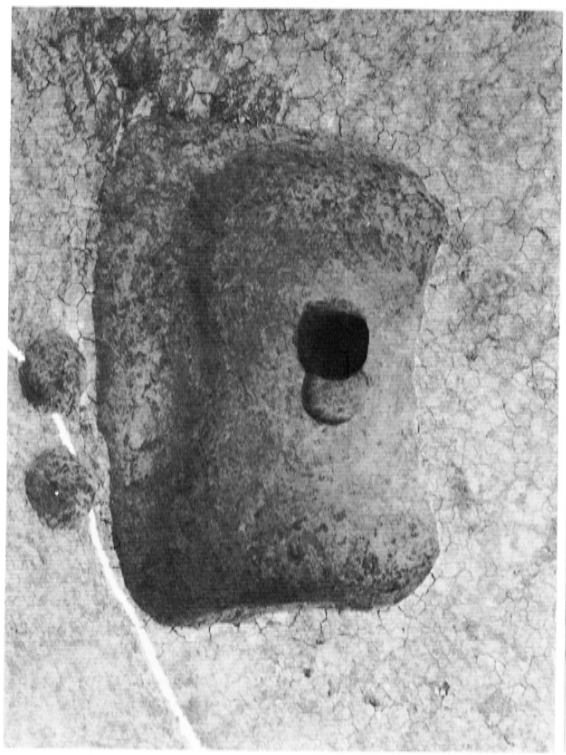


(4)　4号甕棺墓（南から）

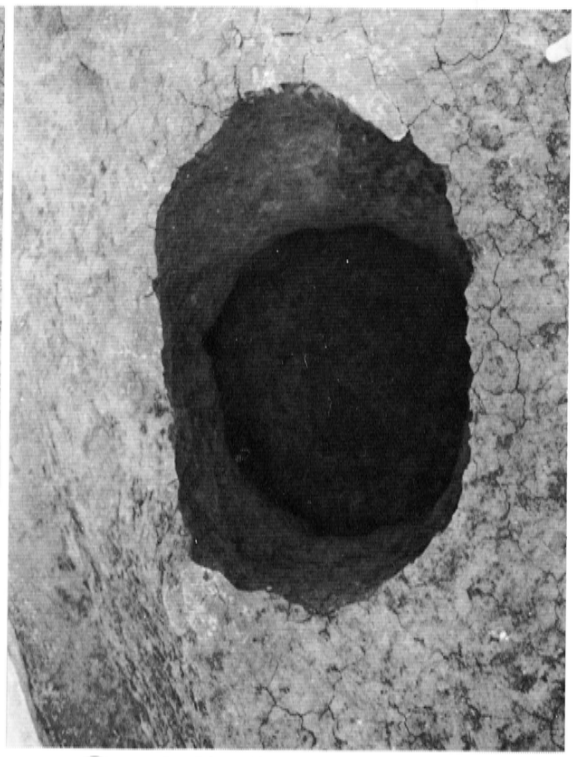


(1) 3号土坑（南から）

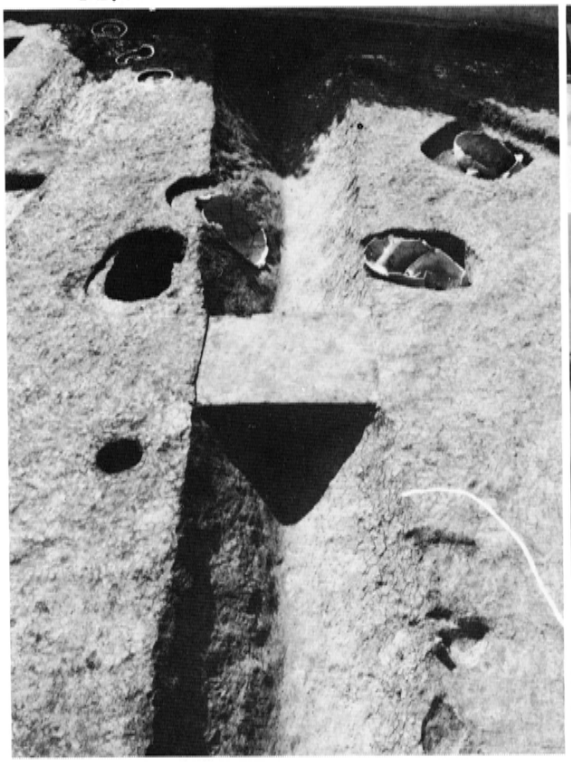
(2) 4号土坑（北から）



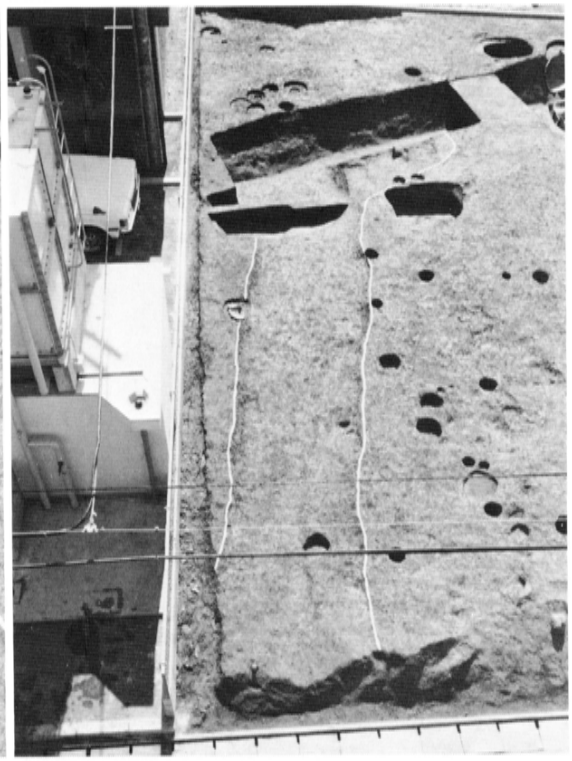
(3) 5号土坑（北から）



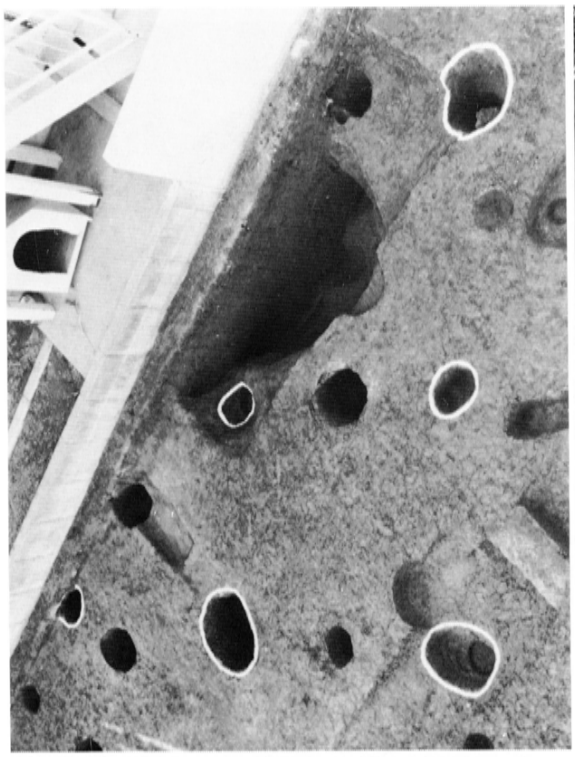
(4) 6号土坑（南から）



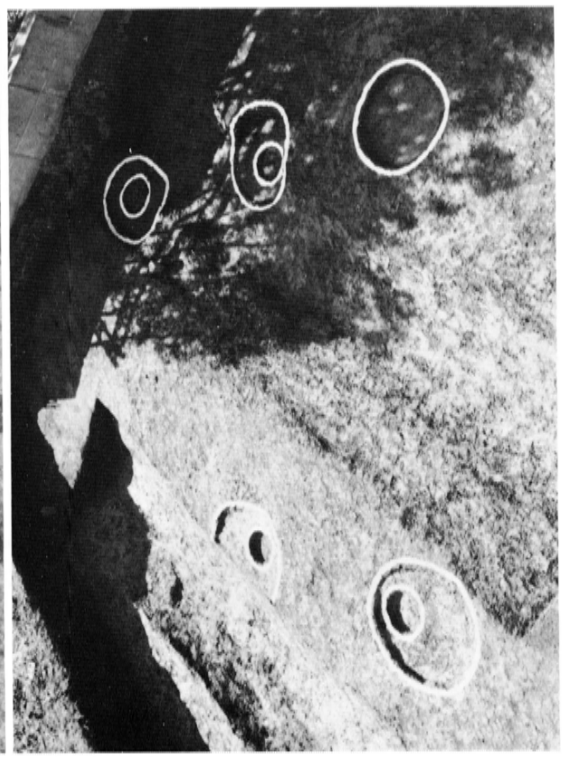
(1)　1号溝（東から）



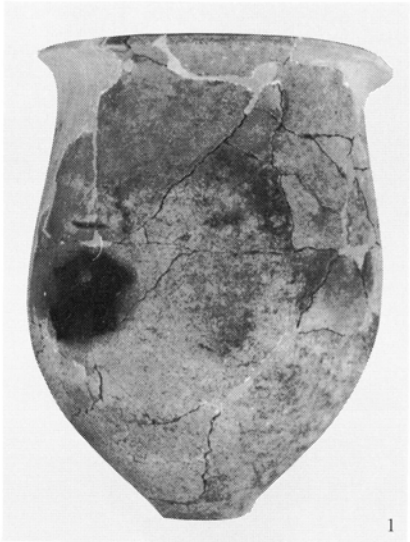
(2)　5号溝（北から）

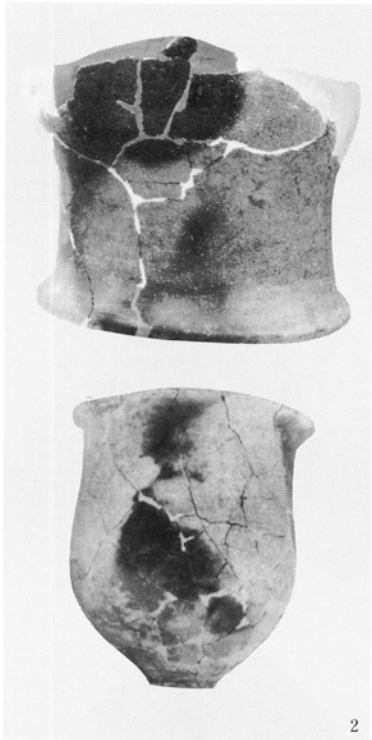


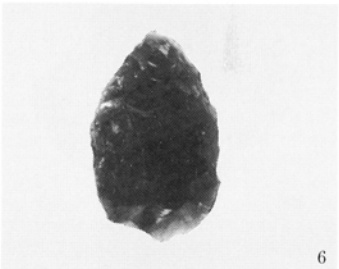
(3)　3号掘立柱建物（北から）

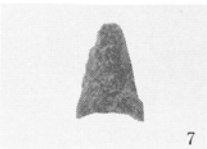


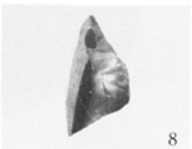
(4)　柵列（東から）

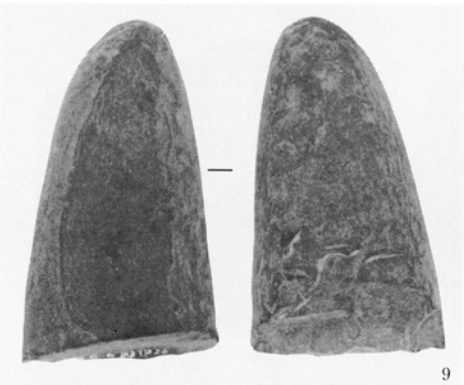


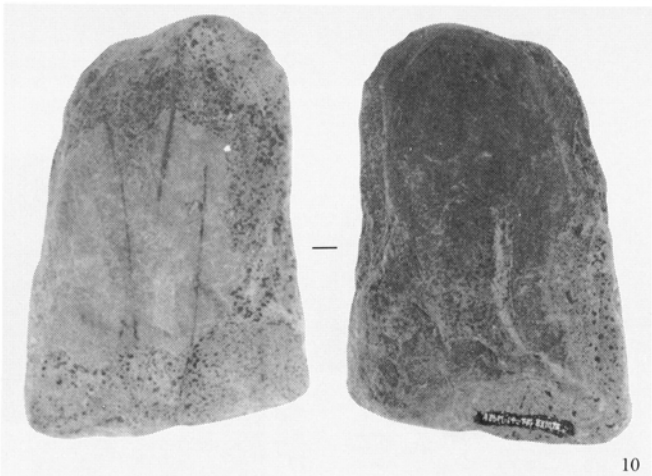




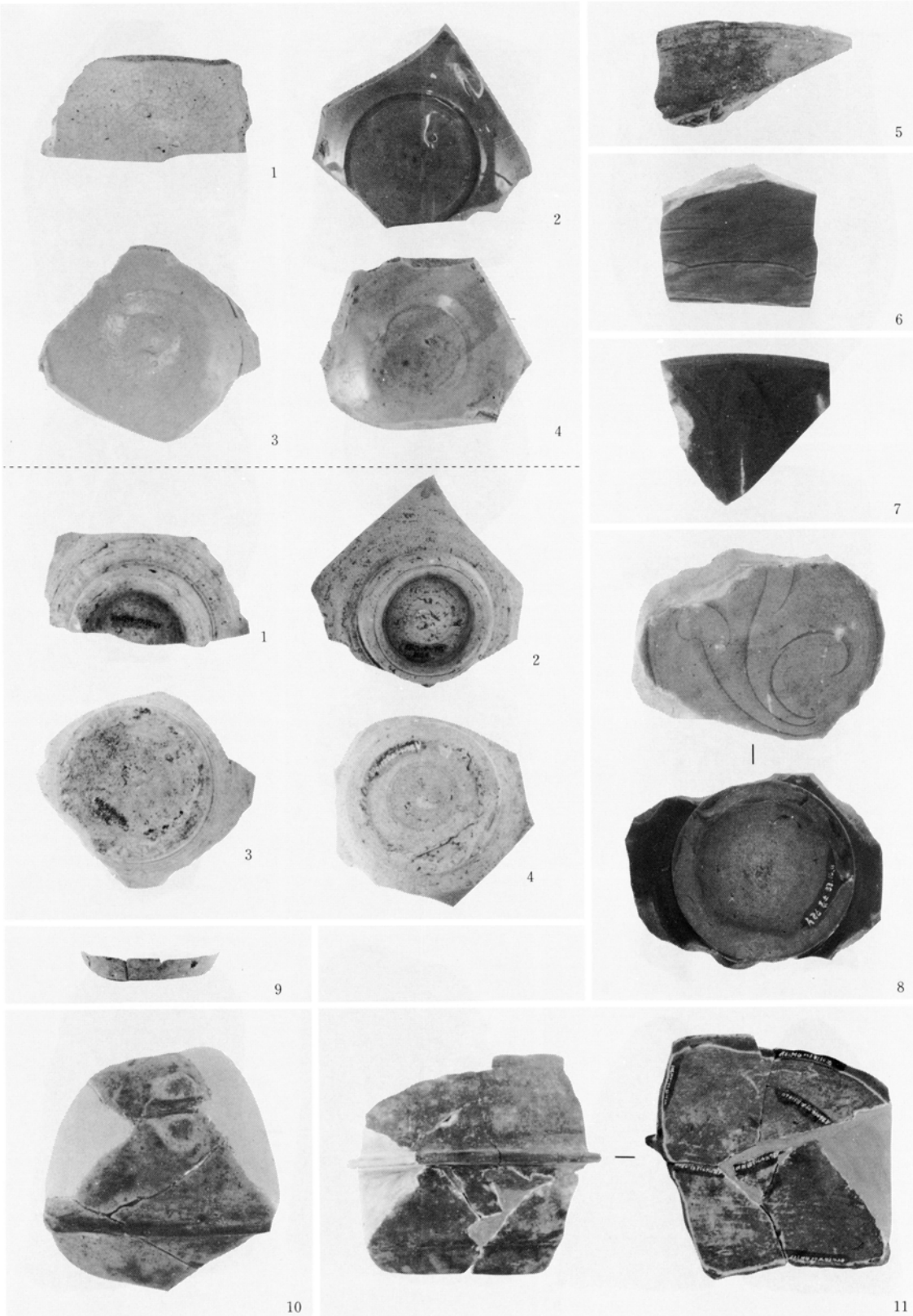




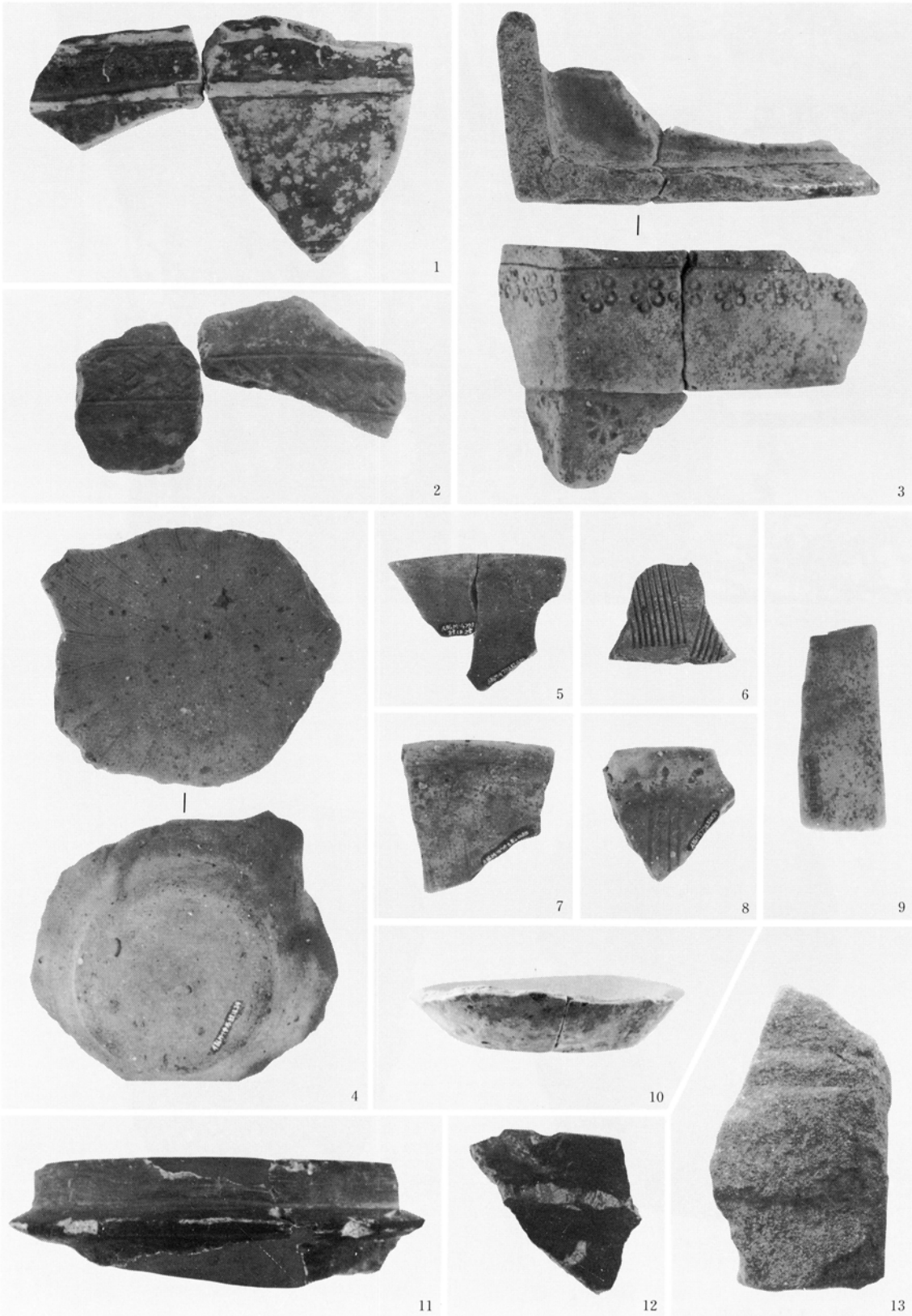




出土遺物（1～4は甕棺、5は3号甕棺副葬、7は1号甕棺副葬、6･9は6号土坑出土）



出土遺物　(1～8は1号溝出土、10･11は4号溝出土、9は5号溝出土)



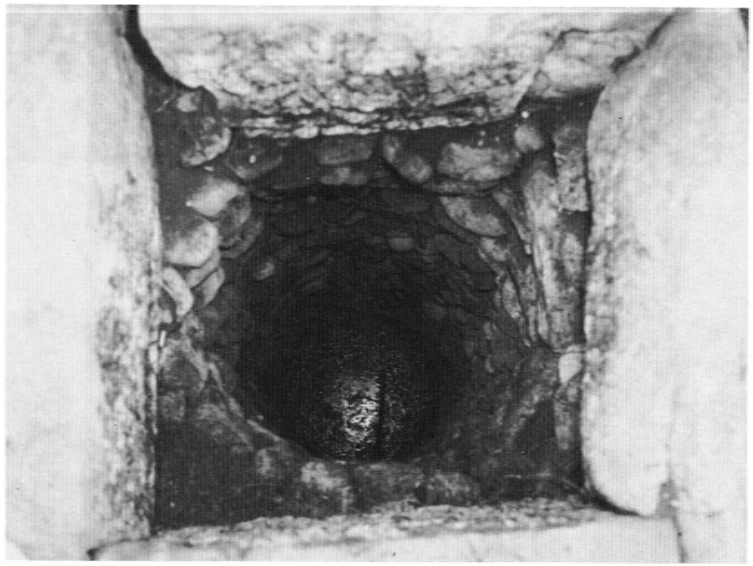
出土遺物 (1～3・5・7・913は4号溝出土、4、11・12は1号溝出土、6は4号土坑出土、8は5号溝出土)

(1)　1号土墓

(2)　2号土墓

(3)　2号土墓出土石塔

(1)　1号井戸（松尾俊一郎氏屋敷内）



(2)　2号井戸（西応寺境内）

(3)　石塔類散布地　第1地点

(4)　石塔類散布地　第2地点

付図1　有田・小田部地区調査地点配置図No.Ⅳ(1/1000)

付図２　有田遺跡第３・51次調査遺構配置図(1/200)

有田・小田部 第6集
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第113集

1985年 (昭和60年) 3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1－8－1

印 刷 福岡印刷株式会社

有田・小田部 第6集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第113集

1985 福岡市教育委員会